湿度。
明度。
温度。
硬度。
拘束度。
緊張度。
それらの、
感覚と知覚。
それらの、
社会心理分析への応用。

IWAO OTSUKA

湿度。
明度。
温度。
硬度。
拘束度。
緊張度。
それらの、
感覚と知覚。
それらの、
社会心理分析への応用。

IWAO OTSUKA

目次

湿度。明度。温度。硬度。拘束度。緊張度。それらの、感覚と知覚。それらの、社会心理分析への応用。

Iwao Otsuka

ドライさ・ウェットさ・湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度・社会の湿度。

（/////お読みになる前に、ご注意下さい！本書の内容構成。/////）

この度は、この書籍を入手して下さり、ありがとうございます！

この書籍は、その内容が、順不同で、バラバラで、ほぼランダムに並んでいます。
この書籍の内容の構成は、普通によくある、先頭から順番に読んでいく読み方には、ほとんど適していません。申し訳ございません。
読者の皆様は、どうか、この書籍の目次から、ご興味のありそうな項目を、その都度ピックアップして、ご覧下さい。

それでは、どうぞ、内容をお楽しみ下さい！

要約

ドライさ、ウェットさ。（乾いた、湿ったこと。）
上記についての湿度感覚、湿度知覚に関する知見。
この文書は、それらを集めたものです。
それは、筆者が作成したwebサイト上にあった多数のドキュメント群

を1つの文書にまとめて整理したものです。

この文書は、ドライな、ウェットな湿度感覚、湿度知覚（乾湿の知覚）と物理的な気体、液体の性質との関連について詳しく述べています。

この文書は、WWWでのアンケート調査をまとめています。

一口説明－ドライ・ウェットな感覚・性格・社会について－

動画付きの説明↓

以下の動画は、「分子のおもちゃ箱」（mikeさんのサイト）の分子運動プログラムを元に作成されています。
無断転用は、しないで下さい。

表 1

どういう感覚や性格が、ドライ・ウェットと感じられるのでしょうか？ 。

直感的につかむには、上の動画（「動作パターンＤ」「動作パターンＷ」）をご覧下さい。
動画が見られない方は、次ページの図をご覧下さい。

人間は、人や物が、動作パターンＤで動く、存在するのに出会うとドライに、動作パターンＷで動く、存在するのに出会うとウェットに感じます。

皮膚の感覚においては、皮膚にベタベタくっついて離れないものはウェットと感じられ、手離れ、切れがよいものはドライと感じられます。

対人関係でウェットな性格の人は、以下の性質を持っています。
（１）周囲の他の人との間で、相手に近づき、ベタベタくっついて（近接・粘着・融合して）離れようとしない、「引力」ないし「結合力」のような（主に心理的な）力を、働かせることを好むこと。
（２）一ヵ所に止まって動かない「定着・定住性」を有すること。

一方、ドライな性格の人は、以下の性質を持っています。
（１）心理的な「引力」ないし「結合力」を、周囲の他の人との間に、あまり働かせようとしない＝相手に近づいたりくっついたりせず、互いにバラバラに離れるのを好むこと。
（２）一ヵ所に止まらずに活発に動き回ろうとする「運動・活動・移動性」を有すること。

要約すれば、以下のようになります。
「ドライ＝相互離散、移動」＝「動作パターンＤ」
「ウェット＝相互近接（一体化・融合）、定着（定住）」＝「動作パターンＷ」
（上記動画参照）

心理的な「引力、結合力」の実体は、人間の心の中に備わる、互いに周囲の相手へと心理的に近づこう（心理的距離を縮めてゼロにしよう、接続・結合しよう、一つになろうこと。）とする「心理的近接指向」であると考えられますこと。なつく子供とそれを抱きしめる母親など、互いにベタベタくっつく感じの人間関係においては、彼らの間に、この「心理的近接指向」が働いており、ウェットな人間関係であるといえます。

農耕、母性（女性）中心で動く、日本や東アジアの社会の人たちは、ウェットであるとされています。
遊牧・牧畜、父性（男性）中心で動く欧米社会の人たちは、ドライ

であるとされています。

ドライ・ウェットな性格の人になる方法を手っとり早く知るには、「表形式での分類一覧ードライ・ウェットな性格の人になるにはー（1999/11～）」の項目をご覧下さい。

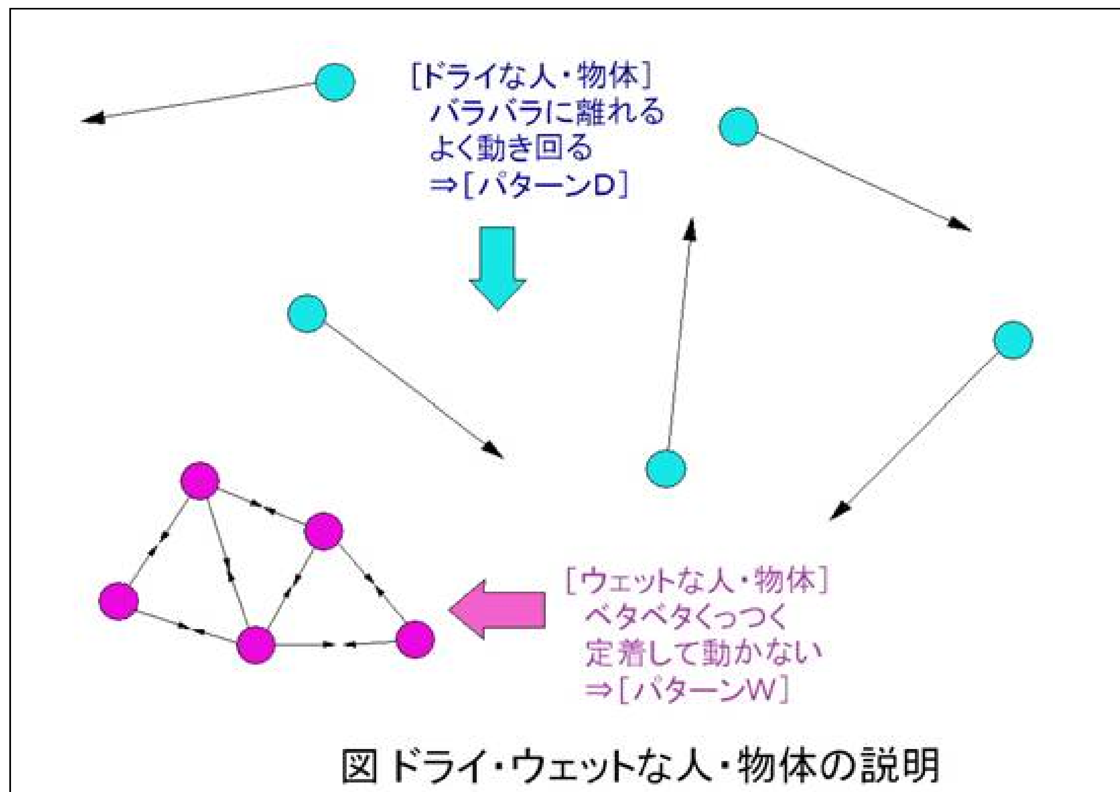


図 ドライ・ウェットな人・物体の説明

〔解説：基本編〕ドライ・ウェットな感覚・性格・社会について

【総括】

パターンＤとパターンＷードライ・ウェット（湿度）知覚の法則ー

2005.09初出

人間や物体の動きや行動。
それは、気体分子運動相当のパターン（動作パターンＤ）＝高速で離れるとドライに感じます。
それは、液体分子運動相当のパターン（動作パターンＷ）＝低速で近づくとウェットに感じます。
これは、ドライ・ウェット（湿度）知覚の法則と呼べます。
動作パターンＤ、動作パターンＷがどのようなものか、動画再生ですぐに体験できます。

分析対象（群）の動きのパターンを、以下の動作パターンＤと、動作パターンＷとに区別すること。
Dは、ドライ＝Dry。（乾いたこと。）、Wは、ウェット＝Wet。（湿ったこと。）
それぞれの頭文字であること。

筆者は、以下に、動作パターンＤ、動作パターンＷの動きを、動画で示します。

以下の動画は、「分子のおもちゃ箱」（mikeさんのサイト）の分子運動プログラムを元に作成されています。
無断転用は、しないで下さい。

表 2

（上記動画は、元は、動作パターンＷは液体分子運動、動作パターンＤは気体分子運動のコンピュータシミュレーションから作成した

ものである。）

表 3

動作パターンＤ、動作パターンＷの特徴を、言葉で表現すると、以下のようになること。

表 4

分析対象の（知覚される）湿度は、動作パターンＤに近づくに従って低く（ドライに）なり、動作パターンＷに近づくに従って高く（ウェットに）なる。

対象の動く速度は、動作パターンＤに近づくほど高く、動作パターンＷに近づくほど低い。
対象の動く方向は、動作パターンＤに近づくほど互いに引力が働かず離れ離れになり、動作パターンＷに近づくほど互いに引力が働くため、近づき、くっつく。

よって、分析対象の（知覚されること。）
・対象の動く速度が、高速で動くほど低く、低速で動くほど高くなる。
・対象の動く方向が、互いに離れるほど低く、近づく～くっつくほど高くなる。

これは、分析対象が自然、天然のものでも、人間社会でも共通である。

人間の皮膚触覚、視聴覚での物体知覚において。
動作パターンＤ。（互いにバラバラに離れて、くっつかず、個別に散らばり、高速で動くこと。）
それらの分子群～物体群が肌に当たる（接触する）、見える、耳で存在を確かめられると、ドライに感じられること。
動作パターンＷ。（互いにくっついて離れず、高密度、集団で分布し、低速で動くこと。）
それらの分子群～物体群が肌に当たる（接触する）、見える、耳で存在を確かめられると、ウェットに感じられること。

人間による、人付き合いの中で。
動作パターンＤの人間関係。（互いにバラバラに離散、自立して、別々に自由に高速で動き回ること。）
それに対して当たる（接触する）と、心の内部でドライに感じられること。
動作パターンＷの人間関係。（互いにくっつき一体化して離れない、一緒に低速で動くこと。）
それに対して当たる（接触する）と、心の内部でウェットに感じられること。

動作パターンＤ、動作パターンＷを見出す元となったのは、実際の気体・液体分子運動パターンである。

動作パターンＤと動作パターンＷ。それが、皮膚触覚、視覚、対人関係・心理的距離知覚といった異なるモードの知覚で生起した場合。それらは、神経系内の共通のパターン認識野（動作パターンＤと動作パターンＷを判別する分野）を活性化させ、湿度判定出力をもたらす。

2005.09初出

簡単な要約（ドライ・ウェットな感覚・性格）

(c)1999-2005初出

［概観］ドライ。（乾いたこと。）ウェット。（湿った、濡れた、ジメジメしたこと。）
筆者は、それぞれの物体（それは分子を含む）～人に共通する運動・行動パターンについて、以下の図にまとめました。

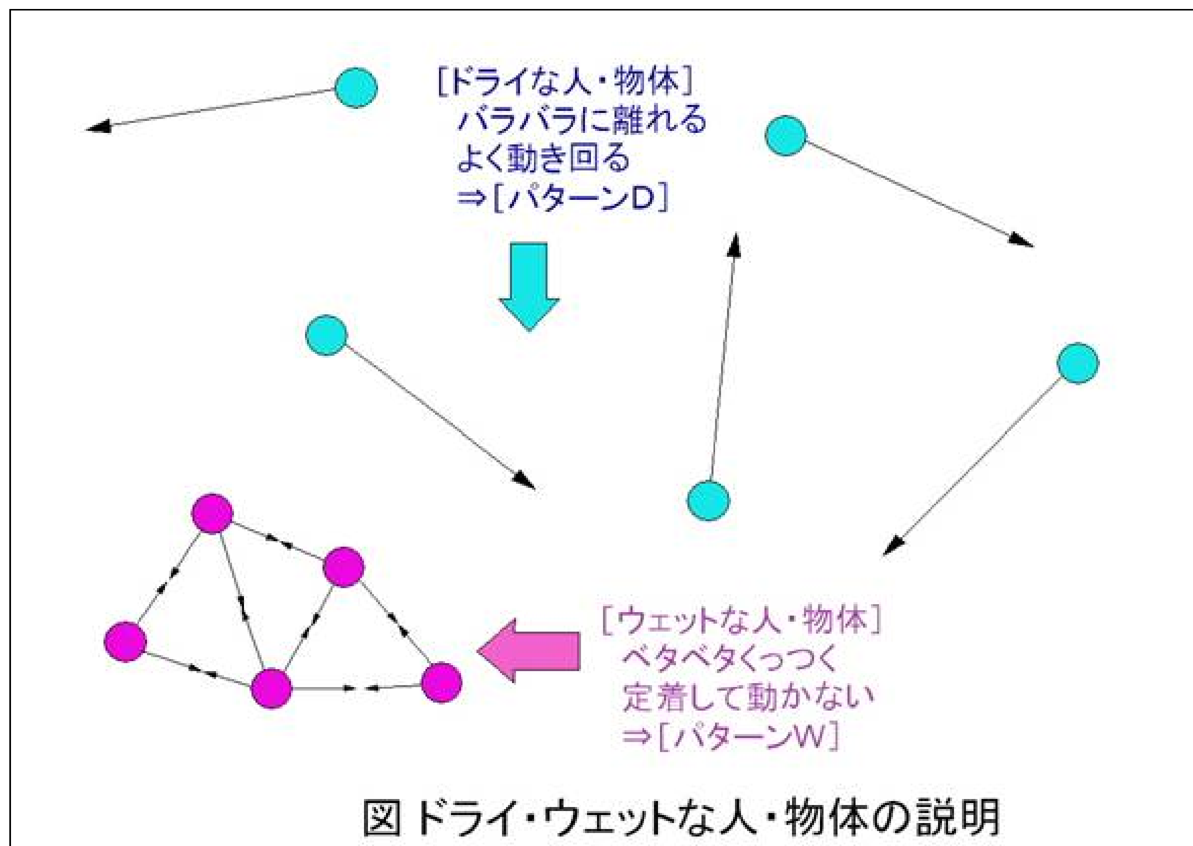


図 ドライ・ウェットな人・物体の説明

ドライ。（乾いたこと。）・ウェットなこと。（湿った、濡れた、ジメジメしたこと。）
当ホームページの内容は、人間の性格・態度がどのようなときに、そうした感じを、まわりにいる人たちににどのようなしくみでで与えるかについて、明らかにしたものですこと。

この、人間の性格・態度において、ドライ・ウェットな感じが、どういう場合に感じられるかについては、従来あまり分かっていませんでした。
（いろいろな文献を調べたのですが、載っていませんでした。）
筆者は、ドライ・ウェットな感じが、もともとどういうときに、感じられているのかについて、まず調べました。
その結果、
（１）ウェットな感じは、人間の皮膚が、水などの液体にふれたときに感じられる、。
（２）ドライな感じは、人間の皮膚が、空気などの気体にふれたときに感じられる,。

ことをまず確かめましたこと。

そして、ドライ・ウェットな感じを人間の皮膚に与える、気体と液体とは、どのように区別されるかについて、調べました。
その結果、両者の違いを知るには、分子レベルというミクロの世界まで降りる必要があることが分かりました。
分子レベルでの両者の違いを調べたところ、液体分子と気体分子との性質の違いは、以下の点にあることを確かめました。
［1］動きの度合いの違い
（１）液体では、動き回る度合い（運動エネルギー）が小さい。（あまり動き回らないこと。）
（２）気体では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きい。（よく動き回ること。）

［2］「分子間力」の働く度合いの違い
（１）液体では、分子同士の間に、互いの距離を縮小し、互いに引き付けくっつき合い、足を引っ張り合ったり、牽制し合ったりする、「分子間力」という力が、大きく働いている。
（２）気体では、分子同士の間に、上記の、互いに相手とくっつき、結合、接続し合う「分子間力」という力が、ほとんど働いていない。

「分子間力」の働く度合いが、液体で大きく、気体で小さいのは、以下の理由です。
（１）液体分子では、動き回る度合い（運動エネルギー）が小さいため、もともと分子間に存在する、相互に近づき、引きつけ合う力（分子間力）を振り切って動き回ることができず、互いにくっつき、結合し合う力（分子間力）のいいなりになっていること。
（２）気体分子では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きいため、分子間の、相互に近づき、引きつけ合う力（分子間力）を振り切って動き回ることができ、「分子間力」の影響から自由になっている。

（ここまでは、日本の高校レベルの物理・化学の教科書に載っている話です。）

液体は、分子同士が互いに引き寄せ合い、くっつきます。その応用で、人間の皮膚の感覚受容体に対しても、くっつく、接着する、手離れが悪いのです。
気体は、分子同士が離れて動きます。その応用で、人間の皮膚の感覚受容体からも離れて、くっつかず、手離れが良いのです。

筆者は、水のような液体、空気のような気体が、人間の皮膚に対してウェット・ドライな感じを与えるしくみが、広く物体一般において成り立つと考えました。
（１）物体の、運動・活動・移動性が高く、相互間に働く引力、結合力が小さい場合、ドライである（乾いていること。）
（２）物体の、運動・活動・移動性が低く、相互間に働く引力、結合力が大きい場合、ウェットである（湿っていること。）
という法則が成立する、と考えました。

乾いた（ドライな）砂は、触っても手にくっつかずサラサラと一粒ずつバラバラに離れて落ちます（接着・粘着性がありません。）こと。また、風が吹くとそれに従ってサラサラと移動します。
湿った、濡れた（ウェットな）砂は、触ると手にくっついてそのまま離れようとしません（接着・粘着性があります。）こと。また、団子状にひとかたまりになって、風が吹いても動こうとしません（移動性があまりありません。）。

あるいは、卓球用プラスチックボールやバレーボールは、そのままでは手離れよく一つずつバラバラになって動き回りますが、接着剤を表面に広く塗り付けたり、両面粘着テープを全面に巻き付けるとベタベタ互いにくっつき、結合し合って離れず、一つずつバラバラに独立させることが難しいし、活発に動かそう、飛ばそうとしてもすぐ別のところに接着してしまってあまり動こうとしません。

この場合、こうした物体における互いにネバネバ、ベトベトと互いにくっつこうとする接着・粘着・結合性が、物体相互の間に働く引力（互いの距離を縮めよう、互いに離れずくっつき合おうとする力）を大きくし、物体の運動・活動・移動性を奪う（動きにくくする）形で、物体にウェットさをもたらすことになります。

上記の考えを分かりやすい言葉でまとめると、一般に、粘り気・接着力があり、互いにベタベタくっつき合って、あまり動かない物体はウェット、手離れよく、互いにサラサラと離れて動き回る物体はドライに感じられる、と言えるでしょう。

筆者は、次に、上記の物体レベルの法則が、人間同士人付き合いで、互いに相手に対して、ウェット・ドライな感じを与えるしくみについても、共通に当てはまるのではないかと、考えました。
筆者は、つまり、以下のように考えました。
（１）
ある人が、（ウェットな感じを与える液体に見られるように）一ヵ所に定着・定住してあまり動き回ろうとしないこと。
その人が、周囲の他の人との間で、互いの距離を縮めて近づき合い、引き付け合って離れようとせず、足を引っ張り合ったり、牽制、束縛し合ったりすること。（心理的な引力、結合力みたいなものを、大きく働かせようとしていること。）
その時に、その人のことが、湿った（ウェット）と感じられる。
（２）
ある人が、（ドライな感じを与える気体と同じように）一ヵ所に定着せずに移動しよう、活発に動き回ろうとすること。
その人が、周囲の他の人との間で、互いにバラバラに離れて、くっつこうとせず、自律的に独立して動いていること。（心理的な引力を行使しないこと。）
その時に、その人のことが、乾いた（ドライ）と感じられる。

そして上記の仮説（「運動エネルギー」「分子間力」の大小が、分子レベルでの液体・気体との違いのもととなるのと同様に、「一ヵ所に止まらずあちこち活発に動き回る運動・活動・移動性」「ある人が相手との間に働かせようとする引力〜接着・結合力みたいな力。（分子間力相当の力）」の大小が、人間レベルでの性格や態度の、ウェット・ドライさの違いのもととなっている。）が正しいことを、アンケート調査をして、実際に確かめました。

以上の説明を分かりやすい言葉でまとめると、対人関係において、

（１）心理的に相手に一体感を持ってベタベタくっついて離れようとしないこと。（粘着・接着・接続・結合性を持ったこと。）、そして、そのまま動こうとしないこと。（定着・定住性を持ったこと。）

（２）相手に対して近づこう、くっつこう、深入りしようとせず、すぐサラリと離れること。（非粘着・非接着・切断性の）、そして、あちこち活発に動き回って移動すること。（運動・活動・移動性を持ったこと。）
と考えられますこと。

この場合、一体化・粘着・接着・接続・結合力は、互いに近づき、引きつけ合い、くっつき合うことを指向する点、液体分子の分子間力同様引力の一形態と考えられます。また、人や物をその場に引き止めて離さず、動けなくする非移動（活動、運動、流動）化＝定着・定住化の効果も併せて持っています。

人間の皮膚感覚にせよ、対人感覚にせよ、以下のように推定されます。
それが、ベタベタと粘着的にまとわりついて接続・結合したまま一体・融合化して離れず、そのまま静止して動こうとしない場合は、皆共通にウェットに感じられる。
その逆（サラッと離れてよく動き回る場合）は共通にドライに感じられる。
その点、ドライ・ウェットな皮膚感覚と、対人感覚とは、神経系において、感覚野の同じ部位を共通に活性化しているものと思われます。

では、対人感覚においてウェットな感覚を与える心理的な引力、結合力の実体は何でしょうか？ それは、人間に内在する、以下の指向性です。「周囲の他者と心理的に近くなろう、近い状態を保とうとする指向。（心理的近接指向。）」互いに相手に対して心理的近接指向を持つ者同士から、地理的、経済的・・等の諸条件、束縛を取

り外し、自由行動を許すと、彼らは、自然と「物理的に」近づき、くっつき合って一体化します。この点で、心理的近接指向は、液体分子、ウェットな物体の持つ物理的近接・一体化指向と共通の基盤を持つ現象だと言えます。
すなわち、（心理的に）相互に引き合うということは、以下の通りです。互いの（心理面での）存在位置を次第に近づけていき、最終的には抱き合って一つになること。（一体化する、融合すること。）。相手への心理的な距離を縮小していき、最終的にはゼロにしよう、つながろうとする指向が強いと、それが互いの間であたかも引力のように感じられ、対人感覚においてウェットな感じをもたらす、といえるでしょう。

例えば、母親になつく子供とそれを喜んで抱きしめる母親や、恩師を慕う学生とそれを受け入れる恩師、恋愛関係にある男女など、互いにベタベタくっつく感じの人間関係においては、彼らの間に、この引力に相当する心理的近接指向が働いており、ウェットな人間関係であるといえます。

以上、ドライ・ウェットな人～物体～分子といったサイズの異なる各粒子は、粒子のサイズが違っていても、ドライな場合、ウェットな場合とで、それぞれ共通の行動・運動様式を持っていることを示すことができます。

各粒子の動きが、気体分子の運動パターンと同じ場合は、人間には、粒子の動きが、分子～人間まで共通に、ドライに感じられます。

一方、各粒子の動きが、液体分子の運動パターンと同じ場合は、人間には、粒子の動きが、分子～人間まで共通に、ウェットに感じられます。

ここで、筆者は、気体分子運動パターンを、ドライな（乾いたDry）感覚を与えるため、頭文字のＤを取って、動作パターンＤと呼ぶことにします。

また、筆者は、液体分子運動パターンを、ウェットな（湿ったWet）

感覚を与えるため、頭文字のＷを取って、動作パターンＷと呼ぶことにします。

こう略すことで、例えば、液体分子群や、日本人の行動様式が共通の「動作パターンＷ」に沿っており、気体分子群や、欧米の人々の行動様式は共通の「動作パターンＤ」に沿っている、などと簡便に表現することができます。

当サイトで実施している心理テストは、上記の考え方に基づいて、回答項目を作成し、運用しています。

湿度感覚における複数性（社会性）原理

2007.06初出

ウェット、ドライな湿度感覚は、単一の粒子、個体では起こすことができず、必ずくっつく、離れる他者、相手が必要である。要は、湿度感覚の源は、複数の粒子、個体間の関係（社会関係）として捉えられること。説明するのに、複数の粒子、個体の存在、ないし、複数粒子、個体間の相互作用が必要である。

これは「湿度感覚における複数性（社会性）の原理」と呼ぶことができる。

【物理分野との関連】

ドライ・ウェットな対人行動と気体・液体分子運動との関連について

1992-2008初出

人間行動へのドライ・ウェットさの視点の導入は、今までほとんど接点のなかった、人々の対人・社会行動と、分子や物体運動に関する物理学とを結びつける効果をもたらす。

要するに、ドライ・ウェットな人〜物体〜分子といったサイズの異なる各粒子は、粒子のサイズが違っていても、ドライな場合、ウェットな場合とで、それぞれ共通の行動・運動様式を持っていることを示すことができるのである。

各粒子の動きが、気体分子の運動パターンと同じ場合は、人間には、粒子の動きが、分子〜人間まで共通に、ドライに感じられる。

一方、各粒子の動きが、液体分子の運動パターンと同じ場合は、人間には、粒子の動きが、分子〜人間まで共通に、ウェットに感じられる。

（注）上記のアイデアを筆者が最初に思いついたのは、1992年頃です。

（注）上記の、液体・気体分子運動パターンという言い方を、より簡略化して呼びやすく、覚えやすくする必要がある。

以下では、筆者は、気体分子運動パターンを、ドライな（乾いた

Dry）感覚を与えるため、頭文字のＤを取って、動作パターンＤと呼ぶことにする。

一方、筆者は、液体分子運動パターンを、ウェットな（湿ったWet）感覚を与えるため、頭文字のＷを取って、動作パターンＷと呼ぶことにすること。

こう略すことで、例えば、液体分子群や、日本人の行動様式が共通の「動作パターンＷ」に沿っており、気体分子群や、欧米の人々の行動様式は共通の「動作パターンＤ」に沿っている、などと簡便に表現することができる。

筆者は、上記の説明が正しいことを、webでのアンケート調査（2005.03下旬実施）により確認した。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

上記の気体分子運動パターン（動作パターンＤ）、液体分子運動パターン（動作パターンＷ）は、言葉で言い表すならば、以下のような単語～短文で表現できると考えられる。

表 5

上記の表現が、本当に、それぞれ動作パターンＤならよりドライに、動作パターンＷならよりウェットに感じられるかどうか、2005年9月頃、アンケート調査を行った。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

ここで、気体、液体分子運動パターンに従った粒子の動きは、従来

の社会学や心理学における概念表現に合わせるならば、それぞれ、以下のように表せる。

表 6

より詳細には、以下の表を参照されたい。

ドライ（気体的）・ウェット（液体的）な分子・粒子の運動パターンを整理した表。

表 7

上記気体・液体の分子運動を、人間の行動に直して捉えたものとしては、以下の表を参照されたい。

分子〜人間に共通な、粒子の行動パターンを、人間個人の性格として整理した表。

皆さんは、ドライないしウェットな性格の人になろうと思ったら、以下の表に書かれているような態度を、日頃取るように心がけましょう。

表 8

このことから、気体・液体分子運動シミュレーションと相似の方法

によって、ドライな社会、ウェットな社会の人々の行動を、コンピュータでシミュレートできる、と言えること。

例えば、日本、東アジアの人たちがウェットで、欧米の人たちがドライだというのは、農耕、女性主体の、日本、東アジア社会の人たちの行動様式が、本質的に液体分子運動に似ており、一方、遊牧・牧畜、男性主体の、欧米社会の人たちの行動様式が、気体分子運動に似ていることを示している。

遊牧・牧畜、男性中心の欧米社会。（人々の動きが、）空気のような気体に近く、気体分子運動（動作パターンＤ）でシミュレートでき、「気体型社会」と呼べること。
農耕、女性中心の日本、東アジア社会。（人々の動きが、）水滴のような液体に近く、液体分子運動（動作パターンＷ）でシミュレートでき、「液体型社会」と呼べること。

このように、ドライ・ウェットさの視点を世界の社会文化の分析へと導入することは、物理学で発達している物体の動きをコンピュータでシミュレートするノウハウを、そのまま社会学、心理学で生かせるようになる効果をもたらし、社会学、心理学の発展に寄与する度合いが大きいと言える。

ドライ・ウェットな物体（分子を含むこと。）～人に共通する運動・行動パターンについて、以下の図にまとめたこと。

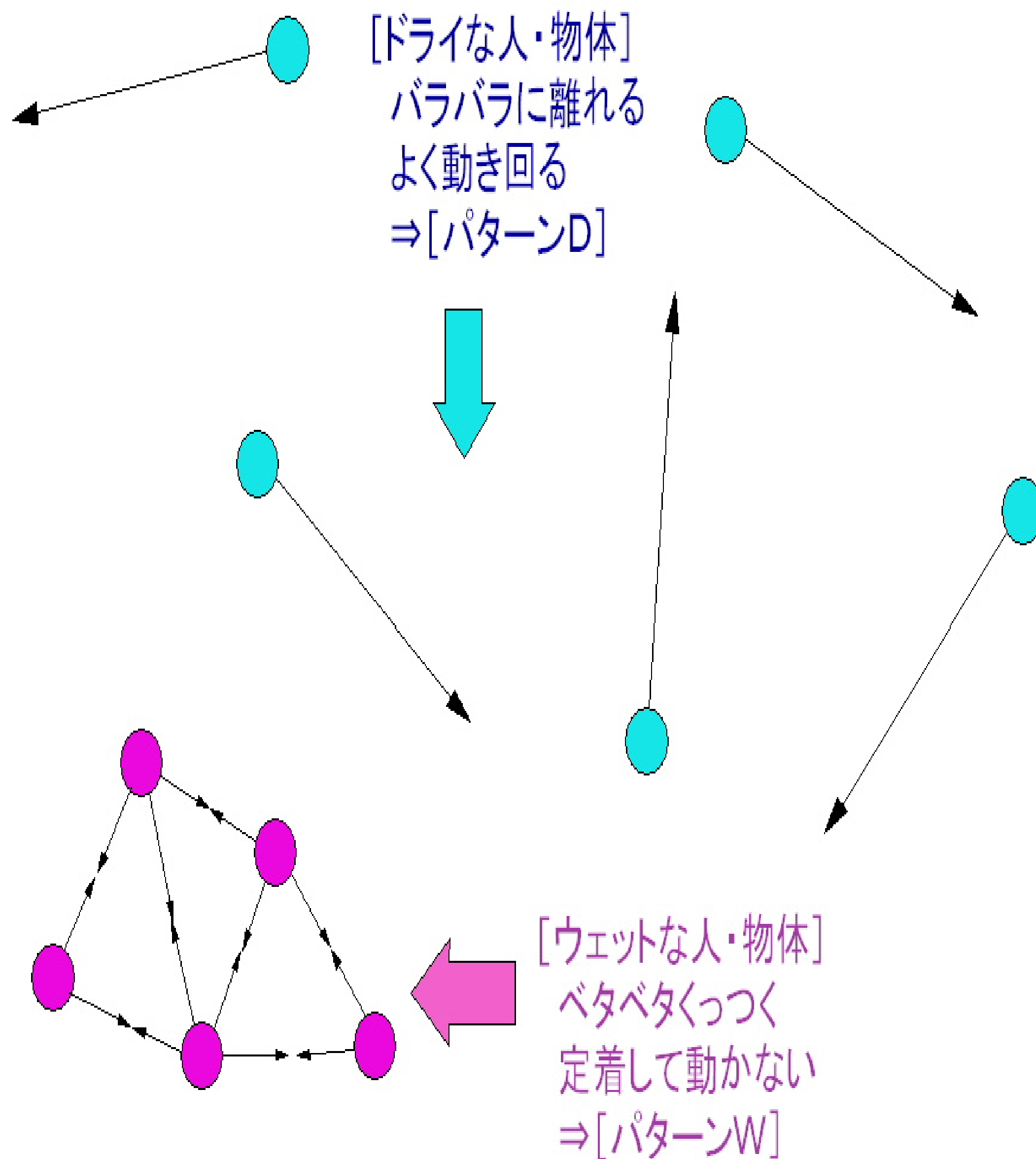


図 ドライ・ウェットな人・物体の説明

ドライ・ウェットさの分子〜物体〜人間レベルの間の相互関連についてのより詳しい説明は、以下の通りである。

１気体・液体分子運動パターンの説明

人間のどのような行動様式が、なぜドライ・ウェットな対人感覚を生むかについては、まず、本来人間にドライ・ウェットな感覚の相違を与える、物理的な気体・液体の性質の相違を生み出すメカニズムを、改めて確認する必要がある。ドライな感覚を与えるのが、気体で、ウェットな感覚を与えるのが、液体である。両者の相違を見るには、視点が、分子レベルまで小さくなる必要がある。

具体的に気体分子と液体分子の、両者の相違を生み出しているのは、以下の内容である。
［1］運動エネルギーの大きさ（動きの度合い）の違い
液体では、動き回る度合い（運動エネルギー）が小さい。（あまり動き回らない、低速であること。）
気体では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きい。（よく動き回る、高速であること。）
［2］「分子間力」の働く度合いの違い
液体では、分子同士の間に、互いの距離を縮めて、互いに引き付け合い、くっつき合い、足を引っ張り合ったり、牽制し合う、「分子間力」という引力が、大きく働いている。
気体では、分子同士の間に、上記の、互いに相手と近づき、引きつけ合う「分子間力」が、ほとんど働いていない。

「分子間力」の働く度合いが、液体で大きく、気体で小さいのは、以下の理由である。
（１）液体分子では、運動エネルギーが小さいため、もともと分子間に存在する、相互に引きつけ、くっつき、牽制し合う力（分子間力）を振り切って動き回ることができず、分子間力のいいなりになっている。
（２）気体分子では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きいため、分子間力を振り切って動き回ることができ、「分子間力」の影響から自由になっている。

「分子間力」の働く度合いが、液体で大きく、気体で小さいのは、以下の理由である。
（１）液体分子では、運動エネルギーが小さいため、もともと分子間に存在する、相互に近づき、引きつけ、牽制し合う力（分子間力）を振り切って動き回ることができず、分子間力のいいなりになっている。
（２）気体分子では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きいため、分子間力を振り切って動き回ることができ、「分子間力」の影響から自由になっている。

２物体一般への適用

液体の水は、指先で触れると、濡れて皮膚にくっつき、まとわりついて離れようとしない。その点、液体の水と指先との間には互いにくっついたままの状態でいようとする引力が働いていると言える。また、液体の水は指先を動かさない限り、いつまでも同じところに留まって動かない。その点、液体の水は、気体の水蒸気などに比べて、運動・活動性が低いと言える。

そこで、さらに考えを拡張すると、物体一般において、以下の法則が成立する、と推定される。
（１）物体（分子～人間）の、運動・活動・移動・流動性が高く、相互間に働く引力（結合力）が小さい（互いに離れること。）場合、ドライであること。（乾いていること。）
（２）物体（分子～人間）の、運動・活動・移動・流動性が低く、相互間に働く引力（結合力）が大きい（互いに離れないこと。）場合、ウェットであること。（湿っている、濡れていること。）

この推定が正しいことを説明するには、分子よりもずっと人間に近いサイズの物体において推定が成立することが必要となる。そうしたより人間寄りのサイズの物体としては、例えば、海岸や河川、砂漠に分布する砂の粒や、人間（特に女性）の髪の毛、大豆を発酵させて作る納豆、溶けた糖分を冷やして固めて作った菓子のキャン

ディ、より大きなものとしては、卓球用のプラスチックボールや、バレーボールなどがあげられる。

乾いた（ドライな）砂は、触っても手にくっつかずサラサラと一粒ずつバラバラに離れて落ちること。（接着・粘着性がないこと。）また、風が吹くとそれに従ってサラサラと移動すること。（流動性があること。）これに対して、湿った、濡れたこと。（ウェットなこと。）砂は、触ると手にくっついてそのまま離れようとしないこと。（接着・粘着性があること。）また、団子状にひとかたまりになって、風が吹いても動こうとしないこと。（流動性がないこと。）

水に濡れた髪は、髪の毛同士がひとまとまりになってなかなかバラバラになってくれないし、風が吹いてもなびいて動こうとしない。一方、乾いた髪は、風になびいてサラサラ・バラバラと一本ずつ個別に分離して動き、流動性がある。

納豆は、かき回すとネバネバとした糸を引いて互いに糸で接続し、くっついて一つにまとまった状態で静止しようとする。その際、一粒の豆と豆との間を引力が糸を引く形で働いており、分子間力相当の力に相当すると考えられる。

表面が溶けた（液体化したこと。）キャンディの粒々は、指先や他のキャンディとベタベタくっついて取れない。一粒ずつ動かそうとしても、互いにくっついて動かすことができない。

あるいは、卓球用プラスチックボールやバレーボールは、そのままでは手離れよく一つずつバラバラになって動き回るが、接着剤を表面に広く塗り付けたり、両面粘着テープ全面に巻き付けるとベタベタ互いにくっつき、結合し合って離れず、一つずつバラバラに独立させることが難しいし、活発に動かそう、飛ばそうとしてもすぐ別のところに接着してしまって動こうとしない。

この場合、こうした物体の接着・粘着性（いったんくっつくと離れようとしない性質）が、互いの間に働く引力（互いに離れずくっつき、接続し合おうとする力）を大きくし、運動・活動・移動・流動性を奪っていると考えられること。すなわち、物体における互いにネバネバ、ベトベトと互いにくっつこうとする接着・粘着性が、物

体同士を互いに引き合わせ、動きにくくする形で、物体にウェットさをもたらすことになる。これは、例えば接着剤が長時間外部に露出し続けて溶剤が抜けてベタベタしなくなると、乾いた、ドライになったと感じられることからも例証される。

上記の考えが正しいかどうか確認するために、web質問紙調査を、2002年4月下旬および10月上旬に実施した。調査は、対にした、物体がもたらす感覚について説明した2つの文章のどちらがよりドライに感じられるか尋ねるもので、1質問項目当たり約200名の回答者という規模で行った。

（1）触るとサラサラとして手からすぐ離れる（粘り気がない）物体の方が、ベタベタくっつく（触るとネバネバしている）物体よりも、よりドライに感じられる。ないし、互いに離れることで、間隔が開いて風通しのよい状態の物体の方が、互いにくっついて風通しの悪い状態の物体よりも、よりドライに感じられる。

（2）バラバラに自由に動き回る物体の方が、互いにくっつき合って動かない物体よりも、よりドライに感じられる。ないし、動きのある物体の方が、動かずに停滞した状態の物体よりも、よりドライに感じられる。

ことが実際に確認された。

以上の考えを分かりやすい言葉でまとめると、一般に、粘り気・接着力があり、互いにベタベタくっつき合って動かない物体はウェット、反対に、手からサッと離れて、互いにサラサラと離れて動き回る物体はドライに感じられる、と言える。

この場合、ウェットな物体は、互いに他の物体とくっつき合おうとし、ドライな物体は互いに離れようとする点、両者は、物体間の相互作用、社会関係の面から見て、対照的な性格を持つと言える。

こうした、分子レベルよりもずっと大きい物体サイズの事例から、前記の分子レベルでのドライ・ウェット感の範囲を物体一般に広げることが可能だと考えられる。

３対人関係への応用

この物体一般におけるドライ・ウェット感覚をさらに人間レベルまで拡張して捉えた場合、水のような液体、空気のような気体が、人間に対してウェット・ドライな感じを与えるしくみと、人間同士が、人付き合いで、互いに相手に対して、ウェット・ドライな感じを与えるしくみとは、互いに共通なのではないか、と考えられる。

すなわち、物体一般レベルで見られる、運動・移動性および引力の概念を人間に当てはめることにより、
（１）人間が、一カ所に止まってあまり動こうとせず（活発に動き回る度合いが小さく。）、周囲の他者と互いに近づき、くっつき合い、離れようとしない場合。（引力が大きく働いている場合。）対人関係に、（運動エネルギーが小さく分子間力の大きい液体分子同様の）ウェットな感覚が生まれる。
（２）人間が、一カ所に止まらずにあちこち移動・流動し（活発に動き回る度合いが大きく）、周囲の他者との間に互いに近づいたり、くっつき合ったりせず、離れようとする場合。（引力があまり働いていない場合。）対人関係に、（運動エネルギーが大きく分子間力の小さい気体分子同様の）ドライな感覚が生まれる。
と考えられること。

この場合、物体サイズを分子サイズから人間サイズへと揃えて眺めることにより、両者に共通して働く、物体の動き回るエネルギーを「運動エネルギー（分子レベル）」＝「運動・活動・移動・流動性（物体～人間レベル）」、物体間で互いにくっつき、接続・結合・集合し合い、牽制・束縛し合う力を「分子間力（分子レベル）」＝「引力、結合力（物体～人間レベル）」として、同様に捉える事が可能となる。

上の説明を一言でまとめると、活動や運動面での活発さの差、およびそれによってもたらされる、分子間力相当の引力の大小から、それぞれウェット・ドライな対人感覚の分化が生じる、ということになる。（この説明を考案したのは1991～1992年頃。）

この場合、人間においては、物理的な肉体による活動・運動や身体同士の引っ張り合いと並んで、具体的な物理運動を伴わない心理的

な活動・運動や相互牽制、接近をも同時に考える必要がある。例えば、机の前に座ったままで、知的好奇心に満たされて様々な分野の書籍を読みあさったり、いろいろ活発に物事を考えたりしている状態では、物理的には不活発だが、心理的には活発に動き回っていると捉えることができる。あるいは、物理的に離れた地点に暮らしている恋人同士が電話によるコミュニケーションで強い心理的一体感を抱いている状態では、物理的には遠いままでも、強い心理的引力が両者の間に働いていると捉えることができる。

このように、人間の活動・運動や引力については、物理的なものと心理的なものに分けられるが、以下ではこのうち心理的な方を主に取り上げる。人間の身体の物理的な活動・運動や身体同士の引っ張り合いは、あくまで身体内部の神経系の活動を反映した表面的なものに過ぎず、神経系の働きに基づく心理的な活動・運動や引力の方が、人間の行動をより根源的に決定していると考えるためである。

対人感覚でドライな感覚を与える運動・活動性の実態は、人間に内在する、以下の指向性である。
あちらこちらの互いに離れた地点間を活発に移動しようとする心的指向。（空間移動指向。）
今まで行ったことのない地点・地域へも進んで拡散していこう、新天地を積極的に切り開こう（新規対象を開拓しよう）とする心的指向（拡散指向）。
この場合、以下の欲求や衝動が、運動・活動性の原動力となっている。
物理的居場所や心理的に興味ある分野を変えることで生活上の雰囲気を一新し、新たな刺激を得たいという欲求。
今まで出会ったことのない未知のものごとに対する好奇心、言い換えれば（今まで〜ここしばらくの間）経験したことのない新たなこと（新鮮なこと）情報に接したいという心的衝動（新規情報受信衝動）。
これとは反対の、一ヵ所に静止して動こうとしない定住・定着・不拡散指向は、運動・活動性の欠如を意味し、対人感覚ではウェットな感覚を与える。

一方、対人感覚においてウェットな感覚を与える心理的な引力、結合力の実体は何であるか？ それは、以下の指向性である。
人間に内在する、周囲の他者と心理的に近くなろう、近い状態でい

ようとする指向。（心理的近接指向。）

（心理的に）相互に引き合うということ。それは、すなわち、以下の内容である。
互いの（心理面での）存在位置を次第に近づけていき、最終的には抱き合って一つになること。（一体化する、融合すること。）そして互いにくっついて離れないということ。
相手への心理的な距離を縮小していき、最終的にはゼロにしよう、接続しよう、つながろうとする指向が強いと、それが互いの間であたかも引力のように感じられ、対人感覚においてウェットな感じをもたらす、といえる。

筆者は、以上の説明を、分かりやすい言葉でまとめてみる。それは、対人関係において、以下の内容である。
（１）心理的に相手にベタベタくっついて離れようとしないこと。（粘着・接着・接続・結合・集合性を持ったこと。）そして、そのまま動こうとしないこと。（定着・定住性を持ったこと。）
（２）相手に対してあっさりとして深入りせず、すぐサラリと離れること。（非粘着・非接着・切断・離散性を持ったこと。）そして、あちこち活発に動き回って移動すること。（運動・活動・移動・流動性を持ったこと。）
と言えること。

この場合、粘着・接着力は、互いに近づき、引きつけ合い、くっつき合うことを指向する点、引力の一形態と言える。この粘着・接着力は、また、人や物をその場に引き止めて離さず、動けなくする非移動（活動、運動）化＝定着・定住化の効果も併せて持っている。

分子にせよ、物体にせよ、人間の心理にせよ、相手にベタベタと粘着的にまとわりついて離れず、そのまま動こうとしない場合は、皆共通にウェットに感じられ、その逆は共通にドライに感じられると言える。

４．

ドライ・ウェットな性質というのは、粒子単独を見ただけでは見え

てこない。複数粒子の形成する社会、個体群を見ることで初めて見えてくること。

ドライ・ウェットの相違は、粒子と他粒子との相互作用のあり方の違いである。互いに他粒子とくっつく、一体化する、相互束縛するのがウェットで、他粒子とバラバラに離れて自由に動くのがドライである。

こうした性質は、粒子を複数同時に見ないと分からない性質である。その点、ドライ・ウェットさの検討を.行うには、粒子単独の動き、単独者の心理を見るだけではダメで、極めて社会的視点が必要なのである。

この場合、相互作用する粒子の種類やサイズは、互いに同じとは限らない。サイズに関しては、一方が極小サイズでもう片方が巨大サイズということもある。例えば、人間（巨大）の皮膚にくっつく液体の水の分子（群）（極小）が、種類とサイズが異なる例に当たる。粒子のサイズが異なっても、粒子相互の間に働くドライ・ウェットな性質は観察可能である。

【皮膚感覚、対人感覚について】

ドライ・ウェット皮膚感覚、視聴覚、対人感覚OHP

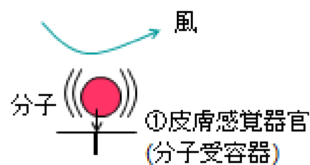
2005.2-2008.9初出

ドライ・ウェット
皮膚感覚・視聴覚・対人知覚

2005.2-2008.9

大塚いわお

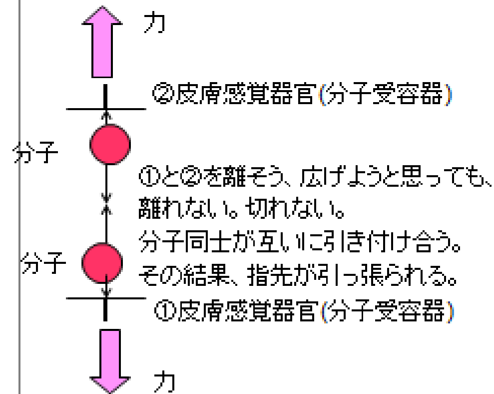
皮膚感覚
（1）ウェット（湿った）ー付着



分子が、皮膚にくっついて
風が吹いても離れない。

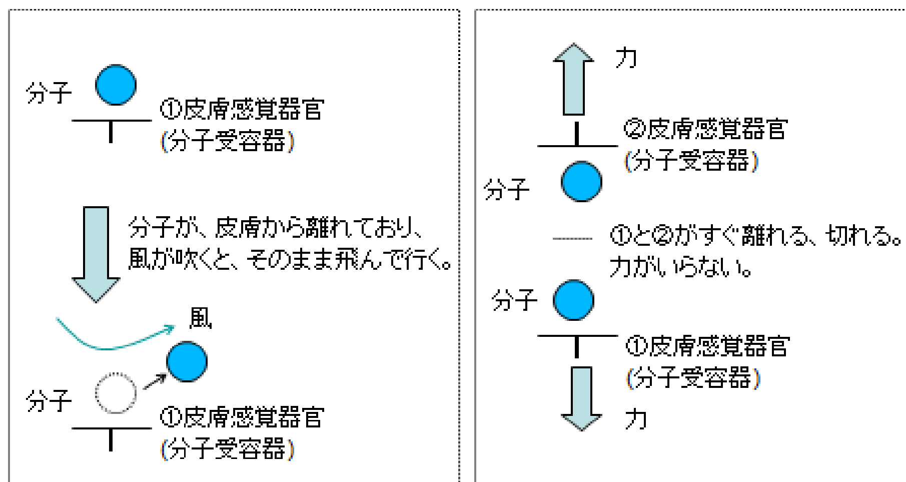
風が吹くと、分子が皮膚上
を動く。

指先の水滴

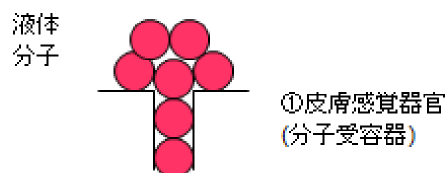


2つの指先に付いた、速乾性の接着剤

皮膚感覚
（1）ドライ（乾いた）－分離

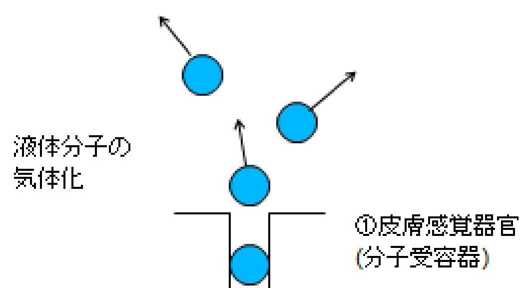


皮膚感覚
（2）ウェット（湿った）－汗



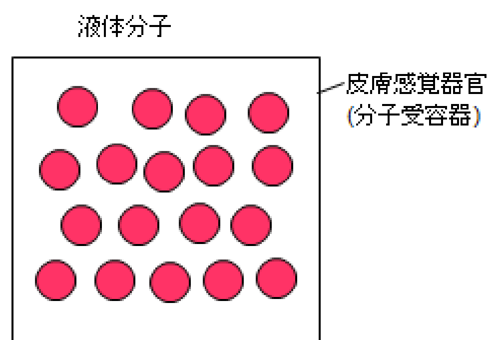
汗が蒸発せずに、皮膚の上に載ったままである。
次の汗が出て行かず、溜まったままとなる。
汗腺が詰まった状態が続く。
皮膚感覚がいつまでも濡れて、スッとしない。

皮膚感覚
(2)ドライ(乾いた)ー汗



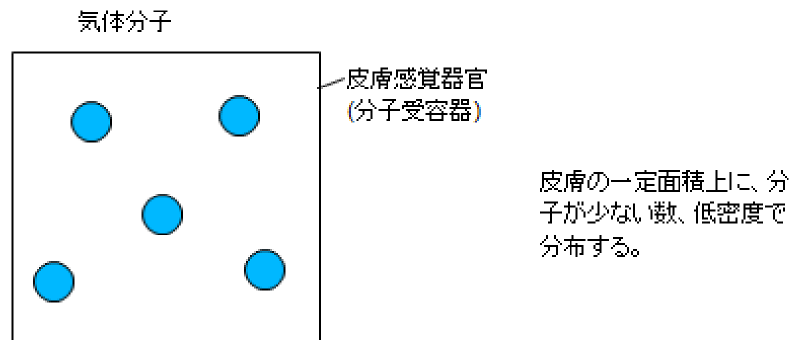
汗が蒸発し、皮膚からどんどん離れて行く。
次の汗がどんどん出て行き、溜まらない。
汗腺が開いた状態になる。
皮膚感覚がスッとする。

皮膚感覚
(3)ウェット(湿った)ー高密度

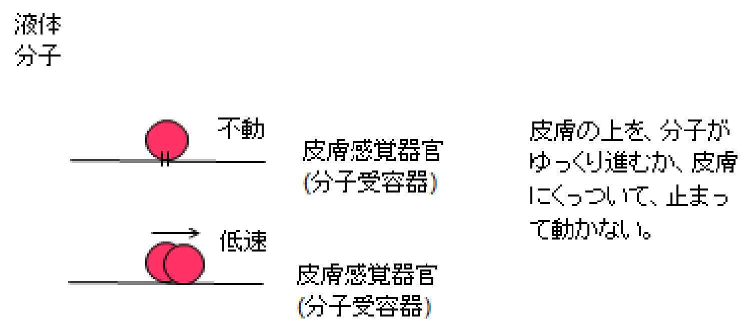


皮膚の一定面積上に、分子が沢山高密度で分布する。

皮膚感覚
(３)ドライ(乾いた)ー低密度

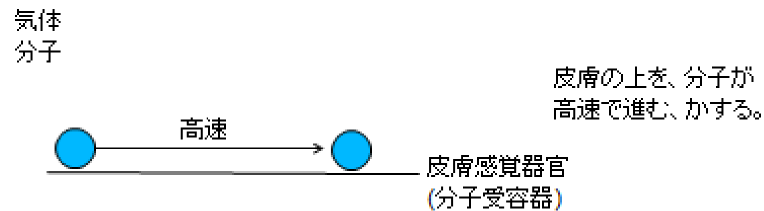


皮膚感覚
(４)ウェット(湿った)ー不動、低速



皮膚感覚

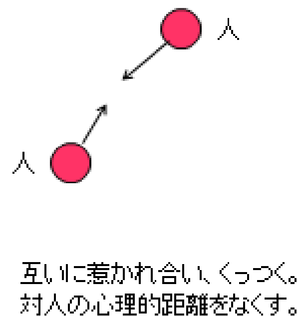
（4）ドライ（乾いた）－高速



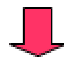
対人行動（ソシオグラム）と感覚

（1）近接・分離

①湿った（ウェット）

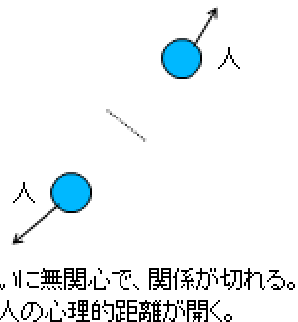


互いに惹かれ合い、くっつく。
対人の心理的距離をなくす。

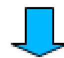


液体分子の振る舞いと同様の図

②乾いた（ドライ）



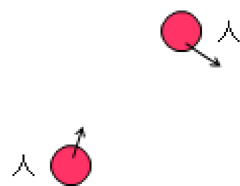
互いに無関心で、関係が切れる。
対人の心理的距離が開く。



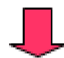
気体分子の振る舞いと同様の図

対人行動(ソシオグラム)と感覚
(2)低速・高速

①湿った(ウェット)

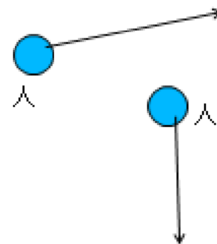


低速でゆっくり移動する。

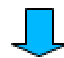


液体分子の振る舞いと同様の図

②乾いた(ドライ)



高速で素早く移動する。



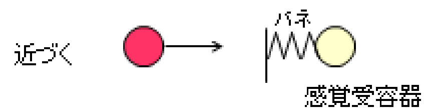
気体分子の振る舞いと同様の図

皮膚～対人共通感覚①
ウェット(液体的)ー近接・付着

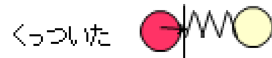
分子～個人　分子～個人



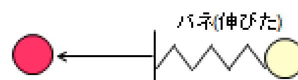
←互いに近づき、くっつく



感覚受容器

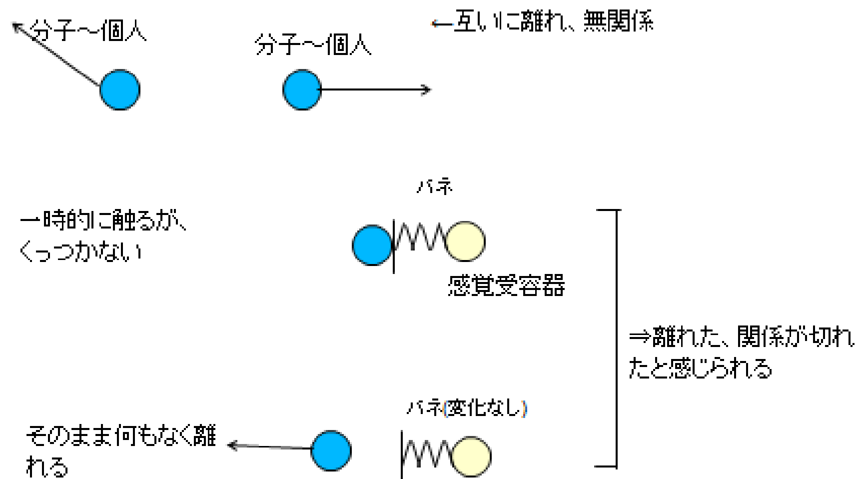


離そうとすると、抵抗して感覚受容器を引っ張る。バネを伸ばす。

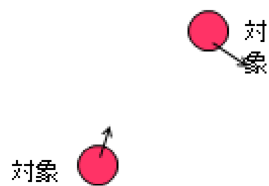


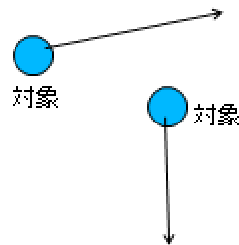
⇒一体だ・くっついていると感じられる

皮膚～対人共通感覚①
ドライ（気体的）－離反、無関係



皮膚～対人共通感覚
②低速・高速





低速でゆっくり移動する。

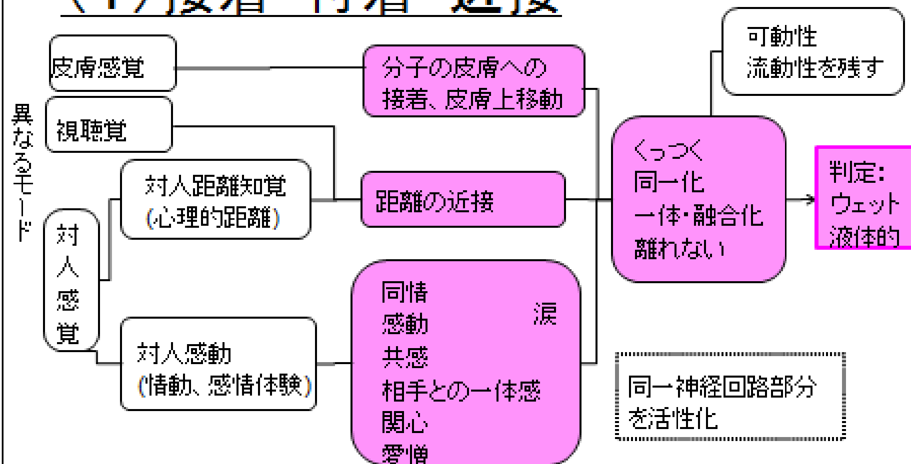
高速で素早く移動する。

湿った（ウェット）

乾いた（ドライ）

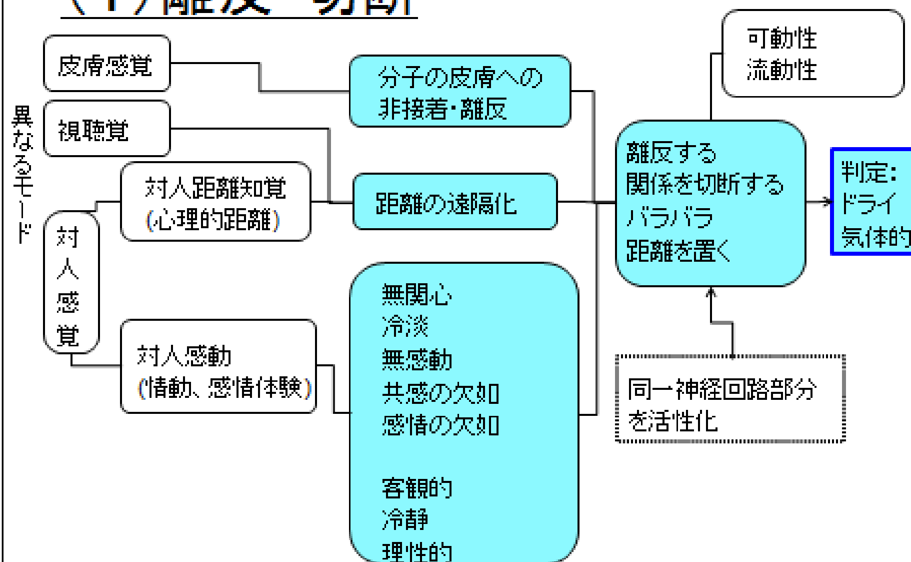
ウェット感覚知覚ルート説明図

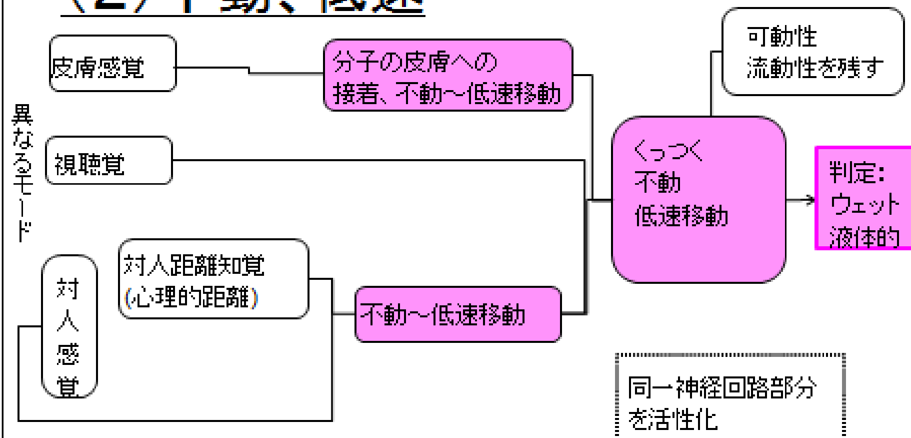
（1）接着・付着・近接

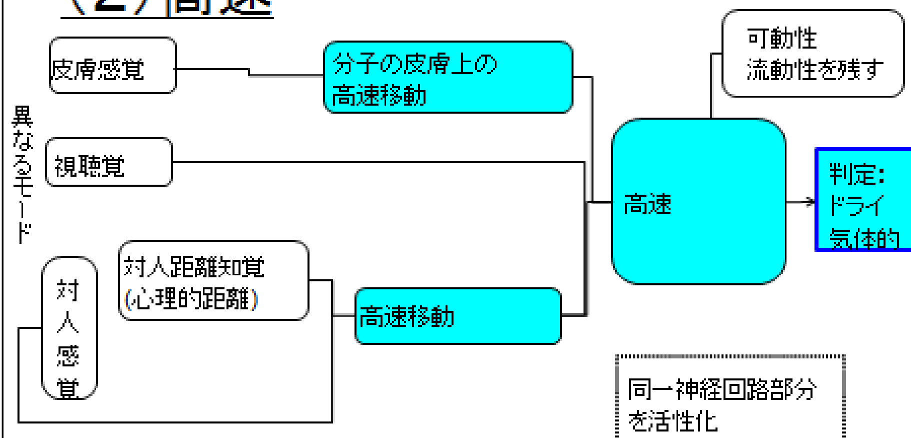


ドライ感覚知覚ルート 説明図

（1）離反・切断







皮膚でのドライ・ウェットさの知覚－「分子運動パターン還元アプローチ」

2005.03-2010.10初出

皮膚での乾湿感覚知覚について知るには、物理学と知覚心理学の橋渡しが必要である。

気体分子・液体分子の動く、飛ぶ速度がより高速になると、皮膚では、より熱く、暑く感じる。
気体分子（冷風、温風、熱風）、液体分子（冷水、湯）の温度の違いによって、皮膚の熱覚（温度センサー）が、それらの分子運動を区別している。

それと同様に、気体分子（乾いたこと。）、液体分子（湿った、濡れたこと。）の違い、すなわち、湿度の違いによって、皮膚の湿覚（湿度センサー）が、それらの分子運動を区別していると考えられる。

従来の心理学、生理学における湿度知覚研究は、以下のアプローチを取ってきた。

（１）「知覚の数値化アプローチ」湿度を数値化し、異なる湿度数値によって、人間の皮膚が湿度の違いを検知出来るか、あるいは湿度が何パーセントなら湿っていると知覚するかを知ろうとする。

（２）「湿度専用受容器発見アプローチ」湿度を選択的に知覚する、湿度専用の感覚受容器、生体湿度計みたいなものを、人間、生物の皮膚上に見いだそうとすること。湿度数値が高くなると活性化する受容器を探す。例えば、ゴキブリが、専用の湿度感覚受容器を持っていることを発見した、というのがこれに当たる。

（３）「快適・健康湿度分析アプローチ」エアコンや肌着における快適湿度研究や、湿度と皮膚病発生との関連を調べる研究のように、湿度数値と人間の快不快感との関連、病気発生との関連を調べ、人間にとって快適、健康な湿度環境はどの辺りにあるかというのを見いだそうとする。例えば、高温多湿の室内は不快なので、エアコンによる調節が必要であるとか、皮膚の保湿を行うことで、皮膚のカサカサや皮膚炎を予防できる、という研究成果がこれに当た

る。

これに対して、筆者は、より物理運動原則と湿度知覚との関連に着目した、「分子運動パターン還元アプローチ」を提案する。これは、気体・液体の分子運動とその違いの皮膚知覚が、湿度知覚の本質である、と捉えるものである。気体分子群と液体分子群とで、分子運動の皮膚への働きかけのあり方が違い、その違いを人間の皮膚は、前者をドライ（乾いたこと。）、後者をウェット（湿ったこと。）と区別して知覚するのだと考えること。気体・液体分子運動パターンの相違が皮膚での乾湿弁別に結びつくメカニズムに着目する。
気体・液体の分子運動パターン、特徴の相違が、皮膚上の触覚受容器にもたらす刺激のあり方を解明する。ドライな気体分子運動が、「各分子が高速で動き、バラバラに離れる、散る、くっつかない」というパターンで皮膚に向かって働きかけ、一方、ウェットな液体分子運動が「各分子がゆっくり動き、ベタベタくっついて集まる」というパターンで働きかける、という違いがあり、その違いの皮膚による区別、弁別が湿度知覚の本質だと捉える。

この「分子運動パターン還元アプローチ」では、以下のような捉え方をする。

・分析の視点を、湿度数値にいきなり落とすことはしない。分析の視点を、湿度数値の違いをもたらす気体・液体分子運動の物理的メカニズムの相違という根本原因へと深める形で捉えること。

・人間の皮膚において、湿度知覚専用の受容器の存在を必須として想定しないこと。湿度知覚は、様々な触覚が組み合わされて実現するという見方も取っておく。もしも、湿度知覚専用の受容器があるとしたら、それは、気体・液体分子群の皮膚への働きかけパターンの相違に反応する受容器だと捉える。

・気体・液体分子運動パターンの皮膚への働きかけを見る際に、視点を、極小な分子レベルだけに限るのではなく、様々な大きさの物体に一般化して捉えること。分子以外の、例えば目に見える大きさの粒子、物体群（例えばビー玉やピンポン球の粒々とか）についても、それぞれ気体・液体分子群と同じ運動パターンを取ったら、皮

膚ではそれぞれ乾いた（ドライ）、湿った（ウェット）と感じられると捉えること。

気体相当なら「各粒子、物体が高速で、低密度でバラバラに離散して動き、くっつかない。」
液体相当なら「各粒子、物体がゆっくりと動き、高密度でくっつく。」

・湿った、ウェットな感じの発生を、物理的な水分、水蒸気のような液体に限定しないこと。例えば、高密度なビロードの布に触れたとき、ウェットに感じるように、物理的な水とかで実際に濡れていなくても、ウェットに感じることがあるのに着目する。

分子行動学各分子の動くパターンを調べること。
分子社会学分子集団の動き、分子間の相互作用を調べること。
分子化学分子の化学変化を調べること。

分子行動学、社会学の観点からは、。
気体分子行動は、個人主義、自由主義、・・・・。
液体分子行動は、集団主義、規制指向、・・・・。
と捉えられること。

ドライ・ウェットな皮膚感覚は、気体と液体とを分別して知覚することである。
ドライな気体は、皮膚にくっつかない。ウェットな液体は、皮膚から離れない。
気体と液体の違いは分子レベルの動きの違いであり、分子レベルの動きの違いを皮膚の感覚受容器が区別するのが、ドライ・ウェットの区別である。

液体分子運動が、皮膚には、気体のそれとは異なって感じられる。その違いが、ドライ、ウェットの知覚差となって現れる。

皮膚は、分子レベルの粒子の運動の差異を知覚できる。嗅覚の分子受容体のように、温度や湿度についても、同様の分子受容体を持っている。

皮膚上の湿度センサーは、分子が自分とくっつく、・・・・・・・とウェットと感じ、離れる、・・・・・・とドライと感じる。

表 9

分子運動パターンと、分子が皮膚に与える感覚とは互いに関連している。

液体は、ウェットであり、分子同士が互いに引き寄せ合い、くっつく。その応用で、人間の皮膚（の感覚受容器）に対しても、くっつく、接着する、手離れが悪い。
気体は、ドライであり、分子同士が離れる。その応用で、人間の皮膚（の感覚受容器）からも離れて、くっつかない、手離れが良い。

液体分子運動パターン。（互いにくっついて離れず、高密度、集団で分布すること。）その分子群～物体群が肌に当たる（接触する）と、ウェットに感じられること。
気体分子運動パターン。（互いにバラバラに離れて、個別に散らばること。）その分子群～物体群が肌に当たる（接触する）と、ドライに感じられること。

（注）動作パターンＤと動作パターンＷ

今後は、液体・気体分子運動パターンという言い方を、より簡略化して呼びやすく、覚えやすくする必要がある。

気体分子運動パターンは、ドライな（乾いたDry）感覚を与えるた

め、頭文字のＤを取って、動作パターンＤと呼べること。

一方、液体分子運動パターンは、ウェットな（湿ったWet、Humid）感覚を与えるため、頭文字のＷ（H）を取って、動作パターンＷと呼べること。

こう略すことで、例えば、液体分子群や、日本人の行動様式が共通の「動作パターンＷ」に沿っており、気体分子群や、欧米の人々の行動様式は共通の「動作パターンＤ」に沿っている、などと簡便に表現することができる。

皮膚での湿度知覚は、以下のようになると考えられる。
湿度が高いのがウェットと感じられ、湿度の低いのがドライと感じられる。

人間においては、皮膚上で湿度を知覚する専用の感覚受容器は未だ発見されないとされている。実際のところ、人間の場合、乾湿感覚は、湿度の高低を感知する湿度計のような特殊な受容器が皮膚上に存在するのではなく、普通の触覚と同一、共通の感覚受容器によって感知されるものである可能性がある。実際には、以下のような複数の異なる種類の触覚を絞り込んで複合させたものとして、異なる種類の皮膚刺激が神経系の同一感覚野上で一つに合成された形で捉えられているのかも知れない。

（１）タッチ密度

湿度が高い、ウェットな空気は、皮膚受容器に密度濃く、一定面積でたくさんの数の水気体分子がぶつかる。一方、湿度の低い、ドライな空気は、空気中の水気体分子が、皮膚受容器に低密度で、一定面積の皮膚上に、少なくぶつかる。

気体分子群が高密度で皮膚上を舐める、触ると、もわっとした、濃い感じを皮膚に与える。これは、ウェット感につながる。一方、低密度の気体分子群は、皮膚にタッチする度合いが少なく、薄い、淡い、爽やかな感じを皮膚に与える。これは、ドライ感につながる。

このことと関連して、皮膚上を高密度のピン群でタッチして離した場合と、低密度のピン群でタッチして離した場合とでは、高密度の方がよりウェットと感じると考えられる。

あるいは、皮膚上を、滑らかですべすべな表面＝極めて高密度な表面の絹布やベルベットで触った場合、低密度の粗い表面を持つ麻布で触った場合に比べて、高密度の前者がよりウェットに、低密度の後者がよりドライに感じられると考えられる。例えば、夏場に使うドライな質感のシーツは、同じ綿素材でも、生地の凹凸の区別がはっきりしていて、皮膚に直接接触しにくい部分が多く、皮膚接触密度の低さ、粗さを感じさせるようになっている。あるいは、塩化ビニールのシートでも、平らで滑らかなシートの方が、凸凹のたくさん付いたシートよりも、手触りがよりウェットに感じる。

あるいは、一つ一つのピン突起が小さく、木目細かい方が、一つ一つのピンが大きく、木目が粗い場合より、手触りがよりウェットに感じる。

（２）タッチ時間の長さ

分子群が皮膚上にくっついたままの状態を続けて、そのまま離れないのがウェットで、皮膚に一時的にくっついても、すぐに離れるのがドライな感覚を与えると考えられる。

このことと関連して、ピン群や布などを皮膚にタッチして、長くそのままタッチ状態を続けた場合、タッチしたらすぐに離す場合に比べて、前者のタッチを長く続ける場合がよりウェットに感じられ、後者のすぐ離す場合がよりドライに感じられると考えられる。

（３）タッチ後の皮膚へのくっつきこと。

分子群が、皮膚にくっついた後、引き離そうとすると抵抗して、皮膚を持ち上げるのが、ウェットで、何事もなく皮膚から取れる、離れるのがドライな感覚を与えると考えられる。

皮膚に接触させた後のピン群あるいはテープなどが、皮膚と接触す

る先端に接着剤とかが付いていて、皮膚から引き上げる際に、皮膚から取れない、離れずに、皮膚を引っ張り上げるのが、ウェットで、ピン群やテープなどが、何事もなく皮膚から取れる、離れる、皮膚を引き上げないのが、ドライだと考えられる。

（４）タッチ時の皮膚へのフィット、柔軟さ

分子群や物体が、可動であって、皮膚に対して柔軟に変形して密着するのがウェットな感じを与え、皮膚と離れてなじまないのがドライな感じを与えると考えられる。密着してくっつくのが、ウェットな感じを与える原因となり、離れてくっつかないのがドライな感じを与える原因となる。

ゲルや絹布、低反発ウレタン枕のように、皮膚に張りつく感じで、皮膚の形状に合わせて柔軟に隙間を埋める形で変形・密着してフィットするのがウェットな感じを与え、一方、固いプラスチック板のように、剛性を持っており、皮膚になじまずに、皮膚表面のラインに合わせて変形することなく、皮膚との間に隙間ができるのが、ドライな感じを与えると言える。その点、素材の柔軟さはウェットさにつながり、固さはドライさにつながると言える。

（５）タッチ時の皮膚摩擦

分子群や物体が、滑らかな感じで、皮膚に摩擦を与えないのがウェットな感じを与え、皮膚とこすれて摩擦を与えるのがドライな感じを与えると考えられる。
皮膚に滑らかに密着して一体融合・和合するのがウェットな感じを与える原因となり、皮膚と離れた別々の物体として皮膚に刺激を与えるのがドライな感じを与える原因となる。

乾布摩擦のように、布が乾いていると、皮膚に摩擦を与える事ができるのに対して、布が濡れていると、皮膚に対して滑らかな感じとなって摩擦を与えず、皮膚と「和合」する。これは、人間関係において、和合を重んずるのがウェットと捉えられるのと一緒である。

（６）皮膚上の移動速度

分子群や物体が、皮膚上にくっついたまま、余り動かないか、ゆっくり動くのがウェットであり、皮膚上をさっと素早く移動して立ち去っていくのがドライな感じを与えると考えられる。低速で皮膚にくっつくのがウェットで、高速で皮膚に付かないのがドライである。

同じピン群や布の表面等を、皮膚上を高速で動かすとドライに感じられ、ゆっくり動かすか余り動かさないとウェットに感じられると考えられること。

（7）タッチの頻度

分子群や物体の、皮膚に対するタッチの頻度が高いのがウェットであり、頻度が低いのがドライな感じを与えると考えられる。
高密度で動き回って皮膚に働きかけるため、皮膚へのタッチ頻度が高くなるのがウェットで、密度が低いため皮膚に接触する頻度が低いのがドライである。

ピン群や布の表面等を、小刻みに高頻度で皮膚に接触させると
ウェットに感じられ、タッチする間隔を空けると、ドライに感じられること。

くっつく頻度が高いほど、「仲良し」「くっつきやすい」と感じられる。人間の場合でも、メールのやりとりの頻度の高い恋人同士ほど、ウェットに感じられること。

（8）タッチ時の当たる速さ、タッチ時の衝撃

分子や物体が、皮膚に対するタッチ時の速度が速く、皮膚に強い衝撃を与えるのがドライであり、低速で当たるため、衝撃が小さく、軽いのがウェットな感じを与えると考えられる。

ピン群や布の表面等を、軽くソフトな感じでゆっくり皮膚に当てると、ウェットに感じられ、高速でパーンと当てると、ドライに感じられること。これは、ドライな気体分子が高速で、ウェットな液体

分子が低速なのと根が同じと考えられる。

（９）タッチ時の形状

分子群や物体の、皮膚に対するタッチ時の形状が、ピンポイントで鋭く尖っている、切れている場合はドライであり、円やかになっている場合は、ウェットな感じを与えると考えられる。
刃物やペン先のようなものを皮膚に当てると、切れる、刺さる感じでドライに感じ、クッションのようなものを当てると、円い感じでウェットに感じること。切れる、刺す感じの物は、対象との関係を断ち切るため、ドライに感じ、円い感じの物は、対象との関係を円満に維持するため、ウェットに感じると言える。
ちなみに、愛撫は、ゆっくりやさしくソフトに撫でるので、接触時間が長く、皮膚上をゆっくり動き、人肌なのでソフトで柔らかく、フィットして、高密度できめ細かい肌触りである。これらは、上の説明が正しければ、ウェットな性質を満たしている。愛撫は、愛撫される側の人の心を安心させたり、和ませたり、開かせたりする効果を持ち、愛撫する人との間に強い一体感、依存感が生まれる点、その本質はウェットであると言える。

分子が皮膚の感覚受容器上に載ったまま、動くが、離れないと、ウェットに感じる。
分子が皮膚の感覚受容器から離れて飛んで行くと、ドライに感じる。

分子運動がウェットに感じる場合は、以下の通りである。
・分子が皮膚にくっついて、風が吹いても離れて飛んで行かない。分子が皮膚と一体となっている。
・互いに分子がくっついた指先同士を離そう、広げようと思っても、分子が互いにくっついて、引き合って、抵抗する。
・分子は固まっておらず、風が吹くと皮膚上を動く余地がある。

・汗が蒸発せず、皮膚上に溜まる。
・高温時、汗腺は空かず、詰まったままであるため、体内の熱が放出されず、蒸し暑く感じる。

・分子群が皮膚に対して、より高密度で接触、付着する。低温時に湿度が高い場合、皮膚からの空気中の水蒸気への熱伝導による放熱が増加して寒冷感を増す。

分子運動がドライに感じる場合は、以下の通りである。
・分子が皮膚から離れており、風が吹くと、飛んで行く。
・互いに分子がくっついた指先同士を離そうとすると、無抵抗で離れる。

・汗が蒸発し、次の汗がどんどん出て行く。気化熱を奪われてスッとすること。
・高温時、汗腺が常時開いて、体内の熱がどんどん蒸発し、涼しく感じる。

・分子群が、皮膚に対して、低密度で接触する。低温時に湿度が低いと、皮膚からの空気中の水蒸気への熱伝導による放熱が少なく、温かく感じる。

皮膚上の水分は、体温によって飛ぶ、すなわち、皮膚から離れて気化する。夏の暑いとき、汗が出て、乾く間もなく、次々と流れて、濡れて湿る。雨が降っているときとか、蒸すときは、水分が皮膚上から飛びにくい、気化しにくいため、乾きにくくなる。

こうした点、ウェットな、湿った状態というのは、液体（水分）が、皮膚上に付いて気化しにくい状態であると言える。

液体の水分がダラダラ皮膚上を流れて乾かない、目の涙がどんどん後から供給されて皮膚上を流れる、涙もろいのはウェットである。

湿度感覚（湿感）は、以下の内容である。
（１）物理的に（皮膚上に）、あるいは心理的に（対人的に）、くっついて飛ばない、一体化して離れないこと。
皮膚上に乗っかって、皮膚上から離れないこと。引き離そうとすると抵抗すること。これが、皮膚上の感覚受容器を引っ張って刺激する。

（１）くっついて飛ばないもの。（涙、汗など。）液体分。それらが次々と供給され、皮膚上からなくならない。
（２）くっつき、かつ流動性がある。固まっていないこと。流れる、動くこと。

それらが同時に成立することで、ウェット感につながること。

夏の太平洋高気圧の蒸し蒸しした、湿気の多い空気が、皮膚上の汗が蒸発しにくく、いつまでも濡れた水分として止まっている状態を作り、ウェットさを生み出す。
空気中の湿度の高さが、感覚的なウェットさを生み出すことにつながっている。

皮膚に付いたのが固体の場合、ギプスのように、皮膚を固定して、動かせない。払ったり、皮膚を動かしたり、剥がすと、落ちること。
乾いたシャツのように、皮膚を動かせる場合もある。シャツの布は、固体だが、柔軟であり、可動である。着ていても体を動かすことができる。その点、体を動かせないギブスやコルセット、甲冑とは異なり、液体に近い。ただし、シャツは乾いた状態では、皮膚にくっつかず、離れている。濡らすことで、初めて皮膚にぴったりくっつくようになること。

液体は、皮膚を動かしても、付着したまま、離れない。皮膚を動かせること。
皮膚上を水滴のように動く、可動性が、固体にはない液体の特徴である。

気体は、皮膚から、自発的に離れる。

粘着面で「貼るカイロ」を皮膚上に貼り付けると、粘着面の与える感じでウェットとなること。

発汗でシャツと皮膚がくっつき、液体の水が間に挟まってシャツが皮膚と連続化するとウェットである。

湿布薬は、ベタベタ皮膚に貼り付いて、くっついていて、皮膚と一体化し、身体の一部になったように感じる。貼ってから時間が経つと、皮膚と区別が付かない。

一方、乾布摩擦は、布が湿っていると、摩擦が起きないため、できない。摩擦が起きるのはドライである証拠であると言える。

濡れた下着や布団が、どのように、濡れている、湿っていると知覚するか？。
乾いているが、皮膚に触れている布団・下着とどのように区別するか？。
温度が体温と同じだと区別しにくい。
ウェットな湯にあふれた湯船につかる場合、体温と湯温が同じだと、湯の存在を感じない。
液体の湯では、気化熱で、体や物の熱が奪われて、冷えるので、気体と区別して、ウェットに感じる。

同じ皮膚にべたべたくっついて離れない接着剤でも、。
セメダインのような接着剤は、溶剤が気化してすぐ乾く。
一方、糊は、なかなか乾かない、保湿的である。

皮膚におけるウェットな湿度感覚は、以下の場合に起きると考えられる。
（１）ある領域内の複数の隣り合う触覚素子が同時に接触を感じたとき。

（２）単一のあるいは複数の素子が継続的に接触を感じたとき。

複数の隣り合う素子が同時に感じるということは、接触してくる相手が高密度、凸凹がなく滑らかであることを示している。

長期にわたって継続的に接触することは、相手が皮膚とくっつくことを示している。

高密度、継続的に接触することが、ウェットさの元になっている。

逆に、低密度で凸凹があり、すぐ離れたり、そもそも接触しないのがドライさの元になっている。

これに加えて、（３）昔から言われてきたstickiness、くっついた物が離れるとき、皮膚を引っ張る感じを、皮膚の素子が捉えたときに、ウェットと感じると言える。逆にさっと引っ張らずに取れるとドライであること。

2005-2010初出

視聴覚等の知覚とドライ・ウェットさ

－同類・異類、連続・離散、低速・高速の視点より－
2005.03-2008.08初出

皮膚以外の感覚でも、対象との心理的距離の知覚とそれに基づくドライ・ウェットさの知覚が存在する。

例えば、同じ色の玉同士は、違う色の玉同士よりも、互いに心理的

に近い存在と認知される。

視聴覚や嗅覚、味覚において、互いに違う色、形状、音、位置、匂い、味の物同士は、心理的に遠く、それゆえドライに感じられ、同じ物同士は、近く、それゆえウェットに感じられる。

要は、人間の知覚で、互いに同類にカテゴライズされる物同士、互いに共通性、同質性が高い物同士は、距離が近く、湿った、ウェットな感覚を引き起こすと考えられる。
あるいは、同じ属性を持った物体〜人間同士は、互いに、同じカテゴリ、内集団に属するとして、心理的距離が近く、一体化して捉えられ、それゆえ、ウェットに感じられる。
一方、違う、異なる属性を持った物体〜人間同士、異類の物同士は、心理的距離が遠く、ドライに感じられる。

同種の玉同士（例えば50円玉硬貨）で、場所が互いに近接した位置にある玉同士は、よりウェットに、互いに離れた位置にある玉同士は、よりドライに感じられると考えられる。

同じ〜似通った色の玉同士は、ウェットに、大きく違う色の玉同士はドライに感じられると考えられる。

同じ〜似通ったサイズの玉同士は、ウェットに、大きく違うサイズの玉同士はドライに感じられると考えられる。

また、互いに連続した、つながったものとして捉えられる物同士（連続物）は、ウェットに感じられ、互いに切り離された物同士（離散物）は、ドライに感じられる。

例えば、色が虹のように連続して変化して見える場合は、ウェットに感じられ、段階的に違う色に途切れる感じで一気にガタッと変わる場合はドライに感じられると考えられる。

あるいは、聴覚の音で、連続音（チャイコフスキーの弦楽セレナードの流麗な弦楽合奏みたいな曲）、連続音程の曲はウェットに感じられ、離散音（プップップッの時報や弦楽器のピチカート演奏とかのように、途切れ途切れの音）はドライに感じると考えられる。

同様に、音で、連続、隣接した音程で次第に流れる場合、あるいは同一音程が続く場合＝連続、同一音程はウェットに感じられ、音程が大きくバラバラに変わる場合＝離散音程はドライに感じると考えられる。例えば、ショスタコーヴィチの「黄金時代」組曲の第3曲目（ポルカ）が、離散音程の曲に当たる。

これは、音の強さでも同様である。強さが少しずつ、前の強さとの連続性を保持しながら変化する場合は、ウェットに、急に大きくなったり、小さくなったりする場合は、ドライに感じると考えられる。

人間によるカテゴリ分けの心理において、「共通・同類＝連続＝近い、くっついた＝ウェット」、「相違、無関連、異類＝離散＝遠い、離れた、バラバラの＝ドライ」という関係が、人間の感覚一般、対象となる物体〜人間一般について生じていると考えられる。

なぜ、そのように感じるかは、人間の神経系において、共通のニューロンの発火をもたらす物体〜人間同士は互いに近く、くっついて、ウェットに感じられ、共通のニューロンの発火をもたらさない物体〜人間同士は遠く離れて、ドライに感じられるしくみがあるためと推定される。

これを人間に当てはめて考えると、互いに似た行動を取る、同じ神経回路、価値観、思考、体験を共有する者同士は、共有しない者よりも、相手と相互作用、コミュニケーションを取った場合に、相手のことがより近く、ウェットに感じられる。

あるいは、思考上、近い概念や意味同士は、互いにウェットな関係にあると考えられる。すなわち、ニューロンの発火伝播上、互いに近い伝播位置上にあるニューロンに対応する概念、意味同士はウェットな関係にある。あるいは、複数のニューロンが同時に発火することで、互いの間に結合関係を作る場合も、それぞれのニューロンに対応する概念、意味同士がウェットな関係にある。この場合、ニューロン同士が、発火伝播上、互いに密接に関係・連絡し合うウェットな関係にあると言える。
上記の他、視聴覚（視覚的な位置、音程等）において、
（１）上、高い物はドライ。下、低い物はウェット。

（２）淡い、低密度の物はドライ。濃い、高密度の物はウェット。
（３）離散量、ディジタルな物はドライ、連続量、アナログな物はウェット。

等の関係が成り立つと考えられる。

これと関連して、ターゲットがはっきり明瞭に、輪郭がくっきりして見える、聞こえるとドライに、ぼんやり不明瞭に霞んで見える、聞こえるとウェットに感じられると考えられる。

知覚面で、ターゲットが、周囲から明確に切り離されて見える、聞こえる場合、ドライと感じられ、切れ目が曖昧で連続してつながっているように見える、聞こえる場合、ウェットと感じられると考えられる。

空に見える月が、冬の晴天とかではっきり明瞭に見えるとドライに、春霞とか曇天でおぼろげに霞んで見えるとウェットに感じられる。

一方、目に見えたり、耳で聞こえたりするターゲットの速度が気体分子同様に高速だとドライに、液体分子同様に低速だとウェットに感じられると考えられる。
高速で飛ぶ弾丸はドライに、低速でゆっくり動くかたつむりはウェットに感じられる。
あるいは、速い曲や演奏はドライに、ゆっくり遅い曲や演奏はウェットに感じられる。

2005-2008初出

対人感覚とドライ・ウェットさ

2005.03-2005.10初出

相手との心理的一体感、抱き合う感じは、ウェットな感じとして捉えられる。
例えば、場の共有ということで、互いに同じ会席で宴会・食事をし、盛り上がると、一体感が感じられる。
あるいは、同じ話題（例えば、アニメ、音楽・・・）で意見や興味が合うと、一体感が感じられる。
基本的にな価値観、互いに思っていることが同じだと、一体感を感じ、結婚とかに踏み切りやすくなる。
心理的距離感は、同じ情報、興味、関心、価値観を持っていると近く感じられる。すなわち、相手と同じ神経回路を共有している、相手も持っていると感じられると、距離が近い、一体だと感じられ、ウェットに感じられる。
あるいは、皮膚の色や顔つきの類似性のように、相手と同じ遺伝子を持っている、共有していると感じられると、相手が近く感じられる。

相手と同じ興味、価値観を持とうとする、相手と興味、関心を合わせようとすることで、心理的距離を縮めようと努力することが、相手と心理的にくっつこうとすることにつながり、ウェットに感じられる。

相手と進行方向、ベクトル、内容がが合う、同じであるという、「合同性」が、相手と距離がない、一体であると感じられることにつながり、ウェットに感じられる。

対人感覚、印象においては、。
（１）相手と意見が同じ、価値観が共通だと分かると、相手と近くなった、くっついた、一体になった、心理的距離が縮まった、
ウェットと感じる。
（２）相手と情報を共有すると、相手と近くなった、ウェットと感じること。

●心理的くっつき感、一体感－心理的対人距離－

○心理的くっつき感、ウェット感はどうやって生まれるか？。

互いが心理的に同一であることの知覚は、。
（１）まず相手とコミュニケーションを取る、開始すること。
（２）互いに自分の心の中の意見を相手に公開する、表出すること。
（３）意見交換をする、話し合ったら、同じ意見、考えについて互いに同時に賛成・反対であること、意見が合うこと、価値観が合うことが分かる。互いに同一・類似の神経回路（促進・抑制シナプス＝価値シナプス）を持っていることを確認すること。
（４）互いに同じであることを前向きに受け入れること。

対象の持つ様々な側面・属性について一つずつ、自分と同一・近いかどうか判定していくこと。同一、近いならくっついているということになり、ウェットとなること。あるいは、魅力ある相手（異性とか）に引かれ、くっつきたいという場合、身分の違いとか、自分とは共通でない属性の相手に惹かれることもある。

あるいは、自分の欲しいもの、所有したいものが、自分にとってウェットな関係にある。ファン、マニアとその対象（アニメ作品のDVDを所有したいマニアとそのDVDとの関係）がそれに当たる。

○どのような行動が、ウェットさに結びつくか？。

（１）物理的に近辺をまとわりつく、学校内とかを一緒に行動する、物理的な一体感があげられる。
（２）口を聞いたり、話す時間や頻度が高い、あるいは、電話を頻繁にかけてきたり、メールを頻繁に送ってくるといったように、互いの心の中の状態や心の動きを相手に伝えるコミュニケーションを頻繁に取ろうとするのがウェットさに結びつく。
その根底には、相手に親近感、一体感、共感を持っている。

コミュニケーション、会話は、相手との、感情や状況のやりとりにより、相手との心理的くっつき感を生じさせる。

以下のような対人関係の進展が、相手と離れない、ウェットと感じられる。
（１）相手が自分に近づいてくる。自分が相手に近づく。物理的接触ないし、電話・メール、直接対面といったコミュニケーションによること。
（２）相手が自分に危害・攻撃を加えない。自分の意思に反することをしないこと。自分にマイナスになることをしないこと。
（３）相手が自分と同じ位置に止まろうとする。同じ位置を共有しよう、し続けようとすること。物理的にいつまでも一緒のところにいようとする。心理的興味・価値空間内の趣味・意見の多次元分布（鉄道が好き、ジャズが嫌い・・・。）の中の心理的位置を共有しようとすること。

（４）相手に愛着し、引き離そうとすると抵抗して、いつまでも離れようとしない。

○どういった時、対人関係にウェット感が生じるか？。
心理的にベタベタくっついて離れないと感じさせる対人関係がウェットである。
心の動きの相手との共有によって、相手との距離が近く、短くなる。これがウェットに感じられる。相手の心の理解や、相手と同じ信条の共有のように相手と同じ神経回路を持つことが、距離を近くする。

相手との親近感は、相手と自分が同じ、同一である、同じ穴のムジナであると感じられたときに起きる。

親近感は、それとは別に、相手は自分とは違うが、惹き付けられる魅力があると感じられたときにも起きる。相手が有能なリーダーであり、相手の下で働きたいとか、相手に付いていきたいと想ったときに起きる。あるいは、性的な魅力に惹き付けられた恋愛でも起きる。

親近感は、相手と一緒にいると心が落ち着くといったように、相手が「良い」性格の持ち主である場合にも起きる。

いずれも親近感を感じた当人には、ウェットな感情を呼び起こす。

○他者との近さは、どのように分類されるか？。

（１）感覚的な近さというのがある。
あの人とは、感覚的にうまが合う、相性がいいというのは、意味カテゴリとは直接結びつかない、感覚的な共通性、距離の近さである。例えば、雰囲気が共通・一緒だとか、同じような服装をしているとかである。そうした感覚的同一性や共感性が、感覚距離の短さに結びつき、ウェットな感じを与える。これは、相手との一体感といった対人感覚の問題である。

（２）意味的な、分類上の近さというのがある。
あの人とは、共通のカテゴリに属する、という場合、例えば、同じ会社で働いているとか、体型が似ているとか、着ている服のデザインが同じであるとかいう場合、それが相手との意味や、概念上の距離の短さに結びつき、ウェットな感じを与える。

○相手とのくっつきを引き起こす誘因にはどのようなのがあるか？。

（１）興味、価値観同一型互いに意見が合うことで相手とくっつく。
（２）フェロモン、魅力振りまき型性的等の誘引力、誘引物質で、あるいは魅力で、相手を自分のもとに集める、一体化させる、くっつかせる、とりこにすること。
（３）利益誘導型互いに相手が自分にとって利益となる。相手を儲かると言って誘うこと。
このうち、（２）（３）は、相手との一体感を持つことが、一時的なものであり、また一体感が何らかの利己的な目標を達成するための道具、手段に過ぎず、終了すればさっさと別れてしまうため、本来はウェットな関係とは呼べない。

○現実の対人関係のうち、例えばどういう関係がウェットか？。

一卵性クローンの双子は、相手が互いに自分自身であり、究極の一体感を持つ。その点、この双子の対人関係は、究極のウェットな関係である。

いつも一緒に行動する友人同士は、互いにいつもくっついているという点、液体的な行動を取っており、ウェットな感覚をもたらす。彼ら友人同士は、いつも一緒に行動するという点で、物理的に近接しており、相手との距離が短い。また、友人同士は、同一の価値観や神経回路を共有しており、意味的なカテゴリ分けの距離が短く、同一意味カテゴリに属している。そういう点で、心理的に接着していること。人と人との距離や仲は、互いの価値観の共有なしにはくっつかない。価値観の共有がウェットな感覚を生み出している。

相思相愛のあつあつのカップルは、相手と同じ価値観を持とうとして、揃いの服や本を持とうとする。互いにべたべたくっつき、抱き合い、手をつなぎ、キスをし、セックスをすること。そのように物理的接触を頻繁に行い、心理的にも一体化する。これは、ウェットに感じられる。

嫌がる相手に無理やりまとわりつくストーカーも、相手にどこまで

も近づきたいというウェットな心情の持ち主である。無限の親密さを相手に求めるウェットな人は、えてして相手につきまとうストーカーになりやすい。

相手と血縁、地縁関係にある場合。（コネがある場合。）親密である場合。彼ら同士も、ウェットである。

○どういうとき、人と人は近づくか？。
人間同士が近づいて、ウェットな関係に入るのは、相手と自分が、同類、共通である場合と、相手が互いに自分にない長所を持っているという相補関係にある場合とがある。あるいは、男女関係のように、遺伝的に互いを吸引する関係に入ることが決まっている場合もある。

○どうすれば相手とウェットな親密な関係に入れるか？

相手との価値観、興味、癖等、行動面での同一性は、より根本的には、その相手との神経回路の同一性に基づくと考えられる。

行動の同一性は、以下に分けられること。
（１）生理的身体の同一性。（これは、同じ遺伝子を持つ、遺伝的同一性に基づく。）
（２）文化的（後天的）同一性。

相手に自分と同じものを見いだす、見出そうとしたり、相手とベクトルを合わせ、距離を縮める方向に持っていく、すなわち、相手と同一になろうとすること。（同一性を実現しようとすること。）それらをするのは、ウェットである。相手と共通の神経回路を持とうとすることが、行動面でのウェットさにつながる。

他人と同じ神経回路を持とうとするのがウェットであり、他人と違う神経回路を持とうとするのが、ドライである。

互いに、趣味や価値観、意見で同じか似た要素、共通の基盤を持っていると、距離が近く、ウェットであり、恋人、友人になりやすい。逆に、こうした共通の基盤を持っていないと恋人、友人にはなりにくい。

恋愛においては、片思いでは、実質的にウェットな関係には入れない。相手が逃げていては、互いにくっつけないからである。片思いしている方は、相手との距離を縮めようとしている分ウェットであるが、想われている方は何とも思っていないので、ドライなままである。
両思いとなることで、互いにくっつくので、初めてウェットになること。

●感動・情動

相手との心理的一体感は、感動とか情緒で感じられる。
対人関係でウェットさを感じるのは（対人的な湿り気の知覚は。）、神経系ではどのような仕組みで感じられているか、神経系の機能地図の中のどの部位で感じるか、を明らかにする必要がある。ウェット感を感じると活性化される神経系の部位は、皮膚でウェットと感じる時活性化するのと共通の部位だと考えられる。

対人関係におけるウェット感の発生には、恐らく情動系が絡んでいる。
涙が出るとか、感動するとか、心を動かされるといった感覚は、ウェットである。情動、感情を表出すると、ウェットと感じられること。
涙もろい、同情・共感しやすい人は、ウェットであると感じられる。同情、共感すると涙が出る。
感動しない、心を動かさない、涙を流さないのは、冷たいと同時に、ドライである。

感動には、虹や滝のような美しい自然物や景色、物体を見て感動す

る場合（対物感動）と、実写映画やアニメなどに登場する人間の行動に感動する場合（対人感動）とに分けられること。
このうち対人感動が、ウェットな感覚を生み出す。一方、対物感動は、すっとした、爽やかなドライな感覚を伴う場合もあり、対人感動とは異質である。

対人感動は、対人関係（実際に人と会うだけでなく、人物が活躍する映像記録を見る場合も含む。）で生まれること。
対人的に、他人とくっつく、一体感を感じるときに、感情、情動が生じる。また、親密だった他人から関係を切られてショックを受けたとき（失恋等、他人との一体感の喪失時）にも、（主にネガティブなこと。）感情、情動が生じる。
心の奥底で感動すると、心を揺り動かされると、他人と心理的に一体感を持ったときと同じ感覚が起きる。
他人の言動に感動すると、目頭が、心が熱くなり、涙が出る。対象に心の底から「共感」したとき、感動すること。思いがけず、予想外に共感したとき、意外性が、心の動き（動揺）を生み出すこと。

共感できたというウェットな感じを持つのは、対象に、強い一体感、自分と同じだという感じ、同質感を持ったときである。
共感、一体感を感じる器官、神経系内の受容器が、対人乾湿感覚器である。

感動は、共感＋動揺である。
動揺は、以下から成ること。
（１）意外感（斬新性）
（２）振幅の大きさ（刺激の強さ）

意外性のない、定石どおりの展開でも、感情面に与える振幅が大きいと、それなりに感動する。
感動で、ウェットな感じの起きる原因は、共感にある。
相手との心理的接触、コミュニケーションは、。
（１）単にビジネス上の情報を交換するだけでは、表面的な付き合いに過ぎず、ウェットではないこと。（ドライであること。）
（２）心の表層の当たり障りのない知識を伝えるだけでなく、深層の心の奥深くの感情や情動を相手に包み隠さず伝えるのがウェットである。

心の奥底で感動する、感情を出すのが、ウェットであり、感情がない、感動しない、冷静であるのがドライである。
アニメとかの登場人物へ共感する、一体感を持つ、感心するのがウェットであり、そうしたものがないのが、ドライである。

●好き嫌い

情動的・感情的な好き嫌いは、相手に関心があることを示す。「嫌い」というのは、相手とは離れる関係にあるにも関わらず、実際にはウェットな感情を呼び起こす。例えば、ネチネチしつこく嫌がらせをするとか、悪意をもってつきまとうとかいったように、相手を突き放して冷静になって見ることができず、視点の接近や関心の一体性が見られる点、ウェットである。ドロドロとした愛憎劇といった表現をする場合、それは、相手を憎む気持ちが、相手とすっきり離れたドライな関係とは対極のウェットな感じをもたらすことを示している。相手とプラスの一体感を持つ「愛」と、マイナスの一体感を持つ「憎悪」とは、相手を突き放して客観的に見ることができない点、両方ともウェットである。

対象を、客観的に、自分から突き放して冷静に見ることは、対象から離れることにつながり、ドライである。
一方、対象を、主情的・主観的にしか見ることができない、心の奥底の情動が働いて気持ちが動転して対象を突き放して捉えることができない場合は、対象を突き放せずくっつくことになり、ウェットである。

対象を突き放して客観的に捉えられない場合には、対象が嫌いな場合も含まれる。嫌いという感情も、対象に関心が向いている、のめり込んでいる点では、好きな感情と共通であり、ウェットである。ドライなのは、無関心な、冷淡な場合である。

2005-2006初出

対物湿度感覚と対人湿度感覚の共通性

2005.03-2005.10初出

本文では、乾湿（ドライ・ウェット）の次元において、物体知覚と、対人知覚とが「＝」であることを明らかにする。
物体接触のドライ・ウェット感覚と、対人接触のドライ・ウェット感覚とが共通のメカニズムで起きていることを明らかにする。

人と出会ったり、コミュニケーションを取ったときの対人印象・感覚（ドライ・ウェット）の知覚は、肌での触覚による知覚が起きたときと、神経系内で、感覚野の共通の同じ領域を活性化させるため、同様に、ドライ・ウェットと感じられると考えられる。

これは、ドライ・ウェットの乾湿感覚に限ったことでなく、明暗、温冷感覚の知覚についても、対人感覚の知覚と、目、耳、肌の感覚受容器による知覚とで、神経系の同じ部位が刺激され発火するため、共通に、明暗、温冷と捉えられると考えられる。

皮膚、対人関係共通な乾湿知覚は、以下の通りである。
粒子は、皮膚の場合、気体・液体分子、対人関係の場合、他者である。

表 10

では、なぜ、神経系の同じ部位が活性化するのか、皮膚感覚と対人感覚の共通性を探る必要がある。液体の与える皮膚感覚（湿った感覚）、気体の与える皮膚感覚（乾いた感覚）、すなわち、気湿と、個人が他人に与える対人感覚であるドライさ、ウェットさとの相関関係を明らかにする必要がある。

その際、例えば、対人関係を図示したソシオグラムや対人相関図のような図では、。
・人と人が、互いに愛着し合い、惹かれ合い、くっつき続ける人間関係。（友人関係など。）その場合、粒子（人）同士がくっつき合い、互いの心理的距離が最小化する図で表現する。この図は、液体分子同士がくっつき合うのと同じ図式表現となる。この関係は、ウェットに感じられる。

・人と人が、互いに冷淡で、無関心な、すぐ切れる人間関係の場合、粒子（人）同士が離れた、互いの心理的距離が縮まらない図で表現する。この図は、気体分子の動きと同じ図式表現となる。この関係は、ドライに感じられる。

気体・液体分子運動図と、ドライ・ウェットな対人関係を図示した対人行動図ないしソシオグラムは、絵が共通である。ソシオグラムで個人を表す粒子が、他人（他人相当の粒子）にベタベタくっつき、まとわりついて離れない様は、互いにくっついて離れない液体分子の粒子と同じように表すことができる。両者は、共通にウェットと感じられる。

逆に、ソシオグラムの個人を表す粒子が、他人（他人相当の粒子）と無関係に、互いに離れて独立に動き回る様は、気体分子の粒子と同じように表すことができる。両者は共通にドライと感じられる。このことは、感覚のドライ・ウェットさで、皮膚知覚レベルと、対人関係レベルとをつなぐ手がかりになる。

気体・液体分子運動図を見せて、素知らぬ顔で「これは、対人行動図ないしソシオグラムです。この人間関係は、ドライですか、ウェットですか？」と聞けば、回答者は、それが本当に各個人の行動、人間関係を描いた図だと思い込んで、回答すると考えられる。そして、皮膚にドライな感覚を与える気体の図については、「この人間関係はドライですね」と答え、皮膚にウェットな感覚を与える液体の図については、「この人間関係はウェットですね」と真顔で回答すると考えられる。

（注:上記について、実際にwebサイトで、気体・液体の分子運動のビデオを、「これは、人々の行動を早送りで表示したものです」とウソをついて見せて、「どの程度ドライ、ウェットと感じられますか？」と質問したところ、気体分子運動はドライ、液体分子運動はウェットと、有意差をもって感じられるという回答を得た。）

分子運動図を、ソシオグラム図に置き換える際には、。
（１）分子の動きから、人の動きに置き換えること。
（２）皮膚感覚から、より内面的な心の奥の感覚へ置き換えること。
（３）物理的な動きから、「相手に近づきたい」という心の動きに、置き換えること。
といった点に留意する必要がある。

ソシオグラムで人と人とが互いに心理的に近づいている、くっつく、接近している、親近感を持っていることは、皮膚感覚では捉えきれない。
ドライ・ウェットさの知覚は、皮膚という表面レベル（表層）と、対人情動の発生という奥底のレベル（深層）に分かれること。

人間が、人づきあいの中で、以下の内容に当たる（接触する）と、心の内部でウェットに感じられる。
液体分子運動パターンの人間関係。（互いにくっつき一体化して離れない、一緒に動くこと。）
人間が、人づきあいの中で、以下の内容に当たる（接触する）と、心の内部でドライに感じられる。
気体分子運動パターンの人間関係。（互いにバラバラに離れて、別々に動き回ること。）

ドライ・ウェットな湿度知覚は、より詳細には、皮膚知覚、心理的な対人距離知覚、意味距離知覚、情動・感情体験といった、異なるモードに分けられる。それぞれのモードで、共通に、「くっつく、同一化する、一体化する、離れない」かつ「可動性、流動性がある」という共通の（ドライ・ウェットなこと。）湿度感覚が生み出される。

皮膚感覚知覚においては、分子が皮膚に接着し、蒸発しない場合に、「くっついた、離れない、一体化した」と感じられ、かつ、皮膚を動かすのに伴って、分子が自分も皮膚上を動く場合に「可動性、流動性がある」と感じられる。これがウェットな感覚の元となる。

対人距離知覚においては、個人が他者のもとにベタベタ甘えて、なつき、まとわりつく行動を取ることで、対人距離が最小になること、あるいは、物理距離的に離れていても、同じ価値観を共有する同士であることが、当の個人の動きが「くっつく、同一化する、一体化する、離れない」と互いに感じられる。かつ、生き物としての人間として「可動性、流動性がある」と感じられる。これらは、ウェットな感覚の元となる。

意味距離知覚では、神経系内では、意味や概念、内容が同じ、近いもの同士、連想するもの同士は、距離が短い、くっついていると感じられる。互いに距離が短く、一体化しているので、同一脳内神経カテゴリとして、互いにニューロン同士が連結しあっているとして、ひとくくりにまとめて同一化して捉えることができ、ウェットな感覚の元となる。

対人情動・感情体験においては、相手に対する関心（好き嫌い）の強さ、相手への同情、愛情（あるいは裏返しの憎悪）、共感、感動といった体験が、「（相手に対して）くっつく、同一化する、一体化する、離れない」と感じられ、ウェットな感覚の元となること。

以上のそれぞれ異なるモードに共通する「くっつく、同一化する、

一体化する、離れない」かつ「可動性、流動性がある」といった性質は、いずれも液体（液体分子）の持つ性質であり、そういう点で、「ウェット」とは「液体的」ということができる。

一体感、同一感、接着感、共感は、湿ったウェットな感じを与える。
一体感、接着感が、ウェットな感じの、皮膚と対人関係で共通な核心である。
相手と神経回路が共通である、同じものを共有していると感じられることが、ウェット感につながる。
あるいは、互いにベクトルが合って同じ方向に進み、接近するのは、人でも物でも共通な、ウェットな（湿ったこと。）感覚の原型であること。一方、互いにベクトル合わず、無関係な方向に進むのが、ドライな（乾いたこと。）感覚の原型であること。

乾湿、温冷、硬軟といった感覚は、皮膚感覚以外に、対人感覚でも生じるのであり、それぞれ、体内の異なる感覚受容器に対応していると考えられる。
相手との心理的距離が近づき、心理的に一体で離れないことを知覚すると、ウェットに感じる。神経系内で、他者との心理的一体感を知覚するところが、対人乾湿感覚受容器であること。心理的一体感＝ウェット感は、相手と自分との間に共通部分が増えると、ウェットと感じる。対人感覚受容器は、相手との共通性の高さを知覚する。
皮膚感覚受容器では、刺激されると、くっついた、離れたと感じる。物がくっついた、離れたの判定を行う。触覚で、皮膚にくっついて離れない、持続的に何かが触れている、かつ移動すると感じると、湿った、ウェットと感じられる。

対人感覚受容器では、神経系のどこかに、皮膚のように体外の外界に直接触れない内部に、感覚受容器がある。自分に近づく、くっつく、一体だと湿った、ウェットと感じられること。

皮膚感覚と対人感覚とは、皮膚と心の奥底の、異なる感覚モードを超えた、共通の感覚として、同じ「湿った」という言葉で捉えられる。モードは違うが、神経系の内部の、乾湿感覚に関わる共通の神

経回路を活性化させる。
対象が、自分と「くっついた」「離れた」（離合）を判定する、乾湿判定回路の活性化が起きる。

乾湿判定回路は、。
（１）皮膚、触覚皮膚にくっついて触ったまま離れないと「湿った」、皮膚に一時的に触ってすぐ離れると「乾いた」と判定すること。
（２）視覚（目）自分の子供のように、いつも自分のそばにいて離れない、まとわりつく、甘えることが目で見て分かるとウェットに感じる。
（３）心の奥底（対人）周りの意見に同調したり、電話で親密な対話を交わしたりして、他者と心理的に近接したり、感動したと知覚すると、ウェットに感じること。
（４）温度感覚との関連では、自分に触れてくる相手の身体の温かさを知覚するとウェット、感じないとドライに感じる。

「あの人とあの人は、仲良しだ、親密だ」とか、「恋愛で誰と誰とがくっついた」みたいに、対人関係においても、親「近」感とか疎「遠」、「あの人とお近づきになる」といった表現が存在することで、対人的にも遠近感が成り立っていることが分かる。一方、互いに皮膚で触れ合うことは、それだけ互いに接触するほど距離が近いことを示している。

人間が脳の中に作る、テレビドラマやアニメの登場人物間の相関図に表されるような「対人関係地図」上の人と人との近さ、距離感が、対人関係上の遠近感に直結する。

この点、対人距離感覚と皮膚感覚とは、脳の中で、距離の近さを知覚する領域を共通に活性化していると言える。距離感覚と、ドライ・ウェットさの感覚とは、互いに、「距離が離れた、遠い＝ドライ」「距離が近い、くっついた＝ウェット」という相関によって、大きく関係していると言える。

こうした場合、心理的な距離が近い、親密なウェットな仲の人同士は、出会えば、あるいは自由に放っておけば、自然の成行で、物理的に一緒にくっついて行動する、一体化、密着して行動したがると言える。（例えば、濃厚なキスやセックスをしょっちゅう繰り返す恋人同士など。）

というか、本来、人間には、相手と、物理的にずっと一緒に、くっついて、一体化していたいという物理的近接への欲求がまず存在するが、互いに別々の生命として生きていく以上、ずっとどこ行くのも一緒という訳にも行かないから、やむを得ず時々離れ離れになる。しかし、その間も、相手のことを絶えず思っていて、できればまた物理的に一緒になりたい、くっつきたいと思う。そうした、物理的近接が叶わない状態での相手への想像上の疑似近接、物理的近接の心理的シミュレーションが「心理的近接」として現れると考えられる。

要するに、物理的近接と心理的近接は互いに大きく関係しており、本来なら、物理的に互いにずっと近接して、一緒にいたいけれど、用事ややむを得ない事情で離れ離れになっている人々が、「自分たちは、現状では、やむを得ず離れ離れなんだけれども、本当は、ずっと物理的に一緒にくっついて、一体化していたいんだ」という思いを、「心理的近接」という言葉で、物理的近接の不足を補償するものとして、用いていると考えられる。

あるいは、相手への物理的近接を実現しようという欲求、動因が、心理的近接であるとも言える。

その点、物理的な相互の近接、密着の実現という「物理的近接」がメインであり、「心理的近接」はその不足を補うサブの役回りにあると考えられる。「あの人と（心理的に）お近づきになりたい」というとき、当人は、相手と、本当は物理的にずっとくっついていたい、触れ合っていたいのである。

相手と一緒にいるのが楽しいとか、一緒にいると心が安らかになるとか、相手との物理的近接を望む心理的原因にはいろいろなものが考えられるが、それらが、人の心にウェットさをもたらしているのだということになる。あるいは、自分と相手とが同質であると思う

ほど、互いに物理的にくっついて一体化しても違和感がないというウェットな感じが生まれる。

一方、相手が皮膚に触る、愛撫する、くっつくというのは、言うまでもなく、相手が皮膚に近接、密着している＝物理的に近接していることを表している。

こうした点、皮膚の湿度感覚と、対人湿度感覚は、互いに、以下のようにまとめられる。「対象の自分への物理的近接、一体化。その指向。そのことの知覚。」
それらは、共通に、「物理的近接（への指向）＝ウェット（湿ったこと。）」「物理的遠隔（への指向）＝ドライ（乾いたこと。）」として一括りにして捉えることができる。

ソシオグラムないし対人関係相関図等における人間粒子同士の対人関係上の遠近は、その根底に、粒子（人間）同士の物理的な遠近への指向を内蔵している点、気体・液体分子運動のような物理的な粒子（分子）同士の遠近と、本質的に同一であると言えること。

それゆえ、人間の行動も、分子運動も、共通に、「気体的＝粒子の（物理的なこと。）相互遠隔化＝ドライ」「液体的＝粒子の（物理的なこと。）相互近接化＝ウェット」という、物理的な共通のパターンで表すことができると言える。

ここで、通勤用満員電車の乗客たちのように、物理的にやむを得ず近接、密着していること。（ウェットさ。）それが、心理的にはお互い無関係で、本当はできるだけ離れていたいというドライな欲求を持っている場合も考えられる。

この場合、満員電車の乗客は、通勤先の最寄り駅に到着して電車のドアが開くや否や、電車から一斉に飛び出してバラバラに散らばっていく。要するに、やむを得ない理由で一時的に物理的に近接しても、最終的に、電車車両という拘束を解かれる（自由に放任される）と、自発的に物理的に分散し、遠ざかっていくこと。

満員電車の乗客は、互いに皮膚と皮膚が触れ合う状態にあり、その点ではウェットなのであるが、それは彼らにとって一時的なやむを得ない現象である。乗客たちは心の中では肌と肌が触れ合う状態を

不快に思い、その状態が続くことを望んでいない。

肌と肌が触れ合うウェットさ。（物理的近接。）それは、生計を立てるために勤務先に行くのに必要な強制されたウェットさであり、彼らは本心では物理的遠隔を指向しており、ドライなのである。それゆえ、目的地の駅に到着して、行動の自由を獲得すると、彼らは互いにバラバラに離れていく。

電車乗客は、根底に相互の物理的遠隔への指向を持っている。こうした周囲他者とのドライな物理的遠隔を実現しようという欲求、動因が、心理的遠隔（ないし心理的疎遠）であると言えること。

もしも、勤務先オフィスビルが都心に集中しているため、そこに定時に一斉に向かわざるを得ないという、現実の束縛から仮に自由に解き放たれたら（テレコミューティング、フレックスタイム通勤が実現したら。）、乗客たちは、もはや満員電車に一斉に乗らないで、バラバラな目的地へと互いに離れて好きな時間に通勤するであろう。

結局、自由に放っておかれた時。（自由な行動を許された時。）あるいは、現実の人々の行動を束縛する条件（経済的、身体的・・・）が解消されたと仮定した時。人々に本心の発露が許可されたと仮定した時。人々が互いに物理的に近づくか遠ざかるか、どちらの行動をとろうとするかによって、その人が、本当はドライな性格（物理的遠隔への指向を持つこと。）か、ウェットな性格（物理的近接への指向を持つこと。）か、どちらなのかが初めて見えてくると言える。

このように、心理的遠隔・近接（ドライさ・ウェットさ）を、物理的な遠隔・近接状態実現への欲求・動機付けと捉えることによって、対人関係上のドライさ（疎遠になること。）・ウェットさ（親密になること。）と、物理空間上でのドライさ（遠ざかること。）・ウェットさ（近づくこと。）とを互いに結びつけることができる。

自由に放任された状態。（自由行動を許可された、自主判断、自由意思による行動が可能な状態。）そこでは、対人関係的に疎遠なドライな関係にある人は、そのままでは物理的に近づこうとしない

し、心理的に親密なウェットな関係にある人は、自ずと互いに物理的に近づき、くっつき、一体化するということになる。

物理的な遠隔・近接は、それぞれ皮膚感覚に、非接触、離反によるドライさ、接触、密着によるウェットさを与える。

以上より、対人関係上の遠隔（ドライさ）・近接（ウェットさ）は、人々に自由意思による行動を許可した条件下では互いの物理的な遠隔（ドライさ）・近接（ウェットさ）をもたらす。それが、皮膚に対して以下の感覚を与えること。離れたこと。（ドライさ）接触し密着したこと。（ウェットさ。）そうした、相互連関があること。それが分かる。一見互いに無関係な、対人関係のドライ・ウェットさと、皮膚感覚のドライ・ウェットさとは、単なる比喩としての関係ではなく、実はこのような形で密接につながっているのである。

(c)2005初出

ドライな、ウェットなパーソナリティと行動速度、方向との関係について

2008.03初出

人間のパーソナリティ、性格のドライさ、ウェットさと、人間の行動速度、行動方向との関連について、詳細に検証してみましたこと。行動が気体分子運動相当の、高速で離れるとドライに、液体分子運動相当の、低速で近づくとウェットに、それぞれ感じられることが分かりました。これは人間だけでなく、物体、物質一般に共通に成り立つと考えられます。

気体、液体分子運動パターンのどのような点がパーソナリティとしてドライ、ウェットに感じられているかを明らかにするため、webでの調査を行った。粒子の運動速度（低速、高速）、方向（近づく、離れること。）を変化させたムービー4種類を研究参加者207名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動としてどの程度ドライ、ウェットに感じられるかを評価してもらった。その結果、ムービー上の各粒子を個人に見立てた場合、個人が他者から離れるとドライ、近づくとウェットなパーソナリティと認知されることが分かった。また、個人が高速で動くとドライ、低速で動くとウェットなパーソナリティと認知されることが分かった。

「問題と目的」

最近、人間のパーソナリティのドライさ、ウェットさと物理的な気体、液体分子運動パターンとの間に関連があることが明らかにされている。大塚（2008）では、物理的気体が人間にドライな感覚を与え、液体がウェットな感覚を与えることに着目し、気体分子運動のシミュレーションを人間の動きに見立てて観察させた場合、各分子の動きが人間に見立てるとドライなパーソナリティと認知され、一方、液体分子運動における各分子の動きは人間に見立てるとウェットなパーソナリティと認知されることを、アンケート調査によって確認している。すなわち、気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティはドライに、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人ではウェットに感じられることを確認している。

しかし、そうした気体、液体分子運動パターンのどのような点が人間のパーソナリティとしてドライ、ウェットに感じられているかは、まだ明らかにされていない。

物理学辞典編集委員会（1992）によれば、気体分子は、大きな運動エネルギーを持っているため、各分子が互いに及ぼし合う引力（分子間力）を振り切って自由に飛び回り、容器に閉じ込めておかないと体積がいくらでも膨張してしまう。これに対して、液体分子で

は、分子の間に相互に引力（分子間力）が働いており、体積を一定に保ちつつ自由に形を変えて運動する、とされている。

あるいは、池内（2002）の作成した気体、液体分子運動シミュレーションでは、気体では、各分子が、高速に、互いに一つ一つ独立して離れて個別にバラバラに自由に飛び回るのに対して、液体では、各分子が互いにくっつき寄せ集まって、一まとまりに集団を作り、低速でゆっくり動く様子が見て取れる。

上記から、気体分子と液体分子とでは、動きの面で少なくとも以下の点が異なると考えられる。

（１）運動速度が違う。分子の運動エネルギーは、気体分子で大きく、液体分子で小さい。運動エネルギーは、分子の質量と速度の積で表され、仮に各分子の質量を条件統一のために一定に揃えた場合、気体分子は高速であり、液体分子は低速である。

（２）運動方向が違う。分子相互の間を引き付け、近づける働きを持つ引力（分子間力）は、気体分子ではほとんど働かない。そのため、気体分子は互いにバラバラに離れて拡散する。その結果、気体は体積が膨張する。
これに対して、液体分子は、相互の間に引力（分子間力）が働くため、互いに近づいて、拡散しない。その結果、液体の体積は一定に止まり、自由に変形するが膨張はしない。まとめると、運動方向では、気体分子は互いに離れる方向に動くのに対して、液体分子は互いに近づく方向に動く。

この気体分子と液体分子の動きの違いが、人間におけるドライな、ウェットなパーソナリティの違いと仮に関連があるとするならば、人間のパーソナリティとしては以下のことが考えられる。

（１）行動速度の面では、気体分子のように高速で行動するのを好む人は、ドライなパーソナリティの持ち主と感じられる。一方、液体分子のように低速で行動するのを好む人は、ウェットなパーソナリティの持ち主と感じられる。

（２）行動方向の面では、気体分子のように互いに離れるのを好む人は、ドライなパーソナリティの持ち主と感じられる。一方、液体

分子のように互いに近づくのを好む人は、ウェットなパーソナリティの持ち主と感じられる。
上記の考えを表にまとめると、Table1のようになること。

この考えが正しければ、人間のドライな、ウェットなパーソナリティは、少なくとも、行動速度（高速－低速）と行動方向（離れること。－近づくこと。）の二つの要因によって説明でき、人が高速で動き、互いに離れるとそのパーソナリティがドライに感じられ、低速で動き、互いに近づくとウェットに感じられる可能性がある。

そこで、この考えが正しいかどうかを確認するために、実際に研究参加者に、粒子の速度と運動方向を調節した粒子運動シミュレーションムービーを見せて、粒子の動きを人の動きと見立てた場合それぞれどの程度ドライ、ウェットと感じるか調べることにした。

分析手続きとしては、行動速度（低速－高速）、行動方向（近づくこと。－離れること。）、湿度（ウェットードライ）の3要因による分散分析を行うことにし、そのための調査データを収集することにしたこと。

行動速度（低速－高速）、行動方向（近づくこと。－離れること。）について別々に調査を行うのではなく、調査の条件として組み合わせることにしたのは、行動速度（低速－高速）、行動方向（近づくこと。－離れること。）の相互の間の影響、交互作用が存在しないかどうか確認するためである。

実験計画としては、3要因被験者内計画を採用した。被験者内計画を採用したのは、同一の研究参加者内で異なる条件間のデータの差を互いに効果的に比較できるようにするためである。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

ドライ・イメージ、ウェット・イメージ

－色彩と密度の視点より－

2008.08初出

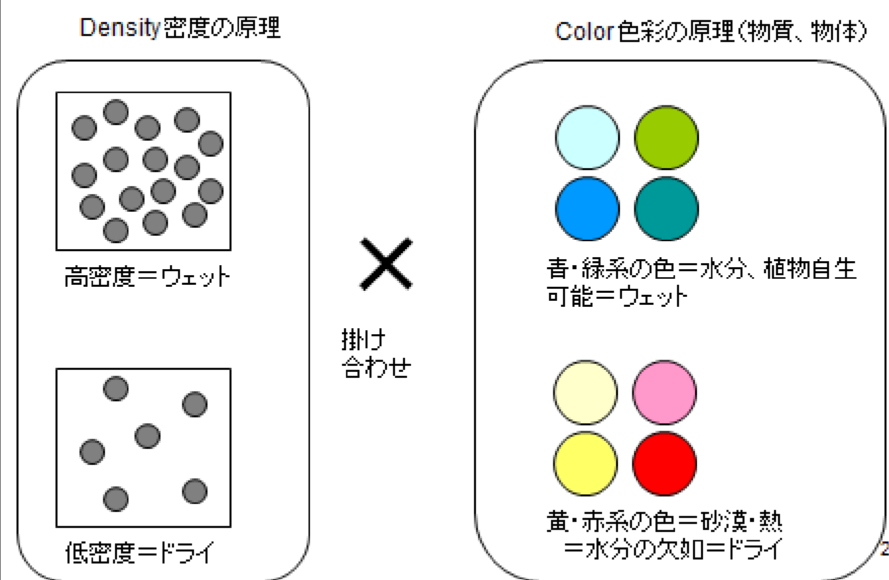
物体、物資は、その色や密度の違いによって、ドライ、ウェットにそれぞれ見えます。どのような場合にドライ、ウェットに見えるか、イメージの違いをまとめてみましたこと。また、人の性格の場合との相違について、一部触れていますこと。

ドライ・イメージ
ウェット・イメージ

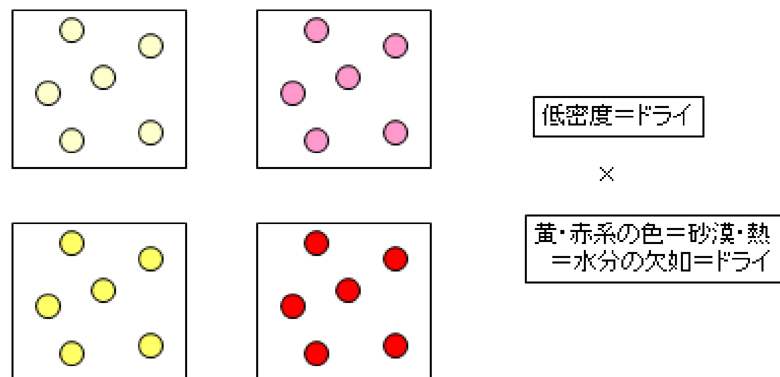
2008年8月
大塚いわお

1

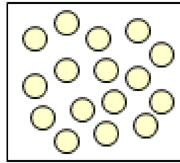
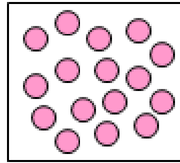
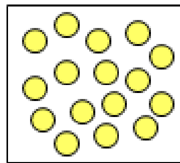
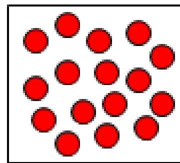
ドライ・イメージ、ウェット・イメージ原理（物質・物体）



ドライ・イメージ（物質・物体）



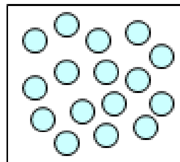
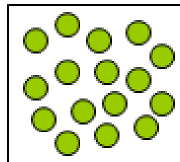
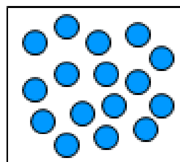
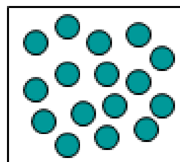
ドライ・イメージ（物質・物体）　対立仮説

黄・赤系の色＝砂漠・熱
＝水分の欠如＝ドライ

高密度な方が、乾燥感、
灼熱感が、より視覚的
に強調されることになり、
低密度に比べてドライさ
が向上する？

ウェット・イメージ（物質・物体）

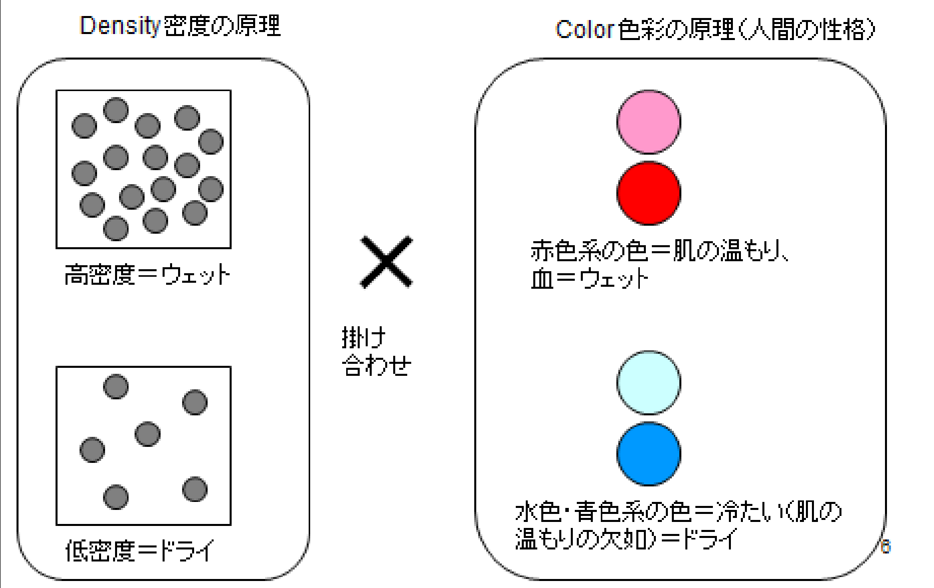





高密度＝ウェット

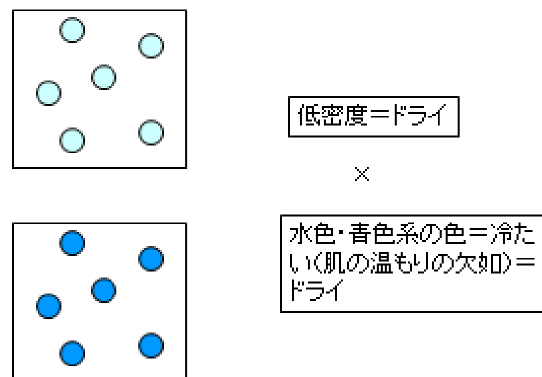
×

青・緑系の色＝水分＝ウェット

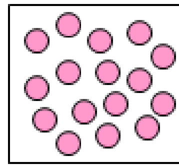
ドライ・イメージ、ウェット・イメージ原理（人間の性格）



ドライ・イメージ（人間の性格）

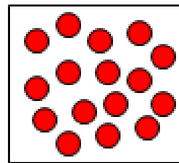


ウェット・イメージ（人間の性格）



高密度＝ウェット

×



赤色系の色＝肌の温もり、血＝ウェット

8

物体、物資は、その色や密度の違いによって、ドライ、ウェットにそれぞれ見える。

物体、物資が、低密度で、黄色、赤色系統の色の場合、ドライに乾いて感じられる、ドライ・イメージとして捉えられる。
低密度だと、気体分子群同様、分布する点々の間が開くため、ドライに感じられる。
また、黄色は、水のない砂漠や、水を蒸発させ、乾燥させる太陽光を連想させ、赤色は、水を蒸発させ、乾燥させる熱、太陽光を連想させるため、ドライに感じられる。
ただし、ドライ・イメージに関しては、黄色、赤色系統の色で、高密度な方が、乾燥感、灼熱感が、より視覚的に強調されることになり、低密度に比べてドライさが向上する、というような対立した考え方を取ることも可能である。

一方、物体、物資が、高密度で、水色～青色、緑色系統の色の場

合、ウェットに湿って感じられる、ウェット・イメージとして捉えられる。
高密度だと、液体分子群同様、分布する点々が互いに近づくため、ウェットに感じられる。
また、水色～青色は、液体の水を連想させるため、緑色は、水分のあるところに生える植物の葉の色を連想させ、それゆえ水の存在を連想させるため、ウェットに感じられる。

一方、人間の性格としては、。
・低密度で水色～青色なのが、ドライと感じられ、ドライ・イメージとして捉えられる。
これは、低密度だと、人と人との間に隙間が空き、他者の温かな体温を肌に感じることができず、冷たい隙間風を感じるためと考えられる。
また水色～青色がドライなのは、水色～青色が冷たい水を連想し、他者の温かな体温を肌に感じることができず、冷たい感じを持つためと考えられる。

・高密度で赤色なのが、ウェットと感じられ、ウェット・イメージとして捉えられる。
これは、高密度だと、人と人との間が密接し、他者の温かな体温を肌に感じることができるためと考えられる。
また赤色がウェットなのは、赤色が他者の血や温かな体温を連想し、他者の温かな体温を肌に感じることができ、他者の血の通った状態を身近に感じることができるためと考えられる。

こうして見てくると、物資、物体と、人間の性格においては、色に関して、ドライさ、ウェットさのイメージの逆転が起きていることが考えられる。
物資、物体では、赤色はドライなのに対して、人間の性格ではウェットである。
物資、物体では、水色～青色はウェットなのに対して、人間の性格ではドライである。

動画の場合は、速度で、高速だとドライに感じられ、低速だとウェットに感じられるので、。

動画によるドライ・イメージ、ウェット・イメージの表現は、。

物質、物体の場合は、。
・低密度（互いに離れること。）
・高密度（互いに近づくこと。）

人間の性格の場合は、。
・低密度（互いに離れること。）
・高密度（互いに近づくこと。）

となると考えられること。

2005-2008初出

【性格、態度について】

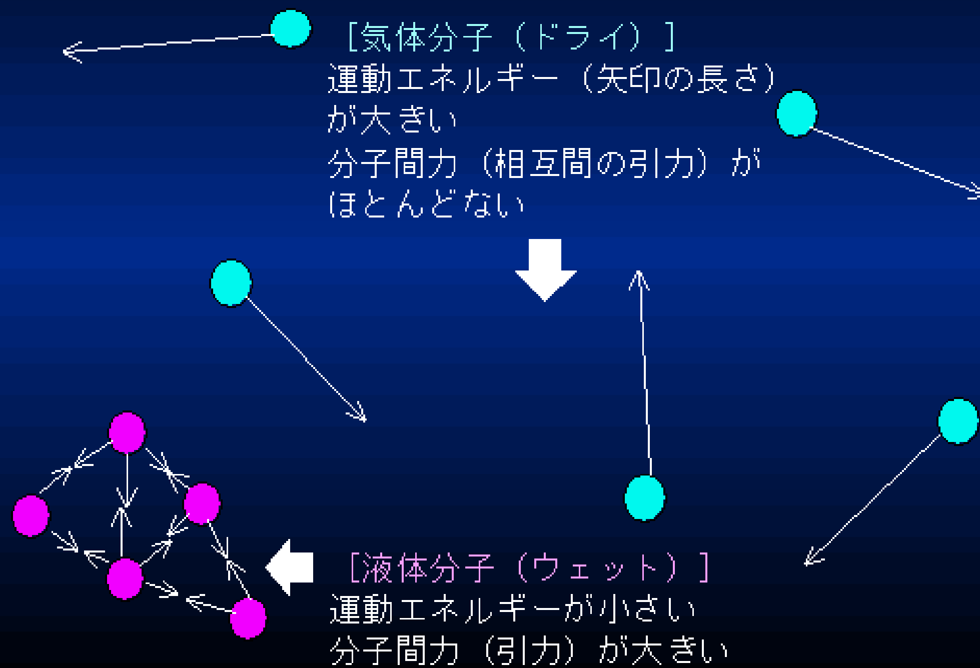
ドライ・ウェットな行動様式について－ＯＨＰ図

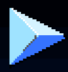
(c)1999.9-2003.5初出

ドライ・ウェットな行動様式について

- ドライな個体(気体分子的)
- ウェットな個体(液体分子的)

1999.9-2003.5 大塚いわお


液体分子 vs 気体分子
［気体分子（ドライ）］
運動エネルギー（矢印の長さ）
が大きい
分子間力（相互間の引力）が
ほとんどない
［液体分子（ウェット）］
運動エネルギーが小さい
分子間力（引力）が大きい



（参考）引力（引き合う力）

［ドライ］



引力→小





近づかない
くっつかない

［ウェット］

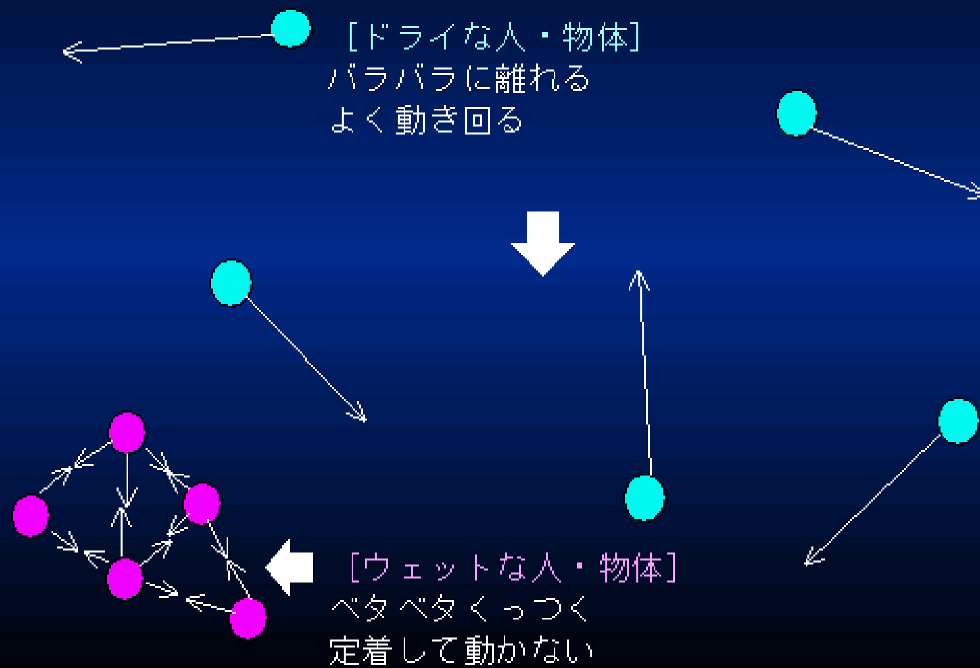


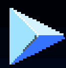
引力→大





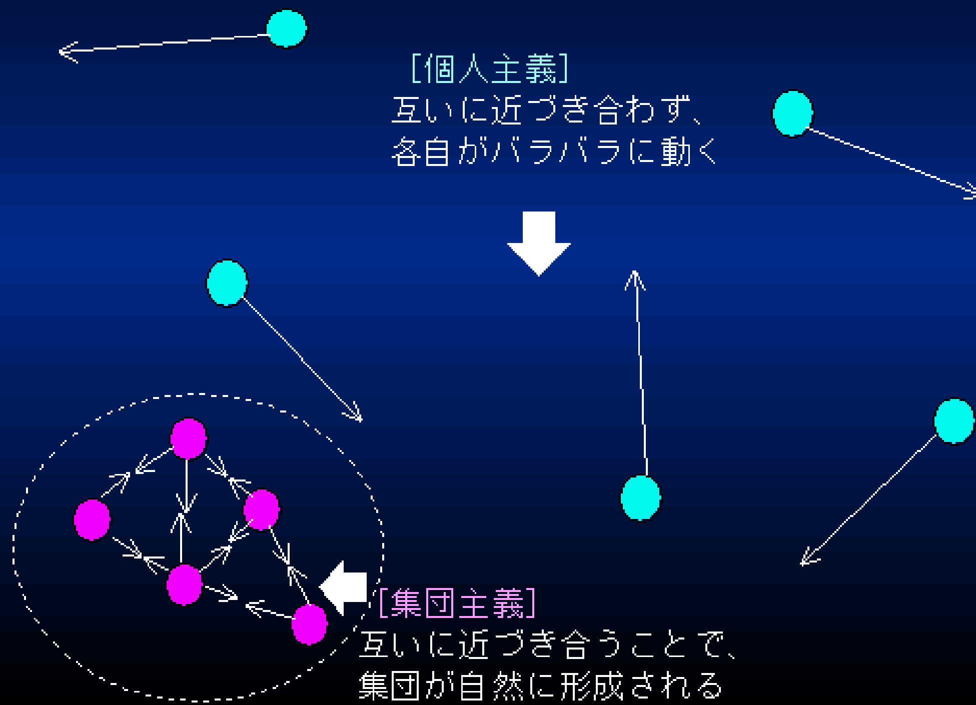
近づく
くっつく

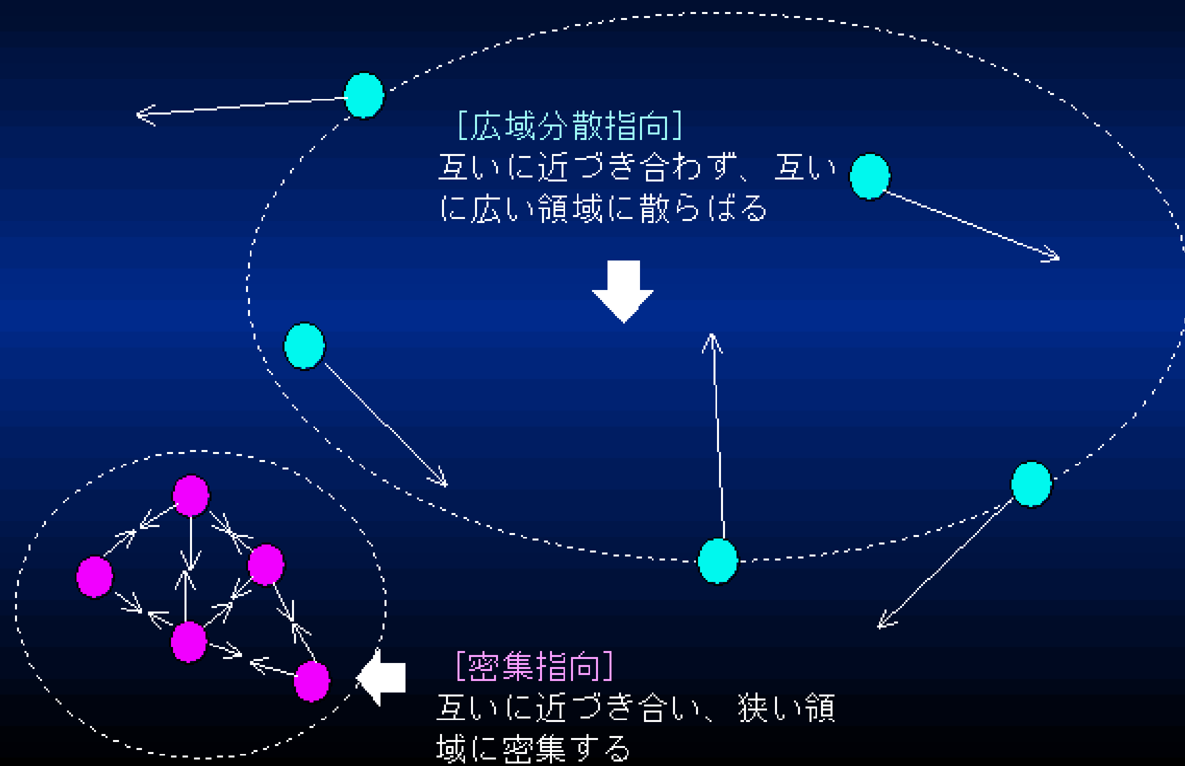

ウェットvsドライな人・物体
［ドライな人・物体］
バラバラに離れる
よく動き回る
［ウェットな人・物体］
ベタベタくっつく
定着して動かない

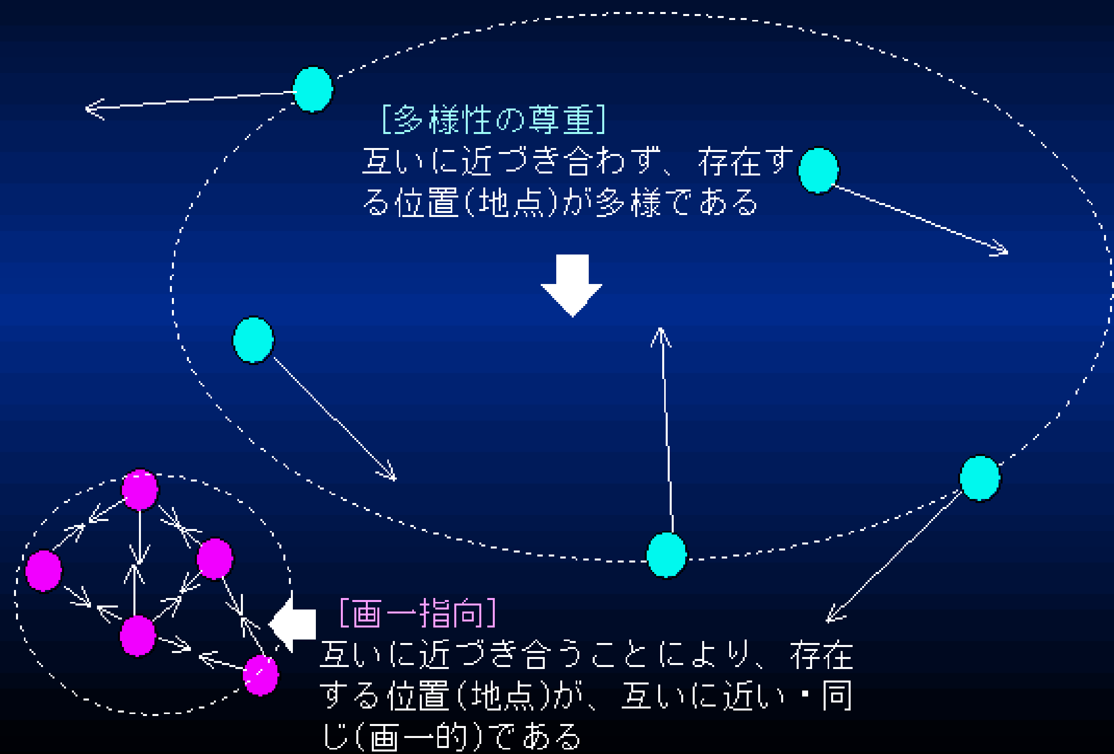


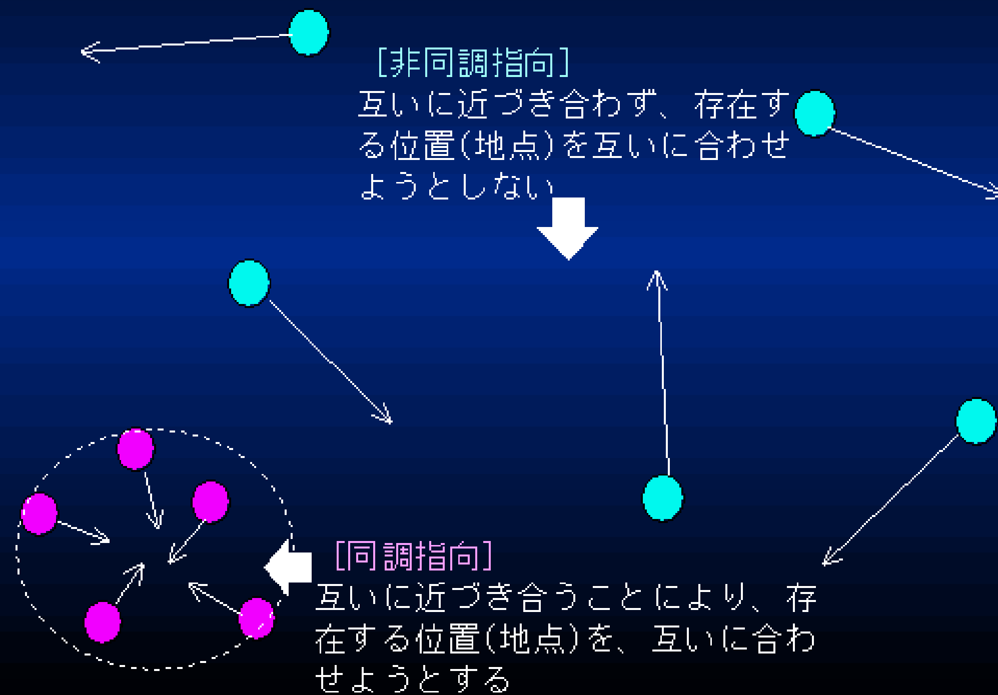
A. 心理的近接指向

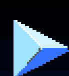

［ドライな人・物体］
指向→小
互いに近づこう、くっつこうとせず、バラバラに離れる
［ウェットな人・物体］
指向→大
互いに近づき、ベタベタくっつき合う


A11. 集団主義 vs 個人主義
[個人主義]
互いに近づき合わず、
各自がバラバラに動く
[集団主義]
互いに近づき合うことで、
集団が自然に形成される

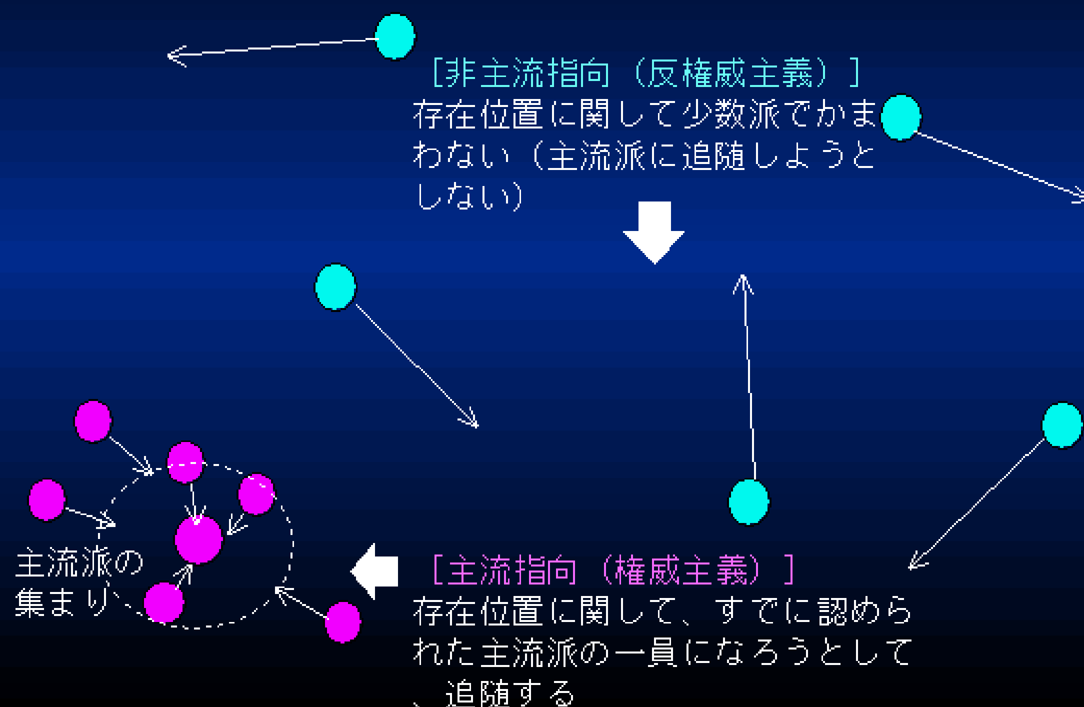

A12. 密集指向 vs 広域分散指向
[広域分散指向]
互いに近づき合わず、互いに広い領域に散らばる
[密集指向]
互いに近づき合い、狭い領域に密集する


A13. 画一（同質）指向
vs 多様性の尊重（異質指向）
［多様性の尊重］
互いに近づき合わず、存在する位置(地点)が多様である
［画一指向］
互いに近づき合うことにより、存在する位置(地点)が、互いに近い・同じ(画一的)である


A14. 同調指向 vs 非同調指向
[非同調指向]
互いに近づき合わず、存在する位置(地点)を互いに合わせようとしない
[同調指向]
互いに近づき合うことにより、存在する位置(地点)を、互いに合わせようとする



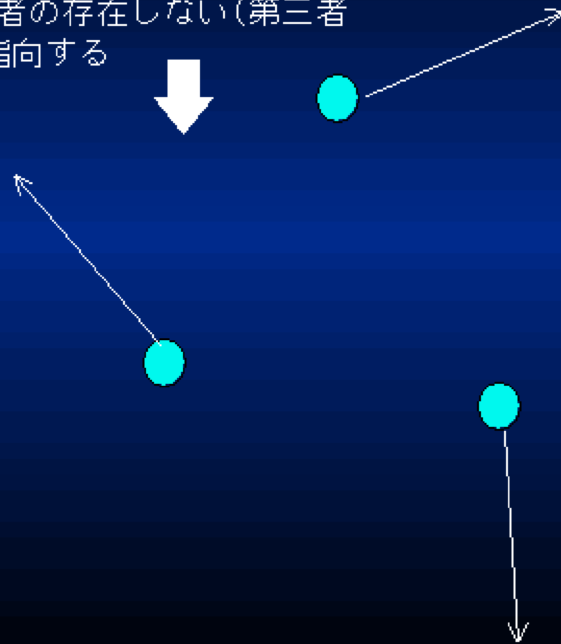
A15. 主流指向（権威主義） vs 非主流指向（反権威主義）



A21. 関係指向 vs 非関係指向

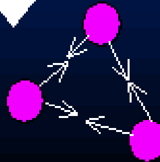
[非関係指向]
互いに、他者の存在しない(第三者的)空間を指向する

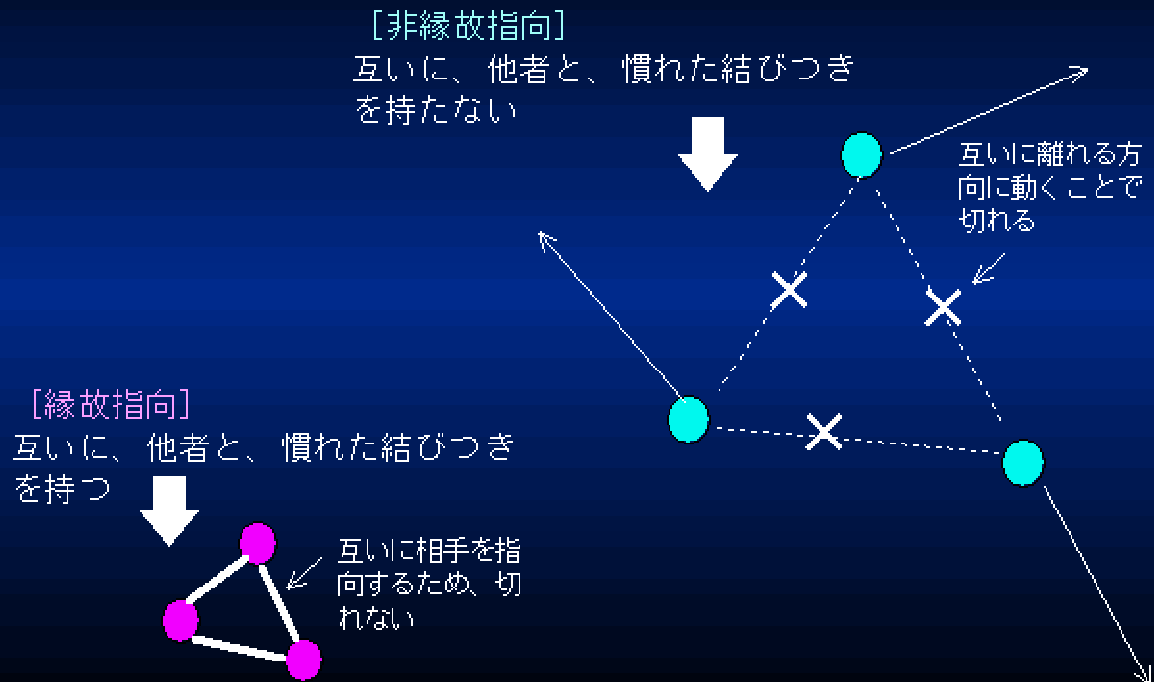




[関係指向]
互いに他者を指向する



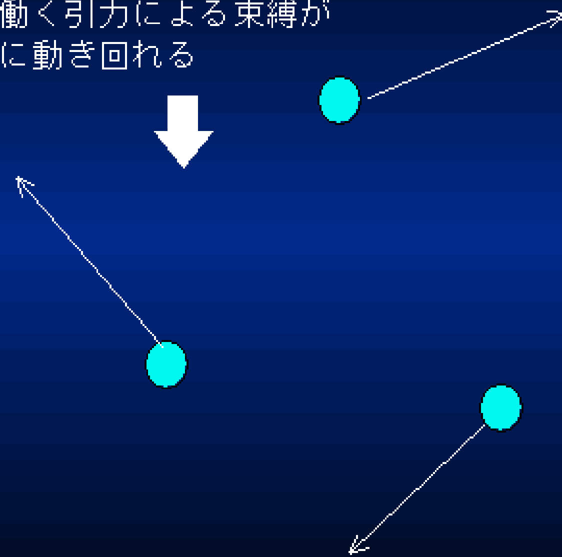



A22. 縁故指向 vs 非縁故指向
[非縁故指向]
互いに、他者と、慣れた結びつきを持たない
互いに離れる方向に動くことで切れる
[縁故指向]
互いに、他者と、慣れた結びつきを持つ
互いに相手を指向するため、切れない

▶ A31. 規制主義 vs 自由主義

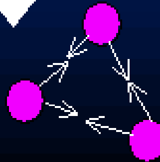
［自由主義］
互いの間に働く引力による束縛がなく、自由に動き回れる

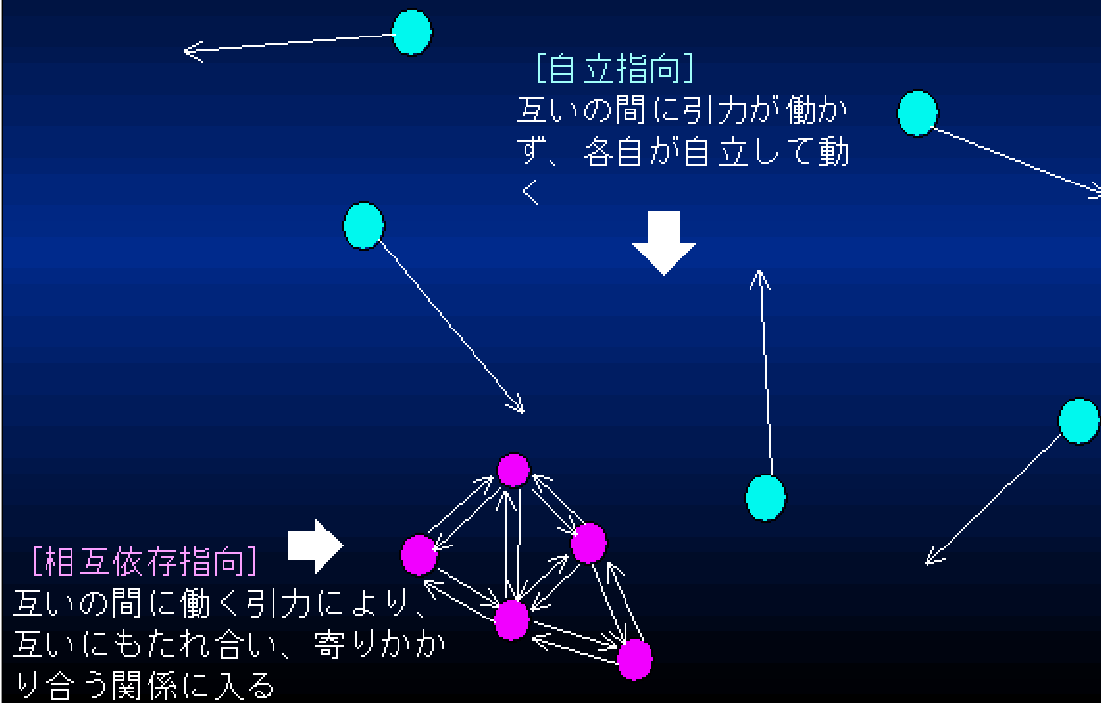




［規制主義］
互いの間に働く引力によって、束縛し合って、自由に動けない

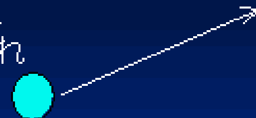





A41. 相互依存指向 vs 自立指向
[自立指向]
互いの間に引力が働かず、各自が自立して動く
[相互依存指向]
互いの間に働く引力により、互いにもたれ合い、寄りかかり合う関係に入る

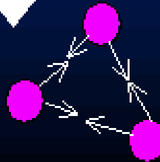
▶A42. 他律指向 vs 自律指向

［自律指向］
互いの間に引力が働かないため、自分で自分の進行方向を決められる



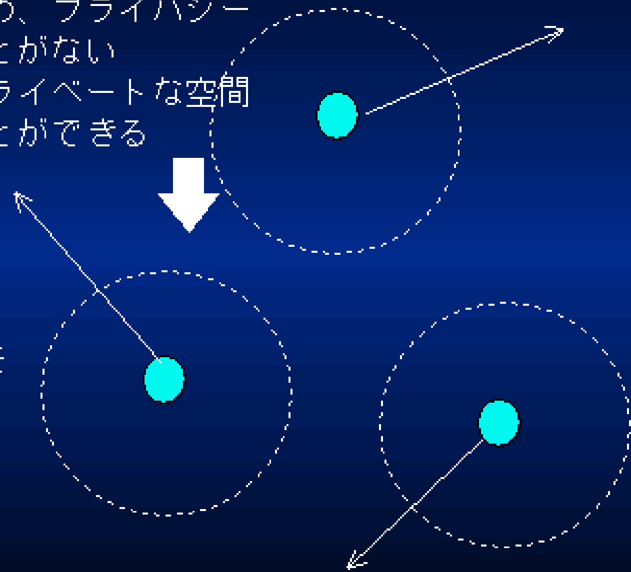
［他律指向］
互いの間に引力が働き、自分の進行方向をひとりでは決められない

A51. 反プライバシー vs プライバシー尊重

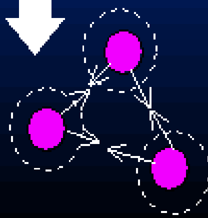
[プライバシー尊重]
互いに離れるため、プライバシー
を侵害し合うことがない
自分の周囲にプライベートな空間
を大きく保つことができる





[反プライバシー]
互いに近接し、くっつき合うため、
プライバシーを侵害し合う
自分の周囲にプライベートな空間を
ほとんど持てない

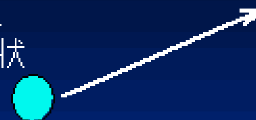


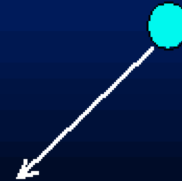


A61. あいまい指向 vs 反あいまい指向

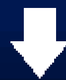
［反あいまい指向］
互いの間に引力が働かないため、
自分の進行方向を率直・明快な状
態に保てる

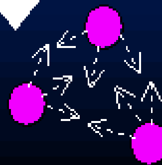






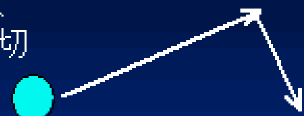
［あいまい指向］
互いの間に引力が働くことで、自
分の進行方向があいまい(多義的)
となる





A62. 非合理指向 vs 合理指向

[合理指向]
互いの間に働く引力を断ち切って、
自分の進行方向を合理的に、割り切
ったものにできる

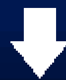


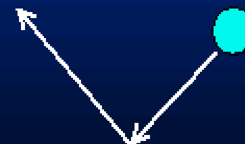




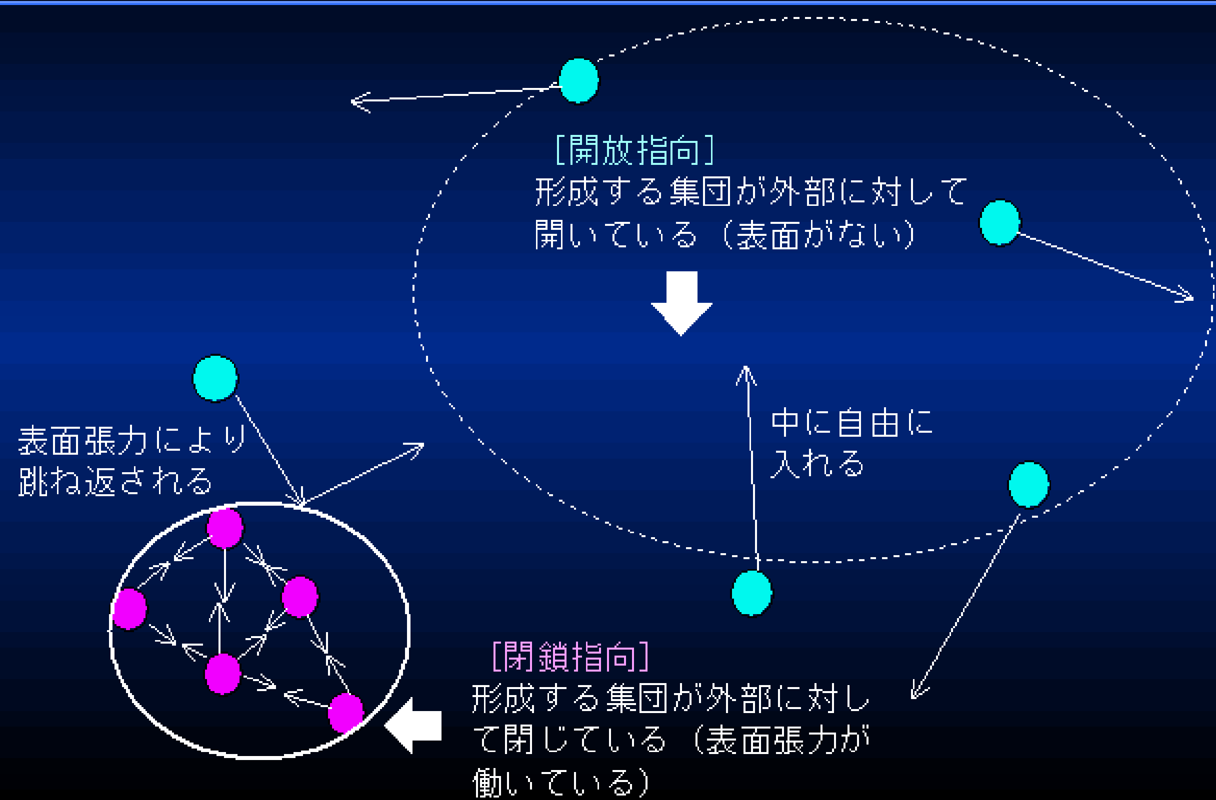


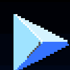
[非合理指向]
互いの間に働く引力を断ち切れず、
進行方向の面で、割り切れない



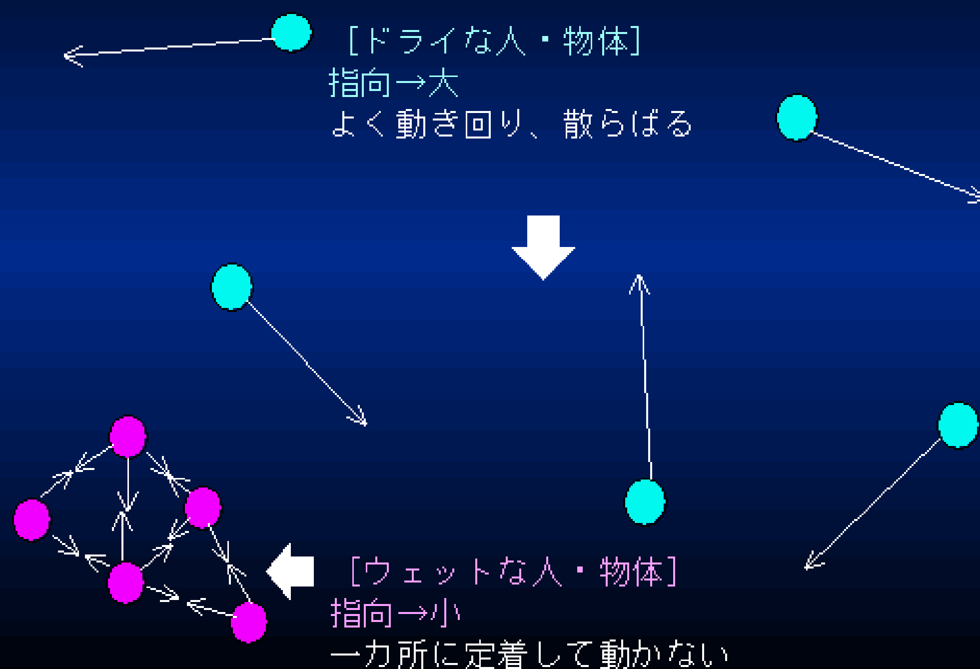





A71. 閉鎖指向 vs 開放指向
[開放指向]
形成する集団が外部に対して
開いている（表面がない）
中に自由に
入れる
表面張力により
跳ね返される
[閉鎖指向]
形成する集団が外部に対し
て閉じている（表面張力が
働いている）



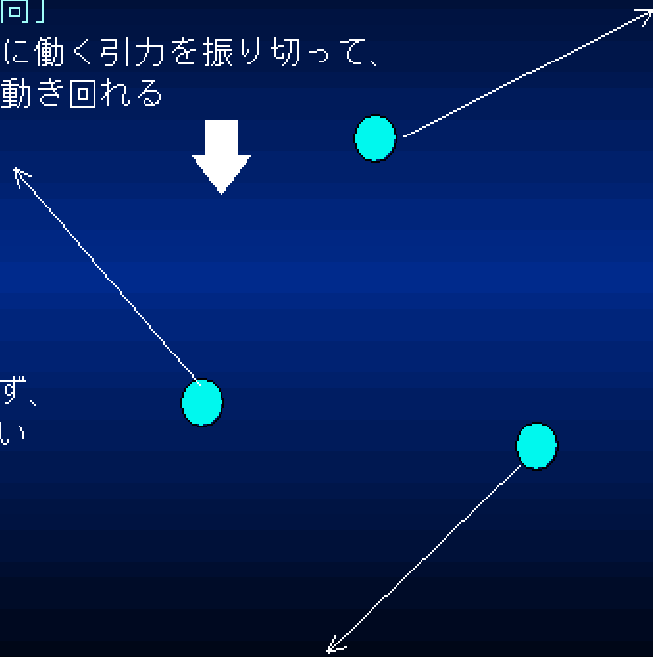
B. 運動・活動・移動指向



▶B11. 静的指向 vs 動的指向

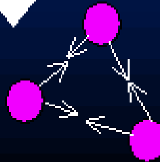
［動的指向］
互いの間に働く引力を振り切って、
自発的に動き回れる





［静的指向］
互いの間に働く引力を振り切れず、
自発的に動き回ることができない





B12. 定着指向 vs 非定着（移動・拡散）指向

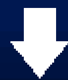
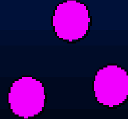
［非定着（移動・拡散）指向］
今いる地点に定着しようとせず、
絶えず移動、拡散しようとする

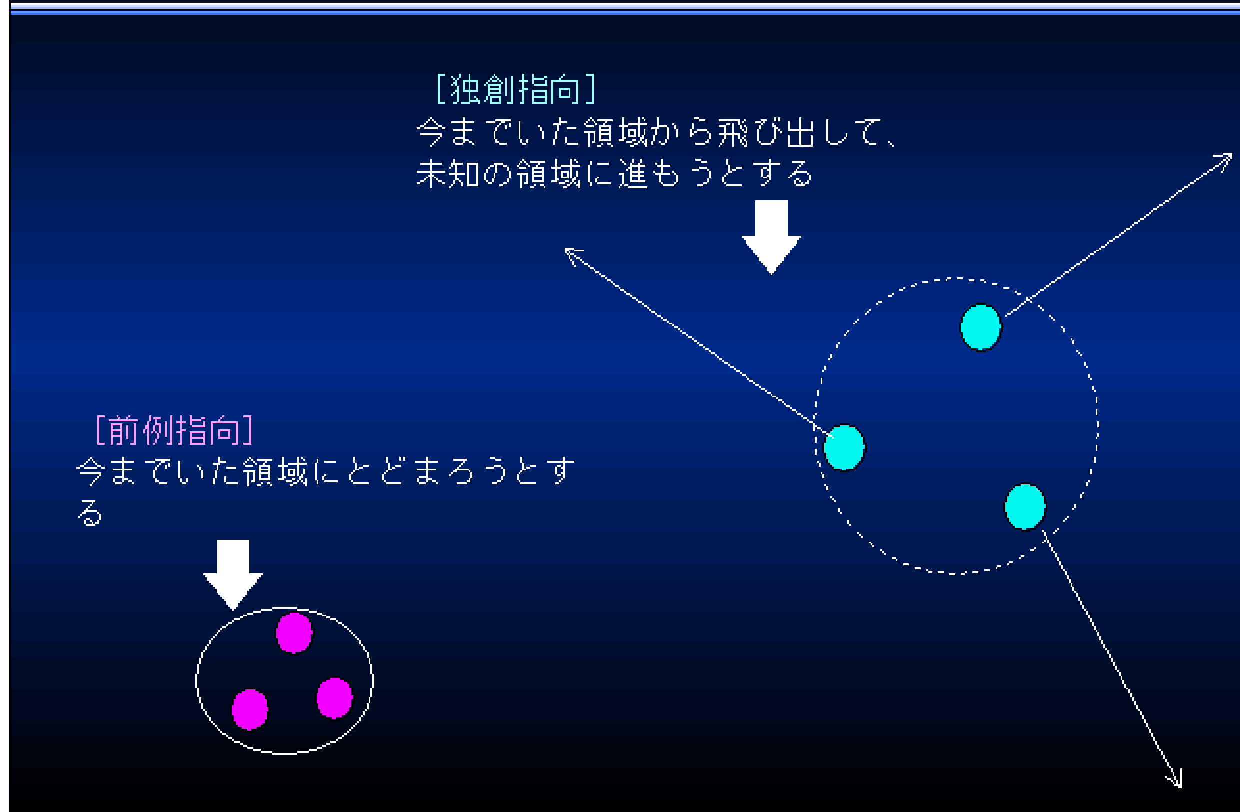






［定着指向］
今いる地点に定着しようとする



(c)1999-2003初出

ドライ・ウェットな性格の人になるには。

2000-2003初出

皆さんが、ドライないしウェットな性格の人になろうと思ったら、以下の表に書かれているような態度を、日頃取るように心がけることをお勧めします。

表 11



ドライ・ウェットな行動様式詳細分類と説明

筆者が抽出した、ドライ・ウェットの次元上に乗っていると想定される対人行動の様式は、以下の表のように分類可能である。

表 12

以下では、上記整理結果をもとに、具体的にどのような人間の行動様式が、ドライ・ウェットさと関連があるかについて、詳細に説明する。ドライ・ウェットな行動様式の詳細な内容を、それらがどのように活動・移動性の有無、心理的に近接する指向の强弱によって説明できるかも含め、一通り述べる。

●Ａ．心理的近接指向（ウェット）－非近接指向（ドライ）
他者と心理的に近づくこと。（距離を縮めること。）くっついて、離れようとしない指向の強さに関すること。

◎Ａ１．他者との心理的位置の同一・共通化（ウェット）－相違・差異化（ドライ）
心理的に他者のいるところへ行こう・集まろうとするかどうかについての次元が存在する。すなわち、他者と心理的に近接するためには、他者と同じところ（心理的位置）を占める必要があり、そのために人々は集団を作ったり、密集したり、同調行動を取ったりする。

○Ａ１．１集団主義（ウェット）－個人主義（ドライ）

表 13

［説明］

各個人に、心理的な引力、他者へと心理的に近接しようとする考えが働いている状態では、個人同士は、互いにくっつき合うことで、互いにまとまりを作る。一つに集まること。（それを好むこと。）心理的に互いに接近し合うこと。そのことで、各人が一つの集団・団体の中で、互いに心理的にくっついて一体化し、融合することになる。いったんくっつき合って集団を作ると、その中で互いに引き合い、まとまり合う力が働いて、みんな一緒にいようとする。集団を作って互いでひとまとまりでいる状態を維持しようとし、集団を割ろうとする力を否定しようとすること。こうした集団内では、人々を集団に引き止める力（集団凝集性）が働いており、集団・団体でい続けようとし、集団全体の動きを、自分個人の動きよりも重要視するようになる。これは、集団全体の利益を、自分個人のそれよりも、優先しようとすることにつながる。中にいる個人が外に独りで出ようとすること。（脱退しようとすること。）それと、それと反対方向に力が働いて、集団の中に引き戻そうとする。このように、互いに集まり、まとまって動こうとすることを、集団主義と呼ぶならば、集団主義は、互いに心理的に近接しひとまとまりになることを指向する点、ウェットな行動様式と言える。

一方、各個人に、他者へと近接しようとする考えがあまり働かないと、個人同士は、互いに近づき合って集まることなく、互いにバラバラに離れたままでいようとする。互いに一人ずつ個別にバラバラに動こうとすること。したがって、集団・団体は、目的がない限り自然には発生しない。いったんできた集団を割ることも平気である。個々人は、以下のことができる。周囲からの引力を気にせずに、単独（ひとり）で自由に動き回ること。（自分自身の動きや進行方向を決定すること。）個々人は、周囲の他者とは別の道を突き進むことができる。その点で、自分個人の動きや利益を優先することが可能である。集団外に抜け出そうとするときに、周囲の他者か

ら、それを引き止めようとする引力が働かないので、簡単に脱退できる。このように、互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに存在しようとしたり動こうとすることを、個人主義と呼ぶならば、個人主義は、互いに離れて、心理的に近接することを指向しない点、ドライな行動様式と言える。

○Ａ１．２密集指向（ウェット）ー広域分散指向（ドライ）

表 14

［説明］

各個人に、他者へと心理的に近接しようとする考えが働いている状態では、各人は互いに近づき、くっつき合うことで、相手との距離がなくなる方向に進む。相互に隔てのない方向へと近接することで、互いに、大部屋のように、隔てのない、狭い空間に、互いにひとまとまりになって密集するようになること。この場合、互いに狭い範囲内でものごとを見ることになり、視野が狭くなる。あるいは、互いの間に十分な距離をとって眺めることができないため、客観性に欠けることになる。互いにより高い密度でまとまることを指向するため、権限などがどんどん皆が集まる中央に集中すること。（中央集権。）それが、周辺に広がって行こうとしないこと。このように互いの距離を小さくする指向は、密集指向という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。

一方、各個人が他者へと心理的に近づこうとする度合いが小さい場合、互いに近づき合ってまとまり合うことが少ない分、より低い密度で広い空間内に、互いに分散して（距離を大きく取って、離れて）存在すること。仮に分布可能な領域が狭い場合、人々は、個室にいること、すなわち、壁やドアによって、他者のいる空間から隔

離されること。（他者のいる場所からの距離を大きく取ること。）それらのことを指向すること。広い領域に分散しているため、一度に広い範囲のものごとを見ることができ、視野が広い。互いの間に十分な距離をとって眺めることができるため、ものの見方に客観性がある。互いにより低い密度で周辺に広がっていくことを指向するため、権限などがどんどん地方に分散していくこと。（地方分権。）このように、互いに距離を大きくとって、分散して分布することへの指向は、広域分散指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

○Ａ１．３画一（同質）指向（ウェット）－多様性の尊重（異質指向）（ドライ）

表 15

［説明］

各個人に、他者へと心理的に近づこうとする考えが働いている場合、心理的に近接しようとすることで、互いに心理的に同じところ（同じ位置・場所）に集中しているようにしようとすること。互いに存在する位置を同じにしようとすること（共通にしようとすること）。物理的・心理的に互いに同一の位置を集中して占めようとすることで、互いに画一的な状態で横並びすることになること。存在位置が画一化した状態でひとまとまりになる。そのため、そこから一人別の位置に行こうとすること。（存在位置の点で個性的あろうとすること。）そうしたことをしないこと。（没個性的であること。）また、画一的な自分たちの中で個性的になろうとすること。（自分たちとは別の位置を占めようとすること。）そうした個人の存在。それらを、認めようとせず、自分たちのいる位置へ引っ張り込もうとすること。（異なる意見の持ち主に対して寛容でないこと。）このように、互いに心理的に同一の存在位置にいることを指

向することは、画一指向（同質指向）という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。皆が同じ心理的存在位置を取ることは、その位置に皆が密集することであり、その点、密集指向とも関係がある。

一方、各個人が他者へと心理的に近接しようとする度合いが小さい場合、人々は相互に引き付け、まとまり合う度合いが少なく、存在する位置が、互いにバラバラに離れていること。（多様であること。）それらを許容すること。空間内での分布のはずれ値が多いこと。（分布の幅が大きいこと。）互いに相手とは異なる独自の位置に存在する、という思いから、自分とは異なる意見の持ち主の存在に対して寛容である。このように心理的にバラバラ・多様な位置を占めることを指向することは、多様性の尊重ないし異質指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。各自が互いに離れた別々の心理的存在位置にいようとすることは、各自の居場所が心理的に広く分散していると言え、広域分散指向とも関係がある。

○Ａ１．４同調指向（ウェット）ー反同調指向（ドライ）

表 16

［説明］

自分の行動や進行方向を周囲の他者に合わせようとすること。（互いに同じにしようとすること。）同調への指向。それらは、周囲の他者と心理的な位置を同じくしようとして、近づき合うことを意味する。同じ心理的位置を共有する仲間の数がより多く集まることで、その心理的位置における人口密度が高まる。それは、個人間に心理的引力が働いて、その結果、同一の心理的位置に各人が密集したことを指す。周囲の他者と同じことをしようとすること。（周囲の他者の真似をすること。）それらは、以下のことを意味する。心

理的に互いに同質化して近づこうとすること。（同一の位置を占めようとすること。）意見の同じ者だけでまとまろうとするのも、相互の心理的同質性を確保して、心理的に同じ位置を持つことで、互いに一体・融合化しようとする姿勢の現れである。一人だけ孤立するのを避けて没個性的であろうとするのも同じ行動様式である。こうした指向の持ち主は、だれかと一緒にいないと不安で仕方がない。孤独に耐えられないこと。これらの行動様式は、いずれも、心理面引力を働かせて、互いにひとまとまりになって心理的に同じところにいようとする動機を含んでいる。このように、周囲の他者と行動を同調させることへの指向、すなわち同調指向は、周囲の他者と互いに心理的に同一の位置を保持することにつながり、ウェットな行動様式と言える。

各自が他者へと心理的に近接しようとする度合いが小さい環境下では、個人は、心理面で、互いにひとまとまりになろうとする引力から自由になって、互いに別々の（違ったこと。）、独自の（個性的なこと。）位置を確保することが可能である。周囲の他者と心理的位置を共有する方向への引力が働かないので、行動を周囲の他者に合わせようとすることがない（周囲の皆と違ったことをする、他人の真似をしないこと。周囲からの孤立を恐れないこと。）このように、周囲の他者に行動を同調させないことへの指向（反同調指向）は、周囲の他者と心理的な近接を行おうとしない点、ドライな行動様式と言える。

○Ａ１．５主流指向（権威主義）（ウェット）ー非主流指向（反権威主義）（ドライ）

［例］

表 17

［説明］

主流とは、相対的により多数の人々が既に集まっている方の集団のことである。そうした主流を指向するのは、皆が既に大勢集まっているところ（メジャーなところ）に自分も行ってその仲間に加わろうとすることを意味する。そうした、既に人数がたくさんいる多数派・主流派と一緒になろうとする主流、メジャー指向は、心理的には、既に人々が沢山密集している位置と、自分のいる位置を合わせよう、同じにしようとすることになり、より大勢と互いに近接し、くっつこうとする点、ウェットな行動と言える。

権威ある者（例えば、有名大学医学部の教授や、高級ブランド品のデザイナー）は、その周囲に既に心理的追従者が沢山集まっており、その存在を既に揺るぎないものとした多数派（主流派）の中での中心人物として位置づけられること。そういう意味で、権威ある者のいる辺りは、最も心理的な人口密度が高い。権威を信じることは、心理的な高人口密度の中に参加できることを約束するものである。権威あるとされる者のいうことを信じたり、後追いをしたりしやすいこと。（権威ある商品ブランドに対する信仰など。）それらは、心理的距離空間内において沢山人が集まっている人口密度の高いところに自分も行きたい、密集したいと考えやすいことを指し、互いに集まり合うという、心理的引力を行使することにつながる点、主流指向の一形態であり、ウェットな行動様式と言える。

主流を指向しないこと。（非主流であろう、マイナー指向であろうとすること。）それらは、少数派で構わないという行動様式である。人があまり集まっていない、閑散とした方に行こうとすることである。閑散としたところは、人口密度の低い、人々があまりおらず、互いに離れているところを指し、そうしたところに行くことを指向する、非主流、マイナー指向の行動様式は、ドライな行動様式であると言える。

権威を信じないことは、権威に引き寄せられた多数派（主流派）の人々の中に進んで入ろうとしないことであり、あえて主流に入らない、集まろうとしないで、独自の道を歩もうとする行動様式であること。心理的距離空間内において、以下のところに集まろうとしない、距離を取ろうとする行動である。
他者が密集しているところ。（権威ある者や彼らが作った商品のあ

るところ。）
その点、非主流指向の一形態であると言えること。これは、ドライな行動様式である。

（追記）
なお、身分との関係については、上流階級が、その社会の中でより主流の重要な位置を占めており、一方下層階級は、マイナーな、目立たない非主流の地位に追いやられている。

上流階級を指向すること。（例えば、上流階級の文化を自分も真似ようとする高級指向。）そうした行動は、社会的主流派に属しようとする、すなわち、皆が憧れ行きたがる、集まりたがる社会的位置に自分も行こうとする行動であり、その点ウェットであると言える。

また、身分の上下にうるさくこだわり区別する態度は、自分が社会的に偉い＝権威がある、主流であるかどうかにこだわることであり、主流派の価値観に染まっていることを示す。その点、主流指向であり、ウェットであると言えること。

こうした身分の上下を区別することへの指向の强さと、当人が実際に属している身分の高さとは、必ずしも一致しないと見られる。例えば、日本において、「お上」＝官公庁の権威に対して恭順する態度を取る下層階級の庶民は、「お上」＝「官」という組織が持つ、主流の価値を無批判に受け入れ、それに合わせようとしている点、例え、その所属が非主流であっても、主流指向であり、ウェットである。

◎Ａ２．他者との関係・縁故の構築（ウェット）－非構築（ドライ）
他者との間に関係・縁故を積極的に築こうとするかどうかについての次元が存在する。互いに心理的引力によって他者を指向する者同士が、互いに指向し合った他者と新たに心理的に結合・接続した状態をそのまま維持することで、縁故を作り出す。

○Ａ２．１関係・接続指向（ウェット）－非関係・切断指向（ドライ）

表 18

［説明］

各個人に、他者へと心理的に近接しようとする考えが働いている状態では、個人は互いに自分が他者を引力によって自分のもとへと引き寄せる、あるいは他者に近づくことで、互いに他者を指向することになる。他者と互いに引き付け合い、近づき合う関係に入ることを重視するようになること。（人間関係そのものを重視すること。）相互に引き付け合うこと。そのことで、互いに他者と十分な近さまで近づきあうことで、触れ合うようになることを好み、その結果、相互の関係は親密なものとなる。互いに近い距離にいる、同じ位置を共有するようになり、心理的な面からは互いに共感し合う状態になる。自分と他者とが、互いに引き付け合って心理的・物理的に一体化することを望みやすくなること。（愛という言葉を使うのを好むこと。）互いに心理的に近い存在になろうとするために、周囲の他者に気に入られようとしたり、よい印象を与えようと気にしたりすること。あるいは、自分の内面を他者に対して積極的に開示して、互いに相手と関心を共有しようとすること。（そのことで心理的に同じ位置を占めよう、心理的に近づこうとすること。）このように相手との関係を積極的に築こうとすること。（結合、接続しよう、つながろうこと。）それらは、関係指向ないし接続指向という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。関係指向は、他の人間を直接の指向対象とすることから、人間指向ということもできる。

各個人が、周囲の他者と心理的に近づこうとしない状態では、互いを引力によって引き寄せ、近づき合う、互いに他者（人間）を指向

するという契機に欠けること。その点で、人間関係を何かの手段としてしかみないこと。相互に引き付け合って近づくことがないため、他人との触れ合いを好まず、人付き合いのあり方がよそよそしい。互いに心理的にバラバラな位置にいるので、互いに共感し合うことが少ないし、相互間の配慮も少ない（足りないこと。）こと。互いに相手と関心を共有しようということがないため、自分の内面を相手に開示したがらないし、相手にあえて気に入られようとすることもない。自分たち人間とはかけ離れた、無機物を指向する。このように、互いに心理的に離れたままでいようとして、他者との関係を築くことを指向しないこと。（ないし、相手との関係を切る、断つことを指向すること。）それらは、非関係指向ないし切断指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

○Ａ２．２縁故指向（ウェット）ー非縁故指向（ドライ）

表 19

［説明］

個人同士が互いに心理的な引力によって、くっつき合うこと。（心理的に一体化し合うこと。）そうした状態になるのを繰り返すことによって、人と人との間の結合connection自体に慣れが生じること。（結びついた状態が日常化し、癒着が生じること。）人間同士が互いに慣れた結びつきを持って、互いに引力を及ぼしている状態が「縁故がある」ことになる、と考えられる。相互に心理的に近づくおかげで人間同士が強い紐帯、癒着を持つに至ることが可能となる。相互間の引力によって互いに結びついていることが当然となった人間同士の関係は、血縁関係で結ばれた家族同様のレベルまで深まることもしばしばであり、そのときには、家族的な雰囲気を現すようになる、と考えられること。（実の親子と擬制する親分子分関係など）このように相互間の強い結合が日常化・長期化することを

指向するのは、縁故指向という言葉でまとめることができ、ウェット
トな行動様式と言える。

各自の持つ、他者にくっつこうとする引力が小さいと、他者との結合connectionが生まれにくく、縁故ができにくい。人間同士の紐帯、癒着が弱い。あるいは、人付き合いのレベルが浅く、家族的でない。相互間の結合が生じにくい状態を指向するのは、非縁故指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

◎Ａ３．行動決定の自由（ドライ）ー不自由（ウェット）
自分の思った方向に自由に行くことができるかどうかについての次元が存在する。互いの間に心理的に近接しようとする引力が働いていると、その引力がしがらみとなって、人々は心理的に自由に動けなくなる。

○Ａ３．１規制主義（ウェット）ー自由主義（ドライ）

表 20

［説明］

各個人が他者に対して心理的に近づこうとして働かせる引力が大きいと、その引力がしがらみとなって、各人は、自分の当初進みたいと思う方向へ向かって、自由に動き回ることができなくなる。心理的引力は、個人同士の互いの動きを、互いに近づき合って、牽制・束縛・拘束し合う方向に向かわせること。（足を引っ張り合うこと。）こうした相互の動きを縛り合う人間同士の引力が働いた状態が、「規制」がある状態である。人間関係において、互いの間に引力が働いていると、それが人間同士の自由な行動を抑え込む力と

なって（しがらみとなって）、身動きが取れなくなる。
個人同士の間に引力が働いている状態では、一人が周囲から外れた行動を起こそうとすると、周囲の他者からの、相手が一人離れて行くことを許さない、一緒にくっついたままでいようとする引力によって、その行動を規制される。これが、足の引っ張り合いや、しがらみがある、行動の自由がない、と行動を起こした本人に感じられるもととなる。
心理的引力の存在する状態で、一人が行動を起こすと、引力が働いているため、周囲の他者がついでに引っ張られてしまうなど影響が広く及ぶため、行動を起こした結果（例えば失敗）についての責任は、行動を起こした本人一人のみに限定されず、周囲の皆の連帯責任と見なすことになる。こうした状況では、個人が単独で自由行動を完遂するのは不可能である。そのため、周囲の他者が同意しない限り行動を起こさない、といった方策が取られることになる。
心理的引力がある集団内では、一人だけの抜け駆けができなくなる。一人が抜け駆けしようとすると、引力が、抜け駆けしようとする本人と周囲の他者との間に働いて、周囲の幾人かもそれにつられて動いてしまったり、周囲の他者が抜け駆けしようとする本人に対して、自分たちの中に引き戻そうとする力を働かせようとするためである。一人だけで動こうとしても、周囲の他者との間に働く、複数の互いの近さを維持しようとする心理的引力がしがらみとなって、自由に動けない。
このように互いの動きを規制し合う状態を指向することは、規制主義という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。

一方、個人が他者に対して働かせる心理的引力が小さいと、個人同士は、互いに近づき合って、束縛・牽制し合うことがあまりない（人間関係のしがらみがなく、自由に身動きできる。）こと。自分がある方向に動こうとしたときに、互いに引力で相手の足を引っ張り合うことなく、だれにも規制されずに自由に動き回ることができる。一人一人が、互いに周囲の状況から独立して（抜け駆けしてなど）、自由に自分の行きたい方向へと、常に進むことができること。（互いに自由に行動することを許すこと。）そうした行動を起こした結果に対する責任は、行動した本人にのみ限定することが可能である。このように互いに自由に動き回れる状態を指向することは、自由主義という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

◎Ａ４．行動の自己決定（ドライ）ー非決定（ウェット）
自分の行動の決定が自分だけでできるかどうか（他者の意向に沿う必要があるかどうか。）についての次元が存在する。心理的な引力が働いていると、互いに自分の行動が自分一人では決められず、周囲の他者の動向次第になってくる。

○Ａ４．１相互依存指向（ウェット）ー独立・自立指向（ドライ）

表 21

［説明］

各個人が周囲の他者に対して心理的に近づこうとしている状態では、互いに引き付け、くっつき合うことで、互いに相手に寄りかかりあう、すなわち、相互にもたれ合う関係になる。心理的引力が強いと、自分の行動が相互に相手の行動次第で決まるようになる。自分の行動が相手の動きに依存する。自分のあり方を決めるのに、相手へ心理的に寄りかかる度合いが増える。相互に寄りかかりあうことで、互いに相手の状態に依存し合うことになること。互いに、相手に寄りすがろうとすることになり、その点依頼心（甘え）が強くなる。言い換えれば、心理的引力が強いと、自分の行動が相互に相手の行動次第で決まるようになる。その点、自分の行動が相手の動きに依存する。すなわち、行動が相互依存的になる。また、自分のあり方を決める相手へと心理的に寄り掛かる度合いが増えて、依頼心が強くなることになる。これは、以下の行動にもつながる。各自が互いに依存し合う状態で、ひとまとまりになること。（＝派閥を作ること。）外部に対して、一つにまとまった自分たちの勢力をア

ピールしようとすること。このような相互にもたれ合う関係への指向は、相互依存指向という言葉でまとめることができ、心理的引力に基づく指向であることから、ウェットな行動様式と言える。

一方、各個人が周囲の他者に対して心理的に近づこう、心理的引力を行使しようとしない場合、個人が自分の動きを決定するのに、周囲の他者の動きの影響を受けることが少なくなり、自分のことは自分で決定して行動できること。（周囲の他者に行動を依存しないで済むこと。周囲の他者に自分の行動を決定される度合いが少ない。）その点、周囲の他者からは独立・自立している。互いに寄りかかり合うことがなく、依頼心（甘え）は少ない。こうした独立・自立への指向は、心理的引力が弱く、互いに無関係に動き回る場合に顕著となることから、ドライな行動様式と言える。

○Ａ４．２他律指向（ウェット）－自律指向（ドライ）

表 22

［説明］

他者と互いに心理的に近接しようとする引力の只中にいる個人は、自分の行動や進行方向を、周囲の他者によって決定されることを指向すること。（ないし、そうせざるを得ないこと。）引力の働いている状態では、各人が周囲の他者からの相手を自分から離れようとさせない引力の影響。（牽制など）を受けて、自分の動く方向を好む好まざるとにかかわらず変える必要に迫られること。（自主性が保てないこと。）自分の進路は、自分の周囲に存在する他者由来の引力との兼ね合いで決まり、自分一人だけで決めることはできない。その意味で、周囲の他者による影響が大きい。すなわち、自分の動きが単独独立で決まらず、周囲との文脈によって決定される「文脈依存的」な行動を取ることになる。

周囲の流行に振り回されるということは、周囲から発せられる心理的な引力。それに引かれるままに動くことであること。（例。友人による「私は既に○○したわ。あなたも○○しない？（そうすることで私と一緒にならないか？）」といった勧誘。）引力は、その中にいる個人に対して、起こす行動における主体性の欠如した、周囲の意見に左右されやすい（自分の意見を持っていないこと。）状態を引き起こすこと。このように、周囲の他者からの引力に自分の行動や進行方向を任せたこと。（あるいは、預けたこと。）そうした状態になるのを指向することは、他律指向と言う言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。

一方、他者との間における心理的近接の度合いが小さい場合、各人は、自分の行動や進行方向を、周囲の他者からの引力に影響されず、自分一人で決定することができる。（各人は、自主性を保てる。）各人は、自分の動く方向を、周囲の他者の動きに合わせて変える必要がない。周囲の動向（流行など）に振り回されず、自分の意見を持ち続けることが可能である。自分の行動・進行方向を周囲の他者からの引力に影響されずに一人で決めることができる状態を指向することは、自律指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

◎Ａ５．プライバシーの確保（ドライ）－不確保（ウェット）
自分の私事を秘密にすることができるかどうかについての次元が存在する。他者に対して心理的近接を試みることは、その分他者および自己のプライベートな領域を侵害する可能性を絶えずはらんでいる。（他者に近づく分、自分の状態が、他者に丸見えになる。）また、相手との距離を近く保とうとする心理的引力の働いている状態では、互いに他者に対して何らかの行動を起こすことで、反作用として、他者から、他者自身が何を考えていたかフィードバックを得ることができ、互いのプライバシーは侵害される。

○Ａ５．１反プライバシー（ウェット）－プライバシー尊重（ドライ）

表 23

［説明］

他者と心理的に近づくことによって、頻繁にくっつき合い、接触し合うことは、互いのプライベートな空間への絶え間ない侵入を引き起こすことにつながり、他者（ないし自己）のプライバシーへの干渉（私事への介入）に結びつくこと。他人のうわさ話をするのを好む、ないし当局に他人の動向を密告しようとすること。自分が（話や密告の種となること。）他者のことを監視し、他者のプライバシーに介入するのを好むことを示すこと。
自分が他人にどう見られるかを気にすること。それは、周囲の他者からのまなざしによる牽制・監視を通じて、互いに何をしているか、互いに自分から離れて何か変なことを起こしはしないかを気にすること。互いのプライベートな領域に侵入し合うこと。（プライバシーに介入し合うこと。）そうした引力の存在を感じるからであること。化粧をしたり、容姿、服飾に気をつかうのは、そうした他者による、自分のことをを牽制する視線の存在を予め意識して、自分の外観（顔や服装）を他者に効果的に映るように（他者を逆に牽制する形で）コントロールすることであること。こうした化粧、服飾行動は、他者の視線を一身に集めることで、他者を心理的に自分の身の回りに近づけ、積極的にプライバシーを放棄することにつながる。見栄を張るのも、他者に自分がよく見えるように、自分の見た目をつくろうことであり、他者の視線による牽制を前提とした行動である。
こうした相互監視・相互牽制によるプライバシーへの干渉が起きやすいことは、互いの間に心理的引力が働いていることと相関関係にあり、ウェットな行動様式であると言える。

一方、他者に心理的に近づく度合いが小さいと、以下のことが無

い。互いにくっつき合うこと。（接触し合うこと。）そのため、互いのプライベートな空間へと侵入を引き起こすことがなくなり、プライバシーが尊重された状態が保たれる。この状態では、互いに視線の送り合いやうわさ話、密告などで、相手を監視・牽制し合う、といったことがなくなる。こうした状態を好むのは、心理的引力を働かせようとしない点、ドライな行動様式であると言える。

◎Ａ６．行動の明快さや合理性の確保（ドライ）ー不確保（ウェット）

自分の行動に明快さや合理性を保つことができるかどうかについての次元が存在する。個人が、当初単独で明快・合理的に行動しようと思っても、周囲から引力という名の横やりが入ったり、周囲の人々の動向が気になると、行動はいつのまにかあいまいで非合理的なものになってしまう。

○Ａ６．１あいまい指向（ウェット）ー反あいまい（明快）指向（ドライ）

表 24

○Ａ６．２非合理指向（ウェット）ー合理指向（ドライ）

表 25

［説明］

ある個人が特定の方向に進もうとしたとき、自分の周囲の多方面から引力を受けると、その影響で、進行方向があいまいとなる。すなわち、心理的引力が働く対人関係においては、当初明確な意図を持って動こうとしたとしても、周囲の他者からの引力による介入・調整の繰り返しにより、いつしか進行方向があいまい、不明瞭（玉虫色）となること。物の言い方も、率直さに欠けた遠回し・婉曲なものになる。
また、他者との相互間に引力が働く環境下では、周囲の他者からの、相互の近さを保とうとする引力による介入を断ち切れず、割り切った行動を取れないため、自分のいったん決めた方向に向かってまっすぐ進むことができず、合理的な論理や計画が、曲げられてしまう。進む方向が、その場の周囲からの引力の働く方向（雰囲気）に絶えず影響されて、一時の感情にまかせて、気まぐれにアトランダムに変わってしまうため、自分で論理的な方針を組み立てることができず、合理的な方向へと進んでいくことができない。
このように、人が周囲に対してあいまい・非合理的な行動様式を取ることは、心理的引力がもたらすところのウェットさに基づく。

他者との間に働く心理的引力が少ない状態では、個人の動き（それは、今後の進路を含める。）が、周囲の他者からの引力による干渉を受けて曲がることがないので、まっすぐ（率直）・はっきり（明快）な状態を続けることが容易である。当初明確な意図を持って動こうとしたとき、周囲の他者からの心理的引力による介入・調整がないので、進行方向がはっきりした、明確な状態を続けることができること。（あいまいさが生じないこと。）物を言うに当たって、的に向かってずばり直球を投げ込むように、率直さを保てること。
また、他者との間に心理的引力が働かない状態では、周囲の他者からの引力による介入から自由になることができ、割り切った行動を取れるため、自分のいったん決めた方向に向かってまっすぐ進むことができ、合理的な論理や計画が、曲げられることなく貫徹可能である。進む方向が、引力に影響されることがないため、自分で論理的な方針を組み立てることが可能であり、合理的な方向へと進んでいくことができる。

このように、人が周囲に対して明確な、あいまいでない、合理的・論理的な行動様式を取ることは、心理的引力から自由なドライさに基づく。

◎Ａ７．集団の開放性の確保（ドライ）ー不確保（ウェット）
集団の表面を閉じようとする力（表面張力）が働いているかどうかについての次元が存在する。集団内部に互いに引き付け合ってまとまろうとする力（集団凝集性）が強ければ、集団は外部に対して門戸を閉ざすこととなる。

○Ａ７．１閉鎖指向（ウェット）ー開放指向（ドライ）

表 26

［説明］

各個人が他者に近づこうとする心理的引力がある状態では、各人の間に、互いに距離を縮める方向へとスクラムを組み、自分の属する集団の表面積を互いに手を取り合ってできるだけ小さくしようする力が対人関係において働いており、他者は形成済の集団の表面から中に入ることができない。こうした力は、1。）外部の者を中に入れようとしない、2）集団内の仲間が表面から外に出ようとすると中に引きずり込もうとするものであり、物理的液体における「表面張力」に相当する。こうした状態では、人々は閉鎖的な対人関係を好み、自分が属する集団・仲間内の相手としか付き合おうとしない（自分の属する集団内のことにしか関心がない。）こと。こうした表面張力のような力が働いている閉鎖指向は、心理的引力に基づくウェットな行動様式であると言える。

他者に近づこうとする心理的引力がない状態では、集団の表面部分～内部の各人が互いに手を取り合って結託し、よそ者を入れようとしない表面張力のようなものは、対人関係において存在せず、形成済の集団の表面から中に入ることが容易に可能である（外部の者に対して中が開放されている。集団内の仲間が表面から外に出るのも自由である。）こと。開放的な対人関係を好み、自分が属する集団・仲間外の相手とも付き合おうとすること。（自分の属する集団外のことにも関心を持つこと。）こうした表面張力が存在しない開放指向は、心理的引力とは無縁のドライな行動様式であると言える。

●Ｂ．心理的運動・活動・移動・流動指向（ドライ）ー静止・非活動・定着・定住指向（ウェット）
あちこち活発に動き回ろう、移動しようとする指向の強さに関すること。

◎Ｂ１．動的エネルギー・移動性の確保（ドライ）ー不確保（ウェット）
心理的な運動エネルギーが大きいかどうかについての次元が存在する。自分から進んで積極的に動き回ろう、拡散しようとする心理的な運動エネルギーが大きいと、他者からの心理的な引っ張りや牽制から自由になれる。

○Ｂ１．１静的指向（ウェット）ー動的指向（ドライ）

表 27

［説明］

もしも、各人の自分から進んで自発的に積極的に動き回ろうとする活動性（運動エネルギー）が、相対的に小さい（速度がゆっくりである。）と、当人はその場に静止してとどまることになり、人と人との間の心理的引力を振り切って動き回ることができにくい。運動エネルギーが小さくて、対人間に働く心理的引力に囚われがちな静的状態への指向。（静的指向。）それらは、ウェットな行動様式と言える。

一方、各人の、自分から進んで自発的に積極的に動き回ろうとする、活動性（運動エネルギー）が、（気体分子同様）相対的に大きい（速い）と、当人はその場に静止することなく動き回ることになり、個人間の心理的引力を振り切るだけの運動エネルギーにあふれている。このように、運動エネルギーが大きくて、対人間に働く心理的引力に囚われない動的状態への指向は、動的指向という言葉でまとめられ、ドライな行動様式と言える。

○Ｂ１．２定着指向（ウェット）－非定着（移動・拡散）指向（ドライ）

表 28

［説明］

自分から進んで動こうとする運動エネルギーに欠けていて、かつ、心理的引力の只中で、自分がある方向に移動しようとすると必ずそれに対する引き戻しの力がかかる状態では、個人は、いつまでも既存の、今まで、自分がその場所に存在したり、その中に所属していた、集団などの対人関係（組織）の中に、外に拡散することができずに、現状維持のままとどまり続けること。（定着、定住し続けること。）人間関係が固定的（例えば、人事が停滞的。）だったり、相手との取引関係が長期にわたるようになる。これは、定着指向と

いう言葉でまとめられる。

自分から進んで動こうとする運動エネルギーに満ちていて、心理的引力が小さい状態では、個人は、自由に、今までいた場所や、所属していた集団を離れて、一ヵ所に定着することなく、新しい境地へと絶えず動き回ることが可能である。この状態では、人間関係は、流動的な（短期契約的で、すぐ切れやすい）ものとなり、短期間で次々所属する組織を変わることになること。これは非定着指向という言葉でまとめられる。

○Ｂ１．３前例指向（ウェット）ー独創指向（ドライ）

表 29

［説明］

今までいたところに、いつまでも、居続けようとすること。（一ヵ所に定住・定着すること。）そうした状況下では、個人は、新境地（新分野）への移動・拡散性が欠如していること。（冒険しようとしないこと。）その行動の基準を、従来から存在するしきたりや前例に求めること。しきたりや前例は、定住先で生活するために従来必要であった知識の蓄積であり、その有効性に関してチェックを行わないままであること。（今までと同じ環境下に居続けるのであれば不要であること。）それらを、無批判にそのまま受け入れることになること。（現状の追認を好むこと。）新天地へ積極的に出ようとする姿勢が欠如しているため、自分のアイデンティティ確立を、既に定評のある、前例に当たる知識や方法との、暗記による一体化を行うことで果たす。しきたり・前例に関する知識の暗記量で人間の価値を推し量ろうとすること。（心の中での前例蓄積量や質によって人間の価値が決まること。）人間関係を、前例を沢山蓄積している先輩と、蓄積量が少ない後輩との差別によって把握する、年功序列が常識化する。年功序列で上位の人間が、下位の人間を、た

だそれだけの理由で支配する、先輩後輩関係を重視しようとする。これは、前例指向という言葉でまとめられる。

今までいたところから絶えず動き回ろうとする状況下では、個人は、新境地（新分野）への移動・拡散性にあふれていること。（冒険したがる、前人未踏のことに挑戦したがること。）その行動の基準を、従来にない新規の独創的なアイデアに求めること。しきたりや前例の暗記よりも、新たな知識の創造や、現状の変革を重んじる。こうした行動様式は、独創指向という言葉でまとめられる。

上記のうち、静的・定着・前例指向の行動様式は、ウェットな感覚を与える液体分子群（水など）において、コップなど、ふたのない容器に入れておいても、いつまでもその中にいて、外に拡散していくことがない（蒸発は、気体分子になることで初めて可能になる。）現象と、同様であると考えられ、ウェットな行動様式と言えること。

一方、動的・非定着・独創指向の行動様式は、ドライな感覚を与える気体分子群（空気など）において、いったん容器に閉じ込めておいた状態でふたを取ると、すぐに外に拡散してそこからいなくなってしまう現象と同様であると考えられ、ドライな行動様式と言えること。

上記の今回整理した内容から、性格、行動様式などにおけるドライ・ウェットさの概念が、集団主義・個人主義、自由主義・規制主義、プライバシー尊重の有無など、これまで個別にバラバラに議論されてきた、社会学、心理学や政治学上の様々な概念をまとめ、関連づける上位概念として、今後より有望視、重要視されるようになることが予想される。

例えば、行動様式や文化の分類について、上位概念としてのドライ・ウェットさを導入することで、従来は別々に捉えられてきた集団主義－個人主義、規制主義－自由主義の概念が互いに「集団主義と規制主義とは、どちらもウェットである」、「個人主義と自由主

義とは、どちらもドライである」のようにリンク付けて捉えられるようになる。そして、このことから、例えば、「個人主義と自由主義とは（両方ともドライでありこと。）互いに関連し合って同時に起こる、見られる」、「アメリカのような個人主義の国（個人主義の人）は、同時に自由主義の国（自由主義の人）である」ということが言えるようになる。

つまり、今回抽出した、集団主義－個人主義、規制主義－自由主義といった、様々なドライ・ウェットな性格・行動様式は、互いに独立・バラバラに発生するのではなく、以下において、互いに関連し合って同時並行的に発生する、観察されるものであると言えること。
ドライに属するもの同士。（個人主義、自由主義、プライバシー尊重・・・）
ウェットに属するもの同士。（集団主義、規制主義、反プライバシー・・・）

抽出した行動様式のドライ・ウェットさについての確認
上記の抽出した行動様式が本当にドライ・ウェットと感じられるかどうかについて、個別の行動様式項目毎に「この行動様式は、ウェット・ドライのどちらに感じられますか？」と尋ねるweb質問紙調査を1999年5～7月にかけて、1質問項目当たり約200名の回答者という規模で行い、当方の上記の考え方がほぼ正しいことを確認した。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

まとめ

上記結果から、
（１）ドライな行動様式の人は、対人関係において、運動・活動性が高く、相手へと近接しようとする指向が弱い人である。

（２）ウェットな行動様式の人は、対人関係において、運動・活動性が低く、相手へと近接しようとする指向が強い人である。
とまとめられること。

分かりやすく言い換えれば、対人関係で、互いに他者とベタベタくっつき合って動かないのが好きな人がウェットで、他者とバラバラに離れて活発に動き回るのが好きな人がドライということになる。要約すれば、「相互離散・移動＝ドライ、相互近接・定着＝ウェット」ということになること。

人間が、対人関係の中で他者に与えるドライ・ウェットな感覚は、運動エネルギーの大小や、引力・粘着力（分子間力相当）の强弱という点で、それぞれ気体・液体分子や、乾いた・湿った物体一般が人間にもたらす感覚（ドライさ・ウェットさ）と、本質的に同じ起源を持つ、と考えられること。

(c)1999-2004初出

ドライ・ウェットな対人行動と気体・液体分子運動との関連について

1992-2008初出

人間行動へのドライ・ウェットさの視点の導入は、今までほとんど接点のなかった、人々の対人・社会行動と、分子や物体運動に関する物理学とを結びつける効果をもたらす。

要するに、ドライ・ウェットな人〜物体〜分子といったサイズの異なる各粒子は、粒子のサイズが違っていても、ドライな場合、
ウェットな場合とで、それぞれ共通の行動・運動様式を持っていることを示すことができるのである。

各粒子の動きが、気体分子の運動パターンと同じ場合は、人間には、粒子の動きが、分子〜人間まで共通に、ドライに感じられる。

一方、各粒子の動きが、液体分子の運動パターンと同じ場合は、人間には、粒子の動きが、分子〜人間まで共通に、ウェットに感じられる。

（注）上記のアイデアを筆者が最初に思いついたのは、1992年頃です。

（注）上記の、液体・気体分子運動パターンという言い方を、より簡略化して呼びやすく、覚えやすくする必要がある。

以下では、気体分子運動パターンは、ドライな（乾いたDry）感覚を与えるため、頭文字のＤを取って、動作パターンＤと呼ぶことにすること。

一方、液体分子運動パターンは、ウェットな（湿ったWet）感覚を与えるため、頭文字のＷを取って、動作パターンＷと呼ぶことにすること。

こう略すことで、例えば、液体分子群や、日本人の行動様式が共通の「動作パターンＷ」に沿っており、気体分子群や、欧米の人々の行動様式は共通の「動作パターンＤ」に沿っている、などと簡便に表現することができる。

上記の説明が正しいことを、webでのアンケート調査（2005.03下旬実施）により確認したこと。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

以上の結果により，気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させるとドライな性格と認知され，一方，液体分子運動はウェットな性格と認知されることが分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティはドライに，液体分子運動パターンと同様に振る舞う人ではウェットに感じられると考えられる。

上記の気体分子運動パターン（動作パターンＤ）、液体分子運動パターン（動作パターンＷ）は、言葉で言い表すならば、以下のような単語～短文で表現できると考えられる。

表 30

上記の表現が、本当に、それぞれ動作パターンＤならよりドライに、動作パターンＷならよりウェットに感じられるかどうか、2005年9月頃、アンケート調査を行った。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

ここで、気体、液体分子運動パターンに従った粒子の動きは、従来の社会学や心理学における概念表現に合わせるならば、それぞれ、以下のように表せること。

表 31

より詳細には、以下の表を参照されたい。

ドライ（気体的）・ウェット（液体的）な分子・粒子の運動パターンを整理した表。

表 32

上記気体・液体の分子運動を、人間の行動に直して捉えたものとしては、以下の表を参照されたい。

分子～人間に共通な、粒子の行動パターンを、人間個人の性格として整理した表。

皆さんが、。ドライないしウェットな性格の人になろうと思ったら、以下の表に書かれているような態度を、日頃取るように心がけましょう。

表 33

このことから、気体・液体分子運動シミュレーションと相似の方法によって、ドライな社会、ウェットな社会の人々の行動を、コンピュータでシミュレートできる、と言えること。

例えば、日本、東アジアの人たちがウェットで、欧米の人たちがドライだというのは、農耕、女性主体の、日本、東アジア社会の人た

ちの行動様式が、本質的に液体分子運動に似ており、一方、遊牧・牧畜、男性主体の、欧米社会の人たちの行動様式が、気体分子運動に似ていることを示している。

遊牧・牧畜、男性中心の欧米社会は、人々の動きが、空気のような気体に近く、気体分子運動（動作パターンＤ）でシミュレートでき、「気体型社会」と呼べること。農耕、女性中心の日本、東アジア社会は、人々の動きが、水滴のような液体に近く、液体分子運動（動作パターンＷ）でシミュレートでき、「液体型社会」と呼べること。

このように、ドライ・ウェットさの視点を世界の社会文化の分析へと導入することは、物理学で発達している物体の動きをコンピュータでシミュレートするノウハウを、そのまま社会学、心理学で生かせるようになる効果をもたらし、社会学、心理学の発展に寄与する度合いが大きいと言える。

ドライ・ウェットな物体（分子を含むこと。）～人に共通する運動・行動パターンについて、以下の図にまとめたこと。

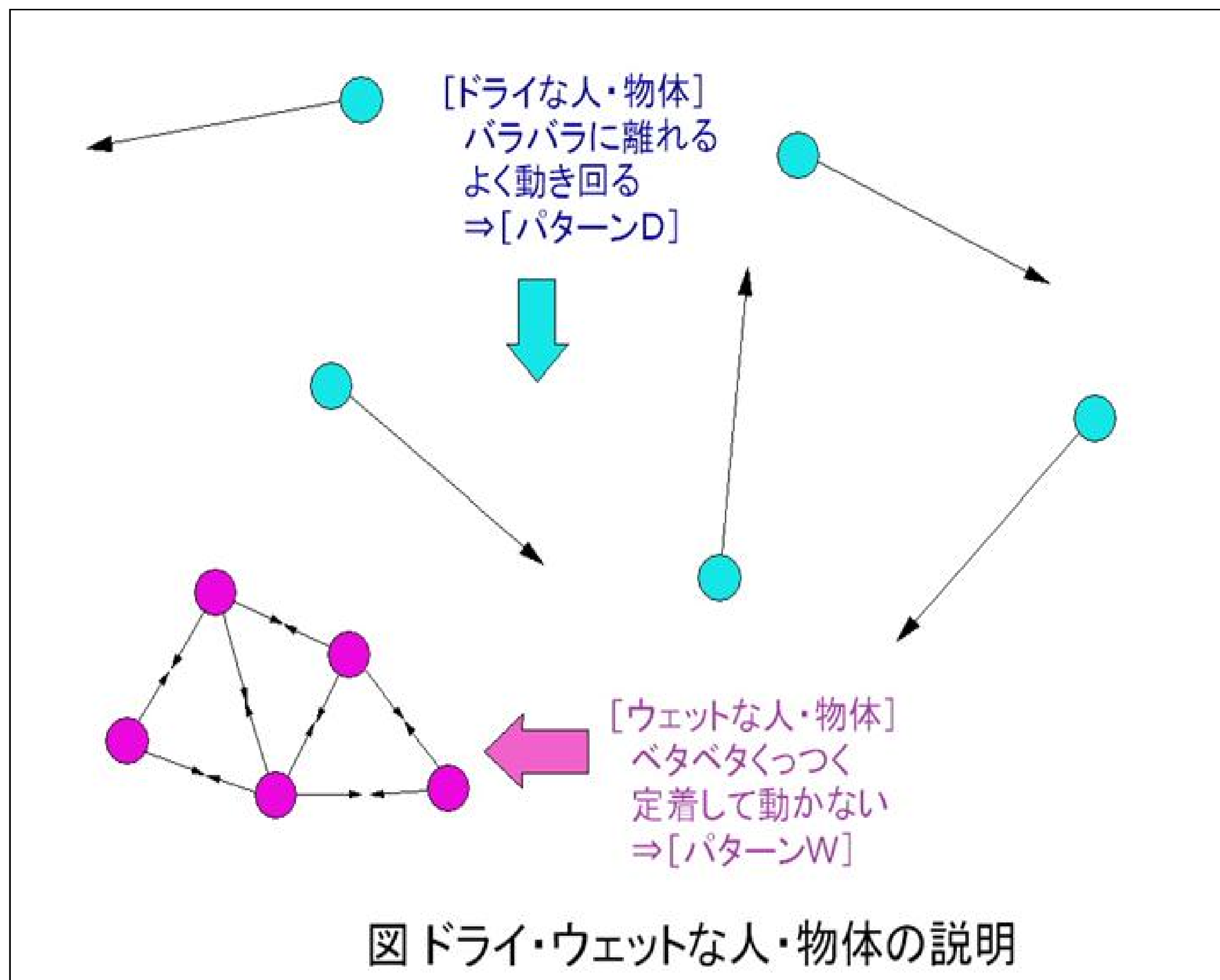


図 ドライ・ウェットな人・物体の説明

ドライ・ウェットさの分子～物体～人間レベルの間の相互関連についてのより詳しい説明は、以下の通りである。

１気体・液体分子運動パターンの説明

人間のどのような行動様式が、なぜドライ・ウェットな対人感覚を生むかについては、まず、本来人間にドライ・ウェットな感覚の相違を与える、物理的な気体・液体の性質の相違を生み出すメカニズ

ムを、改めて確認する必要がある。ドライな感覚を与えるのが、気体で、ウェットな感覚を与えるのが、液体である。両者の相違を見るには、視点が、分子レベルまで小さくなる必要がある。

具体的に気体分子と液体分子の、両者の相違を生み出しているのは、。
［1］運動エネルギーの大きさ（動きの度合い）の違い
液体では、動き回る度合い（運動エネルギー）が小さい（あまり動き回らない、低速であること。）こと。
気体では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きい（よく動き回る、高速であること。）こと。
［2］「分子間力」の働く度合いの違い
液体では、分子同士の間に、互いの距離を縮めて、互いに引き付け合い、くっつき合い、足を引っ張り合ったり、牽制し合う、「分子間力」という引力が、大きく働いている。
気体では、分子同士の間に、上記の、互いに相手と近づき、引きつけ合う「分子間力」が、ほとんど働いていない。
であること。
「分子間力」の働く度合いが、液体で大きく、気体で小さいのは、。
（１）液体分子では、運動エネルギーが小さいため、もともと分子間に存在する、相互に引きつけ、くっつき、牽制し合う力（分子間力）を振り切って動き回ることができず、分子間力のいいなりになっている。
（２）気体分子では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きいため、分子間力を振り切って動き回ることができ、「分子間力」の影響から自由になっている。
ためであること。
「分子間力」の働く度合いが、液体で大きく、気体で小さいのは、。
（１）液体分子では、運動エネルギーが小さいため、もともと分子間に存在する、相互に近づき、引きつけ、牽制し合う力（分子間力）を振り切って動き回ることができず、分子間力のいいなりになっている。
（２）気体分子では、動き回る度合い（運動エネルギー）が大きいため、分子間力を振り切って動き回ることができ、「分子間力」の影響から自由になっている。
ためであること。

２物体一般への適用

液体の水は、指先で触れると、濡れて皮膚にくっつき、まとわりついて離れようとしない。その点、液体の水と指先との間には互いにくっついたままの状態でいようとする引力が働いていると言える。また、液体の水は指先を動かさない限り、いつまでも同じところに留まって動かない。その点、液体の水は、気体の水蒸気などに比べて、運動・活動性が低いと言える。

そこで、さらに考えを拡張すると、物体一般において、以下の法則が成立する、と推定される。
（１）物体（分子～人間）の、運動・活動・移動・流動性が高く、相互間に働く引力（結合力）が小さいこと。（互いに離れること。）その場合、ドライであること。（乾いていること。）
（２）物体（分子～人間）の、運動・活動・移動・流動性が低く、相互間に働く引力（結合力）が大きいこと。（互いに離れないこと。）その場合、ウェットであること。（湿っている、濡れていること。）

この推定が正しいことを説明するには、分子よりもずっと人間に近いサイズの物体において推定が成立することが必要となる。そうしたより人間寄りのサイズの物体としては、例えば、海岸や河川、砂漠に分布する砂の粒や、人間（特に女性）の髪の毛、大豆を発酵させて作る納豆、溶けた糖分を冷やして固めて作った菓子のキャンディ、より大きなものとしては、卓球用のプラスチックボールや、バレーボールなどがあげられる。

乾いた（ドライな）砂は、触っても手にくっつかずサラサラと一粒ずつバラバラに離れて落ちる。（それは、接着・粘着性がない。）また、そうした砂は、風が吹くとそれに従ってサラサラと移動する。（それは、流動性がある。）これに対して、湿った、濡れた（ウェットな）砂は、触ると手にくっついてそのまま離れようとしない。（それは、接着・粘着性がある。）また、そうした砂は、団

子状にひとかたまりになって、風が吹いても動こうとしない。（それは、流動性がない。）

水に濡れた髪は、髪の毛同士がひとまとまりになってなかなかバラバラになってくれないし、風が吹いてもなびいて動こうとしない。一方、乾いた髪は、風になびいてサラサラ・バラバラと一本ずつ個別に分離して動き、流動性がある。

納豆は、かき回すとネバネバとした糸を引いて互いに糸で接続し、くっついて一つにまとまった状態で静止しようとする。その際、一粒の豆と豆との間を引力が糸を引く形で働いており、分子間力相当の力に相当すると考えられる。

表面が溶けた（表面が液体化した）キャンディの粒々は、指先や他のキャンディとベタベタくっついて取れない。一粒ずつ動かそうとしても、互いにくっついて動かすことができない。

あるいは、卓球用プラスチックボールやバレーボールは、そのままでは手離れよく一つずつバラバラになって動き回るが、接着剤を表面に広く塗り付けたり、両面粘着テープ全面に巻き付けるとベタベタ互いにくっつき、結合し合って離れず、一つずつバラバラに独立させることが難しいし、活発に動かそう、飛ばそうとしてもすぐ別のところに接着してしまって動こうとしない。

この場合、こうした物体の接着・粘着性（いったんくっつくと離れようとしない性質）が、互いの間に働く引力（互いに離れずくっつき、接続し合おうとする力）を大きくし、運動・活動・移動・流動性を奪っていると考えられること。すなわち、物体における互いにネバネバ、ベトベトと互いにくっつこうとする接着・粘着性が、物体同士を互いに引き合わせ、動きにくくする形で、物体にウェットさをもたらすことになる。これは、例えば接着剤が長時間外部に露出し続けて溶剤が抜けてベタベタしなくなると、乾いた、ドライになったと感じられることからも例証される。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

以上の考えを分かりやすい言葉でまとめると、一般に、粘り気・接

着力があり、互いにベタベタくっつき合って動かない物体はウェット、反対に、手からサッと離れて、互いにサラサラと離れて動き回る物体はドライに感じられる、と言える。

この場合、ウェットな物体は、互いに他の物体とくっつき合おうとし、ドライな物体は互いに離れようとする点、両者は、物体間の相互作用、社会関係の面から見て、対照的な性格を持つと言える。

こうした、分子レベルよりもずっと大きい物体サイズの事例から、前記の分子レベルでのドライ・ウェット感の範囲を物体一般に広げることが可能だと考えられる。

３対人関係への応用

この物体一般におけるドライ・ウェット感覚をさらに人間レベルまで拡張して捉えた場合、水のような液体、空気のような気体が、人間に対してウェット・ドライな感じを与えるしくみと、人間同士が、人付き合いで、互いに相手に対して、ウェット・ドライな感じを与えるしくみとは、互いに共通なのではないか、と考えられる。

すなわち、物体一般レベルで見られる、運動・移動性および引力の概念を人間に当てはめることにより、
（１）人間が、一カ所に止まってあまり動こうとせず（活発に動き回る度合いが小さく。）、周囲の他者と互いに近づき、くっつき合い、離れようとしないこと場合。（引力が大きく働いている場合。）そうした場合、対人関係に（運動エネルギーが小さく分子間力の大きい液体分子同様。）ウェットな感覚が生まれる。
（２）人間が、一カ所に止まらずにあちこち移動・流動する場合。（活発に動き回る度合いが大きい場合。）周囲の他者との間で、互いに近づいたり、くっつき合ったりせず、離れようとする場合。（引力があまり働いていない場合。）そうした場合、対人関係に（運動エネルギーが大きく分子間力の小さい気体分子同様。）ドライな感覚が生まれる。
と考えられること。

この場合、物体サイズを分子サイズから人間サイズへと揃えて眺めることにより、両者に共通して働く、物体の動き回るエネルギーを「運動エネルギー（分子レベル）」＝「運動・活動・移動・流動性（物体～人間レベル）」、物体間で互いにくっつき、接続・結合・集合し合い、牽制・束縛し合う力を「分子間力（分子レベル）」＝「引力、結合力（物体～人間レベル）」として、同様に捉える事が可能となる。

上の説明を一言でまとめると、活動や運動面での活発さの差、およびそれによってもたらされる、分子間力相当の引力の大小から、それぞれウェット・ドライな対人感覚の分化が生じる、ということになる。（この説明を考案したのは1991～1992年頃である。）

この場合、人間においては、物理的な肉体による活動・運動や身体同士の引っ張り合いと並んで、具体的な物理運動を伴わない心理的な活動・運動や相互牽制、接近をも同時に考える必要がある。例えば、机の前に座ったままで、知的好奇心に満たされて様々な分野の書籍を読みあさったり、いろいろ活発に物事を考えたりしている状態では、物理的には不活発だが、心理的には活発に動き回っていると捉えることができる。あるいは、物理的に離れた地点に暮らしている恋人同士が電話によるコミュニケーションで強い心理的一体感を抱いている状態では、物理的には遠いままでも、強い心理的引力が両者の間に働いていると捉えることができる。

このように、人間の活動・運動や引力については、物理的なものと心理的なものに分けられるが、以下ではこのうち心理的な方を主に取り上げる。人間の身体の物理的な活動・運動や身体同士の引っ張り合いは、あくまで身体内部の神経系の活動を反映した表面的なものに過ぎず、神経系の働きに基づく心理的な活動・運動や引力の方が、人間の行動をより根源的に決定していると考えるためである。

対人感覚でドライな感覚を与える運動・活動性の実態は、人間に内在する、あちらこちらの互いに離れた地点間を活発に移動しようとする心的指向（空間移動指向）、および、今まで行ったことのない地点・地域へも進んで拡散していこう、新天地を積極的に切り開こう（新規対象を開拓しようとすること。）とする心的指向（拡散指向）であること。この場合、物理的居場所や心理的に興味ある分野を変えることで生活上の雰囲気を一新し、新たな刺激を得たいとい

う欲求や、今まで出会ったことのない未知のものごとに対する好奇心、言い換えれば（今まで〜ここしばらくの間）経験したことのない新たな情報（新鮮な情報）に接したいという心的衝動（新規情報受信衝動）が運動・活動性の原動力となっている。これとは反対の、一カ所に静止して動こうとしない定住・定着・不拡散指向は、運動・活動性の欠如を意味し、対人感覚ではウェットな感覚を与える。

一方、対人感覚においてウェットな感覚を与える心理的な引力、結合力の実体は何であるか? それは、人間に内在する、周囲の他者と心理的に近くなろう、近い状態でいようとする指向（心理的近接指向）であること。

すなわち、（心理的に）相互に引き合うということは、互いの（心理面での）存在位置を次第に近づけていき、最終的には抱き合って一つになること。（一体化する、融合すること。）そして互いにくっついて離れないということであること。相手への心理的な距離を縮小していき、最終的にはゼロにしよう、接続しよう、つながろうとする指向が強いと、それが互いの間であたかも引力のように感じられ、対人感覚においてウェットな感じをもたらす、といえる。

以上の説明を分かりやすい言葉でまとめると、対人関係において、以下のように言える。
（１）心理的に相手にベタベタくっついて離れようとしないこと。（粘着・接着・接続・結合・集合性を持ったこと。）そして、そのまま動こうとしないこと。（定着・定住性を持ったこと。）
（２）相手に対してあっさりとして深入りせず、すぐサラリと離れること。（非粘着・非接着・切断・離散性を持ったこと。）そして、あちこち活発に動き回って移動すること。（運動・活動・移動・流動性を持ったこと。）

この場合、粘着・接着力は、互いに近づき、引きつけ合い、くっつき合うことを指向する点、引力の一形態と言える。この粘着・接着力は、また、人や物をその場に引き止めて離さず、動けなくする非移動化（非活動化、非運動化）＝定着・定住化の効果も併せて持っている。

分子にせよ、物体にせよ、人間の心理にせよ、相手にベタベタと粘着的にまとわりついて離れず、そのまま動こうとしない場合は、皆共通にウェットに感じられ、その逆は共通にドライに感じられると言える。

４．

ドライ・ウェットな性質というのは、粒子単独を見ただけでは見えてこない。複数粒子の形成する社会、個体群を見ることで初めて見えてくること。

ドライ・ウェットの相違は、粒子と他粒子との相互作用のあり方の違いである。互いに他粒子とくっつく、一体化する、相互束縛するのがウェットで、他粒子とバラバラに離れて自由に動くのがドライである。

こうした性質は、粒子を複数同時に見ないと分からない性質である。その点、ドライ・ウェットさの検討を.行うには、粒子単独の動き、単独者の心理を見るだけではダメで、極めて社会的視点が必要なのである。

この場合、相互作用する粒子の種類やサイズは、互いに同じとは限らない。サイズに関しては、一方が極小サイズでもう片方が巨大サイズということもある。例えば、人間（巨大）の皮膚にくっつく液体の水の分子（群）（極小）が、種類とサイズが異なる例に当たる。粒子のサイズが異なっても、粒子相互の間に働くドライ・ウェットな性質は観察可能である。

「気体・液体型行動様式」についての検討～人間行動の分子運動論的把握～

1992年05月24日。初出。
気体と液体の統合版。

（2022年04月。私は、文章の表現を、自動翻訳サービスに、より適合した表現となるように、より分かりやすく改めました。文章の内容それ自体は、オリジナルのままとなっています。）

１.
人間行動を説明するレベル。それは、基礎的なものから順に、下記のような内容が、考えられる。
１ 物理化学レベル（物体の運動）
２ 生理学ないし生物学のレベル（神経細胞から動物まで。遺伝。）
３ 人間固有レベル（大脳の前頭葉。それが生み出す、文化や文明。）

今までの、人間行動を扱う”行動科学”において。それは、下記のような現状である。
１ 社会学や社会心理では、人間固有レベルしか、扱わないこと。（そこでは、動物実験すら、殆どなされないこと。）
２ 心理学でも、せいぜい生物学レベルまでであること。（動物行動学の応用。生理心理学にみられる神経細胞研究。）

物理化学的考え方を、比喩として、行動科学へと、応用すること。そうした例は、かなり存在する。
例。
//
心理学 精神物理学（ウェーバー。フェヒナー。）
社会心理学 集団力学。（レヴィンなど。）ソシオメトリー。（モレノ。）

社会学 社会システム論や自己組織理論（パーソンズなど。）
//
しかし。
人間を、単なる比喩ではなく、物理的存在や物体として、扱うこと。その行動を、物体の運動として捉えること。そうした、最も基礎的な物理化学レベルへのアプローチ。それは、未だ、あまり検討されていない。
こういった状況は、言わば、基礎工事をしないまま、高層ビルを建てているようなものである。それは、研究を進める手順として、適当かどうか疑わしい。
そこで。
従来、より高次の人間固有レベルのものとして研究されてきた事項。（例えば、対人関係や民族性など。）それらが、より基礎的な物理化学レベルで説明できないかどうか、検討し直す必要がある。

２.
個々の人間。彼らを、宇宙・地球レベルの極めてマクロ的な視点から眺めた時。彼らを、物理化学的な分子程度の大きさとして、極小化して捉えることができること。
しかし。
分子レベルにまで極小化された、物理化学的存在としての人間。ないし、そうした人間集団の行動様式。それらを、どのような形で捉えることができるかについて。それについては、目立った研究は、現状では、行われていない。
（人間を分子レベルまで極小化して捉える、物理化学的アプローチ。それ自体が、そもそも、社会科学の興味の対象になっていない。）
分子化された物理化学的存在としての、人間ないし人間集団。それらの、遺伝的あるいは文化的行動様式。（民族性や社会的性格。）それらが、物理化学における現実の分子運動法則と、直接の関連を持つかどうか? そのことについても、既存の研究では、不明のままである。（物理学を、社会心理分野に応用した研究。その例としては、K.Levinらの集団力学理論などがある。しかし、それらの内容は、いずれも比喩的レベルに、止まっている。）
もしも、人間の遺伝的・文化的行動様式が、分子運動法則と直接の関連を持つことを、立証できた場合。
現在、物理化学で使われている、コンピュータを用いた分子運動シミュレーション技術。そうした技術を、人間（集団）の研究に、そ

のまま応用できる。それは、以下の内容の実現に、繋がる。社会科学分野でのコンピュータ活用のレベル。それを、飛躍的に向上させること。
この文章の目的。
１ 従来の、民族性や社会的性格といった、社会学や心理学や文化人類学固有の研究テーマとして扱われてきた対象。そうした対象を、物理化学の分子運動論そのものとして扱えること。それが可能であることを示すこと。
２ 分子化された物理化学的存在としての人間ないし人間集団の遺伝的ないし文化的行動様式。それらが、流動性を持つ液体気体分子の運動法則に、大局的には従っていること。それを示すこと。
上記の内容により、下記の内容が、（単なる比喩としてではなく、）直接可能であることを示すこと。社会科学への、物理化学的アプローチ。社会科学に対する、コンピュータを用いた分子シミュレーション技術の応用。

３．
（１） 人間行動を、マクロ的な視点から眺めた場合。それらは、社会・文化的行動を含めて、（本人が自覚するしないに関わらず、）物理化学的な液体気体の分子運動法則に従っていること。
人間は、厳密には、物理化学的分子とは、知覚や連合や運動の機能を内蔵する点で、異なる動きを示す。しかし、彼らは、大局的には、物理化学的な存在として振る舞う。
（２） 遺伝的な側面。女性ないし男性の行動様式。それらが、以下の（１）の内容に従って、以下の（２）の内容に相当する。（１）それぞれの持つ生物学的貴重性。その度合い。その大小。（２）液体ないし気体の分子運動法則。
（３） 文化的な側面。適応先の自然環境における、液体優位ないし気体優位の、度合い。（湿潤ないし乾燥の度合い。）そうした度合いに従って、以下の内容が、液体ないし気体の分子運動に相当する。農耕社会。（定住的で集約的。）ないし、遊牧社会。（移動的で粗放的。）それらの社会の行動様式。（民族性。）
（文化的な人間行動様式の、乾湿の度合い。それは、自然環境の乾湿の度合いに、正相関している。）
（４） 遺伝的な、女性ないし男性の行動様式。文化的な、自然環境の乾湿に由来する、農耕社会ないし遊牧社会の行動様式。上記の両者のペアは、相互に対応関係にある。自然環境への適応度から見た場合。女性は、液体優位環境（湿潤環境）の下の農耕社会におい

て、優位となる。男性は、気体優位環境（乾燥環境）の下の遊牧社会において、優位となる。

４．
人間行動には、相互作用面での流動性が絶えず存在する。従って。
人間行動を、物理化学的に捉える場合。その比較の対象となるもの。それは、流動性のある、気体液体の分子運動である。（流動性のない固体。それは、比較の対象から外される。）
この節では、以下の内容について、まとめる。液体ないし気体の分子運動。それらの基礎的な性質。
まず、分子間力について説明すること。次に、分子運動の原理を、分子間力中心に、動作次元（M）と、分布次元（D）とに分けて、整理すること。
次に、基本原理の各項目について、液体気体分子運動の比較を、分子間力中心に行い、表に整理すること。
この説明文の中には、以下の内容が、含まれる。分子を擬人化した表現。社会科学で用いられてきた概念を、積極的に流用したもの。
その内容は、以下の内容の実現を、目的としている。従来の物理化学と、社会科学との、用語面での橋渡し。

Ｉ 分子間力
各分子は、”分子間力”（相互に引き合う力）を持つこと。
”分子間力”の作用する度合い。（複数分子相互の引力の働きやすさ。）それは、下記の内容に負相関すること。
（１） 各分子間の”距離”。
（２） 各分子個体の、相互の引力を振り切る”運動エネルギー”。

M 動作次元
各分子の動作と、”分子間力”との関係について、まとめること。

Ｍ１ 各分子の動作エネルギーについて。それは、下記の各項目の積として、表される。
流動性のある分子は、各自、中庸レベルから高位レベルの、運動エネルギーを持っている。
各分子の動作時のエネルギー。それは。
０１ ”質量”

０２ ”速度”

各分子の動作エネルギー。それは、以下の各項目の内容に、正相関する。
１１ 動作の”スケール”の大きさ
２１ 動作の”能動性”（自発的に動き回る度合い）
３１ 相互接触時の”当たり”のハードさ・破壊的である度合い
３２ 相互接触時の傷つきやすさ
３３ 現状打破や変革へのエネルギー

”分子間力”が作用する度合い。それは、各分子の運動エネルギーに負相関する。
したがって、以上の０１～３１の指標の値は、”分子間力”に負相関する。

Ｍ２ 各分子の動作決定のあり方。それは、下記の内容によって、表される。

Ｍ２１１ 各分子の各々について。
０１ ”自由度”（周囲分子の物理的束縛を受けずに決定できる、度合い。）
０２ ”自律度”（周囲とは独立して決定できる、度合い。）
０３ ”独創度”（周囲分子と異なる、自分だけの決定ができる、度合い。）

これらの値は、下記の度合いを表す。各分子が、その引力を振り切って、自由に動き回れる度合い。ないし。各分子が、動作決定時に、周囲個体の引力の影響を結果的に配慮しなくて済む、度合い。それらの度合い。それらの値は、”分子間力”（分子間相互の引力）に負相関する。
分子間力が大きいほど、下記の度合いが、強まる。各分子における、”自由からの逃走”。〔E.Fromm。〕

Ｍ２１２ 分子間について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”相互依存度”（相互に、他分子の動作決定の影響を被ること。その度合い。）
０２ ”相互牽制度”（相互に、他分子の動作を規制し束縛し合うこ

と。その度合い。相互に、”足を引っ張り合う”こと。その度合い。）
０３ ”画一度”（個別にバラバラに動くことができなくなること。その度合い。）
０４ ”集団主義度”（相互の引力で、ひとかたまりになって一斉に動くこと。その傾向。その強さ。）
０５ ”（同類）他者指向度”（動作ターゲットを、同類の他分子とすること。その傾向。相互の”温もり”を求めること。その傾向。）
０５B ”擬人化度”（非同類の無機物などを、同類の他者に準えること。その度合い。）
０６ ”相互和合度”（相互が、”仲良く””親しみ合う”こと。度合い。）この値については、以下の内容の実現が、可能である。以下の０６１から、以下の０６３へと、細分化して表すこと。この値は、また、分子の相互融合や相互一体化の度合いに正相関する。（Ｄ２２－１１。）
０６１ ”引力追認度”（相互の間で引力が作用すること。そのことを、（積極的に）追認する度合い。）
０６２ ”斥力抑止度”（相互の間で、斥力（反発力）の作用を抑止すること。周囲と反対方向への動作の存在を許さないこと。”満場一致”を指向すること。それらの度合い。）
０６３ ”引力無効化抑止度”（相互の間で、（周囲の）引力を、振り切ること。（そうした引力を、無効化すること。）そのことで、自由に動き回ること。それらの実現を抑止すること。その度合い。）

これらの値は、各分子動作の”自由度”に負相関する。従って。これらの値は、”分子間力”と正相関している。

Ｍ２１３ 対周囲について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”同調度”（周囲との、動作面での調和。その実現を求める度合い。）
０２ ”恥の感じやすさ”〔R.Benedict〕（相互に、周囲の他分子に注目され、監視されていること。そのことを、感じる度合い。）
０３ ”周囲の目の気にしやすさ”（相互に、以下の内容を、考慮すること。周囲の他分子が、彼自身について、どう感じているか？ そうした考慮の、度合い。）
０４ ”根回しの必要性”（彼自身の動作に対する事前の承諾。相互に、その実現を、周囲に対して、求めること。その度合い。）

これらの値は、以下の内容を示す。各分子の動作が、周囲他分子の動作に規定される度合い。従って。これらの値は、分子間力に正相関する。
これらの値は、各分子動作の”自由度”に、負相関する。

Ｍ２２ 各分子の動作方向（進路）。それらのあり方。それは、下記の内容によって表される。
０１ ”一定度””直進度”
０２ ”明確度”（物事の白黒がはっきりすること。その度合い。）

これらの値は、分子間力に負相関する。
そうした動作方向。それは、分子が相互に引き合うことで、ジグザクで場当たり的でファジーとなる。そのことで、その明確度が、減少する。
その結果。動作の”目的指向”性。（目的対象に向かって一直線に進む度合い。）その度合いが、減少する。

Ｍ２３ 各分子自身の動作に対する責任の取り方。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”分散”（他の分子との間へと、拡散すること。その度合い。）
０２ ”連帯化度”（他の分子と共同で、取ったり、持ち合ったりすること。それらの度合い。）

これらの値は、分子間力に正相関する。
相互に引き合う度合いが、増大すること。そのことで、下記の度合いが、増大する。各自の動作を、彼自身という１分子のみで、決定できなくなる度合い。そのことで、下記の度合いが、減少する。彼自身の動作に対する責任を、個別に負う度合い。
その結果。動作に対する”集団的無責任”の度合い。そうした度合いが、そのことで、増大する。

Ｄ 分布次元
各分子（集団）の分布について、分子間力との関係を中心に、説明すること。

Ｄ１１ 相互距離
流動性のある分子は、相互に、中庸な距離、ないし、大きな距離

を、保っている。
分子相互の引力が有効なこと。その度合い。”分子間力”が作用すること。その度合い。それらの度合いは、各分子間の距離に、負相関する。

Ｄ２１ 分子各々の分布について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”individuality”（各分子が、相互に分離独立すること。その度合い。”個人主義的”であること。その度合い。）
１１ ”視点の客観度”（相互に相手を突き放して見ること。その度合い。相手を見る眼における、非近眼性。）
２１ ”テリトリーの広さ”（各分子が確保する、彼自身専用の、空間。それらの広さ。）
２２ ”視界の広さ”（各分子が確保する視界。それらにおける、広さや遠さや見通しの良さ。）
２３ ”プライバシー”（各分子が、相互に、相手によって、彼自身の動きを監視されないこと。その度合い。）
２４ ”個室指向度”（各分子が相互の間に衝立を設けること。彼が、そのことで、彼自身の空間を、周囲から独立させること。その度合い。）
３１ ”（対環境）露出度”（各分子が、外部環境に対して、他分子の介在なく、直接露出すること。その度合い。）

これらの値は、分子間の相互距離に正相関する。従って、これらの値は、分子間力の大きさに負相関する。

Ｄ２２ 分子間の分布について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”相互接近度”（各分子が、相互に、距離的に近づこうとすること。その度合い。）
１１ ”融合や一体化の指向度”（各分子が、相互に、融合し一体化しようとすること。その度合い。）
１２ ”もたれあい度”（各分子が、相互に、相手にもたれたり、相手からもたれられたりすること。それらの度合い。”甘え”指向度。｛土居健郎。］）
１３ ”触れ合い度”（他分子との接触。それらにおける、期間や頻度や面数の、多さ。他分子と、べたべたくっ付き合うこと。その度合い。）

これらの値。それらは、以下の値に、正相関する。分子が相互に引力を働かせ合うこと。その度合い。それらは、従って、分子間力の大きさに、正相関する。
これらの値は、下記の度合いに、正相関する。各分子間の相互作用が、より”全人格的””家族的”になること。その度合い。
２１”テリトリー不明瞭化度”（相互のテリトリーの境界。それらが、ぼやけて不明確になること。それらの度合い。）
この値は、各分子の相互一体化の度合いに、正相関する。（Ｄ２２－１１項。）この値は、分子間力の大きさに、正相関する。
”間人性”〔浜口恵俊。）その度合いは、この値に正相関する。

Ｄ２３分子集合レベルでの分布について。それは、下記の内容によって、表される。
０１”分散”（分布領域の、空間的な散らばり。）
０２”スケール”（分布領域の、空間的広がりや、空間的なスケールの、大きさ。）
これらの値は、下記の値に、正相関する。分子間における、相互距離の大きさ。分子間における、引力の働きにくさ。
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、負相関する。
１１”集中度。凝集度。”（分布が、一箇所に固まること。その度合い。）
１２”連続度”（分布が、アナログ的に繋がること。その度合い。）
１３”（相互）保護度”（外部環境に対して、相互に、相手の衝立となること。そのことで、露出を防止すること。その度合い。）
これらの値は、以下の値に、正相関する。分子間の相互距離の小ささ。分子間における引力の働きやすさ。
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、正相関する。

２１”外れ値許容度”（分布面において、周囲への同調度の低い分子が存在し得ること。その度合い。）
２２”地方分権度”（分布における、各部分の、他部分に対する、分離独立。その度合い。）
これらの値は、分布の分散の大きさに、正相関する。（->Ｄ２３－０１項。）
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、負相関する。
３１”密度”（相互に密着する度合い。相互に、過密状態を指向する度合い。）
３２”地上指向度”（重力の影響が強まって、空間的に下方を指向す

る度合い。大地への指向。その度合い。）
これらの値は、分布の集中・凝集度に正相関する。（->Ｄ２３－１１項。）
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、正相関する。

ＭＤ 動作×分布次元
Ｍ．動作。Ｄ．分布。それらの両者が関連する項目について、分子間力との関係を中心に、まとめること。

ＭＤ１ 拡散性
１１ ”拡散度”（各分子の分布領域が、次第に拡散すること。その度合い。）
１２ ”分布枠非限定度”（分布空間を限定しないこと。その度合い。”枠や型に囚われない”こと。その度合い。体積一定で無いこと。その度合い。）
１３ ”未知領域指向度”（各分子が、他の分子が未だ分布しない領域へと、積極的に挑戦し飛び出していくこと。その度合い。）
１４ ”オリジナリティ度”（目的とする領域に、”最初に”入ること。その領域において、何か、新たに、発見や発明を行うこと。その度合い。）
１５ ”異分野交流指向度”（異なる領域へと出て行き、他分子（集団）と相互交流すること。その度合い。）
これらの値は、下記の値に、正相関する。動作エネルギーの大きさ。相互距離の大きさ。
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、負相関する。
これらの値は、分布における、下記の値に、正相関する。非”セクショナリズム”度。非”蛸壺”度。〔丸山真男。〕

２１ ”表面存在度”（分布領域の表面や界面。それらが存在すること。その度合い。）
２２ ”内外区別度”（分布領域における、内部と外部との区別。そうした領域における、境界。その内容を、はっきりさせること。その度合い。）
２３ ”縁故・閥指向度”（相互作用の相手を、領域内の同類分子へと、（仲間の内部に）限定すること。その度合い。）
これらの値は、下記の度合いを、示す。各分子が、相互に分子間力が働き合う同士だけで、かたまり引き止め合うこと。その度合い。
これらの値は、すなわち、以下の内容を示す。分布領域における”拡

散度”。（ＭＤ１－１１～１４。）それらの低さ。それらの値は、分子間力の大きさに正相関する。

３１ ”表面張力”（分布領域の表面面積を、最小化すること。その実現に掛けるエネルギーの大きさ。その度合い。）
３２ ”表面回避度”（各分子が、以下の状況を、避けること。その傾向。領域の表面に出て、領域の外部に対して、直接露出すること。）
３３ ”対内指向度”（各分子が、領域内部に入りたがること。その傾向。）
３４ ”排他度”（外部に対する窓口（領域表面）を、最小化すること。その度合い。）
３５ ”（対内）閉塞度”（領域内から外部へのスピンアウト。その実現が、困難になること。その度合い。”集団凝集性。”）
３６ ”（対外）閉鎖度”（領域外から内部への参入。その実現が、困難になること。その度合い。）
これらの値は、下記の度合いを、示す。相互に分子間力が働き合う分子同士。彼らが、そうでない分子を、部外者扱いすること。その度合い。
これらの値は、分子間力の大きさに正相関する。

ＭＤ２ 流動性
１１ ”移動・流動度”（分布空間を自主的に変えること。その度合い。）
１２ ”視野のスケール”（視野が、行動範囲の広がりにより、拡大すること。その度合い。）
１３ ”視野の多角性”（複数の視点から、対象を捉えること。その実現が、可能なこと。その度合い。）
これらの値は、下記の各項目に、正相関する。動作エネルギーの大きさ。分子相互の引力という、動作面におけるブレーキ。その掛かりにくさ。
これらの値は、従って、分子間力の大きさに負相関する。

２１ ”定住度”（相互に引力というブレーキを掛け合って、ほぼ同一位置に静止すること。そうした傾向。”植物化”の傾向。）
２２ ”現状維持度”（”外圧”が加わらない限り、現在位置に停滞し続けること。そうした傾向。）
２３ ”ストック指向度”（各分子の軌跡が、蓄積されること。そうし

た傾向。）
２４ ”前例有効度”（各分子の軌跡が、以前に他分子が通った地点を繰り返しなぞること。そうした傾向。）
これらの値は、”流動性”の項の逆を行く。これらの値は、分子間力の大きさに正相関する。

C 液体気体分子運動の比較
以上の原理や法則の面での説明をもとに、液体気体の分子運動を相互に比較すること。
液体気体分子は、各々、流動性を持ち、運動エネルギーを持っている。
”運動エネルギー”の度合い。
１分子当たりの質量を両者等しいと仮定した場合。
動作速度は、気体分子が、液体分子に比べて、格段に大きい。
”分子間力”の作用する度合い。（分子相互の引力の働きやすさ。）
１ 各分子間の距離が、気体の方が、液体に比べて、格段に遠い。
２ 各分子の運動エネルギーが、気体の方が、液体に比べて、格段に大きい。
そうした度合いは、上記の理由より、液体分子の方が、気体分子に比べて格段に大きい。
その結果。上記の原理や法則。その説明文。それらの内容。それは、下記の内容によって、表される。
１ 液体分子（集団）の運動は、分子間力の大きさに正相関する項目に、適合する。
２ 気体分子（集団）の運動は、分子間力の大きさに負相関する項目に、適合する。

表１は、以下の（１）と、以下の（２）との関係を、まとめたものであること。
（１）
上記で述べた原理や法則。それらの説明文の、各項目。
（２）
下記の、各項目。
//
１ 分子間力との、正相関ないし負相関。その度合い。
２ 液体分子運動との、適合ないし不適合。その度合い。

３ 気体分子運動との、適合ないし不適合。その度合い。
//

上記で述べた原理や法則。それらの内容が、現実の液体気体分子運動と対応が取れていること。そのことを示す例を、以下に挙げる。
Ｉ 分子間力
　液体内の分子間力を無効にすること。すなわち、液体を気体に変えること。その実現のためには、膨大な量のエネルギーを、外部から供給する必要がある。
Ｍ 動作次元
　動作方向の一定度や直進度。それらの度合いは、気体分子の方が、液体分子に比べ格段に大きい。->Ｍ２１１－０１。
Ｄ 分布次元
　分布の密度は、液体は、気体に比べて格段に大きい。（１０００倍。）->Ｄ２２－３１。
　同じ数の分子集団が必要とする領域の大きさ。（体積。）それは、液体において、より小さい。
例。
空気を抜いた風船の中に、液体の水を入れて、沸騰した湯に入れた場合。それは、水が気化した分、急激に膨張する。->Ｄ２３－０１。
　分布の空間的な上下について。気体は天上方向に浮上する。液体は地上方向に降下する。->Ｄ２３－３２。
ＭＤ 動作次元と分布次元との掛け合わせ。
　液体は、”体積一定”である。液体においては、”拡散”は、ほとんど見られない。
例。
仮に、液体の水を封入した容器の蓋を開けた場合。それは、気化した水蒸気のようには、出ていかない。->ＭＤ１－１１。
　分布領域の”表面や界面”。それらは、液体にのみ存在する。（例。透明なコップに水を注ぐと、境界線が見えること。）->ＭＤ１－２１。
　”表面張力”は、液体にのみ存在する。（例。水面に浮かぶ１円玉。）->ＭＤ１－３１。
　液体は、分布領域の移動や流動の傾向に、欠ける。
例。
水滴を、いったん水平面上に垂らした場合。それは、外から、息（外圧）を吹き掛け無い限り、いつまでもその場にとどまる。->ＭＤ２－１１。

(c)1992初出

心理的近接について

(c)1999.9-2005.10初出

行動様式のドライ・ウェットさを解明する上でキーとなる、個人同士の心理的な近さ・遠さを示す概念について、図説入りでまとめましたこと。態度がウェットになるほど、他者に心理的に近づこうとする度合いが強くなります。

1.心理的距離空間とは何か？。
元来、互いに同じ考えを持つもの同士は、「同志」などと互いに呼び合うなどして、互いの間の距離（mental distance）が小さい・近いと考えられる。一方、互いに異なる、ないし、反対の考えを持つもの同士は、互いの間の距離が大きい・遠いと考えられる。
こうした、対人関係における距離感の大きさは、従来、例えば、山根一郎（1987）などにおいて、（対人的）心理的距離という概念で捉えられてきたこと。

この個人間（対人的）心理的距離を説明するために、以下では、「心理的距離空間。（mental space）」という概念を、以下の内容であるとして、導入すること。
「人間の関心・興味の領域を、n次元空間の広がりにおいて捉え、かつその中のどの位置に、各人が存在するかを明示可能としたもの。（各人の存在位置は、各人の興味分野の相違によって異なる。）」

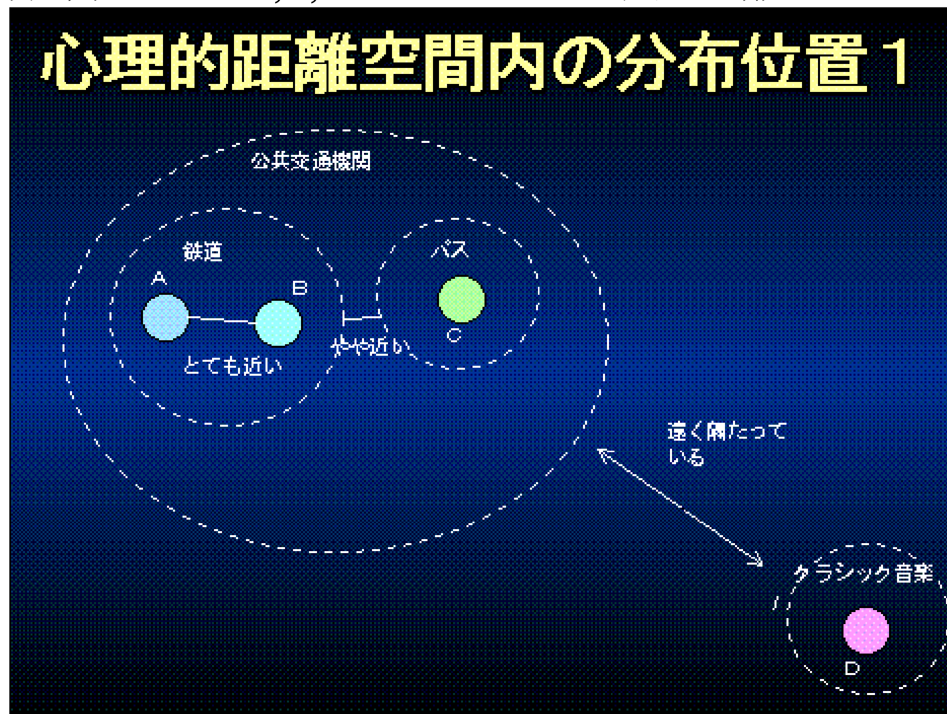
ないし、

「個人同士が、心理的に互いに近い位置にいるか、遠い位置にいるかを表すための多次元空間。」

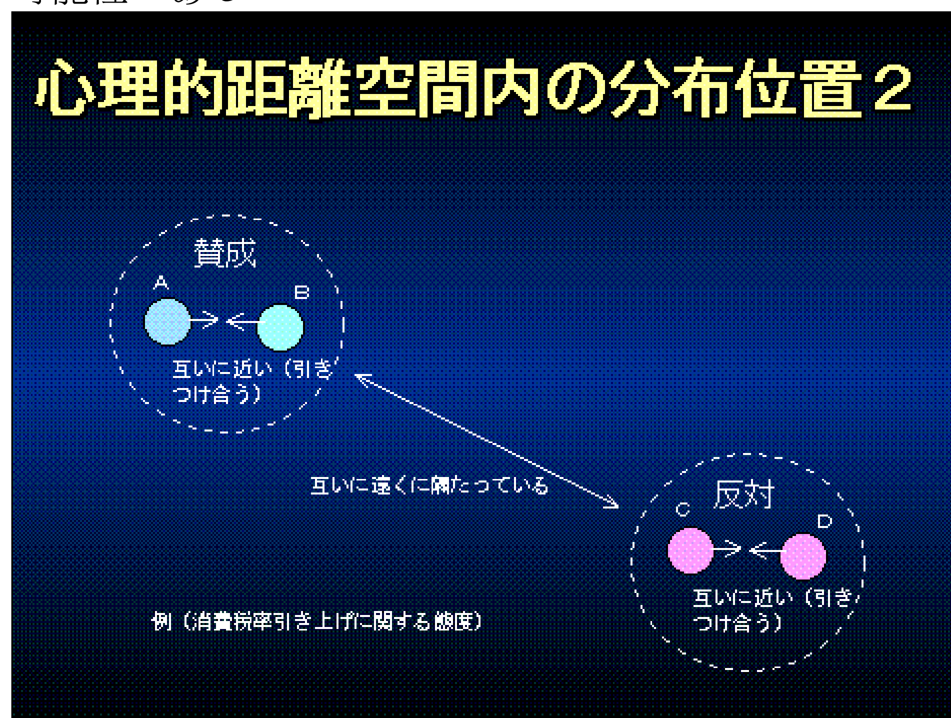
2.心理的距離空間内の分布位置について

心理的距離空間内における、複数の人間の分布位置（mentalposition）について考えること。人間が心理的距離空間内においてどこにいるかを知るということは、その人が何に興味を持っているか、どのような思想に賛成しているかを知るのと同じである。

例えば、AさんとBさんとが同じ鉄道という趣味を共有しているとき、2人の心理的距離空間内における分布位置は、鉄道という概念の近くに存在し、ほとんど同じである（近接していること。）こと。Cさんが、鉄道に近いバス（両者とも、公共交通機関ということでひとまとめにできること。）という趣味を持っているとき、Cさんの心理的距離空間内における分布位置は、AさんBさんのそれより少しずれている（離れている）が、大分近い。Dさんがクラシック音楽という、鉄道・バスとは全く異なる趣味のみを持っているとき、Dさんの分布位置は、A,B,Cさんのそれとは大きく離れている。



あるいは、消費税率引き上げ賛成・反対に関して、心理的距離空間の概念を導入したとすること。AさんとBさんとが、共に消費税率引き上げを支持しているとき、AさんとBさんとの心理的距離空間内における分布位置は互いに近い。この場合、位置が近接しているAさんBさんは互いに親近感をもって引き付け合い、一体化・集団化する可能性が高い。CさんとDさんが共に消費税率引き上げに反対しているとき、CさんとDさん同士の分布位置は近いが、賛成しているAさんBさんとはかけ離れた位置にいること。（遠いこと。）この場合、互いに近い者同士の間で引きつけ合う力が、CさんとDさんの間に働く可能性がある。



ここでCさんが消費税率引き上げ反対をやめ賛成に近づいたとすると、Cさんは心理的距離空間内を移動して（消費税率引き上げ賛成の）AさんBさんのいるところに近づくことになること。

3.心理的距離空間内の距離について

心理的距離空間内における距離の出し方は、以下の通りである。

（１）ある概念に属する者があったとして、その概念に近い者は、近くに、その概念に遠い者は、遠くにあるものとして、計算する。

（２）同一概念について、互いに同意見の者同士は、近くに、互いに反対の意見の者同士は、遠くにあるものとして、計算する。
（３）結びつきの強い者ないし結びつきの個数の多い者同士は、近くに、弱い（少ない）者同士は、遠くにあるものとして、計算する。
こうした、心理的距離空間内における距離は、脳神経系内において各概念を代表する細胞や細胞群同士の距離（刺激伝達時間で計ること。）と関係があるものと考えられる。

4.物理的空間との関連について
人間同士、物理的に互いに近くても、心理的距離空間内では互いに離れていること。（ないしその逆。）そうしたことが起こる。例えば、消費税率引き上げ支持者と反対者とが、同じマンションに同時に住んでいるような場合である。

5.心理的存在位置

心理的距離空間内で、各人が占める位置は、「心理的存在位置（mental position）」として捉えられること。
心理的存在位置は、。
1）領域・分野・次元（興味・関心、好み・趣味・イデオロギーなど）、
2）属性・所属（人種、性別、居住地域など）、
3）水準（知識・知能・学習・能力など）、階級・地位（組織内の職階など社会的なもの）、
4）パターン（思考、行動、習慣）
といった、各人がどこにいるか、属するかを指示する概念・用語で説明することが可能である。自分と相手との間で、それぞれの概念において、共通性が高いほど、互いの心理的存在位置が近く、心理的距離が近いと言える。例えば、同一の趣味を持つ者同士は、そうでない者同士に比べて、心理的に互いに近い位置を占める。逆に、

互いの価値観が異なるようになる、興味・関心を共有しなくなる、能力水準や成績が離れると、心理的に遠くなる。
心理的存在位置の遠近は、以下の二種類がある。
（１）遺伝的に決まっているもの。（男女の性差）
（２）後天的・文化的な所産（日本に住んでいる場合と、アメリカに住んでいる場合の生活習慣の差）に基づくもの

心理的存在位置が、互いに相違すると、互いにバラバラに分離しているとしてドライに感じられ、共通だと互いにひとまとまりに一体化・融合しているとしてウェットに感じられる。

心理的存在位置が互いに近い、心理的距離の近い者同士は、当初は見知らぬ赤の他人でも、いざ付き合い始めるとほどなく「おお同士よ」ということで、親密に仲良くなれる。また、友人、恋人として長続きすること。一方、心理的存在位置が互いに離れた、心理的距離の遠い者同士は、知り合った当初は親密でも、付き合いが進むに従って、互いの考えの相違が次第に気詰まりに思うようになり、だんだん付き合いが薄れると考えられる。

6.心理的近接指向

人間が取る態度において、互いの心理的存在位置を同じないし近くしようとする指向は、「心理的近接指向」といった言葉で表すことができる。

この場合、接近ではなく近接という言葉を使う理由。それは、以下の通りである。
接近は、単に相手に近づくのみであること。
近接は、接近の結果相手とベタベタくっついた状態をそのまま維持すること。（相手のもとに留まること。）そのことも含むからである。

（心理的に）相互に引き合うということ。それは、互いの（心理面での）存在位置を次第に近づけていき、最終的には抱き合って一つになること。（一体化する、融合すること。）相手への心理的な距

離を縮小していき、最終的にはゼロにしようとする指向が強いと、それが互いの間であたかも引力のように感じられ、対人感覚においてウェットな感じをもたらす、といえる。
このように、相手と互いに、心理的・物理的に近づこうとする、ないし近くにいつづけようとする心理的近接指向が、相手にウェットな感覚を与える心理的引力の実体である。人間が取る態度において、この心理的近接指向が強く、相手にくっついて離れようとしないとウェットに、そうした指向が弱く、相手からサラッと離れて構わないとするとドライとなる。

例えば、母親になつく子供とそれを喜んで抱きしめる母親や、恩師を慕う学生とそれを受け入れる恩師、恋愛関係にある男女など、互いにベタベタくっつく感じの人間関係においては、彼らの間に、この引力に相当する心理的近接指向が働いており、ウェットな人間関係であるといえる。

相手と心理的に接近する、すなわち心理的距離を縮小するには、。
1）「攻め」相手のもとに、自分から動いて心理的に近づこうとすること。
2）「引き」相手を自分のもとへと心理的に引き寄せようとすること。自分から離れて行こうとする相手を自分のいる心理的位置に止めておこうとすること。
の2つの方略が考えられる。両方とも、当該行為を行っている最中に、相手との間にあたかも心理的に引力が働いているように感じられることから、共に相手に対してウェットな対人感覚をもたらす。
「攻め」方略の例としては、例えば、共感・同意やなつき・慕いなどがあげられる。
共感・同意・同情は、相手に対して、「自分もあなたと同じことを感じました、考えました」と伝達することであり、相手と心理的に共通な面を持ち、心理的に近いことを示す態度である。これは、相手への心理的な距離を、自分から相手に近づくことで小さくしようとする心理的な指向である。
「なつく」ことは、心理的に離れている相手に対して積極的に近づこうとし、あるいは、近づいた状態をそのまま維持しようとして相手にべたべたまとわりつく行動である。親に対して愛着しくっつきたがる子供が、この例に当たる。「慕う」ことは、主に目上の人に対して、そばにいたい、行きたいと思うことである。教師に対して畏敬の念を持って近づこうとする生徒が、この例に当たる。このよ

うに「なつく」「慕う」ことで、その時々の相手との心理的位置を、自分が相手のいるところへと進んで動くことで、近づけようとするか、近い状態を保持しつづける行動は、傍目から見ると、当人と相手とが心理的に引き合って近づく、「心理的引力」が働いているように見える。

「攻め」方略の中には、水準面で、さらに。
1）「上り」自分より上位のレベルにいる相手に追いつこうとすること。
2）「下り」自分より下位のレベルにいる相手と同じレベルにまで落ちようとすること。
との2種類が考えられる。
「上り」の例としては、もともと学習成績のよくない者が、勉学に励んで、既存の成績優秀者の仲間に入ろうとすること。
「下り」の例としては、グループでの登山で一番体力の弱い者のペースに合わせて登ること。

一方、「引き」方略の例としては、勧誘・誘惑、化粧・服飾や、やきもち、嫉妬、援助などがあげられる。

勧誘・誘惑は、「あなたも、私と同じように○○しない？」といったように、相手を自分と共通の状態になるように、誘導しようとする行動である。これは、相手が自分との心理的距離を縮める方向に相手の動きを持っていこうとする指向に基づくものであり、相手にウェットな感覚を与える。
化粧・服飾は、外見を目立たせることで、そのまま放っておくと、自分とは無関係な方向に離れていく相手（特に異性）を、自分のいる方へと振り向かせよう、注意を向けさせようとする行動である。（自分へと引きつけようとする行動であること。）そのままでは自分に関心のない相手を、自分のいる方向へと心理的に引きつけよう、近づけようとするために取る行動である。そこに、相手の「気を引く」力、すなわち心理的な引力が働いていることは明白である。これは、相手への心理的距離を、相手が自分に近づくように仕向けることで小さくしようとする心理的な指向であり、相手にウェットな感覚を与える。
やきもちjealousyは、自分から離れて、誰か他の人と接近しようとする相手（特に異性）に対して、他人への接近をじゃまして、自分のもとち引き戻そうとする行動であり、相手が自分のもとへと心理的

に戻ってくるように引き寄せる点で、相手に対して心理的な引力を働かせていると見ることができる。
「引き」方略の中には、水準面で、さらに。
1）「上げ」自分より下位のレベルにいる相手を、自分と同じレベルにまで引き上げようとすること。
2）「下げ」自分より上位のレベルにいる相手の足を引っ張って、自分と同じレベルにまで引き下げようとすること。
との2種類が考えられ、「上げ」の例としては、他者に対する援助・救い、「下げ」の例としては、嫉妬心により他者の足を引っ張ること、があげられる。
嫉妬は、もともと自分と同じレベルにいて、互いに心理的に近かった相手が、何らかの理由で、自分よりもよりよい、より上位のレベルまで向上しようとした（例えば、相手が職場での上位職階への昇進を実現しようとした。）ため、自分が（相手から）離れて取り残された状態になったとき、相手を、今自分がとどまっている下位のレベルへと、相手の足を引っ張ること。（例えば、相手のスキャンダルを暴くこと。）そのことで、相手を再び引き戻すこと。（相手を引きずり下ろすこと。）そのことで、もう一度相手と自分とで同じ心理的なレベルを共有させようとすること。（例えば、相手の職階を自分と同じにしようとすること。）そうして、自分と相手との心理的な距離を縮めようとすること。そうした心の働き。こうした心理的位置の共有化への指向が強いと、ウェットな感覚が生じる。
援助は、自分よりも（例えば教科の学習水準などが。）下のレベルに甘んじている相手に対して、何らかのレベル向上に役立つ用具や機能の提供を行うこと。（例えば、教科の内容を分かりやすく教えてあげること。）そのことで、自分に近いレベルまで相手を向上させることにより、自分と相手との心理的共通性（例えば、当該教科で互いに高得点をマークすること。）の度合いを高めて、相手を、より心理的に自分のもとへと近づけようとすること。（例えば、当該教科に関して共通のレベルの話題を持てること。）
こうした心理的接近には、プラスの面とマイナスの面がある。プラスの面としては、友情・愛情のように、温かさ、「人間らしさ」をもたらす点があげられる。自分に対してなついたり、自分のことを慕ったりする相手からは、かわいい、親しみが持てるといったような、プラスの印象を受けるものである。一方、マイナスの面としては、相手にベタベタまとわりつかれたり、甘えられたりすることによって起きる束縛・じゃまな感じ・煩わしさがあげられる。こうしたプラス・マイナスの面は、そのまま、ウェットな性格・態度を持

つ人の長所・短所に読み替えることができる。
相手にベタベタまとわりつかれたり、やきもちを焼かれたりすることで感じる束縛やじゃまな感じは、相手からの心理的引力が働いた結果であり、心理的しがらみ感が生まれて自由に動けなくなること。（心理的な自由が奪われること。）そのことにより生まれること。こうした束縛・拘束感の強さをアンケート調査や面接で計測することで、目に見えない力である、ウェットさのもとになる心理的引力を実際に測定することができる。あるいは、相手にしつこくつきまとったり、べたべたくっついたり、一度話し始めるとペラペラしゃべりつづけて話を切らない、というように相手と近接状態が続くように（あるいは、相手との関係が切れないように）、維持しようとする行動を取る時間の長さ、頻度が、そのまま心理的引力の強さとして測定できる。

7.心理的近接への原動力
相手と心理的な近さを確保・保持しようとするエネルギーは、相手との心理的距離を短く保つ働きを持つ。こうした対人関係上の相互近接化指向こそが、物理的な分子間力相当の心理的引力に当たる。
人間は、心理的に近い相手（友人、恋人、家族…）を互いに求める傾向がある。あるいは、会った相手に対して自分と共通の部分を多くしようとすること。（心理的接近。）また、相手と自分とで共有するものが多い状態を保とうとすること。（心理的近接性の維持。）
互いに心理的に引力が働いているような状態。それらを求める点で、人間は根源的にウェットな存在といえる。
人間は、相手に受け入れられると快感が得られ、相手に拒絶されると不快感が得られる。人間は、自分と共通の意見を持つ相手に出会うのを好み、自分とは異なる、反対の意見を持つ相手と一緒にいるのを好まない。相手に受け入れられることは、相手が自分と心理的位置が同じことを示すことであり、相手が拒絶することは、相手が自分と心理的位置が違うことを示すことである。
自分と同じ意見の人ないし自分と意見の合う人は、自分に近く感じるものである。自分と意見が同じ人は、心理的距離空間上で存在位置が近い（心理的距離が小さい。）こと。ないし、自分と存在位置を共有していること。
人間は、自分と似た考えの人、すなわち心理的に近い人と一緒にい

るのを好み、結果として自分と同類だけでまとまる傾向を生み出す。（同類指向。）それは、自分に近い考えの人が自分のことを肯定して受け入れてくれることが、心理的に快感として感じられるからである。この快感を追求するため、人間は、周囲の他者と心理的に近接しようとする。すなわち、周囲の他者と互いに考えを共通化しようとして、考えを周囲に合わせようとすること。自分に似ていたり、好意をもってくれる人、味方になる人に接近し、喜んで協力したり、好意の交換を行おうとする親和欲求や、同調・流行への追従といった人間の社会行動は、周囲の他者との心理的近接がもたらす快感が原動力となって引き起こされる。

一方、自分と違った考えの人、すなわち、自分の興味のあることに対して無関心で冷淡だったり、自分の持つ意見を否定する人と一緒にいると不快感（違和感があって楽しくないなど。）を感じ、これ以上相手と一緒にいたくないと思う傾向が人間にはある。自分と心理的な距離が遠い人と付き合っても面白くないのは、人間の心の中に、相手との心理的距離に比例する形で、相手のことを不快に思う機構がビルトインされている証拠である。

このように、人間は互いに心理的に近接しようとする原動力を心の基幹部分に持っており、そういう点で本質的にはウェットな存在である。この原動力が、複数の人間同士を互いに心理的に近接させようとし、ひいては心理的に近い者同士がまとまってできる、集団・社会を作り出すと考えられる。

人間が自分と心理的な位置が同じか近い相手と出会うのを好み、自分と心理的位置が遠い相手と一緒になるのを嫌がることは、相手との心理的近接が「快く感じる」ことの証拠である。相手と心理的に接近すると快く感じる心理的な仕組みは、人間に共通にビルドインされたものであり、後天的な学習によるものではなく、遺伝的に予め決まっている、と考えられる。

相手との心理的近接は、心理的に「温かく」感じるものである。この温かさは、物理的に近接した場合、相手の体温によって「温かく感じる」メカニズムと同じであり、人間にとって最も自然で快いものである。

進化心理学的視点からは、互いに近接していた方が、互いにいざというときに助け合いの行動を起こしやすいため、危険から身を守りやすく生き延びやすい。人間が心理的に互いに近接していると安心するのは、互いに近接することを好む者が、好まない者よりも苛酷な環境の中で生き延びやすかったため、そうした性質が受け継がれた者のみが生き残った結果と考えられる。

周囲の他者と心理的に一緒でないと寂しい、孤独だという、不快な感じがもたらされる。心理的に近い人がいると安心・頼りになる、といった感覚が生まれるのも、そうした感覚が生まれる方が、生物としての生存しやすさが確保できるからであり、そういう心理的近接を快いと感じる感覚を持つ個体が、心理的に一緒の相手と互いに援助が受けやすく、より生き延びやすかったからと考えられる。
また、生物学的視点からは、以下のような説明も可能である。
相手と心理的に近接している場合、相手は、自分と共通な物の感じ方・考え方があることになる。そこで、相手のことを自分と同類であり、相手の存在を、自分の身体の延長・拡張が起きているかのように捉える。

生物には、自分自身の複製をできるだけ広い範囲へと、長い間持続するように、広めようとする根源的な衝動がある。遺伝子の振る舞いはまさにその通りである。
しかし、遺伝とは直接関係のない後天的・文化的な側面でも、自分の考え方や感じ方を長期にわたって広く伝えようとする衝動がある。遺伝的だけでなく、文化的にも、相手に自分と共通な部分があると、自分自身の複製を相手の中に見て、安心する。これは、遺伝的に近い親子関係だけでなく、遺伝的には関係のない友人・同好者関係にも見られる傾向である。
遺伝的に互いに共通な者同士（親子）には、心理的な物の考え方においても、共通の遺伝的背景が考えられることから、心理的に相手を自分自身の延長と見やすい。こうした心理的に近い相手を互いに自己拡張の対象と見なす傾向は、遺伝的に血のつながった者同士に限定されるものではなく、互いに共通の話題や価値観を共有し合う者同士、例えば共通の趣味を持つ者同士の間に広く分布すると言える。
例えば同じ鉄道という趣味を持つ人同士は、居住地域、年齢を超えて、鉄道については話が互いに通じる、ということで、相手と連帯感を持ちやすいと考えられる。話が互いに通じるというのは、互いに心理的に共通な面を持っているからであり、そうした相手との心理的共通性を感じることは、相手の中に自分の延長・複製を見ることになり、自己との同一性・自他の区別の不要さを確認できて、自己と相手との心理的距離を小さくすることにつながる。
相手と心理的に近づくことは、相手と共感できる部分を増やすことにつながる。相手との心理的に共通な部分をより増やすことで、相手の中に見いだすことできる自分自身の分身も増え、したがって自

分自身の複製が相手の中に増える計算になる。互いに相手との心理的距離を小さくすることへの心理的欲求、すなわち、心理的近接化への欲求は、生物の自己複製への動機に広く基づいたものなのである。
こうした人間が本来持つ自己複製・拡張への指向が、心理的に互いに相手と同一化しよう、相手のもとに近づこうとする指向を生み出す。これが、相手と互いに引き合って一緒になろうとする「相互間引力」の心理的根拠なのである。そういう点で、こうした人間が本来持っている自己複製・拡張への指向が、ウェットな「相互間引力」を働かせる原動力となっている、といえる。
このように、ウェットさは、人間同士が互いに集まり、関係し合おうとする原動力となっている。人間の性格のウェットさが、人間が社会を形成する原動力の根本にある。ウェットな人は、そのままではバラバラ・無関係に動くドライな人同士をくっつけて関連づけようとする「社会の糊」の役目を果たしているのである。

8.心理的遠隔化（ドライ化）への原動力

上記に述べたことと矛盾するようではあるが、実は人間には同時に、生得的に互いに離れてドライになりたいという衝動も持っていると考えられる。すなわち、人と違ったことをしたい、とか、互いにベタベタくっつくのは嫌だ、という欲求が存在するのである。

流行を追うなど、他人と同じことをして心理的な近さ・共通性を保とうとすると、そのままでは互いの間に画一化・無個性化が進み、個人は全体の中に埋没してしまう。これは他者とは違う自分自身の存在を目立たせたい、個性的でありたいという、人間が本来社会に自分の名前を広めること。（社会的名声を得る、後天的な文化面において自分のオリジナルな子孫を社会にできるだけ多く行き渡らせること。）そのために持つ欲求と矛盾すること。（この欲求も恐らく生得的なものであること。）

また、対人面で周囲からあまりにベタベタされると、プライバシーを侵害されるとか、自分独自の領域を持ちたいとか、自分の行きたい方向に一人で進みたいとかいったドライさを指向する欲求が自然

に出てくるものである。

この場合、人間は一人では生きてはいけないので、いくらドライな独立独歩の観念を標榜しても、結局は、他者との相互依存関係に入ることになる。その際、ウェットさを指向する者同士が心理的に共通な領域を広げ、距離を短く取ろう、互いにくっつき合おうとする「近接指向」により「相互同一・共通化」の方向へと動くのに対して、ドライさを指向する者同士は、互いに自分にないもの、自分に不足しているものを相手に求めることで、互いに異質なまま「相互補完」の方向へと動こうとする。すなわち、互いに違った、心理的に遠く隔たった者同士が助け合う場合は、社会的分業の形を取るのである。その点、社会的分業は、人間同士のドライな結合の現れと言える。

9.同族嫌悪と心理的葛藤

上記とは少し性質が違うが、自分と同類の者が、自分にとって望ましくない行動を取っている場合、自分がその者と同類であることを否定したくなる心理が生じる。同族嫌悪がそれである。

例えばおとなしいのが好きな鉄道ファンの場合、自分と同類の者たちが駅とかで珍しい車輌の周りで限度を超えてはしゃいでいるのを見ると、何となく不快になって、自分は同類とは思われたくないという気持ちが生じて、その場を無関心な振りをして一人立ち去ろうとすることが起きる。

こうした心理的葛藤は、自分とは一面同類で、心理的距離の近いと思われる者が、他面では、自分が否定したい、心理的に遠ざけたいタイプの価値観を同時に持っていることで起きると考えられる。

二人を取り出したとき、ある一つの関心の側面（鉄道趣味）では同類で、距離が近いが、別の関心の側面（静かなのが好きか、騒ぐのが好きか。）では、正反対の意見を持っていて、距離が遠いということが、恋人・友人同士とかでも頻繁に起こり得る。

複数の様々な関心とそれに対する様々な価値観を同時に持つ人間同士は、ある一つの関心では距離が近いが、別の関心では距離が近いとは限らないため、同じ人と付き合う中でも、相手のことを、ある時は、意見が合う距離が近い同士と感じて親密でウェットな気分になり、別の時には、意見が衝突する距離が遠い赤の他人と感じ、疎外感でドライな気分になることになる。こうした心理的距離に関する心理的矛盾、葛藤は、他人と付き合う上では、誰にでも起こり得ることである。

（注記）
この場合、各価値観を、1つ1つのドミノとして表現し、各人を価値観のドミノの配列として捉えることができる。
別項を参照されたいこと。

10.中心的・周辺的関心事項と、総合的な対人心理的距離の決定プロセス
では、人間は、関心によっていろいろ変わる相手との心理的距離を、どうやって最終的に総合的に決定づけるのであろうか？。

この場合、人間には、中心的、主要関心事項と周辺的、副次的関心事項があり、中心的関心の方は、自分が主に関心のある、というか、ふだん大切に思っている関心事項である。一方、周辺的、副次的関心の方は、関心がないというわけではないが、自分にとって中心的ではなく、それほど大事、重要ではない、どうでもよい関心事項である。

同じ中心的関心事項を共有し、その中心的関心事項について、互いに同じ考えだ、距離が近いと感じた者同士は、周辺的関心事項で多少意見が異なって、距離が遠くても、基本的に自分たちは同類だ、距離が近いんだと感じること。（互いの中心的関心に変更がない限り。）そして、友人・恋人同士として親しく、仲良く付き合い続けると考えられること。

一方、いくら周辺的関心事項で意見が同じでも、肝心の中心的関心

事項が共有できていなかったり、互いの中心的関心事項で意見が合わない、距離が遠い者同士は、所詮自分たちは赤の他人だと認識して、別離して別々の道を歩むことになる可能性が高いと考えられる。

要は、ある人間にとって、相手との、中心的関心事項の共有の有無と、中心的関心事項についての相手との考えの近さ、価値観の近さが、相手との総合的な心理的距離を主に決定付けると考えられる。

相手との総合的な心理的距離の算出方法は、。

（１）各自の関心事を5～6個程度あげてもらい、それぞれのあげた2人分の関心事を総ざらいし、互いに、自分と相手の各関心事について、関心の度合い（中心～周辺）と、その関心事項について持っている価値観（好き嫌いなど）を記入してもらうこと。

（２）2人の間の中心的関心事項内容の合致度を計算すること。例えば、二人とも「自動車」に中心的な関心を共通して持っている場合は、合致度が高くなる。

（3a）今回2人のあげた自分と相手の各関心事について、2人の間の意見、価値観の合致度を計算すること。例えば、2人が同じ「自動車」について関心を持っていたとしても、一方が「自動車はかっこいいので、自分も早く持ちたい（自動車が好き。）」と思い、他方が「自動車の排気ガスが嫌いで、地球温暖化防止のために自動車に乗らないようにする運動を推進したい（自動車が嫌い。）」と思っている場合は、意見、価値観の合致度は低い。

（3b）各関心事についての、2人の間の意見、価値観の合致度の値に、各自の関心の度合いを掛け合わせた値を合計したものを、各自の複数関心についての合致度点数とすること。

上記の（２）と上記の（３）のそれぞれの合致度点数が高いほど、相手に対して距離が近いと感じる度合いが強い。

なお、上記の（３）の複数関心の合致度点数の合計については、相手との中心的関心事項の相違により、相手と合計点数が異なる場合が生じうる。一方の者は、自分にとって中心的関心事項（だが、そ

れは、相手にとっては、周辺的関心事項である。）について合致度点数が高かったため、高い合致度合計点数を持って相手との距離が近いと感じていること。それに対して、他方の者は、自分にとって中心的関心事項について、相手との合致度点数が低いこと。（自分にとっての周辺的関心事項について、相手との合致度点数が高いこと。）その結果として複数関心の合致度合計点数が低くなり、相手との距離が遠いと感じることが起こりうる。

なので、相手との総合的心理的距離の判定に当たっては、上記の（３）だけでは不足で、上記の（２）を併用することが必要であると考えられる。

ただ、人間の中心的な関心事項は、時と共に、あるいは環境の変転と共に変化していくものである。一時期、中心的関心事項を共有、意見が一致していた仲の良かった友人同士も、時が経つにつれて、互いに別々のことに興味が移って話が合わなくなり、疎遠になることはよくあることである。人間同士の心理的距離も、そうした関心の移り変わりに伴って、刻々と変化していると言える。

引用文献

山根一郎（1987）心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析心理学研究57（６）329-334

ドライ・ウェット行動様式の抽出

1992-2005.05初出

ドライ・ウェットの次元に乗っていると考えられる人間の行動様式が具体的にどのようなものであるかを詳細に抽出する作業を行った。

抽出に当たっては、まず、人間のドライ・ウェ,ットな行動様式が、それぞれ気体・液体分子運動パターンと対応づけられるという仮説を立てた。人間を分子並の小さな粒子に例えた場合、ドライな人々の行動は気体分子運動と同じであり、ウェットな人々の行動は液体分子運動と同じであるとする見地から、分子〜人間共通の行動様式を「気体的＝ドライ」「液体的＝ウェット」として整理、分類する作業を行った（1992年頃、当時の資料へのリンクはこちら。）こと。

一方、従来の日本・欧米文化比較論においては、「日本文化＝ウェット、欧米文化＝ドライ」とする説明がしばしばなされてきた（例えば、松山幸雄（1978）、西尾幹二（1969）など）こと。この印象が本当に正しいかどうかは、杉本・マオア（1982）のような「日本がドライで、欧米がウェットである」という反論もあり、別途確認が必要であるが、日本・欧米文化を比較する際に、その視点をドライ・ウェットの軸で捉えることについて、現在まで特に異論は出ていない。

そこで、ドライ・ウェットな行動様式の抽出に当たっては、人間の行動様式を「気体的＝ドライ」「液体的＝ウェット」とする基盤に立ちつつ、日本を含めた東アジアの人々の行動様式がウェットで、欧米的な行動様式がドライという印象が一般に持たれているという視点に立って、幅広く日本・欧米文化比較論の文献調査を20〜30冊程度（研究者の書いた学術書に限らず、新聞記者やビジネスマンなどが書いたエッセイも含む。）について行い、ドライ・ウェットな行動様式が具体的にどのようなものであるかを把握した。

［参考］日本・東アジア〜欧米文化比較論文献（〜1993）

青柳文雄　日本人の罪と罰　1980　第一法規出版
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948（長谷川松治訳　菊と刀ー日本文化の型　社会思想社　1948）
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳
日本人ーユニークさの源泉ー　サイマル出版会 1977)
土居健郎　「甘え」の構造　1971　弘文堂
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳　勝者・日本の不思議な笑い
1992 ダイヤモンド社)
江崎玲於奈　アメリカと日本ーニューヨークで考える　1980　読売新聞社
濱口恵俊　「日本らしさ」の再発見　1977　日本経済新聞社
林周二　経営と文化　1984　中央公論社
乾侑　日本人と創造性　ー科学技術立国実現のために　1982　共立出版
石田英一郎　東西抄　日本・西洋・人間　1967　筑摩書房
石田雄　日本の政治文化ー同調と競争　1970　東京大学出版会
岩田龍子　日本の経営組織　1985　講談社
笠信太郎　ものの見方について　1950　河出書房
河合隼雄　母性社会日本の病理　1976　中央公論社
川島武宣　日本社会の家族的構成　1950　日本評論社
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism
In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc.
木村敏　人と人との間ー精神病理学的日本論　1972　弘文堂
木村尚三郎　ヨーロッパとの対話　1974　日本経済新聞社
京極純一　日本の政治　1983　東京大学出版会
丸山真男　日本の思想　1961　岩波書店
増田光吉　アメリカの家族・日本の家族　1969　日本放送出版協会
松浦秀明　米国さらりーまん事情　1981　東洋経済新報社
松山幸雄　「勉縮」のすすめ　1981　朝日新聞社
宮本政於　お役所の掟　1993　講談社
中根千枝　タテ社会の人間関係　1967　講談社

中川剛　不思議のフィリピンー非近代社会の心理と行動　1986　日本放送出版協会
S.K.ネトル、桜井邦朋　独創が生まれないー日本の知的風土と科学　1989　地人書館
西尾幹二　ヨーロッパの個人主義　1969　講談社
西沢潤一　独創は闘いにあり　1986　プレジデント社
大築立志　手の日本人、足の西欧人　1989　徳間書店
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives 1972 Inter-cultural Press（久米昭元訳　アメリカ人の思考法　1982　創元社）
杉本良夫、ロス・マオア　日本人は「日本的」かー特殊論を超え多元的分析へー　1982　東洋経済新報社
鈴木秀夫　森林の思考・砂漠の思考　1978　日本放送出版協会
恒吉僚子　人間形成の日米比較ーかくれたカリキュラム　1992　中央公論社
和辻哲郎　風土ー人間学的考察　1935　岩波書店
Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks（松井みどり訳　菊とバット 1991 文藝春秋）

この調査結果をもとに、ドライ・ウェットと想定される行動様式を、まず30程度大まかに抽出したこと。（1993年頃。）こと。その後、より具体的で詳細な内容を持つ行動様式を、できるだけ多様で網羅的となるように、60～70程度抽出したこと。（1996～97年頃。）この間、互いに内容面で近い、重なる項目同士をマクロな視点からグループ化・分類する作業をKJ法を用いて継続的に行い、「個人主義ー集団主義」「自由主義ー規制主義」といった、行動様式の大まかな分類項目を抽出したこと。（～1999年頃。）

なお、既に存在する大分類と内容面で似ていても、ニュアンスや視点が違うと判断した行動様式については、多様な分析視点を持つ上からも区別した方がよいと考え、別の分類項目として立てた。また、分類項目抽出作業自体はKJ法を用いて筆者独りの力で簡単に行え、また10以上の十分な分類項目数を最初の作業ですぐに得られたので、因子分析など分類項目抽出のための統計的解析手法は特に使用しなかった。（その後、因子分析を行う機会を得たこと。）

ドライ・ウェットと考えられる行動様式の分類や詳細項目の抽出を行なった主な期間は、1992〜1999年の5〜6年間であるが、その後も断続的に項目追加や分類の見直しを行っている。抽出・分類は、全て筆者一人で行った（抽出・分類に当たっての共同作業者はいない。）こと。

具体的な行動様式項目の抽出過程においては、分類を、更に階層化・細分化するなど見直して修正した方がよい場合もいくつか生じたので、その都度、分類のあり方を柔軟に変更した。2001年3月現在では、2つの大分類、8つの中分類の下に、17の小分類が存在する形にまとめている。

このように収集・分類したドライ・ウェットな行動様式が、現実の気体・液体分子運動パターンとの類推、具体的には、活動・移動性の有無、心理的に近接する指向の强弱によって一通り説明できることをインターネット上での質問紙調査で確認した。詳細については、ドライ・ウェットな行動様式の詳細分類と説明へのリンクを参照されたい。

引用文献

松山幸雄（1978）「勉縮」のすすめ朝日新聞社
西尾幹二（1969）ヨーロッパの個人主義講談社
杉本良夫,ロス・マオア（1982）日本人は「日本的」かー特殊論を超え多元的分析へー東洋経済新報社。

価値観ドミノ配列について

2006.9初出

個人同士の心理的な近さ・遠さと関連して、各人の持つ価値観、意見の1つ1つを、1つ1つのドミノとして捉え、各人を、それらのドミノの配列、集合体として捉える見方を提供しますこと。

人間は、同時に複数の側面・関心について様々な価値観・意見を抱いており、これは、DNA配列にならって、価値観・意見のドミノ配列といった形で把握可能である。

要は、人間の持つ1つ1つの価値観、意見といったものを、1つ1つのドミノとして並べて表現するのであること。

各人は、1つ1つの価値観、意見のドミノの集合体であると捉えることができる。

このドミノ配列は、引っ込み思案な性格のようにある程度遺伝的に決まるものもあれば、鉄道好きかどうかのように後天的に決まるものもある。

まず、人間には、所有している価値観と、所有していない価値観があり、これは、ドミノの有無で表される。ドミノがあるのが、所有している価値観で、ドミノがないのが、備えていない価値観である。

ある分野に関心を持つ人は、その分野のドミノをたくさん並べて持っており、関心のない人は、その分野のドミノがごっそり抜けている。

次に、同じドミノでも、色が違うということがある。互いに同じ事柄（例えば原子力発電）に関心を持っていても、実際には、一方の

人は、その事柄（原子力発電）に賛成であり、他方の人は、その事柄に反対であるということがある。

この場合、一方の賛成者は白色のドミノを、反対者は黒色のドミノを持っているということで表現しうる。

二人の間での、価値観共有は、同じ分野で互いにドミノを持っており、かつその持っているドミノの色が同じである、ということで表現される。

人によって、持っているドミノの配列はばらばらであり、ある分野では、互いに同じ色のドミノを持っていても、他の分野では、一方がそもそも持っていなかったり、持っていたとしても、違った色のドミノである、ということが普通だと考えられる。

そして、二人の間での、所有するドミノの共通性が、二人の心理的距離を決めると言える。

ドミノを共有していれば、互いの心理的距離は近く、共有していなければ遠い。

同じドミノを共有している者同士は、ウェットな関係に入り、共有していない者同士は、ドライな関係に入る。

互いに同じドミノを持とうとするのがウェットな動機で、互いに異なるドミノを持とうとするのがドライな動機である。

中には、ドミノをたくさん持っている人もいれば、少ない人もいる。

また、あるドミノは、人の生存に役立ち、あるドミノは役に立たないというのがある。ドミノは、環境により淘汰される。この点、ドミノの扱いは遺伝子と一緒である。

価値観ドミノの実体は、それが人の遺伝に直結して遺伝子と一緒のこともあれば、神経系内のひとまとまりの学習されたニューロン回路であることもあると考えられる。

2006初出

ドライ・ウェットな態度の長所・短所

(c)2002.12初出

ドライないしウェットな態度の持つ、長所と短所について以下にまとめましたこと。
○印が長所、×印が短所です。

表 34

ドライ・ウェット性格の4タイプ分類による把握

性格のドライ・ウェットさは、従来考えてきたように一次元上に並んでいるのではなく、ドライさとウェットさとが別々に独立・並行する形で同時に個人の性格上に存在しており、ドライさ・ウェットさの両方を持ち合わせる人もいるのではないか、という観点からの新たな性格分類方法について新たにまとめました。

当サイトにおける従来の研究（2001年春季以前）においては、性格を、ドライ－ウェットの一次元上に当てはめて、「あなたの性格は、とてもドライ－ややドライ－中立－ややウェット－とてもウェット」というように判定するやり方を取ってきた。
この場合、実は、中立的というのには2種類あって、「ドライ・ウェットのどっちつかず（どちらともいえない。）」の答えが多くて中立になる場合と、「とても（かなり）ドライ」「とても（かなり）ウェット」の答えが半々で中立になる場合とが考えられる。前者は「（ドライ・ウェット）未分化型」、後者は「（ドライ・ウェット）複合・葛藤型」とでも呼べばいいかも知れないこと。後者の場合は、自己の中でドライ・ウェットな行動のどちらを選べばいいか葛藤が起きやすいと考えられる。
この考え方を突き詰めると、性格上のドライさとウェットさは、実は従来考えてきたように一次元上に並んでいるのではなく、ドライさとウェットさとが別々に独立・並行する形で同時に個人の性格上に存在し、ドライさ・ウェットさの両方を持ち合わせている人の場合、行動選択時に、両者が互いに矛盾・葛藤し合うこと。（相争うこと。）そうした状態で表面に出てくる、ということがあり得ると言える。
今後は、ドライさ、ウェットさを別々に独立して測定する形で捉えた方がより正確な性格分類ができると考えられる。

表 35

の 4 類型のいずれかに落とし込むことができると考える。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

メンタルヘルスの観点からは、ドライさ・ウェットさのどちらか一方の態度を取らなければならない局面において、簡単に一方を選ぶことができる純粋ドライ、純粋ウェットの両方が一番良好であり、一方、ドライ・ウェットさの両方が同時に相矛盾する形で噴出する

複合・葛藤型は、大きな問題があると考えられる。

(c)2001.8初出

ドライ・ウェットな性格・態度の因子分析

2001.03-2005.04初出

ここでは、ドライ・ウェットと想定される性格・態度の分類を、手動ではなく、既に確立された統計手法に基づいて行った結果について説明する。すなわち、心理テストの形でインターネット利用者に回答してもらった結果から、因子分析を行って、抽出した因子の内容を説明すること。
従来の、手作業による、分析上の視点が分類間で互いに重なり合っている主観的な分類のあり方が果たして妥当かどうか、また、作業上見落としている分類がないかどうかを検証するために、それぞれが互いに完全に独立している分析上の視点を抽出可能な因子分析にかける必要があった。
そこで、従来抽出した、詳細な性格・態度を表す項目群について、実際に心理テストの形でまとまった数（項目数の１０倍以上）の回答者に回答してもらい、その回答結果を因子分析にかけることにしたこと。
心理テストの回答項目は、以前行った調査の結果、有意でドライ・ウェットの差があると判定された項目66個について、ランダムに、ドライ・ウェットのいずれか一方の記述を選択表示した。各項目は、5段階の評定法（とても当てはまる。やや当てはまる。どちらでもない。あまり当てはまらない。ほとんど当てはまらない。）で回答してもらい、全項目に回答してもらう毎に、各回答結果に５段階の得点（とてもドライ2点。ややドライ1点。どちらでもない0点。ややウェット-1点。とてもウェット-2点。）を付けて、回答者にフィー

ドバックするとともに、付けた得点を回答データファイルに保存したこと。
回答者の個人識別をするために、回答時にはニックネームの記入を求めた。また、故意に回答データ荒らしを行う者が出現することを想定し、荒らし行為を起こそうとする原因を断つため、心理テスト回答時に裏でデータを集めていることは一切表示しなかった。
心理テストは、2001年2月中旬の約1週間実施し、1046名の回答者から回答が得られた。得られた回答データを、統計分析ソフトウェア（StatView5.0）にかけて、因子分析による因子抽出を行ったこと。回答者の項目毎の回答傾向が似ている項目同士が、同じ因子に属する、と考えられる。
因子抽出は、主因子法によるものであり、値の変換は直交・バリマックス回転を用いた。因子は、固有値1.0以上に限定して分析した。各回答項目は、因子負荷量が0.400以上の場合に限定して分析対象とした。

因子分析の結果抽出された、固有値1.0以上の因子は、全部で16あった。
全般に、手動で分類・抽出した場合と、だいたい同じか、より詳しい内容の因子が抽出された。
手動分類で出てきて、因子分析で出てこなかったのは、同調指向、多様性の尊重、定着指向、独創指向に関する因子であった。
一方、因子分析で出てきて、手動では出てこなかったのは、集団優先－個人優先（因子6）といった「優先」性に関する視点、身内限定－対外関心の保持（因子7）といった「限定」性に関する視点、人間への興味－非人間物質への興味（因子9）といった「興味」に関する視点辺りであったこと。
以下に、抽出された因子の内容について、表形式で詳述すること。

表 36

表 37

(c)2001-2005初出

【背景】

ドライ・ウェットな行動様式を知る意義について

2003.12-2004.10初出

ドライ・ウェットな行動様式を知ることがなぜ重要なのか、なぜ意義のあることなのかをまとめてみました。具体的には、以下のことにとって、役立ちます。世界各国の社会的性格の把握。（日本・欧米の文化比較など。）男女の社会行動面での性差を知ること。

ドライ・ウェットな行動様式を知ることことがなぜ重要なのか、その意義について、以下にまとめた。

（１）世界各国の国民性や社会的性格を心理的側面から分析していく場合、ドライ・ウェットさの次元が重要な役割を果たしている。例えば、各文化を取り巻く自然環境との関連では、「乾燥環境＝遊牧・牧畜文化（欧米など）＝ドライな行動様式が主流。湿潤環境＝農耕文化（日本、東アジアなど）＝ウェットな行動様式が主流。」という相関が成立することで、ドライ・ウェットさの次元が、世界

の文化の分類把握をより容易にする効果を持つ。

例えば、従来の日本・欧米文化比較論においては、「日本文化＝ウェットゥ、欧米文化＝ドライ」とする説明がしばしばなされてきた。（例えば、松山幸雄（1978）、西尾幹二（1969）など。）

今まで日本（欧米）的行動様式としてあげられてきたものは、集団主義（個人主義）、周囲への同調（非同調）、情緒・非合理性（科学・合理性）、対外閉鎖性（開放性）、年功序列・前例やしきたりの重視（独創性の重視）、規制好き（自由主義）、外圧がないと動かない（能動的）といったものであり、いずれも、ドライ・ウェットさの持つ守備範囲内に収まっている。要するに、日本（欧米）的行動様式は、現状ではそのほとんどがドライ・ウェットさの観点で網羅的に説明可能である。

日本＝ウェット、欧米＝ドライとする印象が本当に正しいかどうかは、杉本・マオア（1982）のような「日本がドライで、欧米がウェットである」という反論もあり、別途確認が必要であるが、日本・欧米文化を比較する際に、その視点をドライ・ウェットの軸で捉えることについて、現在まで特に異論は出ていない。

（２）男性、女性の持つ社会心理的な行動様式を一通り説明可能であること。それぞれ男性＝ドライ、女性＝ウェットとして捉えられること。

・女性がグループを作ってグループ単位で行動したがる。（トイレまで一緒に付いていくのを好むこと。）それに対して、男性は単独行動をより好む。（集団主義－個人主義）
・女性は、周囲の流行に敏感で、ファッション雑誌を読むことを好む。女性は、周囲に自分の行動を同調させることを好む。（調和させること。）それに対して、男性は特に周囲に合わせず、独自の道を歩もうとする。（同調指向－非同調指向）
・女性が人間に興味を強く持ち、周囲の他者との関係を構築・維持することに心を砕く。それに対して、男性は、非人間的な物質やメカに興味を持ち、他者との関係は、あくまで何か目的を達成するための手段として構築する。（人間関係指向－非人間関係指向）

・女性は、自らは未知の領域に進むのを好まず、前例・しきたりの世界に生きようとする。それに対して、男性は、未知の危険が潜むかも知れない領域に、自らモルモットして積極的に挑み、独創的な成果をあげる。（前例指向－独創指向）
・女性が親しい他者に対して、積極的に自己開示をしてプライバシーをさらけ出す。それに対して、男性は、自己開示をしない。（プライバシーの欠如－尊重）
・女性が取る行動が受け身である。（自分からは動かない。）それに対して、男性は自分から進んで動く。（静的指向－動的指向）

今まで男女の社会的行動の性差として考えられてきた行動様式は、ドライーウェットの軸上に一通り乗っており、ドライ、ウェットさの視点から網羅的に説明可能である。

要するに、ドライーウェットな行動を知るメリットは、今まで個別、バラバラにあげられてきた、「欧米（遊牧・牧畜系）文化－日本・東アジア（農耕系）文化」、「男性文化－女性文化」の様々な特徴を、「ドライーウェット」の一言で要約、説明可能であるということに尽きること。

今までは、集団主義－個人主義、規制主義－自由主義・・・・といった、雑多な分析視点がバラバラに個別に取り上げられてきた。それらを一つに束ねる概念が、これまでは存在しなかった。

こうした多様なバラバラな分析視点を、「ドライーウェット」という一言で総括して一まとめに縛って、まとめて、束ねて持ち運びが可能になる。その点、「ドライーウェット」の概念は、今までの集団主義－個人主義、規制主義－自由主義・・・・といったバラバラな概念を一まとめにして運ぶことを可能とするコンテナの役目を果たす。

ドライ・ウェットさは、従来の、男女差、東洋と西洋の文化差を説明する上での主要概念であった個人主義、自由主義・・・といった概念を一通り網羅、総括、包含する、より上位の概念であると言える。

ドライーウェットという一つの軸へと要約することで、視点がバラバラでまとまりに欠けていた「定住ー移動」、「農耕（日本・東アジア）ー遊牧・牧畜（欧米）」、「女性ー男性」（ないし「母性ー父性」）についての文化把握が、いとも容易になる効果がある。

つまり、ドライーウェットという分析軸を用意することで、集団主義ー個人主義、規制主義ー自由主義・・・・といったバラバラに提唱されていた諸概念が、。

表 38

といった形で、ワンセットで取り扱うことができる。その点、分析視点が、「ドライーウェット」という一つの軸へと焦点がまとまって、より社会文化の分析がしやすくなる。

かつ、
・集団主義ー規制主義ー反プライバシー・・・・が、それぞれウェット軸で互いに連動し、ワンセットで同時に成立、生起する、。
・個人主義ー自由主義ープライバシー尊重・・・・が、それぞれドライ軸で互いに連動し、ワンセットで同時に成立、生起する、。
といったように、ドライな軸に属する諸概念（個人主義、自由主義・・・）同士、ウェットな軸に属する諸概念（集団主義、規制主義・・・）同士が、互いに一まとまりに連動しており、共時的に成立することを明示できる。

この点から、上記のドライ軸、ウェット軸の各ワンセットは同時に揃って成立すること。例えば、個人主義の社会は、必ず自由主義であること。（共にドライ。）集団主義の社会は必ず反プライバシーであること。（共にウェット。）それらを、説明することができる。

あるいは、上記のドライ軸、ウェット軸の各ワンセットに矛盾する

組み合わせの概念を持つ社会。例えば、集団主義的（ウェット）かつ自由主義的（ドライ）な社会。それが成立しないこと。プライバシ一を尊重する（ドライな）集団主義の（ウェットな）社会が存在し得ないこと。それらを説明することができる。

以上のように、ドライ・ウェットさの視点は、世界の文化を大きく二分する、「定住文化。農耕文化。（ウェット）ー移動文化。遊牧・牧畜文化。（ドライ）」、および「女性文化（ウェット）ー男性文化（ドライ）」の次元をそれぞれ説明することができ、その点、世界の文化を分析する上で大きな分析力を発揮すると言える。

この場合、ドライ・ウェットさの視点は、単に、世界の社会文化の分析を容易にする効果だけでなく、今までほとんど接点のなかった、人々の社会行動と、分子や物体運動に関する物理学とを結びつける効果をもたらす。

要するに、ドライ・ウェットな人〜物体〜分子といったサイズの異なる各粒子は、粒子のサイズが違っていても、共通の行動・運動様式を持っていることを示すことができるのである。

日本、東アジアの人たちがウェットで、欧米の人たちがドライだというのは、定住生活、農耕、女性主体の、日本、東アジア社会の人たちの行動様式が、本質的に液体分子運動に似ており、一方、移動生活、遊牧・牧畜、男性主体の、欧米社会の人たちの行動様式が、気体分子運動に似ていることを示している。

すなわち、気体、液体分子運動は、それぞれ、以下の通りである。

表 39

このことから、気体・液体分子運動シミュレーションと相似の方法によって、ドライな社会、ウェットな社会の人々の行動を、コンピュータでシミュレートできる、と言えること。

すなわち、移動生活、遊牧・牧畜、男性中心の欧米社会は、気体分子運動でシミュレートできる。定住生活、農耕、女性中心の日本、東アジア社会は、液体分子運動でシミュレートできる。

このように、ドライ・ウェットさの視点を世界の社会文化の分析へと導入することは、物理学で発達している物体の動きをコンピュータでシミュレートするノウハウを、そのまま社会学、心理学で生かせるようになる効果をもたらし、社会学、心理学の発展に寄与する度合いが大きいと言える。

参考文献

松山幸雄（1978）「勉縮」のすすめ朝日新聞社
西尾幹二（1969）ヨーロッパの個人主義講談社
杉本良夫,ロス・マオア（1982）日本人は「日本的」かー特殊論を超え多元的分析へー東洋経済新報社。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

〔解説：応用編〕ドライ・ウェットな感覚・性格・社会について

感覚・知覚心理

ドライ・ウェットさと温冷・明暗感との関連について

(c)2002.2-10初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、温冷・明暗の感覚との関連を検討した結果、「ドライ＝冷たい＝明るい」、「ウェット＝温かい＝暗い」という相関を導き出しましたこと。

［要約]

本文では、ドライ・ウェットな感覚と、温かさ・冷たさ、明るさ・暗さとの関連がどうなっているかについて述べる。

乾湿・温冷・明暗の感覚は、それぞれ異なる感覚のモードによって知覚されるが、それらの間には、以下の相関関係が成り立つと考えられる。

表 40

1.ドライ・ウェットさと温冷感

人間は自分の体温に近い温度の存在物を「温かい」と感じ、体温より大分下がると「冷たい」と感じる。

「温かさ」を感じさせる体温を持つ相手が自分の身近にくっついている＝互いに近い距離にあると、相手の体温を身近に感じて、「温かい」と感じる。相手との間に隙間がなくぴったり密着している

と、互いの間にある体温で温められた空気が逃げない。一方、互いに離れていると、相手と間隔が空き、両者の隙間に冷たい風が入り込む余地ができるため、「冷たい」と感じる。

これは、物理的な距離だけでなく、心理的な距離にも当てはまる。相手との間に距離がなくなり、心理的な一体・融合感、密着感を強く持つ場合に相手のことが「温かい」と感じられる。そして、そのままそこに定住・定着することで互いに心理的に近い、互いに「温かい」と感じる状態を維持し続けることができる。ここで各自がその場に静止せずにバラバラに独自の方向に動くと、相互の間の一体感が失われ、「冷たい」と感じるようになる。

対人関係がもたらす心理的な温かさ・冷たさに関しては、「温情」インタフェース・デザインのページへのリンクを参照されたい。

この場合、相手との間の心理的な一体・融合や密着、その状態の現状維持といったキーワードは、ドライーウェットさの次元からは、互いに心理的に近づき合うこと、近づき合ったままその場に定着することを指向する点、全て「ウェット」さと関連がある。

すなわち、心理的に一つになろうとすることは、互いに近づき、引きつけ合おうとする、引力のような力がそこに働いていることを示しており、この力は、人間に対して「ウェット」な感覚をもたらす現実の液体分子間に働く分子間力とのアナロジーで捉えることができる。

また、心理的にひとまとまりになった状態で定着し、そこから動こうとせずに相互の温かい関係を維持しようとすることは、あちこち動き回るために必要な運動エネルギーが小さいことを示している。ドライな感覚を人間に与える気体分子が絶えず方々へと大きく動き回って、互いの間の隙間を大きく取るのに対して、ウェットな感覚を与える液体分子は、互いにくっつき合った状態であまり動き回らない。これは、液体分子の運動エネルギーが小さいことを示しており、「温かい」状態を保つための定着についても、ウェットな液体分子運動とのアナロジーで捉えることができる。

こうした「近さ＝ウェットさ」がもたらす「温かさ」は、遺伝的な「近さ」にも関係する。例えば、親子関係は、互いの間の遺伝子の

共通性の高さ、すなわち遺伝的な「近さ」によってつながる、强固な温かさを備えた人間関係である。

相手との共通性の高さが心理的近さ＝温かさをもたらし、ひいては互いに相手に対して魅力を感じて近づき合い、その状態をそのまま維持することで心理的引力＝ウェットさをもたらす、と言える。

以上述べた、「温かさ＝ウェットさ」、「冷たさ＝ドライさ」の相関は、1999年度に筆者が行った、性格・態度のドライ・ウェットさに関するアンケート調査結果からも支持されている。
（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

2.ドライ・ウェットさと明暗感

明るさ・暗さは、地球上での人類の生活においては、太陽の日差しの有無と大きく関わっている。一般に、太陽の日差しが注ぐ晴天は「明るい」、太陽の日差しが届かない曇天〜雨天は「暗い」感じがする。

雨がいったん降ってから止んだ後しばらく経つと、雨水は太陽の熱によって蒸発し地上から消えていく。この場合、湿った水たまりは、日陰の暗い場所にずっと残りやすい、明るい日向は乾いている、ということは経験上広く知られていることである。

こうした説明からは、人間の生活上の感覚としては、「暗い＝日陰＝「水たまり。（水分の蒸発が少ない。）」＝ウェット」「明るい＝日向＝水分の蒸発＝ドライ」という相関関係が成り立つ、と言える。

また、日本語では、人間の性格を表すのに例えば「陰湿」という言葉が頻繁に使われる。この言葉は、「陰＝暗さ」と「湿＝ウェットさ」とが互いに強く結びついている、相関関係にあることを示している。
以上の説明から、「明るさ＝ドライさ」、「暗さ＝ウェットさ」とまとめることができる。
なお、これと関連して、人間の性格の明るさ・暗さについては、「明るい」性格についてのページへのリンクを参照されたい。基本

的には、「明るい性格＝ドライな性格」と捉えられる、と言えそうである。

すなわち、明るい性格の方が、。
1）対人関係が、引きこもらず、外に積極的に出るということで、開放的である点、ドライである。
2）態度が、より元気、快活、活動的であるということで、よく動く点、ドライである。
3）物の捉え方が、物事をより明瞭に、クリアに捉えようとするということで、合理的である点、ドライである。
と捉えられること。

以上述べた、「暗さ＝ウェットさ」、「明るさ＝ドライさ」の相関は、2002年10月に筆者が行った、性格・態度のドライ・ウェットさに関するアンケート調査結果からも支持されている。
（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

3.明るい性格と温かい性格との不両立

上記結果を文字通り解釈すると、「明るい性格（＝ドライな性格）＝冷たい性格」「暗い性格（＝ウェットな性格）＝温かい性格」という相関が成り立つことになる。これは「明るい、かつ、温かい性格」という人間にとって望ましい性格同士の間に矛盾が存在することを示している。明るくかつ温かい心を備えた人間というのは理想的ではあるが、現実には成立し難いものである、と言える。要するに、「明るい」性格と、「温かい」性格というのは、両立しないのである。

4.ドライ・ウェットさの表現と色彩コーディネート

以上から、色彩を用いてドライ・ウェットさを衣服や生活用品上に表現しようとする場合、ドライさは、「冷やかな、明るい」色を、ウェットさは「温かい、暗い感じの」色を用いれば効果的と考えられる。

具体的には上記［要約］の項目内にある、ドライ・ウェットさと温冷、明暗感との相関をまとめた表の色使いを参照されたい。

(c)2002.2-10初出

ウェット・ドライさと甘辛感、鋭さと円さ

2002.11初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、味覚や分析面での甘さ、辛さとの関連を検討した結果、「ドライ＝辛口＝鋭い」、「ウェット＝甘口＝円い」という相関を導き出しましたこと。

「チューハイ」のようなアルコール飲料の缶などには、味覚の段階の表示がしばしば見られる。そこには、「ドライ5-4-3-2-1スウィート」といった表示がなされており、このことから、ドライさが、スウィート（甘口）の反対の辛口に当たることが分かる。

このことから考えると、「ドライ＝辛口」ならば、その反対のウェットさは、甘口に当たると想定される。この推論が正しいのではないかという証拠として、臨床心理学における「甘え」の概念が挙げられる。

［土居、1971］においては、「甘え」を、欧米では見られない日本語特有の語彙であるとしてクローズアップしている。その際、「甘え」の概念を、対人関係における一体感を前提とした幼児的な依存願望である、としていること。

この場合、「相手との一体感を求める」「相手に依存しようとす

る」といった「甘え」を特徴づける態度は、いずれも、相手に心理的に近づいて、一体化・融合し、相互依存関係に入るといった点で、筆者が解明した、ウェットな態度の内容と合致している。

上記の結果から、「甘」という字がウェットさと関連づけられ、その反対の「辛」の字がドライさと関連づけられることは、ほぼ間違いないと考えられる。味覚面では、「ドライ＝辛口」「ウェット＝甘口」ということになる。

この場合、味覚と対人感覚とで、「甘い＝ウェット」「辛い＝ドライ」という、単一の感覚モードを超えた共通の乾湿感覚が生じていると言える。

なお、「甘さ」「辛さ」は、味覚に止まらず、刃物とか、さらには批判の切れ味の表現にも使われる。

例えば、「詰めが甘い」といった場合は、分析の刃先が丸くて、四角に切れた隅まで入り込むことができないことを示している。そうした点で、「甘さ」は、まろやかさ（円型性）、そしてそれがもたらす、角張っていない、刃が鈍いため、対象を鋭く切断できない性質と関係があると言える。

一方、「辛口の、辛辣な批判で、人や社会を斬りまくる」といった表現があるように、「辛さ」は、ピリピリしたカミソリの刃のような切れ味や、対象を切断する分析の刃先の鋭さと関係があると言える。

こうした「辛口」「甘口」といった感覚と、ドライ・ウェットといった乾湿感覚とがなぜ、どのような仕組みで結びついているのであろうか？。

例えば、対象が人間関係の場合、「甘さ」は、関係を切らずに円く収め維持する方向に向かう。それは、対人関係や縁故の維持と関連し、相手とベタベタくっついて離れないウェットな態度につながると言える。

一方、「辛さ」は、鋭い刃先で関係をバッサリ斬る方向に向かう。それは、対人関係の切断と関連し、相手からサッと離れるドライな

態度につながると言える。

こうしたことから、「甘口＝分析等の刃先の円やかさがもたらす、相互のつながりの非切断、維持＝ウェット」、「辛口＝刃先の切れ味の鋭さがもたらす、相互のつながりの切断、分離＝ドライ」という相互関係がありそうなことが分かる。

味覚においても、「甘さ」は舌触りの円やかさ、「辛さ」は舌触りのピリッと切れるような鋭さと関係があるといえ、そういう点で、舌触りにおける切れ味（対象の切断能力）の有無ないし大小につながっており、「辛さ＝切れる＝ドライ」、「「甘さ＝「切れないこと。（円いこと。）」＝ウェット」とそれぞれ関連があると言える。

参考文献

土居健郎、「甘え」の構造、1971、弘文堂

ドライ・ウェットさと濃淡感との関連について

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、濃さ、淡さ（あっさり感）との関連を検討した結果、「ドライ＝あっさり（淡い、薄い）」、「ウェット＝濃い」という相関を導き出しましたこと。

一般に、「濃さ」は、一定の体積内に含まれる成分の量が多いこと、あるいは、物質が、場所を隙間なく埋める度合いが大きいことを示す。
「濃さ」の反対の感覚は、「淡さ」「薄さ」「あっさり感」であり、「汁が、淡々としてあっさりとしている」というように、一定体積に占める成分が薄い分、刺激が少なく、しつこくないことにつながる。

この濃淡の感覚と、ドライ、ウェットさとの間には、「淡い、あっさりした＝ドライ」、「濃い＝ウェット」という関係が成り立つと考えられる。

「果汁30％」のジュースは、「果汁70％」のジュースよりも薄いと感じられるが、これは、一定体積内において、70％のジュースの方が、30％のジュースよりも、果汁成分が沢山入っているため、より味覚面での刺激が多くなっていることを示す。このことは、濃いジュースの方が、果汁成分が、一定体積内において密集しており、存在する密度が高くなっていることを示す。

濃さと密度の高さは比例関係にある。一方、存在密度の高さと、ウェットさも、また比例関係にある。

すなわち、物体同士は、密度が高いほど、互いに近くくっつき合うウェットな関係になる。密度が高く、互いにくっついて離れない感じがウェットさを、密度が低く、互いに遠くバラバラに離れる感じがドライさに結びつく。
一方、密度が高いと濃い感じが生まれ、密度が低いと淡々とした、あっさりした感じが生まれる。

この2つの関係から、「濃厚＝高密度＝互いに近くくっつき合う＝ウェット」に、「淡々、あっさり、薄い＝低密度＝遠く互いに離れた＝ドライ」といったようにそれぞれ結びつくと言えること。

このことを実証する実験としては、例えば、15cm平方の透明な正方形の中に、それぞれ直径1cmの中立色（黒色）の玉10個と20個を投入してランダムに配置した場合、密度の低い10個の方が、20個の方よ

りも、よりドライな感覚を視覚的、触覚的に与え、密度の高い20個の方が、よりウェットな感覚を与えると考えられる。

上記の考えは、2002年10月に筆者が行った、性格・態度のドライ・ウェットさに関するアンケート結果からも支持されている。
（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

この知見をさらに拡張すると、人間の性格において、「癖、アクが強い＝与える刺激が強い＝味わいが濃厚な＝ウェット」、「癖が薄い、アクがない＝与える刺激が弱い＝味わいがあっさりと薄い＝ドライ」という関係も成り立つと考えられる。

例えば、「あの人は趣味が濃い、オタクだ」といったような場合。その人は趣味に熱中して余りにも深入りしていること。（その人は、趣味と一体化していること。）彼は、周りから偏った考えの持ち主として奇異のまなざしで見られていること。そのことを示す。
「あの人は考えがあっさりとしている」といった場合、その人は、一つの考えに深入りせず、サッと離れて、次の考えに移ることを示す。

対象と一体化して離れないのがウェットで、サッと離れるのがドライであるから、人間の趣味や思想一般において、「濃い（深い）＝ウェット、あっさり（淡い、薄い、浅い）＝ドライ」と言えることになること。

あるいは、思想の濃さや思想に対する思い入れの深さは、そのまま思想の（一般・普通の考えの持ち主からの）偏り、癖の大きさにつながることから、「思想の偏った、癖のある、オタクなこと。（濃いこと）＝ウェット」、「常識的なこと。（思想面であっさりしていること。思考に癖がないこと。）＝ドライ」というという結びつきも成り立つのかも知れない。

ドライ・ウェットさとディジタル・アナログ指向

2003.2初出

物事を0か1かの離散量として捉えるディジタル指向は、相互分離、切断をテーゼとするドライな物の見方に適しており、一方、物事を連続量として捉えるアナログ指向は、相互接続、関係構築をテーゼとするウェットな物の見方に適すると捉えます。

今でこそ、音楽CDやDVDのように情報がディジタル化されて流通するのは当たり前となったが、しばらく前までは、流通の主体はLPレコードに代表されるようなアナログが主流であった。

ディジタルの世界は、物事を全て0か1かのどちらかで記録する。それは、物事を論理的な「Yes」か「No」かのどちらか一方でのみ捉えるという行き方であり、その中間のどっちつかずの態度を取ることは許されない。0か1か両者の間に深い溝があり、切断が起きている。
すなわち、ディジタル化を指向する場合、物事を0か1かの離散量で捉えることになり、それは、あたかも、物事をサラサラと動く0と1の数字からなる四角い砂粒の集まりととして見ることにつながる。このように、物事を互いにバラバラに分離した、切り離されたものとして捉えることは、そのまま相互にバラバラに離れる「離散、切断」をテーゼとするドライな物の見方につながっていく。

一方、アナログの世界では、物事を0か1かの両極端で捉えることはせず、その中間に当たる存在を許す。そうした点、非論理的な側面を持つこと。こうした、物事を連続したつながりとして捉えるアナログ的な見方は、物事相互の連続、縁故、関係づけを重視することにつながる。すなわち、物事を相互に切断することなくつなげて捉えることで、相互にベタベタくっつく「接続、関係構築」をテーゼとするウェットな物の見方につながっていくと言えること。

以上まとめると、「ディジタル・論理的＝離散・切断＝ドライ」、「アナログ・非論理的＝接続・関係構築＝ウェット」ということになること。

テレビ放送などに見られる情報のディジタル化は、「Yes」「No」いずれか一方のみの離散的な態度を取る論理回路から構成されるノイマン型コンピュータを使った情報処理の行われる度合いを高める方向に向かう。そうした点、情報のディジタル化やノイマン型コンピュータ利用の加速は、人間文明をドライ化する方向に導いていると言える。

一方、人間の行動を司る神経系は、神経細胞＝ニューロン同士が結合、関係づけ、縁故を持つことで行動を制御するアナログなニューロコンピュータとして捉えることが可能であり、そうした点、人間の神経系はニューロン同士の相互関連・接続を基本とする、本質的にウェットな存在として捉えることができる。

このように、ディジタル化を加速させるドライな情報を、今までどおりアナログ・ウェットな人間の神経系が扱い続けるという点で、両者の間に亀裂、溝が次第に深まっていく方向に向かっていると言える。遠からぬ将来、両者の関係は深刻な調整局面に入ると考えられる。

(c)2003.2初出

暑さ・涼しさとドライ・ウェットさ

2005.7-2005.10初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、暑さ・涼しさとの関連を検討し、「暑い＝ウェット」、「涼しい＝ドライ」という相関が生まれる理由について、手短に考察しました。

人間の肌の感覚は、周囲の空気中の気体分子数が同数なら、気温が高い＝暑いとウェットに、涼しいとドライに感じられる。

その理由としては、以下の2点が考えられる。
（１）暑いと、発汗により、皮膚上を液体、水分の汗が流れるため、ウェットに感じられる。
（２）暑いと、時間当たり、空気中の同一数の気体分子群の肌に当たる回数が、涼しい場合に比べて多くなり、当たる密度が高く感じられるため、ウェットに感じられる。

このうち、（２）について、以下に詳しく説明すること。

空気の気体分子が、皮膚に時間当たり当たる数は、分子数が同じならば、分子の運動エネルギーが高い、高温な方が、より多く当たる。肌に時間当たり分子が当たる密度が、高温な方がより多い。つまり、高温だと、分子群の皮膚に当たる密度が高い、濃いため、ウェットに（湿ったように）感じられること。

一方、涼しい場合、一定時間で皮膚に当たる分子の数が少なく、皮膚に当たる密度が低い、少ないため、ドライに感じると言える。

エアコンの除湿により、空間内の水の気体分子を除去して、屋外に排出することで、気体分子の分布密度を下げると、皮膚に当たる分子の数が少なくなり、当たる密度が低くなる。そのため、より温度が低くなったのと同じ効果をもたらし、皮膚に涼しさ、ドライさを感じる。

エアコンの冷房は、空間内の気体分子の運動速度を下げることで、時間当たり皮膚に当たる分子の数を減らす、ことをしていると考えられる。

気体分子が皮膚に当たる密度を下げるという点では、除湿と冷房は

共通しており、エアコンで除湿すると涼しいと感じる原因となっていると考えられる。

逆に、暖房は、空間内の気体分子の運動速度を上げることで、時間当たり皮膚に当たる分子の数を増やすことをしていると考えられる。

また、冬場の加湿器による加湿は、空間内の気体分子の数を増やすことで、時間当たり、皮膚に当たる分子の数が増えて、より温かく感じる効果をもたらしている。

気体の分子運動の状態（分子の一定皮膚面積および一定時間当たりの分子の衝突数）と、皮膚によるウェット・ドライさの知覚とは、大きな関連があるということになる。分子衝突数は、分子が速いほど、分子数が多いほど、増加する。この衝突数が多いほど温かく（暑く）、ウェットに感じること。

表 41

人間の皮膚には、これが適度、快適という、空気分子の衝突密度が予め存在し、それに合わせて、エアコンによる、空気の冷・暖房、加・除湿が行われていると言える。日本の夏が往々にして肌には不快なのは、太平洋高気圧配下のため、空気の湿度が高く、かつ高温なため、空気の気体分子の皮膚に当たる密度が高すぎる＝ウェット過ぎるためと言える。

2005初出

重さ・軽さ、上下、高低と、ドライ・ウェットさ

2006.04-2006.10初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、重さ・軽さとの関連を検討し、「重い＝ウェット」、「軽い＝ドライ」という相関が生まれる理由について、手短に考察しました。

一般に、同じ物質の同じ体積なら、気体の方が液体よりも重い。

ドライな感覚を人間に与える気体の方が、物質としての分子分布密度が低く、一定体積当たりの分子数が少なく、それゆえ軽く感じられる。

一方、人間の感覚にウェットさを与える液体は、気体に比べて、物質としての分子分布密度がより高く、一定体積当たりの分子数が多く、それゆえ重く感じられる。

重い液体は、重力によって、大地、地上を指向する。一方、軽い気体は、重力の影響を余り受けず、上空、天空を指向する。

それゆえ、軽さはドライさと、重さはウェットさと、それぞれ相関すると言える。
また、上空、天空指向はドライさと、大地、地上、下指向はウェットさと、それぞれ相関すると言える。

例えば、同じ体積でも重い鉛の玉はよりウェットに、軽いピンポン球はよりドライに感じられると考えられる。

同じ物でも、上、高いところに浮いている物はドライに、下、低いところに沈んでいる物はウェットに感じられると考えられる。

あるいは、音程で、より高い上の音は、軽くドライに、より低い下の音は重くウェットに感じられると考えられる。

人間でも、軽いフットワークの人はドライに感じられ、鈍重な人はウェットに感じられると考えられる。

身軽さを重んじ、上空、天上を指向する人（遊牧民とか）は、ドライに感じられる。一方、重々しさを重んじ、下の大地を指向する人（農耕民とか）は、ウェットに感じられる。

ちなみに、軽さは、密度が少ない分、薄く感じられ、重さは、密度が大きい分、濃く感じられると言える。「軽薄さ」という単語の存在は、この辺の事情を説明していると言える。

また、「冷淡」という言葉があるように、人当たりの薄さ、淡さと冷たさとの間にも関係がある。

以上、まとめると、人間の感覚には、。
「ドライ」＝「軽い（上、高い）」＝「薄い（淡い）」（＝「冷たい」）
「ウェット」＝「重い（下、低い）」＝「濃い」（＝「温かい」）
という相関が成り立っていると言える。

2006初出

柔らかさ（ソフトさ）、固さ（ハードさ）とドライ、ウェットさ

2006.04初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、柔らかさ、固さとの関連を検討し、「柔らかい（ソフト）＝ウェット」、「固い（ハード）＝ドライ」という相関が生まれる理由について、手短に考察しました。

人間にソフトな感覚を与える、布団、クッション、衣類は、人の肌に柔らかくフィットし、肌との間の隙間を埋める。ウォーターベッドや、持ち手がジェルになったシャープペンとかも、肌と密着し、その感じが快い。

このように、ソフトな相手は、自分の肌との隙間を埋めて、柔軟に一体化するため、その点ではウェットであると言える。

ただし、乾いた布団やクッションのように、自分の肌から引き離すときに、抵抗なく、さっと離れてくれる場合は、肌に心地よくフィットするウェットさと同時に、手離れのよいドライさを保っているとも言える。

一方、糊付きテープのように、最初に人肌に触れるとき柔らかくフィットする一方、肌にベッタリくっついて、はがそうとすると抵抗する「粘着くん」の場合は、真正のウェットであると言える。

自分にかかる時は、柔らかくて適度にフィットして自分との隙間を埋めてくれること。（ウェットなこと。）一方、離れる時はサッと離れてくれること。（ドライなこと。）それが、一番、人間にとっては、快いと考えられる。

一方、人間にハードな感覚を与える、硬質プラスチックの板などは、人の肌にフィットせず、隙間を大きく作ったり、あるいは、ゴツゴツと皮膚を强引に固く機械的に圧迫する。こうした感じは、人間に、一体感の欠如を感じさせ、ドライに感じられる。

人間の場合でも、融通の利かない「お固い」法律家、役人は、相手に、ドライな干からびた、面白みのない感じを与える。

一方、相手に対して柔軟に対応を変え、思いやりを持って接する客室乗務員とかは、適度にウェットな感じ＝「潤い」を相手に与えると言える。社会を円滑に動かすには、この「潤い」が必要である。

ドライ・ウェットさと、直線性、曲線性

2006.9初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、直線性、曲線性との関連を検討し、「直線的＝ドライ」、「曲線的＝ウェット」という相関が生まれる理由について、手短に考察しました。

ドライ・ウェットな感覚と、物体等の対象の進行方向については、以下の関係が成り立つと考えられる。

直線的に、まっすぐ進む対象はドライに感じられる。

なぜならば、進むときに周囲の影響を受けず、当初目指した方向を、そのまま自然に維持し続けることができる自由さ、周囲からの独立性を備えているからである。

一方、ふらふら曲がって進む、進路がゆらゆら、なよなよ揺れてその都度変わる、柔軟に方向を変える対象はウェットに感じられる。

なぜならば、進むときに周囲の影響、干渉を受けて、当初目指していた方向をどんどん変えており、その点、周囲に依存し、規制を受ける存在となっているからであること。

人間の性格についても、まっすぐ、率直、剛直な感じの人はドライに感じられ、柔軟に意見を変える、曲げる人はウェットに感じられると言える。

(c)2006初出

滑らかさ、凸凹・突起とウェット、ドライさ

2009.1初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、滑らかさ、凸凹との関連を検討し、「凸凹、突起＝ドライ」、「滑らか＝ウェット」という相関について考察しましたこと。

ピカピカ、ツルツルに、傷一つなく、微細なところまで丹念に磨き上げられた、滑らかな表面の工芸品とかは、その表面が、皮膚とぴったり隙間なく当たる連続性、凸凹の無さ故に、皮膚表面と強い一体感を持って感じられ、それゆえウェットな感じを人に与えると言える。

一方、角の立った、尖り、突起、凸凹、傷のある、滑らかさに欠ける物体は、皮膚表面との一体感が欠如しており、それゆえドライな感じを人に与えると言える。

これは、人間の個性とかにも拡張され、個性の突出、尖りがない人はウェットに、直角みたいに尖った、出っ張りのある個性的な人はドライに感じられると言える。

これらと関連して、表面を滑らせる、円滑化する働きを持つグリスや潤滑油、円滑剤の液体も、ウェットな感じを与えると言える。

リンク、ドッキング、切り離しとウェット、ドライさ

2009.1初出

感覚面でのドライ・ウェットさ（乾湿）と、リンク（連結、結合）との関連を検討し、「リンク、ドッキング＝ウェット」、「切り離し＝ドライ」という相関について考察しましたこと。

人と人とをつなぐ、あるいは物と物とをつなぐ、連結、リンク（link）、ドッキング（dock）の行為をする、機能を持っている人や物は、その本質において、ウェットと感じられる。

人と人とを仲介する、仲を取り持つ仲介者の役割は、ウェットな役割であり、そうした役割を好む人は、ウェットであると言える。

人間の男女が結合、ドッキングするセックスについても、その本質はウェットであると言える。

また、電車の車両と車両を連結するカプラーや、ロケットのドッキングステーション、船舶の波止場（ドック）とか、全てウェットな性質を持つと言えること。

一方、切り離し（unlink,undock）の行為は、ドライであると言える。

粘りとウェットさ

2009.1初出

感覚面でのウェットさ（湿り）と、粘液との関連を検討し、「粘る＝ウェット」という相関について考察しましたこと。

周囲にべたべたくっつく、粘着する液体である、粘液は、ウェットな感じを人に与える。

粘液は、物と物とをくっつける役割を持ち、その際、物の形に合わせて柔軟に形を変えるところがウェットであると言える。

接着液や、セックスの時男女の性器から出る愛液といった粘液は、物と物とを結合、一体化させる役割を持つ点、ウェットである。

この点、べたべたとくっついたり、一度対象とくっつくと離れずにあきらめない粘りは、本質的にウェットであると言える。

陰湿さについて

2006.07初出

陰湿さの概念を、感覚面での暗さ（陰）と、ウェットさ（湿り）が合成されたものとして捉え、整理してみました。

陰湿さは、暗さ（陰）とウェットさ（湿り）の合体、合成した感覚であること。

日常生活においては、水たまりとかは、暗いところでは、日光が当たらないので、乾きにくく、いつまでもウェットな液体の水のままであり、明るいところでは、日光が当たって乾き、ドライになるという関係がある。

要は、明るい＝ドライ、暗い＝ウェットという関係が成り立つ。

陰湿さは、次の複数の要素からなると考えられる。

（１）［ウェット］相手に対して、ベタベタ粘着的であり、繰り返し頻繁にネチネチしつこく働きかけを行うこと。

（２）［暗い］相手に対して、相手にとってマイナス、ネガティブ、逆機能なことをすること。いじめ、いやがらせのように、相手がいやがることをする。

（３）［暗い］非合法なこと、やったことを表に出すと非難されること、やってはいけないとされることを行う。暴力行為、金を奪う行為、強姦等の人権侵害行為を行うとかいうのがそれである。

（４）［暗い］裏でこっそり隠れて行うこと。秘密にすること。表

に出さないこと。表面的には、いいこと、何でもないことをしているように振る舞う。表面をきれいに飾りたてて、見た目には問題ないように見せかける。あるいは、表面的には仲のいい振りをして、裏で陰口を叩く。

こうした対人関係の陰湿さは、高湿度で、湿気でジメジメした日本の社会風土、ムラ社会では、会社でも学校でも普通にみられることであり、日本文化の特徴であるといえる。

また、対人接触を頻繁に行い、表面をきれいに飾ることが好きな、女性優位な特徴であると見ることもできる。

2006初出

加湿、除湿こと。

2009.11初出

加湿と除湿について、単位体積当たりの分子数の増減の観点から、人間の感覚に与える影響を整理してみましたこと。

単位体積当たりの分子数を増やす、高密度にするのが加湿である。
単位体積当たりの分子数を減らす、低密度にするのが除湿である。
従来の除湿器、加湿器の役割がこれに当たる。

分子速度を上げると、
分子間力が働きにくくなる。これは除湿に当たる。
皮膚等への衝突回数が増える。これは加湿に当たる。高温の夏に蒸し暑さが増えるのがこれに当たる。

皮膚への分子衝突回数を増やすこと。これは、加湿に当たる。
皮膚への分子衝突回数を減らすこと。これは、除湿に当たる。

分子進行方向を相互に他と近づくようにすること。これは、加湿に当たる。皮膚とかにくっつくこと。
分子進行方向を相互に他と離れるようにすること。これは、除湿に当たる。皮膚からさらっと離れること。分子進行方向を相互に近づく、離れるようにするのを、どうやって機械でコントロールするかが問題である。
コンピュータプログラムとヴァーチャルリアリティで実現すること。
磁石で、NとN同士、SとS同士は反発し合い、離れてドライである。
NとSとは引き合い、くっついてウェットである。
帯電イオンで、プラスとプラス同士、マイナスとマイナス同士は離れてドライである。マイナスとプラスとはくっついてウェットである。

不快指数と湿度感覚

2009.11初出

不快指数は、夏に蒸し暑く、高い。高温多湿だと高いこと。

高温だと、分子の粒子速度が大きい。
多湿だと、分子の粒子数が多い。

皮膚に一定時間当たり当たる、空気中の分子粒子数が一定以上に増えると不快になる。

長時間連続接触だとウェットに感じ、短時間接触だとドライに感じること。
汗が乾かないと不快に感じる。汗が蒸発しないのは、高湿度であり、汗の水分を空気が受け止められるだけの余裕がない。既に空中で水蒸気が飽和している。

湿度感覚シミュレーション

2009.11初出

どうすれば、湿度感覚のシミュレーションが可能か、視聴覚、触覚の観点から考察してみました。

触覚では、皮膚相当の壁に当たる、一定時間当たりの粒子の個数に比例〜双曲線で、よりウェット＝湿度が高いと感じられる。
視覚では、目に飛び込んでくる、一定時間当たりの粒子の個数に比例〜双曲線で、よりウェット＝湿度が高いと感じられる。
聴覚では、耳に飛び込んでくる、一定時間当たりの音の個数に比例〜双曲線で、よりウェット＝湿度が高いと感じられる。

粒子の速度が大きいと沢山当たる。速度が小さいと少ししか当たらない。同じ粒子数では高温の方が湿度が高いと感じられる。

粒子の数が多いと沢山当たる。数が少ないと少ししか当たらない。

圧力が高いほど、湿度が高い。圧力と湿度は比例〜双曲線の関係にある。
同じ分子数なら、体積が小さいほど、温度が高いほど、圧力が高くなり、湿度が高くなる。

ドライ、ウェットモーションパターン

2009.11初出

ロジック直線で階段状なのはドライである。
曲線アナログは、ウェットである。

高速なのはドライである。
低速なのはウェットである。

離れる、平行線をたどるのはドライである。
近づくのはウェットである。

気体・液体性、ドライ・ウェットさと拡張、非拡張指向

2009.11初出

ドライさは拡張、拡大指向に関連があり、ウェットさは非拡大、体積一定指向と関連があると説明しています。

ドライな気体分子は放っておくと、体積が膨張し、四方八方の新天地にどんどん拡散、拡大し、広まっていく。その点、気体は、いの一番に、新天地に進出しようとするパイオニア精神に溢れている。その点、ドライな気体の本質は、拡大、拡張、膨張路線であり、布教者の如くどんどん広まって、辺り一面を自分の植民地化していくことにあると言える。
ドライな気体分子は、世界中、地球中にあまねく広がることを指向する分、グローバルであり、普遍的＝ユニヴァーサルである。
ドライな気体分子は、バラバラに拡張していく分、個人主義的でまとまりが弱い。

ドライな気体分子の性質は、男性優位であり、欧米的である。

これに対して、ウェットな液体は、体積一定であり、非拡大、非拡張で現状維持的である。放っておくと、元の場所から広がろうとしないこと。ローカル、局所的、地域限定的に、まとまり、縄張り、一体性を維持しようとすること。共同体的というか、分子同士が互いに近づき合って、こじんまりと小さく、表面積を最小にする形でまとまろうとする。身内だけで閉鎖的に寄せ集まろうとすること。分子同士が互いに一致団結し合って、ユニオン（まとまり）、集団を形成すること。

ウェットな液体分子の性質は、女性優位であり、伝統日本的である。

近代に入ってからの日本は、欧米流のドライな拡大路線に追随し、自らも拡大路線を歩もうとしてきた。
欧米の影響力を差し引いても、日本や中国に若干の拡張傾向があるのは、ウェットな女性一辺倒でなく、ドライな男性の影響力が少しだけ残っているせいだとも言える。

アロマ、香水、香りとドライ、ウェットさ

2009.11初出

嗅覚にも、ドライ、ウェットの感覚があるのではないかと考えられる。

ミントの香りはドライな感覚をもたらす。
あるいは、栄養ドリンクのような薬物感の強い飲み物は、ドライな感覚をもたらす。

鰹出汁の香りはウェットな感覚をもたらす。
桃の甘い香りは、ウェットな感覚をもたらす。

心理一般

性格のドライ・ウェットさとアイデンティティ

2004.7初出

性格のドライ/ウェットさと、アイデンティティ（自己同一性）の確立しやすさとの関連を考えてみましたこと。「ドライ＝アイデンティティが確立しやすい」「ウェット＝確立しにくい」と考えられます。

アイデンティティ（identity）の概念は、もともと、心理学者のErikson,E.H.によって提唱された。
「自己同一性」と訳されることが多く、一貫した自己意識を連続して保ち続けることを指している。

欧米における個人のアイデンティティの確立は、乳児期の自他分離から起きるとされる。

自他分離が起きると、自分は他人とは違う、独立した一つの存在であり、他人から独立して、一通りの意思決定を行わなければならない。そこから、自然に、自分はこういう方向に、自分自身の判断と

責任に基づいて進もうという、自立した意思が成長し、青年期にかけて確立する。

その点、個人のアイデンティティの確立には、自分と他人とを別々な、相互にバラバラに動く独立した存在として捉えようとするドライさが必須となる、と言える。

逆に、確固としたアイデンティティが確立されておらず、常に周囲の他者の動向に流されて、同調していくのは、周囲との一体・融合感を絶えず維持しようとするウェットな性格の持ち主と言える。

自ら自分を律し、自分の進行方向を自分の意思と責任で決定する精神の持ち主を、アイデンティティ確立者と呼ぶならば、そのアイデンティティの維持には、自我が他人から独立し、周囲から分離してバラバラに動くことのできるドライさが前提となると言える。

アイデンティティの概念は、欧米のようなドライな社会で成立しやすく、周囲との同調、周囲への埋没を絶えず求められる日本や東アジアのようなウェットな社会では、成立しにくいと言える。

アイデンティティの概念が欧米由来のものであり、日本に未だにしっくり来る訳語がないのも、日本のようなウェットな雰囲気の社会では、確固たるアイデンティティが確立した個人が存在しなかった（しにくかったこと。）証拠であると言えること。

ドライ・ウェットさと愛

2005.03-2005.05初出

愛は、相手との一体・融合感、くっつき感、癒着・接続感を与えるものであり、その点、「愛はウェットである」と言えると考えます。

愛とは、一般に、人間愛とか、男女愛、同性愛などを示す。

愛は、。
（１）人を好きになること。その人に「近づきたい」こと。好きな人と、いつまでも「一緒に」いたい。好きな人を「独占したい」こと。

（２）好きな人のために何でもすること。（援助・奉仕）こと。好きな人のために全てを捧げる、投げ出すこと。（犠牲をすること。）

（３）好きな人と、気持ちの「つながり」を持ちたいこと。

（４）好きな人と、いつまでも一緒にいて、離れたくない（愛着）こと。周囲が引き離そうとすると、必死になって抵抗する。

こうした愛は、全て、相手との一体・融合感、くっつき感、癒着・接続感を与えるものである。その点、「愛はウェットである」、と言える。

一方、愛情は、ウェットなものばかりでなく、ドライな愛情もあると考えられる。

ドライな愛情は、相手のプライバシーや自由意思を尊重し、相手に対して干渉したり、束縛せず、相手の好きなようにさせてあげる、という相手に対する思いやりとして表される。

ウェットな愛情は、ともすれば、相手との一体感（相手と一緒にいること）を望む分、相手を自分の元へと引き寄せようとするあまり、相手を束縛し、不自由な思いをさせることにもつながる。その対極として、相手に自分の世界を大切に持たせ、自由に、自分の意

思を貫徹させようとする、相手に意思決定の自由を与え、思い通りにさせてあげよう、相手の思いをかなえてあげようとするのが、ドライな愛情である。

［注］この稿は、2004年度末に放送されたアニメ「神無月の巫女」最終話を見た感想を土台にしています。

(c)2005初出

「天国」とドライ、ウェットさについて

2005.03-2006.01初出

「天国（桃源郷）」の概念は、人間がもともと心の中にもっている、憧れの最適環境であり、そこでは、湿度が最適化されていると言えます。

人間の愛情の源は、全ての心が安らぐ、本当のふるさと、桃源郷、天国である。
心の奥底で望んでいる感情であり、心を動かす温かな感情であり、感動の源であること。

人間の心は、「心の奥底にあるウェットな核」とそれを守る「ドライな殻」からなる。
ウェットな核は、温かく柔らかく、心地よい感覚の源泉であり、感動や愛情を生みだすものである。そこが「（心の中の）天国」であること。

「天国」は死後の世界にあるというよりは、もともと人間の心の中にその原風景が存在するものと言える。

「天国（桃源郷）」の概念は、人間がもともと心の中にもっている、憧れの最適環境である。

「天国」は、ナイーブで傷つきやすいものであり、ドライな殻によって守られる必要がある。

ドライな殻は、ウェットな核を守るものであり、冷たい、落ち着いた、冷静で客観的な視点を心に与えるものである。

ウェットな核が大きい人は、女性優位であり、ドライな殻が厚い人は、男性優位である。

人に安らぎを与える、本当の天国、オアシス、ないし天国の原風景は、人の心の中にある。
天国、オアシスは、愛情の仲にいる時に感じる。
天国、オアシスは、水と緑にあふれている点、ウェットである。また、他者との一体感、一緒にいる感じ、くっついている感じを伴う点、ウェットであること。
天国は、温かい、明るい、光に満ちた世界として捉えられる。
天国は、サラサラしている、ジメジメしない、うっとうしくない感覚に溢れる点、ドライである。

天国は、人間にとって、最適環境と知覚される環境であり、天国（と感じられる場所）の湿度が、人間にとっての最適湿度である。適度にドライ、かつウェットであること。

［注］この稿は、2004年度末に放送されたアニメ「神無月の巫女」最終話を見た感想を土台にしています。

2005-2006初出

既存社会心理学説との照合

ドライ／ウェットの軸の上に乗っていることが確かめられた社会的行動様式について、従来の社会心理学における学説との照合を行った。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

ドライ・ウェットさと、パーソナリティ5次元ビッグ・ファイブとの関連

2006.9初出

パーソナリティのビッグ・ファイブbig fiveとは、パーソナリティの特性論の一つで、主要な5つの特性次元でパーソナリティを包括的に説明することができるとする考え方である。

ビッグ・ファイブは、パーソナリティの特性を表す、数多くの単語を因子分析にかけて、出てきた因子である。

このビッグ・ファイブとドライ・ウェットさとの関連は、以下のようにまとめられると考えられる。

（１）神経質Neuroticism対人面で閉鎖的、排他的な場合はウェット。対人関係の進展を指向しない、乗り気でない場合はドライ。

（２）外向性Extroversion他の人を指向する場合はウェット。人のいない外界を指向する場合はドライ。

（３）開放性Openness互いの間が開いた、誰でも受け入れる風通しの良さはドライさに通じる。

（４）協調性Agreeableness対人関係の発展・維持、他の人との結びつきの強化を指向しており、ウェット。

（５）まじめさ、良心Conscientiousness他者の有無にかかわらず真摯な態度を保持しようとする場合は、自律的であり、ドライ。他者との良好な関係を築くことを目的として、まじめな態度を保持しようとする場合は、ウェット。

2006初出

ドライ・ウェットな対人関係とストレス

(c)2002.5初出

会社や学校などにおけるメンタルヘルスの観点から、ドライ・ウェットな対人関係が、どのような精神上のストレスに結びつくかについて考察してみました。

ここでは、会社や学校などにおけるメンタルヘルスの観点から、ドライ・ウェットな対人関係が、どのような精神上のストレスに結びつくかについて考察する。

対人関係がドライなときに感じるストレスとしては、。

（１）〔個人主義〕他者から冷たく突き放され、自分はひとりぼっちだという孤独感を感じたり、誰も自分のことを助けてくれないというhelplessな感情に襲われ、それが心理的なストレス要因になる。

（２）〔独創指向〕仕事を進める上で、今まで誰もやったことのない未踏の作業手順などに積極的に挑戦しなくてはならず、そうした未知の領域に足を踏み込むことや試行錯誤の過程で失敗を犯すことへの恐怖心が、心理的なストレス要因になる。

一方、対人関係がウェットなときに感じるストレスとしては、。

（１）〔相互依存指向〕互いに相手の動きを監視・牽制し合うため、いざ相手から足を引っ張られるとダメージが大きいし、いつされるか分からないので不安になり、それが精神的疲労につながる。あるいは、自分がちょっと成功したり、いい思いをしたりするとたちまち周囲からしっとされるので、精神的な解放感がなかなか持てず、それがストレスにつながる。

（２）〔同調・他律指向〕何をするにも周囲の意向を気にしながら行動する必要があり、気配りし過ぎとなって疲れてしまう。

（2-1）職場で同僚が残業しているときいやいや付き合い残業せざるを得ないなど、周囲から一緒に行動せよという圧力が絶えずかかるので、それにいちいち合わせるのが精神的に負担となり、ストレスにつながる。

（2-2）自分が周囲の流行に乗り遅れると、たちまち周囲から馬鹿にされるため、乗り遅れていないか絶えず気になり、精神的な圧迫感が生まれやすい。

（３）〔関係指向〕相手との一体感や愛情を求める度合いが強くなるため、相手と気持ちが合っているかどうか絶えず確認したくなり、それが强迫的になるとストレスにつながる。

（４）〔反プライバシー〕職場で大部屋勤務のように、周囲の他者

と互いに自分の行動を絶えず監視し合うのが普通である（各人の目が「生ける監視カメラ」としての役割を果たす。）こと。そのため、プライバシーが侵害されていると感じられ、それがストレスにつながる。

（５）〔規制主義〕校則など、行動する上での規則や制限がきつく、不自由な思いをすることがストレスにつながる。

（６）〔集団主義〕何事も集団ペースで物事が進むため、それに絶えず合わせていかなければならないことが、特に団体生活が苦手な場合、ストレスにつながる。また、集団の利益や存続を自分のそれより優先することを求められるため、私生活を犠牲にしなければならないことがストレスにつながる。

以上の検討結果から鑑みるに、対人関係がウェットな方が、感じるストレスは多いと考えられる。対人関係は、ある程度、適度にドライな方がストレス無く過ごしやすい。その意味で、社会全般の対人関係でウェットさを取り除く「社会的除湿」が必要である。

(c)2002初出

2つの自由

2009.11初出

自由には、ドライな自由とウェットな自由の2種類があると考察します。

自由には、。
・液体的、ウェットなクッションタイプ
・気体的、ドライなバラバラタイプ
の2種類がある。

クッションタイプの自由は、自分を包む周囲との温もりある一体感を保ちながら、わがまま、甘えで、自分の周囲を自由に変形させて自由に動ける、束縛はあるが融通が利く自由である。ただし、一定以上の圧力をかけすぎると、クッションの限界を超えてしまい、遊泳ができなくなる。

バラバラタイプの自由は、相互に離散して、相互に束縛無く自由に動ける自由である。

リラックスとドライ、ウェットさ

2009.11初出

リラックスには、ドライなリラックスとウェットなリラックスの2種類があると考察します。

皆と一緒にいるとリラックスするのが、ウェットなリラックスである。
一人でいるとリラックスするのが、ドライなリラックスである。

工学

製品設計のドライ・ウェットさについて

2003.6-2004.7初出

会社が設計・製造する製品について、会社の組織風土がドライな場合とウェットな場合とで、製品設計上どのような違いがあるか、手短にまとめました。

家電機器、情報機器、AV機器などの製品は、大きく分けて、ドライな作りの製品と、ウェットな作りの製品とに分かれる。
ウェットな作りの製品は、以下のような特徴を持つ。

（1）［閉鎖指向な作り］自社内部で閉じた作りになっていること。部品が各社独自の部品を使用しており、他社との互換性がない。インタフェースが外部に対して非公開となっている。周辺機器は、その会社の製品にしか応用が効かず、他社の製品には規格が合わずに取り付けることができない。部品交換は、自社修理のみである。

（2）［集団主義な部品］部品が、作り付け・一体になっていて、ひとまとまりに一体融合化している。部品同士がくっついており、バラバラに分解するのに骨が折れる。例えば、デジタルカメラのように、精密部品が互いに分解困難な形で接合し合う製品がこの代表例である。

ウェットな組織風土の会社が設計し、生み出す製品は、ウェットな作りの製品となることが多い。例えば、ウェットな国民性を持つ日本の電機メーカーが、欧米メーカーの規格に影響されずに設計・製造する、家電製品（エアコン、掃除機、冷蔵庫など）、情報・通信機器（デジタルカメラ、携帯電話）、AV機器（DVDレコーダ）、そ

の他システムキッチンなどがこのウェットな作りとなることが多い。

一方、ドライな作りの製品は、以下のような特徴を持つ。

（１）［開放指向の作り］社外に開いた作りになっていること。部品が他社と共通化、標準化されており、互換性がある。余所の赤の他人の作った部品を持ってきて交換可能であること。インタフェースが外部に対して公開されている。

（２）［個人主義的な部品］製品のバラバラ分解が容易に行える。分解がモジュール単位で簡単に行える。

要するに、ドライな製品は、いろいろな外部会社が作った共通規格のバラバラな部品を集めることで、素人でも簡単に製品が組み立てられる点が特徴である。

ドライな組織風土の会社が設計し、生み出す製品は、ドライな作りの製品となることが多い。欧米の電機メーカーが設計したパソコン（IBM PC）や、欧米の住宅機器メーカーが製造するシステムキッチンとかがその代表例である。

ただし、一見、標準規格に見えるドライな感じのする規格でも、ある一社の製品が勢力を伸長させて、他社の規格を死滅させたことによって生み出された場合がかなり多い（例えば、VHSビデオテープ規格など）こと。そういう点では、現在、全世界に向かって開かれているかに見える、ドライな標準規格も、ある一社の閉鎖的・独自の規格＝ウェットな規格の発展形とも言えるのである。

ウェット・インタフェース・デザイン

(c)2001-2002初出

従来とかくドライだと批判されてきたコンピュータやロボットのユーザインタフェース（ユーザとの接点のあり方）を、ウェットに改良する方法について、具体的な設計原則の形へと簡単にまとめましたこと。

本文は、従来まとめられた対人関係のウェットさについての知見を、コンピュータのユーザ・インタフェースに応用することを目的としている。

従来のコンピュータのインタフェース（ユーザとじかに接する部分）の使い心地は、とかくドライな印象が付きまとうものであった。すなわち、従来のコンピュータはメカニックで非人間的であり、ユーザとの間に築いた関係もリセットスイッチを押すことで全て初期化され、よそよそしい「赤の他人」として振る舞ってきた。コンピュータはまた、論理的な計算を得意とし、合理性・科学性の権化として、人間社会に君臨してきたのである。

しかし、コンピュータの持つそうした性質は、人間であるユーザがもともと根深く持つ心理的なウェットさとは相容れないものであった。それゆえコンピュータは、その振る舞いが根本的に「非人間的」である、として非難されてきたのである。

しかし、このコンピュータのインタフェースがドライ過ぎるという問題は、これまで長い間放置されてきた。従来のコンピュータの使い心地を改良する技術としてのユーザビリティ工学は、とかくコンピュータの合理的・メカニックな側面を洗練させ、無機質な道具として人間に一方的に使われる、奉仕する能力を向上させることにのみ重点を置いてきたのである。

以下においては、上に述べた問題を解決する方法論として、新たに「ウェット・インタフェース」を提案する。すなわち、コンピュータがどのように振る舞えば、ウェットな感じをユーザに与えること

ができるかについて、考察する。

従来、人間同士の対人関係において、ウェットな感覚を与えること。それには、以下が必要である。他者と心理的に近接しようとする指向を持つこと。（心理的近接指向。）および他者と近接した状態で離れて動き回ることがないこと。それは、そのようにまとめることができる。この基本的な考え方と、コンピュータの使い心地をどうすればよくすることができるかについての原則＝ユーザビリティ原則とを、内容的にリンクさせることが可能である。コンピュータにウェットな感じを与える、ウェット・ユーザ・インタフェースの基本原則は、「コンピュータがユーザに対して心理的に近づこう、くっつこうとする、離れようとしない」ことである、と捉えることができる。

コンピュータにウェットさを与えるユーザビリティ原則を導き出すに当たっては、筆者が従来の研究で明らかにした、他者にウェットな感覚を与える行動様式がどのようなものであるかのまとめの表を参照しながら、それをコンピュータのユーザに対する動作レベルへと翻訳する、という手順を踏んだ。

なお、コンピュータに移植するに当たっては、ウェットな行動様式そのものは、もともと人間同士の間では必ずしも望ましいものとは考えられていない場合がある。（煩わしさや息苦しさを感じさせる弊害も多くある。）そのため、コンピュータの動きとしてどうすればウェットでかつ、一緒に付き合っていく上で望ましい、好ましい「キャラクタ（人格）」とすることができるかというように、「望ましさ」を前提とした原則となることを心がけた。

以下に、コンピュータにウェットさを与えるユーザビリティ上の基本原則を表の形で示すこと。

表 42

こうしたウェット・インタフェース原則は、コンピュータ上にいる仮想人格としてのエージェントや、物理的空間を自力で移動するロボットにも応用可能である。

ユーザのことを慕い、なついてくる、ウェットな態度のロボットは、ユーザに対して、従来のペット同様親しみや安らぎを与えることになり、ドライな態度のロボットと比較して、ユーザははるかに強い愛着や大事にしたい、一緒にいたい気持ちを感じるであろう。こうしたロボットの持つウェットな性質は、単に仕事ができるとか壊れにくいとかいった従来の道具や下僕としてのロボットとはまた別の「使用時の快適さ」をユーザに対して提供する。

ウェット・インタフェースは、コンピュータやロボットがユーザに対して心理的に接近し愛着を持とうとするインタフェースと捉えることが出来、その点「温かさ、心理的な温もり」をユーザに与える「温情インタフェース」とも深く関連すると言える。

また、上記原則を応用することで、従来ウェットとされてきた、日本的、ないし女性優位な態度を取るコンピュータやロボットを開発することが新たに可能となると言える。

今後は、こうしたユーザビリティ原則をもとに、具体的なコンピュータやロボットのハードウェア・ソフトウェアの仕様を設計していくデザイン過程に即時に使えるウェット・インタフェース・ガイドラインを整備していく作業が必要となろう。

(c)2001.9-2002.6初出

ドライ／ウェット・エージェントについて

(c)2000.8-2001.6初出

ドライ・ウェットな人々の社会的な動きを、コンピュータ上で、実現する方法について、手短に考察しましたこと。「エージェント」とは、コンピュータ上で実現された仮想的な人格のことです。

筆者は、ドライ／ウェットな態度を取る人の、社会的な動き（行動の取り方）を、コンピュータ上で、シミュレートしたいと考えていること。
コンピュータ上で仮想的に実現された、ドライな人格を、「ドライ・エージェント」、ウェットな人格を、「ウェット・エージェント」とここでは呼ぶことにする。
例えば、日本人の伝統的な行動様式はウェットであるから、コンピュータ上で、彼らの動きをシミュレートするには、「ウェット・エージェント」を実現すればよいことになる。

まず、筆者の考えた「人間同士が他者にドライ・ウェットな感覚を与える仕組みと、物体である気体・液体がドライ・ウェットな感覚を人間に与える仕組みとが共通である。運動エネルギーが小さく、相互の間に働く引力が大きいほどウェットに感じられる。
（１）ドライな人（ドライ・エージェント）の動きは、気体分子運動に似せればよい。
（２）ウェットな人（ウェット・エージェント）の動きは、液体分子運動に似せればよい。
ということになること。
まず、複数のドライ・エージェントの動きについて考えてみると、
・運動エネルギーが大きいのだから、高速で動かす。
・相互間引力（分子間力相当の力）がほとんど働かないから、各自をバラバラ・独立に、自由に動かしてよい。
といった規則に従って動かせばよいこと。
ドライ・エージェントの動きの場合は、分子間力相当の力を考えなくてよいので、こちらは、1人1人の軌跡を、相互干渉を考えに入れずに、別々に計算して、動かすだけでよく、簡単に実現できる。
一方、複数のウェット・エージェントの動きについて考えた場合、
・運動エネルギーが小さめなので、低速で動かす。

・相互間引力（分子間力相当の力）が大きく働くので、各自の動きを、互いに引き合い、干渉し合うように動かさなければいけない。
といった規則に従って動かす必要がある。
相互間引力は、エージェント同士が互いの存在する位置を近接化させる形で現れる。その結果、相互間引力が働くウェットなエージェントは、互いに親近性や愛着を持って、寄り添い合う存在となる。そういう点では、ウェットなエージェントは、互いに「甘える」エージェントとも言える。
ウェット・エージェントの動きについては、周囲の他者の動きを絶えず考慮に入れつつ、互いに干渉し合う形で動かす必要があり、1人1人の軌跡を、他者とは独立に決めることができない。従って、各自の動く軌跡の計算は、ドライ・エージェントの動きに比べて、非常に複雑になり、実現しにくい。
ウェット・エージェント各自の動きは、例えば、以下のように簡略化して、プログラムすることができるかも知れない。
（1）1回の処理毎の移動距離（速さ）を、まず決定すること。
（2）自分の動いてきた方向を計算すること。これから初めて動く場合は、任意の動作方向を設定する。
（3）自分の位置を中心とした一定半径内に、他者がいるかどうかを確かめ、いたら、その位置を記憶する。
（4）位置を記憶した他者について、自分との位置関係、すなわち、自分から見て、その他者が、どの方角にいるかを、計算する。
（5）位置を記憶した、各他者のいる方向との間に働く、相互間引力を計算すること。
（6）位置を記憶した他者の数だけ設定した、相互間引力を、順に合成し、自分が、総合的に見て、どの方向に引かれて行くかを決定する。
（7）それまで取ってきた自分の動く方向と、相互間引力で引かれる方向とを、合成して、最終的に、自分がどの方向に動くかを決定する。
（8）最終的に決定した動く方向に、1回の処理毎の移動距離（速さ）分だけ、動くこと。
上記の（1）～（8）の計算を、各人について繰り返すことで、ウェット・エージェントの動きを実現することができる、と考えられる。しかし、そこには、まだ残された問題が、いくつか存在する。
・（3）において、自分の位置を中心とした一定半径内にいる他者を確かめるには、単純にやろうとすると、空間内にいる全ての他者

の位置情報を入手して、一定半径内に入っているかどうかをいちいち判定する必要がある。他者の数が少ない時は問題ないが、多い時は人数分だけ計算しなくてはならず、大変である。こうした煩雑さをなくすには、自律した各エージェントが視覚を持って、自分の目に見える範囲の他者だけをピックアップすることができればいいのであるが、こうした視覚をコ,ンピュータ上で実現するというのも、考え直すと、結構大変そうである。
・（５）の相互間引力の計算において、他者との距離の大小によって、引力の大きさを変える必要があるのではないか。
・（８）において、最終的に決定した方向に動く際には、上記の説明だと、どのような引力が働いたかに関わらず、一定速度で動くように仮定しているが、本当は、引きつけ合う力の大小によって、速度を変化させる必要があるのではないか。
上記で述べたのは、複数のエージェントの動きを、大局的な、鳥瞰図的な見地から眺めた場合についてである。こうした行き方とは別に、1人のエージェントの動きに的を絞って、そのエージェントの視覚に入る、他者（あるいは、他者の群れ）の姿のあり方が、ドライな場合とウェットな場合とでどう違うかを調べることで、性格・態度のドライ・ウェットさを、より現実の人間関係に近い形で、捉えることが可能となる。
あるいは,、エージェントが、複数のユーザーの所有するコンピュータ間を自由に移動して、仕事をする、モバイル・エージェント概念との組み合わせにより、日本的でウェットな、ユーザーと、画面などを通して互いにベタベタくっつき合うこと。（利用者の後を追ってネットワークを渡り歩きながらついてくること。）そうした形のエージェントを生成すること。それも、また別の研究の進め方であると考えられる。
一般的に言えば、以下のようになる。利用者に対し親近感を抱き、少しでも利用者との間の距離を埋めて近づこうとして自発的になついてくるウェットなエージェント。それは、人々の心を和ませ、癒す。（それは、人々の心を、温かいものに変化させる。）それは、そのように考えられ、孤独感にさいなまれやすい現代人にとってメンタルなケアをもたらす重要な要因となりうること。そういう点で、ウェットなエージェントは、「温もり」のエージェント、「癒し」のエージェントという性格をもつと言える。なお、具体的にどのような態度をエージェントが取ると温かく感じられるかについては、「温情インタフェースデザイン」へのリンクをたどっていただきたい。

今後は、上記の検討結果をもとに、まずはコンピュータ上で、ドライ・ウェットな人々の動きを、実際にシミュレートしてみたいと考えている。例えば、コンピュータのハードウェアに依存しない中間コードを吐き出すJava言語系で実装すれば、コンピュータの種類を問わず、エージェントの動作が実行可能となり、有効性が高いと考えている。また、物理的形態を取った「具体性のある」エージェントとしての医療・福祉用ロボットにウェットさを持たせると、それが要介護者に心理的に近い存在となって生きる勇気を与え、患者のリハビリテーションやクライアントの社会復帰が進む度合いが大きく改善されるかもしれない。そういう点では、ロボットにウェットさを持たせることも、今後の重要な研究課題である、と言える。

(c)2000.8-2001.6初出

ドライ（気体）・ウェット（液体）分子運動シミュレーション

2004.8-9初出

ドライ・ウェットな人々の社会的な動きをシミュレートすると、それぞれ気体・液体分子運動パターンと似ていると考えられますこと。ここでは、分子運動に詳しい専門家作成のコンピュータプログラムをお借りして、気体・液体分子運動パターンを実際に比較して眺めることができるようにしました。

気体、液体の分子運動を、Javaアプレットでシミュレートした結果を

動画で表示すると、以下のようになりますこと。比較してご覧下さいこと。

表 43

表 44

ドライな気体分子が、個人主義的、自由主義的、関係切断的、移動的、開放的・・・であるのに対して、ウェットな液体分子が、集団主義的、規制主義的、関係構築的、定着的、閉鎖的・・・であることが分かるでしょう。
ちなみに、気体＝ドライな方が、遊牧・牧畜、男性中心の欧米社会の人々の行動に似ており、一方、液体＝ウェットな方は、農耕、女性中心の日本、東アジア社会の人々の行動に似ていると言えます。

2004.8-9初出

繊維とドライ・ウェットさ

2006.07初出

［要旨］
人肌にドライな感覚を与える繊維は、植毛がパターンＤに沿った「散植」であり、「散触」を人肌に与える。一方、人肌にウェットな感覚を与える繊維は、植毛がパターンＷに沿った「密植」であり、「密触」を人肌に与える。

タオルケットや毛布、シーツ、シャツなどの衣類、繊維類は、その植毛、繊維パターンによって、ドライな感覚を与えるドライな繊維、生地と、ウェットな感覚を与えるウェットな繊維、生地とに分けることができる。

ドライな繊維は、毛先が太く、植毛に隙間が空いており、粗い網目となっており、肌と繊維との境界が明らかである。

その肌に与える感覚は「散触」であり、皮膚に当たる凸部、生地の突起が低密度でまばらで空きがある感じである。その植毛、繊維パターンは、パターンＤの「散植」タイプである。夏用のドライシーツとかは、このタイプである。

これによって、日本の蒸し暑い夏も、繊維のドライな感触で相殺して乗り切ることができる。

一方、ウェットな繊維とは、毛先が細く、植毛が隙間なく、びっしりと埋められており、毛先が繊細で細かく、皮膚の上を隙間なく覆い、肌と繊維とに境界がない。

その肌に与える感覚は「密触」であり、皮膚に当たる凸部、生地の突起が細かく高密度で、びっしりと空きなく埋まっている感じである。その植毛、繊維パターンは、パターンＷの「密植」タイプである。冬用のビロード生地を用いたタオルケットとかは、このタイプである。

これによって、日本の乾燥した寒い冬も、繊維のウェットな感触で相殺して乗り切ることができる。

2006初出

生物

ウェットな存在としての生物～人間

2002.12-2003.03初出

生物は、液体の水分がないと生きられません。生存上ウェットな液体水分を必須とする生物は、人間も含めて、本質的、根源的にウェットな存在である、と言えるのではないかと考えます。

生物は、液体の水分がないと生きられない。人間を含む生物においては、液体の水分は不可欠であり、その点、生物は、液体の水分の持つ「ウェット」さと、切っても切り離せない存在であると言える。生存上水分を必須とする生物は、人間も含めて、本質的、根源的にウェットな存在である、と言える。

生物は、体内の大半を液体の水分が占めている。人間のような陸上生物においても、海から陸に上がる進化の過程で、その体内を塩分を含む液体の水で満たしたまま陸上で生活するように進化した。その点、陸上生物は、体内に「海」を持っていることになる。海水は、液体の水分であり、その点、人間を含む陸上生物は、乾いた陸上にあって、海水というウェットな物質を体内に抱えながら生きる点、存在そのものがウェットであると言える。

人間を含む生物は、外界とのインタフェース部分に、粘液を持っていることが多い。口の唾液、鼻水、セックス時の精液、愛液など

は、いずれもベタベタと糸を引く感じ＝粘着性を持ち、ウェットな感じを与える。こうした点からも、生物はウェットな存在である、と言える。

どんなドライな性格の人も、生物である以上、ウェットな感覚を与える液体の水分なしには生きることができない。その点、性格がドライな人も、根源を突き詰めればウェットな存在であると言える。ドライな態度を取る人も、その基盤の奥底はウェットさが支配している、と言えると考える。

(c)2002-2003初出

地学

気象と水分、湿度

2009.11初出

気象におけるウェットな水分や湿度の占める重要性について述べていますこと。

気象ニュースの大半は、温熱と水関連で占められている。
気象に占める水や湿度の役割が大きい。

大気中の水分は、。
・気体水蒸気
・液体雲、霧（気体中の液体。小粒。）
・液体雨（大粒）

と分けられること。

水中の気体は、。
・気体気泡（液体中の気体。川、海の中。）
となること。

天気、気象と水、太陽、空気

2009.11初出

天気、気象の構成要素について、水、太陽、空気に分類してみましたこと。

・水
固体＝氷、雪
液体＝雨、雲、霧／川、海
気体＝水蒸気空気中湿度

・太陽
熱温度

・空気
気圧風

天気、気象と分子粒子表現

2009.11初出

天気や気象現象を説明する上で、水等を分子の粒子として表現すると分かりやすくなるのではないかと提言しています。

天気、気象現象を、水蒸気～空気の分子、粒子で表現すること。
雨、雲、前線、・・・いずれも粒子表現することで本質が分かりやすくなる。

〔解説：応用編〕ドライ・ウェットな感覚・性格・社会について

社会一般

自然環境のドライ・ウェットさと、社会のドライ・ウェットさとの関連

－農業（遊牧・農耕）の視点から－
1999.1-2005.8初出

人々の性格・態度のドライ/ウェットさと、人々が生活する、自然環境の乾燥・湿潤の度合いとの関連を調べました。その結果、「ドライな環境＝遊牧＝ドライな性格」、「ウェットな環境＝農耕＝ウェットな性格」という相関関係が推論されました。

ここでは、環境のドライ・ウェットさと、社会や対人関係におけるドライ・ウェットさとの関連を、主に、農業のあり方を軸に考察した結果についてまとめる。

なぜ、農業のあり方を考察の軸に選んだかの理由であるが、農業は、。
（１）その遂行において、直接自然環境と接する、その意味で、自然環境の影響が大きい産業である。これは、例えば、穀物や野菜、牧草の栽培において、気温の寒暖、降水量、風速などの影響をもろに受ける点に現れている。

（２）食糧の確保という、人間の生活を支える上で最も基本的と考えられる産業であること。人間社会の基盤・土台部分を形成し、社会風土の方向性を決定する上で影響力が大きい。これは、例えば、日本社会では、農業と直接関係のない分野。（例えば厚生・労働）の官庁・会社組織などにおいても、農業村落の特質である「ムラ社会的」という形容が広く使われる点に現れている。

自然環境のドライ・ウェットさがその社会にもたらす影響を考える上では、自然環境との関わりが大きく、かつ社会全体に対する影響力が大きい産業である農業分野における社会関係のドライ・ウェットさについて、その社会を代表して考察すればよいのではないかと考えられる。

農業は、全世界的観点から見ると、遊牧（牧畜）と農耕に２分されること。

遊牧（牧畜）は、馬や牛、羊などの動物（家畜）と共に、動物の食物（牧草）や水などを求めてあちらこちらを移動し、その生産物（乳、肉、皮など）を得て生活すること。移動可能な動物と一緒に生活する分、その生活は動的、身軽である。自らが移動できなくなるような物資の蓄積を好まず、物資の流動（フロー）を指向すること。

農耕は、穀物（稲、麦など）、野菜、果物など、植物を栽培して、その生産物（実、種など）を得て生活すること。一つの場所に生えたまま移動することのできない植物と一緒に生活する分、その生活は静的、身重であり、一カ所に定着して動かず（不動）、物資、財産を蓄積（ストック）すること（物持ち）を指向すること。
遊牧（牧畜）は、砂漠、ステップ地帯のような、雨の比較的少ない、ドライな自然環境で行われる。
農耕は、モンスーン地帯のように、雨が沢山降る、水の豊かなウェットな自然環境で行われる。（それらは、植物が育つために必要である。）

表 45

1999.5〜7にかけて行ったＷＷＷを用いて行ったアンケート調査結果においては、態度のドライ・ウェットさについては、遊牧＝ドライ、農耕＝ウェットという回答結果が出た（回答者数約200名）こと。

表 46

上記の表から、農耕社会における対人関係がウェットで、遊牧社会における対人関係がドライである、と言えることが分かった。
なぜ、農耕社会の対人関係がウェットとなり、遊牧社会における対

人関係がドライと感じられるか? についての考えられる説明は以下の通りである。

〔集団主義・同調指向（農耕）－個人主義・非同調指向（遊牧）〕
農耕は、稲作における田植えや稲刈り作業のように、周囲の皆と同じ作業を団体・集団一斉に行う必要があり、周囲との集団としての一体性、同調性、協調性が求められる。したがってウェットであること。
遊牧は、各自が個々にバラバラな違う方向に馬や牛を連れて行って放牧を行う農業であり、単独・独自行動が多く、周囲との同調性は求められない。したがってドライであること。
〔定着・縁故指向（農耕）－非定着・非縁故指向（遊牧）〕
農耕は、一ヵ所に定住する定着指向の農業であり、固定した地縁関係が築かれやすく、したがってウェットである。
遊牧は、一ヵ所に定住せずあちこち動き回る非定着指向の農業であり、相互の関係は切れやすく、したがってドライである。

〔関係指向（農耕）－非関係指向（遊牧）〕
農耕は、定住した近所同士が毎日顔を突き合わせる関係にあり、対立しても顔を合わせるはめに陥る。そこで、同じ場所に住んでいる者同士、なるべく互いに仲良くしよう、対立しないようにしようとして、良好な人間関係（和合状態）の構築・維持に心を砕くこと。その点、ウェットであること。
遊牧は、今日互いに近い場所にいても、明日はバラバラに離れて別々の場所に行く。意見が対立し仲が悪くなっても、互いに別々の場所に移動して離れてしまえばそれで互いに顔を合わせることなく済んでしまう。したがって、良好な人間関係（和合状態）の維持にはさほど関心がなく、その点ドライである。

〔規制主義（農耕）－自由主義（遊牧）〕
農耕は、稲作における農業水利のように、携わる人間同士の相互監視・牽制が不可欠である（例えば、稲作社会において、各人が用水を勝手に自分の田んぼにたくさん引かないように互いに見張ることなど。）こと。その意味で規制主義的であり、したがってウェットであること。
遊牧は、広大な草原を、他者に束縛されずに、自由に動き回る。その意味で自由主義的であり、したがってドライであること。
〔相互依存指向（農耕）－自立指向（遊牧）〕

農耕は、稲作における農業水利のように、携わる人間同士が互いに依存し合う。一方が沢山水を取ると、他方の取る水が少なくなる。あるいは、農耕においては、水路、道路の維持や収穫作業のように、独力では作業が不可能で、互いに助け合う形の集団作業が必要となる。その意味で、相互依存指向といえ、対人関係としてはウェットである。
遊牧は、携わる人間同士が、互いに一人で自立して動かなければならない。彼らは、広い草原をただ独りで馬に乗って走り回り、放牧作業を自力でこなすことが求められる。その意味で自立指向といえ、対人関係としてはドライである。

〔密集指向（農耕）ー広域分散指向（遊牧）〕
農耕は、集約的農業であり、少ない面積の土地に集中的に人的・物的資源を投入する。それに携わる人間が住む地域は、人口密度が高い。したがって、密集（過密）指向といえ、対人関係としてはウェットである。
遊牧は、粗放的農業であり、広い面積の土地に、分布する人はわずかである。それに携わる人間が住む地域は、人口密度が低い。したがって、広域分散指向といえ、対人関係としてはドライである。
以上の説明は、以下の表のようにまとめられる。

表 47

したがって、自然環境のドライ・ウェットさと、対人関係のドライ・ウェットさは、正の相関関係にある、と言えそうである。

要するに、乾いた砂漠、草原の民（ユダヤ、アラブといった遊牧の民）はドライである。植物の豊かに生える肥沃なオアシスの農耕の民、緑の民（東アジア、東南アジアの稲作農耕民など）はウェットである。そういうことになる。砂漠ほどは乾いていないが、農耕に全面的に頼れるほど植物が生育しない土地に住んでいて、家畜に頼りながら半分定住、半分移動の生活をしている牧畜・酪農の民。（西欧など。）彼らは、両者の中間ということになるのかも知れない。

以上の図式からは、日本は、典型的な稲作農耕民族であり、ウェットな類型に入る。一方、欧米は、遊牧系に近い牧畜の民であり、比較的ドライな類型に入る。

この点、世界の各民族の民族性がドライか、ウェットかを判断する上で、その民族が農耕民か、遊牧・牧畜民かをまず知ることが有効であると言える。

本当に以上のように言えるかどうか、を確認するには、世界各地（乾燥・湿潤両方）の社会を回って、対人関係が乾燥地帯でドライ、湿潤地帯でウェットであることを、フィールドワークで確認する必要があることは、言うまでもない。

(c)1999.1-2004.8初出

ドライ・ウェットな態度のどちらが、国際標準か？（それらのどちらが、国際的に、より権威があるか？）

(c)2000/07初出

筆者は、態度のドライ/ウェットさと、国際標準と考えられる態度との関連をアンケート調査しました。筆者は、その結果、「国際標準。（国際的な権威がある。）＝ドライ」と（現代日本若年層には）捉えられていることを、明らかにしました。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

ドライ・ウェットな態度のどちらが、よりよい（好ましい、望ましい）と考えられているか?

2000.11-2005.6初出

筆者は、態度のドライ/ウェットさと、社会的望ましさとの関連をアンケート調査した。筆者は、その結果、「よりよい（好ましい、望ましい）＝ドライ」と（現代日本若年層には。）捉えられていることを明らかにした。

現代の日本の若者が、心理テストで、自分の性格について回答する結果が、ドライであることが多いという調査結果が出ている。これは、伝統的に捉えられて来た、「日本的＝ウェット」の図式とは、明らかにずれている。

Edwards,AL（1953）によれば、性格検査や心理テストに用いられるあらゆる項目の内容が「社会的望ましさ」の次元上に位置づけられており、社会的に望ましい内容を含むテスト項目ほど、回答者が「自分に当てはまる」と答えやすい、とされている。
日本の若者が、「ドライ」な方の項目を選択しがちなのは、性格・態度がドライであることが、「（社会的に）よりよい、好ましい、望ましい」とされているため、それに自分の姿を合わせようとしているからであり、彼らの本当の（無意識の）性格はウェットなのかも知れない、という可能性を否定できない。
そこで、「よりよい（好ましい、望ましい）、と日本の若者によって捉えられるのは、よりドライな態度の方である」ということを検証するために、インターネット上でアンケート調査を行った。
アンケート調査は、「あなたの性格が、ドライ・ウェットのどちらか、心理テストで診断します」というWebサイトを構築し、そのサイ

トに診断を受けにやってくる人たちに、関所を設けて、「対になっている態度のうちどちらが、よりよいか」を答えさせて、ちゃんと答えたら、その時点で初めて、本来のWebページに行ける、すなわち心理テストが受けられたり、ドライ・ウェットな態度についての説明が読めたりするような形で行った。
調査項目は、1999.5～7に調査して、有意にドライ（ウェット）と感じられたアンケート項目全体から、（原則としてZ得点5.00以上を得たこと。）40程度の項目を、分類毎にまんべんなく抜き出したものを採用したこと。
回答期間は、2000.10月下旬であった。
［結果］
回答者総数は約200名であった。男女比はほぼ45:55で若干女性の方が多かった。
ほぼ90％を占め、圧倒的に若いといえること。

回答結果（どちらがより良い、好ましい、望ましい態度か？。）
回答時期2000/10/24-25
回答数200
男44.000％
女56.000％
10代31.000％
20代56.500％
30代11.500％
40代1.000％
50代0.000％
60代0.000％
70代0.000％
回答比率

表 48

注）有意水準欄の「-.--」表示は、仮説でドライと仮定した項目。（左側。）それについて、実際のアンケートにおいて、好ましいと

された割合が50％を超えたが、有意水準0.10には達しなかったもの。「x.xx」表示は、仮説でドライと仮定した項目。（左側。）それについて、実際のアンケートにおいて、好ましいとされた割合が50％に達しなかったもの。

結果としては、。
ドライ・ウェットさを示す各態度項目について、各々「よりよいこと。（好ましい、望ましいこと。）」「よりよくないこと。（好ましくない、望ましくないこと。）
・「ドライ」な方を、有意な差（水準1％）で「よりよい」とした項目→87.8％（36/41）
・「ウェット」な方を、有意な差（水準1％）で「よりよい」とした項目→2.4％（1/41）
・有意な差（水準1％）がない項目→9.8％。（4/41）
となり、「ドライ」な方を、有意な差（水準1％）で「よりよい（好ましい、望ましい）」とした項目が、全体の90％を占め、より多かった。逆の項目は、ほとんどなかった。
結果としては、「よりよい（好ましい、望ましい）＝ドライ」という仮説は、十分支持された。
この結果から考えると、心理テストで「ドライ」という判定結果を得た回答者は、「ドライな方が望ましい」から、ドライな方の選択肢を選んでいるだけで、本当はウェットなのかも知れない。その点、いかにして、「社会的望ましさ」のバイアスから自由になった、ドライ・ウェット判定心理テストを開発すれば良いか、さらなる検討が必要なように思われる。
それでは、なぜ、「ドライ」な性格・態度が、日本の若者にとって、よりよい（好ましい、望ましい）と捉えられているのであろうか?
理由としては、。

（１）戦後の、アメリカ占領軍主導による、ドライな「日本国憲法」等の導入と、戦前の隣組や特高警察などを特徴とする、相互監視とプライバシー干渉、言論の自由の剥奪といったウェットな日本社会のあり方を否定する風潮の高まりにより、「ドライ＝望ましい」という見方が広がった。日本の若年層は、戦前の日本について知らず、戦後日本の価値のみにさらされて育ってきたので、「ドライ＝望ましい」と素直に答えたと考えられる。

（２）現代の日本社会においては、従来のウェットさの源泉となる、稲作農耕由来の共同体規制が、社会の工業化や交通通信網の発達により、解体され、社会を構成する人々のドライな「遊牧民」化が進んでいる。この日本社会のドライ化傾向が、ドライな性格・態度を社会的に望ましいものにさせている。
（３）現代の日本社会においては、従来より引き続き、以下の傾向が強い。先進国としての欧米社会を指向すること。（真似よう、追いつこうとすること。）例えば、商品名に欧米風のカタカナ読みやアルファベットを進んで用いる、といった現象などが、この現れであると考えられる。欧米社会は、ドライと考えられているため、欧米社会に根本面で追いつく～抜き去るには、ドライな態度を取るのが望ましい、ということになる。
といった点が考えられる。
［参考文献］
Edwards,A.L. 1953 The relationship between judged desirebility of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93

社会のドライ・ウェットさと近代化

1999.9-2006.6初出

社会のドライ/ウェットさと、近代化との関連を調べましたこと。「近代的＝ドライ」という関係を明らかにするとともに、日本のよ

うなウェットな社会の近代化のあり方について、「擬似ドライ化」という概念をキーにしてまとめましたこと。

1.ウェットな社会の近代化
社会学関連辞書の定義によれば、近代化とは、社会が、合理的、科学的、個人主義的になること、人間の評価が、その所属よりも業績によってなされること、分業（官僚制）が進展すること、といったふうに捉えられている。
筆者が、1999.5～7にかけて行った、アンケート調査結果によれば、近代的、進歩的、合理的、科学的といった用語は、いずれもドライな感覚を与えることが判明した。よって、「近代化＝行動様式のドライ化」と捉えられること。

ドライな社会は、考え方が合理的・科学的であり、未踏の分野に積極的に拡散しようとする、独創的であるため、ウェットな社会の個人に比べて、より先進的な考えを持つことができる。近代化を自ら内発的に進める力を持つこと。
それに比べて、ウェットな社会は、非合理・非科学的であり、未踏の分野に自分から進んで出ようとしない。前例踏襲的で、独創性を軽んじるため、ドライな社会に比べて、より後進的な考え方を持つことになること。（ドライな社会と自分を比べることで、絶えず、後進性の束縛に悩まされること。）近代化を自ら内発的に進める力がないこと。近代化を、ドライな社会が独創したところの前例を、踏襲・採用する、真似ることにより、初めてなしとげること。

ウェットな社会が近代化を進めるには、ドライな社会への同調が不可欠である。
ウェットな社会は、近代化をなしとげたドライな社会の諸制度を見習って、自分たちも急いで近代化をなしとげようとする。
ドライな文化への「同調」、ドライな文化の「権威主義」的受容は、いずれも動機がウェットなところから出ている。見かけはドライだが、中身はウェットのままである。真のドライ化は図れない。
真のドライ化を実現するには、同調指向、権威主義を捨て去る必要がある。

2.ドライな文化の「ウェットな」やり方での受容

近代以降の世界においては、ドライな欧米文化が、世界標準であり、望ましいとされている。現在行動様式の世界標準（globalstandard）は、欧米的＝ドライであり、世界的により権威ある行動様式は、ドライな行動様式であるといえる。

ウェットな日本社会は、欧米文化に同調して、自由主義、個人主義などドライな行動様式を真似ようとしている。

ドライな欧米文化が、世界標準であることが、権威として働く。

ウェットな社会の成員には、自分たちもその（世界標準の）一員になろうとすること。（一体化しようとすること。）、そしてそのことで世界の主流派の中に入ろう（欧米並みになろうとすること。）とする気持ちを起こさせること。

現代日本社会においては、ドライな文化の、「ウェットな」やり方での受容が見られる。

ウェットな社会の成員は、互いに「同調して（みんな一緒に）」ドライな社会の行動様式を真似ること。例えば、（ウェットな社会に顕著なこと。）「集団主義的」なやり方で、皆一斉に、ドライな社会に顕著であるところの「個人主義」的に振る舞おうとすること。（プライバシーの尊重を訴えるなど。）

（周りの皆がそうしているように。）欧米的（例えば個人主義的）に振る舞わないと、恥ずかしい（周りの目を気にすること。）こと。

しかるに、本当にドライな文化では、人々は、こうした同調を好まない。

日本社会は、最初は、自分のウェットな行動様式を変えずに、ドライな社会のもたらす外面的な技術だけを取り入れようとした（いわゆる和魂洋才）こと。しかし、表面的な技術導入だけでは、いつまでたっても完全に追いつくことができない。社会がウェットであること。（合理性よりも、精神主義を重視するなど。）それが、真正の近代化を妨げた。

日本社会は、欧米社会のあり方。（globalstandard）に、より完全に同一化するために、行動様式もドライな社会に同調させて合わせようとしはじめている。こうした現象が顕著になったのは、戦後の欧米

（特にアメリカ）を社会的行動の手本とする教育を受けた世代の子供が、社会を担うようになったから、と考えられる。
しかるに、「同調」行為（conformism）は、ドライな欧米社会の個人の嫌うところであり、互いが独立した、自律的な振る舞いをすることを望む。その点、同調指向が社会の基本となっている日本社会とは、たとえ見かけが互いに同じになってきていても、なお、根本的なところで仕組みが食い違っている。欧米社会に集団主義的・権威主義的に同調・追随して、横並びになろうとすること。（例えば、個人主義、自由主義を皆で一斉に真似ようとすること。）その点、現代日本社会と、人々が反権威主義、非同調指向、横並びよりはバラバラに自由に違う方向に動くことを指向する伝統的な欧米社会とは、見かけがドライである点で互いに似ているにもかかわらず、明らかに根本的なところで、今なお、かみ合わないところがある。
本質的にウェットな社会である日本は、個人主義、自由主義などを、欧米社会が、世界的にみて勢いがある限り、globalstandardの地位を保っている限りにおいて、真似よう、同一化しようとするのであり、欧米社会の勢いが衰えたときは、また別の、個人主義、自由主義でない、ウェットな社会制度に回帰しよう（真似する対象を変えようこと。）とすると考えられること。その点、globalstandardであるなしにかかわりなく、個人主義、自由主義的であり続けようとする欧米社会とは、社会のあり方がが本質的に異なる。

3.ウェットな社会の擬似ドライ化（ドライな社会への見かけ上の同一化）

上記の、ウェットな社会のドライ化という現象は、「擬似」ドライと「真正」ドライとの区別、という用語で説明することができる。
（１）「擬似ドライ」な人間は、（本当はウェットなのだが。）権威主義などによって、ドライな行動様式に追従・同調（真似）し、見かけはドライに見える。
（２）「真正ドライ」な人間は、自らの意思でドライに動いている。ドライさが、自然に身についている。
擬似ドライが真正ドライになるには、権威主義、同調指向など、行動の根底にあるウェットさを、捨て去る必要がある。
「擬似ドライ」な行動様式においては、ドライに振る舞う動機がウェットなところから来ていること。（権威があるから、自分もそ

れと一体化しよう、真似ようとすること。）
「擬似ドライ」な人々は、個人主義的な動作を、集団主義的に行うこと。（みんなで同調すること。）あるいは、反権威的な社会運動に、権威主義的に（見習うべき手本と見なして）追随すること。あるいは、個人主義や自由主義の欧米生まれのドライな学説を権威あるものとして崇拝し、一体感を持とうとすること。

要は、ウェットな自分とは正反対の行動をしようとしているのである。その過程で、無意識のうちに精神的葛藤が起きている。自分のやっていることの矛盾（非同調的な行動様式に、同調する、自由主義を、欧米に追いつくために、官民一体となった統制のうちに取り入れる....）に明示的に気づくと、一種の精神分裂に陥る危険がある。

「擬似ドライ」な人々は、ドライな行動を、「ウェットさ」を保ったまま真似ようとする。「ウェット」な本質のままに行動するからこそ、「真似る」ことになること。例えば、個人主義を、「集団主義的」（皆一斉）に、取り入れようとすること。自分たちとは正反対の行動様式を、真似して同一化しようとしている。そこには、深刻な自己矛盾が存在する。

「擬似ドライ化（ウェットな社会による、ドライな社会の真似）」によって実現されるのは、あくまで見かけだけの「擬似個人主義」「擬似自由主義」であり、「真正個人主義」「真正自由主義」...とは区別されなければならない。自分たち本来の行動様式とは正反対の行動様式への、無理やりの（仕方なしの）同調によりもたらされているのであって、同調に疲れると、もとの集団主義、規制主義に戻ってしまう可能性は大きい。自分たちの性向とは反対の行動様式を真似るのは、疲れる。

ウェットな社会である日本においては、生活の欧米化は、確かに進んだが、社会が完全に欧米と同質化したとはいいがたい。（個人主義、自由主義、非同調、独創性の重視など。それらは進んでいない。）むしろ、ドライな欧米社会への同調の過程で、自分たちと欧米社会との差異が絶えず意識され、そのギャップを埋めるべく、より完全に、手本となる欧米の真似（よりすがるべき権威となる欧米の真似）をしようと躍起になっているさまがうかがえる。そして、

ギャップは永遠に埋まらない。なぜなら、ドライな欧米社会のあり方は、これまでの日本社会において（欧米社会に対する同一化への）原動力となってきた「権威への追随」「同調」とは反対の極致にあるからである。

ウェットな社会は、ドライな社会が優勢である限りにおいて、自分もそれを真似てドライに感じられる行動を取るが、根底においてはウェットさを「温存」しており、ドライな社会が優勢でなくなる、ないし、不仲などの理由でドライな社会との交流が途絶えると、本来のウェットな（非合理、集団主義..）本性が頭をもたげる。

ただし、もとはウェットな社会であっても、いったんドライな自由さなどの味を知ってしまうと、かって身近に存在した、共同体的規制がもたらす人間関係の煩わしさの再発に対する恐れから、ドライなままでいようとする、ということも考えられる。

4.もう一つの「擬似ドライ化」類型

擬似ドライ化にも、上記で述べた、積極的に、ドライな社会に同調する形でなされるもの以外に、各人が、ウェットな相互牽制をもたらす共同体的規制から、何らかの外的要因により切り離されることで、受動的・消極的になされるものとがあるといえる。

消極的な擬似ドライ化。それは、共同体（主に農業）を構成していた各人が、以下の状態になること。
1）交通・通信の発達により、バラバラに離れて居住すること。
2）分業化の進展により、別々の異なる業務に従事したり、興味を抱いたりすること。
そのことで、共通の話題がなくなり、各人が自分の世界に閉じこもること。その形で進む。

こうした消極的ドライ化は、例えば、家族関係において、各人が、別々の時間に帰宅したり、食事を取ったりすることにより、場を互いに共有することなく、それぞれの個室に閉じこもって自分の世界を追求する形で現れる。

ウェットな社会の人々は、もともと共同体内で自己完結する閉鎖指向的な世界に生きてきたために、共同体の外に対して積極的に自ら進んでいく気概に乏しい。そのため、そのままでは、縁故のない見知らぬ他人に対して、信頼をおいて、コミュニケーションを取るということがない。そこで、見知らぬ他人に取り囲まれた状態（いわゆる混住化状態）では、各人が自分の殻を作り、外部に対して閉ざされた、消極的な態度を取ることになる。共同体が、閉鎖的な性質を保ったまま、「個人化」した、とも言える。

共同体規制から外れて、大都会の団地など、見知らぬ同士が隣り合わせに居住するようになった、ウェットな社会の人々は、互いに、相手の持つ閉ざされた（自己完結したこと。）世界を大事にして、相手のところには、自分から積極的には入って行こうとしない（互いに相手のことは、そっとしておこう、とする。）こと。これは、互いに、相手に対する配慮（気配り）や、相手が傷つかないような優しさを保ったままの自閉化であること。

この自閉的態度は、真正のドライな態度とは、個人の世界を大切にする点（個人主義）では同じである。しかし、真正ドライな人々の取る、互いに相手の心の状態をあまり配慮しない態度（非人間指向）や、自分の意見を、相手に対して率直に、白黒をはっきりさせる形で、相手が傷つくことにお構いなしで述べる態度（反あいまい指向）態度とは、明らかに異質である。かといって、従来の共同体規制下において見られたような、互いのプライバシーの探り合い（干渉）が行われない点、従来のウェットな対人関係とも、異質である。

こうした点で、現代のウェットな社会においては、自閉的個人主義etc.といった、「消極的ないし自閉的な擬似ドライ化」.が、ドライな社会に同調する形での「積極的・同調的な擬似ドライ化」と並行して、進行しつつある、と言える。

以上まとめると、擬似ドライ化は、1。）積極型（同調型）と、2）消極型（自閉型）とに、さらに細かく分類される、といえること。

5.ウェットな社会がドライな社会より優位に立つための条件。

ウェットな社会は、いつも、ドライな社会よりも後進的であるからといって、いつもドライな社会よりも劣勢に立たされている訳ではない。
ドライな社会における技術の発展が止まること。（技術的に成熟期を迎えること。）すると、ウェットな社会がドライな社会を上回るようになる。（例えば、自動車産業。）
技術が急速に進歩している間はドライな社会が優勢だが、技術が成熟し、進歩が漸進的となる（小改良の積み重ねになる）と、ウェットな社会が優勢となる。ウェットな社会は、大胆な技術革新には向いていないが、既にある技術的前例をもとにした、細々とした手直し、技術同士の組み合わせ変更は得意だからである。
ドライな社会が技術革新を続けている間は、ウェットな社会は、そのcatchupに懸命に努めなければならない（同調型の擬似ドライ化が必要となる。）こと。しかし、ドライな社会の技術水準に、ウェットな社会がいったん追いつくと、今度は、ウェットな社会が、技術の小改良、実用化に（ドライな社会よりも。）優れているため、ドライな社会よりも優位に立つことになる。ただし、ドライな社会が再び新たな大規模な技術革新に成功すると、ウェットな社会の成員は、再び、ドライな社会の成員に比べて相対的に後進的な状態に逆戻りし、「後追い」を行わなければならないこと。これこそが、ウェットな社会を悩ます「後進性の束縛」である。
以上をまとめると、近代化（技術革新）の進行においては、。
1）革新期ドライな社会による、独創的で急速な技術革新が行われる時期→ドライな社会が有利である。（ウェットな社会は、追いつくのに精一杯で、「後進性の束縛」に悩まされる。）
2）成熟期技術革新の速度が鈍り、ウェットな社会がドライな社会に追いついて、技術の小改良、実用化を行う時期→ウェットな社会が有利。
の2つのタイプの期間が、循環式に、革新（ドライ有利）→成熟（ウェット有利）→革新（ドライ有利）→成熟（ウェット有利）...といった感じで、繰り返すと考えられること。
なお、ウェットな社会は、合理性などよりも、感情など人間のウェットな部分に訴える文化を生成する能力（例えばアニメ作品などを生成する能力）については、もともとドライな社会を上回っていることが考えられる。

1999.9-2006.6初出

ドライな知性、ウェットな知性

(c)1999.11初出

社会のドライ/ウェットさと、知性のあり方（望まれる研究者像など）との関連を考えてみましたこと。その結果、「ドライ＝独創型」、「ウェット＝博識型」という概念でまとめられることが分かりました。

1.社会のドライ・ウェットさと、知性のあり方
ドライな社会と、ウェットな社会とでは、社会に典型的な知性のあり方、例えば、望ましいとされる研究者（学者）のあり方が、2つの異なる社会のタイプに応じて、変わってくると見られる。
筆者が、1999.5～7にかけて行った、ドライ・ウェットな性格・態度がどのようなものであるかについての調査結果からは、。
ドライな性格の持ち主は、「独創指向。（未知の領域に進もうとすること。）」がより強く、一方、ウェットな性格の持ち主は、「前例指向。（今までいた領域にとどまろうとすること。）」がより強い、ことが判明した。

上記の結果を、知性のあり方と関連づけて考えると、ドライな知性は、新たな分野への拡散を指向し、ウェットな知性は、前例となる知識の蓄積を指向する、と言えそうなことが分かる。
ドライな知性は、発明・発見したアイデアの斬新さで勝負するのに対して、ウェットな知性は、知識量で勝負する。
以上についてまとめると、ドライな知性は、「独創的。（innovative）」であり、ウェットな知性は、「博識的。

（learned）」である、ということになること。

2.独創型の知性のあり方

独創型の研究者は、新規のアイデアを重んじる。独創型の知性の持ち主は、今までにない、新たな未知の分野を切り開くことに心を奪われる。

独創的な学者は、今まで誰も挑んだことのない（ないし挑んだが失敗した。）方面へ、失敗したりダメージを受けたりする危険を省みず、積極的に進んでいこうとすること。

そして、自分が世界で初めて生み出した成果を、自分自身のアイデンティティ、ないし、後世まで残る生きた証とすること。

独創型の研究者は、既存学説からの自己切り離しを、指向する。

「自分は、既存の学説にない（既存の学説から、これだけかけ離れたこと。）、新たな考えを見いだすことができた」ことを喜ぶ。

独創型は、既に存在する学説を当てにできない分、失敗や危険に遭遇する可能性が、次に述べる博識型に比べて、極めて多い。その点、より男性向きといえること。独創型が、知性の多勢を占める社会においては、失敗や危険に対して積極的に立ち向かっていく、男性の力が（女性に比べて）強い、とも考えられる。

3.博識型の知性のあり方

博識型の研究者は、「何でも知っている」ことを重んじる。既存の前例や学説知識についてのどんな質問にも答えられるように常に準備しており、暗記力に優れている。

彼らは既存の学説を消化・整理し、後進の者に分かりやすく紹介する。既存の互いに関連する学説同士を組み合わせて、小改良を加えること。学説を自分の頭の中に、なるべく多く詳しく蓄積し、生きたデータベース（生き字引）となること。

博識型の研究者は、自己と、既存学説との一体・融合化を、指向する。

既存の学説を要領よく整理したりまとめたりする能力は、ウェット＝博識型の知性の方が上である。

博識型の学者は、「よい」「優れた」と、権威ある学者たちに評価された学説のみを選別して蓄積する。

言い換えれば、自分からは、前例のない、新たな未知の学説の当否を評価しようとしない（評価する能力がない。）こと。
そこで、以下のような既存の「権威ある」研究者たち、
1）独創型の場合は、今までに著名な業績をあげた研究者。
2）博識型の場合は、新学説当否の判断材料となる前例の蓄積量のより多い、年長の研究者。
の判断に従うこと。
博識型の知性の持ち主は、自分からは新しい学説を出さず、他人（独創型の研究者）の成果をひたすら吸収することのみに没頭すること。
すなわち、独創型学者が新たに提案した学説の追試、小改良（他の学説と結びつけたり、新たに細かい学説を付け加えたりすること。）に明け暮れること。その点、受信一方であり、受動的であること。
博識型の研究者は、独創型の研究者の最新の成果を、自らの中に取り込もう・吸収しようとして、その後をひたすらついて走ろうとする「知的追っ掛け屋」、ないし、新たに生まれた成果について、第三者的にコメントするのみの「学説評論屋」、となりやすい宿命を持つ。
博識型は、既にある学説に頼ることができる分、独創型に比べて失敗や危険が少ない。その点、より女性向きといえること。逆にいえば、博識型が、知性の多勢を占める社会では、（男性に比べて）失敗や危険をより忌み嫌う、女性の力がより強い、とも考えられる。
博識型の知性は、たとえその実際の担い手が男性であっても、（研究者自身が。）女性（母親）の強い影響力下で育まれたと考えるのが自然である。

4.研究者の評価のあり方について
従来の望ましい研究者像は、独創的な成果を出す研究者のみを取り上げてきた。これは、明らかにドライな社会向きの望ましさであり、ウェットな社会向けの研究者像には当てはまらない。
例えば、ノーベル賞（経済学、物理学..）は、今までにない新規の優れた業績をあげた学者に贈られるものであり、ドライな知性＝独創型向けの賞である。日本のようなウェットな社会からの受賞者は少ない。
今後は、ウェットな社会向けの知性＝博識型に対する賞、すなわ

ち、いかに要領よく、既存の学説を整理し、まとめあげたかを、世界的に称賛する仕組みがあった方がよいのではないか？。

(c)1999.11初出

社会のドライ・ウェットさとイデオロギー受容・信仰

2004.6初出

社会のドライ/ウェットさと、イデオロギー（思想、宗教）の受容・信仰のあり方との関連を考えてみましたこと。その結果、「ウェット＝（思想・宗教提唱者への）人格的帰依」、「ドライ＝（思想・宗教内容自体への）理論的帰依」とまとめられることが分かりました。

日本や中国、韓国のような東アジアのウェットな社会におけるイデオロギー受容、信仰には、まず提唱者、教授者の人格への帰依が第一で、理論は二の次、という点が特徴である。

それに対して、西欧、アメリカのようなドライな社会におけるイデオロギー受容、信仰は、提唱者、教授者の人格によらない、人格から切り離された、理論そのものに対する帰依が特徴である。

ウェットな社会においては、何よりも人と人との心情的な結びつき

や人柄が重要視される。宗教や学説の信仰にも、まず「人格ありき」である。

すなわち、ウェットな社会の人々は、「○○先生はできている人だ、すばらしい人だ。人格者だこと。惚れたこと。」「自分も○○先生の後に、一緒に付いて行きたい、従って行きたい。」「○○先生の後ろに付いて行けば間違いないこと。」といったように、イデオロギー、宗教の提唱者、教授者に対して、その人格の素晴らしさ、魅力にまず重きを置く形で、心理的に感化され、一体・融合化しようとすること。

要するに、ウェットな社会の人々は、イデオロギー、宗教の提唱者、教授者に対して、「人格的帰依」を引き起こすのである。

人格の良さ、人柄を最優先する、ウェットな社会の人々は、「○○さんは素晴らしい人だ。」→「○○さんは△△という思想を持っている。」→「人格的に優れた○○さんの言うことは間違いない。それにぜひ自分も合わせよう。」といった順序で思想、イデオロギーを捉えること。要するに、思想の担い手が人格的に魅力的かどうかを優先する余り、その思想の内容が果たして妥当かどうかは二の次にしてしまうのである。

また、自分の信ずる思想への反対者への対応でも、「（自分が帰依した。）○○さんの意見、思想に反する人は、自分にとっての敵だ。」と、思想対思想の対決ではなく、人対人の対決に持ち込みがちである。

要するに、ウェットな社会の人々にとっては、思想提唱者の人格が一番の関心事で、イデオロギーの内容は二の次なのである。

このことから、ウェットな社会では、例えば、オウム真理教事件のように、最先端の科学を履修した、そういう点で非宗教的なはずの学生が、カルト宗教の提唱者（教祖）の見かけの人格的深遠さについ引き込まれて、その宗教の熱心な信仰者となり、教祖と共に、大暴走を引き起こす、といった事態が、いとも容易に発生する。

ウェットな社会の人々は、例え最先端の科学を習得しても、科学が持つ、「科学や思想の理論内容は、理論提唱者の人格とはあくまで

別物であり、独立した、それ自体で評価されるべきもの」という根本的な考え方を理解することができない。ウェットな社会の人々は、理論・思想内容とその提唱者の人格的魅力とを切り離して考えることが苦手である。

ウェットな社会の人々は、思想への帰依について、まず思想提唱者の人格的魅力を最優先するので、いったんその思想提唱者の人格が素晴らしいと思い込むと、彼に強い「愛情、一体感」を感じて、他の帰依者との間で、「自分の方が、他人よりも、○○先生、教祖様に対してより忠実で一体ですよ」という、（提唱者に対する）心理的忠誠、同調の競争を始めてしまうのであること。

彼ら、ウェットな人々にとって、思想それ自体の習得、理解は、思想提唱者に対するより強固な心理的帰依を促進し、他の帰依者との間での忠誠競争に勝ち抜き、思想提唱者に「一番のお近づきになること。（愛を得ること。）」ための道具、オマケに過ぎないこと。

しかし、こうした考え方が、結果的に、思想提唱者と一体になって、盲信に基づく大暴走を生み出すのである。

要するに、こうしたウェットな人々の、思想・宗教提唱者への人格的帰依を第一とする考え方では、思想内容の危険性をチェックできないし、気づいても、思想提唱者との一体感が強すぎて、そのまま突っ走ってしまう事態を引き起こすのである。

一方、ドライな欧米社会では、思想や宗教の内容と人格とは切り離されており、思想や宗教の信仰に際して、思想家、宗教家の人格的素晴らしさは二の次であり、あくまで、思想・宗教の内容そのものが問題とされると考えられる。

要するに、ドライな社会においては、思想やイデオロギーそのものを信仰するのであり、思想家の人格のあり方はさほど問題とならない。専ら、その思想、宗教では何が主張されているか、その内容は正しいかどうか、信仰するに足るかどうかが議論されるのである。

その点、ドライな社会における、思想やイデオロギーへの帰依のあり方は、「非人格的、理論的な帰依。（理知的な帰依。）」と呼べること。

(c)2004.6初出

「集団プライバシー」の概念について

(c)2001.9-2006.2初出

ドライ・ウェットな集団とその中で成立するプライバシーのあり方の違いについて考察しましたこと。ウェットな集団では、個人単位のプライバシーは成立しないが、集団単位のプライバシーなら成立する、といった内容について述べています。

公園のような、外部のからの不特定他者によるアクセス（内部に入ること）が可能な空間は、公共性を持っており、外部に対して開かれている。そこにいる人々は互いに相手が今何やっているか筒抜けであり、私的な空間ないしプライバシーが欠如している状態にある。

これに対して、個人の内部心理は、基本的に外部に対して閉じており、個人の心の内部で何を考えているか、外に向かってしゃべったりしぐさを取ったりしない限り分からない。これは、個人レベルでのプライバシーである。

従来、このプライバシーの概念は、専ら個人レベル（個人単位）でのみ捉えられてきたこと。しかし、少し考え方を変えてみると、個人より一つ大きな集団や組織の単位でもプライバシーの概念が成り

立つ可能性がある。

例えば、日本の行政組織のように、外部に対する情報公開を十分に行わず、内部の秘密を守ろうとする集団は、集団レベルで外部からの進入を拒む一種のプライバシーが成立していると言える。

集団の外部に知られない秘密を、集団内の仲間うちのみで共有しており、その秘密にはある決まった特定少数のみがアクセスできる場合に、その集団はプライバシーを持っていると言える。

そういう点で、プライバシーの概念は従来考えられてきた個人レベルだけでなく、実は集団レベルでも成立する。集団レベル（集団単位）で成り立つプライバシーは、「集団プライバシー。（group privacy）」とでも呼ぶことができる。

集団プライバシーの概念は、集団がウェットな場合とドライな場合とで若干異なる様相を示す。

集団がウェットな場合、液体の表面張力みたいな、外部からのアクセスを跳ね返す力が働いている。集団内部の個々人は互いにベタベタくっつき合い、つながり合っていて、個人レベルではプライバシーがない。しかし、集団外部に対しては閉じていて、内部で何をやっているか明かそうとしないため秘密で分からない状態である。そういう意味で、集団自体が外部からのアクセスを拒む一種のプライバシーを持っている。

ウェットな集団では、個人のプライバシーを犠牲にした上で、集団単位でのプライバシーを確保していると言える。

ウェットな集団では、日本の農村における対人関係のように、集団内で各人が長期間にわたって付き合いを続けるため、周囲の相手のいろいろな側面が多面的〜全面的に分かってしまい、互いに隠そうとすること（私的領域を持とうとすること。）をしても、その内容がすぐに露見してしまうこと。（露出してしまうこと）。互いに何を考えているか（何をしているか）すぐ周囲に伝わってしまい、隠しようがない。それは、周囲の各人が、当人の行動様式を、「彼は

こういうときはこういうことを考えている」みたいにデータベース化して学習しているために可能となる。

ウェットな集団内部では、全ての情報を隠し立てせずに共有することになり、プライバシーは個人単位では存在しないのである。

このように、個人のレベルではプライバシーが成立しない（欠如していること。）のに、（1ランク上の）集団レベルになるとなぜかプライバシーが成立すること。（成立可能であること。）それが、ウェットな集団〜社会が持つ重大なパラドックスである。

人間の作る組織では、組織内で同一階層に属する異なる集団同士の間で、セクショナリズムにより、情報の流通が行われないことがしばしば起こる。例えば、同じ部に所属する第1課と第2課との間がライバル関係にある場合など異なる課同士の間の交流が妨げられて、互いに他の課の知らない当該課員のみの秘密事項を持つことになる。

こうしたセクショナリズムは、自分の属する集団の内部の他者との間に一体感を強く持つ場合、すなわち集団凝集性が高い場合に、集団外部と自分たちとを明確に区別・差別化しようとするために起こる心理的現象である。特にウェットな集団内においては、成員各自の心理的近接と相互の一体融合化の度合いが大きく、その分、より集団内の一体感を高めるために、集団内外の区別をしよう、集団外の人間をよそ者扱いしようとする度合いが高くなる。そういう点で、ウェットな組織ではセクショナリズムの度合いが高いと言える。また、集団サイズが大きくなると、内部でより親しい者同士の間でサブ集団が生じ、サブ集団間でセクショナリズムが発生することになる。この場合、セクショナリズムが存在する各集団内部において、他集団のアクセスを受け入れようとしない、「集団プライバシー」が強固に成立している、と言える。

この場合、一つ一つの集団に集団プライバシーが成立した状態で、各集団を一つにまとめて有機的な社会を形成するには、各集団の代表（例えば中央省庁なら各課の課長）同士が一つ上のレベル（例えば部）において、互いの集団（課）の内部事情について自己開示を行うことで、代表（課長）が異なる下位集団（課）同士の交流を行

う役割を担うことが必要となる。異なる下位集団（課）の構成員（課員）同士は互いにライバル心むき出しでよそよそしく仲が悪いが、複数課をまとめる代表（部長）と各課の構成員が互いに打ち解け合い頻繁に交流し合うことで、複数課間の統合が図られ、各課の集団プライバシーが代表経由で流出する、ということが起こる。要するに、一つ上の階層である部レベルから見た場合には、課の集団プライバシーは成立しないが、同一階層（課）の集団同士の関係においては、集団プライバシーが成立するのである。

ウェットな組織では、組織を1階層上がるごとに、下位集団のプライバシーが消滅すると共に、一つ上位の集団のプライバシーが発生する。例えば、部レベルでは、部単位での集団プライバシーが成立する一方、課レベルの集団プライバシーは存在しなくなる。こうして、どんどん階層を上がって行ったとき、社会が逆ツリー状のヒエラルヒー構造をしていること（いわゆる「タテ社会」であること）。そのため、頂点の集団以外は全て集団プライバシーが消滅することになる。すなわち、社会の個々の構成員が何を考えているか上層部に筒抜けになるため、社会全体の思想統制が一発で可能となる。このメカニズムが戦前の日本における密告社会を成立させる温床となったと言える。

ウェットな社会での個々の集団（省庁における課）における集団プライバシーの確立は、いったん階層を（省庁なら課→部→局と）昇る段階で、各段階より一つ下レベルの集団プライバシーを無効にし、一番上の階層まで昇り切った状態で再度一番下まで（局→部→課）降りてくる再帰的な過程において、社会全体のプライバシーの消滅・欠如をもたらすと言えること。

一方、集団がドライな場合にも、集団プライバシーは成立する。ドライとされる欧米社会においても、例えば、諜報機関のように外部からのアクセスを完全シャットアウトして、内部情報の機密性を確保する集団はたくさん存在する。

しかし、ウェットな集団と異なり、ドライな集団では、集団レベルでのプライバシーの個人レベルへの分解（還元・細分化）が可能である。ドライな集団内では、例えば仕事を周囲の他者から距離を置いたパーティション内で行うことを容認するといったように、個人

レベルのプライバシーが重んじられる。ドライな集団では、個人の心の中に勝手に立ち入ることが許されず、そういう意味で個人の内部心理が非公共性を持つと言える。

一方、ウェットな集団では、個人の心の中は、集団内の人間なら誰でも立ち入ること、覗くことができる。ウェットな集団内では、構成員の心理的な内面の全面的な自己開示がデフォルトとなっており、そういう意味で、個人の内部心理が（その集団内に限って）公共性を持つと言えること。

プライバシーを持つ集団は、外部からのアクセスを拒む点、公共性に欠けること。（非公共的であること。）プライバシーを持つ集団は、集団自体「私的」領域を確保しており、集団の持つ私的利益を追求する。

日本の行政組織の場合に問題となるのは、本来公的でだれに対しても開かれているべきである（プライバシー概念の成り立ちにくいはずの）組織が、集団・組織単位での私的なプライバシーを追求している点である。「省益あって国益なし」みたい感じで、省庁やさらにその下の局・部・課レベルでの「私的」利益を追求する態度は、日本の行政組織の抱える「集団プライバシー」の問題点を浮き彫りにしている。

ドライ・ウェットさと都市・農村

都市・農村の人間関係のあり方の違いとドライ・ウェットさとの関係について考察しましたこと。以前は「都市＝ドライ、農村＝ウェット」という関係が成立していましたが、交通・通信の発達により農村もドライ化しつつある、と捉えます。

都市と農村とで社会のあり方を比較すると、「ドライ＝都市、ウェット＝農村」という図式が成立する。その理由を以下に列挙すること。

1）農村は、住民の職業が、自給自足的な農業という点で共通しており、互いに同質である。少ない人数で様々な異なる作業をこなさなければならず、分業（機能分化）が不活発であり、その点、各人の職業が互いに異質な都市に比べて、各人の心理的位置関係が互いに近接しており、ウェットな感じを与えること。（同質指向。）

2）農村は、住民が何世代にもわたって同じ一カ所に定住し続けるため、定着性が極めて高い（定着指向）こと。その点、住民がどんどん入れ替わり定着性が低い都市に比べて、ウェットな感じを与える。

3）農村は、同一の組み合わせの人付き合いが、何世代にもわたって続き、住民間に地縁・血縁の縁故関係が累積しやすい（縁故指向）こと。その点、人付き合いが一時的ですぐに切れやすい都市の人間関係に比べて、ウェットな感じを与える。

4）農村の居住形態は、物理的には都市よりも世帯同士が互いに分散している点、一見ドライに見える。都市の方が、物理的には一見過密であり（密集指向）、ウェットに見えること。しかし実際には、都市では、オフィスや住居毎に、丈夫で分厚い壁や持ち主当人にしか開かない鍵が存在し、個人同士を大きく隔てる効果を持っており、心理的には農村よりも各人は互いに隔離され分散していること。（広域分散指向。）従って、実際には、都市の方がよりドライである、と言える。

5）農村は、人間同士が長年付き合っているので、相手の物の考え方

が、たとえ隠しているつもりでもすぐに露見してしまう。周囲の相手が、いろいろな場面で具体的にどう反応するか（どう出るか）についてたくさん場数を踏んでいるため、周囲の相手のいろいろな面が多面的〜全面的に分かって（見えて）しまうこと。互いに何をしているか隠しようがなく、匿名性が成立しない（あくまで実名の世界であること。）こと。そういう点でプライバシーが欠如しており、ウェットである。一方都市では、住民は互いのプライバシーを守るため、互いに深入りしない皮相的・匿名的な人間関係を形成する。その点、ドライであると言えること。

6）都市の方が、外部からやってくる様々な人々を受け入れる開放性に富んでおり、ドライである。農村では「部落根性」という言葉があるように、よそ者を排除し、自分たちの間だけで強固な結束を誇りがちであり、その点閉鎖的であり、ウェットである。

しかし、最近では農村でも、交通手段の発達により、例えば自家用車が高い普及率を誇るようになり、自動車に乗って舗装整備された道路を使ってあちこち出かけるようになっている。その点、住民の定着性が薄れ、遊牧民化しつつある。また通信手段（インターネットなど）の普及により、人間関係の村落内限定の度合いが薄れ、他地域の様々な人々との間で交流が進みつつある。

現代の農村では、こうした交通・通信の発達により、各自が多様な価値観に個別に出会うようになって、心理的に違いに別々の世界に属することで、個人間の心理的距離が増大し、人間関係のドライ化が進んでいると言える。

「ドライな機能主義」の提案

－自由で自立した個人の視点から－
1998-2006初出

ドライな機能主義は、社会学において、個人が全体に従属すると見る従来の全体主義的でウェットな機能主義の代わりに、「機能」を、個人が環境の中で生存していくのに必要な働き、として捉える個人中心の視点を提供します。

［要旨］
従来の社会学における、個体、個人を包含する全体系、システムから出発する「ウェットな機能主義」に代わって、互いに分離して自由に動く、個体、個人、各粒子から出発する「ドライな機能主義」を、新たに提案すること。

ドライな機能主義においては、機能は、各個体、個人、粒子の生存、持続を助ける働きとして捉えられる。ドライな機能主義においては、各個体の分離、独立、自立、自由が前提となり、各個体、個人、粒子を包み込む既存の上位体系（社会、組織、企業・・・）が、個人、個体の生存にそぐわなければ、いったん破壊、初期化して組み直す、再構成しようとする。その点、社会、組織、企業等にとっては、革命、変革指向の考え方である。

機能主義は、互いに分離して自由に動く、個体、個人、各粒子から出発するドライな見方と、個体、個人を包含する全体系、システムから出発するウェットな見方がある。

以下では、前者を、ドライな機能主義、後者をウェットな機能主義と呼ぶことにする。

ドライな機能主義においては、機能は、各個体、個人、粒子の生存、持続を助ける働きとして捉えられる。ドライな機能主義においては、各個体の分離、独立、自立、自由が前提となる。各個体、個

人、粒子を包み込む既存の上位体系（社会、組織、企業・・・）は、あくまで、各個体、個人、粒子が存続するための道具、ツールに過ぎず、個人、個体の生存にそぐわなければ、いったん破壊、初期化して組み直す、再構成しようとする。その点、社会、組織、企業等にとっては、革命、変革指向の考え方である。

一方、ウェットな機能主義においては、機能は、個体を包む全体系の維持から出発する。既存体系の保守、保存がその目的となる。
ウェットな機能主義は、全体から出発し、個体を全体と一体として、個体の全体への融合、埋没、歯車化、個体と全体との相互一体・調和を前提とする。この場合、体系自身が、個人とは別次元の独立した意思や動きを持つ。いわば、個人よりも全体を優先する、個人をあくまで全体を維持するために貢献する部分的存在として取り扱う、全体主義的な考え方である。また、既存体系を破壊しないように、絶えず調整・変革しようとする点、現状維持的な側面を持つこと。システムの崩壊（企業の倒産）、自殺、初期化は考慮されない。
従来の社会学的機能主義や生態学的機能主義の理論のような、「ウェットな機能主義」では、機能を、個々の人間が属する社会や生態系システム全体の維持・存続のために必要なものとして捉えること。その意味では、社会や生態系システムに個人が従属すると捉えていると言える。社会学的ないし生態学的機能主義の課題は、社会システムや生態系における相互に連関する諸要素ないし諸変数の均衡を分析することである（均衡分析）こと。社会学的・生態学的機能主義の最も基本的な関心は、社会システムや生態系の自己維持、または存続にある。このため、システムの維持・存続に必要な条件として「機能要件」（システムの欲求、目標）という概念を設定すること。そして、機能要件がシステムの維持・存続にとって必要かつ十分であることを明示するのが、「要件分析」である。
ドライな機能主義では、機能は、（社会ではなく）あくまで個々の人間自身が自らの生命を維持・存続させるために必要なものとして捉える。社会は、環境適応水準を上げようとする個人同士が、協力しあうことによって初めて生成されたり、維持されるものである。もしも、各人にとって十分な環境適応水準が、社会を作ったことで得られなければ、個人は、その（生成したこと。）社会を破棄・消去したり、脱退したりする自由を持つこと。その点、個人は社会に従属するものではない。生き延びる主体は、あくまで個人であって社会ではないと捉える。

以下のドライな機能主義では、そうした従来の全体主義的な、社会学的、生態学的機能主義とは異なり、「機能」を、個体が環境の中で生存していくのに必要な働き、として捉える視点を、新たに提供する。すなわち、「機能」は、個体が環境との相互作用の中で、淘汰されないように自己保存をはかるために、必要とされる働きである、と見る。

ドライな機能主義は、機能主義を、以下の視点から捉えなおそうとするものである。（１）社会を構成する個々人の視点から。（２）環境との相互作用ないし環境への適応の視点から。

機能は、人間が環境に対して一定以上の適応水準を保つために必要とされるものであるが、あくまで人間個人が生き残るために必要とするものであって、社会全体の維持のためではない、と考える。社会や組織は、人間個々人が生き残るためのあくまで手段、道具に過ぎないと考える。

表 49

●従来の社会システム理論（T.Parsons,N.Luhmann,吉田民人....らによる）との相違点はどこか？。

ドライな機能主義も、社会を、機能的に分化した、各部分が互いに依存し合う、一つのシステム、と捉える点では、従来の社会システム理論（ウェットな機能主義）と同じであること。

ドライな機能主義が、従来の社会システム理論と異なるのは、視点を、個々の人間に合わせた、個人主義を取っている点にある。個人のよりよい環境適応水準を求めての動きが、社会を生成、分化、変動させる、と捉える点は、視点を最初から全体社会に置き、社会システムの分析を進める上で、個人を分析の対象としようとしない、今までの社会システム理論とは大きく異なる。

(c)1998-2005初出

義理・人情とドライ・ウェットさ

2005.7初出

義理は相手に対する心理的束縛感、不自由さ、人情は、相手に対する純粋な近接として捉えられ、共にウェットな感覚をもたらすと言えます。

従来、義理・人情は、ウェットな感覚をもたらすと捉えられてきた。本文では、なぜ義理・人情がウェットと感じられるかについて、説明する。

要約すれば、義理は相手に対する心理的束縛感、不自由さ、人情は、相手に対する純粋な近接として捉えられ、共にウェットな感覚をもたらすと言える。

まず、義理の方から説明すること。
義理は、社会的互酬がもたらす束縛として捉えることができる。

義理には、以下の3つの側面がある。
義理を持つ相手に対して、
（1）本当は、相手とは、ふだん意見が合わない等で、あまり関わりたくない、相手との心理的距離が遠い。本当は、相手とはドライな関係でいたい。本当は、相手とは自由で、無関係でいたい。
（2）以前、相手に助けてもらった、わがままを聞いてもらった等で、相手に借りがある。相手に返礼をしないといけないが、何らかの理由でできていないか、今後も返礼ができる当てがない。
（3）相手と付き合い続けないといけないこと。相手の前では、本

当は、相手と付き合いたくなくても、相手に親密な振りをしないといけない。

本心ではドライに付き合いたい相手との間で、相手に借りがある等で、相手に対して自分が下手に出る必要があり、かつ相手に対して見かけ上親密な（疑似親密の）ウェットな人間関係を、やむを得ず築く必要がある場合、その人間関係が束縛となって感じられる。

義理がウェットに感じられる所以は、。
（１）表面的であれ、相手に対して少なくとも見かけ上、心理的に親密になって近づくこと
（２）相手との人間関係が、束縛、不自由に感じられること。
に集約されること。

この場合、相手に対して借りがあるということは、相手の思うままに合わせないといけない面があり、それが往々にして自分の本意に合わないため、不自由、不本意に感じられる。これが、義理の持つマイナス面である。

かといって、借りのある相手に対して、それを無視するような態度を取ることは、自身の社会的信用を失い、生きていけなくなることを意味する。
この場合を、義理を断ち切って、自由になるには、相手に対して、全ての借りを返すしかない。

こうした「義理」は、相手から助けてもらった、相手から何かを受け取った側、借りのある側の心理であり、その点、相手を助ける、相手に何かをあげる、与える側（貸しを作る側）の心理である「人情」とは、同じウェットであっても、対極的な心理である。

人情は、相手を、相手からの返礼無しに助けたい、相手に、純粋に近づき、思いやりを与えたいという心理であること。相手からの見返りを期待せずに、純粋に好意で、相手に援助を与えようとすること。相手から利益、返礼を得ようという下心がないのが特徴である。
これは、相手に、他意なく近づこう、助けようとする心理であり、その点、人情は、相手への心理的距離を短くする、相手に近づこうとするウェットな心理の産物と言える。

こうした人情に基づく無償の援助行為が、助けを受け取った側からは、往々にして義理に感じられるというのが、義理・人情の持つ矛盾した側面であると言えると共に、義理と人情が相互に裏返しの、ペアにして一体として捉えられる関係にあることも示していると言える。

2005初出

ウェットな社会におけるドライな対人関係について

(c)2002.10-2002.11初出

日本や東アジアのようなウェットな社会では、全ての人間関係がウェットである、という訳ではなく、親しい仲間や身内に対してウェットな態度、見知らぬ他人、よそ者に対してはドライな態度を取る、といった二面性が存在すると考えます。

ここでは、日本や東アジアのような、ウェットな態度が主流とされる社会において、なぜドライな対人関係が、どのようなメカニズムで成立するかについて述べる。

1.はじめに

従来、日本人論とされる書物では、日本人が好む態度は一般的に集団主義的である、プライバシーの観念に疎い、周囲と同調するのが

好きである、規制を好むなどとされてきた。こうした態度は、筆者の調査ではいずれもウェットな態度であるという結果が出ている。

しかるに、近年の社会心理学では、［高野、纓坂、1997］に見られるように、心理実験室における実験において、集団主義的とされてきた日本人の被験者たちが取る態度が、個人主義的であり、欧米と変わらないという結果が出ている。このことは、従来の社会心理学において、日本人の取る態度が集団主義的とは言えない証拠であるとされてきた。

上記の現象については、ウェットなはずの日本人の対人関係がドライに変質したことと見るべきであるという考え方がまず成立する。

2.ウェットな社会におけるドライな対人関係

しかし、実は、ウェットな対人関係が主流な社会においても、互いの人間関係が全てウェットであるという訳ではなく、ある領域においては、対人関係はドライである、という見方が成立可能である、と筆者は主張したい。

この場合、ウェットな社会においては、対人関係が、その場面に応じて、ウェットな場合とドライな場合と二通り成立し、その点、相反する二面性を同時に持つということになる。ウェットな社会においては、ウェットな人間関係とドライな人間関係とが両方同時に、相互に排他的な形で存在している。
上記の仮説を具体的に説明すると、次のようになること。日本や東アジアのようなウェットな社会では、親しい仲間や身内に対しては強い一体感や温もりを求め、甘えの感情を持つ、といったようにウェットな態度を取るのに対して、見知らぬ他人、よそ者に対しては、冷たい、人を人とも思わぬようなドライな態度を取る、ということが考えられる。

3.対人関係のウェット・ドライさの二面性が生じるメカニズム。

こうしたウェットな社会における対人関係のウェット・ドライさの

二面性は、以下のメカニズムで引き起こされると考えられる。

ウェットな社会のように、各人が互いに近づこうとする心理的引力がある状態では、各人の間に、互いに距離を縮める方向へとスクラムを組み、自分の属する集団の表面積を互いに手を取り合ってできるだけ小さくしようする力が対人関係において働いており、他者は形成済の集団の表面から中に入ることができない。こうした力は、1。）外部の者を中にいれようとしない、2）集団内の仲間が表面から外に出ようとすると中に引きずり込もうとするものであり、物理的液体における「表面張力」に相当する。こうした状態では、人々は閉鎖的な対人関係を好み、自分が属する集団・仲間内の相手としか付き合おうとしない（自分の属する集団内のことにしか関心がない。）こと。

ウェットな社会における、所属集団にこうした表面張力のような力が働いていることで生まれる閉鎖指向は、人々の間に、自分の所属する集団の内と外とを峻別する傾向を生み出す。そして、所属集団の内側に対しては、互いに同じ集団に属する身内としての一体感や温もり、同じ運命共同体に属する者同士として、互いに相手のことを自分自身のことと同様にして心配し気遣い、助け合う関係が生成される。

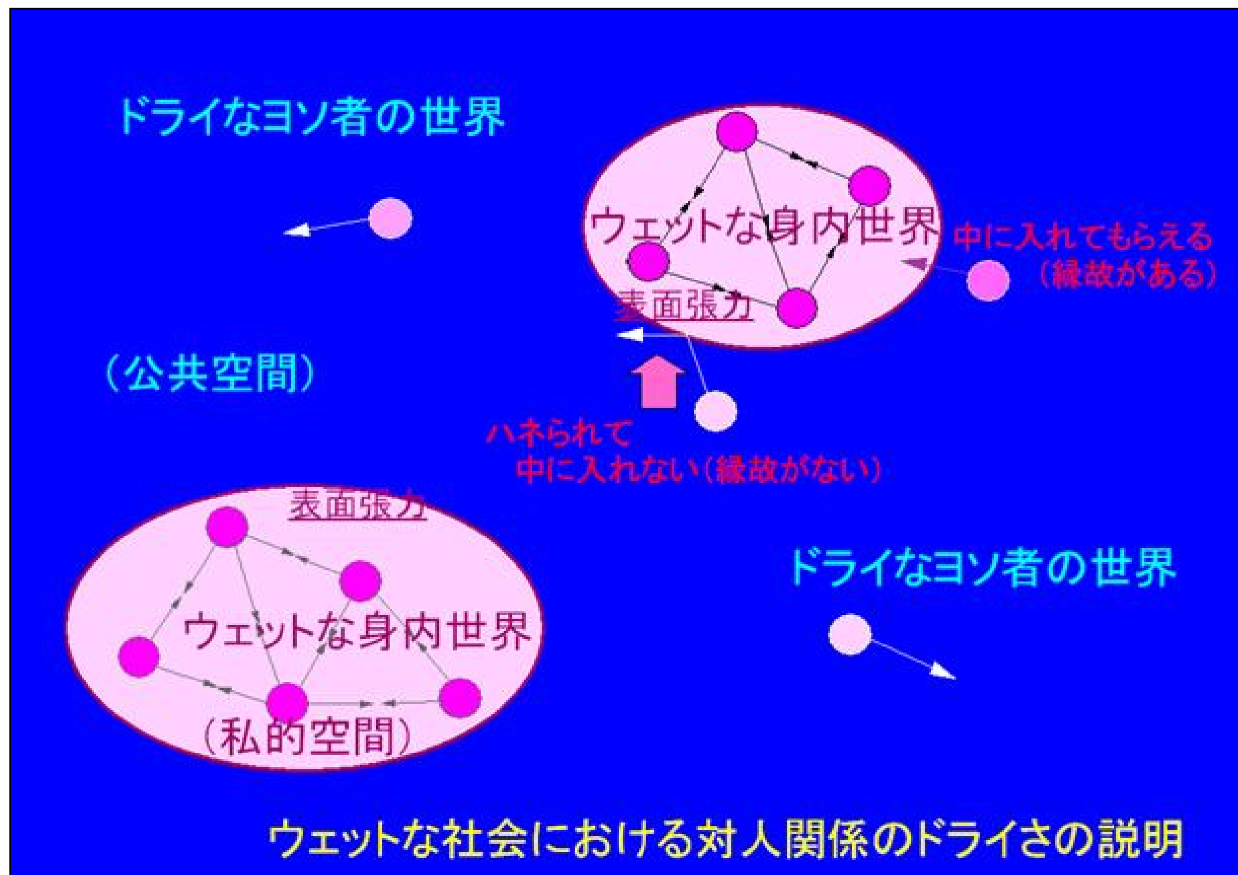
こうした人間的な温かさとか相互扶助に満ちたウェットな対人関係は、実は、いずれも外に向かって閉ざされた身内集団内限定の関係なのである。人間同士互いにベタベタくっついて、一つにまとまり合おうとする傾向の強いウェットな社会においては、物質レベルにおける液体の水がそうであるように、生成する集団が、内と外とを区別する「表面」や、集団の外側にいる者が集団の中に入るのを排除しようとする「表面張力」をを自ずと持つようになる。

ウェットな社会においては、身内と外とを明確に区別し、身内に対してはウェットな態度を基準とし、外のよそ者に対してはドライな態度を基準とするという、対人関係上のダブルスタンダードが、生成する集団に「表面」が存在する以上、自然と成立すると言える。

こうした、対人関係のウェットさの所産である、所属集団によそ者が入ろうとするのをハネる「表面張力」のようなものが存在し、よそ者が簡単に集団内に心理的に入り込めない社会は、対人関係の面

で見知らぬ他人から親しい身内の者になるのに大変な労力を必要とする社会である、と言える。

以下に、ウェットな社会において、身内集団からなるウェットな世界と、よそ者や赤の他人がバラバラに行き交うドライな世界とが区別される様子を、図にまとめた。



（付記）ウェットな社会における公共空間、私的空間

上記のように、「身内」と「よそ者」を峻別するウェットな社会において、公共空間（駅～電車内や公園）は、不特定多数の見知らぬ他者がバラバラな目的を持って一時的に寄り集う、「よそ者」の場であり、冷たいドライな態度が主流の場所となる。

ウェットな社会においては、人々は、地理的に離れた場所に複数の所属「内部」集団を持っている。（例えば、日本なら、家庭、職

場、学校、趣味のサークルなど）、その際、公共の場所は、ある「内部」集団から抜け出て、別の「内部」集団の中に再び入るまでに、一時的に通過するだけに過ぎない、非人間的な空間として、彼らの前に立ち現れる。

公共の場所は、それゆえ、ウェットな社会では、大切にされない。そこは、何らかの「内部」集団に入団を許可されるためのパスポート＝「縁故」を持たない者（浪人、ホームレスなど）の吹き溜まりの場所であり、人間らしい生活が送れるかどうか保証されない。

上記の考察より、ウェットな社会における、公共空間と対比されて捉えられる「私的空間」とは、「身内」集団の内側、只中に当たると考えられる。「私的空間」は、ドライな社会では、個人のプライベートな空間のことを指すが、ウェットな社会では、「私」の世界＝自分が所属する身内集団の世界を指す点が異なる。この場合、ウェットな社会では、私的空間であることを示すプライバシーを身内集団自体が持つことになる。この点について詳しくは、「集団プライバシー」に関する別項を参照されたい。

上記を要約するに、ウェットな社会では、「公共」＝「外部。（よそ者の世界。）」、「私」＝「内部。（内部者同士の世界。）」という関係が広く成り立つと言える。

（付記）「集団免疫系」としてのウェットな集団

ウェットな社会においては、生成する集団に「表面」のようなものが存在し、身内と外とを明確に区別しようとする。そこには、所属集団によそ者が入ろうとするのをハネる「表面張力」のようなものが存在し、よそ者が簡単に集団内に心理的に入り込めない。

この場合、ウェットな人間集団における「表面張力」の働きは、実際には、生体の免疫系と、その基本的な考え方が共通であると考えられる。

免疫は、生体の持つ、自分自身と同じ仲間は生体内に受け入れるが、自分とは違う、異質な者は、攻撃の対象として排除する働きである。

一方、ウェットな集団においては、自分たちと同じ身内の者は、集団内に受け入れるが、自分たちとは属性の異なるよそ者、異質な者は、集団に入ろうとするとハネる（拒絶すること。）こと。

このように、自分たちと同じ属性を持つ身内の者を受け入れ、異質な者を排除するのは、免疫と働きが同じであると言える。このウェットな集団の持つこの性質は、「集団免疫」といった用語で言い表すことができる。ウェットな集団は、従来の生体レベルを超えた、集団レベルでの免疫系＝「集団免疫系」であると考えることができる。

ウェットな集団において、他者を中に受け入れるかハネつけるどうかの判断基準は、自分たちと共通属性＝「縁故」（同じところに住んでいるか、住んでいたことという地縁。同じ血が流れていることという血縁。それらに代表される属性。）があるか否かであると考えられる。縁故、コネがある＝自分たちと、知り合いなどが共通である場合は、中に入ってよいとし、一方、コネがないよそ者の場合は、「一見さんお断り」といった感じで中に入るのを拒絶することになる。

4.日本社会における二面性の例

例えば、日本においては、学校や官庁や企業の採用試験が異様に厳しいが、これは、組織内外を分ける表面張力が、赤の他人に対して基本的に門戸を閉ざしているからであり、閉じた門を開くために、受験生は、学業や体育面で大変な努力を強いられるのである。

一方、苦労して採用試験に受かり、いったん身内集団の一員として登録されれば、そこには、相互の一体感や温かさに満ちた、家族的でウェットな相互扶助、協力関係が存在し、その関係は、自分から進んでその集団から出ない限り、終生保証されることになる。また、社宅の提供や、ビジネス能力向上のための研修、組織を定年などで退職する際の再就職の世話など、全生活面であらゆる融通が図られることになる。

一方、身内集団以外のよそ者にとっては、その集団と何らかの縁故（コネ）がない限り、集団内にアクセスして、便宜を図ってもらうことは至難の業である。組織の壁に守られないため、外から吹きすさぶ寒風に直接さらされることになり、その生存のための環境は厳しいものがある。このように、身内集団から外れた者（浪人）は、ドライで冷たい、非人間的な対人関係の中で、自らひとりの才覚で生き延びていくしかないのである。

このように、従来の日本社会においては、ウェットな身内集団と、よそ者同士が作るドライな一時的な群集とが対比される形で存在するといえる。

（付記）他の東アジアの社会（中国）における二面性の例

上記の対人関係の二面性は、日本人だけでなく、他の東アジアの人々にも共通に当てはまると考えられる。

例えば、［園田、2001］によれば、中国人は、その取る態度が、自分と関係の無い他人に対しては、敵対的な、人を人とも思わないものになるとされている。例えば、バスや地下鉄では、周囲を蹴落としてでも自分が先に乗り込もうとするし、見知らぬ者同士が席を譲り合うことは稀であるとされる。また、公の場を、見知らぬ他人が主流を占めるゆえ、大事にせず、平気で壊したり汚したりする。一方、同じ血縁で結びついた親族関係にある者同士は、互いに親密な互助組織を作り、強い一体感を持って、生活上の融通を行う。例えば、商業部門に親戚がいれば不足気味の商品が優先的に買えたり、交通部門に身内がいれば、車に乗って旅行に出かけても切符を買わずに済むなどである。

この場合、中国人においては、同じ血縁で結合した者同士のみの間で成立する閉鎖的な対人関係を構築し、その中では、人間的な温もり、一体感に満ちたウェットな対人関係が追求される。一方、その中を外れた、赤の他人に対しては、冷たい非人間的なドライな対人関係が幅を効かせることになる。

5.他社会との比較における日本社会の二面性の特徴

同じウェットな社会でも、日本と中国、韓国などとでは、上記の身内と外との対人関係におけるドライ・ウェットさの点で二面性が見られるという点では共通しているものの、細部にわたっては、かなりの違いが見られる。

例えば、中国人、韓国人の場合、身内集団に入れる者が、基本的に父系の血縁でつながっている者同士に限られる、そういう点で、どの身内集団に入るかが生得的に決まっており、その点、よそ者は血縁のないというだけで身内集団に入る資格がない。

これに対して、日本人の場合には、嫁入り・婿入りの際に当人の名乗る姓が、入る側の家族の姓へと変化する「姓変わり」現象が示しているように、血縁レベルにおいても、身内集団に入るために、いったんそれまでの人間関係を白紙にして、一から新人としてこれから所属する集団のしきたりを学び始めるという態度を取れば、必ずしも生得的な血縁関係に関係なく、身内集団の者として迎え入れられる、という点が違っている。

また、日本では、各人が所属する（あるいは、所属した）学校や、官庁、会社といった血縁とは無関係な組織が、場合によっては、血縁と同等以上の重要な身内集団として位置づけられることが普通である。それは、例えば、大学レベルでの学閥の存在とか、中央省庁において「農林一家」といったように、組織の中で濃厚な擬似家族的対人関係が主流であることからも裏付けられる。

ただし、日本においても、当初よそ者だった者が、こうしたウェットな温かい対人関係を適用される内部集団（企業、官庁、学校など）の者として迎え入れられるまでには、「新人」として入った集団に馴染むためのそれ相応の努力や苦労（いじめに会うなど）が必要という点で、身内集団の持つ「表面張力」は確実に存在する。先の中央省庁の「○○一家」という擬似家族関係のウェットさも、苦労して採用試験に受かった＝組織の表面張力を突破して中に入れた者だけが体験できる親密さ、ウェットさなのである。

また、日本において、よそ者が何とかこうした、企業や官庁といった組織に入ることを許されるのは、彼らが、まだ特定の組織の色に

染まっていない「白紙」状態の者（新規学卒者）か、例え他の組織を経験していても、再びこれから所属する組織の色に自らを全面的に塗り替えることのできる年齢の若い者である場合に限られるのが普通である。日本において、高齢者の再雇用が難しいのは、この点と関係がある。

6.心理実験で日本人がドライな態度を示す理由。

では、なぜウェット（集団主義的）な日本人が、心理実験においてはドライである（個人主義的である）、という結果をもたらすのか？ それに対する筆者なりの説明は以下のようになる。

心理実験室における実験においては、実験者と被験者、被験者同士の関係は、急きょ一時的に寄せ集められた、互いに見知らぬ他人の関係になることがほとんどで、被験者にとっては、ドライと感じられる対人関係に当てはまる。従って、被験者は、実験者や周囲の同席する他者に対して、自分の身内や親しい友人に対してと同様には一体感や温もりを感じられず、勢い、互いによそよそしい、一時的な対人関係を持とうとするのであり、そのことが、実験において、本来ウェットなはずの被験者がドライな態度を取ることに結びつくと考えられる。

では、どうすれば、心理実験において、日本人被験者にウェットな態度を取らせることができるであろうか？ 。

基本的には、被験者が既に構築している身内関係を、何らかの形でそのまま実験室に持ち込むことによって実現可能である、と筆者は考える。実験室内でも、被験者同士が、互いに親密な身内同士となるように人選面で配慮し、かつ実験室内に、身内以外のよそ者が入り込まないようにして、被験者同士の温かい一体感を損なわないようにするとともに、相互扶助的な雰囲気へと、実験の場を持っていくことである。

あるいは、身内関係をそのまま実験室に移植することが不可能な場合には、例えば、被験者間の関係を、互いに気の合う、一体感を生みやすい者同士が同じ組になるように組み換えると共に、実験の期

間を、当初はよそ者同士だった被験者間に、同じ運命共同体にあるというウェットな一体感を醸成させるに十分な長さへと延長することが考えられる。

（付記）「閉鎖的・限定的信頼（ウェット社会）」vs「開放的・一般的信頼（ドライ社会）」

［山岸、1998］においては、人間一般に対する信頼、例えば「ほとんどの人は信頼できる」という態度項目への回答において、アメリカ人の方が日本人よりも、信頼の度合いが高いという結果が出ている。

筆者の考えでは、信頼と社会のドライ・ウェットさとの関連は以下のようにまとめられる。

欧米のようなドライな社会においては、人々は、人間一般を契約の対象として誰でも平等に信用する。相手が約束を守れるかきちんと値踏みした上で、いったん契約を結んだ者は、例え赤の他人でも全面的に信頼する。そういう点で、信頼を結ぶ対象が、誰に対しても広く開かれている、と言える。この点、ドライな社会における信頼は、「開放的信頼」「一般的信頼」と呼ぶことができる。この場合、人々は、契約を破った者に対しては、裏切り者として容赦なく訴訟を起こすことになる。そういう点で、「一般的信頼」は、告訴、訴訟と絶えず隣り合わせの関係にあり、そうした点で、ある程度「冷たさ」を内包していると言える。

これに対して、日本のようなウェットな社会では、人々は、身内の者に対してのみ心を開き、信用する。信頼の対象は、人間一般ではなく、あくまで身内集団内限定の、外に向かって閉じたものとなる。そういう点で、信頼を結ぶ対象が、特定の相手に限定されていると言える。この点、ウェットな社会における信頼は、「閉鎖的信頼」「限定的信頼」と呼ぶことができる。

なお、山岸の説では、日本のような一般的信頼に欠ける社会では、人々は相互監視によって仕方なく集団主義的な行動をとるとされている。これに対して、筆者は、以下のような違う考えを持っている。

日本のようなウェットな社会においては、一般的信頼に欠けるからといって、そこに信頼関係が成り立たない訳では全くなく、人々は身内に閉じた集団の中で、互いに人間的な温もり、愛情、一体感に包まれ、人懐かしさを重んずる。そこには、（あくまで内部の仲間限定ではあるが。）極めて深い根源的・原初的な信頼関係が人々の間に存在すると言える。したがって、日本人のようなウェットな人々は、相互監視というよりは、身内の仲間同士に閉じた信頼感によって、互いに心理的距離が近くなるように集団を組んで動くのだと考える。

7.インターネット上の心理テストで日本人がドライな態度を選ぶ理由。

筆者が運用中の、Webサイト心理テストにおいては、訪問する回答者のほとんどがドライな態度の方を、自分の性格に合っているとして選択している。

なぜウェット（集団主義的）な日本人が、インターネット上の心理テストにおいてはドライである（個人主義的である）、という結果をもたらすのか？ それに対する筆者なりの説明は以下のようになる。

インターネット上のwebサイトというのは、訪問者にとってみれば、見ず知らずの赤の他人が構築した情報環境である。こうしたwebサイトの環境は、当サイトも含めて、訪問者にとっては、言わばよそ者の世界に足を踏み入れることに当たり、訪問者は、自ら気がつかないうちに（無意識のうちに）、ドライな態度を取ろうと身構えている状態になること。

そのような状態で、心理テストに入って、誰に対する態度かを特定せずに「あなたは、ドライ・ウェットどちらの態度を好みますか？」と聞かれた場合、訪問者＝テスト回答者がデフォルトで取る態度は、見ず知らずのwebサイト作成者＝よそ者に対する冷たいドライな態度ということとなり、従って、彼らは、例えウェットな性格であっても、ドライな回答を寄せることになる。

このままでは、インターネット上の心理テストでは、ウェットな性格の持ち主を、ドライな性格であると誤判定してしまうことが恒常的になってしまう恐れがある。これを解決するには、心理テストの質問において、「誰に対して」その態度を取るのを好むかについて、1。）「身内の親しい者」に対して、2）「よそ者、赤の他人」に対して、の2通りに予め分けて回答を求め、両者の回答結果を比較することが考えられる。

その結果、身内の親しい者に対して、よそ者よりも有意にウェットな態度を取る者は、その根底的な性格がウェットである、ということが言えるのではないかと考えられる。身内とよそ者とで取る態度が違う、態度の二面性を持つことが、先に述べたように、ウェットな性格の人々の大きな特徴だからである。

無論、匿名的人間関係が支配するインターネット上での回答であるから、ウェットな回答者は皆心理的なガードが固く、自分のウェットな内面を隠して、ドライな外面を極力見せようとする傾向がある。従って、「身内に対して、ドライ・ウェットどちらの態度を取りますか？」と聞かれた場合も、どちらかと言えば、「ドライ」な方を選択する傾向はあると考えられる。

しかし、心理テストにおいて、「身内」と「よそ者」とに対する態度の違いまでを隠蔽することは、ウェットな回答者にとっては想定外であり、その結果、「身内」に対して相対的によりウェットな態度を取ると思わず回答してしまう。その結果、ドライな外面に隠されたウェットな性格が図らずも表面化することになる、と筆者は考えている。

8.仮説の検証ーウェット社会（日本）の分析事例ー

上記の筆者の説明が正しいならば、対人関係がウェットとされる日本や東アジアの人々においては、心理テストなどで、身内に対する態度が、よそ者、見知らぬ他人に対する態度に比べ、有意にウェットになるはずである。

筆者は、この仮説を検証するため、インターネットを利用して、主に日本人の若者を対象とした心理テスト形式のアンケート調査を行った。調査は、当サイトを訪れた回答者に対して、行われた。調査は、筆者が作成したドライ・ウェットな行動様式の17種類の分類項目にそれぞれ相当する17のウェットな態度について、2段階の回答ステージを設けた。筆者は、それぞれについて「誰と○○する」という態度表現の「誰」の中身のみを取り替えた。（文章の末尾は2段階を通じて一緒であった。）筆者は、そして、回答者に対して、どれだけ自分に当てはまるかを回答してもらった。

2段階ある回答の第1段階においては、態度の表現を、「赤の他人と一緒に行動するのを好む」のように、「赤の他人」（よそ者）を対象とした内容に統一したこと。それぞれの態度について「とても当てはまる」から「ほとんど当てはまらない」まで5段階で回答してもらったこと。第2段階においては、態度の表現を、「身内の仲間と一緒に行動するのを好む」のように、「身内の仲間」を対象とした内容に統一した。回答の形式は、第1段階と同様の5段階であった。

回答結果は、以下の通りである。

表 50

表 51

回答データを分析した結果、

（１）各回答項目について、「身内」と「赤の他人（よそ者）」との間での回答値の平均値の差の検定（対応ありこと。）を行ったところ、17種類の回答項目のうち、「身内」に対して、「赤の他人

（よそ者）」に比べて、有意に（有意水準0.01）、回答者がよりウェットな態度を取ると出た項目が、15項目と大半を占めた。

（２）各回答者について、「身内」に対して「赤の他人（よそ者）」よりもよりウェットな態度を取る回答項目の数が有意に多いかどうかを判定する符号検定を行ったところ、「身内」に対して「赤の他人。（よそ者。）」よりもよりウェットな態度を取る回答項目の数が有意に多い（有意水準0.05）回答者の全体に占める比率は、55.5％と過半数を超えた。逆に、「赤の他人（よそ者）」に対して「身内」に対してよりもよりウェットな態度を取る回答項目の数が有意に多い（有意水準0.05）回答者の全体に占める比率は、7％に過ぎなかった。

上記の結果から、日本のようなウェットな社会において、身内に対する態度が、よそ者、見知らぬ他人に対する態度に比べ、有意にウェットになる、という筆者の仮説は十分支持された。

上記のアンケートの回答者は、そのほとんどが従来行動様式がドライ化したとされてきた10～20代の若者であり、彼らにおいて、ウェット社会の特徴である「身内」「よそ者」間での態度の峻別が見られたということは、彼ら日本の若者が、根底においては、上の世代同様ウェットであることを示す結果となった。

9.今後の課題

一方、ドライな対人関係の欧米においては、身内と見知らぬよそ者に対する態度の間にウェットな社会ほどの差が見られず、両方とも適度にドライになるのではないかと予想される。この仮説に関しては、今後の調査で当否を明らかにする必要がある、と考えている。

参考文献
高野陽太郎、纓坂英子" 日本人の集団主義" と" アメリカ人の個人主義" -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
園田茂人、中国人の心理と行動、2001、日本放送出版協会
山岸俊男、信頼の構造、1998、東京大学出版会

(c)2002.10-2002.11初出

ドライ・ウェットさの両立について

2006.1-2006.9初出

ドライな価値とウェットな価値を同時に手に入れるのは難しく、妥協が必要です。また、例えば、ウェットな価値だけを取ってみても、そこには、プラス面を実現しようとすると、付随するマイナス面も同時に出てしまいます。

1.ドライな価値とウェットな価値の両立

ドライな価値とウェットな価値の両立を図るのは難しい。その一例として自由と連帯を上げること。
自由と連帯は両立しない。

自由と連帯は、両方とも、人間にとってプラスの望ましい価値であり、人間は、両方欲しいと思う。

羽を思い切り伸ばせて、自分の行きたい方向に行ける自由さは、互いにバラバラに離れて活動することを指向する、心のドライさによって成り立つ。

一方、連帯は、互いに周囲他者との温かな心地よい一体感を生む

が、これは、互いに集まりくっつくことを指向する、心のウェットさによって成り立つ。

望ましさの点から言えば、自由も連帯も両方いっぺんに欲しいということになるが、残念ながら、両者は、ドライ・ウェットの軸上では、互いに対立した概念であり、両立しない。

連帯感を持つには、各人が同じ価値観を共有する必要があり、周囲と無関係に自分の好きな道を歩もうとしたり、互いにバラバラでいようとする自由さや個人毎の個性の発露を制限、規制する必要がある。

一方、個人の自由が確保されると、個人が周囲と無関係にバラバラに動くようになり、連帯が欠如する。そうなると、行動の責任を一人で取らなければならないし、他人と自分は所詮違うんだという、孤独感や寂しさにさいなまれることになる。

結局、自由と連帯と両方同時に手に入れることは普通は不可能である。両者をどうしても同時に欲しいのであれば、ある程度自由も連帯も制限しつつ、不満の出ない中間値を探す必要がある。

自由と連帯が両立するのは、「。（社会とかの）自由化を求めて連帯する」とか、あるいは各人の自由意思がたまたま複数の人々の間で共通、一緒だった時だけである。

例えば、人間は物価が安いほど、生活のコストが低くて生活しやすいという点では万人が共通しているので、各人の自発的な自由意思で「物価の値下げを求めて連帯する」といったことが可能である。

2.ウェット（ドライ）な価値の2面性

ウェットな価値には、同時にプラスとマイナスの2側面が存在する。

例えば、なつきとまとわりつきは、両方ともウェットな感じをもたらすが、この2つは同時に起こる。

子供が自分になつくのは、子供が自分を好いてくれているからであり、そうした子供によるプラス評価が自分にとって、心地よい、うれしいと感じられ、プラスの感覚をもたらす。

しかし一方、なつかれて、自分の周囲を絶えずくっつかれる、まとわりつかれるのは、特に忙しい時などわずらわしく、うるさいと感じられ、マイナスの感覚をもたらす。

かといって、まとわりつかれるのがわずらわしいとして、子供を邪険に追い返して扱っていると、子供がなついてくれなくなり、寂しくなる。

結局、なつきこと。(プラス価値)を手に入れようと思ったら、まとわりつきこと。(マイナス価値)の方の発生も同時に我慢する必要がある。

上記は、ウェットな価値についての例であるが、ドライな価値についても同様な説明が可能と考えられる。

2006初出

ドライ・ウェット循環

2009.11初出

人間はドライな環境に行くと、ウェットさを欲し、それではウェットな環境に行くとドライさを欲するというように、ドライ、ウェットさへの欲求がドライ→ウェット→ドライ→ウェット・・・といった感じで循環します。筆者は、このことについて説明しています。

人間は、ドライな社会環境では、自由競争の結果生じる格差に耐えられなくなる。自由競争に疲れること。その結果、相互連帯、扶助を実現するウェットさにあこがれること。

そうしてウェットな社会環境に入ると、今度は、しがらみをうっとうしく感じるようになり、ドライな自由さが欲しくなる。

このように、ドライさ、ウェットさへの指向が循環する。

メール、電話とドライ、ウェットさ

2009.11初出

筆者は、人間のメール、電話といったコミュニケーション行動と、ドライ、ウェットさとの関連について説明しています。

ウェットな人。
頻繁に相手に電話をかける、会いたがる、メールすること。
相手からメールがあると、即座に返事を出すこと。

そうした行動の根底には、相手と親しくなろうとする、もっと近づこうとするという欲求がある。

ドライな人。
最低限しかメール、電話をしないこと。
ある程度時間、期間を経てから返事を返すこと。

そうした行動の根底には、相手に近づこうとする欲求が欠如している。

最適社会湿度

2009.11初出

社会湿度は、その社会の人々の社会関係（社会的相互作用）のドライ、ウェットな度合いと呼ぶことができる。

ウェット過ぎる場合。
・自由がなく、束縛感があるので、適度にドライで自由があることが必要である。
・対人関係が大変で疲れるので、適度にドライで対人関係がさっぱりしていることが必要である。

ドライ過ぎる場合。
・自由競争の行き過ぎで、格差が大きく開いてしまうので、適度にウェットで仲良く一緒に共同歩調を取ることが必要である。
・孤独になってしまうので、適度にウェットで周囲との一体感を保てることが必要である。

要するに、人間にとって、ドライ過ぎず、かつウェット過ぎない最適な社会湿度が存在すると考えられ、そうした社会湿度の下で、最も快適で生産効率が上がると予想される。

例えば、半分農耕で、半分遊牧、牧畜なのが、適度にドライかつウェットであり、良好な社会湿度になると考えられる。

システムとドライ、ウェットさ

2009.11初出

システムは、構成要素同士が相互依存関係にあり、その本質はウェットである。
システムは、構成要素同士が相互に異質であり、その本質はドライである。

ウェットな研究、ドライな研究

2009.11初出

ウェットな研究では、研究者は、以下の通りである。

研究対象が好きであり、愛着を持っていること。研究対象を愛していること。研究対象は、愛情を注ぐ対象となっていること。
研究対象と母性的な一体感があること。
研究対象に対して、距離感が無いこと。研究対象に対して、客観的、冷淡、冷酷になれないこと。

ドライな研究では、研究者は、以下の通りである。
研究対象は、あくまで金儲けや栄誉、名声を得る等の目標達成のための手段、道具であること。
研究対象は、冷静で客観的に観察する対象であること。

対象に対して一定の距離を置き、冷たく突き放すこと。
自分の研究も、冷徹な批判対象とすること。

日本人や女性研究者はウェットタイプであり、欧米、男性研究者はドライタイプであると考えられる。

友人選択とドライ、ウェットさ

2009.11初出

筆者は、友人選択に、ドライ、ウェットの両タイプが存在することを説明しています。

・ドライな個別主義
趣味ごとに違う友人を持つこと。
この趣味ではこの友人を持つこと。別のこの趣味では別のこの友人を持つこと。そのようにすること。
男性優位であること。

・ウェットな包括主義
ある一人の友人で複数〜全ての趣味を合わせること。
女性優位、日本的であること。

ドライ、ウェットさと保守、革新

2009.11初出

保守、革新とドライ、ウェットさの関連が、日本とアメリカなどで異なることを説明しています。

・ウェットな保守、ドライな革新
日本伝統的稲作農耕社会では、保守層が、相互一体感尊重のウェットさを支持し、革新層が、自由主義のドライさを支持する。

・ドライな保守、ウェットな革新
アメリカ伝統的牧畜社会では、保守層が、自助のドライさを支持し、革新層が、医療保険ネットのウェットさ（相互扶助）を支持すること。日本と逆転していること。

ネットはウエット。

2009.11初出

ネットがウエットな感覚を人間に与えることを説明しています。

インターネット、セーフティネット・・・いずれも、人と人とのつながり、コネクションを作る方向に向かうため、ウエットである。

経営・経済

組織の「最適」湿度に関する検討

ードライ・ウェットな組織の長所・短所、および組織湿度の調節・矯正についてー
(c)2002.10初出

ドライ過ぎ、あるいはウェット過ぎる組織に対しては、問題解決のための「湿度調節」援助を行う必要があります。筆者は、組織の雰囲気を直すことで、業績や、居心地の快適さの向上を目指します。筆者は、ドライ・ウェットな組織が持つ長所・短所の分析を行い、組織の湿度調節・矯正のあり方やその実現のために心理カウンセラ一が果たす役割などについてまとめてみました。

１.

ここでは、ドライ・ウェットな性格・態度に関する個人レベルの知見を、組織レベルに応用する可能性の大きさや、組織風土の改善に役立てるために解決すべき課題について述べる。

社会においては、ドライ過ぎ、あるいはウェット過ぎて機能不全、病的状態に陥った組織が沢山あると考えられる。そうした組織を対象とした「組織湿度」のカウンセリング、コンサルティングを行う体制を整えることが必要である。
ドライ過ぎ、あるいはウェット過ぎる組織に対して、問題解決のための「湿度調節・矯正」援助を行うのが、カウンセリングの目的と

なる。
組織の雰囲気を直すことで、業績や、居心地の快適さの向上を目指すこと。
対象組織は、役所、企業、学校、家庭など多岐にわたる。

２．

ここでは、ドライ・ウェットそれぞれの組織の持つ特徴を、長所と短所に分けて比較することで、業績、成員満足度向上の点で望ましい（あるいは逆に問題のあること。）組織のドライ・ウェットさとはどのようなものかについて考察する。

２．１ウェットな組織
ウェットな組織の長所は、。

［相互依存・扶助指向］
ウェットな組織は、人間的な温もり、触れ合いに溢れている。共同体的、家族的であり、少なくとも最初は居心地がよい。ずっと長くいたいと思わせること。成員は居心地のよい状態を維持するために、積極的に働こうとする。
組織の中では、成員は、周囲の同僚と協力し、自分の利益は二の次にして、互いに相手を思いやり、助け合おうとすること。（相互扶助の精神に溢れていること。）成員の誰かが調子が悪くなったときは、周囲が積極的に無償でそれをカヴァーする行動をしてくれるので、いざというときも安心であり、成員は業務を進める上での強力な心の支えを得ることができる。失敗したときの責任も共同で取ってもらえるので気が楽である。

［関係指向］
組織との強力な一体感が醸成され、成員は、自分の属している組織のために、私利私欲に囚われず、一生懸命献身しようとする。
成員は、組織と一心同体である。周囲の同僚と運命共同体を形成していること。組織の成功が成員自身の成功でもある。成功は、周囲の同僚と分かち合い、誰の成果だということを気にしない（自分の成果だということにこだわらないこと。）こと。
組織と一体化することで、成員各員の自我が、組織全体のサイズまで拡大し、気持ち的に強大になったように感じ、全能感を持って、

積極的にパワフルに業務に取り組むことができる。

［同調・同期指向］
成員相互の一体感が強く、互いが心理的に近い位置を共有している。そのため、意見が合いやすく、成員相互の摩擦が少なく、快適に業務を進められる。相互の一体感を保持するために、成員は、周囲と同じ行動を好んで取り、同じ横並びの状態でいようとする。
成員は、互いを同期を取る横並び関係としてライバル視しない（競争相手と見ない、昇進も仲良く同期を取って行われるなど。）ので、周囲に対して安心して気を許すことができ、業務に一心に打ち込むことができる。
（昇進や待遇などでの）取るに足らない小さな格差の発生でも、成員にとっては一体感の喪失につながる。成員は遅れることで失われた一体感を取り戻すために、必死で努力して追いつこうとし、それが、成員相互の間に、同調・横並び状態の回復を目的とする激しい競争（同調競争）を生み出し、組織の活力につながること。

一方、ウェットな組織の短所は、。

［集団主義］
集団の利益が、個人のそれよりも優先されるため、成員は、組織に対して自己犠牲を一方的に強いられる。

［密集指向］
成員同士、互いの心理的距離が近く、一ヵ所に密集しているため、成員同士の心理的隙間がなく、風通しが悪く、息苦しい。人間関係が濃厚すぎる。

［閉鎖指向］
組織が外に向かって閉じているため、外から新鮮な風（新たな人材）が入ってきにくい。考えが内向きになり、視野が狭くなりやすい。組織外から光が差し込まないため、組織の雰囲気が暗い。

［同調指向］
成員同士が、互いに同じレベルにいる状態を維持するために、周囲から外れて目立った業績を挙げようとする者（あるいは挙げた者）の足を引っ張り合い、個人的に成果を出そうとする意欲を低下させ

ること。「出る杭は打たれる。」
互いが温もりや一体感維持のために同調行動を取っているうちに考え方が均質化し、いつしか異質な有能者を排除するようになる。

［規制主義］
成員同士が、一体感維持のために皆一緒の行動を取る必要があり、行動を揃えるための規律を生み出すために、互いの行動を規制・束縛し合うので、成員にとっては行動の自由が不足し、自由さが羨望の的になる。

［関係指向］
心理的に良好な対人関係の維持に大変に気を遣い、ストレスがたまりやすい。

［反プライバシー］
成員間にプライバシーが欠如している。絶えず各成員についての私的な生活や性癖に関する噂話が組織中を流れまくり、打ち消すのに一苦労し、業績向上以外の余計なことにエネルギーを使ってしまう。

［定着指向］
成員が一ヵ所に定着して動かなくなること。（いつまでも同じ相手とばかり業務をこなすこと。）そのことで、前例やしきたりを守るのに汲々として場の雰囲気が停滞しがちである。倦怠感が場を支配しがちである。新しいことにチャレンジしようとする精神に欠け、現状維持的思考が強くなり過ぎ、環境の変化についていけなくなる。
組織に入ってからの所属期間が長いほど、身につけた組織の前例・しきたりが増えて発言力が強くなるため、「無能な長老」が跋扈しやすい。最初から組織にい続ける者をより尊重する純血意識が強くなり過ぎるため、外部の逸材を手に入れる機会を逃し、業績低迷に結びつく。
組織に長くい続けるために、各成員の細かな欠点まで全部分かるようになってしまい、不快感の原因となること。

２．２ドライな組織

ドライな組織の長所は、。

［個人主義］
個人ベースの意志決定が尊重されるため、個人で独自の組織生産性向上のアイデアを持っている場合には、それを積極的に生かすことができる。
一つの組織に無制限・無限定の忠誠を誓う必要がないため、組織の不必要な犠牲にならないで済む。

［広域分散指向］
個人と個人の間が一定以上離れており、成員間に心理的に十分隙間（空き）があり、風通しがよい。働いていて爽快な雰囲気に浸れること。

［非関係・縁故指向］
自分の必要とする人材（あるいは自分を売り込みたい相手）に、縁故をいちいちたどることなしに直接会って話をつけることができ、機動性に優れた人材登用ができる。

［自由主義］
成員間の紐帯・結合が強すぎないため、各成員が周囲と独立して自由に動き回ることができる。束縛や規制があまりなく、業務上の意思決定の自由を謳歌できるため、各人が組織にとって望ましいと考える施策をより実行しやすい。各成員が自分の業務上の成果を周囲に対して自由にアピールできる。
組織目標達成に必要な、目的の相手へとダイレクトに接触できるため、組織内の成員間の情報の流れがスムーズになり、スピードアップする。

［非同調指向］
人と違ったことをしても非難されるどころか、はっきりした個性があるとして歓迎されるため、他者とは異なる独自の道を歩むことができ、その分、出る成果も、他者の真似のできない強力なアピール度を備えた、競争力のあるものとなる。

［プライバシーの尊重］
他の成員が、私的領域への探り・噂話などの不必要な介入をしてこ

ないので、快適なプライバシーが保てる。プライバシーの確保に余計な神経を使わないで済む分、本来の業務により集中できること。

［合理指向］
周囲への過剰な対人配慮をしなくて済むため、周囲成員による無用な介入が抑えられ、個人として合理的な判断ができる。

［開放指向］
組織が外に向かって開かれており、外部の有能な人材が入ってきやすい。外光が直接組織内に差し込むため、組織の雰囲気が明るく、肯定的で望ましいものとなる。

［動的指向］
成員がよく動き回る分、組織としての動きが素早く、臨機応変になる。そのため、より外部環境の変化に適応した行動を即座に取ることができるようになる。組織としての機動性が向上する。

［独創指向］
自由な発想で、組織の縛りや前例に囚われず新しい未踏の分野へと進出することができるため、今までにない独創的な研究・開発成果を出せるようになる。

ドライな組織の短所は、。

［個人主義］
各自が自分の利益だけを考えているため、例え、組織全体や周囲の成員にとって有益なことでも、自分にとって利益にならないことはそのままではやろうとしない。そのため、成員同士の自発的な、契約条項を超えた協力関係が生まれにくい。他人の利益になることをする際にも、1。）自分のアウトプットが他人にとって利益がないと、他人が自分の出すサービスを利用しないため、自分が儲からなくなるので、それではまずいと思ったり、2。）よいことをすることで死後の天国入りなどの見返り（自分の利益）が得られることを想定したりすることで、初めて他人に利益のあることをしようとする気が起きる。

［自立指向］

行き過ぎた実力主義、能力主義のため、各自が、自分の能力発揮・成果のことだけを考えており、他人のことは蹴落としてもよいと考え、人助けを嫌う傾向がある。相互扶助の度合いが弱いため、共同体的、家族的な雰囲気に欠けており、組織の雰囲気が、冷たく、クールなものになってしまう。自分のことは自分で解決しないといけないため、周囲にあまり頼れない（頼ると、成果をよこせなどと公然と見返りを要求されること。）こと。自分で決めたことについて、失敗した場合、責任が重くのしかかる。

［非同調指向、プライバシーの尊重］
各成員が周囲とは無関係にバラバラに動くため、成員同士の一体感に欠ける。互いの意見が違うことが前提とした行動を取り、対人関係がそのままではギスギスしやすいこと。（反対や訴訟が起きやすいこと。）そのため、人間関係は、互いに深入りせず、あっさり、淡々としたものに止まる。

［自由主義］
周囲の成員が皆自由競争の対象となるライバルで、いつ追い抜かれるか、立場が逆転するか分からないため、気が抜けず、ストレスがたまる。

［非定着指向］
成員が組織に定着せず積極的に外に飛び出していくため、出入りが激しい。成員の組織への忠誠は、あくまで短期的な契約に基づくものであり、契約が終われば、その瞬間から赤の他人に戻ってしまう。長期間無条件に私利私欲をなげうって組織のために尽くしてくれる成員の確保が難しい。

２．３ドライな特徴とウェットな特徴の不両立

上記で挙げた、ドライな組織の特徴のセット（個人主義、自由主義、合理指向…）と、ウェットな組織の特徴（集団主義、規制主義、非合理指向….）のセットは、相反するものであり、両方を同時に強く兼ね備えた組織（例えば、団体行動を重んじる＝集団主義の、かつ自由な雰囲気に溢れた＝自由主義の組織）を作るのは困難と考えられる。

例えば、家族的温もりに溢れたウェットな組織は、雰囲気が停滞しがちであり、風通しが悪い。一方、開放的で風通しよく、動きのよい、フットワークの軽いドライな組織は、えてして対人関係が冷たくクールであり、中に入っていて寂しさや疎外感を感じる場合が多い。

風通しのよい明るい組織と、人間的温かみに満ちた組織というのは、組織としては両方とも理想的であり、両方追求しがちであるが、ドライ・ウェットさの観点からは、この2つは、互いに矛盾し、両立しない。

適度に温かく、かつ風通しのよい、というようにドライ・ウェット両者のバランスがほどよい時に、組織として最高の業績を上げることができるのではあるまいか?。

３.

上記より、組織は、ドライ過ぎても、ウェット過ぎても、業績が上がらなかったり、中にいて不快であると考えられる。
組織の成員にとって、ドライ過ぎず、ウェット過ぎず、というちょうどよい湿度が存在するはずである。
組織の最適湿度は、どの辺りにあるのであろうか? それが分かれば、組織の湿度を(除湿・加湿エアコン同様)最適な状態にコントロールすることで、組織の生産性や成員満足度向上に大きく寄与することができる。
この利点を実証するために、実地調査による検証が必要である。
検証手順は、以下のようになると考えられる。
（１）組織の湿度を測定する心理尺度を開発し、様々な組織の成員に回答してもらうこと。
（２）回答対象となる組織毎に、生産性（業績）、居心地のよさの度合いを、別途アンケートなどで調査し分類すること。
（３）生産性の良好な組織とそうでない組織、居心地のよい快適な組織とそうでない組織とで、組織の湿度がどのように違うかを調べる。

仮説としては、例えば、以下のようなことが考えられる。

（１）ドライ～ウェットの中間地点に最も望ましい業績・居心地の状態が一つ来る。
（２）ある程度ドライな地点と、ウェットな地点それぞれに、最も望ましい業績・居心地の状態が合計2つ来る。
（３）上記（１）と（２）が複合して現れる。
（４）組織の業績、居心地のよさは、ドライ・ウェットさとは無関係である。

上記の仮説を検証して、最適湿度が判明したら、次に、組織の湿度をコントロール、調節するための効果的な方法について、新たに開発する必要がある。
有効な方法としては、各組織を担当するカウンセラー（例えば企業であれば産業カウンセラー）を置き、彼らの対人関係調整のノウハウを、対象組織成員間における対人関係上の湿度コントロールに生かしてもらう、といったことが考えられる。この過程で、組織を対象とする、現状把握と、組織を望ましい湿度へと変化させるためのカウンセリング、コンサルティングが必要となる。組織カウンセラーは、組織がドライ過ぎるときは、ウェットな行動様式を組織に注入し、組織がウェット過ぎるときは、その逆を行うようにすればよい。

どのような行動様式がドライ・ウェットかは、既に筆者が一通り知見を当サイトに集約しているので、それを参照すればよい。

問題は、効果的な組織の湿度調節プロセスをどのように決定するかである。例えば、以下のようなプロセスが考えられる。

1）カウンセラーたちを中心とした組織湿度調整委員会のようなものを、組織全体を見通すことが可能な形で編成し、彼らに、組織湿度の調節・矯正の全権を付与する。

2）カウンセラーたちは、組織の意思決定で大きな役割を果たしてきた組織のキーマン（これは、必ずしも地位の高い者とは限らない。ノンキャリアの者でも、彼らにしかできない特殊技能のおかげで、組織に大きな影響力を振るう場合がある。）を、組織内の聞き込みや現場観察などによって特定した上で、彼らの選好する対人関係上の湿度を、対面調査などで測定すること。

3）組織のキーマンたちの好む対人関係上の湿度に関するデータを集計し、そこから、現在の組織の湿度を割り出すこと。
4）割り出した組織の湿度が、組織目標、業績や成員満足度の観点から見て、適切かどうか判定する。

5）組織の湿度が不適切であると判断された場合は、組織の目標や訓示に照らし合わせて、最も近くにある、業績・成員満足度の高い組織湿度を探し、その湿度へと元の組織の湿度を移行させることを決定する。

6）湿度移行に当たっては、a。）可能な範囲内で組織の従来のキーマンたちの選好湿度の矯正を行うと共に、b）組織内で従来能力がありながら、主流の組織湿度に合わず冷遇されてきた人材を、抜き打ちの心理テストや面接などで探し出し、新たにキーマンの位置に就けるように教育を行うという作業を行う。

このような手順を全て実行するには、数ヵ月といった短い期間では不可能である。製品生産体制のリストラのように、1～数年かけて組織成員の心理面でのリストラをじっくりと行うことで、初めて初期の成果を達成することができる、と予想される。

また、こうした組織湿度の矯正に当たっては、心理カウンセラー、それも個人ではなく、組織をターゲットとするカウンセラーが、従来にない形で、重要な任務を担うことになる。そのため、従来の臨床心理の教育内容を、個人中心から組織～社会中心へと転換することが必要である。

なお、実際には、組織において、自分が適当と思う対人関係上の湿度は、一人一人の成員毎に異なると考えられる。組織の中は、ドライ・ウェットさの面でもともと均質ではなく、成員の中にも、ドライな対人関係を好む成員（ドライな分子）と、ウェットさを好む成員（ウェットな分子）が存在する。この場合、成員のドライ・ウェットさを好む度合いは、生得的・遺伝的に決まる面もあれば、生育環境・家庭のあり方によっても変わってくると言えること。（↓注。）組織がドライ・ウェットさで均一ということはあまり考えられず、実際には、組織内のドライな分子とウェットな分子との間に、常に綱引き、勢力争いが起きていると想定される。

（注）ドライ・ウェットさの好みが生得的に決まるという側面については、例えば、日本人など東アジアの人々が、稲作農耕の環境下で、遺伝的にウェットさを好むように進化してきたと言えるか、とか、ドライさを好む遺伝子がもしあるとすればどのようなものか、などについて、今後明らかにする必要がある。
また、ドライ・ウェットさの好みが後天的な生育環境に決まるという側面については、例えば、ドライな雰囲気の家庭に育った子供はどの程度ドライさを好むか、とか、育った家庭の雰囲気がウェット過ぎると、その雰囲気から逃れるため、かえってドライな対人関係を好むようになるか、などについて、今後研究が必要である。

ただし、組織の上司の性格や、成員の数がドライ・ウェットのどちらかに偏っている場合などは、一方が他方を圧倒し、少数派の方は、表面的には多数派の対人的な湿度に従いながら、心理的なストレスをため込むことになり、それが、当人の心理面での障害となって立ち現れることが多いと考えられる。また、組織の湿度に合わない有能な人材の組織外流出につながることもある（ウェットな日本の会社・役所組織を嫌って欧米に研究の場を移すノーベル賞受賞者の例など）こと。

組織の湿度コントロールに当たっては、上記の点を考慮して、例えば、多数の成員にとって快適となる組織湿度を優先して決定しつつ、ドライ・ウェットさの面での少数派への配慮（多数派からの隔離政策を取るなど）も怠らない、といった考慮が必要となる。

集団成果主義

－ウェットな組織に適した成果評価手法の提案－
2004.9初出

従来、日本における成果主義は、個人単位のドライなものでした。それは、人々の処遇にバラバラに差を付け、人々の能力に差があることを前提とした処遇をすることで、組織の人々の間に格差が生じ、連帯感、一体感が失せるため、成員の間に疎外感や冷たさが広がり、モラルダウンにつながっていました。そこで、ウェットな日本的な組織においては、その長所である「集団の連帯、一致団結による集団パワーの炸裂が高水準の成果を生み出す」というポイントを押さえた、集団単位のウェットな成果主義が新たに必要となる、と提案します。

日本のムラ社会を代表とする、ウェットで母性的な組織に向いた、新たな形の成果主義をここでは提案する。

従来、日本における成果主義は、組織内の個々のメンバーの能力や成果の高低を、一人の上司が査定して、メンバー間に処遇に格差を設ける形で、その成果を決定していた。

ウェットな社会では、従来の個人を評価単位としたドライな成果主義では、個人がバラバラに動いてグループの結束が崩れてしまう。また、よい成績を取った者への嫉妬が渦巻いてしまい、本来各人のエネルギーが向くべき、組織目標の達成にエネルギーが向かなくなる。

その点、従来の個人個人を別々に評価するタイプの成果主義は、欧米のようなドライな社会向けのものであり、個人間の連帯を重んじる日本や東アジアのようなウェットな社会には向かない。

ドライな個人単位の成果評価では、集団全体への貢献～利益を考えず、自分だけの個人的な利己的な損得で突っ走ってしまう。

個人単位のドライな成果主義は、人々の処遇にバラバラに差を付ける。人々の能力に差があることを前提とした処遇をする。そうすることで、組織の人々の間に格差が生じ、一体感が失せる。

これは、バラバラなよそ者同士を寄せ集めたドライな組織では有効だが、「ウチ」の者同士仲良く肩を並べることを指向するウェットな組織では、「ウチの連帯感、一体感」がなくなってしまい、成員の間に疎外感や冷たさが広がり、モラルダウンにつながる。

そこで、ウェットな組織の長所である「集団の連帯、一致団結による集団パワーの炸裂が高水準の成果を生み出す」というポイントを押さえた、集団単位のウェットな成果主義が新たに必要となる。

組織内での成果の高低に応じて処遇に差をつける成果主義は、決して、ドライなものばかりとは限られない。ウェットな成果主義も成り立ちうる。

それでは、ウェットな成果主義とは、どのようなものであろうか? それは、ドライな成果主義のように個人単位の利己的な成果評価をせず、小集団単位の成果評価を行うことである。

ウェットな成果主義では、個人を集団から切り離してバラバラに評価することをしない。仕事を個人に還元せず、集団単位で評価すること。

ウェットな社会の成員が持つ、集団への帰属、所属意識の強さ、同調、一体感をプラスの方向に生かす。また、集団間の対抗意識、競争意識を高めることで、仕事の品質を競争力のあるものへと向上させることができる。

日本の会社のようなウェットな組織は、成員に小さなグループを組ませて、互いに対抗させ、競争させると、強力な生産性を発揮する。これは、日本の製造業で、品質強化のためのTQC運動を会社内の従業員に小集団でやらせることで、製品製造品質を大いに高めた例が端的に示している。

このことを成果主義に当てはめれば、ウェットな組織では、成員に小さな集団を組ませて、その集団を成績評価の対象とすることで、集団内部の一致結束と、他集団への対抗、競争意識によって、集団

の生産性が向上するきっかけとすることができる。

要するに、組織内部の成績評価について、伝統的な農村における「部落根性」（集落単位で一致結束して、他の集落と敵対しようとすること。）を利用し、集団間の対抗意識と、集団内の一体化意識を醸成させるのであること。

同じ成果主義でも、ドライな成果主義における「この仕事は、オレ個人の成果だ」とする考え方から、よりウェットな「この仕事は、グループみんなの成果だ」とする考え方への転換を図る訳である。

従来、仕事はたいていはグループで行うのであるから、成果もそのまま個人に還元することは難しく、グループ単位で評価するのが適当だということになる。

成果を個々人に帰することをしないことで、当然出てくるのが、フリーライダーの問題である。要するに、自分は何も仕事をしないで、他人の仕事に寄生する成員の発生である。これについては、成果評価単位となる集団サイズを狭めることで、責任の分散を阻止できる。

そうすることで、集団に貢献しない者、すなわちフリーライダーを集団の中でより特定しやすくし、そうすることで、フリーライダーたちが、集団の中で自然といづらくなり、皆必死になってグループ貢献しようとするようになることを狙うことができる。

集団内部での成果配分は、例えばグループ内の自治に任せる場合でも、往々にして、成果の奪い合いになってしまう。声の大きい人が成果を皆横取りすることになってしまい、不公平感が高まると考えられる。その点、その集団に限定して、全員平等が望ましいと考える。要するに、集団間の評価の格差、差別はするが、集団内の評価は皆平等にするということである。

もしも、ある小集団が悪い成績をもらった場合、当然、その小集団

内での責任追及の矛先は、小集団の成績の足を引っ張った劣等生や、小集団の成績向上に寄与しなかったフリーライダーに向けられるということになる。

これは、小集団の成績がよかった場合でも同様である。フリーライダーや劣等生たちは、自分が仕事をしなかったにも関わらず、他の頑張った成員のおかげでよい成績を貰えるのであるが、その際に、頑張った成員から、「お前らがいい給料を貰えたのも、オレたちのおかげだぞ。ありがたく思えこと。」という冷たい蔑視の視線を受けて肩身の狭い思いをすることになること。

そうなると、小集団の成員は、皆そうした非難や蔑視の矛先に当たる当番にならないように、そうした立場に陥ることを回避するように、必死になって、小集団の業績向上に努めるであろう。そうした「他のグループ員に劣等視されたくない」というエネルギーが、会社や官庁全体の業績を押し上げる方向に作用する。

これは、他人の足を引っ張らないようにということを目的とする「減点主義的」な動機付けであるが、にもかかわらず、集団や組織にとっては、業績をプラスの方に押し上げる大きなエネルギーにつながるのである。

要するに、集団成果の高い評価に見合った個人的成果を上げていない者は、恥ずかしくなって、自然と業務に邁進して、高い個人成果をあげようとすると考えられる。

このように、ウェットな成果主義では、成員が、集団内で他人の足を引っ張らないように、マイナスの足を出さないように、自発的に頑張るようになることで、集団の一体感を保ちつつ、従来からの成果主義の目的であった、勤務評定への成果の考慮を同時に実現することができる。

小集団の成員は、グループに対して積極的に貢献することで、自らの成果を高めることができる。そうすることで、狭間、隙間業務や地味なサポート業務へも積極的に取り組む姿勢が作り出せると考えられる。

また、グループの一体感に包まれて、自分の容器サイズがグループ単位まで拡大し、自分がより大きなサイズのパワーを持つことができるように感じて、自分の能力ややる気が増大したように感じる。要するに、一人ではできないことも、皆と一体、一緒ならできるという気になり、グループ各員が集団のパワーを貰うことができるのである。

従来の個人単位の評価主義では、パワーが個人に還元される結果、パワーが全て個人サイズへと矮小化されてしまう。

成果や責任の個人還元は、個人がバラバラに動くドライな社会向けである。ウェットな社会では、今まで強力だったグループの結束を弱体化させ逆効果である。要するに、成果の奪い合い、取り合いで、グループ内の対人関係がギスギスし、モラルの低下につながるのである。また、各自がバラバラに動くことで、共通目標に向かっての一体感がなくなってしまう。また、自分のみの利益を追求し、グループ内の他の人を助けようという気が失せてしまう。

グループ員が、周囲と足並みを揃えての目標達成、成果の実現を行うことがウェットな成果主義の目指すところである。

「周りはどうなってもよい。一人だけハッピーになろう」という従来のドライな成果主義から、「周りと一緒に皆でハッピーになろう」というウェットな成果主義への切り替えが、ウェットな組織の活力を殺さずに、なおかつ成果評価による給与査定を導入することを可能にする。

組織がウェットなこと、ムラ社会的なことは、決して悪いことではない。個人単位での成果評価をすると、力を発揮できないが、成員相互の一体感、調和感、グループへの帰属意識、他グループへの対抗意識をくすぐる形で評価するようにすれば、成員は皆積極的にグループ貢献しようとし、その結果として、高い成果を生み出すと考えられる。

こうしたウェットなグループ指向の成果主義の問題点としては、。

（１）「一人の成果も皆のもの」として、能力ある人にぶら下がる無能力者やフリーライダー（何もしない寄生者。）が出ることである。そのことへの対策としては、そうした無能力者やフリーライダーをいづらくさせる雰囲気を作ることが考えられる。例えば、グループ員相互で、グループに対して何か貢献したかを相互にチェックして、何もしなかった人を「集団追放」にすることが考えられる。

（２）「自分たちのグループさえよければ、残りはどうなってもよい」とするセクショナリズムの台頭があげられる。これに対しては、全体組織への利益貢献のために必要なことで、他のグループが見逃していることを、積極的に自主的にすくわせて、「自分たちのグループの成果です」とアピールさせるように持っていく必要がある。

（３）地味な縁の下での目立たない仕事を、グループ単位で忌避する動きも生まれると考えられる。そうした、地味な一見損な役回りの、ゴミ清掃的な仕事をするグループを、「組織のために必要不可欠な重要な仕事をやってもらっている」ということで、特別に褒める、称える、評価する仕組みや制度が必要となる。

例えば、人のいやがる仕事をしたということに対する特別な感謝状や手当を支給するといったことを行うようにする必要がある。そのままでは、ばば抜きで各グループが自分のところではやろうとせず、互いに相手に押しつけ合う非建設的な態度を取ることになるからである。これを放っておくと、本来必要な仕事がなされなくなり、組織が機能不全を起こして潰れてしまうので、特に注意する必要がある。

小集団内部においては、リーダはいるが、課長や部長といった上長はいないようにする必要がある。そうすることで、集団内でのメンバーの対等平等性を確保することができる。

また、小集団の成果評価に当たっては、一ランク上の管理職が一人

で小集団評価を行うのではなく、管理職同士が一つのグループとなって、配下の複数の小集団評価をまとめて行うようにする。各小集団の評価を、1ランク上位の複数の管理職が1つのグループとなって行うことで、小集団が一人の管理職の完全な手下、私物になることを防ぐとともに、配下の各小集団の成果を、複数の管理職の眼を通すことでより客観的な評価視点から評価できるようにする。

その点、ウェットな集団ベースの成果主義においては、従来の組織のように、一つ～複数の小集団を、一人の管理職が単独で面倒を見る組織体制ではなく、新たに、同一階層の管理職同士（課クラスなら複数の課長同士、部クラスなら複数の部長同士）も「グループ化、チーム化」して、管理職グループとして、配下にいくつかの実働グループを持つ、各組織階層間をグループ、チーム同士がツリー化した形で組織のヒエラルキーを実現させることが必要となる。

要するに、1つの「役員チーム1」の配下に「部長チーム11」「部長チーム12」「部長チーム13」・・・がぶら下がり、一つの「部長チーム11」の下に、「課長チーム111」「課長チーム112」「課長チーム113」・・・がぶら下がり、一つの「課長チーム111」の下に、複数の実働小グループ、チームが「実働チーム1111」「実働チーム1112」「実働チーム1113」・・・といった形でぶら下がる、といった形を取るのである。

そして、成果評価に当たっては、「実働チーム1111」「実働チーム1112」・・・の評価を、「課長チーム111」が行い、「課長チーム111」「課長チーム112」・・・の評価を、「部長チーム11」が行い、「部長チーム11」「部長チーム12」・・・の評価を、「役員チーム1」が行うという形を取るようにする。

こうした集団成果主義においては、旧来の「ムラ社会」的な特性を損なわず、集団の一体感、連帯感を保ち、集団パワーを発揮させるというプラスの側面がある一方、陰湿な側面もある。それは、集団メンバーをクビにする方法である。

それは、集団成果主義では、仕事ができなくて、集団の評価を下げたメンバーが、他の集団メンバーに負い目を感じて自ら集団を辞め

たり、他の集団メンバーに責任を取らされたり、不満をぶつけられたりして、集団にいづらくなったり、追い出されることになる。そして、一つの集団から追い出されて、他のどの集団にも入れてもらえず、結局、組織内で他に入れてもらえる集団がなくなったら、その時点で、そのメンバーは、組織をクビになる。

要は、成果評価の低い集団では、責任会議を行うようにして、その期の集団の評価を下げたとして、低い評価の原因となったとして、集団から出て行ってもらうメンバーを決めなければならない。そうして排出されたメンバーは、他の集団に拾われなければ、その時点で、組織から追い出される、リストラされる、という仕組みを作る。

こうした仕組みを作ることで、集団メンバーは皆、自分の立場を悪くしないように必死で働くようになると考えられる。

結局、ウェットな組織での成果評価は、個人ではなく、小集団単位で成果評価を行うということに尽きる。それは「集団単位での成果の重視」「集団単位での成果主義」という言葉で要約できる。

その場合、小集団内各メンバーに集団が低い評価を取ることで、自分がその原因を作ったという責任を取らされて追い出された結果、自分がどこにも入れて貰えない、居場所がなくなる、といった「集団追放」の恐怖をなくすための「負の動機付け」が、結果的に、高い生産性と業績を組織に対してもたらすのである。

能力主義にも、個人単位の能力主義（個人能力主義）と、集団単位での能力主義（集団能力主義）が考えられる。能力主義は、要するに、能力に応じて別々の処遇をするということであるが、これをウェットな社会でそのまま、従来のように個人単位での能力評定の形でやると、自分と身近な他人との間に差がつくことになり、成員間の一体感や平等感の破壊につながり、個々人のモラルが低下し、組織は競争力を失ってしまう。

これを回避するために、集団単位で、「○○部A評価」「○○課B評価」「○○グループSA評価」のように成績を付けるようにすることで、集団内成員間の一体感、平等感は維持され、なおかつ集団間に扱いの格差が生じることで、「隣の○○グループに負けるな」という集団間の対抗意識に基づくグループ内共通目標が生まれやすくなり、グループ内部がより結束が強まり、より高い成果を出せるようになると考えられる。

(c)2004.9初出

ドライな経済、ウェットな経済

2004.7初出

ドライな社会と、ウェットな社会とでは、経済活動のあり方に違いがあり、従来のようなドライな欧米社会向けの「近代経済学」を、ウェットな、日本、東アジアのような社会に当てはめるのには無理があるのではないかと考えます。

ドライな社会と、ウェットな社会とでは、経済のメカニズム、経済活動のあり方に大きな差があると考えられる。

従来は、ドライな欧米社会原産の「近代経済学」が広く普遍的に全世界に当てはまると考えられてきたが、実際には、それらの理論は、日本、東アジアのようなウェットな社会には、当てはまらず、ウェットな社会には、それ専用の理論が必要であると、考えられる。

すなわち、ドライな社会とウェットな社会とでは、経済が違った原

理で動くので、それぞれ違った理論が必要となると考えられる。

つまり、資本をたくさん蓄積して（お金をたくさん儲けて）、より豊かになろうとする資本主義にも2通りあって、ドライな資本主義と、ウェットな資本主義とがあると言える。

ドライな社会の経済と、ウェットな社会の経済とでは、例えば、以下の点が違うと考えられる。

（１）ドライな社会が、機動力を重視し、持ち運ぶ物資の量をできるだけ軽くして減らそうとし、モノの移動、動きを重視する、「フロー重視」の姿勢を取る。それに対して、ウェットな社会は、一カ所に定着して動かず、物資の蓄積を重視する、「ストック重視」の姿勢を取る。

（２）ドライな社会が、企業間の、自由な競争を促進する。（自由主義。）それに対して、ウェットな社会では、企業間の動きを規制・統制し、談合、横並び、護送船団方式（規制主義）を取ろうとする。

（３）ドライな社会における、企業間の競争が、各企業の独自性、独創性を重んじ、互いにバラバラな違うことを行う、「相互拡散・離散型」になる。それに対して、ウェットな社会では、企業間の競争が、互いに同じこと、似たようなことをやって、抜きつ抜かれつの競争をする、「相互同調型」になる。

（４）ドライな社会では、企業組織は、成員にとって、金儲けのための一時的な道具、手段と割り切り、個人の利益を最優先にしたものとなる。それに対して、ウェットな社会では、企業組織は、成員にとって、全人的に一体化、没入する対象となり、「組織の永続的繁栄のため、全力を尽くす」ことになる。すなわち、個人よりも組織の利益を最優先にしたものとなる。

（５）ドライな社会では、消費者は、○○会社の製品は、自分に利益を与える手段として優れた機能を持っているので購入するという、「功利的」な価値観で対価を支払う。それに対して、ウェットな社会では、消費者は、○○会社が好きだから、という、企業との一体感、ないし、ブランドイメージ優先で製品を購入する。

（６）ドライな社会では、設備投資や株式購入が、互いに周囲に余り影響されず、独自の判断で行われる「独自投資」になる。それに対して、ウェットな社会では、周りがやっているから自分もという感じで投資や購入を行う、「同調投資」になる。

従来のドライな社会向けの「近代経済学」では、ウェットな社会の経済の動きに完全にフィットした説明に無理があると考えられ、ウェットな社会の実情に合致した、経済理論が必要なのではないか。

ドライな経済、ウェットな経済の対比は、ドライ＝欧米、ウェット＝日本、東アジアといった地域差以外にも、ドライ＝男性、ウェット＝女性、といった性差でも成立すると考えられる。

経済のドライさ、ウェットさには、性差の影響が実際には色濃く反映する。

男性優位なドライな経済では、今までにない技術を生み出してそれを元手に儲けようとして、高いリスクのある事業に挑戦しようとする「高リスク、ベンチャー型」になるのに対して、女性優位なウェットな経済では、既に安全性が確認された、リスクの少ない、確実性のあることをベースに儲けようとする「低リスク、安定型」になる。

日本社会

日本人は、ドライかウェットか？。

(c)1999.7-2006.4初出

性格・態度のドライ/ウェットさについて今回得られた知見を、既存の日本人論で記述されている内容と照合し、表にまとめましたこと。結果は、「日本的」＝「ウェット」でした。
また、日本的、東アジア的、欧米的な性格・態度が、それぞれどの程度ドライ・ウェットと感じられているかについてアンケート調査したところ、「日本的＝ウェット」「東アジア的＝ウェット」「欧米的＝ドライ」という関係を確認しました。
さらに、ドライ・ウェットな性格・態度のどちらか好むかをインターネット上で心理テスト化して、その回答結果を分析しましたこと。

以下では、日本人の対人関係における特徴（国民性）を、ウェット対ドライの次元から説明すること。

〔目次〕

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

ドライ化する日本

ー「消極的・自閉的ドライ」性格の拡大と社会の「セミ・ドライ」化ー
2005.05-2005.06初出

［要約]

現代の日本社会では、「消極的、自閉的ドライ」とでも称すべき、他人に干渉しない、他人との付き合いを避ける、自分の中に閉じこもる対人関係が増えている。

これは、従来ウェット一辺倒だった日本社会を、日本国憲法の導入等でドライ化しようと試みた結果、生じたものと言える。

日本人は、ウェットな相互干渉・監視の対人関係の網の目から自由になった心地よさ、快適さを楽しむ一方、他人との一体感の欠如に物足りないものを感じるという矛盾した心理を持っているのが現状である。

ドライな性格の持ち主には、2通りあると考えられる。

一つは、「積極的、自己主張的ドライ」とでも称すべきもので、個人がバラバラに自発的に動きながら、勝手な自己主張をして、互いにぶつかり合うタイプである。

もう一つは、「消極的、自閉的ドライ」とでも称すべきもので、他人に干渉しない、他人との付き合いを避ける、自分の中に閉じこもるというものである。

積極的、自己主張的ドライは、欧米社会に見られるものであり、一方、消極的、自閉的ドライは、最近の日本人に増えているタイプと考えられる。

消極的、自閉的ドライは、従来の、相互干渉的で、煩わしくて、プライバシーがない、ウェットな付き合いに対するアンチテーゼであり、他人との付き合いを切って自分の中に閉じこもる形で、周囲からの自立と自我の確立を遂げようとしていると考えられる。

こうした消極的・自閉的ドライは、戦後の日本が、精神的に、ドライな欧米に追いつこう、欧米人の個人主義や自由主義、プライバシー重視を模倣しようとした結果、生じたものと考えることもできる。

戦後の日本は、主にアメリカの手によって作られた、個人の尊重、表現・結社等の自由の確保、プライバシーの尊重といった内容をうたい文句にしたドライな性格を持つ「日本国憲法」の導入により、今までウェットだった社会全体をドライ化する試みを行ってきたと言える。その過程で、「望ましい価値」＝「ドライ」という見方が日本人全体に浸透した。

日本社会のドライ化の試みは、最初は、戦前の特高警察や隣組に代表されるような、相互監視とプライバシー干渉の網の目を断ち切るところから始まった。その結果、各自が、網の目から切り離されて自閉的に各自の枠内に閉じこもることで、個人の周囲からの自立を確保することになった。

そのように、ドライ化したと言っても、単に、ウェットな対人関係の網の目を切って各自の枠内に閉じこもっただけなので、見かけはドライだが、心のコアの部分はウェットなままである。そのため、人付き合いをすると、たちまちウェットな人間関係が再開してしまい、煩わしく、厄介なので、なるべく人付き合いが発生しないように、避けようとすることになり、その点、人間関係の構築が苦手な人が（特に若者に）増えたこと。

また、心の奥底ではウェットで、他人との触れ合い、一体感を望む心根が残ったままなので、それが、煩わしい人付き合いを避けようとするドライな行き方と矛盾、葛藤することになり、精神の分裂を来す危険性が増えた。

例えば、生まれつき社会のドライ化の波の中にいた日本の30、40代の男性女性が結婚しないのは、結婚することで、煩わしい親戚付き合いが増えたり、夫婦生活を行う中で、各自の独立やプライバシーが損なわれることが怖いと各自が考えているというのもあるのではないか。要は、ウェットな相互監視、プライバシー干渉のネットワークが復活することが怖いのである。

社会のドライ化が占領下の日本政府上層部による、上からの半强制的で権威主義的なウェットな動機によるものだったにせよ、それを受け入れた日本人は、半分ドライ化した社会が、それなりに心地よいことに気づき、社会のドライさを守って行こうと考えるようになったのではないか。現代日本人は、余計な相互干渉がなく、自由があることの尊さを、それなりに楽しんでいると考えられる。

しかし、一方、心のコアの部分では、ウェットさが残ったままである。要は、社会がドライ化したといっても、各自の心の中が完全にドライ化した訳ではなく、単に、ウェットだった社会において人々を束縛してきた、相互監視、プライバシー干渉の人間関係の網の目が切れて、個人がバラバラに切り離されただけであり、各個人の心の中には、従来の母性的なウェットな相互一体感を求める欲求が、心のコアの部分に残っている。その点、日本社会は、欧米のように完全にドライ化したのではなく、「セミ・ドライ化」（半分だけドライ化）に止まっていると考えられること。

そのため、対人関係を再度構築すると、また、従来のウェットなややこしい対人関係が復活してしまう。そのため、現代の日本人は、対人関係構築に対して積極的になれず、かといって、一人でいるのは寂しい、孤独だ、他人と一体感を持ちたいという、相反する心情に葛藤する日々を送っているのだと考えられる。

なお、日本社会のドライ化には、従来の、母親と子供が一緒に寝る母子密着型の育児から、ベビーベッドの導入による、母子間に隙間の空いた育児に移ったことも大きいのではないかと考えられる。要

するに、ベッドに母親から離して寝かされるようになることで、母親との間の一体感が以前ほどなくなり、大きく育った後も、母親を含めた他人との間に多少距離を置いてドライに付き合うことに、以前ほど抵抗がなくなったのではないか。

もっとも、欧米のように夫婦とは別の個室に子供を寝かせて、子供に完全自立を促すという完全ドライ化を推進するところまでは極端化しておらず、その点でも、日本の育児については、「セミ・ドライ化」という表現がふさわしいと考えられる。

2005.05-2005.06初出

ドライな法律・宗教としての日本国憲法

ー日本人の法律「信仰」ー
2005.10初出

日本国憲法は、個人の尊重、自由の尊重といったドライな性質を持っており、ともすれば、ウェット一辺倒になりがちな日本社会を適度に乾燥させる「除湿機」の役割を果たしています。それと同時に、日本国憲法は、ドライな欧米先進国の仲間入りをしようとする人々によって「信仰」の対象となっているとも言えます。そこでは、日本国憲法のウェットな「権威主義的受容」が起きていると考えられます。

1.「日本社会の除湿機」としての日本国憲法

日本国憲法は、ドライな法律である。

（１）個人の自由を尊重していること。表現の自由や、結社の自由を保障していることがこれに当たる。自由主義的であること。
（２）個人の独立、自律性を尊重していること。個々人の基本的人権の尊重や、プライバシーの尊重がこれに当たる。個人主義的であること。
といった性質を持っていること。

ドライな日本国憲法は、ともすれば、ウェット一辺倒になりがちな日本社会を適度に乾燥させる「除湿機」の役割を果たしている。

このように、社会が除湿されていることが、ドライ・ウェットな性格を診断する心理テストで回答者がドライな方を選択する一つの原因となっている。回答者は、憲法のことが頭にあり、憲法によって意識を除湿されている。憲法は、抽象的な原則の寄せ集めであり、回答者は、心理テストで原則的な質問項目に当たると、脊髄反射的にドライな方を選択すると考えられる。

ドライな憲法を信奉することにより、日本人は、自分たちは欧米化した、欧米の仲間に入ったと思っているが、実際には、日本社会は、欧米とは異質なドライ化が起きた「セミ・ドライ社会」になっている。

すなわち、現代の日本人は、ウェットな煩わしい人間関係、相互干渉を切って、余り人付き合いしなくなっている。そこでは、ニートの若者に限らず、引きこもり、自閉の一般化、普遍化が見られ、人間関係が希薄になっている。

その際、心のコアは母子一体感で育まれたウェットなままであり、人付き合いするとまた相互の和合、一体感を重んじるウェットな関係が復活する。そこが、欧米との違いであり、欧米人は、人付き合いしてもドライさを保っており、相手との意見の相違を気にせずに強烈な自己主張を行う。

2.信仰対象としての「日本国憲法」

日本においては、ドライな日本国憲法が、「信仰」の対象となっている。要は、日本国憲法は、脱亜入欧の格好の手段であり、欧米社会と一体化するために、ドライな憲法を信仰する。

日本人の頭の中には、「欧米一流、アジア二流」という格付け意識が存在し、自分たちもアメリカが作ったドライな憲法を積極的に信じることで、欧米並みの一流国になれるという意識がある。そこには、欧米への権威主義的追従の意識が見られる。（権威主義自体は、自分も、皆がそこに行きたがる主流派の一員に自分もなりたいという意識の現れであり、ウェットである。）

要は、「ドライさ」が宗教同様の信仰の対象になっている。ドライな態度を身につける、信じることで、欧米一流社会に近づく、仲間入りをすることができる、そうすることで生活が豊かになり幸せになれると考えているのである。

信仰対象である憲法は、そのまま鵜呑みにして信じるべきであり、その内容に疑念を抱いたり、変更しようとする試みは、不信心であるとして批判の対象となる。日本における「護憲勢力」は、「日本国憲法」を信ずる宗教の信者なのである。

日本国憲法は、日本におけるドライな思想の源泉であり、「ドライ・イデオロギー」としての役割を、日本人に対して果たすことになった。

性格のドライ・ウェットさを判定する心理テストで皆「ドライ」な方を選択するのは、自分がドライだと答えることで、自分は欧米と同一ランクになれたと思いたいからである。ドライと答えることで、欧米先進国の仲間入りをした気分を味わえること。ドライさが信仰、信心の対象となったと言える。

戦前は、国家神道が日本の全国民の信仰対象となっていた。戦後は、それが否定され、代わりに、アメリカの作った（押しつけた？）日本国憲法が、信仰の対象になっていると言える。日本国憲法の理念が、従来の国家神道に代わって新たな日本の国家宗教の座

につき、日本国憲法の条文が、その聖典の役割をしていると言える。

3.戦前社会へのアンチテーゼ

ドライな憲法への支持は、戦前のウェットな相互監視、言論自由統制の社会に対する嫌悪感もある。

戦前は、ウェットな社会体制で進んだ結果、敗戦となり、失敗した。一方、自分たちに勝ったアメリカはドライな自由な社会であった。そこで、成功するには、ドライな風を社会に入れるしかないという信念が日本人の中に生まれた。その際、ドライな風を入れることが日本社会が欧米並みになる早道であるとの認識もあった。

日本人は、欧米社会のドライさを真似ようと一生懸命になった。そこには、欧米に対する劣等感が奥底にある。

自分たちは本当はウェットなのだという潜在意識があり、ドライな態度を取っている人も、ホンネになると、ウェットな、ベタベタ、ドロドロした態度になる。

4.アメリカ支配の影響

日本国憲法は、日本を戦争で負かして支配権を握ったアメリカの手で作られたものである。

日本人にとって、アメリカは、自分たちの征服者であり、支配者であり、上位者である。支配者のアメリカの機嫌を取る、アメリカに自分たちを何とか受容してもらうには、アメリカの作った日本国憲法を、そのまま受け入れて、信じるしかなかった。

信じないと、アメリカにまた武力行使や制裁をされて、ひどい目に合わされること。一方、信じれば、ドライな欧米先進国の仲間入りができるという、おいしい話もある。そこで、日本人は、皆、一生

懸命に日本国憲法を信じたと言える。その信仰が、現在まで続いているのである。

これは、現在でも、日本の国土に、アメリカが軍隊を進駐させ、日本が反旗をひるがえした際には、いつでも首都等を攻撃できる状態にしており、日本を軍事的に支配下においていることも関係あるといえる。

5.ドライさの選択と戦後冷戦

日本人が、ドライな態度を好むのは、戦後の冷戦も影響している。日本はアメリカと共にドライな自由主義陣営に組入れられた。一方、ロシア、中国のような社会主義陣営は、全体主義的なウェットな雰囲気が支配していた。

日本社会の実体は、本当はウェットな社会主義陣営の方に近いのであるが、うわべだけでもドライな態度を取らないと、欧米自由主義の他国から、自分たちとは異質であるとして攻撃され仲間外れにされてしまう。また安全保障の傘から外されてしまうこと。

6.一流社会へのプライドとドライさ選択

欧米社会から異質と見なされることは、悲願である脱亜入欧、先進一流国への仲間入りに失敗したことを意味する。要は、自分たちが見下してきた二流のアジアと自分たちが同格であるということになってしまう。

自分たちは一流先進国の一員なのだというプライドを維持する面からは、ウェットな社会だと見られることは避けられなければならない。こうした自分たちは一流国になるんだという高いプライドが日本社会発展の原動力になっていると言える。ドライな憲法信奉もこの一流国を目指すプライドの高さと関係がある。

欧米社会の仲間入りをしたい、まねをしたい、世界の中で一流と認

められたいという強い願望、二流は嫌だという高いプライドが、実態はどうであれ、欧米文化に近いドライな方の選択肢を人々に選択させるのである。

ドライな方を選ぶのは、欧米の真似、追従であり、一流社会の仲間入りをしたい、一流と認められたいとうい高いプライドがなせる業である。そうした点、性格のドライ・ウェットさを診断する心理テストは、自分が一流先進国的、欧米的かどうかを試す踏み絵の役割を果たしていると言える。そこで、皆ウェットなコアを押し隠してドライな方を選ぼうとすること。要は、「ドライな方がカッコいい」のである。

7.日本国憲法批判とウェット回帰指向

一方、日本においては、日本国憲法はアメリカが作って押しつけたものだとして排撃する人々も存在する。彼らは、日本の敗戦、失敗を心理的に認めることができない（そういう点、別の意味でプライドの高い人々であること。）こと。あるいは、戦前の日本社会を諦めきれないこと。戦前の日本社会は、天皇を中心、頂点に社会が一体化して、心を一つにしてまとまっていた。また、軍事的に華やかに活躍し、領土をたくさん持っていたこと。そうした過去の栄光を踏みにじったアメリカへの恨みが、彼らを日本国憲法批判へと向かわせていると言える。

日本国憲法を批判する人たちは、心の中のウェットさへの回帰指向、母性指向を率直に認める人々である。すなわち、相互の一体感、和合、協調を重んじる、伝統的な農耕民的感情（日本〜東アジアに共通する東洋的な感情）を重んじること。彼らにとって、日本国憲法は、ドライで遊牧・牧畜民的過ぎると映るのである。実はこうした気持ちは、日本国憲法を信仰する側の人たちも心の奥底では持っているのであるが、それを口にしてしまうと、欧米先進国の一員になったという心理状態から引きずり降ろされてしまうので、認めないのである。

日本国憲法は、人々をドライにバラバラに自分勝手にしてしまい、

社会の結束、一体感がなくなる。各自が、利己的に自分本位で動き、その結果、社会全体への奉仕の心がなくなってしまう。こうした批判が、伝統的ウェット指向の人々からは、なされてきている。

8.ドライな憲法の「権威主義的受容」とウェットさの持続

一方、日本国憲法の導入により社会がドライ化したと言っても、欧米そのままのドライ化はしていない、心のコアはウェットなままである、とする見方も成り立つ。要は、日本国憲法のようなドライな原則を、ウェットさを保ったまま受容しているとする見方であること。これは、日本国憲法の受容のあり方がウェットな「権威主義的受容」である点に現れている。

要は、日本国憲法のようなドライな原則は、世界の中の一流、主流である欧米によって担われている考え方であり、それゆえ、世界の勢力ある主流派に入りたい、仲間入りしたいと考える一心で日本国憲法を受容している。あくまで、ドライな社会が権威あるから、優位に立っているから「真似よう」「後追いしよう」とする考えである。

こうした、ドライな社会が創造した新思想や新技術を権威ある前例として真似る、権威主義や後追い、物真似根性は、主流派指向、同調指向、前例指向につながり、ウェットである。こうした、権威主義、同調・前例指向が息づいている限り、いくら見かけはドライな態度を選んでいるように見えても、根本的には、心の中はウェットなままであると言える。

日本人は、ドライな欧米社会が衰退して権威を失墜すれば、真似するのを止めてウェット回帰しようとすると考えられる。ドライになろうとするのは、あくまで、現時点ではドライな欧米社会が世界の主流を占めているからであり、その条件が消え去れば、ドライであろうとする必要は消失する。その点、日本人は、日本国憲法導入前と後で、心の奥底はウェットなままであり、そんなに変わったとも言えないのである。

9.国民の相互一体感確保の手段としての憲法

現代日本においては、日本国憲法は、国民がそれについて共通に賛同し、ウェットな相互一体感を確保するための「共同信仰」の対象となっていると言える。
本来の日本国憲法作成者のアメリカのようなドライな社会においては、人々は、互いに他人と違う、個性的な意見を持ち、それをバラバラに強烈に自己主張することが普通である。だからこそ、日本国憲法は、個人の独立や自由意思が尊重される文面になっているのである。

しかし、もともと母性的とされる度合いが強いウェットな日本社会では、そうした個人が独立してバラバラに、互いに相違する意見をぶつけ合うのは、相互の一体感を損なうものとして、「和合の精神に反する」として忌み嫌われる。

そこで、日本国憲法の受容においても、憲法が本来持っているドライな空気は巧みに骨抜きされ、「皆が一斉に一緒に信じる対象」として、互いの一体感を確保、強化するための手段、お題目として、戦前の国家神道の代わりに、「共同信仰」されているのが現状である。同じ憲法を信奉していれば、互いに同意する関係に入りやすく、相互の一体感を確保しやすくなるからであること。そうした、同じ憲法を「共同信仰」することで得られる一体感が日本人にとっては何よりも気持ちよいものなのである。日本人にとって、憲法は、信心しながら周りと一緒に唱えるお経の一種なのである。

日本国憲法を国民が皆で信仰することで、国家全体としての一体感も得ることができる。

10.アメリカへの心理的依存、甘えの達成

日本人は、日本国憲法を信じることで、憲法作成したアメリカへの心理的依存、甘えも同時に達成できる。

もともと、他人に対する心理的依存の度合いの強い日本人は、対外的にも、どこかに頼りたい、甘えたいという意識を強く持っている。

日本を戦争で負かしたアメリカが、頼りがいがある国のように日本人の心には映り、いつしか、「アメリカの後に付いていけば大丈夫」「アメリカなら何とかしてくれる」といった、依存心、甘えをアメリカに対して持つようになった。

日本国憲法を信じることは、それを作ったアメリカに心理的に寄り掛かり、頼りきることも意味している。日本国民が皆で日本国憲法を信奉することで、日本国全体が、アメリカに対する甘え、依存の感情を満足させているとも言える。

依存心の強さが、ウェットさにつながり、独立、自立心の強さがドライさにつながるとすれば、ウェットで依存的な日本が、独立、自立心の強いアメリカに、心理的に頼りきっているのを示すのが、日本国民による「日本国憲法信仰」の実態である。

ここで問題なのは、自由独立が好きなドライなアメリカは、日本がベタベタ依存してくるのを内心余り快く思っておらず、日本にある程度独立性、自立性を持ってもらいたいと思っていることである。アメリカが、寄り掛かってくる日本を受け止めるだけの余裕がある状態が続けばよいが、財政危機とか、あるいは国同士の仲違いとかで、現在の依存（日本）と受け止め（アメリカ）の関係が、崩れることも考えられる。

2005初出

日本人と権威主義

2006.02-2006.04初出

日本人のインテリは、自分のことを権威主義者だと言われると顔を真っ赤にして怒り、否定します。しかし、それは、欧米権威筋の学者が権威主義を批判の対象としたのが世界標準の定説になっているからであり、彼ら日本人のインテリは、本当は欧米権威筋の意見をひたすら後追いするウェットな権威主義者なのではないかと考えられます。

1.日本人の欧米権威筋への追従について
現代の日本人、特に大学とかにいる学者や、一般知識人、文化人と言われる人たちは、権威主義を否定し批判する。また、自分のことを権威主義者だと言われると顔を真っ赤にして怒り出し、自分は権威主義者ではないと必死になって主張する。

では、権威主義を否定する彼ら日本人が、権威主義者ではないのかと言うと、実は権威主義者だと捉える方が理に適っている。

と言うのは、彼ら日本人が権威主義を否定するのは、そもそも彼らが依拠する欧米権威筋の学者が、権威主義を否定、批判しているからである。

ここで、欧米権威筋というのは、欧米の学界において、著名な学説を提唱した、提唱している学者のことを指す。

欧米の社会学界においては、アドルノやフロムといったユダヤ人学者が、戦前ドイツでユダヤ人らを迫害したナチス・ドイツとその信奉者たちを、「権威主義」だとレッテルを貼って批判し、それが、ナチス・ドイツの性格的特徴をうまく説明した学説であるとして一躍有名となった。この点、アドルノやフロムは著名な学説を提唱した権威ある学者ということになり、その評価は現時点でも変わっていない。この点、欧米の権威筋の学者が権威主義を批判、否定していることになる。

この欧米権威筋による権威主義否定が、欧米のステータスや権威に弱く、その後を追いかけ、崇拝することに熱心な日本の知識人たちの頭の中に導入されると、面白い現象が起きる。

日本人のインテリは、欧米の権威筋が権威主義を否定しているので、欧米権威筋に依拠する自分たちも、権威主義を批判、否定しないといけないと思い込んで、欧米権威筋の「権威主義否定」の学説をそのまま真似て直輸入して、自分たちも権威主義批判を行う。

要は、日本人のインテリは、自分が権威主義者だからこそ、（欧米）権威筋の出した権威主義否定の学説をそのまま信仰するする形で、権威主義を否定するのであること。と言うか、「権威主義的に」権威主義を否定すること。権威主義に忠実に則る形で、権威主義を否定するのであること。この点、「権威主義者が、権威主義的思考で、権威主義を否定する」という、妙に矛盾した事態が日本では起きているのである。これは、「（権威主義者による、）権威主義の権威主義的批判」現象と呼べること。

日本人インテリが権威主義を否定するのは、欧米権威筋の学者による権威主義批判が世界標準の定説になっているからであり、彼ら日本人のインテリは、本当は欧米権威筋の意見をひたすら後追いする権威主義者なのではないかと考えられる。

日本人のインテリは、欧米権威筋の学者が言うこと、ないし欧米学界におけるメインストリームの学説を、正しい説だとして信じ込む。そして、欧米権威筋の学説を、そのまま忠実に学習し、模倣しよう、いち早く日本に紹介して、その学説の日本における第一人者として日本国内で認められ、尊敬されようと懸命になること。欧米権威筋の学説は、教科書とかに大きく載っていることが多いので、それが定説だと考える。そして、欧米権威筋の学説（欧米で常識になっている学説、潮流）に反する学説を日本人が提案すると、あるいは、欧米権威筋の学説を日本人が批判すると、「欧米の権威ある先生に楯突くとは何様のつもりだ。身の程知らずもいい加減にしろ。」と、馬鹿にして足を引っ張る、無視するのが通例である。これが、日本人のインテリが取っている「権威主義」的態度であり、ごく普通に見られる。

ところが、自分たちがそうして馬鹿にしたところの、既存の欧米学

説を批判した日本人の学説が、いったん欧米学界で受け入れられると、日本人のインテリは面白い行動をする。すなわち、慌てて旧来の態度を変えて、その馬鹿にしたはずの日本人の学説を持ち上げ、称賛するようになること。馬鹿にし、無視する対象とした日本人同胞のことを一転「大先生」と持ち上げ、自分もその後を追おうと必死になるのだ。ひいては、「自分と同じ日本人が世界に認められた」として、いったん馬鹿にしたはずの日本人同胞のことを誇りに思うまでになる。無論、彼らにとって、「世界」とは、「先進国である権威ある欧米」のことである。特に、日本人がノーベル賞を取ると、インテリだけでなく、一般大衆も一緒になって、称賛の嵐、ブームが起きる。取る前は、「○○の奴」とかいって馬鹿にしていたのに（この辺の事情は、江崎玲於奈や西澤潤一の著書を見ると載っている。）こと。

これから、欧米学界の定説に反する学説を出そうとする日本人は、欧米学界に自説を出す前に、日本人関係者に自分の学説を説明し、反応を録音しておくと良いと思う。（多分、多くの関係者から、そんな学説ダメに決まっていると突き返されると思うが。）欧米学界に学説を出した後で、自分の説が欧米学界に受け入れられた時に、受け入れられる前と後で、日本人関係者の反応が違うことが分かることもさることながら、その日本人関係者が、欧米で受け入れられた説を、かつて否定していたことに関する決定的な証拠を持つことになり、その日本人関係者の弱みを握ったことになる。これは、その日本人関係者が、著名な大学の教授だったりすると、取引材料として大きな効力を持つと言える。

日本人は、中央官庁みたいな「お上」に弱く、従順であろうとする。しかし、日本人にとっては、欧米（特にアメリカ）は、更にその上を行く「スーパーお上」である。なので、日本人は、欧米でメジャーな学説や運動については、中央官庁の役人も含めて、ペコペコ崇拝、信仰するのである。あるいは、欧米通の日本人は、欧米でメジャーな考えを引き合いに出して、「お上」である日本政府の動向を批判することが多い。（「欧米では既にこうなっているのに、日本はまだまだこのような状態のままだ。日本政府は駄目だね。」という感じであること。）しかし、これも実は、欧米崇拝の権威主義であることが多いのではないか。「スーパーお上（欧米）」の威光を以て「お上（日本政府）」を制するという感じであること。

こうした権威主義は、「自らもみんながそこに集まる、権威筋の主流派に属して、メジャーで光の当たる安全なところにいて、いい思いをしたい」という、ウェットで女性優位な考えと言える。

厄介なのは、こうした欧米崇拝のウェットな権威主義者と、根っからの欧米的なドライな考えの持ち主とを区別することが難しいことである。彼らは、両方とも、権威主義を批判し、ウェットな態度を批判するので、見た目には見分けが付かないのである。ウェットな権威主義者の側も、権威主義否定の学説を信仰しており、自分が権威主義であることを認めると、自分が「欧米（＝権威主義に反対であり、ドライ）＝一流」と同等の格付けであったのが格下げになってしまうので決して認めない。彼らは、心理テストとかでも、どちらも同じように、欧米的なドライな方を自分に合っているとして選択する。この2者を何らかの方法で区別することが必要であり、今後の課題である。

2.日本国内の権威筋の存在について

日本の学者は、欧米学説のデッドコピーとその解釈、いじり、小改良に終始する場合が多い。この場合、欧米学説をいじるというのは、複数の欧米の学者が互いに違うことを言っているので、その整合性を取ろうとする行動である。

もともと、欧米の学者の学説は、あくまで、一個人の学説であり、それは、間違っているかも知れず、乗り越えるべき面のある学説なのであるが、日本の学者には、そうしたことについての視点や気づきが足りない。要は、欧米で主流の学説を、「お上＝権威筋の説」「大先生の説」として、無批判に、崇拝、信仰し、受け入れ、取り入れようとする面がある。

日本の学者たちには、自分で、既存の欧米での学説を打ち壊して、それを乗り越える学説を出そうとする試みを出すことを、自分たちの内部で否定し、自分たちが権威筋と見なす、主流の欧米の学説の

批判を許さない面がある。

なぜ、こうした現象が起きるかと言えば、そうした欧米で主流の学説について、日本国内の権威筋の学者がそれに依拠しているためである。依拠するというか、せざるを得ないのは、日本国内の権威筋の頭だけでは、欧米学説のような、ドライで革新性に富んだ、意表を突く、スケールの大きい学説を自らは生み出すことができないからである。

なぜ生み出すことができないかと言えば、彼ら日本の権威筋には、心の根本的なところで何よりもプライドが高く、人の風評に傷つきやすく、冒険して失敗して笑い物になることを恐れるために、とにかく安全で、当たり障りのない、既に確立された発見発明や技術等をひたすら頭に入れ、習得して博識、博学になることで、前例、しきたりの生き字引と化して、「自分は何でも知っている、できる先生、先達である」として、皆の尊敬を集めよう、周囲を未熟な後輩と見なして先輩風を吹かせて実効支配しようという、女性優位、退嬰的な事なかれ主義的で、なおかつ人の前に出よう、偉ぶろうとする出しゃばりの魂胆があるからだ。

日本の学者は、原則として、何らかの、出身大学や師弟関係、先輩後輩関係に基づく、縁故集団の中に入って生きている。学閥や、似た考えに染まった同士がつるんで形成する派閥が相変わらず幅を利かせており、その中の有力者（教授、先輩）が、日本国内における権威筋として、他の成員に向けて睨みを利かせているているのである。

要は、日本の学者は、親代わりの権威筋との上下関係に基づく、ウェットな縁故集団、疑似家族集団の中にどっぷり浸って生きている。こうした集団は、親子、上下関係からなる一種の「系列」として捉えることができる。日本の学者は、何らかの有力な権威筋系列の中に入っていないと、アカデミックポストの配分を受けられず、生活できなくなり、生きていけないのである。逆らうと、アカデミックポストを奪われたり、系列の外に飛ばされたりして、生きていけないのであること。

日本の学者は、自分の身の安全、保身についての意識が敏感である。そうした身の安全は、現在の権威筋を批判することで、脅かさ

れる。批判することで、権威筋からその行動を批判され、日本国内で仲間外れとされる恐れがある。要は、自分が今入っている権威筋のグループから外される恐れがあり、そうなると、どこからも仲間に入れてもらえず、孤立して、生きていけなくなるので、批判しないのである。

日本の学者は、自分の所属する権威筋系列に対して、異議を唱えたり、逆らうことが難しい。そして、日本の権威筋が、欧米学説をデッドコピーしている状況が、権威筋とその弟子、後輩の関係、師弟関係を通じて、権威筋系列内の世代間を通じて脈々と受け継がれているのが、日本の学界の現状であると考えられる。

日本の学界においては、権威筋に逆らうと、人事上の報復が待っているので、権威筋の学説に逆らえない。要は、逆らうと、アカデミックポストの配分が受けられなくなり、学者として生きていけなくなるのである。

日本の学者は、欧米学説＝権威ある学説をデッドコピーしたものを、小改良し、少しだけ変えたり、他の権威ある学説と比較するのに終始している。欧米の学説を微細にうがって、解読、解釈するのに懸命になるのであるが、それは、あたかも、「聖書」「お経」の解読と同じである。要は、欧米の学説が、権威ある教典、経典と見なされているのである。

それは、要は、日本国内でアカデミックポストの人事権を握る、植民地支配大学の教授＝権威筋がそうした欧米学説のデッドコピーに終始しており、日本の学者たちは、彼らに忠誠を誓っていることを示すため、それに倣った行動を取っているのである。

要は、日本の学者にとっては、自分の論文等における学説、主張内容が、自分が属する権威筋への忠誠があるかどうかの踏み絵となっているのである。そこでは、権威筋と主張内容が、基本的に同じであるか、継承しているかどうかが重要であり、論文の主張内容そのものは、二の次になっている。

日本の学者にとっては、欧米権威筋や、それに依拠し、デッドコピーを行おうとする自分の先生、先輩が唱えたものは絶対的な重み

を持つ。

ある日本人学者の論文内容が、欧米権威筋のデッドコピーとその小改良となるのは、彼が、日本学界の権威筋を中心とする系列の一員である証拠である。論文のスタイルから、彼が、権威筋に忠誠を誓い、身を守られていることが分かる。ただし、微細な内容の相違により、派閥が違ったりする。

3.女性優位な権威主義
日本人の権威主義は、ある点、女性優位な特徴を持っている。

それは、権威に寄り添うことによって、自分の身の安全が保たれる、大過なく生きて行けるという、保身や、事なかれ主義に結びついている。

また、主流派のいるところに自分もいないと、孤独で寂しいという、主流派との一体感を求める考えとも関係ある。

あるいは、誰か大きな存在の元に寄り掛かり、甘えたい、依存したいという、依頼心の強さとも関係がある。

権威あるものと一体化することで、精神的なバックボーンを支えられる気分となって、気が大きくなり、初めて、人前で発言する勇気が出るといった面もある。

男性の場合は、既存の学説を叩き壊したり、潰したりして、代わりに自分の学説を、種付けしようとする。権威に逆らい、潰し、自由になることを目指し、場合によっては、自分が新たな権威者になって、他人に言うことを聞かせることを目指す。

これに対して、女性は、既存の権威者に従順に従って、権威者をそのまま忠実に継承して、後継の権威者となることを目指す。要は、自分の属する系列の権威筋に逆らおうとせず、既存の権威筋の学説をそのまま継承しようとするのであること。

この点、日本の学者の取っている態度は、明らかに、守られる側の

性のものであり、女性優位である。

4.ウェット、母性的な権威主義とドライ、父性的な権威主義との区別について

従来、欧米で権威主義の定義とされてきた、ドイツ人の権威主義と、上記で述べてきた日本人の権威主義とは、同じ権威主義という言葉を使っていても、その中身は大きく違うと考えられる。

ドイツ人の権威主義は、命令と服従の上下関係の連鎖として捉えられる。要は、上下の命令系統が厳格、正確、機械的に守られること、上位者の命令が下位者にとって絶対的であり、それを可能な限り忠実に守ることが彼らの中では自己目的化しているのである。彼らにとっては、指示や規則が、上から下へと、徹底されること、直行することが、命令する側にとっても、それを守る側にとっても快感なのである。

こうした態度は、上位者が、下位者のことを、自らの目標達成のための道具、ツールとして、突き放して眺めるものである。また、上位者が定めた教条、因習、形式が、カッチリと、機械的（メカニカル）に、隅々まで絶対的な教えとして下々へ原理主義的に浸透することを目指していること。社会全体が、巨大装置のメカのような大きな指示伝達、上意下達のための機械、歯車装置として捉えられる。

これは、キリスト教のような、父なる神の原理主義と軌を一にする男性優位、父性的な、ドライなものであり、ドイツ人の権威主義は、ドライな権威主義、父性的、父権的権威主義と呼べる。

これに対して、日本人の権威主義は、自分も主流派の一員に属することで、保身、身の安全、一体感が欲しいという欲求に根ざしている。要は、権威筋が中心となって主宰するウェットな輪、グループの中に自分も加えてもらい、その中の一員でいたい、止まりたい。権威筋系列の一員でいることで、権威筋が優先的に分捕ってくる便宜にあやかって、おいしい思い、温もりに満ちた思いをしたい。権威筋に身の安全を保証してもらい、庇護してもらい、依頼心や甘え

を満足したい、という思いが強いのである。

権威筋の主宰する輪から外れると、身の安全が保証されない。寒風が吹きすさぶ悪条件が待っているので、抜けようにも抜けられず、権威筋の言うことにペコペコ従って、身の安全を図りたい、という気持ちが強くある。

権威筋のグループ、系列の一員に入れてもらう、ウチに入ることで、排他的な一体感が保証され、温かな疑似家族集団の中に入った感じとなる。

この場合、権威筋は、母性的なウェットな存在として立ち現れ、日本人の持つ、母なるもの、大きな温かいものに包含されたい、互いに一体感を持ちたいという欲求を満足させる点、日本人の権威主義は、ウェットな権威主義、母性的、母権的権威主義と呼べる。

従来は、この2つの権威主義は、日本においては、区別されず、混同されて使用されてきた。というか、権威主義という用語は、日本国内では、現在も専ら、ドイツ人のようなドライな父性的権威主義の方を指しており、ウェットな母性的権威主義についての思慮が足りていない。今後は、別物として分けて捉える必要がある。

5.権威主義とプライドの高さについて

権威主義者は、一般にプライドが高い。自分を権威付けたがるのは、自分を高く位置づけたがることと関係しているからである。あるいは、結婚見合いとかにおいて、学歴や資格などで自分のことを箔付けしたがるのも、権威主義の現れである。

日本人は、自分のことを欧米みたいに、世界で一流と呼ばれたい、一流国の仲間入りをして、アジアの他の国を見下したい、差を付けたいと願って、今まで努力してきた節があり、その点、日本は、「高プライド社会」と呼べる。日本人のこうした、一流願望も、一流評価の持つ高い権威への憧れとして、権威主義と呼べる。

2006初出

男性・女性

男性・女性、どちらの性格がよりウェットか（ドライか）？

(c)1999-2005初出

性格・態度のドライ/ウェットさについて今回得られた知見を、既存の男女間の行動様式の性差に関する学説内容と照合し、表にまとめましたこと。結果は、「女性優位」＝「ウェット」、「男性優位」＝「ドライ」でした。
また、ドライ/ウェットなアンケート項目の一部について、左右どちらの項目がより「女々しく」感じられるか、インターネット上で調査した結果をまとめました。結果は、「女々しい」＝「ウェット」でした。
さらに、アンケート項目の一部を心理テスト化して、その回答結果を分析しましたこと。今回は、回答傾向に性差はあまり見られませんでした。

以下では、男女の間の対人行動面における性差を、ウェット対ドライの次元から説明する。

（上記の内容の詳細については、資料編を参照して下さい。）

［行動のウェットさと生物学的貴重性（まとめの表）］

表 52

ドライ・ウェットさと男女関係

2003.3-2005.3初出

互いに性的魅力によって惹かれ合う男女関係は、相互に近接し、引き合う関係にある点、ウェットと言えるのではないかと考えます。

ウェットな対人関係は、相互に近接し、引き合うことを指向すると捉えられるが、この知見を男女の関係に当てはめた場合、遺伝的に互いに惹かれ合うように決められている男女関係は、基本的にウェットであると言える。

まず、異性同士、性的な魅力に惹かれて、互いに親しく付き合い、愛し合うようになることを、男性、女性それぞれが求め合う。このように、恋愛関係に入ることは、互いに引き付け合い、くっつき合うことを指向する点、ウェットである。

異性関係は、また、互いに自分にない性質や能力を相手の中に発見し合い、夫婦関係のように、相互依存の関係に入ることを指向する。このように、互いにもたれ合い、依存し合うことを指向する点、ウェットであること。

さらに、男女の恋愛は、その途中で、セックス、子作り作業が不可避となる。セックスの前段階では、肌と肌のふれあい、愛撫が求められ、互いに接触し合うのがウェットな感じをもたらす。また、接吻は口同士の、セックス本番は性器同士の相互接続・結合であり、そうした相互の接合を指向する行動は、ウェットである。また、その際に分泌される、接吻時の唾液、性交時の精液、愛液は、すべてベタベタした粘液であり、その点でも、相互にベタベタくっつくことを指向するウェットさに結びつく。また、セックスの絶頂感を得るのも、相手との一体感に基づく面が大きく、相手との一体・融合性を重んずるウェットな対人関係と関係がある。

また、男女は、結婚により、互いに一体感を持って、共同の家庭を運営していくようになるが、そうした結婚生活は、相互一体性、共同・集団性を持っていると言え、それらは全てウェットな対人関係に結びついている。

(c)2003-2005初出

恋愛、結婚、セックスの本質とウェットさ

2006.01-2006.07初出

恋愛、結婚は、「切れる」「別れる」といった言葉が結婚式でNGワードであることに示されるように、男女相互の一体化、結合を目指すウェットなものと言えます。

恋愛は、特定男女間で、心理的関係が親密化して、互いにくっつき合い、セックス等で一体化することを目指す点、ウェットである。

恋愛関係に入ると、ドライでそっけない態度ではなく、頻繁にメールのやりとりや、面会、付き合いを重ねるようになり、対人関係がウェット化すると言える。

恋愛関係が安定化、恒常化して、互いに配偶者の関係に入り、子供作りに励む結婚も、相互の関係が長期にわたってずっと安定して結合、一体化することを目指す点、ウェットである。
例えば、結婚式で、「別れる、切れる」と言うと、縁起が悪いと言われて、NGワードとされる。

この場合、「別れる」「切れる」共に、ドライさを表す言葉であること。

子作りの作業であるセックスについても、男女が互いに性器を粘液とともにドッキングさせて一体化する点、また一緒にオーガズムを迎える点、ウェットである。

また、男性の送り出した精子が、それを迎える女性の卵子とドッキングして受精することも、一体化、結合を起こす点、ウェットである。

結婚して、セックスを重ねて生まれてきた子供にとっても、両親が仲良く、心理的に一体化、協調していることが、何よりも必要であると言える。

この点、恋愛、結婚の本質は、男女相互の一体化、結合といったウェットなものであると言える。

2006初出

日本男性解放論（日本女性学・フェミニズム批判）

2000/07～初出

性格・態度のドライ/ウェットさについての知見を、日本人の国民性、および女性の行動様式と照合した結果から、「日本的＝ウェット＝女性優位」という相関関係を導き出しましたこと。このことから、「日本社会は、女性の勢力が男性のそれを上回る、女性優位の社会である」「日本社会で抑圧され解放の対象となるのは男性である」という、「日本＝男性中心社会」という通説とは正反対の結果を得ました。

詳細については、筆者による「日本男性解放論」の著作文書を参考にして下さい。

ドライウェイ・ウェットウェイ両方の必要性と性差

2009.11初出

人間、人類が生き残っていくには、男性の行くドライウェイと女性の行くウェットウェイの両方が必要だと述べています。

人間、人類が生き残っていくには、。

・ウェット＝液体ウェイ＝女
・ドライ＝気体ウェイ＝男

のどちらか一方の道だけではダメで、生存して行くには、2つとも必要である。これは、人類進化の結果、男女が分化して、それぞれ対照的なドライ、ウェットな性格を持つようになり、相互補完するかたちになっていることが証明している。
必要に応じて使い分けていくことが必要である。
男女の性差が必要な本当の理由がこれである。

男性、女性と社会的湿度

2009.11初出

人間社会において男性が社会的除湿器の役割を果たし、女性が加湿器の役割を果たしていると述べています。

男性は、社会をドライにする、社会的除湿器の役割を果たす。

女性は、社会に潤いを与える、社会的加湿器の役割を果たす。

その他

アンケート調査へのWeb利用について

(c)2001.2初出

行動様式のドライ・ウェットさを解明する上で、webを利用したアンケート調査は大きな役割を果たしました。今後、webを利用したアンケート調査は次第に普及していくと考えられます。そこで、現時点で考えられる、アンケート調査へのweb利用がもたらす長所・短所、ノウハウや今後の展望などについて、手短にまとめました。

当ページでは、心理学・社会学分野のアンケート調査にwebを用いることについて、長所・短所や、ノウハウ、今後の展望などを簡単にまとめてみた。

１.
（設備面）
・アンケートページを開設し、検索エンジンなどに登録するだけの少ない手間で大量の回答者数を集めることができる。
・ペーパーレスであり、郵送の手間や費用が必要ない。物理的制約から解放されること。
・低予算で可能であること。質問票の印刷費とか、郵送費、コーディング・アルバイトの雇用費など一切かからないこと。無料ホームページサービスとか使用可能であること。
・ネットワークにつながっている相手なら誰でもどこにいてもアンケートに回答できる。

（回答面）
・回答結果のコーディングの手間が必要ない。調査票からのコーディング作業を一切しなくて済むこと。回答結果をすぐにオンラインデータとして活用できること。
・回答時に、回答受け付けのCGIプログラムに少し手を入れるだけ

で、全ての回答に対して、各項目記入漏れや不適切な入力を自動的にチェックできること。
・条件付き質問への対応が自動化できる。回答項目生成および回答受け付けCGIに少し手を加えることにより、「no.○の質問で△と答えた方のみ、この質問に答えてくださいこと。」といった回答者の適切な質問項目への誘導が自動的に行える。
・回答がインタラクティブであり、回答者にとって楽しい。心理テストのように、自分の回答に対して、目に見える形での反応がすぐに返ってくるというのは、紙ベースでは考えられない優れた点である。
・ネットワークにつながっていれば、どこにいても、回答状況の管理や質問項目の変更・新設などが一発でできる。

（分析面）
・簡単な回答分析CGIプログラムを組むことで、分析ページに単にアクセス・リロードするだけで、その時点までのデータの集計結果を即座にまとめることができる。その時々の回答状況（回答者数、回答者の属性、回答内容。具体的には、何人分集まったか、性別、年齢などの属性分布はどうか、回答内容や傾向はどうかなど。）が瞬時に一発で分かる。
・集計結果の統計的検定を行なうCGIプログラムも比較的容易に組むことができるので、分析CGIプログラムのページにアクセスした瞬間に、どの調査項目で有意差が出たか、あるいは出つつあるかとかが、いとも簡単に判明する。今までのように、データを統計解析ソフトに入力して分析コマンドを選ぶまで、どんな結果が出るか全く分からない、といった状態からは、簡単に解放される。

２．
・アンケートwebページを開設しているサーバーがダウンすると、アンケートが全く行えなくなる。
・回答データは電子的なものであるため、回答タイミングの重複などが原因でいとも簡単に消失してしまう。回答データのバックアップを取っていないと、一挙に数千件のorderでデータがなくなってしまい、最初からやり直しになってしまう。

・CGIプログラムを作成する技能（perl言語などでのプログラミング）が必要となる。ただし、これは、企業向けの複雑なsolutionに比べれば、初歩的なレベルで十分okであり、それほど習得に手間を要するものではない。

３．
webを用いたアンケート調査では、ランダムサンプリングをしない場合でも、全国〜全世界からの不特定多数の回答が得られる。その点、回答者のばらつき・多様性・相互無関連性を確保できること。ランダムサンプリングをしない場合、従来の有意抽出法同様、調査結果から母集団の姿を統計的に類推できない欠点があるとされる。しかし、ランダムサンプリングした場合と結果を比較してみることを繰り返した結果、差がなければ、わざわざランダムサンプリングしないでもよいことが分かり、回答者募集の手間が大幅に省けるであろう。
この場合、調査内容を予め公表して回答を募集することで、特定の調査内容に興味がある回答者に絞って集めることができる。研究テーマに真剣に取り組んでくれる人を回答者としてよりすぐることができる。回答者は、検索エンジンなどでページに興味を持って集まってくる不特定多数者である。これは、従来の社会心理学のアンケート調査で行われて来た、自分の興味ある内容の授業に出席する大学生に対して回答用紙を配るのと、方法的には大差ない。
ちなみに当サイトの2000年までの調査結果は、全てこの方法で得られたものである。

４．
今後は、国や自治体でも、住民台帳を電子化すると共に、住民への行政情報配布や連絡手段として、住民データに電子メールアドレスを添付するようになると考えられる。
電子メールアドレス付き住民台帳から、対象者を電子メールアドレス付きで、ランダムに抽出し、抽出した対象者に電子メールで回答

依頼を行い、対象住民に所定のアンケートwebページにアクセスしてもらうだけで回答データを収集できること。
自治体が住民に電子メールアドレスを割り当て、調査者は自治体から許可を得た上で、そのデータベース台帳から電子メールアドレスをランダムサンプリングする、ということになる。
不適切なアンケート調査が行われるのを防ぐためにも、自治体側で調査目的などを審査するのが望ましい。また、得られた住民の電子メールアドレスを他用途に転用しないことも誓約させた方がよい。
許可がおりたら、住民台帳データベースにアクセスし、氏名＝メールアドレスの組をランダムサンプリングする。webページアドレスを書き込んだアンケート調査依頼メールを、ランダムサンプリングで抽出した相手に送ること。回答者に、指定されたwebアンケートページにアクセスしてもらい、ニックネームなどで回答してもらうこと。
こうした仕組みは現時点ではまだ確立していないが、インターネットなどの情報通信技術の高速な普及により、近い将来可能になることは間違いない。これにより、webを用いたアンケート調査が主流になっていくであろう。

５．
調査内容とインターネットを利用する・しないとで相互に関連がない場合、回答手段としてwebを使うことによる回答結果のバイアスは生じないと考えられる。ただし、現時点（2001年初頭）では、まだインターネットの普及は、従来の郵便や電話ほどには進んでいない。特に、農村部や高齢者層、低所得者層で普及は遅れていると考えられる。したがって、現状でインターネットを用いた社会調査を行った場合、こうした普及の遅れた層の意見などが、調査結果に反映されない恐れがある。逆に言えば、こうした社会的な格差とは関係ない、心理的・生理的な感性データを得るのにwebをか回答手段とするのは、特に問題ないと言える。

６．

アンケートでは、同一の回答者が、いったん提出した回答内容を2、3度と修正して提出し直すことがしばしばある。こうした重複回答への対応は、メールアドレス・ニックネームを記入させることで、一つ一つの回答を他人のものと区別できるようにする。また、回答時刻データを自動記録するようにして、近い時刻に酷似した回答パターンがあった場合は、その回答データをはねることも、一人が複数回答者になりすます、いたずら回答への対処として、考えられる。
なお、回答されたタイミングで回答者の重複をチェックすると、回答が一度に多数重なったときに、データファイルが消失する場合がある。そこで、回答記録時には、何も考えずに重複を許して、一回のみデータ書き込みをする。別に作成した分析用CGIの方で後から重複をチェックしてデータを一意にすること。

「ドライ・ウェット」の国語辞書における定義

従来、「ドライ・ウェット」とは、どのような意味であると、捉えられてきたのでしょうか？。
筆者の手元にある国語辞書を中心にまとめてみましたこと。
●広辞苑第4版1991岩波書店
ドライ
1 乾いているさま。無味乾燥のさま。
2 物事をわりきったさま。感情的でなく合理的・現実的なさま。非情。
ウェット
情にもろいさま。感傷的なさま。
●日本語大辞典1989講談社
ドライ

1 水気のないさま。乾いているさま。
2 無味乾燥で、おもしろみのないさま。
3 けろりとしたさま。
4 （酒類の）辛口であるさま。
ウェット
義理・人情などにこだわるさま。感傷的なさま。
●大辞泉1995小学館
ドライ
1 水気がないこと。水分が少ないこと。また、そのさま。
2ア 風情などがなく、ありのままであること。また、そのさま。無味乾燥。
2イ そっけないこと。感傷・人情などに動かされないで、合理的に割り切ること。また、そのさま。
3 洋酒などの辛口。
ウェット
1 ぬれたり湿ったりしていること。また、そのさま。
2 情にもろいこと。またそのさま（英語ではsentimental。）こと。
●現代用語の基礎知識1997自由国民社
ドライ
1 乾燥したこと。
2 アルコールの入っていない状態。
3 （和製用法で）割り切った直線的な生活態度、ものの考え方、行動の型。
4 辛口の酒。
ウェット
記載なしこと。
●新明解国語辞典第三版1981三省堂
ドライ
1 乾いたこと。
2-1 世間一般のしきたりや生活感情にこだわらず、あっさり割り切って物事をする様子。
2-2 無味乾燥。おもしろくない様子。
3-1 会などで、酒の類を出さないこと。
3-2 甘味を加えていない洋酒の称。
ウェット
情にもろく、感傷的な様子。

(c)1997初出

従来の理学辞書における気体・液体・分子間力などの定義

従来の理学分野において、気体・液体・分子間力などは、どのように定義されてきたのでしょうか？。
筆者の手元にある理学辞書を中心にまとめてみました。

●物理学辞典改訂版1992培風館
液体
巨視的な物質は気体、液体、固体のいずれかの状態で存在するが、液体の特徴は気体と同様に容器によって自由に形を変えるけれども気体と違って体積はほぼ一定なことである。気体の場合のように容器が密閉である必要はなく、また、液体を圧縮するには気体の場合よりはるかに高い圧力を必要とする。
微視的に見ると、液体の構成粒子である分子（あるいは原子）はまわりの分子（あるいは原子）とほぼ一定の距離を保ち、強い力を及ぼしあいながら運動していること。
局所的に短時間では粒子は固体に似た配列をとり、それがくずれて別の固体的配置がまた形成されるものと考えられる。事実、短い時間内に起きる現象では、液体も固体のようにふるまう。

気体
巨視的な物質は気体、液体、固体のいずれかの状態で存在するが、気体の特徴は形が容器によって自由に変わるばかりでなく、容器に閉じ込めておかないと体積がいくらでも膨張してしまうことである。膨張しようとする圧力は、気体の体積が小さいほど、また温度が高いほど、高くなる。
気体のこのような性質は、気体を構成する分子または原子の運動エネルギーが非常に大きく、互いに及ぼしあう引力を振り切ってほと

んど自由に飛び回るために現れるものである。
通常の気体のほかに、たとえば金属中で電流の運び手となる電子も同様の意味で気体を形成しているとみなすことができる。この場合には、原子核が電子に及ぼす電気的な引力によって、電子気体の膨張がくい止められているのである。

表_1

「動作パターンＷ」ウェットな人・物の動き＝相互近接（一体化・融合）、定着（定住）	「動作パターンＤ」ドライな人・物の動き＝相互離散、移動

トップページに戻ること。

表_2

動作パターンＷ	動作パターンＤ

トップページに戻ること。

表_3

［法則］

人間は、。
（１）動作パターンＤに出会う、当たる、触れると、ドライ（Dry、乾いたこと。）と感じること。
（２）動作パターンＷに出会う、当たる、触れると、ウェット（Wet、湿ったこと。）と感じること。

動作パターンＤ、動作パターンＷは、分子群、物体群の動き～人間関係に共通に当てはまる、普遍的なパターンである。

トップページに戻ること。

表_4

分析視点	動作パターンＷ	動作パターンＤ
１．	近接	離散
（１）近づきこと。	くっつくこと。近づくこと。	サラリと離れること。離反すること。
（２）つながり	連続すること。つながること。癒着すること。	（関係を）切断すること。
（３）着床	付くこと。粘着すること。	はがれること。
（４）まとわりつきこと。	まとわりつくこと。なつくこと。	別れること。
（５）集合	集まること。密度が高い。	散ること。密度が低い。
（６）一つ	一体・融合化すること。一つになること。	バラバラであること。互いに独立していること。
（７）同じ	同じであること。	違うこと。別の途を歩むこと。
２．	低速	高速
（１）速度	ゆっくりであること。	速いこと。
例	液体分子運動。 つきたての餅。	気体分子運動。 シリカゲルの粒、ビー玉。

トップページに戻ること。

表_5

分析視点	動作パターンＷ	動作パターンＤ
（１）近づきこと。	くっつくこと。近づくこと。	サラリと離れること。離反すること。
（２）つながり	連続すること。つながること。癒着すること。	（関係を）切断すること。
（３）着床	付くこと。粘着すること。	はがれること。
（４）まとわりつきこと。	まとわりつくこと。なつくこと。	別れること。
（５）集合	集まること。密度が高い。	散ること。密度が低い。
（６）一つ	一体・融合化すること。一つになること。	バラバラであること。互いに独立していること。
（７）同じ	同じであること。	違うこと。別の途を歩むこと。
（８）速度	ゆっくりであること。	速いこと。
例	液体分子運動。 つきたての餅。	気体分子運動。 シリカゲルの粒、ビー玉。

トップページに戻ること。

表_6

液体分子（ウェット）＝動作パターンＷ	気体分子（ドライ）＝動作パターンＤ
集団主義	個人主義
規制主義	自由主義
反プライバシー	プライバシー尊重

・・・	・・・

トップページに戻ること。

表_7

	ウェット（液体）	ドライ（気体）
〔A〕	〔近接指向〕	
〔A1〕	〔他粒子との位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに近づかず、単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いに存在する位置が近い、同一である（画一である）こと。	多様性の尊重（異質指向） 互いに存在する位置が多様に離れている。
[A1.4]	同調指向 存在する位置を互いに合わせようとすること。	反同調指向 存在する位置を互いに合わせようとしないこと。
[A1.5]	主流指向（権威主義） 自分の存在位置について、主流派の地点に行こうとすること。	非主流指向（反権威主義） 自分の存在位置について少数派で構わないとすること。
〔A2〕	〔他粒子との関係・縁故の構築〕	
[A2.1]	関係指向 他粒子のところに行こうとすること。	非関係指向 他粒子のいない空間に行こうとすること。
[A2.2]	縁故指向 他粒子との間に結びつきを持つこと。	非縁故指向 他粒子との間に結びつきを持

		たないこと。（結びつきを切ること。）
〔A3〕	〔運動決定の自由〕	
[A3.1]	規制主義 互いの間に働く引力によって束縛され、自由に動けないこと。	自由主義 互いの間に引力が働かず、自由に動き回れる。
〔A4〕	〔運動の自己決定〕	
[A4.1]	相互依存指向 互いの間に働く引力により、互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いの間に引力が働かず、互いに独立・自立して行動する。
[A4.2]	他律指向 互いの間に働く引力により、自分の進行方向を、単独では決められない。	自律指向 自分単独で自分の進行方向を決められること。
〔A5〕	〔プライバシーの確保〕	
[A5.1]	反プライバシー 互いに近づき、くっつき合うため、プライバシーを侵害し合うこと。（プライベートな空間を持てないこと。）	プライバシー尊重 互いに離れるため、自分のプライベートな空間を確保できること。
〔A6〕	〔運動の明快さや合理性の確保〕	
[A6.1]	あいまい指向 互いの間に引力が働くことで、自分の進行方向があいまいとなる。	明快（反あいまい）指向 自分の進行方向を率直・明快に保てること。
[A6.2]	非合理指向 互いの間に引力が働くことで、進行方向の面で、割り切れない。	合理指向 自分の進行方向を、合理的に、割り切ったものにできること。

〔A 7〕	〔集団の開放性の確保〕	
[A7.1]	閉鎖指向 形成する集団が外に向かって閉じている。（集団に、表面張力が働くこと。）	開放指向 形成する集団が外に向かって開いている。（集団に、表面張力がないこと。）
〔B〕	〔運動・活動・移動指向〕	
〔B 1〕	〔動的エネルギー・移動性の確保〕	
[B1.1]	静的指向 自発的に動き回れないこと。	動的指向 自発的に動き回れること。
[B1.2]	定着指向 今いる地点に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる地点に定着せず絶えず移動しようとすること。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

トップページに戻ること。

表_8

	ウェット	ドライ
〔A〕	〔心理的近接指向〕	
〔A 1〕	〔他者との心理的位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いを画一的な枠にはめようとすること。	多様性の尊重（異質指向） 互いの多様性を重んじること。

[A1.4]	同調指向 取る行動を互いに合わせようとすること。	反同調指向 取る行動を互いに合わせようとしないこと。
[A1.5]	主流指向（権威主義） 自分の取る意見について（すでに認められたこと。）	非主流指向（反権威主義） 自分の取る意見について少数派で構わないとすること。
〔A2〕	〔他者との関係・縁故の構築〕	
[A2.1]	関係指向 他者との間に積極的に人間関係を持とうとすること。	非関係指向 他者との間であまり人間関係を持とうとしないこと。
[A2.2]	縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。	非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。
〔A3〕	〔行動決定の自由〕	
[A3.1]	規制主義 互いに行動を規制し合うこと。	自由主義 互いに自由に行動しようとすること。（自由に動き回ろうとすること。）
〔A4〕	〔行動の自己決定〕	
[A4.1]	相互依存指向 互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いに独立・自立して行動すること。
[A4.2]	他律指向 自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。	自律指向 自分で自分の意思を決められること。
〔A5〕	〔プライバシーの確保〕	
[A5.1]	反プライバシー 互いのプライバシーを重んじないこと。	プライバシー尊重 互いのプライバシーを重んじること。
〔A	〔行動の明快さや合理性の確保〕	

6〕		
[A6.1]	あいまい指向 自分の取る意見がが率直・明快でない。	明快（反あいまい）指向 自分の取る意見が率直・明快である。
[A6.2]	非合理指向 物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。	合理指向 物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。
〔A7〕	**〔集団の開放性の確保〕**	
[A7.1]	閉鎖指向 閉鎖的な集団にいるのを好むこと。	開放指向 開放的な集団にいるのを好むこと。
〔B〕	**〔心理的運動・活動・移動指向〕**	
〔B1〕	**〔動的エネルギー・移動性の確保〕**	
[B1.1]	静的指向 自発的に動き回ろうとしないこと。	動的指向 自発的に動き回ろうとすること。
[B1.2]	定着指向 今いる土地や組織に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

トップページに戻ること。

表_9

分子が。	ウェット（液体的）	ドライ（気体的）
（1）近づきこと。	くっつくこと。近づくこと。	サラリと離れること。離反すること。
（2）つながり	連続すること。つながること。癒着すること。	（関係を）切断すること。

（3）着床	粘着すること。	はがれること。
（4）まとわりつきこと。	まとわりつくこと。	手離れがよい。すっとすること。
（5）集合	集まること。密度が高い。	散ること。密度が低い。
（6）一つ	一体・融合化すること。	バラバラであること。互いに独立していること。
（7）同じ・仲良し	調和、和合すること。	衝突、対立すること。
例	つきたての餅	シリカゲルの粒、ビー玉

トップページに戻ること。

表_10

粒子（分子～他者）が。	ウェット＝湿ったこと。	ドライ＝乾いたこと。
（1）近づきこと。	近づくこと。	無関心であること。
（2）つながり	連続すること。つながること。癒着すること。共有すること。	（関係を）切断すること。
（3）着床	くっつくこと。粘着すること。	サラリと離れること。離反すること。はがれること。取れること。外れること。
（4）まとわりつきこと。	まとわりつくこと。	手離れがよい。すっとすること。
（5）集合	集まること。密度が高い。	散ること。密度が低い。
（6）一つ	一体・融合化すること。共同すること。	バラバラであること。互いに独立していること。

（７）同じ・仲良し	調和、和合すること。	不協和であること。衝突、対立すること。
物体	つきたての餅	シリカゲルの粒
人間	子供と母親。恋人同士。	たまたま乗り合わせた電車の乗客

トップページに戻ること。

表_11

	ウェット	ドライ
〔Ａ〕	〔心理的近接指向〕	
〔Ａ１〕	〔他者との心理的位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いを画一的な枠にはめようとすること。	多様性の尊重（異質指向） 互いの多様性を重んじること。
[A1.4]	同調指向 取る行動を互いに合わせようとすること。	反同調指向 取る行動を互いに合わせようとしないこと。
[A1.5]	主流指向（権威主義） 自分の取る意見について（すでに認められたこと。）	非主流指向（反権威主義） 自分の取る意見について少数派で構わないとすること。
〔Ａ２〕	〔他者との関係・縁故の構築〕	
[A2.1]	関係指向 他者との間に積極的に人間	非関係指向 他者との間であまり人間関

	関係を持とうとすること。	係を持とうとしないこと。
［A2.2］	縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。	非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。
〔Ａ３〕	〔行動決定の自由〕	
［A3.1］	規制主義 互いに行動を規制し合うこと。	自由主義 互いに自由に行動しようとすること。（自由に動き回ろうとすること。）
〔Ａ４〕	〔行動の自己決定〕	
［A4.1］	相互依存指向 互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いに独立・自立して行動すること。
［A4.2］	他律指向 自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。	自律指向 自分で自分の意思を決められること。
〔Ａ５〕	〔プライバシーの確保〕	
［A5.1］	反プライバシー 互いのプライバシーを重んじないこと。	プライバシー尊重 互いのプライバシーを重んじること。
〔Ａ６〕	〔行動の明快さや合理性の確保〕	
［A6.1］	あいまい指向 自分の取る意見がが率直・明快でない。	明快（反あいまい）指向 自分の取る意見が率直・明快である。
［A6.2］	非合理指向 物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。	合理指向 物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。
〔Ａ７〕	〔集団の開放性の確保〕	
［A7.1］	閉鎖指向 閉鎖的な集団にいるのを好	開放指向 開放的な集団にいるのを好

	むこと。	むこと。
〔Ｂ〕	〔心理的運動・活動・移動指向〕	
〔Ｂ１〕	〔動的エネルギー・移動性の確保〕	
[B1.1]	静的指向 自発的に動き回ろうとしないこと。	動的指向 自発的に動き回ろうとすること。
[B1.2]	定着指向 今いる土地や組織に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

トップページに戻ること。

表_12

	ウェット	ドライ
〔Ａ〕	〔心理的近接指向〕	
〔Ａ１〕	〔他者との心理的位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いを画一的な枠にはめようとすること。	多様性の尊重（異質指向） 互いの多様性を重んじること。
[A1.4]	同調指向 取る行動を互いに合わせようとすること。	反同調指向 取る行動を互いに合わせようとしないこと。

［A1.5］	主流指向（権威主義） 自分の取る意見について（すでに認められたこと。）	非主流指向（反権威主義） 自分の取る意見について少数派で構わないとすること。
〔Ａ２〕	〔他者との関係・縁故の構築〕	
［A2.1］	関係指向 他者との間に積極的に人間関係を持とうとすること。	非関係指向 他者との間であまり人間関係を持とうとしないこと。
［A2.2］	縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。	非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。
〔Ａ３〕	〔行動決定の自由〕	
［A3.1］	規制主義 互いに行動を規制し合うこと。	自由主義 互いに自由に行動しようとすること。（自由に動き回ろうとすること。）
〔Ａ４〕	〔行動の自己決定〕	
［A4.1］	相互依存指向 互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いに独立・自立して行動すること。
［A4.2］	他律指向 自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。	自律指向 自分で自分の意思を決められること。
〔Ａ５〕	〔プライバシーの確保〕	
［A5.1］	反プライバシー 互いのプライバシーを重んじないこと。	プライバシー尊重 互いのプライバシーを重んじること。
〔Ａ６〕	〔行動の明快さや合理性の確保〕	
［A6.1］	あいまい指向 自分の取る意見がが率直・明快でない。	明快（反あいまい）指向 自分の取る意見が率直・明快である。

［A6.2］	非合理指向 物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。	合理指向 物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。
〔Ａ７〕	〔集団の開放性の確保〕	
［A7.1］	閉鎖指向 閉鎖的な集団にいるのを好むこと。	開放指向 開放的な集団にいるのを好むこと。
〔Ｂ〕	〔心理的運動・活動・移動指向〕	
〔Ｂ１〕	〔動的エネルギー・移動性の確保〕	
［B1.1］	静的指向 自発的に動き回ろうとしないこと。	動的指向 自発的に動き回ろうとすること。
［B1.2］	定着指向 今いる土地や組織に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。
［B1.3］	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

トップページに戻ること。

表_13

A1.1	ドライ＝個人主義	ウェット＝集団主義
定義	互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。	互いに集まり、まとまって動こうとすること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	単独・ひとりで行動するのを好むこと。	集団・団体で行動するのを好むこと。
2	他者からの分離・独立を好むこと。	他者との一体化・融合を好むこと。
3	自分個人の利益を優先するこ	自分の属する集団の利益を

	と。	（個人の利益よりも。）
4	ひとりで他者とは別の道を歩むのを好む。	ひとりで他者とは別の道を歩むのを好まない。

トップページに戻ること。

表_14

A1.2	ドライ＝広域分散指向	ウェット＝密集指向
定義	互いに広い領域に散らばること。	互いに狭い領域に密集すること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	広い空間に分散していようとすること。	狭い空間に密集していようとすること。
2	一人ずつ個室にいるのを好むこと。	多人数で大部屋にいるのを好むこと。
3	ものの見方が客観的である。	客観的でないこと。
4	ものごとを見る視野が広い。	ものごとを見る視野が狭い。

トップページに戻ること。

表_15

A1.3	ドライ＝多様性の尊重（異質指向）	ウェット＝画一（同質）指向
定義	互いの多様性を重んじること。	互いを画一的な枠にはめようとすること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	横並びであろうとしないこと。	周囲の他人と横並びであろうとすること。
2	自分とは異なる意見を持つ人に対して寛容である。	自分とは異なる意見を持つ人に対して寛容でない。
3	人々の多様性を認めること。	人々を画一的な枠にはめようとすること。

トップページに戻ること。

表_16

A1.4	ドライ＝反同調指向	ウェット＝同調指向
定義	取る行動を互いに合わせようとしないこと。	取る行動を互いに合わせようとすること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	周囲の皆と違ったことをしようとすること。	周囲の皆と同じことをしようとすること。
2	他人の真似をするのを好まないこと。	他人の真似をするのを好むこと。
3	個性的であろうとすること。	没個性的であろうとすること。

トップページに戻ること。

表_17

A1.5	ドライ＝非主流指向（反権威主義）	ウェット＝主流指向（権威主義）
定義	自分の取る意見について主流でなくて構わないとすること。	自分の取る意見について（すでに認められたこと。）
No.	［例↓］	［例↓］
1	少数派に属するので構わないとすること。	主流派の一員でいようとすること。
2		
3	ブランドにこだわらないこと。	物を購入するときブランドにこだわること。

トップページに戻ること。

表_18

A2.1	ドライ＝非関係・切断指向	ウェット＝関係・接続指向

定義	他者との間であまり人間関係を持とうとしないこと。（人間関係を切ろうとすること。）	他者との間に積極的に人間関係を持とう、つながろうとすること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	他人との触れ合いを好まないこと。	他人との触れ合いを好むこと。
2	周囲の他者に良い印象を与えようとは特に気にしない。	周囲の他者に良い印象を与えようといつも気にすること。
3	人付き合いのあり方がよそよそしい。	人付き合いのあり方が親密である。
4	自分の内面を他者に開示したがらないこと。	自分の内面を他者に開示したがること。

トップページに戻ること。

表_19

A2.2	ドライ＝非縁故指向	ウェット＝縁故指向
定義	他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。	既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	縁故（コネ）を重んじないこと。	人付き合いで縁故（コネ）を重んじること。
2	親分子分関係を好まないこと。	人付き合いで親分子分関係を好むこと。

トップページに戻ること。

表_20

A3.1	ドライ＝自由主義	ウェット＝規制主義
定義	互いに自由に行動しようとすること。（自由に動き回ろう	互いに行動を規制し合うこと。

	とすること。）	
No.	［例↓］	［例↓］
1	行動の自由を規制されることを好まないこと。	行動の自由を規制されることを好むこと。
2	互いに自由に行動することを許すこと。	互いに相手の行動を牽制し合うこと。（互いに足を引っ張り合うこと。）
3	互いに束縛しあうのを好まないこと。	互いに束縛しあうのを好むこと。
4	抜け駆けを許すこと。	集団内で一人だけの抜け駆けを許さないこと。
5	失敗を犯した本人のみの責任とすること。	一人の犯した失敗でも周囲の仲間との連帯責任とする。

トップページに戻ること。

表_21

A4.1	ドライ＝独立・自立指向	ウェット＝相互依存指向
定義	互いに独立・自立して行動すること。	互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）
No.	［例↓］	［例↓］
1	互いに自立しているのを好むこと。	人付き合いで互いにもたれあうのを好むこと。
2	独立心が強い。	依頼心が強い。
3	甘えを嫌うこと。	互いに甘えあおうとすること。
4	派閥を作るのを嫌うこと。	派閥を作りたがること。

トップページに戻ること。

表_22

A4.2	ドライ＝自律指向	ウェット＝他律指向
定義	自分で自分の意思を決めら	自分の意思を自分だけでは決め

	れること。	られず、周囲に決定を任せる。
No.	［例↓］	［例↓］
1	自分の意見を持っていること。	
2	周囲の流行に振り回されないこと。（周囲の流行に左右されないこと。）	周囲の流行に振り回されること。
3	自分の今後の進路を自分一人で決められること。	自分の今後の進路を自分一人で決められないこと。（周囲の影響を受けること。）

トップページに戻ること。

表_23

A5.1	ドライ＝プライバシー尊重	ウェット＝反プライバシー
定義	互いのプライバシーを重んじること。	互いのプライバシーを重んじないこと。
No.	［例↓］	［例↓］
1	他人のプライバシーには干渉しない。	他人のプライバシーに介入したがること。
2	互いに監視しあうのを好まないこと。	互いに監視しあうのを好むこと。
3	他人のうわさ話をするのを好まないこと。	他人のうわさ話をするのを好むこと。
4	当局への密告を好まないこと。	当局への密告を好むこと。
5	自分が他人にどう見られるかを気にしない。	自分が他人にどう見られるかを気にする。
6	化粧をするのを好まないこと。	化粧をするのを好むこと。

トップページに戻ること。

表_24

A6.1	ドライ＝反あいまい（明快）指向	ウェット＝あいまい指向

定義	自分の取る意見が率直・明快である。	自分の取る意見がが率直・明快でない。
No.	［例↓］	［例↓］
1	物の言い方が率直である。	遠回し・婉曲であること。
2	物事の白黒をはっきりさせようとすること。	あいまいなままにとどめようとすること。
3	自分の今後の進路をはっきりさせようとすること。	あいまいなままにとどめようとすること。

トップページに戻ること。

表_25

A.6.2	ドライ＝合理指向	ウェット＝非合理指向
定義	物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。	物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。
No.	［例↓］	［例↓］
1	考え方が合理的である。	非合理的であること。
2	考え方が科学的である。	非科学的であること。
3	宗教を信じないこと。	宗教を信じること。

トップページに戻ること。

表_26

A7.1	ドライ＝開放指向	ウェット＝閉鎖指向
定義	開放的な集団にいるのを好むこと。	閉鎖的な集団にいるのを好むこと。
No.	［例↓］	［例↓］
1	開放的な人間関係を好むこと。	閉鎖的な人間関係を好むこと。
2	身内・外の区別にこだわらないこと。	人付き合いで身内・外の区別にこだわること。

3	集団外のことにも関心を持つ。	自分の属する集団内のことにしか関心がない。
4	仲間内以外の人も受け入れる。	付き合いで仲間内以外の人を排除すること。

トップページに戻ること。

表_27

B1.1	ドライ＝動的指向	ウェット＝静的指向
定義	よく動き回ろうとすること。	動き回ろうとしないこと。
No.	［例↓］	［例↓］
1	動作がすばやい。	動作がゆっくりである。
2	物事の決定のテンポが速い。	テンポがゆっくりである。
3	行動が積極的である。	行動が消極的である。

トップページに戻ること。

表_28

B1.2	ドライ＝非定着（移動・拡散）指向	ウェット＝定着指向
定義	今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。	今いる土地や組織に定着しようとすること。
No.	［例↓］	［例↓］
1	絶えず移動すること。移動生活。遊牧生活。それらを好むこと。	一カ所に定住すること。定住生活。農耕生活。それらを好むこと。
2	人事が流動的なことを好む。	人事が停滞していることを好む。
3	短期的契約関係を好むこと。	長期にわたる取引関係を作るのを好むこと。
4	常に新分野へと拡散しようと	いつまでも今までいた分野にと

	すること。	どまろうとする。

トップページに戻ること。

表_29

B1.3	ドライ＝独創指向	ウェット＝前例指向
定義	誰も行ったことのない未知の領域に進もうとする。	自分が今までいた領域にとどまろうとする。
No.	［例↓］	［例↓］
1	行動の基準を新規の独創的なアイデアに求めること。	行動の基準を既存のしきたり・前例に求めること。
2	前人未踏のことにもあえて挑戦する。	前例があることだけをしようとする。
3	現状を変革するのを好むこと。	現状をそのまま追認するのを好むこと。

トップページに戻ること。

表_30

分析視点	動作パターンW	動作パターンD
（1）近づきこと。	くっつくこと。近づくこと。	サラリと離れること。離反すること。
（2）つながり	連続すること。つながること。癒着すること。	（関係を）切断すること。
（3）着床	付くこと。粘着すること。	はがれること。
（4）まとわりつきこと。	まとわりつくこと。なつくこと。	別れること。
（5）集合	集まること。密度が高い。	散ること。密度が低い。
（6）一つ	一体・融合化すること。一つになること。	バラバラであること。互いに独立していること。
（7）同じ	同じであること。	違うこと。別の途を歩む

		こと。
（８）速度	ゆっくりであること。	速いこと。
例	液体分子運動。 つきたての餅。	気体分子運動。 シリカゲルの粒、ビー玉。

トップページに戻ること。

表_31

液体分子（ウェット） ＝動作パターンＷ	気体分子（ドライ） ＝動作パターンＤ
集団主義	個人主義
規制主義	自由主義
反プライバシー	プライバシー尊重
・・・	・・・

トップページに戻ること。

表_32

	ウェット（液体）	ドライ（気体）
〔Ａ〕	〔近接指向〕	
〔Ａ１〕	〔他粒子との位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに近づかず、単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いに存在する位置が近い、	多様性の尊重（異質指向） 互いに存在する位置が多様に離れている。

	同一である（画一である）こと。	
[A1.4]	同調指向 存在する位置を互いに合わせようとすること。	反同調指向 存在する位置を互いに合わせようとしないこと。
[A1.5]	主流指向（権威主義） 自分の存在位置について、主流派の地点に行こうとすること。	非主流指向（反権威主義） 自分の存在位置について少数派で構わないとすること。
〔A2〕	**〔他粒子との関係・縁故の構築〕**	
[A2.1]	関係指向 他粒子のところに行こうとすること。	非関係指向 他粒子のいない空間に行こうとすること。
[A2.2]	縁故指向 他粒子との間に結びつきを持つこと。	非縁故指向 他粒子との間に結びつきを持たないこと。（結びつきを切ること。）
〔A3〕	**〔運動決定の自由〕**	
[A3.1]	規制主義 互いの間に働く引力によって束縛され、自由に動けないこと。	自由主義 互いの間に引力が働かず、自由に動き回れる。
〔A4〕	**〔運動の自己決定〕**	
[A4.1]	相互依存指向 互いの間に働く引力により、互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いの間に引力が働かず、互いに独立・自立して行動する。
[A4.2]	他律指向 互いの間に働く引力により、自分の進行方向を、単独では決められない。	自律指向 自分単独で自分の進行方向を決められること。
〔A	**〔プライバシーの確保〕**	

5〕		
[A5.1]	反プライバシー 互いに近づき、くっつき合うため、プライバシーを侵害し合うこと。（互いにプライベートな空間を持てないこと。）	プライバシー尊重 互いに離れるため、自分のプライベートな空間を確保できること。
〔A6〕	**〔運動の明快さや合理性の確保〕**	
[A6.1]	あいまい指向 互いの間に引力が働くことで、自分の進行方向があいまいとなる。	明快（反あいまい）指向 自分の進行方向を率直・明快に保てること。
[A6.2]	非合理指向 互いの間に引力が働くことで、進行方向の面で、割り切れない。	合理指向 自分の進行方向を、合理的に、割り切ったものにできること。
〔A7〕	**〔集団の開放性の確保〕**	
[A7.1]	閉鎖指向 形成する集団が外に向かって閉じている。（表面張力が働くこと。）	開放指向 形成する集団が外に向かって開いている。（表面張力がないこと。）
〔B〕	**〔運動・活動・移動指向〕**	
〔B1〕	**〔動的エネルギー・移動性の確保〕**	
[B1.1]	静的指向 自発的に動き回れないこと。	動的指向 自発的に動き回れること。
[B1.2]	定着指向 今いる地点に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる地点に定着せず絶えず移動しようとすること。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

トップページに戻ること。

表_33

	ウェット	ドライ
〔A〕	〔心理的近接指向〕	
〔A1〕	〔他者との心理的位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いを画一的な枠にはめようとすること。	多様性の尊重（異質指向） 互いの多様性を重んじること。
[A1.4]	同調指向 取る行動を互いに合わせようとすること。	反同調指向 取る行動を互いに合わせようとしないこと。
[A1.5]	主流指向（権威主義） 自分の取る意見について（すでに認められたこと。）	非主流指向（反権威主義） 自分の取る意見について少数派で構わないとすること。
〔A2〕	〔他者との関係・縁故の構築〕	
[A2.1]	関係指向 他者との間に積極的に人間関係を持とうとすること。	非関係指向 他者との間であまり人間関係を持とうとしないこと。
[A2.2]	縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。	非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。
〔A3〕	〔行動決定の自由〕	
[A3.1]	規制主義	自由主義

	互いに行動を規制し合うこと。	互いに自由に行動しようとすること。（自由に動き回ろうとすること。）
〔A4〕	〔行動の自己決定〕	
[A4.1]	相互依存指向 互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いに独立・自立して行動すること。
[A4.2]	他律指向 自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。	自律指向 自分で自分の意思を決められること。
〔A5〕	〔プライバシーの確保〕	
[A5.1]	反プライバシー 互いのプライバシーを重んじないこと。	プライバシー尊重 互いのプライバシーを重んじること。
〔A6〕	〔行動の明快さや合理性の確保〕	
[A6.1]	あいまい指向 自分の取る意見がが率直・明快でない。	明快（反あいまい）指向 自分の取る意見が率直・明快である。
[A6.2]	非合理指向 物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。	合理指向 物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。
〔A7〕	〔集団の開放性の確保〕	
[A7.1]	閉鎖指向 閉鎖的な集団にいるのを好むこと。	開放指向 開放的な集団にいるのを好むこと。
〔B〕	〔心理的運動・活動・移動指向〕	
〔B1〕	〔動的エネルギー・移動性の確保〕	
[B1.1]	静的指向 自発的に動き回ろうとしない	動的指向 自発的に動き回ろうとするこ

	こと。	と。
[B1.2]	定着指向 今いる土地や組織に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

トップページに戻ること。

表_34

	ウェット		ドライ	
〔Ａ〕	〔心理的近接指向〕			
〔Ａ１〕	〔他者との心理的位置の同一・共通化〕			
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。		個人主義 互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。	
	○多人数だということで安心し、强気になれること。	×一人だけ別行動を取るわけに行かず、束縛感が强い。	○自分だけ好きな別行動を取ることができ、解放感がある。	×孤独であること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。		広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。	
	○周囲の人々と緊密な一体感を持てること。	×自分の居場所が狭苦しく息が詰まりそうである。	○空間を広々と使え、伸び伸びと振る舞えること。	×自分の周りに少ししか人がおらず寂しい。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いを画一的な枠にはめようとすること。		多様性の尊重（異質指向） 互いの多様性を重んじること。	

	○皆同じ、一緒という一体感、安心感が持てる。 ○集団の統率が取りやすい。	×個性がない。 ×異質な有能者を排除しがちであること。	○一人一人違う、自分に合った個性を伸ばすことができる。	×皆の考えがバラバラであり統率が取りにくい。
［A1.4］	同調指向 取る行動を互いに合わせようとすること。		反同調指向 取る行動を互いに合わせようとしないこと。	
	○一人周りから取り残されたという感じがなく、安心できる。	×周囲に行動を合わせるのが面倒である。 ×周囲に行動を合わせているうちに自分を見失ってしまうこと。	○行動をいちいち周りに合わせる必要がなくせいせいする。	×周りから取り残されたような焦燥感に襲われること。
［A1.5］	権威主義 自分の取る意見について（すでに認められたこと。）		反権威主義 自分の取る意見について少数派で構わないとすること。	
	○権威者の後に従っていれば、身の安全が確保され、うまく世渡りできる。	×偉いと思う人の後をひたすら盲従しがちであり、反抗心に欠けること。	○権威に囚われずはっきりと自分の意見を言える勇気が身に備わる。	
〔Ａ２〕	〔他者との関係・縁故の構築〕			
［A2.1］	関係指向 他者との間に積極的に人間関係を持とうとすること。		非関係指向 他者との間であまり人間関係を持とうとしないこと。	

	○関係を持つ他者の助けや情報を得やすくなること。	×煩わしい人間関係に振り回されること。 ×無視されるなど人間関係を絶たれることに弱くなること。	○煩わしい人間関係から解放されること。	×他者の助けや、他者が提供する情報を得にくくなる。
［A2.2］	縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。		非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。	
	○縁故があれば、いろいろ融通を図ってもらえ、生活が楽である。	×縁故がないと満足な生活が送れなくなる。	○縁故がなくても、社会的上位者と直接話を通じさせることができ、社会の風通しがよい。	×全てが熾烈な自由競争で決まるようになりがちであり、疲れる。
〔Ａ３〕	〔行動決定の自由〕			
［A3.1］	規制主義 互いに行動を規制し合うこと。		自由主義 互いに自由に行動しようとすること。（自由に動き回ろうとすること。）	
	○人々の取る行動が規律に合った、整然としたものとなる。	×行動の自由がない。	○好きな時に自分の好きな方向へ進むことができ、気持ちがよい。	×好き放題で自分勝手な行動ばかり取るようになること。
〔Ａ４〕	〔行動の自己決定〕			
［A4.1］	相互依存指向 互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）		独立（自立）指向 互いに独立・自立して行動すること。	

	○温かな助け合いの精神、充実した福祉が実現でき、安心して生活できる。	×他人に安易にすがろうとする甘ったれた性格の持ち主になってしまうこと。	○他人の助けがなくても一人で力強く生きて行ける。	×他人の助けが必要な時、助けを求めにくい。
［A4.2］	他律指向 自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。		自律指向 自分で自分の意思を決められること。	
	○意思決定に伴う行動責任を一人で負わなくて済むこと。	×自分の意見がなく、他人の言うままに流される。	○自分の考えをしっかりと持つことができる。	×取る行動に一人で責任を負わなくてはならない。
〔Ａ５〕	〔プライバシーの確保〕			
［A5.1］	反プライバシー 互いのプライバシーを重んじないこと。		プライバシー尊重 互いのプライバシーを重んじること。	
	○他人が抱える悩み事などに対する理解が深まる。	×絶えず周囲から監視されて、心の休まる暇がない。	○プライバシーが十分確保される。	×他人に対するガードが固くなり過ぎる。
〔Ａ６〕	〔行動の明快さや合理性の確保〕			
［A6.1］	あいまい指向 自分の取る意見がが率直・明快でない。		反あいまい指向 自分の取る意見が率直・明快である。	
	○自分の取る行動に責任が生じにくく、気楽である。	×何を考えているのか分かりにくく、方向性が見えない。		×物の言い方が直接的過ぎて、相手を傷つける。
［A6.2］	非合理指向		合理指向	

	物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。		物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。	
	○信仰心が篤い。		○取る行動が理に適っている。	×科学が万能であると考えがちである。
〔Ａ７〕	〔集団の開放性の確保〕			
［A7.1］	閉鎖指向 形成する集団が外部に対して閉じている。		開放指向 形成する集団が外部に向かって開いている。	
	○集団の内輪で強い団結心を持つことができる。	×集団の雰囲気が開放感がなく息苦しい。	○集団の雰囲気が開放感があり、明るい。	×信頼できるか分からないヨソ者が集団内に簡単に侵入してきてしまう。
〔Ｂ〕	〔心理的運動・活動・移動指向〕			
〔Ｂ１〕	〔動的エネルギー・移動性の確保〕			
［B1.1］	静的指向 自発的に動き回ろうとしないこと。		動的指向 自発的に動き回ろうとすること。	
	○現状に満足していれば、心地よい生活をずっと送れること。	×場の雰囲気が停滞し、変化に乏しい。	○雰囲気が流動性、変化に富んでいる。	×次に何が起きるか分からず不安である。
［B1.2］	定着指向 今いる土地や組織に定着しようとすること。		非定着（移動・拡散）指向 今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。	
	○気心の知れ	×いつも同じ	○新しい出会い	×移動中、ど

	た人たちとずっと付き合えるので安心できること。	人々との付き合いの繰り返しばかりで新味がない。	が常にあり、新鮮な気持ちで人付き合いができる。	んな新しい敵と遭遇するか分からないこと。 ×人間関係が一時的ですぐ消える薄いものとなってしまいがちである。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。		独創指向 未知の領域に進もうとすること。	
	○先輩の伝えたしきたりをただ覚えているだけで、尊敬してもらえること。	×先輩後輩関係がきつい。	○今まで誰もなしえなかった発見・発明をすることができる。	

トップページに戻ること。

表_35

「ドライ・ウェット複合・葛藤型」	1人の性格の中に、ドライさ、ウェットさの両方が高度に発達し、互いに複合・矛盾・葛藤する形で存在すること。（ドライ・ウェットの両者を兼ね備えていること。）
「純粋ドライ型」	1人の性格の中において、ドライな面が主に発達し、ウェットな面は発達していない。
「純粋ウェット型」	1人の性格の中において、ウェットな面が主に発達し、ドライな面は発達していない。
「ドライ・	性格が、ドライ・ウェットのいずれについても、まだ

ウェット未分化型」	明確に判別可能なところまで発達・分化していない。

トップページに戻ること。

表_36

回答項目凡例
ドライ
ウェット
（-）因子負荷量がマイナス。

トップページに戻ること。

表_37

因子番号	回答項目番号	因子内容、項目内容
因子1	→	束縛・監視指向（ウェット）ー自由・放任指向（ドライ）
	24	互いに束縛しあうのを好まないこと。
	27	互いに監視しあうのを好まないこと。
		［説明］ 互いに束縛、監視し合うか、それとも束縛や監視をせずに互いに自由に放置、放任されるのを好むかに関する因子であること。
因子2	→	集団化・触れ合い指向（ウェット）ーバラバラ・接触回避指向（ドライ）
	1	集団・団体で行動するのを好む（-）

	2	人付き合いで互いにもたれあうのを好む（-）
	5	他人との触れ合いを好まないこと。
	17	閉鎖的な人間関係を好むこと。
	18	他者からの分離・独立を好むこと。
	42	何か目的がないと互いに集まらない。
	43	他者と肌と肌とが触れ合うのを好まない。
		［説明］ 互いに集団、団体で行動して、もたれ合ったり、触れ合ったりするのを好むか、それとも、互いになるべく集まらない、くっつかずに分離しているのを好むかに関する因子であること。
因子3	→	非合理・非科学・主観指向（ウェット）ー合理・科学・客観指向（ドライ）
	13	考え方が合理的である。
	29	考え方が科学的である。
	36	ものの見方が客観的である。
		［説明］ 合理的、科学的、客観的な考え方や見方を取れるかどうかに関する因子であること。
因子4	→	周囲への従属指向（ウェット）ー周囲からの独立指向（ドライ）
	46	人間関係のしがらみがなく自由に身動きできる（-）。
	47	
	57	周囲の他者に良い印象を与えようといつも気にすること。
	60	周囲から孤立するのを恐れない（-）
		［説明］ 周囲とはしがらみなく、切れて独立でいて、自由に動けるか、周囲に左右されたり、周囲のことを気にするかどうかに関する因子である。

因子5	→	仲間外排除指向（ウェットト）ー仲間外受入指向（ドライ）
	41	付き合いで仲間内以外の人を排除すること。
	56	自分とは異なる意見を持つ人に対して寛容でない。
		［説明］ 仲間や自分と同意見の人たちだけで固まり、異質者を排除することを指向するかどうかに関する因子であること。
因子6	→	集団優先指向（ウェット）ー個人優先指向（ドライ）
	7	行動の自由を規制されることを好まない（-）
	63	自分の属する集団の利益を（自分個人の利益よりも。）
		［説明］ 行動するに当たって、個人の自由を優先するか、集団の利益を優先するかどうかに関する因子であること。
因子7	→	身内限定指向（ウェット）ー対外関心保持指向（ドライ）
	33	自分の属する集団内のことにしか関心がない。
	52	人付き合いで身内・外の区別にこだわること。
		［説明］ 自分の身内のことにしか関心がないか、外の世界に関心があるかどうかに関する因子である。
因子8	→	現状維持指向（ウェット）ー変革指向（ドライ）
	31	人事が停滞しているのを好む。
	32	現状をそのまま追認するのを好むこと。
		［説明］ 現状がそのまま続くのを好むかどうかに関する因子である。

因子9	→	人間への興味（ウェットこと。）ー（非人間的なこと。）物質への興味（ドライ）
	44	人形遊びを好まないこと。
		［説明］ 人や、人の姿をしたものに興味があるか、人から遠いものに興味があるかに関する因子である。
因子10	→	派閥・疑似家族関係指向（ウェット）ー非派閥・非家族関係指向（ドライ）
	35	派閥を作るのを嫌うこと。
	45	親分子分関係を好まないこと。
		［説明］ 派閥や疑似家族関係に入るのを好むかどうかに関する因子であること。
因子11	→	婉曲指向（ウェット）ー率直さ指向（ドライ）
	12	物の言い方が率直である。
		［説明］ 率直な物言いを好むかどうかに関する因子であること。
因子12	→	ゆっくり指向（ウェット）ー速さ指向（ドライ）
	14	動作がゆっくりである。
	30	物事の決定のテンポが速い（-）。
		［説明］ 動きや決定が速いのがいいか、ゆっくりのを好むかに関する因子である。
因子	→	密集指向（ウェット）ー分散指向（ドライ）

13		
	3	狭い空間に密集していようとすること。
		［説明］ 密集状態を好むかどうかに関する因子であること。
因子14	→	名声・権威指向（ウェット）ー非名声・非権威指向（ドライ）
	10	物を購入するときブランドにこだわること。
		［説明］ 対象のブランドや名声、権威に敏感かどうかに関する因子であること。
因子15	→	依頼・依存指向（ウェット）ー自立指向（ドライ）
	19	依頼心が強い。
		［説明］ 依頼心が強く持っているかどうかに関する因子である。
因子16	→	反プライバシー指向（ウェット）ープライバシー尊重指向（ドライ）
	11	他人のプライバシーに干渉したがること。
		［説明］ プライバシーに干渉するのを好むか、尊重するかどうかに関する因子であること。

トップページに戻ること。

表_38

ウェット	ドライ
集団主義	個人主義
規制主義	自由主義

反プライバシー	プライバシー尊重
・・・	・・・

トップページに戻ること。

表_39

液体分子（ウェット）	気体分子（ドライ）
集団主義	個人主義
規制主義	自由主義
反プライバシー	プライバシー尊重
・・・	・・・

トップページに戻ること。

表_40

乾湿の次元	ドライ	ウェット
温冷の次元	冷たい	温かい
明暗の次元	明るい	暗い

トップページに戻ること。

表_41

(1)分子の皮膚衝突	高密度、高頻度	低密度、低頻度
(1a)分子数	多い	少ない
(1b)分子速度	高速	低速
(2)温度知覚	暑い、温かい	涼しい(寒い)、冷たい
(3)乾湿知覚	ウェット(湿った)	ドライ(乾いた)

トップページに戻ること。

表_42

番	分類名	ウェットな対人関係	ウェット・ユーザビリティ原則

号	称	のあり方	
A	心理的近接		
1	集団主義	互いに集まり、まとまって動こうとすること。	ユーザと一緒に行動しようとすること。
2	相互依存指向	互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	ユーザと互いに助け合いの関係に入ろうとすること。
3	密集指向	互いに狭い領域に密集すること。	ユーザのすぐ近くにいようとすること。
4	画一指向（同質指向）	互いを画一的な枠にはめようとすること。	ユーザと外観などを同一化しようとすること。
5	人間（関係）指向	他者との間に積極的に人間関係を持とうとすること。	ユーザと積極的に仲間になろう、なつこうとすること。
6	縁故指向	既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。	ユーザと強いきずなを持とうとすること。
7	規制主義	互いに行動を規制し合うこと。	ユーザに対して一定の節度をわきまえていること。（自由奔放過ぎないこと。）
8	他律指向	自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。	ユーザに対して、自分の取るべき行動の決定を任せようとすること。
9	同調指向	取る行動を互いに合わせようとすること。	ユーザの後を追って同じ行動を取ろうとすること。
10	権威主義	自分の取る意見について（すでに認めら	ユーザに社会で主流になっている態度を取るように誘うこと。

		れたこと。）	
11	反プライバシー	互いのプライバシーを重んじないこと。	ユーザに関する情報（秘密など）に関心を持とうとすること。
12	あいまい指向	自分の取る意見がが率直・明快でない。	ユーザにはっきりものを言い過ぎないこと。
13	非合理指向	物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。	ユーザに対して取る態度が合理性・科学性一辺倒でない（占いを信じるなど）
14	閉鎖指向	形成する集団が外部に対して閉じている。	ユーザ（やその仲間）以外へと関心を外すことがない。
B	定着・非移動		
1	静的指向	自発的に動き回ろうとしないこと。	ユーザの近くに静止してあまり動かないこと。
2	定着指向	今いる土地や組織に定着しようとすること。	ユーザから離れてあちこち浮気しようとしないこと。（ユーザのもとで腰を落ち着けようとすること。）
3	前例指向	自分が今までいた領域にとどまろうとする。	ユーザの属する家庭や勤め先の前例を大切に守ること。

トップページに戻ること。

表_43

［おことわり］ 筆者は、以下で動作を画面キャプチャした気体・液体分子シミュレーション・プログラムは、mikeさんが作成されたプログラムをそのまま借用させていただいております。（気体の方は、そっくりそのまま借用。液体の方は、表示色と温度設定のみに手を入れています。）筆者の力では、とてもこれだけの分子シミュレーション・プ

ログラムは作れません。筆者は、作者のmikeさんに心より感謝申し上げます。

「分子のおもちゃ箱」（mikeさんのページ。このページのプログラムを含め、様々な物理シミュレーションプログラムが載っている。）

トップページに戻ること。

表_44

気体	液体

トップページに戻ること。

表_45

農業の分類	自然環境	生活をともにすること。生物の種類	生活パターンと地理の関係	物資の扱い	機動性
遊牧（牧畜）	乾燥（ドライ、気体）	動物	移動（動的）	流動（フロー重視）	大（身軽）
農耕	湿潤（ウェット、液体）	植物	不動・定着（静的）	蓄積（ストック重視）	小（身重）

トップページに戻ること。

表_46

番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらでもない。	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Z得点-	有意
B10	遊牧生活を好むこと。	62.727	20.909	16.364	農耕生活を好むこと。	7.733	0.01

トップページに戻ること。

表_47

農業方式	自然環境	対人関係
農耕	ウェット、液体（モンスーン）	ウェット、液体的（定着・縁故、関係、集団・同調、規制、相互依存、密集）
遊牧	ドライ、気体（砂漠、草原）	ドライ、気体的（非定着・非縁故、非関係、個人・非同調、自由、自立、広域分散）

トップページに戻ること。

表_48

	〔1．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Z得点-	有意
1	単独・ひとりで行動するのを好むこと。	61.500	19.500	19.000	集団・団体で行動するのを好むこと。	6.699	0.01

18	他者からの分離・独立を好むこと。	46.500	28.500	25.000	他者との一体化・融合を好むこと。	3.596	0.01
34	ひとりで他者とは別の道を歩むのを好む。	58.500	28.000	13.500	ひとりで他者とは別の道を歩むのを好まない。	7.500	0.01
	〔２.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
2	互いに自立しているのを好むこと。	59.000	18.000	23.000	人付き合いで互いにもたれあうのを好むこと。	5.622	0.01
19	独立心が強い。	45.000	28.000	27.000	依頼心が強い。	3.000	0.01
35	派閥を作るのを嫌うこと。	66.500	22.000	11.500	派閥を作りたがること。	8.807	0.01
	〔３.						
番号	項目内容	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意

	（ドライ）						
3	広い空間に分散していようとすること。	61.500	15.500	23.000	狭い空間に密集していようとすること。	5.923	0.01
20	一人ずつ個室にいるのを好むこと。	64.000	15.000	21.000	多人数で大部屋にいるのを好むこと。	6.596	0.01
36	ものの見方が客観的である。	59.000	20.500	20.500	客観的でないこと。	6.106	0.01
	〔４．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
4	横並びであろうとしないこと。	62.500	19.000	18.500	周囲の他人と横並びであろうとすること。	6.914	0.01
21	人々の多様性を認めること。	79.500	12.000	8.500	人々を画一的な枠にはめようとすること。	10.704	0.01
	〔５．						

番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
5	他人との触れ合いを好まないこと。	16.500	23.500	60.000	他人との触れ合いを好むこと。	7.034	-0.01
22	自分の内面を他者に開示したがらないこと。	44.500	18.500	37.000	自分の内面を他者に開示したがること。	1.175	-.--
	〔６．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
6	縁故（コネ）を重んじないこと。	52.000	30.500	17.500	人付き合いで縁故（コネ）を重んじること。	5.853	0.01
23	事前に根回しがなくても気にしない。	56.500	26.000	17.500	会議で事前に自分への根回しがないと気に食わない。	6.412	0.01
	〔７．						

番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
7	行動の自由を規制されることを好まないこと。	86.500	7.500	6.000	行動の自由を規制されるのを好むこと。	11.837	0.01
24	互いに束縛しあうのを好まないこと。	78.000	15.000	7.000	互いに束縛しあうのを好むこと。	10.891	0.01
37	互いに行動を牽制し合うのを好まないこと。	64.500	25.000	10.500	互いに行動を牽制し合うのを好むこと。	8.818	0.01
	〔８．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
8	周囲の流行に振り回されないこと。（周囲	63.000	20.000	17.000	周囲の流行に振り回されること。	7.273	0.01

	の流行に左右されないこと。)						
25	自分の今後の進路を自分一人で決められること。	59.000	14.500	26.500	自分の今後の進路を自分一人で決められないこと。（周囲の影響を受けること。)	4.971	0.01
38	取る行動に自主性がある。	52.500	21.000	26.500	取る行動が自主性に欠ける。	4.137	0.01
	〔９．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
9	周囲に同調せず自律的であろうとすること。	56.500	28.000	15.500	周囲に同調したがること。	6.833	0.01
26	他人の真似をするのを好ま	60.500	25.000	14.500	他人の真似をするのを好むこと。	7.512	0.01

	ないこと。						
39	少数派に属するので構わないとすること。	58.000	23.500	18.500	主流派の一員でいようとすること。	6.387	0.01
	〔10.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
10	ブランドにこだわらないこと。	65.500	18.000	16.500	物を購入するときブランドにこだわること。	7.653	0.01
	〔11.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
11	他人のプライバシーには干渉しない。	64.500	13.500	22.000	他人のプライバシーに介入したがること。	6.462	0.01
27	互いに監視しあうの	85.000	9.500	5.500	互いに監視しあう	11.818	0.01

	を好まないこと。				のを好むこと。		
40	他人のうわさ話をするのを好まないこと。	38.000	25.000	37.000	他人のうわさ話をするのを好むこと。	0.163	-.--
	〔12.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
12	物の言い方が率直である。	52.500	19.000	28.500	遠回し・婉曲であること。	3.771	0.01
28	物事の白黒をはっきりさせようとすること。	57.500	21.000	21.500	あいまいなままにとどめようとすること。	5.728	0.01
	〔13.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
13	考え方が合理	59.500	24.500	16.000	非合理的であるこ	7.080	0.01

	的である。				と。		
29	考え方が科学的である。	39.000	31.500	29.500	非科学的であること。	1.623	0.10
	〔１４．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
14	動作がすばやい。	40.500	26.500	33.000	動作がゆっくりである。	1.237	-.--
30	物事の決定のテンポが速い。	39.500	20.500	40.000	テンポがゆっくりである。	0.079	x.xx
	〔１５．						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Ｚ得点-	有意
15	遊牧生活を好むこと。	53.500	18.000	28.500	農耕生活を好むこと。	3.904	0.01
31	人事が流動的なのを好む。	57.000	25.500	17.500	人事が停滞しているのを好む。	6.472	0.01

	〔16.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Z得点-	有意
16	前人未踏のことにもあえて挑戦する。	57.500	23.000	19.500	前例があることだけをしようとする。	6.124	0.01
32	現状を変革するのを好むこと。	55.500	22.000	22.500	現状をそのまま追認するのを好むこと。	5.284	0.01
	〔17.						
番号	項目内容（ドライ）	-より良い-	どちらでもない。	-より良い-	項目内容（ウェット）	-Z得点-	有意
17	開放的な人間関係を好むこと。	68.500	17.000	14.500	閉鎖的な人間関係を好むこと。	8.382	0.01
33	集団外のことにも関心を持つ。	68.000	9.500	22.500	自分の属する集団内のことにしか関心がない。	6.764	0.01
41	仲間内	70.000	19.000	11.000	付き合い	9.271	0.01

	以外の人も受け入れる。				で仲間内以外の人を排除すること。		

トップページに戻ること。

表_49

	ドライな機能主義	ウェットな機能主義
（１）	個人、個体、粒子の環境適応	全体システムの維持、環境適応
（２）	全体、組織の手段視 （全体、組織を、個人にとっての環境適応の手段、道具として捉えること。）	全体、組織の本質視 （全体、組織自体を重視すること。）
（３）	個人の全体からの自立、独立、自由	全体組織への個人の従属、融合、調和 全体による個人の統制
（４）	個人あっての全体 （全体は、個人にとって生き延びるための道具に過ぎない。） （全体は、個々人にとって必要なくなれば消えてなくなる。）	全体あっての個人 （個人は全体の一部分、歯車に過ぎない。） （個人は全体のため犠牲となる。）
（５）	クリエイティブ、変革的 （個人の環境適応に役立たない現行の上位組織、社会を破壊し、新たに必要なものを作り出していくこと。）	全体組織の現状維持と保守
タイプ	心理学的、生物学的機能主義	社会学的、生態学的機能主義

トップページに戻ること。

表_50

回答結果

回答期間

2002年10月上旬～11月中旬
回答数200
男24.000％
女76.000％
10代34.500％
20代48.000％
30代14.500％
40代2.500％
50代0.500％
60代0.000％
70代0.000％

回答比率

	〔Ａ．								
No.	文章	ヨソ	グラフ表示					合計値（ドライ2～ウェット-2）	t値（平均値差）
			とてもドライ	ややドライ	どちら	ややウェット	とてもウェット		
		身内	グラフ表示					合計値（ドライ2～ウェット-2）	
			とてもドライ	ややドライ	どちら	ややウェット	とてもウェット		
	〔Ａ－１．								
1	○○と一緒に行	ヨソ						0.955	15.161（0.01）

	動するのを好むこと。		42.500	30.500	10.500	13.000	3.500		
		身内	6.500	12.000	5.000	41.500	35.000	-0.865	
	〔Ａ－２．								
2	○○と互いに助け合いの関係に入るのを好むこと。	ヨソ	25.000	27.500	13.000	27.500	7.000	0.360	9.938（0.01）
		身内	6.000	13.500	11.000	40.000	29.500	-0.735	
	〔Ａ－３．								
3	○○のすぐ近くにいるのを好むこと。	ヨソ	44.500	30.000	12.000	10.500	3.000	1.025	11.462（0.01）
		身内	7.500	26.000	13.500	30.500	22.500	-0.345	
	〔Ａ－４．								
4	○○同士で考え方を揃えるのを好むこと。	ヨソ	41.000	21.500	10.500	21.000	6.000	0.705	3.004（0.01）
		身内	19.500	37.000	16.000	16.500	11.000	0.375	
	〔Ａ－５．								

5	○○と積極的に付き合おうとすること。	ヨソ	35.500	27.000	11.500	20.000	6.000	0.660	8.901（0.01）
		身内	8.000	23.000	15.500	29.500	24.000	-0.385	
	〔A－6.								
6	○○と強いきずなを持とうとすること。	ヨソ	36.500	36.500	9.000	14.500	3.500	0.880	12.961（0.01）
		身内	8.000	18.500	14.000	28.500	31.000	-0.560	
	〔A－7.								
7	○○に対して取る行動が自由気まま過ぎない。	ヨソ	13.000	21.500	18.000	35.000	12.500	-0.125	-1.282（x.xx）
		身内	12.500	29.500	15.000	32.500	10.500	0.010	
	〔A－8.								
8	○○に自分のこれからの進路について判断を任せること	ヨソ	61.500	22.000	4.500	9.500	2.500	1.305	4.866（0.01）
		身内	40.000	28.000	12.000	16.500	3.500	0.845	

	が多い。								
	〔Ａ－９．								
9	○○と行動を合わせるのを好むこと。	ヨソ	44.000	28.500	11.000	12.500	4.000	0.960	7.037（0.01）
		身内	20.500	31.000	13.000	26.500	9.000	0.275	
	〔Ａ－１０．								
No.	文章	ヨソ	グラフ表示 とてもドライ	ややドライ	どちら	ややウェット	とてもウェット	合計値（ドライ2～ウェット-2）	t値（平均値差）
		身内	グラフ表示 とてもドライ	ややドライ	どちら	ややウェット	とてもウェット	合計値（ドライ2～ウェット-2）	
10	○○たちの中で主流になっている態度を取るのを好むこと。	ヨソ	36.500	27.000	15.500	17.000	4.000	0.750	3.339（0.01）
		身内	24.500	28.000	21.500	18.000	8.000	0.430	
	〔Ａ－１１．								

11	○○に関する情報（秘密など）に関心を持とうとすること。	ヨソ	29.000	23.000	11.000	28.000	9.000	0.350	7.006 （0.01）
		身内	12.500	18.000	10.500	35.500	23.500	-0.395	
	〔Ａ－１２．								
12	○○に対してはっきりものを言い過ぎないこと。	ヨソ	10.000	13.000	11.000	39.000	27.000	-0.600	-7.697 （x.xx）
		身内	17.000	34.000	12.000	26.000	11.000	0.200	
	〔Ａ－１３．								
13	○○に対して取る態度が、合理的、科学的一辺倒でない（情緒や感情を重んじること。）	ヨソ	15.500	23.000	16.000	36.500	9.000	-0.005	3.683 （0.01）
		身内	8.000	21.500	16.000	36.500	18.000	-0.350	
	〔Ａ－１４．								

14	気配りをする主な**対**象を、○○とするのを好むこと。	ヨソ	24.500	23.500	15.500	28.500	8.000	0.280	4.582（0.01）
		身内	8.500	23.500	15.500	35.000	17.500	-0.295	
	〔B．								
No.	文章	ヨソ	グラフ表示 とてもドライ	ややドライ	どちら	ややウェット	とてもウェット	合計値（ドライ2～ウェット-2）	t値（平均値差）
		身内	グラフ表示 とてもドライ	ややドライ	どちら	ややウェット	とてもウェット	合計値（ドライ2～ウェット-2）	
	〔B－1．								
15	○○の近くにい続けるのを好むこと。	ヨソ	50.000	30.000	13.000	6.500	0.500	1.225	11.829（0.01）
		身内	13.000	26.500	18.000	24.500	18.000	-0.080	
	〔B－2．								
16	○○のもとで腰を落ち着けるのを好	ヨソ	45.000	37.500	8.500	7.500	1.500	1.170	14.563（0.01）
		身						-0.475	

	むこと。	内	10.000	17.000	11.000	39.500	22.500		
	〔B－3.								
17	○○の属する集団の前例・しきたりを大切に守るのを好むこと。	ヨソ	31.000	26.500	14.000	22.500	6.000	0.540	4.780（0.01）
		身内	15.000	28.500	19.000	26.500	11.000	0.100	

トップページに戻ること。

表_51

符号検定結果比率

分類（有意水準）	身内ウエット（0.01）	身内ウエット（0.05）	身内ウエット（0.10）	どちらでも。	ヨソ者ウエット（0.10）	ヨソ者ウエット（0.05）	ヨソ者ウエット（0.01）
比率（%）	35.500	20.000	7.500	28.000	2.000	1.000	6.000

トップページに戻ること。

表_52

	ウエット	生物学的貴重性との関連
1	集団主義	一人でいるより、みんなと一緒に集まっていた方が、危険が迫ったときに、一人ではできないことを力を合

		わせて行うことができて、安心である。
2	相互依存指向	互いに頼りあったほうが、危険に合ったとき、互いの力を借りることができて、対処しやすい。
3	密集指向	分散しているよりも、一つのところに皆で集まっていた方が、皆一緒という感じが持てて、安心感がある。
4	画一指向	皆と同じ行動をすることで、周囲の中で一人だけ浮いてしまうことがなくなるようにして、周囲と同類となることで、周囲からの援助が受けやすくなるようになる。 周囲の皆が取る行動を、皆がやっているから、多分正しいのだろう、きっと安全なのだろうと、模倣学習の対象に加え、追随することができる。行動の手本を、労せずして手に入れられること。
5	人間指向	—
6	縁故指向	人間関係を、予め安心だと分かっているもののみに絞ることで、自分の保身のために、より効果的に活用することができる。
7	規制主義	—
8	他律指向	自分の行動を周囲まかせにすることで、自分からは、行動が失敗したときの責任を、積極的に負わなくて済むようにする。
9	同調指向	周囲の皆（大勢）がすることに合わせる方が、数の論理を頼みにすることができ、より安全なのだと感じて、安心できる。互いに周囲の皆と行動を合わせる方が、大勢の中の一員として振る舞うことができて、自我が拡大して、気分が大きくなり、危険に立ち向かうだけの勇気が得られるように感じる。
10	権威主義	周囲の皆が従うところの、安全性を権威ある者によって保証された行動様式に、自らも従うことで、自らの保身を確かなものにしようとする。

11	反プライバシー	―
12	あいまい指向	自分の言っていたことを不明瞭にして、いろいろな向きに取ることができるようにしておくことで、失敗して責任追求があったときに、「自分は本当はそうは言っていなかったのだ」として、逃げ易くする。
13	非合理指向	―
14	静的指向	（安全が分かっているところで。）あまり動かずじっとしていた方が、動き回って危険な領域に入る心配がなく、保身に有利である。
15	定着指向	既に安全だと分かっている場所にずっといつづけることで、新たな場所への移動に伴う新たな危険の発生を防ぐこと。
16	前例指向	既に安全が保証されたことだけを選んで行うようにして、未知のことを行うことによって起きる予測不能な危険を、避ける。
17	閉鎖指向	安全がすでに保証された仲間とだけ一緒にいることで、危険・有害かも知れない外部からのよそものの侵入を防ぐ。

トップページに戻ること。

〔資料編〕

ドライ・ウェットな性格や態度に関する、アンケート調査。

［アンケート調査の手順。ドライ・ウェットさについての仮説の検証。それらの手順。］

筆者は、抽出した仮説の数がある程度まとまったところで、それらが本当に、ドライ・ウェットと感じられるかどうかを、確認することにした。筆者は、その目的のために、インターネットのWebページを利用してアンケート調査および結果分析を行い、仮説が正しいことを確かめた。
筆者が、インターネットWebページを利用する調査を行うことになったきっかけ。筆者は、日本の民間企業（電機メーカー）において、社会心理学とは無関係の職場に、勤務していた。筆者には、調査への回答を依頼できる手段が、一切無かった。（例。大学研究者は、講義を聞きに来る学生に対して、簡単に、アンケート調査を依頼できる。そうした、縁故、ないし、つて。）そこで、筆者は、以下のように、考えた。私は、インターネットWebページを利用すれば、仮に以下のような場合でも、以下のような回答者を、十分集めることができる。大学への縁故やつてが、特に無い場合。性格・態度のドライ・ウェットさに関心を持つ、不特定多数の回答者。

アンケート調査は、以下の２回に分けて行った。仮説の正しさを仮確認する1回目。（項目数は、約100。）回答者数や回答項目の数を増やして1回目の結果が正しいかどうか追試する2回目。（項目数は、約200。）
筆者は、まず、アンケート調査専用の、Perl言語ベースのCGIプログラムが動く、Webページを作成した。筆者は、次に、1997年4月から5月にかけて、インターネットのニューズグループのいくつか（fj.sci.psychologyなど）に、”私は、どういう態度がドライ・ウェットと感じられるか確認するアンケートを、Webページ上で行う。皆さんは、私に対して、協力してもらいたい。”旨の記事を投稿した。筆者は、この記事を見て筆者が指定したWebページにアクセスしてきた人たちを、アンケート調査専用Webページへと、誘導した。筆者は、その結果、70名ほどの、主に男性からの、回答を得た。
筆者は、アンケートの質問は、以下のような内容を尋ねる形で、行った。”（それぞれドライ・ウェットな感じを与えると考えられる）対になった２つの行動様式のうち、どちらがよりドライと感じられるか？”
筆者は、早速、結果を分析した。その結果。大体、筆者が描いていた通りの仮説に合った感じの、分析結果が、出た。しかし、そこでは、以下のような欠点があった。回答者数が70名であり、少ないこと。性別が、男性に偏り過ぎていること。また、筆者においては、以下のような欲求も、働いた。私は、もう少し、いろいろな質問項目を、試してみたい。
そこで、筆者は、以下のようなアンケート調査を、目指した。よりパワーアップした項目内容を持つこと。十分な回答者数があること。回答者の性別に、偏りがないこと。
筆者は、以下の手順を実行した。
筆者は、まず、筆者自身の所有するインターネットWebサイト上に、初期調査で得られた仮の結果に基づいた、ドライ・ウェットの性格を診断する心理テストを作った。筆者

は、そのサイトを、インターネット上の複数の検索エンジン（Yahoo!、goo、etc.）に登録した。
次に、筆者は、その心理テストをやりたいとWebサイトにアクセスしてくる人たちに対して、1999年5月から7月にかけて、以下の方策を、実施した。予め、以下のような関所を設けること。”ドライ・ウェットさの説明や心理テストのページに行くには、まず、このアンケートに答えて下さい。あなたは、回答することで初めて、ドライ・ウェット説明や心理テストのページに行けます。”　そのようにして、アンケート調査専用Webページへと、アクセスしてきた人たちを、もれなく誘導すること。
このやり方では、以下のような効果もあると考えられた。被験者が、予め、筆者の仮説を知ってしまうこと。そのことを予防できること。もともとドライ・ウェットな性格・態度に関心のある被験者を、集めることができること。その結果、被験者の回答モラル（熱心さ）が向上すること。
アンケートの質問は、1回目と同じく、以下のような内容を尋ねる形で行った。”（それぞれドライ・ウェットな感じを与えると考えられる）対になった２つの行動様式のうち、どちらがよりドライと感じられるか？”
アンケート項目の総数は、そのままだと約200項目に達した。それらを、インターネット上で、一人で全部回答する場合。回答者の負担（心理的疲労、接続費用など）が、重過ぎる。そこで、筆者は、ランダムに選択した30～40項目毎に1つのアンケート調査単位を作った。（単位数は、合計6つ。）　筆者は、それらの単位毎に、別々に、回答を得ることにした。
筆者は、アンケート結果の集計は、PerlのCGIスクリプトを用いて、任意の時刻にその時点まで寄せられた回答の傾向を、割合や正規分布のz値、有意水準に達したかどうかの判定などをその場で全ての項目対について計算し、表形式に表示するようにした。
回答者数は、1日当たり40～50人であった。筆者は、1人が何回も重複して回答するのを防ぐため、メールアドレスの明記を必須とした。筆者は、同じメールアドレスからの回答は、何回回答しても、最新の1回のみを見るようにした。
筆者は、回答者数が、各回答項目について、約220名（のべ回答者数は、約1300名）集まったところで、募集を打ち切り、結果分析を行った。
アンケート回答者の属性は、以下の通りである。

記号	回答数	男	女	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
A	222	54.505％	45.495％	19.369％	68.018％	9.459％	0.901％	1.351％	0.450％	0.450％
B	220	53.182％	46.818％	25.455％	63.182％	9.091％	1.818％	0.000％	0.455％	0.000％
C	221	46.154％	53.846％	18.552％	69.231％	9.955％	1.357％	0.452％	0.000％	0.452％
D	231	45.887％	54.113％	24.675％	67.100％	4.762％	2.597％	0.866％	0.000％	0.000％
E	245	54.286％	45.714％	28.980％	61.633％	8.980％	0.000％	0.000％	0.000％	0.408％
F	222	51.802％	48.198％	23.423％	65.766％	9.009％	1.802％	0.000％	0.000％	0.000％

筆者は、結果の分析は、互いに独立でない一組の標本における比率の差の検定を用いて、ドライとウェットとの大きさを比較する形で行った。筆者は、検定方法については、例えば、以下の文献を参照し、以下のような数式で行った。
中道實”社会調査方法論”(恒星社厚生閣,1997)p.353の例題11.3
AP (UAPと同一の項目対にあって)当初の仮説でドライではないかと予想した方の項目において、実際にドライであると判定された割合
UAP (APと同一の項目対にあって)当初の仮説でウェットではないかと予想した方の項目において、実際にはドライであると判定された割合

APとUAPとは、同一の項目対において、互いに正反対の態度を述べている。１つの項目対において一方がドライであるとすると、他方は、自動的にウェットである。
筆者は、正規分布のz値の求め方は、以下の数式に、従った。
z = ABS(AP - UAP)/SQRT((AP + UAP) / n)
有意水準a = 0.01 で帰無仮説(ドライ＝ウェット)が棄却される(ドライ＞ウェットであると確言できる)には、z= 2.33以上が必要である。
有意水準a = 0.05 で帰無仮説(ドライ＝ウェット)が棄却される(ドライ＞ウェットであると確言できる)には、z= 1.64以上が必要である。
有意水準a = 0.10 で帰無仮説(ドライ＝ウェット)が棄却される(ドライ＞ウェットであると確言できる)には、z= 1.28以上が必要である。
筆者は、本研究の調査結果説明では、ドライとした割合が、ウェットとした割合よりも有意に多かった項目のみ(有意水準0.01以下)をピックアップして列挙し、説明している。

［アンケート調査回答結果(1999年5月から7月］

筆者は、下記においては、有意水準0.01に達した項目のみを抜粋して載せています。

各行の左側の説明が、ドライさを示すと想定した性格・態度を示しています。右側の説明が、ウェットさを示すと想定した性格・態度を示しています。
真ん中の３つの数値。左側が、ドライさを示すと想定した性格・態度を回答者が実際にドライと感じた割合（パーセント）を、示しています。中側が、左右のどちらもドライと言えないと回答者が感じた割合（パーセント）を、示しています。右側が、ウェットさを示すと想定した性格・態度を回答者が実際にドライと感じた割合（パーセント）を、示しています。
右端の２つの数値は、以下の内容です。
Ｚ得点。ドライと想定した性格・態度が実際にドライと感じられた割合が、ウェットと想定した性格・態度が実際にドライと感じられた割合よりも、有意に多いかどうかを判定する数値。（その数値が大きいほど、有意差が大きい。）
有意水準。（0.01。）

	［ドライ］	〔性格・態度の分類〕			［ウェット］		
〔Ａ〕		〔心理的近接指向〕					
〔Ａ１〕	［相違、差異化］	〔他者との心理的位置〕			［同一、共通化］		
〔A1.1〕	〔個人主義〕	ー	ー	ー	〔集団主義〕		
番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらでもない	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Ｚ得点-	有意
A1	私は、単独・ひとりで行動することを好む。	72.072	15.766	12.162	私は、集団・団体で行動す	9.726	0.01

					ることを好む。		
A14	私は、他者からの分離・独立を好む。	68.468	15.315	16.216	私は、他者との一体化・融合を好む。	8.460	0.01
B1	私は、互いに離れていようとする。	61.364	18.636	20.000	私は、互いにくっつき合おうとする。	6.802	0.01
B12	私は、互いにバラバラでいようとする。	65.000	17.727	17.273	私は、互いに集まろうとする。	7.805	0.01
B20	私は、何か目的がないと互いに集まらない。	64.545	18.636	16.818	私は、互いに集まること自体を好む。	7.848	0.01
C13	私は、簡単に脱退できる。	66.063	11.312	22.624	私は、（集団・団体が）いったん加入するとなかなか脱退できない。	6.857	0.01
D28	私は、私個人の利益を優先する。	60.173	14.286	25.541	私は、私の属する集団の利益を（個人の利益よりも）優先する。	5.685	0.01
D29	私は、ひとりで他者とは別の道を歩むことを好む。	65.368	18.182	16.450	私は、ひとりで他者とは別の道を歩むことを好まない。	8.220	0.01
A19	私は、意見が割れても多数決で	57.207	18.018	24.775	私は、会議で意見	5.337	0.01

	よしとする。				の満場一致を好む。		
B22	私は、相互批判を許容する。	48.636	18.636	32.727	私は、集団内での相互批判を好まない。	2.616	0.01
〔A1.2〕	**〔広域分散指向〕**	**—**	**—**	**—**	**〔密集指向〕**		
A3	私は、広い空間に分散していようとする。	67.568	18.018	14.414	私は、狭い空間に密集していようとする。	8.747	0.01
A16	私は、一人ずつ個室にいることを好む。	74.775	12.162	13.063	私は、多人数で大部屋にいることを好む。	9.811	0.01
C29	私は、他人との間に隔てを置こうとする。	65.158	13.122	21.719	私は、隔てがないようにする。	6.928	0.01
C3	私は、ものの見方が客観的である。	68.326	14.480	17.195	私は、客観的でない。	8.220	0.01
E32	私は、互いに離れていることを好む。	53.061	19.592	27.347	私は、互いに一緒にいることを好む。	4.489	0.01
E35	私は、他者と肌と肌が触れ合うことを好まない。	55.918	21.633	22.449	私は、他者と肌と肌が触れ合うことを好む。	5.918	0.01
F22	私は、ものごとを見る視野が広い。	51.351	22.973	25.676	私は、ものごとを見る視野が狭い。	4.359	0.01
F24	私は、地方分権を好む。	46.847	25.225	27.928	私は、中央集権を好む。	3.260	0.01
〔A1.3〕	**〔多様性の尊重**	**—**	**—**	**—**	**〔画一**		

	（異質指向）〕				**（同質）指向〕**		
A7	私は、横並びであろうとしない。	62.613	13.964	23.423	私は、周囲の他人と横並びであろうとする。	6.295	0.01
A20	私は、私とは異なる意見を持つ人に対して寛容である。	60.360	16.216	23.423	私は、私とは異なる意見を持つ人に対して寛容でない。	6.013	0.01
B6	私は、周囲から孤立してでも個性的であろうとする。	54.091	24.545	21.364	私は、周囲から私だけが孤立しないように没個性的であろうとする。	5.588	0.01
B17	私は、人々の多様性を認める。	70.909	11.818	17.273	私は、人々を画一的な枠にはめようとする。	8.472	0.01
〔A1.4〕	**〔反同調指向〕**	**－**	**－**	**－**	**〔同調指向〕**		
B9	私は、行動を周囲の人々に合わせようとしない。	51.364	25.455	23.182	私は、行動を周囲の人々に合わせようとする。	4.841	0.01
C8	私は、周囲の皆と違ったことをしようとする。	54.299	28.507	17.195	私は、周囲の皆と同じことをしようとする。	6.524	0.01
C34	私は、周囲に同調せず自律的であろうとする。	66.516	15.837	17.647	私は、周囲に同調したがる。	7.919	0.01

D22	私は、他人の真似をすることを好まない。	65.801	21.212	12.987	私は、他人の真似をすることを好む。	9.043	0.01
E7	私は、互いに違う方向に進むことを好む。	59.592	17.143	23.265	私は、互いに同じ方向に進むことを好む。	6.247	0.01
E23	私は、相手の言うことに反論したがる。	41.224	33.878	24.898	私は、相手の言うことに同意したがる。	3.143	0.01
E11	私は、周囲から孤立することを恐れない。	64.490	11.429	24.082	私は、周囲から孤立することを恐れる。	6.721	0.01
E30	私は、個性的であろうとする。	60.408	20.816	18.776	私は、没個性的であろうとする。	7.323	0.01
E36	私は、意見の違う者も仲間に入れる。	51.429	17.551	31.020	私は、意見の同じ者だけでまとまろうとする。	3.518	0.01
〔A1.5〕	**〔非主流指向（反権威主義）〕**	**—**	**—**	**—**	**〔主流指向（権威主義）〕**		
E38	私は、少数派に属するので構わないとする。	62.449	19.184	18.367	私は、主流派の一員でいようとする。	7.675	0.01
D24	私は、権威あるとされる者の言うことを信じにくい。	51.948	23.377	24.675	私は、権威あるとされる者の言うことを信じやすい。	4.735	0.01
E15	私は、人付き合	50.612	16.327	33.061	私は、相	3.003	0.01

	いで相手の身分・格式を重んじない。				手の身分・格式を重んじる。		
E34	私は、ブランドにこだわらない。	66.122	15.102	18.776	私は、物を購入するときブランドにこだわる。	8.043	0.01
〔Ａ２〕	**［非構築］**	**〔他者との関係・縁故〕**			**［構築］**		
〔A2.1〕	**〔非関係指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔関係指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
B3	私は、他人との触れ合いを好まない。	60.909	14.091	25.000	私は、他人との触れ合いを好む。	5.746	0.01
C10	私は、人付き合いのあり方がよそよそしい。	51.131	17.647	31.222	私は、人付き合いのあり方が親密である。	3.261	0.01
C16	私は、他者に対して共感しにくい。	48.869	17.647	33.484	私は、他者に対して共感しやすい。	2.520	0.01
C26	私は、愛という言葉を使うことを好まない。	52.489	23.077	24.434	私は、愛という言葉を使うことを好む。	4.755	0.01
E18	私は、周囲の他者にあえて気に入られようとしない。	55.918	14.286	29.796	私は、周囲の他者に気に入られようとする。	4.416	0.01
E22	私は、特に気にしない。	60.408	12.653	26.939	私は、周囲の他者に良い印象を与えようとい	5.605	0.01

					つも気にする。		
E27	私は、人間関係を何かの手段としてしか見ない。	53.061	11.020	35.918	私は、人間関係そのものことを重視する。	2.845	0.01
E19	私は、私の内面を他者に開示したがらない。	61.224	17.551	21.224	私は、私の内面を他者に開示したがる。	6.895	0.01
F16	私は、ぬいぐるみを抱くことを好まない。	55.856	18.919	25.225	私は、ぬいぐるみを抱くことを好む。	5.068	0.01
F25	私は、周囲の他者への配慮が足りない。	46.847	24.324	28.829	私は、周囲の他者への配慮が行き届いている。	3.086	0.01
F28	私は、人形遊びを好まない。	65.315	18.919	15.766	私は、人形遊びを好む。	8.199	0.01
F42	私は、無機物（金属、岩石．．）を扱うことを好む。	49.550	22.523	27.928	私は、有機物（生物、タンパク質．．）を扱うことを好む。	3.660	0.01
〔A2.2〕	**〔非縁故指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔縁故指向〕**		
A4	私は、縁故（コネ）を重んじない。	64.414	18.468	17.117	私は、人付き合いで縁故（コネ）を重んじる。	7.805	0.01
B14	私は、親分子分関係を好まない。	69.545	17.273	13.182	私は、人付き合いで親分子	9.191	0.01

					分関係を好む。		
C24	私は、人付き合いの雰囲気が家族的でない。	51.584	14.480	33.937	私は、人付き合いの雰囲気が家族的である。	2.837	0.01
C23	私は、縁故のない人とも付き合う。	57.466	17.647	24.887	私は、縁故（コネ）のない人とは付き合おうとしない。（私は、"一見さんお断り"である。）	5.337	0.01
C25	私は、事前に根回しがなくても気にしない。	67.421	17.647	14.932	私は、会議で事前に私への根回しがないと気に食わない。	8.598	0.01
D30	私は、接待を好まない。	70.130	15.152	14.719	私は、接待を好む。	9.143	0.01
〔Ａ３〕	**［自由］**	**〔行動決定〕**			**［不自由］**		
〔A3.1〕	**〔自由主義〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔規制主義〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
A5	私は、人間関係のしがらみがなく自由に身動きできる。	59.910	19.820	20.270	私は、人間関係のしがらみの中で身動きが取れない。	6.596	0.01
A18	私は、抜け駆けを許す。	57.658	16.216	26.126	私は、集団内で一人だけの	5.133	0.01

					抜け駆けを許さない。		
B23	私は、行動の自由を規制されることを好まない。	82.727	8.182	9.091	私は、行動の自由を規制されることを好む。	11.398	0.01
B4	私は、互いに自由に行動することを許す。	71.818	12.727	15.455	私は、互いに相手の行動を牽制し合う。（私は、互いに足を引っ張り合う。）	8.949	0.01
B15	私は、失敗を犯した本人のみの責任とする。	64.545	18.182	17.273	私は、一人の犯した失敗でも周囲の仲間との連帯責任とする。	7.752	0.01
D4	私は、談合を好まない。	55.411	17.316	27.273	私は、談合を好む。	4.703	0.01
D14	私は、給料を能力に応じて配分することを好む。	72.727	9.091	18.182	私は、給料を能力にかかわらず平等に配分することを好む。	8.695	0.01
D20	私は、互いに束縛しあうことを好まない。	79.654	14.719	5.628	私は、互いに束縛しあうことを好む。	12.183	0.01
D23	私は、規制緩和を好む。	61.905	18.615	19.481	私は、規制を好む。	7.147	0.01
D35	私は、互いに行動を牽制し合うことを好まない。	60.606	24.675	14.719	私は、互いに行動を牽制し	8.036	0.01

					合うことを好む。		
E5	私は、他者の足を引っ張ることを好まない。	67.347	12.245	20.408	私は、周囲の他者の足を引っ張ることを好む。	7.843	0.01
F7	私は、周囲の他者が同意するしないにかかわらず行動を起こす。	54.505	17.568	27.928	私は、周囲の他者が同意しない限り行動を起こさない。	4.361	0.01
〔Ａ４〕	**［可能］**	**〔行動の自己決定〕**			**［不可能］**		
〔A4.1〕	**〔独立・自立指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔相互依存指向〕**		
A2	私は、互いに自立していることを好む。	70.270	13.063	16.667	私は、人付き合いで互いにもたれあうことを好む。	8.566	0.01
A15	私は、独立心が強い。	59.910	22.973	17.117	私は、依頼心が強い。	7.265	0.01
B2	私は、甘えを嫌う。	59.545	18.182	22.273	私は、互いに甘えあおうとする。	6.112	0.01
B13	私は、派閥を作ることを嫌う。	70.455	17.727	11.818	私は、派閥を作りたがる。	9.588	0.01
D32	私は、互いに依存しあおうとしない。	52.814	16.450	30.736	私は、互いに依存しあおうとする。	3.671	0.01
〔A4.2〕	**〔自律指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔他律指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝**	**-Ｚ得点-**	**有意**

					ウェット）		
A23	私は、私の意見を持っている。	65.315	17.568	17.117	私は、周囲の意見に左右されやすい。	7.910	0.01
B19	私は、周囲の流行に振り回されない。（私は、周囲の流行に左右されない。）	67.273	18.182	14.545	私は、周囲の流行に振り回される。	8.646	0.01
E26	私は、周囲の他者の影響を受けにくい。	56.327	12.245	31.429	私は、周囲の他者の影響を受けやすい。	4.160	0.01
C17	私は、私の今後の進路を私一人で決められる。	69.231	15.385	15.385	私は、決められない。（私は、周囲の影響を受ける。）	8.702	0.01
E20	私は、起こす行動に主体性がある。	51.429	22.041	26.531	私は、起こす行動に主体性がない。	4.414	0.01
C28	私は、私から進んで運命を切り開く。	49.774	25.792	24.434	私は、外から与えられた運命に押し流される。	4.373	0.01
C38	私は、取る行動に自主性がある。	59.729	19.910	20.362	私は、取る行動が自主性に欠ける。	6.539	0.01

〔Ａ５〕	**［可能］**	**〔プライバシーの確保〕**			**［不可能］**		
〔A5.1〕	**〔プライバシー尊重〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔反プライバシー〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドラ**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝**	**-Ｚ得点-**	**有意**

	イ）				ウェット）		
A21	私は、他人のプライバシーには干渉しない。	76.577	12.162	11.261	私は、他人のプライバシーに介入したがる。	10.384	0.01
B24	私は、私が他人にどう見られるかを気にしない。	55.000	12.727	32.273	私は、私が他人にどう見られるかを気にする。	3.608	0.01
B7	私は、互いに監視しあうことを好まない。	78.636	10.455	10.909	私は、互いに監視しあうことを好む。	10.616	0.01
D7	私は、化粧をすることを好まない。	52.814	23.810	23.377	私は、化粧をすることを好む。	5.126	0.01
D13	私は、互いに視線を合わせることを好まない。	46.320	21.212	32.468	私は、互いに視線を合わせることを好む。	2.372	0.01
D17	私は、他人のうわさ話をすることを好まない。	58.874	22.511	18.615	私は、他人のうわさ話をすることを好む。	6.951	0.01
D27	私は、互いに視線を送り合うことを好まない。	50.649	20.346	29.004	私は、互いに視線を送り合うことを好む。	3.686	0.01
F35	私は、当局への密告を好まない。	60.811	22.523	16.667	私は、当局への密告を好む。	7.472	0.01
E3	私は、私的な場での行動を好む。	56.735	16.735	26.531	私は、公式の場での行動を好む。	5.181	0.01

E37	私は、見栄を張ることを好まない。	51.020	20.816	28.163	私は、見栄を張ることを好む。	4.021	0.01
〔Ａ６〕	[可能]	〔行動の明快さや合理性の確保〕			[不可能]		
〔A6.1〕	**〔反あいまい指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔あいまい指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
A9	私は、物の言い方が率直である。	63.063	15.766	21.171	私は、物の言い方が遠回し・婉曲である。	6.801	0.01
A22	私は、物事の白黒をはっきりさせようとする。	58.108	24.324	17.568	私は、あいまいなままにとどめようとする。	6.944	0.01
B18	私は、私の今後の進路をはっきりさせようとする。	57.273	20.455	22.273	私は、あいまいなままにとどめようとする。	5.821	0.01
D34	私は、公私混同を好まない。	64.069	19.048	16.883	私は、公私混同を好む。	7.971	0.01
〔A6.2〕	**〔合理指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔非合理指向〕**		
C6	私は、考え方が合理的である。	73.303	16.290	10.407	私は、非合理的である。	10.219	0.01
C36	私は、考え方がビジネスライクである。	57.466	20.814	21.719	私は、考え方がビジネスライクでない。	5.972	0.01
C15	私は、理性的である。	57.014	11.312	31.674	私は、考え方が感情的（情	4.000	0.01

					緒的）である。		
C31	私は、考え方が科学的である。	59.729	21.267	19.005	私は、非科学的である。	6.823	0.01
D8	私は、占いを信じない。	54.113	20.779	25.108	私は、占いを信じる。	4.953	0.01
D36	私は、宗教を信じない。	77.922	16.017	6.061	私は、宗教を信じる。	11.918	0.01
F17	私は、コンピュータを使うのが得意である。	60.360	26.577	13.063	私は、コンピュータを使うのが苦手である。	8.224	0.01

〔Ａ７〕	**[可能]**	**[集団の開放性の確保]**			**[不可能]**		
〔A7.1〕	**〔開放指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔閉鎖指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
F1	私は、開放的な人間関係を好む。	57.207	16.667	26.126	私は、閉鎖的な人間関係を好む。	5.073	0.01
B21	私は、部内者と部外者との区別にこだわらない。	59.545	15.000	25.455	私は、人付き合いにおいて、部内者と部外者との区別にこだわる。	5.485	0.01
D33	私は、集団外の人々とも付き合う。	54.545	17.316	28.139	私は、私が属する集団内の人々としか付き合おうとしない。	4.414	0.01
F20	私は、私たちが	49.550	16.216	34.234	私は、私	2.493	0.01

	持つ情報を積極的に公開する。				たちの持つ情報を公開したがらない。		
F31	私は、集団外のことにも関心を持つ。	63.964	11.261	24.775	私は、私の属する集団内のことにしか関心がない。	6.198	0.01
F37	私は、仲間内以外の人も受け入れる。	62.613	15.766	21.622	私は、付き合いで仲間内以外の人を排除する。	6.655	0.01
〔Ｂ〕		〔心理的運動・活動・移動指向〕					
〔Ｂ１〕	[可能]	〔動的エネルギー・移動性の確保〕			[不可能]		
〔B1.1〕	**〔動的指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔静的指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
C4	私は、動作がすばやい。	56.109	18.100	25.792	私は、動作がゆっくりである。	4.980	0.01
C1	私は、物事の決定のテンポが速い。	63.348	12.670	23.982	私は、テンポがゆっくりである。	6.262	0.01
C19	私は、行動が積極的である。	50.679	23.982	25.339	私は、行動が消極的である。	4.320	0.01
C14	私は、自己主張が強いことを好む。	50.226	20.362	29.412	私は、自己主張が強いことを好まない。	3.467	0.01
E1	私は、物事の進	49.388	17.143	33.469	私は、物	2.737	0.01

	め方が自発性に富んでいる。				事の進め方が自発性に欠ける。		
F36	私は、動くもことを好む。	50.450	17.568	31.982	私は、静止しているもことを好む。	3.031	0.01
〔B1.2〕	**〔非定着指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔定着指向〕**		
A11	私は、一ヵ所に定着せずあちこち動き回る。	50.450	20.721	28.829	私は、一ヵ所に定着して動かない。	3.618	0.01
B10	私は、遊牧生活を好む。	62.727	20.909	16.364	私は、農耕生活を好む。	7.733	0.01
C2	私は、人事が流動的なことを好む。	61.538	19.457	19.005	私は、人事が停滞していることを好む。	7.046	0.01
C33	私は、天空を指向する。	45.249	23.982	30.769	私は、考え方が大地を指向する。	2.469	0.01
D15	私は、短期間で次々と所属する組織を変わることを好む。	49.784	17.749	32.468	私は、一つの組織（職場など）に長期間所属しつづけることを好む。	2.902	0.01
D10	私は、短期的契約関係を好む。	50.649	17.749	31.602	私は、長期にわたる取り引き関係を作ることを好む。	3.192	0.01
D21	私は、人間関係が流動的なことを好む。	46.753	24.675	28.571	私は、人間関係が固定的な	3.184	0.01

					ことを好む。		
D25	私は、変化を好む。	51.515	18.615	29.870	私は、現状維持を好む。	3.647	0.01
〔B1.3〕	**〔独創指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔前例指向〕**		
A12	私は、新規の独創的なアイデアに求める。	51.802	22.072	26.126	私は、行動の基準を既存のしきたり・前例に求める。	4.334	0.01
B11	私は、先輩後輩関係を重んじない。	53.182	16.364	30.455	私は、人付き合いで先輩後輩関係を重んじる。	3.686	0.01
C22	私は、つねに新分野へと拡散しようとする。	52.489	21.719	25.792	私は、いつまでも今までいた分野にとどまる。	4.486	0.01
C30	私は、前人未踏のことにもあえて挑戦する。	56.109	27.149	16.742	私は、前例があることだけをしようとする。	6.857	0.01
D37	私は、冒険したがる。	48.052	18.182	33.766	私は、冒険しようとしない。	2.400	0.01
E12	私は、年功序列を重んじない。	55.102	16.327	28.571	私は、年功序列を重んじる。	4.540	0.01
E17	私は、新たな知識を創造することを好む。	50.204	20.408	29.388	私は、既存の知識を暗記することを好む。	3.652	0.01
E28	私は、まだ誰も	43.673	26.122	30.204	私は、既	2.453	0.01

	言っていない新たな理論を提唱することを好む。				に誰かが言った理論の追試をすることを好む。		
F30	私は、現状を変革することを好む。	56.306	18.018	25.676	私は、現状をそのまま追認することを好む。	5.040	0.01
		〔その他〕					
番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらでもない	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Ｚ得点-	有意
	（男性的－女性的）						
C12	私は、男性的である。	46.154	24.434	29.412	私は、考え方が女性的である。	2.863	0.01
	（先進的－後進的）						
F11	私は、考え方が先進的である。	64.414	19.369	16.216	私は、考え方が後進的である。	7.998	0.01
C9	私は、考え方が近代的である。	57.466	26.697	15.837	私は、前近代的である。	7.228	0.01
	（都市的－農村的）						
A13	私は、都市（都会）的な人間関係を好む。	65.315	18.468	16.216	私は、農村（ムラ）的な人間関係を好む。	8.102	0.01
	（冷たさ－温かさ）						
E25	私は、人当たりが冷たい。	52.245	17.959	29.796	私は、人当たりが暖かい。	3.879	0.01
F19	私は、青い色を	69.820	12.162	18.018	私は、赤	8.235	0.01

	好む。				い色を好む。		
	（粘り気ありー粘り気なし）						
E40	私は、人当たりにおいて、粘り気が無い。	63.673	22.041	14.286	私は、人当たりにおいて、粘り気がある。	8.755	0.01
	（スケールが大きいースケールが小さい）						
F18	私は、考え方のスケールが大きい。	54.054	23.423	22.523	私は、考え方のスケールが小さい。	5.369	0.01
	（攻撃的ー非攻撃的）						
F27	私は、動作が攻撃的である。	45.946	22.973	31.081	私は、動作が攻撃的でない。	2.524	0.01
	（涙が出にくいー涙がでやすい）						
E31	私は、悲しみにくい。	52.653	11.429	35.918	私は、悲しみやすい。	2.783	0.01
E39	私は、感傷的でない。	53.469	11.020	35.510	私は、感傷的である。	2.980	0.01
	（若年ー老年）						
F40	私は、年令が若い。	77.928	14.865	7.207	私は、年を取っている。（私は、高齢である。）	11.420	0.01
	（民主的ー非民主的）						
F41	私は、考え方が民主的である。	50.901	23.874	25.225	私は、考え方が民主的でない。	4.385	0.01

〔参考〕有意水準0.01に達しなかったアンケート項目の存在について

今回、筆者が行ったアンケート調査では、以下のような項目が、いくらかありました。当初筆者が予想したほどには、十分にドライ(ウェット)であるとは、言えなかった、項目。
ただ、それらの中には、以下のような項目は、含まれていませんでした。筆者が今回立てた仮説。その内容をゆるがすほどの、影響力が大きな、項目。
大半の項目は、以下のような項目でした。有意水準0.01に、もう少しで達しなかった、項目。

有意水準0.01に届かなかった、アンケート項目。それらの一覧。

〔１〕	**〔個人主義〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔集団主義〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**私は、どちらでもない。**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
（なし）							
〔２〕	**〔自立指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔相互依存指向〕**		
F2	私は、他人を可愛がろうとしない。	41.892	13.514	44.595	私は、他人を可愛がろうとする。	0.433	x.xx
〔３〕	**〔広域分散指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔密集指向〕**		
D31	私は、互いに遠ざかることを好む。	35.931	22.078	41.991	私は、互いに近づくことを好む。	1.043	x.xx
F9	私は、互いに遠く隔たることを好む。	42.793	20.721	36.486	私は、互いに近接すること	1.055	-.--

					を好む。		
F38	私は、電子メールによる会話を好む。	33.333	19.369	47.297	私は、直接対面による会話を好む。	2.317	-0.05
［４］	**〔多様性の尊重〕**	**―**	**―**	**―**	**〔画一指向〕**		
（なし）							
［５］	**〔非人間指向〕**	**―**	**―**	**―**	**〔人間指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
C5	私は、機械に興味を持つ。	46.606	17.195	36.199	私は、人間に興味を持つ。	1.700	0.05
D6	私は、人間関係が薄いことを好む。	46.753	15.152	38.095	私は、人間関係が濃いことを好む。	1.429	0.10
D12	私は、互いに仲良くしたがらない。	38.528	19.913	41.558	私は、互いに仲良くしたがる。	0.515	x.xx
D26	私は、他者から拒否されても気にしない。	49.784	10.390	39.827	私は、他者から拒否されることをいやがる。	1.599	0.10
E14	私は、人間関係に気をつかわない。	44.082	10.612	45.306	私は、人間関係に気	0.203	x.xx

					をつかう。		
E33	私は、他人が私のことをどう考えているか気にならない。	49.796	11.020	39.184	私は、他人が私のことをどう考えているか気になる。	1.761	0.05
F4	私は、他人を好きになりにくい。	40.090	11.712	48.198	私は、他人を好きになりやすい。	1.286	-0.10
F6	私は、他人との結びつきを好まない。	42.793	14.865	42.342	私は、他人との結びつきを好む。	0.073	-.--
〔６〕	**〔非縁故指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔縁故指向〕**		
A17	私は、短期間でさっと別れることを好む。	45.946	13.514	40.541	私は、他者と長期間にわたって付き合おうとする。	0.866	-.--
E9	私は、互いに疎遠な関係になることを好む。	46.122	15.510	38.367	私は、互いに親密な関係になることを好む。	1.321	0.10
F3	私は、他人に贈り物をすることを好まない。	43.694	14.414	41.892	私は、贈り物をすることを好む。	0.290	-.--
F32	私は、ものごとを金銭ずくで捉える。	36.036	13.514	50.450	私は、ものごとを金	2.309	-0.05

					銭ずくでは捉えない。		
〔７〕	〔自由主義〕	ー	ー	ー	〔規制主義〕		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
C20	私は、しっと心が弱い。	38.462	19.005	42.534	私は、しっと心が強い。	0.673	x.xx
C27	私は、独力で業績を挙げた場合、私一人の力によるものであり、周囲は無関係である、とする。	38.462	21.267	40.271	私は、周囲の皆のおかげだとする。	0.303	x.xx
D2	私は、互いに自由競争を好む。	48.052	15.152	36.797	私は、互いに自由競争を好まない。	1.857	0.05
D9	私は、生徒の、長所や優れた点を、気にする。（私は、そのことに、注目する。）	37.662	25.108	37.229	私は、生徒の、短所や欠点を（成績評価時に）気にする。（私は、そのことに、注目する。）	0.076	-.--

E8	私は、互いにライバル関係にあることを好む。	37.551	18.776	43.673	私は、互いにライバル関係にあることを好まない。	1.063	x.xx
E16	私は、能力の高い者を低い者よりもよりよく評価する。	44.898	17.143	37.959	私は、能力の高い者と低い者とを同等に扱う。	1.193	-.--
〔８〕	**〔自律指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔他律指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
A10	私は、周囲の他者の目を気にしない。	47.748	10.811	41.441	私は、行動を起こすとき周囲の他者の目を気にする。	0.995	-.--
D18	私は、失敗して他人に笑われても気にしない。	49.351	12.987	37.662	私は、失敗して他人に笑われることを気にする。	1.904	0.05
D19	私は、周囲の人々の雰囲気の変化に対して敏感でない。	30.736	16.017	53.247	私は、周囲の人々の雰囲気の変化に対して敏感	3.733	-0.01

					である。		
D39	私は、協調性を重んじない。	44.589	17.316	38.095	私は、周囲の他者との協調性を重んじる。	1.085	-.--
E6	私は、恥ずかしがりやでない。	46.939	15.918	37.143	私は、恥ずかしがりやである。	1.672	0.05
E24	私は、私の外観を気にしない。	41.633	13.469	44.898	私は、私の外観を気にする。	0.549	x.xx
〔９〕	**〔反同調指向〕**	**—**	**—**	**—**	**〔同調指向〕**		
E29	私は、意見の異なる他者との議論を好む。	41.633	17.551	40.816	私は、意見の異なる他者との議論を好まない。	0.141	-.--
〔10〕	**〔反権威主義〕**	**—**	**—**	**—**	**〔権威主義〕**		
E2	私は、上下関係を重んじない。	49.796	7.755	42.449	私は、職場で上下関係を重んじる。	1.197	-.--
E4	私は、反抗的である。	40.000	28.980	31.020	私は、従順である。	1.668	0.05
E13	私は、敬語を使うことを重んじない。	39.592	18.367	42.041	私は、敬語を使うことを重んじる。	0.424	x.xx

E21	私は、私より地位の上の他者が言うことに従いにくい。	31.837	30.204	37.959	私は、私より地位の上の他者が言うことに素直に従う。	1.147	x.xx
〔11〕	**〔プライバシー尊重〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔反プライバシー〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
A8	私は、仕事以外には他人の面倒をみない。	43.243	15.315	41.441	私は、仕事以外の私事にも面倒を見る。	0.292	-.--
C11	私は、一面だけを知るだけでよしとする。	39.367	15.837	44.796	私は、他者のあらゆる面を知ろうとする。	0.880	x.xx
D11	私は、他人が私をどう見るかを気にしない。	46.753	8.658	44.589	私は、他人が私をどう見るかを気にする。	0.344	-.--
〔12〕	**〔反あいまい指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔あいまい指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝**	**-Ｚ得点-**	**有意**

					ウェット）		
B8	私は、あいまいで融通の効く表現を好まない。	46.364	20.909	32.727	私は、あいまいで融通の効く表現を好む。	2.274	0.05
〔13〕	**〔合理指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔非合理指向〕**		
（なし）							
〔14〕	**〔動的指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔静的指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
C7	私は、動作が能動的である。	42.081	25.339	32.579	私は、動作が受動的である。	1.635	0.10
D1	私は、外圧が無くても私から進んで動く。	45.455	14.719	39.827	私は、外圧が無いと私からは動こうとしない。	0.926	-.--
D5	私は、行動が活発（活動的）である。	38.095	24.242	37.662	私は、行動が不活発（非活動的）である。	0.076	-.--
D16	私は、被害者意識が弱い。	44.156	23.810	32.035	私は、被害者意識が強い。	2.111	0.05

F39	私は、動作が活発である。	45.045	22.973	31.982	私は、動作が活発でない。	2.218	0.05
〔15〕	**〔非定着指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔定着指向〕**		
（なし）							
〔16〕	**〔独創指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔前例指向〕**		
C21	私は、未知の人々とも積極的に付き合う。	38.462	24.434	37.104	私は、既知の人々とだけ付き合う。	0.232	-.--
F23	私は、危険なことにもあえて挑戦する。	45.045	21.622	33.333	私は、安全なことだけをしようとする。	1.971	0.05
C35	私は、ものごとを破壊したがる。	33.484	27.149	39.367	私は、ものごとを破壊したがらない。	1.025	x.xx
〔17〕	**〔開放指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔閉鎖指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
F5	私は、見ず知らずの相手を助けることを好む。	41.441	25.676	32.883	私は、見知った相手のみを助けることを好む。	1.479	0.10
F8	私は、初対面の相手と会う	47.297	11.261	41.441	私は、初対面	0.926	-.--

	のが平気である。				の相手と会うのが苦手である。		
F13	私は、ものごとの決定を公開の場で行うことを好む。	41.892	15.766	42.342	私は、ものごとの決定を非公開の場（密室）で行うことを好む。	0.073	x.xx
F14	私は、初対面の相手を信頼する。	23.423	18.468	58.108	私は、ある程度付き合いがないと相手を信頼できない。	5.723	-0.01
F34	私は、ものごとを外部に公開することを好む。	47.748	17.117	35.135	私は、ものごとを仲間内の秘密にしておくことを好む。	2.064	0.05
〔18〕	**〔訴訟指向〕**	**ー**	**ー**	**ー**	**〔和合指向〕**		
番号	**項目内容（仮説＝ドライ）**	**-ドライ-**	**どちらでもない**	**-ドライ-**	**項目内容（仮説＝ウェット）**	**-Ｚ得点-**	**有意**
A6	私は、対立、訴訟を好む。	29.279	16.667	54.054	私は、対立や訴訟をいやがり和解	4.044	-0.01

					しようとする。		
B5	私は、周囲との調和を重んじない。	44.091	23.182	32.727	私は、行動を起こすとき周囲との調和を重んじる。	1.923	0.05
B16	私は、集団内部の和を重んじない。	41.818	20.455	37.727	私は、私の所属する集団内部の和を重んじる。	0.680	-.--

〔その他〕

番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらでもない	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Ｚ得点-	有意
	（アメリカ的ー日本的）						
C32	私は、アメリカ的である。	44.796	21.719	33.484	私は、考え方が日本的である。	1.901	0.05
	（男性的ー女性的）						
C18	私は、考え方が父性的である。	35.294	28.959	35.747	私は、母性的である。	0.080	x.xx
E10	私は、父親との絆が強い。	28.571	39.184	32.245	私は、母親との絆が強い。	0.737	x.xx
	（都市的ー農村的）						

（なし）							
	（冷たさー温かさ）						
（なし）							
	（粘り気ありー粘り気なし）						
（なし）							
	（固いー柔らかい）						
F10	私は、固いものを好む。	39.640	27.477	32.883	私は、柔らかいものを好む。	1.182	-.--
	（軽いー重い）						
C37	私は、ものごとに重みがない（軽い）ことを好む。	35.294	20.362	44.344	私は、ものごとに重みがあることを好む。	1.508	-0.10
	（スケールが大きいースケールが小さい）						
F12	私は、大まかな配慮しかしない。	44.595	18.919	36.486	私は、細かい点まで配慮を行き届かせる。	1.342	0.10
F15	私は、しぐさが乱暴である。	39.189	28.378	32.432	私は、しぐさがていねいである。	1.190	-.--
	（抽象的ー具体的）						

F21	私は、抽象的なことを好む。	33.333	17.117	49.550	私は、具体的なことを好む。	2.654	-0.01
	（攻撃的ー非攻撃的）						
（なし）							
	（涙が出にくいー涙がでやすい）						
F29	私は、涙もろくない。	42.342	13.964	43.694	私は、涙もろい。	0.217	x.xx
	（義理人情が厚いー義理人情が薄い）						
D3	私は、人情が薄い。	45.887	16.883	37.229	私は、人情が厚い。	1.443	0.10
D38	私は、義理堅くない。	38.528	20.779	40.693	私は、義理堅い。	0.370	x.xx
	（若年ー老年）						
（なし）							
	（民主的ー非民主的）						
（なし）							

初出時期。1999年7月から、2001年11月。

ドライ・ウェットな性格や態度についてのアンケート調査。4つのクラスによる分類に基づく、調査。

回答結果
回答時期
2001年2月中旬の1週間。

回答数 1043
男 36.146％
女 63.854％
10代 34.899％
20代 54.746％
30代 8.245％
40代 1.534％
50代 0.479％
60代 0.000％
70代 0.096％
回答比率
ドライ・ウェット複合・葛藤型 7.670％
純粋ドライ型 74.784％
純粋ウェット型 5.273％
未分化型 12.272％

回答結果
ドライさの判定

No.	文章	ドライさ 5（强）	ドライさ 4	ドライさ 3（中）	ドライさ 2	ドライさ 1（弱）
5	私は、他人との触れ合いを好まない。	8.629	22.148	15.820	30.968	22.435
No.	文章	ドライさ 5（强）	ドライさ 4	ドライさ 3（中）	ドライさ 2	ドライさ 1（弱）
7	私は、行動の自由を規制されることを好まない。	62.512	26.654	3.452	5.849	1.534
8	周囲の流行に振り回されない（左右されない）	27.037	34.708	13.231	20.134	4.890
9	私は、周囲に同調したがらない。	15.532	29.338	16.874	31.256	6.999
No.	文章	ドライさ 5（强）	ドライさ 4	ドライさ 3（中）	ドライさ 2	ドライさ 1（弱）
12	私は、物の言い方が率直である。	25.695	34.036	9.875	22.627	7.766
13	私は、考え方が合理的である。	21.860	37.105	18.408	15.820	6.807
No.	文章	ドライさ 5（强）	ドライさ 4	ドライさ 3（中）	ドライさ 2	ドライさ 1（弱）
18	私は、他者からの分離・独立を好む。	17.354	35.187	11.409	23.298	12.752
20	私は、一人ずつ個室にいることを好む。	24.545	30.585	13.710	21.381	9.779

No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
21	私は、人々の多様性を認める。	51.294	36.146	6.520	4.698	1.342
24	私は、互いに束縛しあうことを好まない。	39.310	37.680	8.629	11.122	3.260
25	私は、私の今後の進路を私一人で決められる。	30.393	30.201	11.793	20.997	6.616
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
27	私は、互いに監視しあうことを好まない。	50.144	36.721	5.944	5.081	2.109
28	私は、物事の白黒をはっきりさせようとする。	34.612	37.392	10.451	13.710	3.835
29	私は、考え方が科学的である。	13.327	23.298	21.285	25.695	16.395
30	私は、物事の決定のテンポが速い。	18.025	26.558	13.902	27.229	14.286
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
34	私は、ひとりで他者とは別の道を歩むことを好む。	21.381	39.693	15.724	18.792	4.410
35	私は、派閥を作ることを嫌う。	37.200	34.803	13.998	10.547	3.452
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
36	私は、ものの見方が客観的である。	25.887	39.214	16.203	14.669	4.027
40	私は、他人のうわさ話をすることを好まない。	16.779	23.969	16.683	31.448	11.122
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
42	私は、何か目的がないと互いに集まらない。	20.709	38.351	8.150	22.627	10.163
43	私は、他者と肌と肌とが触れ合うことを好まない。	14.669	22.148	11.697	32.023	19.463
44	私は、人形遊びを好まない。	29.626	19.271	13.327	25.695	12.081

45	私は、親分子分関係を好まない。	31.160	27.996	13.039	19.367	8.437
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
46	私は、人間関係のしがらみがなく自由に身動きできる。	18.792	32.598	11.314	27.517	9.779
48	私は、互いに違う方向に進むことを好む。	15.628	32.886	23.586	23.586	4.314
50	私は、私の今後の進路をはっきりさせようとする。	29.530	32.982	12.752	19.655	5.081
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
51	私は、考え方がビジネスライクである。	9.012	23.394	22.435	30.010	15.149
55	私は、甘えを嫌う。	13.519	23.873	17.929	30.872	13.806
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
58	私は、接待を好まない。	28.476	32.023	14.957	18.504	6.040
60	私は、周囲から孤立することを恐れない。	16.779	26.846	10.834	27.900	17.641
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）
61	私は、公私混同を好まない。	23.202	33.269	18.504	20.230	4.794
64	私は、周囲の他者の足を引っ張ることを好まない。	47.651	34.324	8.533	6.903	2.589
65	私は、個性的であろうとする。	39.693	34.132	12.656	10.738	2.780
No.	文章	ドライさ5（强）	ドライさ4	ドライさ3（中）	ドライさ2	ドライさ1（弱）

ウェットさの判定

No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
2	私は、人付き合いで互いにもたれあうことを好む。	9.492	22.531	9.971	34.132	23.873

3	私は、狭い空間に密集していようとする。	5.561	11.601	9.396	29.530	43.912
4	私は、周囲の他人と横並びであろうとする。	7.478	19.463	7.862	32.598	32.598
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
6	私は、人付き合いで縁故（コネ）を重んじる。	6.040	18.696	13.423	34.516	27.325
10	私は、物を購入するときブランドにこだわる。	6.903	22.339	8.245	21.093	41.419
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
11	私は、他人のプライバシーに干渉したがる。	6.424	23.011	10.930	29.818	29.818
14	私は、動作がゆっくりである。	15.436	28.188	11.793	27.517	17.066
15	私は、農耕生活を好む。	5.561	17.546	13.519	25.791	37.584
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
16	私は、前例があることだけをしようとする。	4.410	17.450	12.848	41.707	23.586
17	私は、閉鎖的な人間関係を好む。	6.903	22.244	11.985	29.914	28.955
19	私は、依頼心が強い。	10.738	32.886	17.354	26.942	12.081
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
22	私は、私の内面を他者に開示したがる。	14.573	25.887	11.697	28.380	19.463
23	私は、会議で事前に私への根回しがないと気に食わない。	6.328	15.149	16.683	30.393	31.448
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
26	私は、他人の真似をすることを好む。	3.260	17.929	11.026	37.776	30.010

No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
31	私は、人事が停滞していることを好む。	3.260	11.601	24.353	37.488	23.298
32	私は、現状をそのまま追認することを好む。	6.040	24.065	20.997	35.091	13.806
33	私は、私の属する集団内のことにしか関心がない。	8.150	18.313	8.725	37.967	26.846
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
37	私は、互いに行動を牽制し合うことを好む。	2.972	11.314	21.572	41.515	22.627
38	私は、取る行動が自主性に欠ける。	6.807	26.366	12.848	34.899	19.080
39	私は、主流派の一員でいようとする。	9.396	20.614	15.628	33.653	20.709
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
41	私は、付き合いで仲間内以外の人を排除する。	4.027	15.820	10.547	36.817	32.790
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
47	私は、周囲の意見に左右されやすい。	14.957	34.995	12.656	25.791	11.601
49	私は、当局への密告を好む。	3.260	6.903	15.820	32.119	41.898
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
52	私は、人付き合いにおいて、部内者と部外者との区別に、こだわる。	8.533	23.490	11.314	36.529	20.134
53	私は、人当たりにおいて、粘り気がある。	5.561	14.765	21.764	36.242	21.668
54	私は、いったん加入するとなかなか脱退でき	2.013	3.643	5.657	25.695	62.991

	ない集団・団体を好む。					
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
56	私は、私とは異なる意見を持つ人に対して寛容でない。	5.657	19.559	11.314	39.118	24.353
57	私は、周囲の他者に良い印象を与えようといつも気にする。	28.667	37.488	8.629	17.162	8.054
59	私は、一人の犯した失敗でも周囲の仲間との連帯責任とする。	6.424	20.230	18.217	31.160	23.969
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
62	私は、宗教を信じる。	4.602	9.588	13.615	20.134	52.061
63	私は、私の属する集団の利益を（私個人の利益よりも）優先する。	8.821	21.668	17.450	32.982	19.080
No.	文章	ウェットさ5（强）	ウェットさ4	ウェットさ3（中）	ウェットさ2	ウェットさ1（弱）
66	私は、コンピュータを使うのが苦手である。	5.849	14.765	14.190	38.159	27.037

女々しさとウェットさとの関連についての、アンケート調査。

回答結果

回答期間　2000年4月15日～2000年4月18日
回答数 207
男 41.063％
女 58.937％
10代 33.333％
20代 56.522％
30代 7.246％
40代 2.899％

50代 0.000％
60代 0.000％
70代 0.000％
回答比率

	〔１．個人主義－集団主義〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない。**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
1	私は、単独・ひとりで行動することを好む。	31.884	15.459	52.657	私は、集団・団体で行動することを好む。	3.250	-0.01
18	私は、他者からの分離・独立を好む。	24.638	20.773	54.589	私は、他者との一体化・融合を好む。	4.841	-0.01
34	私は、ひとりで他者とは別の道を歩むことを好む。	32.850	15.459	51.691	私は、ひとりで他者とは別の道を歩むことを好まない。	2.948	-0.01
	〔２．自立指向－相互依存指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
2	私は、互いに	28.019	14.976	57.005	私は、人付き	4.523	-0.01

	自立していることを好む。				合いで互いにもたれあうことを好む。		
19	私は、独立心が強い。	22.705	17.391	59.903	私は、依頼心が強い。	5.888	-0.01
35	私は、派閥を作ることを嫌う。	33.333	13.043	53.623	私は、派閥を作りたがる。	3.130	-0.01
	〔３．広域分散指向ー過密指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
3	私は、広い空間に分散していようとする。	33.333	16.908	49.758	私は、狭い空間に密集していようとする。	2.592	-0.01
20	私は、一人ずつ個室にいることを好む。	34.300	15.459	50.242	私は、多人数で大部屋にいることを好む。	2.495	-0.01
36	私は、ものの見方が客観的である。	36.232	17.391	46.377	私は、客観的でない。	1.606	-0.10
	〔４．多様性						

	の尊重ー画一指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
4	私は、横並びであろうとしない。	30.918	15.942	53.140	私は、周囲の他人と横並びであろうとする。	3.487	-0.01
21	私は、人々の多様性を認める。	43.961	16.425	39.614	私は、人々を画一的な枠にはめようとする。	0.684	-.--
	〔５．非人間指向ー人間指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
5	私は、他人との触れ合いを好まない。	13.043	25.604	61.353	私は、他人との触れ合いを好む。	8.058	-0.01
22	私は、私の内面を他者に開示したがらない。	29.952	21.739	48.309	私は、私の内面を他者に開示したがる。	2.986	-0.01
	〔６．非縁故指向ー						

	縁故指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
6	私は、縁故（コネ）を重んじない。	29.952	20.290	49.758	私は、人付き合いで縁故（コネ）を重んじる。	3.192	-0.01
23	私は、事前に根回しがなくても気にしない。	27.053	21.739	51.208	私は、会議で事前に私への根回しがないと気に食わない。	3.928	-0.01
	〔７.自由主義ー規制主義〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
7	私は、行動の自由を規制されることを好まない。	53.140	13.527	33.333	私は、行動の自由を規制されることを好む。	3.064	0.01
24	私は、互いに束縛しあうことを好	39.130	13.527	47.343	私は、互いに束縛しあうことを好む。	1.271	x.xx

	まない。						
37	私は、互いに行動を牽制し合うことを好まない。	38.647	17.391	43.961	私は、互いに行動を牽制し合うことを好む。	0.841	x.xx
	〔８．自律指向ー他律指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
8	周囲の流行に振り回されない(左右されない)	30.918	14.010	55.072	私は、周囲の流行に振り回される。	3.748	-0.01
25	私は、私の今後の進路を私一人で決められる。	32.850	12.560	54.589	決められない(周囲の影響を受ける)	3.345	-0.01
38	私は、取る行動に自主性がある。	27.536	15.942	56.522	私は、取る行動が自主性に欠ける。	4.549	-0.01
	〔９．反同調指向ー同調指向〕						
番号	**項目内容(ド**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容**	**-Ｚ得点-**	**有意**

	ライ)				(ウェット)		
9	私は、周囲に同調せず自律的であろうとする。	31.401	14.976	53.623	私は、周囲に同調したがる。	3.467	-0.01
26	私は、他人の真似をすることを好まない。	33.816	15.942	50.242	私は、他人の真似をすることを好む。	2.578	-0.01
39	私は、少数派に属するので構わないとする。	29.469	17.874	52.657	私は、主流派の一員でいようとする。	3.681	-0.01
	〔１０．反権威主義－権威主義〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
10	私は、ブランドにこだわらない。	27.536	16.908	55.556	私は、物を購入するときブランドにこだわる。	4.422	-0.01
	〔１１．プライバシー尊重－反プライ						

番号	項目内容(ドライ)	私は、女々しい。	どちらでもない	私は、女々しい。	項目内容(ウェット)	-Ｚ得点-	有意
	バシー〕						
番号	項目内容(ドライ)	私は、女々しい。	どちらでもない	私は、女々しい。	項目内容(ウェット)	-Ｚ得点-	有意
11	私は、他人のプライバシーには干渉しない。	27.053	14.493	58.454	私は、他人のプライバシーに介入したがる。	4.886	-0.01
27	私は、互いに監視しあうことを好まない。	43.478	10.628	45.894	私は、互いに監視しあうことを好む。	0.368	x.xx
40	私は、他人のうわさ話をすることを好まない。	15.942	14.493	69.565	私は、他人のうわさ話をすることを好む。	8.343	-0.01
	〔１２．反あいまい指向ーあいまい指向〕						
番号	項目内容(ドライ)	私は、女々しい。	どちらでもない	私は、女々しい。	項目内容(ウェット)	-Ｚ得点-	有意
12	私は、物の言い方が率直である。	33.816	14.493	51.691	私は、遠回し・婉曲である。	2.781	-0.01
28	私は、物事の白黒を	36.232	19.807	43.961	私は、あいまいなま	1.242	x.xx

	はっきりさせようとする。				まにとどめようとする。		
	〔13．合理指向ー非合理指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
13	私は、考え方が合理的である。	39.614	22.705	37.681	私は、非合理的である。	0.316	-.--
29	私は、考え方が科学的である。	24.638	28.502	46.860	私は、非科学的である。	3.781	-0.01
	〔14．動的指向ー静的指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
14	私は、動作がすばやい。	22.705	28.986	48.309	私は、動作がゆっくりである。	4.371	-0.01
30	私は、物事の決定のテンポが速い。	26.087	21.256	52.657	私は、テンポがゆっくりである。	4.308	-0.01
	〔1						

	５．非定着指向ー定着指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
15	私は、遊牧生活を好む。	34.783	25.604	39.614	私は、農耕生活を好む。	0.806	x.xx
31	私は、人事が流動的なことを好む。	33.333	27.536	39.130	私は、人事が停滞していることを好む。	0.980	x.xx
	〔１６．独創指向ー前例指向〕						
番号	**項目内容(ドライ)**	**私は、女々しい。**	**どちらでもない**	**私は、女々しい。**	**項目内容(ウェット)**	**-Ｚ得点-**	**有意**
16	私は、前人未踏のことにもあえて挑戦する。	25.121	20.773	54.106	私は、前例があることだけをしようとする。	4.685	-0.01
32	私は、現状を変革することを好む。	31.884	23.671	44.444	私は、現状をそのまま追認することを好む。	2.068	-0.05
	〔１７．開放指向						

	ー閉鎖指向〕

番号	項目内容(ドライ)	私は、女々しい。	どちらでもない	私は、女々しい。	項目内容(ウェット)	-Ｚ得点-	有意
17	私は、開放的な人間関係を好む。	39.130	22.705	38.164	私は、閉鎖的な人間関係を好む。	0.158	-.--
33	私は、集団外のことにも関心を持つ。	36.715	15.942	47.343	私は、私の属する集団内のことにしか関心がない。	1.668	-0.05
41	私は、仲間内以外の人も受け入れる。	41.546	11.594	46.860	私は、付き合いで仲間内以外の人を排除する。	0.813	x.xx

注）
有意水準欄の”-.--”表示。1999年5月から7月の調査において、ドライとされた、項目。（左側の項目。）　実際のアンケートにおいて、女々しいとされた割合が、より多かったものの、有意水準0.10には達しなかった、項目。
有意水準欄の”x.xx”表示。上記の調査において、ウェットとされた、項目。（右側の項目。）　実際のアンケートにおいて、女々しいとされた割合が、より多かったものの、有意水準0.10には達しなかった、項目。

ドライ・ウェットさ。日本的、東アジア的、欧米的な、性格・態度。上記の両者の関連についての、アンケート調査。

回答結果

回答期間 2000年10月下旬。

回答者数 200
男 43.500％
女 56.500％
10代 34.000％
20代 53.000％
30代 10.500％
40代 1.500％
50代 0.500％
60代 0.500％
70代 0.000％

回答比率↓

	〔欧米ー日本・東アジア〕	回答比率の数値・グラフ表示				
No.	文章	とてもドライ	ややドライ	どちらでもない	ややウェット	とてもウェット
1	より東アジア的（＝韓国、台湾、フィリピン．．．的）な	8.000	20.500	12.000	41.500	18.000
2	より日本的な	9.000	19.500	18.000	30.000	23.500
3	より欧米的な	22.000	42.500	10.500	16.500	8.500

ドライ・ウェットな性格・態度の因子分析。その結果。数値データの一覧。

ドライ・ウェット心理テスト回答結果 因子分析 2001 実施

斜交解パターン行列

ドライ・ウェットな性格・態度と、気体液体分子運動パターンとの関連。その検証を行うための、アンケート調査。その結果。

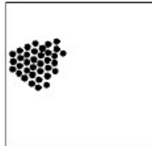
「ドライ・ウェットな行動についてアンケート」回答分析結果 2005.03 大塚いわお

回答期間 2005.03.25〜03.26
回答人数 200

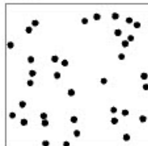
性別
男 33.500%
女 66.500%

年齢
10代 45.000%
20代 37.000%
30代 12.500%
40代 3.500%
50代 1.500%
60代 0.500%
70代 0.000%

↓人々の行動の様子を早送りで縮小表示したと称したビデオ
（どの程度ドライ、ウェットと感じられるかの評価対象）静止画



↑液体分子運動映像 Ar(アルゴン) 20K(絶対温度)



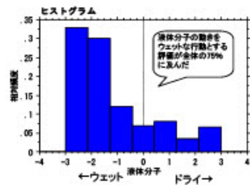
↑気体分子運動映像 Ar(アルゴン) 300K(絶対温度)

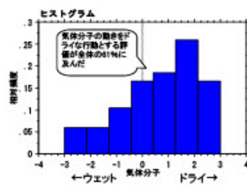
度数分布 ： 液体分子

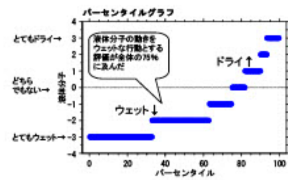
	下限 (>)	上限 (<=)	度数	相対頻度	パーセント
とてもウェット(-3)→	-3.000	-2.143	66	.330	33.000
かなりウェット(-2)→	-2.143	-1.286	60	.300	30.000
ややウェット(-1)→	-1.286	-.429	24	.120	12.000
どちらでもない(0)→	-.429	.429	14	.070	7.000
ややドライ(1)→	.429	1.286	16	.080	8.000
かなりドライ(2)→	1.286	2.143	7	.035	3.500
とてもドライ(3)→	2.143	3.000	13	.065	6.500
		合計	200	1.000	100.000

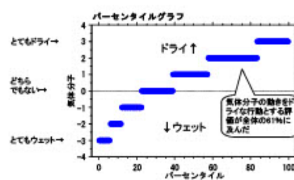
度数分布 ： 気体分子

	下限 (>)	上限 (<=)	度数	相対頻度	パーセント
とてもウェット(-3)→	-3.000	-2.143	12	.060	6.000
かなりウェット(-2)→	-2.143	-1.286	12	.060	6.000
ややウェット(-1)→	-1.286	-.429	21	.105	10.500
どちらでもない(0)→	-.429	.429	33	.165	16.500
ややドライ(1)→	.429	1.286	37	.185	18.500
かなりドライ(2)→	1.286	2.143	52	.260	26.000
とてもドライ(3)→	2.143	3.000	33	.165	16.500
		合計	200	1.000	100.000









記述統計−連続変数

	液体分子
平均	-1.365
標準偏差	1.802
標準誤差	.127
例数	200
最小値	-3.000
最大値	3.000
欠測値の数	0

（とてもウェット-3 〜 とてもドライ3）

液体分子の評価の平均は、かなりウェット

記述統計−連続変数

	気体分子
平均	.795
標準偏差	1.726
標準誤差	.122
例数	200
最小値	-3.000
最大値	3.000
欠測値の数	0

（とてもウェット-3 〜 とてもドライ3）

気体分子の評価の平均は、ややドライ

t検定（対応あり）
仮説平均値の差= 0

	平均差	自由度	t値	p値
液体分子，気体分子	-2.160	199	-10.845	<.0001

（差の値 ＝ 液体分子評価値 − 気体分子評価値）
（とてもウェット-3 〜 とてもドライ3）

ドライ・ウェット評価の平均値が、液体分子と気体分子とで、明らかに有意差あり（液体分子の方がウェット）

2群の符号検定（対応あり） ： 液体分子，気体分子

差 > 0 の数	41
差 < 0 の数	143
差 = 0 の数	16
p値	<.0001

（差の値 ＝ 液体分子評価値 − 気体分子評価値）
（とてもウェット-3 〜 とてもドライ3）

液体分子をよりウェットと評価した回答者数の方が、有意に多かった

Iwao Otsuka

性格と感覚、知覚。明暗・温冷・硬軟・緩さときつさ・緊張とリラックス。

明るい、暗い性格について

説明：明るい・暗い性格について

2001.11-2005.09 初出
1.はじめに
筆者は、よく、「自分はもっと明るい性格になりたいんですが..」という心理相談をする人を見かける。あるいは、日本社会が華やかなバブル期にあった1990年頃は、「人間は根が明るくなくてはダメだ」という意見がよく聞かれたものである。このように、一般に性格が明るくなることが、人々にとって望ましいこととして捉えられているようである。
しかしながら、どういう性格が、なぜ明るい、暗いと考えられるのか、従来の心理学では、きちんと分析・整理されているとはいえず、より深い解明が必要である。
2.明るい性格とは。
以下の表は、性格に明るさをもたらす要因について、明るい印象を与える形容詞を収集、グルーピングして、表形式にまとめたものである。

表 1

3.性格の明るさの根源
「明るさ」は、本来、物理的な光が、人間の視覚における受容器細胞（錐体、桿体）を刺激し、神経系に明るさに関する情報を送り込むことで感じられるものである。その点、物理的な「光」（太陽光線、蛍光灯・・・）が、「明るさ」をもたらす源となる。
「明るさ」は人間の視覚を有効にする点、人間の環境適応能力を飛躍的に向上させる効果を持ち、その点、根本的な面で、人間にとってプラスの価値を持つものである、と言える。性格の「明るさ」が肯定的に捉えられる理由の根源も、この点にあると考えられる。
人間は光の持つ「明るさ」を手に入れた結果、生活上の様々な利点を享受できるようになった訳であるが、逆にそうした「明るさ」が持つ利点と同等な内容を人間が性格的に持ったときに、その人のその性格が「明るく」感じられる、と考えられる。その人が心の中に、周囲を明るく照らし出す「光」「太陽」「灯」に当たるものを持っていること、あるいは光の持つ性質と同じ性質を持っていることが、性格の明るさにつながる。
明るい性格は、色彩としては、白や淡黄色で表される。
性格を明るくすることは、以上の表中にあげた「明るさ」に関連した形容詞に対応する性格を持つように努力することで、できると考えられる。
4.暗い性格の整理結果
一方、「暗い」「根暗な」性格は、「明るい」性格の内容を逆転して捉えることで、具体的には、以下の表のようにまとめられる。

表 2

一言で言えば、暗い性格は、当人の心が「闇」に支配された、あるいは光を失った状態にあることを示している、と言える。
暗い性格は、色彩としては、黒や濃い灰色で表される。
5.明るい社会について
社会の明るさ、暗さについても、性格の明るさ、暗さを決定するのと共通の要因によって、その明暗が決まると考えられる。
例えば、日本の法務省が毎年行っている「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、人々がそれぞれの立場において力を合わせ，犯罪のない明るい社会を築こうとする運動だとされている。この場合、犯罪とは、悪

さ、マイナスさといった暗さの象徴であり、それを更生によって、「暗い」犯罪者に、公正さ、他人の役に立つ、といったプラスの性質を「光」として与えようとするのが、「明るくする」ことにつながっていると言える。
一方、社会に出て行かずに、引きこもりの生活をしたり、社会の役に立つ労働をせず、いつまでも何もせずにぶらぶらしている「ニート」と呼ばれる人々も、外出して外の明るい光にあたろうとしないとか、社会にとって有益な活動をしないという点で、社会的に「暗い」と言える。こういう、別の意味でマイナスの価値を持つ人々が、将来を担うべき若者に多いことが、現在の日本社会を暗くしていると言える。
要は、社会の中の、人々の安定した、健康な生活を脅かしたり、有効な働きを失っている病的な部分＝「暗さ」をなくし、人々が、変転する環境に対して適応していくのに有効な働きを、分担して積極的に行う社会が「明るい社会」ということになる。
その点、性格においても、社会においても、「より生活しやすい、うまく機能する」＝「プラス」＝「明るい」、「生活しにくい、機能しない」＝「マイナス」＝「暗い」と広く言えそうである。その点、「明るさ」と「（社会的）機能」の概念とは深い関係にあると言える。
「明るい社会」は、皆に、将来も積極的に生きていきたいという希望、「光」を与える社会である。この希望や光は、将来への「プラス」の展望、すなわち、生活がよくなるとか、より生き延びやすくなるといった予測が、晴れた山頂からの眺めのように、眼下に透明にクリアに広く開けることで生じる。
晴天時の山岳展望のように、純粋に視覚的な「明るさ」と、社会の将来展望みたいに、より思考的、価値的な「明るさ」との関連づけが、人間の神経系内でどのように行われているかは、まだよく分かっていないというのが現状であろう。その辺の関係を今後明らかにできればと考えていること。
6.アンケート調査による確認
上記説明が正しいかどうか、上記説明で「明るい」とした性格が、実際に、その反対内容よりも「より明るい」と感じられているかをwebで調査した。
具体的には、「明るい」「暗い」性格についてのアンケートと称して、筆者のwebサイトに心理テストを体験しに集まってくる利用者に、「次の調査に回答してくれたら、心理テストが出来ます」とい

う関所を設け、その関所のところで、「以下の性格を記した左右の文章の対を読んで、「より明るい」と思う方を選択して下さい」と回答を求めた。
その結果、上記説明で「より明るい」とした14項目中11項目で、実際に、過半数の割合で、統計的に有意に「より明るい」と感じられていることが分かり、ほぼ説明が正しいことが分かった。
一方、有意差がない項目が1項目あった（3.「裏表がない・ある」）。これは、「裏表がない」という表現が、主な回答者であった若年層に分かりにくかったためと考えられる。
統計的に有意に「より明るい」とされたものの、割合が50％に届かなかった項目は2項目あった（12.「輝かしい」と14.「速い」）。これらについては、「明るい性格を示している」とはあまり強くは主張できないかも知れない。
回答時期
2005年09月中旬
回答数 203
男 32.512％
女 67.488％
10代 44.335％
20代 35.468％
30代 14.778％
40代 3.941％
50代 1.478％
60代 0.000％
70代 0.000％
回答比率

表 3

[主要参考文献]
新明解国語辞典 第五版, 三省堂, 1997
新字源 改訂版, 角川書店, 1994
ジーニアス和英辞典, 大修館書店, 1998
The RANDOM HOUSE Thesaurus, Random House Inc., 1984

ドライ・ウェットさと温冷・明暗感との関連について

（c）2002.2-10 初出
[要約]
本文では、ドライ・ウェットな感覚と、温かさ・冷たさ、明るさ・暗さとの関連がどうなっているかについて述べる。
乾湿・温冷・明暗の感覚は、それぞれ異なる感覚のモードによって知覚されるが、それらの間には、次のような相関関係が成り立つと考えられる。

表 4

1.ドライ・ウェットさと温冷感
人間は自分の体温に近い温度の存在物を「温かい」と感じ、体温より大分下がると「冷たい」と感じる。
「温かさ」を感じさせる体温を持つ相手が自分の身近にくっついている＝互いに近い距離にあると、相手の体温を身近に感じて、「温かい」と感じる。相手との間に隙間がなくぴったり密着していると、互いの間にある体温で温められた空気が逃げない。一方、互いに離れていると、相手と間隔が空き、両者の隙間に冷たい風が入り込む余地ができるため、「冷たい」と感じる。
これは、物理的な距離だけでなく、心理的な距離にも当てはまる。相手との間に距離がなくなり、心理的な一体・融合感、密着感を強く持つ場合に相手のことが「温かい」と感じられる。そして、そのままそこに定住・定着することで互いに心理的に近い、互いに「温かい」と感じる状態を維持し続けることができる。ここで各自がその場に静止せずにバラバラに独自の方向に動くと、相互の間の一体感が失われ、「冷たい」と感じるようになる。
対人関係がもたらす心理的な温かさ・冷たさに関しては、「温情」インタフェース・デザインのページへのリンクを参照されたい。
この場合、相手との間の心理的な一体・融合や密着、その状態の現状維持といったキーワードは、ドライーウェットさの次元からは、互いに心理的に近づき合うこと、近づき合ったままその場に定着することを指向する点、全て「ウェット」さと関連がある。
すなわち、心理的に一つになろうとすることは、互いに近づき、引きつけ合おうとする、引力のような力がそこに働いていることを示しており、この力は、人間に対して「ウェット」な感覚をもたらす

現実の液体分子間に働く分子間力とのアナロジーで捉えることができる。
また、心理的にひとまとまりになった状態で定着し、そこから動こうとせずに相互の温かい関係を維持しようとすることは、あちこち動き回るために必要な運動エネルギーが小さいことを示している。ドライな感覚を人間に与える気体分子が絶えず方々へと大きく動き回って、互いの間の隙間を大きく取るのに対して、ウェットな感覚を与える液体分子は、互いにくっつき合った状態であまり動き回らない。これは、液体分子の運動エネルギーが小さいことを示しており、「温かい」状態を保つための定着についても、ウェットな液体分子運動とのアナロジーで捉えることができる。
こうした「近さ＝ウェットさ」がもたらす「温かさ」は、遺伝的な「近さ」にも関係する。例えば、親子関係は、互いの間の遺伝子の共通性の高さ、すなわち遺伝的な「近さ」によってつながる、強固な温かさを備えた人間関係である。
相手との共通性の高さが心理的近さ＝温かさをもたらし、ひいては互いに相手に対して魅力を感じて近づき合い、その状態をそのまま維持することで心理的引力＝ウェットさをもたらす、と言える。
以上述べた、「温かさ＝ウェットさ」、「冷たさ＝ドライさ」の相関は、1999年度に筆者が行った、性格・態度のドライ・ウェットさに関するアンケート調査結果からも支持されている。次の表は、調査結果をまとめたものである（回答者約200名）。「人当たりが冷たい」方をドライと評した回答者の割合が、「温かい」方をドライと評した回答者の割合よりも有意に多いことが分かる。また、寒冷色の青を好む方が、暖色の赤を好むよりもより「ドライ」と評されている割合が有意に高いことが分かる。

表 5

2.ドライ・ウェットさと明暗感
明るさ・暗さは、地球上での人類の生活においては、太陽の日差しの有無と大きく関わっている。一般に、太陽の日差しが注ぐ晴天は「明るい」、太陽の日差しが届かない曇天～雨天は「暗い」感じがする。
雨がいったん降ってから止んだ後しばらく経つと、雨水は太陽の熱によって蒸発し地上から消えていく。この場合、湿った水たまり

は、日陰の暗い場所にずっと残りやすい、明るい日向は乾いている、ということは経験上広く知られていることである。
こうした説明からは、人間の生活上の感覚としては、「暗い＝日陰＝水たまり（水分の蒸発が少ない）＝ウェット」「明るい＝日向＝水分の蒸発＝ドライ」という相関関係が成り立つ、と言える。
また、日本語では、人間の性格を表すのに例えば「陰湿」という言葉が頻繁に使われる。この言葉は、「陰＝暗さ」と「湿＝ウェットさ」とが互いに強く結びついている、相関関係にあることを示している。
以上の説明から、「明るさ＝ドライさ」、「暗さ＝ウェットさ」とまとめることができる。
なお、これと関連して、人間の性格の明るさ・暗さについては、「明るい」性格についてのページへのリンクを参照されたい。基本的には、「明るい性格＝ドライな性格」と捉えられる、と言えそうである。
すなわち、明るい性格の方が、。
1）対人関係が、引きこもらず、外に積極的に出るということで、開放的である点、ドライである。
2）態度が、より元気、快活、活動的であるということで、よく動く点、ドライである。
3）物の捉え方が、物事をより明瞭に、クリアに捉えようとするということで、合理的である点、ドライである。
と捉えられること。
以上述べた、「暗さ＝ウェットさ」、「明るさ＝ドライさ」の相関は、2002年10月に筆者が行った、性格・態度のドライ・ウェットさに関するアンケート調査結果からも支持されている。次の表は、調査結果をまとめたものである（回答者約210名）。「人当たりが明るい」方をドライと評した回答者の割合が、「暗い」方をドライと評した回答者の割合よりも有意に多いことが分かる。

表 6

3.明るい性格と温かい性格との不両立
上記結果を文字通り解釈すると、「明るい性格（＝ドライな性格）＝冷たい性格」「暗い性格（＝ウェットな性格）＝温かい性格」という相関が成り立つことになる。これは「明るい、かつ、温かい性格」という人間にとって望ましい性格同士の間に矛盾が存在するこ

とを示している。明るくかつ温かい心を備えた人間というのは理想的ではあるが、現実には成立し難いものである、と言える。要するに、「明るい」性格と、「温かい」性格というのは、両立しないのである。
4.ドライ・ウェットさの表現と色彩コーディネート
以上から、色彩を用いてドライ・ウェットさを衣服や生活用品上に表現しようとする場合、ドライさは、「冷やかな、明るい」色を、ウェットさは「温かい、暗い感じの」色を用いれば効果的と考えられる。
具体的には上記[要約]の項目内にある、ドライ・ウェットさと温冷、明暗感との相関をまとめた表の色使いを参照されたい。
（c）2002.2-10 初出

陰湿さについて

2006.07 初出
陰湿さは、暗さ 。（陰）とウェットさ（湿り）の合体、合成した感覚であること。
日常生活においては、水たまりとかは、暗いところでは、日光が当たらないので、乾きにくく、いつまでもウェットな液体の水のままであり、明るいところでは、日光が当たって乾き、ドライになるという関係がある。
要は、明るい＝ドライ、暗い＝ウェットという関係が成り立つ。
陰湿さは、次の複数の要素からなると考えられる。
（1）[ウェット]相手に対して、ベタベタ粘着的であり、繰り返し頻繁にネチネチしつこく働きかけを行うこと。
（2）[暗い]相手に対して、相手にとってマイナス、ネガティブ、逆機能なことをすること。いじめ、いやがらせのように、相手がいやがることをする。
（3）[暗い]非合法なこと、やったことを表に出すと非難されること、やってはいけないとされることを行う。暴力行為、金を奪う行為、強姦等の人権侵害行為を行うとかいうのがそれである。
（4）[暗い]裏でこっそり隠れて行うこと。秘密にすること。表に出さないこと。表面的には、いいこと、何でもないことをしているように振る舞う。表面をきれいに飾りたてて、見た目には問題ないように見せかける。あるいは、表面的には仲のいい振りをして、裏で陰口を叩く。

こうした対人関係の陰湿さは、高湿度で、湿気でジメジメした日本の社会風土、ムラ社会では、会社でも学校でも普通にみられることであり、日本文化の特徴であるといえる。
また、対人接触を頻繁に行い、表面をきれいに飾ることが好きな、女性的な特徴であると見ることもできる。
2006 初出

温かい、冷たい性格について

説明：温かい（冷たい）性格について

（c）2000.05-2005.09
１.
我々の会話では、よく「Aさんは打算的で冷たい人だ」、「Bさんは思いやりのある温かい人だ」といったことが頻繁に出てくる。この場合、性格、人当たりの冷たさはマイナスに、温かさはプラスに取られることが多い。
従来、社会心理学では、「冷たい-温かい」の対人感覚軸について、従来から、その重要性が指摘されて来た。
例えば、〔Asch 1946〕では、人の性格を表す特徴の中に、ある一言が入ることによって、その人物の全体的印象が大きく変わること、具体的には、「温かい」もしくは「冷たい」という形容詞を入れ替えただけで、その人物の最終的な全体印象に大きな違いが生れることが、指摘されている。この場合、人物の全体印象を決定づけるのに、「冷たい-温かい」の対人感覚軸が、「中心的特性」として、大きな影響力を持っているとされている。
このように、性格の温かさ、冷たさは、付き合う相手に与える印象に大きな影響を持っていると言える。付き合う相手と良好な人間関係を持ったり、相手に自分のことを肯定的に受け入れてもらうには、「温かい」性格を自分自身備えるように常日頃努力することが必要となってくる。
また、温かい性格を持つことで、自分が所属する集団・組織の緊張・ストレスをほぐして作業効率を向上させたり、医療・福祉施設などでの看護・福祉水準を向上させることができる効果がある。
以下の本文では、相手に温かい感じを与える対人関係がどのようなものであるかを、7つの原則と、詳細なチェックリストの形にまとめて提案している。

２．
「温かい」人間関係とはどのようなものであるか。それを探るために、既存の人間同士の関係における、温かさを実現するための、様々な社会関係のあり方や社会的相互作用のための技術（ソーシャル・スキル）を以下にまとめたこと。
温かさの源泉となる社会関係や活動には、次のようなものがあげられる。
1a）友人、恋人（恋愛）、家族関係
1b）血縁、地縁〜通信で互いにつながれた共同体（コミュニティ）関係
2）看護、保育、福祉、カウンセリングといった、職業活動
3）ボランティア、寄付、募金、歳末助け合いといった、社会活動

これらについて、以下に、詳しく説明すること。
（1）友人・恋人・家族関係
（1a）友人関係
友人関係の特徴は、[Thibaut,Kelly 1959]によれば、好意の相互性、[Heys 1988]では、相互の引き付合い、自発的相互依存、いっしょにいると楽しいこと、[Wright 1974]では、親密さ、愛情、相互援助、とされている。
また、友人のルールとは、[Argyle,Henderson1985]によれば、自発的援助、相手のプライバシーの尊重、約束を守ること、相互信頼、相手のいないときに代役をする、相手を公の場で非難しない、といったものとされる。
友人関係の親密度の判別には、[中村 1989]によれば、次のような項目が説明力を持つとされる。
1）自己開示（自分の趣味や関心事について話す、個人的な問題や悩みについて打ち明ける）
2）相手の評価的行動（何事につけ気をつかう、何かにつけ相手を喜ばそうと努める）
3）自分と友人の近接性行動（会うのに多くの時間を当てる、何かにつけ相手を誘う）
4）相手に対する謝恩感情（負い目を感じる、すまない）
5）関係関与性（友人との関係の持続を望む程度、自分が友人との関係に深くかかわっている程度）。
コンピュータのインタフェースをより友情ある（友人関係に近い）ものとするためには、こうした項目で高得点をあげるようにすれば

よい、と考えられる。
あるいは、友人関係を緊密なものにする条件は何か、緊密性（closeness）はどのようにして表出されるかについては、[Parks & Floyd 1996]が明らかにしている。
1）自己開示（互いにどのようなことでも話す）
2）援助とサポート（互いに助け合う、互いにそばにいる）
3）共有された関心と活動（共通の背景、興味関心、嗜好、価値、信念、活動を持つ）
4）関係的表出（緊密性や関係の価値について、表出する）
があったとされる。
（1b）恋愛関係
恋愛（Romantic Love）関係は、上記の友人関係が、異性間のものだった場合に、より強められた形で出てくるもの、と考えられる。
恋愛関係の特徴は、[Rubin 1970]によれば、（1）親和・依存欲求（一緒にいたいなど）がある、（2）援助傾向（相手が落ち込んでいたら、元気づける）、（3）排他的感情（相手を独占したい）、といった点にあると考えられる。
（1c）家族関係
家族関係は、上記の恋愛感情を通過して、結婚した者同士の関係（夫婦関係）、夫婦が子供を作って育てる際に生じる関係（親子関係）、子供同士の関係（兄弟姉妹関係）に分けられる。
夫婦間の心理は、恋愛関係時に比べて、より制度化・固定化されて、安定している。
親子間・子供間の心理は、血のつながりがある点、相互の同一性が高く、自然と打ち解けた、遠慮のいらない関係ができあがる。
（2）共同体（血縁、地縁〜通信による結びつきによる）
共同体は、社会学では、ゲマインシャフト、コミュニティ（MacIver,R.M.）などと呼ばれてきたものである。
[Toennies 1887]によれば、共同体の中では、人々は、全人格をもって感情的に互いに融合し、親密な相互の愛情と了解の下に運命を共にする、とされる。
こうした相互の親密さ、感情的融合、愛情などが、共同体の心理の特徴といえる。これらの心理が、人間に「温かさ」を感じさせるものになっていると考える。
（3）看護・保育・福祉・カウンセリング
看護婦（看護士）、保母（保育士）、ソーシャルワーカー、カウンセラーの役割は、病人や幼児など、弱い、手助けを必要とする相手

に援助の手を差し伸べることにある。
こうした弱者支援は、弱者に対する温かい思いやりが前提となり、その点で、人に対する温情が存在すると考えられる。
（4）社会活動（ボランティア、寄付・募金など）
寄付や援助などの社会活動の根底にあるのは、困っている人を助ける（援助する）することで、人の役に立ちたい、という考え方である。すなわち、自分が他人に助けられた時、人の心の温かさに触れる思いがしたので、その温かな感じを、少しでも多くの人に分け与えたい、などといった、人に対する温情と直結した動機が、そこには含まれると考えられる。
こうした温かな人間関係をもたらす心理的な背景としては、次のような点が考えられる。
（1）心理的近接
他者が、心理的に、自分のすぐ近くにいることを感じられる時、他者の体温を、より身近に「温かく」感じられる。したがって、他者の行動を「温かく」感じること。
心理的な近さは、他者が、自分と共通・同一の考え方を持っていると近く、自分と異質・反対の考え方を持っていると遠く、感じられる。
（2）環境適応＝体温維持への貢献
他者の行動が、自分の体温維持＝生命維持（生存）に貢献する（役立つ）場合に、他者のことが温かく感じられる。すなわち、他者の行動が、自分の環境適応（環境の中で生き延びること）に役立つ場合、他者について「温かい人だ」という感じが得られる。
他者（例えば親や友人）が、自分と反対の意見を述べても、それが、自分のためを思っての意見だったと理解した場合には、温かく感じられる。

こうした点からは、性格の温かさ・冷たさは、人間の体温感覚と深い関係がある、と言える。心理的に他人の体温の温もりを感じることができると「温かい」と感じ、そうでないと「冷たい」と感じる。
温かな人間関係は、人間がよりよい条件で生存していくために、互いに協力しあって行く上で、その心理的な基盤となるものであり、人間らしいhumanな気持ちを保持する上で、欠かせない。
温かい人間関係が構築されることによって、人間は、より心理的に安定し、他者に対して、友好的な心理的傾向を強め、ひいては、厳

しい自然環境下を生き延びていくために必要な協力（思いやり）行動を、自ら進んで積極的に行うようになると考えられる。従って、温かい人間関係は、人間の生存・増殖の可能性を増大させる行動を取らせる上で、効果があると考えられる。それゆえ、温かい性格の持ち主は好かれ、冷たい性格の持ち主は遠ざけられることになる。
３．
（1）「温かい」認知との関連
[海保 etal. 1997]では、認知心理学において、従来の人間の知的側面に焦点を当てたアプローチを「冷たい」ものと捉え、それと対比する形で、人間の感情に焦点を当てたアプローチを、「温かい」認知として、捉えられることを明らかにしている。この知見からは、人間が豊かな感情（喜怒哀楽）を備えていることが、性格の温かさにつながる、と考えられる。
（2）親和欲求との関連
社会心理学における、人間の持つ、他人と一緒にいたい、という欲求、すなわち「親和欲求」の概念と、心理的温かさとの関連を考えた場合、他者と心理的に近くにいることで、他者の温もりを感じることができる、ということが想定される。他者への好意や心理的な接近を図ることが、心理的な温かさを、周囲に与えることにつながる、といえる。
（3）コンサマトリ（cosummatory）コミュニケーション
[磯崎 1995]によれば、人間同士のコミュニケーションには、次のようなものがある、とされる。
1）道具的（instrumental）コミュニケーション 目標達成の手段としてのコミュニケーション
2）コンサマトリ（consummatory,自己完結的）コミュニケーション 緊張解消などコミュニケーションを行うことそれ自体が目的であるコミュニケーション。

互いに温かい心の通い合った関係では、互いに話をしたり、一緒にいること自体が楽しく、幸せに感じられるものである。その点、コンサマトリ・コミュニケーションが成立することと、人間関係の温かさとの間には大いに関係があると言える。
（4）人間関係の「対等さ」との関連
人間同士の間に、温かな関係が構築されるには、両者の間での、関係・権利上の対等さが必要であると考えられる。互いに、相手を平等に認め合う、権利を尊重し合うといった気持ちがないと、一方が

他方を一方的に、利用・搾取する、「冷血的」な関係に陥るからである。
温かい人間関係の構築には、互いに相手のことを、自分と対等に思いやる、温かい気持ちで接する、という、「温かさの相互性・対等性」といったものが必要となる。

（5）「ソーシャル・スキル」との関連

「温かい」社会関係や活動の根底には、人間的な温もりや共感などを構築・維持しようとする「ソーシャル・スキル」が働いているものと考えることができる。
ソーシャル・スキルとは、[相川 1995]によれば、対人場面において、他者との関係が肯定的となるように、相手に効果的に反応するための対人行動、と定義される。これを、コンピュータと相手との関係に置き換えた形で再度まとめなおすと、以下のようになること。すなわち、コンピュータが相手に対して持つべきソーシャル・スキルとは、 コンピュータ使用場面において、コンピュータと相手との関係が肯定的となるように、コンピュータが相手に対して効果的に反応するための対人動作、のことを指す。
ソーシャル・スキル自体は、単に、対人関係のうまさ（上手さ）、そつのなさといった、対人関係技術の側面を表す言葉としても用いられるので、対人関係の温かさそのものを、表しているわけではないことに注意する必要がある。
ソーシャル・スキルにおいては、対人関係維持や、他者との共感的・援助的かかわりに関するスキル項目が、温かさに関係ある、と考えられる。
「温かさ」に関係のある、具体的なソーシャル・スキル項目は、次のようなものである。

1）[菊地、堀毛他 1994]にあげられている100のソーシャル・スキルリストの一部、
2）[庄司他 1990]の子供の社会的スキルを測定する尺度のうち、共感・援助的かかわりに関する部分、
3）[Buhrnmester et al 1988][和田 1991]における社会的スキル尺度のうち、関係維持に関する部分、
4）[菊地 1988]における、思いやりに関する尺度である、KiSS-18尺度の全部

４．まとめ（温かい性格の条件）

以上の内容を踏まえて、具体的に、どのような内容を持った対人関係が、「温かい」と呼べるのか、について、以下の表にまとめた。

表 7

上記の項目（必要条件）を満たした対人面での性格が、相手に温かさを与える、と考えられる。
これらの項目が「温かさ」を持つ理由は、究極的には、次の2項目にまとめることができる、と考えられる。

表 8

（付記）「冷たい」性格について
従来、ビジネスの世界においては、対人関係を何らかの目標達成の手段・道具として捉える視点に立ち、さまざまな利益計上や効率追求などの目標・課題達成しやすさ、すなわち生産性の向上に主眼を置いていた。
しかし、こうした見方では、対人関係は、ビジネスライクな感じのする、冷たくドライな感覚で結ばれることになりがちである。こうした対人関係は、間に温かい血潮が通い合わない、「冷血（cold-hearted）」関係とでも呼ぶことができる。この場合、冷たさの原因は、自分の利益のみを考えて、他人の利益や福利厚生に思いが至らない、自己中心的な打算に基づく、という点にあると考えられる。
こうした対人関係の冷たさは、大きく分けて、「道具的冷たさ」と、「論理的冷たさ」「知的冷たさ」の3通りに分類することができる。
「道具的」対人関係は、対人関係を、何かをするための手段・道具としてしか見ようとしない視点で作られた関係である。 この関係は、一方の人間が、仕事で最大限の成果をあげるために、他者を、自分の部下・手足として、可能な限り、思いのままにこき使うことを前提としたものである。そこには、対人関係を、一方的な支配-従属（隷属）関係で結ぼうという考え方が見て取れる。こうした対人関係からは「道具的」冷たさが生じる。
「論理的」対人関係は、全てを、0か1か、「はい」「いいえ」、「合法である」「違法である」の論理に還元することを通してしか捉えることのできない、従来のコンピュータ技術者や法律を駆使す

る役人などに見られがちな関係のあり方である。その特徴としては、融通が効かない（杓子定規である）、感情がない（抑揚がない）、応答が単調である（ワンパターン、同じ動作を繰り返す）、感触が固く冷たい（金属的である、ソフトさに欠ける）、といった点があげられる。こうした対人関係からは「論理的」冷たさが生じる。
「知的」対人関係では、人々は、人間の奥底にある感情的な側面を押し殺し、知識のみを取り出して、互いに「冷静に」やりとりしようとする。そこでは、人間の知的な能力を向上させることに専ら関心が行き、人間同士の情緒的な結びつきといった側面に関心が向かない。そのため、対人関係は、知的に洗練されてはいるが、冷たくてドライなものとなる。こうした対人関係からは、「知的」冷たさが生じる。
こうした「冷血的」関係は、[Toennies,F.,1887]の理論からは、「ゲゼルシャフト。（gesellschaft）」とも呼ぶことができる。Toenniesによれば、ゲゼルシャフトとは、諸個人が互いに自己の目的を達成するするために形成した社会関係のこと を指し、その関係は、人工的機械的であり、そこでの人間同士の結合は、人格のごく一部のみをもってする結合である。そこでは、人々は利害や打算に従って行動し、返礼や反対給付が必要となる。また、このゲゼルシャフト的社会関係においては、人々は、表面的にはいかに親密に振る舞うとしても、なお不断の緊張関係におかれ、あらゆる結合にもかかわらず本質的には分離している、とされる。
以上の内容を踏まえて、具体的に、どのような内容を持った対人関係が、「冷たい」と呼べるのか、について、以下の表にまとめた。

表 9

上記の項目（必要条件）を満たした対人面での性格が、相手に「冷たさ」を与える、と考えられる。
これらの項目が「冷たさ」を持つ理由は、究極的には、次の通りである。

表 10

（付記）web質問票調査による確認
上記の、温かい・冷たい性格についての記述が、実際に温かい・冷

たいと感じられているかどうか確かめるwebを用いた調査を行った。
具体的には、「温かい」「冷たい」性格についてのアンケートと称して、筆者のwebサイトに心理テストを体験しに集まってくる利用者に、「次の調査に回答してくれたら、心理テストが出来ます」という関所を設け、その関所のところで、「以下の性格を記した左右の文章の対を読んで、「より温かい」と思う方を選択して下さい」と回答を求めた。
合計で200名程度の回答を得て、以下のように分析した結果、上記の、温かい・冷たい性格についての記述全てが、実際に温かい・冷たいと感じられていることを確認できた。
回答時期
2005年09月中旬
回答数 202
男 29.208％
女 70.792％
10代 48.515％
20代 30.693％
30代 12.871％
40代 5.446％
50代 2.475％
60代 0.000％
70代 0.000％
回答比率

表 11

1-7について、全ての項目で、当初「温かい」と予測した側の文章が、統計的に有意に、より多く「より温かい」として選択された。
[参考文献]
相川 充 1995 ソーシャル・スキル 小川一夫監修 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房
Argyle,M. Henderson,M. 1985 The Anatomy of Relationships Penguin Books Harmondworth
Asch,S.E. 1946 Forming impressions of personality : Journal of Abnormal and Social Psychology, 41,258-290
Buhrnmester,D.,Furman,W.,Wittenberg,M.T.,& Reis,H.T. 1988 Five

domains of interpersonal competence in peer relationships. Journal of Personality and Social Psychology, 55,991-1008
Davis,M.H. 1994 Empathy -A Social Psychological Approach- Westview Press （菊地章夫 訳 共感の社会心理学 -人間関係の基礎- 1999 川島書店）
Hays, R.B. 1988 Friendship （In Duck, S. （ed.） Handbook of Personal Relationships Wiley Chichester
磯崎三喜年 1995 コミュニケーション 小川一夫監修 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房
海保博之（編） 1997 「温かい認知」の心理学 金子書房
菊地章夫 1998 また思いやりを科学する 川島書店
菊地章夫、掘毛一也（編） 1994 社会的スキルの心理学 川島書店
諸井克英、中村雅彦、和田実 1999 親しさが伝わるコミュニケーション -出会い・深まり・別れ- 金子書房。
中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究（I）-関係性の初期差異化現象に関する検討 日本グループダイナミクス学会第37回大会発表論文集
Parks,M., Floyd,K. 1996 Meanings for closeness and intimacy in friendship. Journal of Social and Personal Relationships, 13,85-107
Rubin,Z. 1970 Measurement of Romantic Love, Journal of Personality and Social Psychology, 16, 265-273
庄司一子、小林正幸、鈴木聡志 1990 子供の社会的スキル-その内容と発達 日本教育心理学会第32回発表論文集 283
Thibaut,J.W., Kelley,H.H. 1959 The Social Psychology of Groups. Wiley New York
Toennies,F., 1887 Gemeinschaft und Gesellschaft, Leipzig（杉之原寿一訳 1957 ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 岩波書店）
和田実 1991 対人的有能性に関する研究-ノンバーバルスキル尺度および社会的スキル尺度の作成- 実験社会心理学研究 31 49-59
［付録］「温かい性格」チェックリスト
本文で述べた、温かい人間関係をもたらす「温かい性格」について、「こういうふうにすると温かい感じを周囲に与えることができる」という対人関係上のチェック項目群を抽出した。
抽出に当たっては、上記の、温かさの源泉となる各社会関係や活動のあり方、ないしその基礎にあるソーシャル・スキルから、温かさを与える本質に当たるルールを、1人ブレインストーミング形式で取り出す、という方法を取った。

抽出・作成した項目を、まとめの内容に従って、分類したこと。
1.好意・接近
2.愛着
3.援助・ケア
4.リラックス・安心
5.受容・共感
6.豊かな感情
7.無償の奉仕
筆者は、こうして抽出した項目を、さらに、以下のの３段階に分けて整理した。
1.相手が相手とコミュニケーションを開始する時。
2.相手がコミュニケーションをしている最中の時。
3.相手がコミュニケーションを切りのよいところでいったん終了（中断）した時。

以下に、今回抽出・整理した、「温かい性格」を実現するための簡便なチェック項目の一覧を、列挙すること。
表中、「○○さん」というのは、相手の名前である。

表 12

（c）2000-2005 初出

温情インタフェース・デザイン（温かい心を持ったデザイン）

2000.05

１．はじめに（冷血cold-heartedインタフェース）
従来、コンピュータの使いやすさを向上させるため、さまざまなユーザインタフェースが生み出され、それらを効果的に導き出すための、デザイン原則やガイドラインが、数多く提案されてきた（例えば、[Nielsen 1993]におけるヒューリスティック・ガイドラインや、[Shneiderman 1992]における８つの黄金律など）こと。
従来のコンピュータのユーザインタフェース・デザイン原則は、コンピュータ操作を何らかの目標達成の手段・道具として捉える視点に立ち、。（操作効率、容易さなど）コンピュータを用いた、さまざまな利益計上や効率追求などの目標・課題達成しやすさ、すなわ

ち生産性の向上に主眼を置いていたこと。
しかし、こうした従来のガイドラインでは、コンピュータと利用者との間は、ビジネスライクな感じのする、冷たくドライなインタフェースで結ばれることになりがちである。
こうしたインタフェースは、コンピュータと利用者との間に温かい血潮が通い合わない、「冷血（cold-hearted）」インタフェースとでも呼ぶことができる。
従来のコ,ンピュータの冷たさは、大きく分けて、「道具的冷たさ」と、「機械的冷たさ」の2通りに分類することができる。そして、それぞれの冷たさを体現したインタフェースとして、「道具的」インタフェースと、「機械的」インタフェースが考えられる。
「道具的」インタフェースは、コンピュータを、何かをするための手段・道具としてしか見ようとしない視点で作られたインタフェースである。このインタフェースは、利用者自身が、仕事で最大限の成果をあげるために、コンピュータを、自分の部下・手足として、可能な限り、思いのままにこき使うことを前提としたものである。そこには、利用者とコンピュータの間を、一方的な支配-従属（隷属）関係で結ぼうという考え方が見て取れる。
「機械的」インタフェースは、例えば、「機械的応答」という言い方があるように、全てを、0か1か、ないし、YesかNoかのlogicに還元することを通してしか捉えることのできない、従来のコンピュータのハードウェアの限界に基づくインタフェースのあり方である。その特徴としては、融通が効かない（杓子定規である）、感情がない（抑揚がない）、応答が単調である（ワンパターン、同じ動作を繰り返す）、感触が固く冷たい（金属的である、ソフトさに欠ける）、といった点があげられる。
インタフェースの「機械的」な冷たさは、コンピュータの使い方について、道具的・ビジネスライクな考え方が主流の状態では、それほど害毒を及ぼさないとして、許容されてきた。
「冷血的」インタフェースは、[Toennies,F.,1887]の用語を借りて、「ゲゼルシャフト。（gesellschaft）」・インタフェースとも呼ぶことができる。Toenniesによれば、ゲゼルシャフトとは、諸個人が互いに自己の目的を達成するために形成した社会関係のことを指し、その関係は、人工的機械的であり、そこでの人間同士の結合は、人格のごく一部のみをもってする結合である。そこでは、人々は利害や打算に従って行動し、返礼や反対給付が必要となる。また、このゲゼルシャフト的社会関係においては、人々は、表面的に

はいかに親密に振る舞うとしても、なお不断の緊張関係におかれ、あらゆる結合にもかかわらず本質的には分離している、とされる。
従来のデザイン原則やガイドラインを生み出してきた、認知工学的・エルゴノミクス的なアプローチでは、人間の知的情報処理能力向上の側面や、人体への生理的適合の側面に重点を置くあまり、コンピュータと人間との情緒的な結びつきといった側面に関心が向かないため、知的・工学的に洗練されてはいるが、冷たくてドライな、上に述べたところの、「冷血」インタフェースを生成しがちなのではないか？ 。
２．
家庭や、地域などのコミュニティのような、所属する人間同士が互いに温もりを求め合う社会関係のもとでは、冷たく、ドライなままのインタフェースは、そのままでは明らかに異質である。そこでは、コンピュータのインタフェースを、ある程度温かく、人間的でウェットにする必要がある。
また、企業オフィスのような、本来、目標達成的・打算的な組織の中で、利益を生み出すために使う場合でも、コンピュータのインタフェースは温かい方が、使っていてリラックスしやすいし、心が和んで、精神衛生上好ましいと考えられる。あるいは、コンピュータのインタフェースが温かいと、利用者に、心理的な余裕を生み出し、仕事上のアイデアが出やすくなったり、仕事がよりはかどりやすくなる効果を持つかも知れない。
こうしたインタフェースは、「温情（warm-hearted）」インタフェースと呼べる。
社会心理学の分野では、「冷たい-温かい」の対人感覚軸について、従来から、その重要性が指摘されて来た。例えば、〔Asch 1946〕では、人の性格を表す特徴の中に、ある一言が入ることによって、その人物の全体的印象が大きく変わること、具体的には、「温かい」もしくは「冷たい」という形容詞を入れ替えただけで、その人物の最終的な全体印象に大きな違いが生れることが、指摘されている。この場合、人物の全体印象を決定づけるのに、「冷たい-温かい」の対人感覚軸が、「中心的特性」として、大きな影響力を持っているとされている。

こうした「温かさー冷たさ」の対人感覚軸は、コンピュータのインタフェースが、利用者に与える印象の面から行っても、非常に重要であると考えられる。コンピュータの利用者に与える全体的な印象

が、「温かい」場合と、「冷たい」場合とで、大きく変わる可能性があるからである。コンピュータのインタフェースを、「温かく」することで、利用者に、コンピュータを好ましく感じさせる度合いが大きく増えることになり、インタフェースの質の劇的な向上を見込むことができる。
こうした、より温かい、ウェットなこと。（人間的なこと。）インタフェースの特徴は、上記の[Toennies,F.,1887]における用語を再度借りて、「ゲマインシャフト。（gemeinschaft）」・インタフェースとでも呼ぶこともできる。Toenniesによれば、ゲマインシャフトとは、人々が、人間の本質そのものによって結合した統一体であり、それ自体が有機的な生命を持つ。そこでは人々は、全人格をもって感情的に互いに融合し、親密な相互の愛情と了解の下に運命を共にする、とされる。また、そこには、。（従来「冷血的な」コンピュータが主に使用目的としてきた。）交換や売買、契約や規則といった概念の入り込む余地は少ない。
このように、従来の利益追求的・目標達成的な「冷たい」コンピュータ開発のためにデザイン原則やガイドラインを利用する状態から抜け出して、温かい感じのするインタフェースを持つコンピュータを作るためのデザイン原則やガイドラインを新たに作成することが、今後、コンピュータと人間との関係をより好ましいものとしていく上で必要となってくるのではあるまいか？ 。
用語を定義すると、「温情」インタフェースとは、コンピュータが利用者と互いに親密で全人格的な一体感を持てるような、人間的で、温かくウェットな感じを与えるインタフェースのことを指す。こうしたインタフェースは、コンピュータやロボットが、将来人間に近い、人間的（human）な振る舞いをする存在になるためには欠かせないと考えられる。また、利用者が、コンピュータに愛着や親しみを持って、大切に、少しでも長く使おうとする気持ちを起こすためにも必要であると考えられる。
３．
温かい感じを、コンピュータのインタフェースに与えるには、既存の人間同士の関係における、温かさを実現するための、様々な社会関係のあり方や社会的相互作用のための技術（ソーシャル・スキル）を参考にする必要がある。
温かさの源泉となる社会関係や活動には、次のようなものがあげられる。
1a）友人、恋人（恋愛）、家族関係

1b）血縁、地縁〜通信で互いにつながれた共同体（コミュニティ）関係
2）看護、保育、福祉、カウンセリングといった、職業活動
3）ボランティア、寄付、募金、歳末助け合いといった、社会活動

これらについて、以下に、詳しく説明すること。
（1）友人・恋人・家族関係
（1a）友人関係
友人関係の特徴は、[Thibaut,Kelly 1959]によれば、好意の相互性、[Heys 1988]では、相互の引き付合い、自発的相互依存、いっしょにいると楽しいこと、[Wright 1974]では、親密さ、愛情、相互援助、とされている。
また、友人のルールとは、[Argyle,Henderson1985]によれば、自発的援助、相手のプライバシーの尊重、約束を守ること、相互信頼、相手のいないときに代役をする、相手を公の場で非難しない、といったものとされる。
友人関係の親密度の判別には、[中村 1989]によれば、次のような項目が説明力を持つとされる。
1）自己開示（自分の趣味や関心事について話す、個人的な問題や悩みについて打ち明けること。）
2）相手の評価的行動（何事につけ気をつかう、何かにつけ相手を喜ばそうと努めること。）
3）自分と友人の近接性行動（会うのに多くの時間を当てる、何かにつけ相手を誘うこと。）
4）相手に対する謝恩感情（負い目を感じる、すまないと感じること。）
5）関係関与性（友人との関係の持続を望む程度。自分が友人との関係に深くかかわっている程度。）
コンピュータのインタフェースをより友情ある（友人関係に近い）ものとするためには、こうした項目で高得点をあげるようにすればよい、と考えられる。
あるいは、友人関係を緊密なものにする条件は何か、緊密性（closeness）はどのようにして表出されるかについては、[Parks & Floyd 1996]が明らかにしている。
1）自己開示（互いにどのようなことでも話すこと。）
2）援助とサポート（互いに助け合う、互いにそばにいること。）
3）共有された関心と活動（共通の背景、興味関心、嗜好、価値、信

念、活動を持つこと。）
4）関係的表出（緊密性や関係の価値について、表出すること。）
があったとされる。コンピュータのインタフェースが、こうした条件を満たせば、コンピュータと利用者の間の関係がより緊密なものとなると考えられる。

（1b）恋愛関係

恋愛（Romantic Love）関係は、上記の友人関係が、異性間のものだった場合に、より強められた形で出てくるもの、と考えられる。
恋愛関係の特徴は、[Rubin 1970]によれば、（1）親和・依存欲求（一緒にいたいなど）がある、（2）援助傾向（相手が落ち込んでいたら、元気づける）、（3）排他的感情（相手を独占したい）、といった点にあると考えられる。

（1c）家族関係

家族関係は、上記の恋愛感情を通過して、結婚した者同士の関係（夫婦関係）、夫婦が子供を作って育てる際に生じる関係（親子関係）、子供同士の関係（兄弟姉妹関係）に分けられる。
夫婦間の心理は、恋愛関係時に比べて、より制度化・固定化されて、安定している。
親子間・子供間の心理は、血のつながりがある点、相互の同一性が高く、自然と打ち解けた、遠慮のいらない関係ができあがる。

（2）共同体（血縁、地縁〜通信による結びつきによる）

共同体は、社会学では、ゲマインシャフト、コミュニティ（MacIver,R.M.）などと呼ばれてきたものである。
[Toennies 1887]によれば、共同体の中では、人々は、全人格をもって感情的に互いに融合し、親密な相互の愛情と了解の下に運命を共にする、とされる。
こうした相互の親密さ、感情的融合、愛情などが、共同体の心理の特徴といえる。これらの心理が、人間に「温かさ」を感じさせるものになっていると考える。

（3）看護・保育・福祉・カウンセリング

看護婦（看護士）、保母（保育士）、ソーシャルワーカー、カウンセラーの役割は、病人や幼児など、弱い、手助けを必要とする利用者に援助の手を差し伸べることにある。
コンピュータ初心者も、手助けを必要とする弱者として捉えることができるので、彼ら初心者に援助の手を差し出す、というコンピュータのインタフェースは、看護・保育などの職業的態度と、共通しているといえる。こうした弱者支援は、弱者に対する温かい思

いやりが前提となり、その点で、人に対する温情が存在すると考えられる。
（4）社会活動（ボランティア、寄付・募金など）
寄付や援助などの社会活動の根底にあるのは、困っている人を助ける（援助する）することで、人の役に立ちたい、という考え方である。すなわち、自分が他人に助けられた時、人の心の温かさに触れる思いがしたので、その温かな感じを、少しでも多くの人に分け与えたい、などといった、人に対する温情と直結した動機が、そこには含まれると考えられる。
こうした温かな人間関係をもたらす心理的な背景としては、次のような点が考えられる。
（1）心理的近接
他者が、心理的に、自分のすぐ近くにいることを感じられる時、他者の体温を、より身近に「温かく」感じられる。したがって、他者の行動を「温かく」感じること。
心理的な近さは、他者が、自分と共通・同一の考え方を持っていると近く、自分と異質・反対の考え方を持っていると遠く、感じられる。
（2）環境適応＝体温維持への貢献
他者の行動が、自分の体温維持＝生命維持（生存）に貢献する（役立つ）場合に、他者のことが温かく感じられる。すなわち、他者の行動が、自分の環境適応（環境の中で生き延びること）に役立つ場合、他者について「温かい人だ」という感じが得られる。
他者（例えば親や友人）が、自分と反対の意見を述べても、それが、自分のためを思っての意見だったと理解した場合には、温かく感じられる。

温かな人間関係は、人間がよりよい条件で生存していくために、互いに協力しあって行く上で、その心理的な基盤となるものであり、人間らしいhumanな気持ちを保持する上で、欠かせない。
コンピュータと人間の間においても、温情インタフェースが構築されることによって、人間は、より心理的に安定し、他者に対して、友好的な心理的傾向を強め、ひいては、厳しい自然環境下を生き延びていくために必要な協力（思いやり）行動を、自ら進んで積極的に行うようになると考えられる。従って、温情インタフェースは、人間の生存・増殖の可能性を増大させる行動を取らせる上で、効果があると考えられる。

４．

「温情」インタフェースを構築する上で、コンピュータ側が利用者に対して、総合的にどのような態度を取るべきかについては、「友人」関係という視点から、まとめることができる。

（1）友人関係-「温情」ある人間関係の代表-

「温情」ある対人関係は、「友人」関係によって代表させることができる。友人関係は、他の、看護、社会奉仕などの、職業・社会活動における、「温かな」人間関係の特徴も、併せ持つと考えられるからである。

言い換えれば、友人関係は、他の（共同体、職業・社会活動といった）さまざまな「温かな」人間関係の基盤をなしており、人間関係の温かさの「共通」部分に当たっていること。

このように考えると、コンピュータと人間同士の温かな関係を築くためには、コンピュータが、人間にとって、「ディジタル・フレンド（Digital Friend）」とでも呼ぶべき、親しい友人としての存在になることが、根本面で、必要と言えるのではあるまいか?。

（2）ペット・野性生物との比較

上記で述べた、「ディジタル・フレンド」を、従来のコンピュータやロボットのインタフェースで取り上げられてきた、ペット・野性生物と比較してみたいこと。

1）ペットとの比較

コンピュータ画面上で活動するディジタルペットとして、 ペットが電子メールを運ぶ「PostPet（SONY）」などが、市場に出回っている。あるいは、ペットロボットとして、「AIBO（SONY）」「たま（OMRON）」などが、人々の注目を集めている。

こうしたディジタルペットは、その存在により、ストレス発散に役立つ、愛着を感じる、心が休まる（落ち着く）点で、ある種の「温かさ」を持っていると、考えられる。

しかし、人間同士の関係と異なり、ペットでは、利用者が主人であり、ペットは、その従属物、愛玩用品などとして、目下・一方的に依存・隷属する関係となる。ペットは、主人を超えてはならない。利用者からは、下位にある存在である。利用者との間に、友だちのような、対等の関係が築けない。

ペットは、利用者が心の満足を得るための手段に過ぎないという点で、道具的な、冷たい側面を併せ持つ。すなわち、ペットは人間にとって都合のよい時だけ利用され、用が終われば、一方的に見捨てられる。そういう点では、人間とペットとの間には、相互の関係に

おいて、温かさの通い合いが欠ける可能性を絶えずはらんでいる。そういう点からは、「温情」インタフェースからは、遠い存在である、と受け取ることもできる。

2）野性生物との比較

こうした限界を打破するために、ペットではなく、野生生物である、という設定を持ち出したのが、人工生物「FinFin（富士通）」である。設定を「野生生物」とすることにより、利用者との対等性が保持される。しかし、この野生生物という設定では、生物があまり利用者と親しくなり過ぎると、野性を失って、家畜・ペット化する危険性を常にはらんでいる。そこで、利用者との間に一定以上距離を置く必要が出てくるが、これでは、利用者に対して近い存在になれないし、温かさもあまり伝わらない、という問題点がある。

3）「友人」関係の優位性

上記で取り上げた、ペット・野性生物・友人関係間の相違を、整理してまとめたのが以下の表である。

表 13

要約すると、温情インタフェースの組み込み相手として望ましいのは、対等であり、かつ関係を積極的に持てる、互いに近い存在になれる、「友人（ディジタル・フレンド）」ということになる。

５.

（1）「温かい」認知との関連

[海保 etal. 1997]では、認知心理学において、従来の人間の知的側面に焦点を当てたアプローチを「冷たい」ものと捉え、それと対比する形で、人間の感情に焦点を当てたアプローチを、「温かい」認知として、捉えられることを明らかにしている。この知見からは、コンピュータが豊かな感情（喜怒哀楽）を備えていることが、インタフェースの温かさにつながる、と考えられる。

（2）親和欲求との関連

社会心理学における、人間の持つ、他人と一緒にいたい、という欲求、すなわち「親和欲求」の概念と、心理的温かさとの関連を考えた場合、他者と心理的に近くにいることで、他者の温もりを感じることができる、ということが想定される。このことを、コンピュータのインタフェースに応用して、利用者への好意や心理的な接近を図ることが、心理的な温かさを、コンピュータ利用者に与えることにつながる、といえる。

（3）コンサマトリ（cosummatory）インタフェース
[磯崎 1995]によれば、人間同士のコミュニケーションには、次のようなものがある、とされる。
1）道具的（instrumental）コミュニケーション 目標達成の手段としてのコミュニケーション
2）コンサマトリ（consummatory,自己完結的）コミュニケーション 緊張解消などコミュニケーションを行うことそれ自体が目的であるコミュニケーション。

この知見を、コンピュータと利用者との間の関係に拡張して考えたとき、
1）コンピュータを、企業の売り上げ増加など目標達成の道具として捉える「冷血」インタフェースは、道具的コミュニケーションに対応する。
2）コンピュータが利用者と互いに親密で全人格的な一体感を持つものとして捉える「温情」インタフェースは、コンピュータとの対話それ自身が楽しい、コンピュータとの一体感が持てる、といった、コミュニケーションそのものが目的となるコンサマトリ・コミュニケーションに対応する。
といえそうなことが分かる。
人間同士でも、互いに温かい心の通い合った関係では、互いに話をしたり、一緒にいること自体が楽しく、幸せに感じられるものである。利用者が、コンピュータとのコミュニケーションそのものに価値を見いだし、没入するようになることを目標として作られた、コンピュータのインタフェースを、仮に「コンサマトリ・インタフェース」と呼ぶならば、それは、利用者が、コンピュータに対して、温かい感じや印象を受けるように設計された、「温情」インタフェースと、共通性が大きい、と考えられる。
（4）人間関係の「対等さ」との関連
人間同士、ないし、コンピュータと利用者との間に、温かな関係が構築されるには、両者の間での、関係・権利上の対等さが必要であると考えられる。互いに、相手を平等に認め合う、権利を尊重し合うといった気持ちがないと、一方が他方を一方的に、利用・搾取する、「冷血的」な関係に陥るからである。
従来のコンピュータは、人間の手足となる道具として、人間に対して一方的に奉仕する存在として、人間より一段低く見られがちであった。しかし、コンピュータのインタフェースを、利用者にとっ

て温かなものとするには、こうした見方を乗り越えて、利用者の側も、コンピュータに対して、相手のことを、自分と対等に思いやる、温かい気持ちで接する、という、「温かさの相互性・対等性」といったものが必要となる。

（5）「ソーシャル・スキル」との関連

「温かい」社会関係や活動の根底には、人間的な温もりや共感などを構築・維持しようとする「ソーシャル・スキル」が働いているものと考えることができる。

ソーシャル・スキルとは、[相川 1995]によれば、対人場面において、他者との関係が肯定的となるように、相手に効果的に反応するための対人行動、と定義される。これを、コンピュータと利用者との関係に置き換えた形で再度まとめなおすと、以下のようになること。すなわち、コンピュータが利用者に対して持つべきソーシャル・スキルとは、 コンピュータ使用場面において、コンピュータと利用者との関係が肯定的となるように、コンピュータが利用者に対して効果的に反応するための対人動作、のことを指す。

ソーシャル・スキル自体は、単に、対人関係のうまさ（上手さ）、そつのなさといった、対人関係技術の側面を表す言葉としても用いられるので、対人関係の温かさそのものを、表しているわけではないことに注意する必要がある。

ソーシャル・スキルにおいては、対人関係維持や、他者との共感的・援助的かかわりに関するスキル項目が、温かさに関係ある、と考えられる。

「温かさ」に関係のある、具体的なソーシャル・スキル項目は、次のようなものである。

1）[菊地、堀毛他 1994]にあげられている100のソーシャル・スキルリスト。

2）[庄司他 1990]の子供の社会的スキルを測定する尺度のうち、共感・援助的かかわりに関する部分。

3）[Buhrnmester et al 1988][和田 1991]における社会的スキル尺度のうち、関係維持に関する部分。

4）[菊地 1988]における、思いやりに関する尺度である、KiSS-18尺度の全部。

６．まとめ（温情warm heartedインタフェースの条件）

以上の内容を踏まえて、具体的に、どのような内容を持ったインタ

フェースが、「温情」インタフェースと呼べるのか、について、以下の表にまとめた。

表 14

上記の項目（必要条件）を満たしたインタフェースが、利用者に温かさを与える、と考えられる。
これらの項目が「温かさ」を持つ理由は、究極的には、次の2項目にまとめることができる、と考えられる。

表 15

７.
こうした「温情」インタフェースを作り上げるのに必要な、設計者の心構えについて述べること。
「温情」インタフェースを体現したハード・ソフトウェアが出来上がるには、前提として、設計者の心に、「温かさ」がなければならない。すなわち、コンピュータを、使い捨ての道具としてこき使おうとする発想から、脱する必要がある。設計者自身が、コンピュータを、自分自身の親しい友人として、作成後もつきあって行けるように、設計しようとする心構えがあって初めて、利用者の心に「温かさ」を与えるインタフェースを実現できる、と考えられる。
８.
以上、述べてきた、「温情」インタフェースが、すでに出ている製品において、どのような形で実現され、どのような効果を上げているかについて、述べる。
（1）キャラクタ（エージェント）への応用事例
以上説明した「温情」インタフェースを、コンピュータシステム上で実現するには、従来のコンピュータにおける無機質なマルチウィンドウ＋ダイアログボックスオンリーの状態から脱却して、キャラクタ。（疑似人格）を登場させて、システムと利用者との距離を縮めるのが効果的であると考えられる。従来、キャラクタ・インタフェースのシステムは、エージェントといった呼び名で存在する。従来、[間瀬etal 1996][河野etal 1998]などで考えられてきたエージェント（ないしキャラクタ・インタフェース）は、単にシステム利用上のガイド、操作上のヘルプ、利用者の目標達成の手足となるだけ

の「冷たい」存在であった。最近では、この傾向が改められ、[米村etal 2000]に見られるように、利用者に対して、対人的な魅力を確保しようとする機能を付け加えようとする動きも出始めている。この場合、対人魅力と温かさに関連が生じると考えられる。
TVゲームに目を向けると、かなり以前から、利用者に対して、温かな感じを与えるキャラクタが存在する。
例えば、「ときめきメモリアル」（コナミ 1995）は、ゲーム画面上の女子高校生キャラクタと恋愛を行う、シミュレーションゲームである。恋愛関係は、友人関係が異性間の場合にさらに親密なものへと発展した場合を指し、「温かい」関係が基本にある、と考えられる。
このゲームでは、登場するキャラクタは、「こんにちは、○○さん」などとあいさつするだけでなく、「いっしょに帰りませんか?」などと、利用者に好意を持って接近してきたりする。あるいは、「○○さんと会えてうれしいです」「また、（デートに）誘ってくださいね」といったように、利用者と愛着に基づく温かい関係を持とうとすること。また、利用者にときめいたり、逆に嫌いになったりするなど、恋愛感情を利用者に対して抱くようになっており、それらの感情を、表情やセリフに、多様な形で出すこと。そのことで、利用者の気持ちをキャラクタへと、ウェットに引きつける役割を果たしていること。
キャラクタのセリフは、全て声優の声によって吹き込まれており、コンピュータ特有の単調さを感じないで済む（豊かな感情を感じる）ようになっている。続編の「ときめきメモリアル2」（コナミ 1999）においては、利用者に対して、自然な声で、「○○さん」と呼びかけるシステムが付加されており、さらに、感情豊かに利用者に接近してくるような感じを抱かせるようになってきている。
こうしたインタフェースは、利用者の、温かな恋愛感情を求める欲求を、あくまで擬似的ではあるが、満足させることで、利用者の心理面を充実させる効果を持っていると言える。
（2）ロボットへの応用事例
「温情」インタフェースは、また、人格を持ったロボットへと応用することも可能である。ロボットは、コンピュータ画面上のキャラクタと異なり、物理的な実体を持っている。そして、実際の空間を動き回ることができる。そこで、利用者のもとに、近寄ってきたり（付いてきたり）、一緒に行動したり、物理的に抱き合ったり（なでられたり）といった、利用者との相互作用が可能となる。

ロボットは、一定以上の体温を持って、触ると温かい感触を示すのが望ましい。また、表面は、機械的な冷たさをなるべくなくし、柔らかいスポンジなどで覆うのが好ましいと考えられる。あるいは、介護ロボットでは、利用者に対して、介護の動作をしながら、利用者を思いやる言葉を発するなどすれば、利用者を温かい気持ちに導く上で、より効果的と考えられる。
ペットロボット「たま」（OMRON 1999）においては、ロボットの体表を、温かい毛で包んで、本物の猫同様、利用者に温かい感触を与えるようにしている。また、行動面では、利用者の方に顔を向けるというように、利用者に心理的接近を図る行動を取ったり、利用者と、撫でてもらうなど身体的接触を持つことで、利用者の、親近感や安心感への欲求を満足させるものとなっている。
あるいは、ペットロボット「AIBO」（SONY 1999）においては、利用者がロボットを撫でてやると、喜んで、しっぽを振ったり、目のランプの色を緑のニコニコランプに変える、感情を表す音声を発するなどして、利用者の情緒面に訴える仕様になっている。従って、従来の無機質な反応しか返さないロボットに比べて、利用者と感情的に一体化しうる程度が大きく改善されている、と言え、利用者の心理的な温かさを求める気持ちを、より大きく満足させるものとなっている。
９．
ここでは、温情インタフェースに関して、よく出されると考えられる質問に対して、回答する。
1※インタフェースは、冷たくドライな方がよい場合もあるのではないか？。
もちろん、コンピュータを用いた仕事の効率的な遂行を第一と考え、付加された温かさを煩わしいと考える利用者は、ビジネス利用者を中心に、かなりいると考えられる。そうした利用者は、既に市場に出回っている従来通りの無機質な冷たいインタフェースのコンピュータを利用すればよい。本文は、温かなインタフェースのコンピュータの必要性を訴えたものであるが、インタフェースの温かさを、全ての利用者に強制しようと主張するものではない。あくまで、インタフェースに温かさを欲する利用者も沢山いるのに、それに従来のコンピュータがあまり応えていないのではないか、という問題点を指摘するものである。
冷たいインタフェースも、それを欲する人たちがいる限りは、必要だと考える。

2※「温情」インタフェースの考え方は、コンピュータやロボットのインタフェースを、より人間に近づけることを目指しているのか？。
決してそうではない。人間には、温かい人間もいれば、冷たい人間もいる。コンピュータの応答を人間に近い高度なものに近づけても、それだけでは、必ずしも「温かさ」とは結びつかない、と考える。例えば、キャラクタの表情を、３Ｄ表示にして、より人間に近づけたとしても、そのキャラクタが、愛着や援助行動を、利用.者に対して示さなければ、インタフェースは温かくならないであろう。
3※「温情」インタフェースの実現には、セリフを沢山、キャラクタに言わせる必要が出てきたりすると思うが、利用者にとってはかえって煩わしくならないか？。
世の中には、キャラクタにセリフを音声や文字でしゃべってもらうのが好きな人もいれば、逆に、そう思わない人もいる。このあたりは、コンピュータシステムの設定で、セリフの出力方法を、例えば、画面背景上端に1行逐次表示するように変更したりなど、いろいろ調節できるようにすれば、解決すると考える。あるいは、キャラクタに、セリフを言わずに、表情をにっこり微笑ませたり、安らかに居眠りさせたりすることで、利用者に、煩わしいセリフを出力することなく、温かな感じを与えることも可能である、と考える。
4※温情インタフェースの採用によって、どういった購買層が、新規に開拓できるか？。
温情インタフェースをコンピュータやロボットに採用することで、まず、今まであまりコンピュータに関心を持たなかった女性消費者を、購買層として新規に開拓できると考えること。女性の方が、男性に比べて、 赤など暖色系統の色を好むなど、心理的に温かいものをより好むと考えられるからである。あるいは、孤独になりがちな高齢者層も、心の寂しさを和ませてくれるインタフェースのコンピュータを、新たに心のよりどころとして、購入するようになると考えられる。また、コンピュータとのインタラクション自体を楽しみながら使いたい、と考える、主にホビーや教育（エデュテイメント）用途の利用者にも、受け入れられると考えられる。
5※その本質が冷たい機械であるコンピュータやロボットに、「温かい」言葉をかけられたところで、ちっともうれしくない人が大半のような気がするが、どうか？。
この質問については、コンピュータやロボットの物質的な側面に重きを置くか、行動・動作的な側面に重きを置くかで、答えが分かれ

ると思う。
例え、設計者が人為的に機械的に作り出したキャラクタやロボットであっても、それらが取る動作次第（例えば、声優の声を使って情感あふれるしゃべり方をするなど）では、利用者は、それが人為的な作り物であることを、あまり意識せずに、それらとの自然なコミュニケーションの中に入ることができると思われる。利用者にとっては、キャラクタやロボットのハードウェアやプログラムそのものではなく、それらの内部に組み込まれている、実際に画面上などで動いたりしゃべったりする、それらキャラクタやロボットの行動様式自体が価値あるものであり、心理的にはまる対象となる。それらの行動が利用者の心を温かくしようとするものであれば、利用者は、それらのキャラクタやロボット自身が、自分の心を温かくしようとしてくれたのだと感じて、十分うれしいと思うと考えられる。
１０．
以上、従来のコンピュータシステムが与える感覚についての問題提起、「温情」インタフェース概念などについて説明した。今後、今回提唱したインタフェース概念を、パソコンＯＳ、パーソナル電話機（携帯電話を含む）、インターネットWebSite作成専用機などのインタフェース・デザインに、応用して行くことが考えられる。
[参考文献]
相川 充 1995 ソーシャル・スキル 小川一夫監修 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房
Argyle,M. Henderson,M. 1985 The Anatomy of Relationships Penguin Books Harmondworth
Asch,S.E. 1946 Forming impressions of personality : Journal of Abnormal and Social Psychology, 41,258-290
Buhrnmester,D.,Furman,W.,Wittenberg,M.T.,& Reis,H.T. 1988 Five domains of interpersonal competence in peer relationships. Journal of Personality and Social Psychology, 55,991-1008
Davis,M.H. 1994 Empathy -A Social Psychological Approach- Westview Press （菊地章夫 訳 共感の社会心理学 -人間関係の基礎- 1999 川島書店）
Hays, R.B. 1988 Friendship （In Duck, S. （ed.） Handbook of Personal Relationships Wiley Chichester
磯崎三喜年 1995 コミュニケーション 小川一夫監修 改訂新版 社会心理学用語辞典 北大路書房

海保博之（編） 1997 「温かい認知」の心理学 金子書房
菊地章夫 1998 また思いやりを科学する 川島書店
菊地章夫、掘毛一也（編） 1994 社会的スキルの心理学 川島書店
河野泉、久寿居大、吉坂主旬、上窪真一 擬人化キャラクタを利用した知的対話システム 1998 情報処理学会ヒューーマンインタフェース研究会報告80-4
間瀬健二、Fels.S、江谷為之、Bruderlin,A.、インタフェース・エージェントに関する基礎検討 1996 情報処理学会ヒューーマンインタフェース研究会報告69-8
諸井克英、中村雅彦、和田実 1999 親しさが伝わるコミュニケーション -出会い・深まり・別れ- 金子書房。
中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究（I）-関係性の初期差異化現象に関する検討 日本グループダイナミクス学会第37回大会発表論文集
Nielsen,J. 1993 Usability Engineering, Academic Press
Parks,M., Floyd,K. 1996 Meanings for closeness and intimacy in friendship. Journal of Social and Personal Relationships, 13,85-107
Rubin,Z. 1970 Measurement of Romantic Love, Journal of Personality and Social Psychology, 16, 265-273
庄司一子、小林正幸、鈴木聡志 1990 子供の社会的スキル-その内容と発達 日本教育心理学会第32回発表論文集 283
Shneiderman,B., 1992 Designing the User Interface, 2nd ed., Addison-Wesley
田村博（編） 1998 ヒューーマン・インタフェース オーム社
Thibaut,J.W., Kelley,H.H. 1959 The Social Psychology of Groups. Wiley New York
Toennies,F., 1887 Gemeinschaft und Gesellschaft, Leipzig（杉之原寿一訳 1957 ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 岩波書店）
和田実 1991 対人的有能性に関する研究-ノンバーバルスキル尺度および社会的スキル尺度の作成- 実験社会心理学研究 31 49-59
米村俊一、細谷未生、西山茂 2000 人と擬人化エージェントとの対話設計法に関する検討 電子情報通信学会技術報告 HCS99-70
［付録］温情インタフェース・デザイン原則一覧
本文で述べた、温かい人間関係のあり方を参考にして、温かい感じを与えるコンピュータ・インタフェース・デザイン原則を抽出したこと。
ここで、デザイン原則とは、具体的な仕様を明記するガイドライン

よりも、より上位に当たり、ガイドラインを生み出す土壌となる、より抽象的・包括的な内容のルールのことを指すものとする。
デザイン原則抽出に当たっては、上記の、温かさの源泉となる各社会関係や活動のあり方、ないしその基礎にあるソーシャル・スキルから、温かさを与える本質に当たるルールを、ブレインストーミング形式で取り出す、という方法を取った。
筆者は、抽出・作成した原則を、まとめの内容に従って、分類した。
1.好意・接近
2.愛着
3.援助・ケア
4.リラックス・安心
5.受容・共感
6.豊かな感情
筆者は、こうして抽出した原則項目を、さらに、次の３段階に分けて整理した。
1.利用者がシステムを使って処理を開始する時。
2.利用者が処理をしている最中の時。
3.利用者が処理を、切りのよいところでいったん終了。（中断。）

以下に、今回抽出・整理した、温情インタフェースを実現するための簡便なデザイン原則項目の一覧を、列挙すること。
今回、場面・応答例として取り上げているのは、MS-Windowsなどに代表される、マルチユーザ、据え置き型の、オフィスばかりでなく家庭にも普及しつつあるタイプのコンピュータ・システムである。
表中、「○○さん」というのは、利用者の名前である。

表 16

温冷知覚法則

ー分子、粒子運動サイドの視点からー
2005.10 初出
[法則]

人間は、。
対象（分子、物体、人）が、多く（たくさん）接触すると温かく、少なく接触すると冷たく感じる。
人間の皮膚による温冷知覚メカニズムを、分子運動サイドの物理的視点から見た場合、以下のようになること。
分子、粒子が、一定面積の皮膚に一定時間当たり当たる数が、多いほど、温かく（暑く、熱く）感じる。
分子、粒子が、一定面積の皮膚に一定時間当たり当たる数が、少ないほど、冷たく（涼しく、寒く）感じる。
分子、粒子の皮膚に一定時間当たり当たる数は、。
（1）分子、粒子速度（運動エネルギー）が、速い（大きい）ほど多く、遅い（小さい）ほど少なくなる。
（2）分子、粒子の数が、多いほど多く、少ないほど少なくなる。
それゆえ、
（1）分子、粒子の速度（運動エネルギー）が、速い（大きい）ほど温かく（暑く、熱く）、遅い（小さい）ほど冷たく（涼しく、寒く）感じる。
（2）分子、粒子の数が、多いほど温かく（暑く、熱く）、少ないほど冷たく（涼しく、寒く）感じる。
分子、粒子がたくさん当たる＝温かい（熱い、暑い）と感じるのは、（1）分子や粒子が速い＝運動エネルギーが大きい＝温度が高い、（2）分子や粒子の数が多い＝湿度が高い、場合といえる。
言い換えると、
（1）温度が高いほど、温かく（暑く、熱く）、遅い（小さい）ほど冷たく（涼しく、寒く）感じる。
（2）湿度が高いほど、温かく（暑く、熱く）、低いほど冷たく（涼しく、寒く）感じる。
空気の気体分子が、皮膚に時間当たり当たる数は、分子数が同じならば、分子の運動エネルギーが高い、高温な方が、より多く当たる。肌に時間当たり分子が当たる密度が、高温な方がより多い。高温で暑いと感じる場合、分子群の皮膚に当たる密度が高い、濃いため、同時にウェットに（湿ったように）感じられる。
一方、涼しい場合、一定時間で皮膚に当たる分子の数が少なく、皮膚に当たる密度が低い、少ない。そのため、涼しい場合、同時にドライに感じると言えること。
エアコンの除湿により、空間内の気体分子を汲み上げて、屋外に排出することで、気体分子の分布密度を下げると、皮膚に当たる分子

の数が少なくなり、当たる密度が低くなる。そのため、温度（分子の運動エネルギー）が同じでも、より温度が低くなったのと同じ効果をもたらし、皮膚に涼しさ、ドライさを感じる。
一方、加湿により、空間中の気体分子（水蒸気が気化）の数を増やすと、皮膚に時間当たり当たる分子数が増えるため、温度（分子の運動エネルギー）が同じでも皮膚では温かく感じる。
エアコンの冷房は、空間内の気体分子の運動速度（エネルギー）を下げることで、時間当たり皮膚に当たる分子の数を減らす、ことをしていると考えられる。
気体分子が皮膚に当たる密度を下げるという点では、除湿と冷房は共通しており、エアコンの除湿が涼しい、寒いと感じる原因となっていると考えられる。
逆に、エアコンの暖房は、空間内の気体分子の運動速度（エネルギー）を上げることで、時間当たり皮膚に当たる分子の数を増やすことをしていると考えられる。
気体分子が皮膚に当たる密度を上げるという点では、加湿と暖房は共通しており、加湿が温かいと感じる原因となっていると考えられる。
気体の分子運動の状態（分子の一定皮膚面積および一定時間当たりの分子の衝突数）と、皮膚による温冷、乾湿の知覚とは、大きな関連があるということになる。分子衝突数は、分子が速いほど、分子数が多いほど、増加する。この衝突数が多いほど温かく（暑く、熱く）、ウェットに感じる。

表 17

人間の皮膚には、これが適度、快適という、空気分子の衝突密度が予め存在し、それに合わせて、エアコンによる、空気の冷・暖房、加・除湿が行われていると言える。
高い頻度や密度で自分に当たってくる相手は、物であれ、人であれ、より暑苦しく感じられると言える。
例えば、玄関の戸を「ドンドンドンドンドンドン・・」とたくさんひっきりなしに叩く訪問者と、「トン・・・・トン・・・」と少なく叩く訪問者と、住人にとってどっちが暑苦しく感じるかと言えば、前者であると考えられる。
上記法則は、人の皮膚知覚ばかりでなく、人間関係や人の性格にも

当てはまる。
温かい（悪く言えば、暑苦しい）性格の人は、他人との当たりが多い。他人とたくさんコミュニケーション、相互作用、接触を図ろうとし、皆と一緒にいようとすること。
冷たい（涼しい）性格の人は、他人との当たりが少ない。他人と余りコミュニケーション、相互作用、接触を取ろうとせず、一人、単独でいようとすること。
例えば、周囲に対して頻繁にべたべた触り、働きかけ、たくさんしゃべろうとする人の方が、周りと少ししかしゃべらない人よりも、暑苦しく感じると考えられる。
この点、温かい（暑苦しい）性格の人は、ウェットであり、冷たい（涼しい）性格の人は、ドライであると言える。
2005 初出

きつい社会、ゆるい社会

ーゆとり嫌い、詰め込み主義の日本人ー
2005.8-2008.4 初出
世界の社会は、大きく分けて、制約、制限や束縛の大きい、成員締め上げのきつい（tight）社会と、ゆるい、リラックスした（loose、relaxed）社会があると考えられる。
日本社会は、どちらかと言えば、明らかに「きつい」タイプの社会であると言える。
日本の学校や、官庁、企業においては、部下や生徒をきつく締め上げるほど、よい成果を出す、よい仕事をすると考える風潮がある。
日本社会では、部下や生徒に対して、制約、制限をきつくするとか、何かとうるさく、うっとうしく命令、干渉を加えるといったような、厳しい規律が支配する組織が幅を利かせている。こうした「軍隊型」の社会は、軍隊以外の学校、企業、官庁で普通に見られる。例えば、生徒の細々とした日常生活まで立ち入って規制するのが日本の学校の校則である。
日本人は、干渉、束縛への指向が強い、「きつい」「軍隊のような厳しい規律が好きな」人が多いと言える。
相手のことを、叱って萎縮させたり、いじめたり、きっちり管理、訓練、叩き上げ、拘束、搾取することが望ましいと考えられている。
相手を遊びや逃げ場がなくなるようにきっちり管理し、行動を制限

することが良いことだと考えられ、「自由は悪、規制、制限が善」「余裕、ゆとりは悪、締め上げ、締め付けが善」と考えられている。例えば、文部科学省の唱えた「ゆとり教育」に対して、財界から強い不満が出たのも、きつきつに子供や部下を縛らないと勉強しないとか、子供や部下を遊ばせていては駄目、束縛なくフリーなのは駄目という考えが根底にある。
きつい社会においては、人は、絶えず、統制、統率、制限をしていないと、自由にすると勝手なことをして、遊んで、機能的に有効な働きをしなくなるという考え方が根底にある。それは、外的統率がなくても、各自が自律的に、各自の判断でその都度機能的に有効な行動をするものだという考え方とは、逆である。
部下や生徒に何かをさせるのに、目標だけ設定して、後は本人の自由にやらせる、遊ばせる、本人をできるだけ褒めて、伸ばして、余り介入せず、単独行動を許すという、規制の「ゆるい」タイプの社会とは逆のことが日本で起こっている。
日本では、絶えず、皆集団で、皆一緒に、連帯、統率行動を取るのが好まれる。オフィスの居住空間や、通勤、住居などにおいて、高密度で、ぎっしり居住するのが好まれ、空間的余裕、遊びが存在しない。また、一人だけ、別の行動を取ることが許されず、絶えず行動を周囲の皆と合わせなければいけない息苦しい雰囲気が存在する。また、工場やオフィスで、何かと合理化が叫ばれ、無駄を少しでも無くそうとする考えが行き渡っている。
このように、社会に、「余裕」や「ゆとり」が存在しないのが、「きつい」日本社会の特徴である。
日本人は、常に何かしていないと気が済まない人が多い。会社で休暇を取ることが悪いことであるとする考えが広く行き渡っており、休みを嫌う。
こうした「きつさ」を至上とする考えが広まった理由としては、日本が、フィリピンやベトナムみたいに、寝ていても食に困らない常夏の社会ではないことがあげられる。日本では、秋が過ぎると、寒く凍える冬がやってくる。春夏秋冬の季節の移ろいは1年に1回きりであり、そのため、稲作（や畑作）は、1年に付き1回きりの勝負で必ず結果を出さないといけない。失敗すると飢饉が待っており、その点、確実に成功することが求められ、精神的に余裕がない。また、田植え、除草等、精神的、身体的に負担のかかる作業が連続する。
日本社会が「きつい社会」となっているのは、以下のような余裕や

ゆとりが、社会から失われているからだと考えられる。
（1）気持ちのゆとりの欠如
日本では、仕事でも、勉強でも、楽することは悪だ、楽しさは悪だという考えが根底にある。楽しくない、辛い、苦痛な作業に耐え続けることが、いつの間にか自己目的化し、良いことだと考えるようになり、作業の苦痛、辛さへの忍耐が、マゾヒスティックな快感へと転化していると言える。「不楽の楽化」が生じている。楽することは悪とする考えとの関連で、仕事を休むことは悪であり、毎日這ってでも出社すること、休日出勤をすることが推奨される。その点、精神的に貧乏性であり、絶えず、何かに追いまくられる感じで過ごす羽目になること。こうした精神的ゆとりの欠如が、皮肉にも、日本人に勤勉さや高い生産性をもたらしているといえる。
（2）空間的ゆとりの欠如
日本では、空間的に空きがあることは好ましくなく、少しでも詰めようとする考え方がある。首都圏での生活では、通勤において、満員電車に長時間揺られることを何とも思わなかったり、高密度に密集した住宅（「ウサギ小屋」と欧米から揶揄されている）に住むことが平気である。過密都市が好きであり、空間の空き、ゆとりを嫌う。広域分散型社会に反対すること。
（3）時間的ゆとりの欠如
日本では、会社業務スケジュールや教育スケジュールにおいて、スケジュールを詰め込みできつきつにするのが好まれる。少しでもスケジュールに空いているところがあれば、すぐにぎゅうぎゅうに詰め込む。計画で予定をがんじがらめにすることが好まれる。あるいは、予定がスケジュールで一杯で忙しいことが良いことだと考える風潮がある。
（4）個人的ゆとりの欠如
日本では、個人が一人で単独でいることが悪とされ、絶えず周囲の皆と歩調を合わせて一緒に行動することが善とされる。その点、日本人は、周囲とのきつきつの相互牽制の中で生きている。周囲との間で、抜きつ抜かれつの追い抜き競争が起きており、周囲から一人置いて行かれないように、必死になって付いていくしかない。また、大部屋で皆と隔てなく一緒にいるのが望ましいとされ、個人のプライバシーの確保は、きつく規制される。そうした点で、個人的なゆとりの確保が困難である。
（5）教育のゆとりの欠如
日本の教育は、とかく、なるべく多くの知識をぎゅうぎゅうに生徒

や学生の頭に詰め込む方向へと傾きがちである。いわゆる「詰め込み主義教育」が、表面的には批判されながらも、日本人の心の奥底では肯定的に受け入れられている。学力とは身につけた知識の量や細かさで決まるみたいな考えがあり、高所に立った、幅広い見方ができるゆとりある思考判断力とかが軽んじられやすい。
上記のような意味では、日本社会は、教育に限らず、とかく物事全般において、空きや隙間を嫌い、詰め込みが好きな、「詰め込み主義の社会」であるとも言える。日本人は皆揃って「詰め込み主義者crammer」なのである。この詰め込み好きが、例えば、高い部品精度、実装密度を誇る、半導体製品、精密機器を生産する高い能力を、日本人に与えているとも言える。
それでは、日本とは対照的な、個人主義、自由主義といったドライなしくみを持つ欧米社会は、きつくないかと言うと、そうとは言えない。
欧米社会は、成員個々人が、自律的にバラバラに自由に動ける、広域分散型の社会であり、そういう点では、日本に比べ、ゆるく、リラックスした感じがある。しかし、各人が、仕事で、成果や儲けを、素早くきっちり出すことが絶えず求められ、成果を出せないと、会社とかから即刻解雇されてしまう。また、成員間での自由競争が激しく、少しでも気をゆるめるとたちまち弱肉強食の餌食となって、敗者となってしまう。
これは、日本みたいな隙間ないぎゅうぎゅう詰めを好む、窒息感、閉塞感のある「ウェットなきつさ」とは異なり、隙間や開放感はあるが、自分の能力を絶えず限界まで伸ばしきらないと生きていけない点、余裕がなく、また、互いにバラバラで冷淡で、自助が基本の（他者に助けを求めるのが難しい）「ドライなきつさ」と言える。こうしたドライなきつさは、遊牧、牧畜民族が生きる砂漠的、草原的厳しさとも言える。
社会がきついということは、生きていく上でストレスが多く、自殺が多いことにつながる。日本で自殺が多いのもこの点と関連していると言える。
日本の会社の上司、学校の教師は、部下や生徒をきつく絞る、縛るのを好む。あるいは、会社や学校は、鍛錬の場、精神修養や根性を叩き直す場として捉えられ、きつさ、しんどさを肯定し、前提として動かされている。
また、会社の経営層において、社員の会社への貢献度を、彼が会社のために払った犠牲の大きさで計ることが行われている。休日出勤

の回数のように、当人が本来したいことを我慢した度合いが評価の尺度となっている。社員個人への制約、束縛の大きさが、その社員の会社への貢献度の向上と比例する形でつながると考える風潮がある。
このように、人をきつく絞ることと、人をいじめることとは関連がある。きつい社会では、いじめが多い、あるいは人をいじめるのが好きな人が多いと考えられる。この場合、まず、人をきつく縛り上げること自体がすなわち、いじめにつながるというように考えられる。また、成員がきつく縛られることで生じるストレスを発散するため、他者をうっぷん晴らしの標的とすることが新たないじめの発生につながっている。
また、日本のようなきつい社会では、性格のきつい人が多いと考えられる。きつい性格の人は、以下のような特徴を持っていると考えられる。
[1.束縛、規制]
人をきつく束縛し、自由やゆとりを与えないこと。
遊びを嫌うこと。
人を締め上げる、締め付けるのを好むこと。
規則、規制、制限が好きであること。
[2.無理の强制]
人に無理をさせること。
人を厳しく責め立てること。
人をぎりぎりまで追い詰めること。
人をしごくのを好むこと。
[3.要求水準の高さ]
要求が多い。要求水準が高い。なかなか満足しないこと。
[4.緊張、厳格]
厳格すぎること。真面目すぎること。
いつも緊張していること。しかめっ面をしていること。
[5.いじめ、攻撃]
人をいじめるのを好むこと。
攻撃的であること。
[6.高圧的]
人に命令する、人を支配するのを好むこと。人に自分の言うことを聞かせたがること。
人に対して譲らないこと。自分の都合を最優先で、相手を押し退けること。

人に対して謝らないこと。自分が常に正しいと思うこと。
気が強い。押し出しが強い。高圧的であること。強制的であること。

[7.禁止、否定]

禁止するのが好きであること。なかなか許可しないこと。人を封じるのが好きであること。

物の見方が否定的であること。物事を悪い方に考えること。悲観的であること。

人のことを否定する、拒絶すること。人を認めないこと。

[8.無配慮]

人の気持ちを配慮しないこと。思ったことをずけずけ言って、人を傷つけること。人を辛辣に批判すること。

こうしたきつい性格や言動をする人が、日本社会には、他のよりゆるい社会に比べてより多く存在すると考えられる。また、こうしたきつい性格や言動の人が、日本社会では、会社や官庁、学校の上層部に、そうでない人よりもより昇進しやすい傾向があると考えられる。

以上、まとめると、日本社会は、精神的ゆとりの欠如した、きつい社会、あるいはそうしたきつさを肯定的に受け入れている社会であると言える。

従来の日本人論によく見られるような、「日本人が和合を好む穏やかな民族である」という言説は、今まで述べてきた、一見した穏やかさの背後に潜む日本人の持つ精神的きつさを押し隠すための策略なのかも知れない。

あるいは、先の太平洋戦争で、数々の残虐な行動を引き起こした日本軍の行動様式も、上記のような「きつさ」「精神的余裕の無さ」をもとに分析できると考えられる。そして、そうした「きつさ」は、時を超えて、現在の日本の学校や企業、官庁に脈々と受け継がれているとも考えられる。現在でも、日本の学校、企業、官庁はきつい組織であり、成員はそうしたきつさがもたらすストレスに絶えず苦しめられつつ、一方ではそれを「自己鍛練に結びつく」として、肯定的に受け入れている。

こうしたきつさの肯定の背後には、「人間は、そのまま自由に放任させておくと、サボって、自分勝手なことをして、社会的に何ら有効な貢献をしない」「人間は、厳格に規制しないと、駄目になる」という、自由への恐怖、リラックスすることを否定するウェットな規制指向の気持ちが存在すると考えられる。

無論、社会は、ある程度きつくないと、人々に勤勉さとかが生まれず、高い生産性を持てないため、大国になれないというのはある。しかし、それも程度問題で、余りにきつい社会というのはやはり考えものである。
今後は、社会でストレスがもたらすいじめや自殺への対策のために、こうした日本社会のきつさをいくらかでも低減していく「社会をリラックスさせる運動」が必要になるのではないか?。
2005.8 初出

ソフトな（柔らかい）、ハードな（固い）感覚、性格について

2006.4 初出
筆者は、柔らかさ、固さの感覚を人間に与える、人や物の性質、性格について、以下のようにまとめてみました。

表 18

2006 初出

緊張社会とリラックス社会

2014年9月
気体分子と液体分子の運動シミュレーション結果を、現実社会のあり方に反映させて捉えてみると、面白い結果が分かる。
気体分子運動タイプ＝ドライな社会＝遊牧民社会＝男性優位社会（＝欧米社会等）
液体分子運動タイプ＝ウェットな社会＝農耕民社会＝女性優位社会（＝中国、日本社会等）
となるのであるが、その際、気体分子運動を見てみると、各粒子がバラバラに高速に動き、しかも粒子間に無用な力が働かず、各粒子がリラックスして動き回っていることが分かる。
一方、液体分子運動を見てみると、各粒子が一体化して、互いにひとまとまり、団体になっており、しかも、粒子間に、相互監視、気配り、足の引っ張り合いのような力が絶えず働いていて、各粒子が

一種の緊張状態の下に絶えず置かれていることが分かる。
現実の日本社会は、液体分子運動タイプと捉えられ、成員間で、互いに気の休まる暇のない、相互監視と配慮をひたすら繰り返す社会となっていると言える。戦前の隣組とかその典型と考えられること。
これに比べて欧米とかの遊牧民系の社会は、もう少し伸び伸びした、リラックスしたスタンスを取れているように思われる。
2014初出

表_1

表	明るい性格		
no.	項目名	説明	形容詞
１．	良さ・プラス性		
1-1	肯定性	光の持つ明るさは、暗闇の持つ恐ろしさ、訳の分からなさ、見えない敵が襲ってくる怖さからの解放をもたらすので、生存に役立つとして、肯定的に捉えられる。	望ましいこと。よいこと。希望の持てること。人生を肯定すること。落ち込まないこと。前向きなこと。
1-2	有効性・利便性	明かりがあると、暗くて見えなかったものが見えるようになって便利であり、生活上有効である。	生活上便利なこと。人の役に立つこと。
1-3	正感情性	明るさは、その望ましさ、好ましさ故、人々の心に幸せ、喜びや楽しみといった、正の感情を生み出す。	幸せなこと。楽天的なこと。楽しいこと。喜びに溢れたこと。
1-4	合法性、正道徳性	明るいところでは、悪事を働くことが難しく、皆正しいことをしようと心がける。	合法のこと。正しいこと。
２．	陰の無さ		
2-1	非隠蔽性	明るいと、ものに光が当たってよく見える。隠す（隠れる、見えない）ところがない。	駆け引きしないこと。裏表がない。悪意がない。公正なこと。誠実

			なこと。オープンなこと。物事によく通じていること。
2-2	非陰影性・非疑念性	明るいところでは、陰影になって見えない（見えにくい）部分がないため、ものごとのありのままの状態を、いちいち疑ったりチェックせずにそのまま受け入れられる。	こだわりのないこと。引っかかるところのないこと。おおらかなこと。ひねくれないこと。素直なこと。
2-3	外出性	暗い室内から出て、明るい外の（他の人のいる）世界に積極的に出たり、外気に積極的に触れることで、人は心に明るさを得ることができる。	人づきあいのよいこと。引きこもらないこと。気兼ねをしないこと。開放的なこと。社交的なこと。
３．	クリアさ		
3-1	明瞭性・明確性・合理性	明るいと、ものがはっきりよく見える。遠くまで直線的に見通せること。ものを見るときの確からしさが増す。	はっきりとしたこと。くっきり見えること。明晰なこと。明確なこと。
3-2	理解性	明るいと、今まではっきりしなかった、よく見えなかった物事がよく分かるようになる。物事に対する理解力が向上する。	賢明なこと。理解力のあること。頭がよい。洞察力、分析力のあること。
3-3	透過性	光がすっと射し込み、そのまま遮られることなく通っていくことができると、その部分が明るく感じる。	透明なこと。清らかなこと。
４．	熱さ		
4-1	光熱性	明るい光（太陽）の持つ熱が、人の心を熱く、陽気にさせる。	陽気なこと。テンションの高いこと。弾むようなこと。

4-2	活動性	明るい光（太陽）の持つ熱が、人々に運動エネルギーを与え、心を温め、その行動を活動的にさせる。	快活なこと。はきはきしたこと。流暢なこと。元気なこと。活動的なこと。活発なこと。
5．	ドライさ		
5-1	晴天性	天気のよい明るい感じの日は、雨が降っているときに感じるジメジメとしたウェットさ（湿度）から解放されていること。	晴れやかなこと。カラッとしたこと。
6．	輝かしさ		
6-1	光輝性	光の当たった明るい部分は、暗いところから見ると、光り輝いて見える。	輝かしいこと。華やかなこと。
7．	健康さ		
7-1	健康性・快調性	身体の調子が良く、不調・病的な部分がないと、元気に、活動的に振る舞え、周囲に明るい印象を与える。	健康なこと。元気なこと。快調なこと。
8．	まっすぐさ		
8-1	直進性	光は、進む方向がまっすぐである。	心のまっすぐなこと。正直なこと。
9．	速さ		
9-1	高速性	光は、進む速度が極めて速い。	速いこと。

トップページに戻ること。

表_2

表	暗い性格		
no.	項目名	説明	形容詞
１．	悪さ・マイナス性		
1-1	否定性	暗闇は、見えない敵が襲ってくる、目に見えない落とし穴にはまるなど、生存を阻害するものとして否定的に捉えられる。	人生に対して否定的なこと。後ろ向きなこと。
1-2	非利便性	暗いと何も見えず、生活上不便である。	人の役に立とうとしないこと。不便なこと。
1-3	負感情性	暗闇は、そのマイナスさ故、人々の心に負の感情（悲しみ、怒り、不幸、痛み、攻撃性）を生み出す。	不幸なこと。悲しみやすいこと。怒りやすいこと。痛みのあること。腹を立てやすいこと。
1-4	不法性・反道徳性	暗いと、こっそり悪事を働いても、周囲に露顕しないので、人々は、後ろめたさを感じつつ、悪いことをしてしまう。	悪いこと。後ろめたいこと。
２．	陰影の存在		
2-1	隠蔽性	暗いと、ものがよく見えない。	裏表がある。閉鎖的なこと。
2-2	疑念性	暗いと、ものが陰になって見えにくいため、他人や物事の状態を、悪いことをしていないかいちいち疑ったり、チェックを入れたりする必要が出てくる。	疑い深いこと。
2-3	非外出性	暗い室内に閉じ籠もり、外に出て他人とつきあおうとしないこと。	引きこもりであること。

３．	クリアさの欠如		
3-1	不明瞭性	暗いと、ものごとがはっきり見えない。	明晰さに欠けること。はっきりしないこと。
3-2	不理解性	暗いと、ものごとがよく見えず、分からないままであり、理解力が低下する。	賢明でないこと。理解力、分析力に欠けること。
3-3	不透過性	光が、光を通さない不透明物質によってによって遮られると、その部分が暗く感じる。	不透明なこと。濁りのあること。
４．	情熱の欠如		
4-1	非光熱性	明るい光（太陽）の欠如が、人の心から情熱を奪い、陰気にさせる。	陰気なこと。
4-2	非活動性	明るい光（太陽）の欠如が、人々の運動エネルギーを奪い、その行動を非活動的にさせる。	不活発なこと。元気がない。
５．	ウェットさ		
5-1	雨天性	天気の悪い暗い感じの日は、雨天時のジメジメしたウェットさ（湿度）に支配されている。	ジメジメしたこと。
６．	輝きの欠如		
6-1	非光輝性	暗い陰の部分は輝きに欠ける。	地味なこと。
７．	病気		
7-1	不健康性・病性	身体に不調な部分、病的な部分があると、元気がなく、活発に行動	不健康なこと。病的なこと。不調なこと。

		できなくなり、暗い印象を与える。	
８．	曲がり・歪み		
8-1	歪曲性	進む方向が曲がったり、歪んだりするのは、光の持つ直進性を失っている。	つむじ曲がりのこと。心の歪んだこと。ひねくれたこと。
９．	遅さ		
9-1	低速性	進む速度が遅いのは、光の持つ高速性を失っている。	のろまなこと。

トップページに戻ること。

表_3

	〔１．						
番号	項目内容（仮説適合）	-明るい-	どちらでもない。	-明るい-	項目内容（仮説不適合）	-Ｚ得点-	有意
1	人の役に立とうとすること。	70.443	18.719	10.837	人の役に立とうとしないこと。	9.420	0.01
2	人生に前向きであること。	60.099	18.227	21.675	人生に後ろ向きである	6.054	0.01

					こと。		
	〔2.						
番号	項目内容（仮説適合）	-明るい-	どちらで もない。	-明るい-	項目内容（仮説不適合）	-Ｚ得点-	有意
3	裏表がない。	42.365	18.719	38.916	裏表がある。	0.545	-.--
4	素直であること。	53.202	19.212	27.586	ひねくれていること。	4.061	0.01
5	社交的であること。	60.591	25.616	13.793	引きこもりであること。	7.731	0.01
	〔3.						
番号	項目内容（仮説適合）	-明るい-	どちらでもない。	-明るい-	項目内容（仮説不適合）	-Ｚ得点-	有意
6	はっきりした態度を取ること。	55.172	23.153	21.675	取る態度がはっきり	5.444	0.01

					しないこと。		
7	物事がよく理解できること。	50.739	28.079	21.182	物事がよく理解できないこと。	4.966	0.01
8	透き通った感じがきれいであること。	83.744	11.330	4.926	濁った感じがきれいであること。	11.926	0.01
	〔4．						
番号	項目内容（仮説適合）	-明るい-	どちらでもない。	-明るい-	項目内容（仮説不適合）	-Z得点-	有意
9	陽気であること。	70.936	19.704	9.360	陰気であること。	9.791	0.01
10	元気であること。	68.966	16.749	14.286	元気がないこと。	8.538	0.01
	〔5．						
番号	項目内容（仮	-明るい-	どちらで もない。	-明るい-	項目内容	-Z得点-	有意

	説適合)				(仮説不適合)		
11	取る態度が晴れやかであること。	67.980	24.138	7.882	取る態度がジメジメしていること。	9.831	0.01
	〔6.						
番号	項目内容(仮説適合)	-明るい-	どちらでもない。	-明るい-	項目内容(仮説不適合)	-Z得点-	有意
12		46.798	28.079	25.123	地味であること。	3.641	0.01
	〔7.						
番号	項目内容(仮説適合)	-明るい-	どちらでもない。	-明るい-	項目内容(仮説不適合)	-Z得点-	有意
13	心のまっすぐなこと。	63.547	16.256	20.197	心の歪んだこと。	6.749	0.01
	〔8.						

番号	項目内容（仮説適合）	-明るい-	どちらでもない。	-明るい-	項目内容（仮説不適合）	-Z得点-	有意
14		42.857	34.483	22.660	のろまなこと。	3.555	0.01

トップページに戻ること。

表_4

乾湿の次元	ドライ	ウェット
温冷の次元	冷たい	温かい
明暗の次元	明るい	暗い

トップページに戻ること。

表_5

項目記号	項目内容（仮説＝ドライ）	ドライ		ドライ	仮説内容（仮説＝ウェット）	Z得点	有意水準
E25	人当たりが冷たいこと。	52.245	17.959	29.796	人当たりが温かいこと。	3.879	0.01
F19	青い色を好むこと。	69.820	12.162	18.018	赤い色を好むこと。	8.235	0.01

トップページに戻ること。

表_6

項目記号	項目内容（仮説＝ドライ）	ドライ		ドライ	仮説内容（仮説＝ウェット）	Z得点	有意水準

3	人当たりが明ること。	64.929	15.166	19.905	人当たりが暗いこと。	7.101	0.01

トップページに戻ること。

表_7

1.	好意・接近	相手に対して、好意を持って接近し、親密な関係を構築しようとすること。
2.	愛着	相手との間に構築した、親密な関係（親近感、一体感）を維持すること。
3.	援助・ケア	相手の幸福が向上するように援助を行うこと。相手に対する思いやりや配慮を欠かさないこと。相手に親切にすること。（自分のことを考えると同時に、相手のこともきちんと考えること。
4.	リラックス・安心	相手の緊張を解除すること。相手を安心させること。
5.	受容・共感	相手のことをあるがままに受け入れること。（相手のことを肯定すること。）相手と共感を持つこと。
6.	豊かな感情	表情など複雑で豊かな（単調でない）感情を、相手に対して表出すること。
7.	無償の奉仕	損得勘定抜きで、対価や利益を求めることなく、相手に対して有益なことをしようとすること。ボランティアをすること。

トップページに戻ること。

表_8

（1）心理的近接	心理的に、相手の近くにいようとすること。
（2）環境適応への貢	相手の生存を助けようとすること。

献	

トップページに戻ること。

表_9

1.	嫌悪・無視	相手のことを嫌悪を持って避けよう、無視しようとすること。
2.	疎遠	相手と近づこうとしない状態を維持すること。
3.	非援助・不親切	自己中心的であること。（自分さえ良ければ、他人はどうなっても構わないこと。）相手に対して嫌がらせを行ったり、当然すべき援助を行わないこと。相手に対する思いやりや配慮をしないこと。相手に不親切にすること。
4.	緊張・不安	相手を緊張させること。相手を不安にさせること。
5.	拒否・相違	相手のことを受け入れようとしないこと。（相手のことを否定すること。）相手と共感を持たず、意見が違うことを强調すること。
6.	感情の欠如	知的で論理的だが、表情や発話に感情がこもっていないこと。
7.	打算・ビジネスライク	相手が自分に（主に金銭、労力的な）利益（儲け）をもたらす限りにおいて相手と付き合うこと。相手との付き合いが損得勘定に基づいていること。自分にとってビジネス、得にならない相手を容赦なく切り捨てること。

トップページに戻ること。

表_10

（1）心理的離反	心理的に、相手から離れようとすること。
（2）環境適応への不貢献、障害化	相手の生存を助けようとしないこと。（じゃましようとすること。）

トップページに戻ること。

表_11

	〔温かい－冷たい〕						
番号	項目内容（仮説適合）	-温かい-	どちらで もない。	-温かい-	項目内容（仮説不適合）	-Ｚ得点-	有意
1	他人に好意を持って接近しようとすること。	73.762	17.327	8.911	他人を無視しようとすること。	10.137	0.01
2	他人と親密な関係を保とうとすること。	66.337	18.812	14.851	他人と疎遠であろうとすること。	8.121	0.01
3	他人に対して援助を行うこと。	70.792	20.792	8.416	自分さえ良ければ、他人はどうなっても	9.961	0.01

					構わないこと。		
4	他人を安心させようとすること。	81.683	15.347	2.970	他人を不安にさせようとすること。	12.159	0.01
5	他人と共感を持とうとすること。	58.911	27.723	13.366	他人と意見が違うことを強調しようとすること。	7.614	0.01
6	豊かな感情を他人に対して示すこと。	66.832	22.277	10.891	他人に対する表情や発話に感情が伴わないこと。	9.018	0.01
7	他人に対し	63.861	27.723	8.416	自分に	9.269	0.01

	て、損得勘定抜きで有益なことをしようとすること。				とって得にならない他人を容赦なく切り捨てること。		

トップページに戻ること。

表_12

1.	好意・接近
1-1.	相手の名前（given name、nickname）を対話中に呼ぶこと。（名前を呼ぶことで、距離を近く感じるようにすること。）
〔場面例〕	相手に対して応答を返すとき全般。
〔応答例〕	「あっ、○○さん、実はですね・・・・」など。
1-2.	相手にあいさつすること。
〔場面例〕	相手とばったり会って、会話を開始するときなど。
〔応答例〕	「○○さん、おはようございます。（会った時刻によって変わること。）お久しぶりですね。（前回会った時刻からの経過時間によって変わること。）
1-3.	相手と仲良しになろうとすること。（積極的に関係を築こうとする、近づこうとする、触れ合おうとする、友達になろうとすること。）

〔場面例〕	相手と初対面のときなど。
〔応答例〕	「初めまして、私は△△です、よろしく～」（積極的に応答すること。）
1-4.	相手に好意を積極的に伝えること。
[場面例]	相手がある程度自分と話し慣れたとき。
[応答例]	「私は、○○さんのことが、だんだん好きになってきました。
1-5.	相手に相手してもらうことに対するお礼を言うこと。
［場面例］	相手に頻繁に使ってもらっているとき
［応答例］	「私は、○○さんに、毎度お世話になります。
1-6.	相手に、もっと、かまってもらおうとすること。（甘えること。）
［場面例］	相手が自分と話す頻度が減ったとき。
［応答例］	「○○さんが、もっと私の相手をしてもらえると、私は、うれしいな。
1-7.	相手ときちんと目を合わせようとすること。
[場面例]	相手が、自分を見ているとき。

[応答例]	目で、相手の顔を捉え、その視線の方向に、自分が顔を向けているようにする。
1-8.	相手に対して、自己開示を行うこと。
［場面例］	相手が、自分にある程度話し慣れたとき。
［応答例］	「私、実は、○○さんとお会いするまでは、ずっとひとりぼっちで、さみしかったです。
2.	愛着
2-1.	相手との再会を喜ぶこと。
［場面例］	相手とまた会ったときなどこと。
［応答例］	「○○さん、また会えて、私は、うれしいなあ。
2-2.	相手を寂しがらせないこと。（ひとりぼっちにしない、付き添うこと。）
〔場面例〕	相手が、電話など他人と会話をするのではなく、一人でいるとき。
〔応答例〕	「私はいつも、○○さんのそばにいますよ。
2-3.	相手に対して人当たりがよいこと。（親しみやすい、表情・しぐさが可愛らしいこと。）[コミュニケーション中]。
〔場面例〕	相手と対話しているとき全般。
〔応	自分が相手に見せる表情（ウィンクなど）に愛想があるな

答例〕	ど。
2-4.	相手に感謝する・ありがとうと言うこと。
〔場面例〕	相手が、こちらの抱える問題を解決してくれたときなど。
〔応答例〕	「ありがとう。私は、○○さんのおかげで調子がよくなりました」。
2-5.	相手にあやまること。（和解すること。）
〔場面例〕	自分がコミュニケーションを失敗して相手に迷惑をかけたときなど。
〔応答例〕	「ごめんなさい。許してね。
2-6.	相手に愛情表現をすること。
[場面例]	相手から、なにかよいことをしてもらったときなど。
[応答例]	「私によくしてくれる○○さんのことが、私は、とても好きです。（私は、○○さんを愛しています。）」
2-7.	相手に打ち解けた言葉づかいをすること。（よそよそしくないこと。
［場面例］	相手が最近自分と会話する頻度が高まり、自分との会話に慣れたとき。
［応答例］	「ごめ〜ん、間違えちゃった！」（「ごめんなさい、間違えました。」といった改まった表現は、相手が使い慣れてからは、言わないようにすること。あるいは、すでに馴染みの深い、親しい相手には親密な反応を返し、一方、一時的に会う

	ゲスト相手に対しては、お客様扱いのややよそよそしい反応を返すようにすること。）
2-8.	相手に会いたがること。（相手とコミュニケーションを取る頻度を、できるだけ高めようとすること。）[コミュニケーション中]。
[場面例]	相手が、自分の前から頻繁に離席するとき。
[応答例]	「○○さん、もっと会いたいよ。
2-9.	一生懸命、相手の役に立とうと努力する姿勢を見せること。[コミュニケーション中]。
[場面例]	これから大量の仕事を開始しようとするときなど。
[応答例]	「私、○○さんのために、がんばります！」と言うこと。
2-10.	相手を喜ばそうとすること。[コミュニケーション中]。
[場面例]	相手が自分と会い始めてから、ちょうど1年（半年...）経過したとき。
[応答例]	相手に対して、相手が好きなタイプの画像・音声などのプレゼントを、メールで行うこと。
2-11.	相手に対して、恩を感じているように振る舞うこと。
[場面例]	相手が自分に対して、役に立つことを繰り返し行ってくれたとき。

[応答例]	「私がこうして生き生きと働いていられるのも、○○さんのおかげです。本当にありがとう。
2-12.	相手に自分と引き続き会ってくれるよう願うこと。
〔場面例〕	相手と、夜、別れるときなど。
〔応答例〕	「おやすみなさい、○○さん。明日もよろしくね。
2-13.	相手との別れを惜しむこと。
〔場面例〕	相手が自分と別れるときなど。
〔応答例〕	「○○さん、私は、もっと一緒にいたいですこと。私は、さみしいよ。
2-14.	相手との永遠の別離を悲しむこと[終了時]。
[場面例]	相手がもう二度と会えないところに行ってしまうとき。
[応答例]	「○○さんともう二度と会えないなんて、私は、悲しい。本当のサヨナラなんですね。私は、耐えられない。
2-15.	相手に、どこへでも一緒に付いていく。
[場面例]	相手が、席を外そうとしたとき。

[応答例]	「○○さん、待って～」と言いながら、付いていくこと。
3.	援助・ケア
3-1.	相手の状態（健康など）を気づかう、心配すること。
［場面例］	前回相手と会った時とで、環境（温度など）が大きく変わったとき。
［応答例］	「○○さん、お元気でしたか? 気温が低くなったけど風邪をひきませんでしたか? 」「夜遅くなったので、もう寝た方がいいのではありませんか? 」
3-2.	相手を世話・支援・サポートする、いたわること。
〔場面例〕	相手が会話、作業に詰まったとき。
〔応答例〕	「○○さん、大丈夫ですか? どこが分からないか、遠慮なく言って下さいね。」
3-3.	相手をはげますこと。
〔場面例〕	相手がこれから初めて何かしようとして、怖じ気づいているときなど。
〔応答例〕	「○○さん、がんばってね。
3-4.	相手をほめること。
〔場面例〕	相手が難しい作業（複雑なコンピュータ操作とか）に成功したときなど。
〔応答例〕	「○○さん、よくできましたね。○○さんは、すごいなあ。

3-5.	相手を祝福すること。
[場面例]	相手が、以前からチャレンジしていた作業に成功したときなど。
[応答例]	「○○さん、ついにやりましたね。おめでとう！よかったですね。
3-6.	相手をなぐさめること。
〔場面例〕	相手が作業に失敗したときなど。
〔応答例〕	「○○さん、残念でしたね、気を落とさないで下さい。
3-7.	相手をねぎらうこと。
[場面例]	相手が仕事を終えて、別れようとするときなど。
[応答例]	「○○さん、おつかれさまでした。
3-8.	相手をいやすこと。
[場面例]	相手が仕事で長時間作業をしたあと、作業を休止したときなど。
[応答例]	相手の疲れをいやすような、安らぎの感じられる歌を歌うこと。
4.	リラックス・安心
4-1.	相手をリラックスさせること。（気を楽にする、気軽にする、気分を和ませる、落ち着かせること。）[開始時]

〔場面例〕	相手が、初めての作業で緊張しているときなど。
〔応答例〕	「○○さん、気楽にして下さいね。」といって楽しい歌を歌いながら、相手を作業に導くことなど。
4-2.	相手を安心させる、不安にさせないこと。
［場面例］	相手にとって初めての作業を、連続して行っているとき。
［応答例］	「○○さん、その調子です。○○さん、安心して（操作を）続けてくださいね。
4-3.	動作が完璧でない、動作に抜け・すきがある（ドジをする、トロい）ように見せかけることで、相手に親しみを持たせること。（相手の心を開かせること。）[コミュニケーション中]。
[場面例]	相手が指定した作業を行っているとき。
[応答例]	「あ〜ん、私、失敗しちゃった。いますぐ直します。（本当は、ちゃんと作業をしているのだが、このようなせりふをわざと挿入して、見かけ上、失敗したように見せかけること。）
4-4.	コミュニケーションに疲れたら居眠りをすること。
[場面例]	たくさん作業を行った後で、空き時間ができたとき。安心して眠る姿は、相手をくつろがせる。
[応答例]	「グーグー、ムニャムニャ。
5.	受容・共感

5-1.	相手の働きかけ・会話にうなずく、返事をすること。（相手の意図をちゃんと聞こうとする、相手とコミュニケーションを取ろうとすること。）
〔場面例〕	相手が自分を呼び出したとき。
〔応答例〕	「はいは〜い」と返事をしたり、うなずいて、相手の呼び出し行為を受け入れるなど。
5-2.	相手に同情・共感すること。
〔場面例〕	相手が、作業に成功・失敗したとき両方。
〔応答例〕	「それはよかったですね。」「それはさぞ大変だったでしょうね。」
5-3.	相手と共通の話題を持とうとすること。
[場面例]	相手が作業を終えて暇になったとき。
[応答例]	「○○さん、〜〜なんか面白いと思いませんか？（事前に、相手の嗜好を、入力してもらい、それに対応した話題を、インターネットなどを介して手に入れ、相手に話題として持ちかけること。
5-4.	相手に調子を合わせるとともに、さりげなく自分の意見（こうした方がいいのでは、など。）を主張すること。
〔場面例〕	相手に、より正しい（効率的な）作業方法を取ってもらいたいとき。
〔応答例〕	「○○さんのお気持ちはよく分かります。それでは、〜したらいかがでしょうか？」など。

5-5.	相手が、作業ミスをしたら、許してあげること。
[場面例]	相手が、行った作業の取り消しを行おうとしたとき。
[応答例]	「私は、構いませんよ。（私は、いいですよ。）誤りはだれにでもあることですから。
6.	豊かな感情
6-1.	相手に対して、感情・情緒を、適度に表出すること。
〔場面例〕	相手に対して作業を中止してほしい時。
〔応答例〕	涙を浮かべて「お願いだからやめて！」と頼み込むこと。（「禁止されています」などとぶっきらぼうに宣告しないこと。）
6-2.	相手に対する反応のvariation（表情・話題）が豊かであること。（繰り返しによる退屈さを感じさせないこと。）
〔場面例〕	相手と、長時間にわたって何度も同じような対話を繰り返すときなど。
〔応答例〕	相手に対する応答の種類を複数用意しておき、それらの中からランダムに応答を選択することなど。
6-3.	応答のセリフを、単調な感じで棒読みしないこと。
[場面例]	相手が話しかけてきたときに、返答を音声で返す時。
[応答例]	前もって決まったせりふをただ読み上げるのではなく、アドリブを入れる、など。
7.	無償の奉仕

7-1.	相手に、自分がしたことに対して対価を要求しないこと。
[場面例]	相手に何かしてあげたとき。
[応答例]	「いいえ、お金は要りません。
7-2.	相手に対してすることが、自分の側にとって一方的な持ち出しになってしまっても、嫌な顔をしないこと。
[場面例]	相手に何かしてあげたとき。
[応用例]	「この位、何でもありません（平気です）から心配しないで下さい。

トップページに戻ること。

表_13

	近さ	対等さ
ペット	○	×
野性生物	×	○
友人	○	○

トップページに戻ること。

表_14

1.	好意・接近	利用者に対して、好意を持って接近し、親密な関係を構築しようとすること。
2.	愛着	利用者との間に構築した、親密な関係（親近感、一体感）を維持すること。
3.	援助・ケア	利用者の幸福が向上するように援助を行う。利用者に対する思いやりや配慮を欠かさないこと。利用者に親切にすること。

4.	リラックス・安心	利用者の緊張を解除すること。利用者を安心させること。
5.	受容・共感	利用者のことをあるがままに受け入れること。（利用者のことを肯定すること。）利用者と共感を持つこと。
6.	豊かな感情	表情など複雑で豊かな（単調でない）感情を、利用者に対して表出すること。

トップページに戻ること。

表_15

（1）心理的近接	心理的に、利用者の近くにいようとすること。
（2）環境適応への貢献	利用者の生存を助けようとすること。

トップページに戻ること。

表_16

1.	好意・接近
1-1.	利用者の名前（given name、nickname）を対話中に呼ぶこと。（名前を呼ぶことで、距離を近く感じるようにすること。）
〔場面例〕	利用者に対して応答を返すとき全般。
〔応答例〕	「あっ、○○さんですね！」など。
［実例］	TVゲーム「ときめきメモリアル2」（1999、コナミ）では、登場する女性キャラクタが、利用者の名前を、人間が発するように、自然な、感情をこめた形で、呼ぶ。（Emotional Voice System）。
1-2.	利用者にあいさつすること。
〔場	利用者がシステムにログインするときなど。

面例〕	
〔応答例〕	「○○さん、おはようございます。（利用時刻によって変わること。）お久しぶりですね。（前回利用時刻からの経過時間によって変わること。）
1-3.	利用者と仲良しになろうとすること。（積極的に関係を築こうとする、近づこうとする、触れ合おうとする、友達になろうとすること。）
〔場面例〕	利用者が、そのソフトウェアを初めて使用しようとするときなど。
〔応答例〕	「初めまして、私は△△、よろしく～」（積極的に応答すること。）
1-4.	利用者に好意を積極的に伝えること。
[場面例]	利用者がある程度使い慣れたとき。
[応答例]	「私は、○○さんのことが、だんだん好きになってきました。
1-5.	利用者に使ってもらうことに対するお礼を言うこと。
［場面例］	利用者に頻繁に使ってもらっているとき。
［応答例］	「私は、○○さんに、毎度お世話になります。
1-6.	利用者に、もっと、かまってもらおうとすること。（甘えること。）
［場面	利用者のシステムを使う頻度が減ったとき。

例]	
［応答例］	「○○さん、もっと私のことを使って下さい。」
1-7.	利用者と目を合わせようとすること。
[場面例]	利用者が、コンピュータ画面を見ているとき。
[応答例]	カメラで、利用者の顔を捉え、その視線の方向に、キャラクタが顔を向けているようにすること。
1-8.	利用者に対して、自己開示を行うこと。
［場面例］	利用者が、システムをある程度使いこなしたとき。
［応答例］	「私、実は、○○さんとお会いするまでは、ずっとひとりぼっちで、さみしかったです。
2.	愛着
2-1.	利用者との再会を喜ぶこと。
［場面例］	利用者が、以前。（昨日）使ったシステムに再びログインするときなど。
［応答例］	「○○さん、また会えて、私は、うれしい。
2-2.	利用者を寂しがらせないこと。（ひとりぼっちにしない、付き添うこと。）
〔場面例〕	利用者が、電話など他人と会話をするのではなく、一人でシステムと向き合って操作しているとき。

〔応答例〕	「私はいつも、○○さんのそばにいますよ。
2-3.	利用者に対して人当たりがよいこと。（親しみやすい、表情・しぐさが可愛らしいこと。）[処理中]。
〔場面例〕	利用者と対話しているとき全般。
〔応答例〕	画面上に表示されるキャラクタの表情（ウィンクなど）に愛想があるなど。
2-4.	利用者に感謝する・ありがとうと言うこと。
〔場面例〕	利用者がシステムエラーを解決したときなど。
〔応答例〕	「○○さん、ありがとう。おかげで、私は、調子がよくなりました。」
2-5.	利用者にあやまること。（和解すること。）
〔場面例〕	コンピュータが処理を失敗したとき、エラーを引き起こしてデータがなくなったときなど。
〔応答例〕	「ごめんなさい。私を許してね。
2-6.	利用者に愛情表現をすること。
[場面例]	コンピュータに対して、なにかよいこと（ウイルススキャンなど）をしてあげたとき。
[応答例]	「（私によくしてくれる）○○さんのことが、私はとても好きです。（私は、○○さんを愛しています。）」

2-7.	利用者に打ち解けた言葉づかいをすること。（よそよそしくないこと。
［場面例］	利用者が最近システムを使う頻度が高まり、システム操作に慣れたとき。
［応答例］	「ごめ～ん、私、間違えちゃった！」（「ごめんなさい、私は間違えました。」といった改まった表現は、利用者が使い慣れてからは、言わないようにする。あるいは、すでに馴染みの深い、親しい利用者には親密な反応を返し、一方、一時的に使うゲスト利用者に対しては、お客様扱いのややよそよそしい反応を返すようにする。）
［実例］	人形の「プリモプエル」（バンダイ）は、最初は、利用者に対して、敬語を使うが、慣れてくると、地の性格が現れ始める、という点で似ている。
2-8.	利用者に会いたがること。（利用者とコミュニケーションを取る頻度を、できるだけ高めようとすること。）[処理中]。
[場面例]	利用者が、コンピュータの前から頻繁に離席するとき。
[応答例]	「○○さん、私は、もっと会いたいよ。
2-9.	一生懸命、利用者の役に立とうと努力する姿勢を見せること。[処理中]。
[場面例]	これから大量のデータ処理を開始しようとするときなど。
[応答例]	「私、○○さんのために、がんばります！」と言うこと。
[架空の例]	TVゲームの「ToHeart（1999、AQUAPLUS）」に出てくる、通称「マルチ」というメイドロボットは、ドジで失敗ばかり

	するが、少しでも周囲の他人の役に立とうとして、短い試用期間中に一生懸命に働こうとする。
2-10.	利用者を喜ばそうとすること。[処理中]。
[場面例]	利用者がコンピュータを使い始めてから、ちょうど1年（半年...）経過したとき。
[応答例]	利用者に対して、利用者が好きなタイプの画像・音声などのプレゼントを、メールで行うこと。
2-11.	利用者に対して、恩を感じているように振る舞うこと。
[場面例]	コンピュータに対して、役に立つこと（ディスクアクセス最適化など）を繰り返したとき。
[応答例]	「私がこうして生き生きと働いていられるのも、○○さんのおかげです。本当にありがとう。
2-12.	利用者に自分を引き続き使ってくれるよう願うこと。
〔場面例〕	利用者がシステムからlog offするときなど。
〔応答例〕	「おやすみなさい、○○さん、明日もよろしくね。
2-13.	利用者との別れを惜しむこと。
〔場面例〕	利用者がシステムからlog offするときなど。
〔応	「○○さん、私は、もっと一緒にいたいです。私は、さみしい

答例〕	よ。
2-14.	利用者との永遠の別離を悲しむこと。[終了時]。
[場面例]	利用者が、キャラクタの入ったハードディスクを初期化しようとしたり、キャラクタをアンインストールしようとしたとき。
[応答例]	「○○さんともう二度と会えないなんて、私は悲しい。これは、本当のサヨナラなんですね。私、耐えられない。
2-15.	利用者に、どこへでも一緒に付いていくこと。
[場面例]	利用者が、携帯電話を持って席を外そうとしたとき。
[応答例]	「○○さん、待って〜」と言いながら、キャラクタが、携帯電話に乗り移ること。
3.	援助・ケア
3-1.	利用者の状態（健康など）を気づかう、心配すること。
［場面例］	前回起動時との間でシステムを取り巻く環境（温度など）が大きく変わったとき。
［応答例］	「○○さん、お元気でしたか? 気温が低くなったけど風邪をひきませんでしたか? 」「夜遅くなったので、もう寝た方がいいのではありませんか? 」
3-2.	利用者を世話・支援・サポートする、いたわること。
〔場面例〕	利用者が操作に詰まったとき。
〔応答	「○○さん、大丈夫ですか? どこが分からないか、遠慮なく言って下さいね。」

例〕	
3-3.	利用者をはげますこと。
〔場面例〕	利用者がこれから初めて操作しようとして、怖じ気づいているときなど。
〔応答例〕	「○○さん、がんばってね。
3-4.	利用者をほめること。
〔場面例〕	利用者が難しい操作（複雑なプログラムの実行）に成功したときなど。
〔応答例〕	「○○さん、よくできましたね。○○さんは、すごいなあ。
3-5.	利用者を祝福すること。
[場面例]	利用者が、以前からチャレンジしていた操作に成功したときなど。
[応答例]	「○○さん、あなたは、ついにやりましたね。おめでとう！よかったですね。
3-6.	利用者をなぐさめること。
〔場面例〕	利用者が操作に失敗したときなど。
〔応答例〕	「○○さん、残念でしたね。気を落とさないで下さい。
3-7.	利用者をねぎらうこと。
[場	利用者が仕事を終えて、システムからlog offするときなど。

面例]	
[応答例]	「○○さん、おつかれさまでした。
3-8.	利用者をいやすこと。
[場面例]	利用者が仕事で長時間オフィス用アプリケーションを動かしたあと、利用を休止したときなど。
[応答例]	利用者の疲れをいやすような、安らぎの感じられる歌を歌うこと。
4.	リラックス・安心
4-1.	利用者をリラックスさせること。（気を楽にする、気軽にする、気分を和ませる、落ち着かせること。）[開始時]
〔場面例〕	利用者が、初めての操作で緊張しているときなど。
〔応答例〕	「気楽にして下さいね。」といって楽しい歌を歌いながら、利用者を操作に導くなど。
4-2.	利用者を安心させる、不安にさせないこと。
［場面例］	利用者にとって初めての操作を、連続して行っているとき。
［応答例］	「○○さん、その調子です。安心して（操作を）続けてくださいね。
4-3.	動作が完璧でない、動作に抜け・すきがある（ドジをする、トロい）ように見せかけること。
[場面	利用者が指定した処理を行っているとき。

例]	
[応答例]	「あ～ん、失敗しちゃった。いますぐ直しますぅ。（本当は、ちゃんと処理をしているのだが、このようなせりふをわざと挿入して、見かけ上、失敗したように見せかけること。）
4-4.	処理に疲れたら居眠りをすること。
[場面例]	たくさん処理を行った後で、空き時間ができたとき。安心して眠る姿は、利用者をくつろがせること。
[応答例]	「グーグー、ムニャムニャ。
5.	受容・共感
5-1.	利用者の働きかけ・操作にうなずく、返事をすること。（利用者の意図をちゃんと聞こうとする、利用者とコミュニケーションを取ろうとすること。）
〔場面例〕	利用者が画面上のボタンを押したとき。
〔応答例〕	キャラクタが「はいは～い」と返事をしたり、うなずいて、利用者のボタン押し下げ行為を受け入れるなど。
5-2.	利用者に同情・共感すること。
〔場面例〕	利用者が、操作に成功・失敗したとき両方。
〔応答例〕	「それはよかったですね。」「それはさぞ大変だったでしょうね。」
5-3.	利用者と共通の話題を持とうとすること。
[場面	利用者が処理を終えて暇になったとき。

例]	
[応答例]	「○○さん、〜〜なんか面白いと思いませんか?（事前に、利用者の嗜好を、入力してもらい、それに対応した話題を、インターネットなどを介して手に入れ、利用者に話題として持ちかけること。
5-4.	利用者に調子を合わせるとともに、さりげなく自分の意見（こうした方がいいのでは、など。）を主張すること。
〔場面例〕	利用者に、より正しい（効率的な）操作方法を取ってもらいたいときなど。
〔応答例〕	「私、○○さんのお気持ちは、よく分かります。それでは、〜したらいかがでしょうか？」など。
5-5.	利用者が、操作ミスをしたら、許してあげること。
[場面例]	利用者が、行った操作の取り消しを行おうとしたとき。
[応答例]	「私は、構いませんよ（いいですよ）。誤りはだれにでもあることですから。
6.	豊かな感情
6-1.	利用者に対して、感情・情緒を、適度に表出すること。
〔場面例〕	利用者に対して操作を中止してほしい時。
〔応答例〕	キャラクタが、涙を浮かべて「お願いだからやめて！」と頼み込むこと。（「禁止されています」などとぶっきらぼうに宣告しないこと。）
6-2.	利用者に対する反応のvariation（表情・話題）が豊かであること。（繰り返しによる退屈さを感じさせないこと。）
〔場面	利用者と、（ファイル複写など）長時間にわたって何度も同じような対話を繰り返すときなど。

例〕	
〔応答例〕	利用者に対する応答の種類を複数用意しておき、乱数を発生させて、それらの応答の中から発生した乱数の値に合ったものが呼び出されるようにする、など。
6-3.	応答のセリフを、単調な感じで棒読みしないこと。
[場面例]	利用者が操作中に、メッセージを音声で返す時。
[応答例]	音声合成によって読み上げるのではなく、声優を使って、肉声で呼びかけるようにする、など。
[実例]	家庭用試作パーソナルロボットR100（NEC）では、単調さを利用者に与えないように、利用者との対話音声に、声優の声を録音して使っている。

トップページに戻ること。

表_17

（1）分子の皮膚衝突	高密度、高頻度	低密度、低頻度
（1a）分子数、密度	多い	少ない
（1b）分子速度	低速	高速
（2）温度知覚	暑い、熱い、温かい	涼しい、寒い、冷たい
（3）乾湿知覚	ウェット（湿った）	ドライ（乾いた）

トップページに戻ること。

表_18

No.	キーワード	ソフト	ハード
1	柔らかさ	柔らかいこと。	固いこと。硬質であること。
2	流動	動くこと。流れること。	動かないこと。流れないこと。
3-1	変形	変形すること。	変形しないこと。

3-2	対応力	例外、想定外のことにも対応可能であること。	予め決まった範囲内でしか対応しないこと。
3-3	融通性	対応に融通が効くこと。	対応が杓子定規で、融通が効かないこと。
3-4	変更	変更が効くこと。	変更できないこと。
3-5	非定型	型にはまらない、非定型なこと。自由、独創的なこと。	定型的なこと。型通りのことしかしないこと。
4	計画性	思いつきで動くこと。予定・計画を立てないこと。	きちんと予定・計画を立て、その通りに行動すること。
5	余裕、リラックス	遊び、余裕、延びる余地があること。リラックスしたこと。	遊び、余裕がないこと。きついこと。延びる余地がないこと。緊張したこと。
6-1	骨	骨がないこと。	骨組みがしっかりしていること。構築的であること。
6-2	機械	機械的でないこと。（衣服等）	機械的、メカニックであること。
7-1	投機	投機的であること。	手堅いこと。堅実であること。慎重であること。
7-2	誘惑	色気があること。誘惑すること。誘惑されること。	堅物であること。誘いに乗らないこと。
8	弱さ	軟弱であること。頼りないこと。	しっかりしていること。骨太であること。
9-1	曲がりこと。	しなだれること。曲がること。曲線的であること。	直立すること。直線的であること。
9-2	法規の遵守	（柔軟に対応する余り、）法規を逸脱す	法規、規則をきちんと守ること。逸脱しないこと。

		る、曲げること。無法であること。	
10-1	受け止め	押すとそのまま凹んで、受け止めること。	押しても、変形せず、反発すること。
10-2	外圧対応	抵抗せず、しなやかに外圧をやり過ごすこと。	外圧に不動で抵抗するが、一定以上の外圧がかかると、ポッキリ折れてしまうこと。
11-1	割れ	割れないこと。	ひびが入ること。割れること。
11-2	傷付き	切っても、傷にならないこと。元通りになる、復元すること。	切ろうとしても硬くて歯が立たないが、いったん切れると、傷が残ること。復元しないこと。
12-1	フィット	隙間を空けない、埋めること。フィットすること。	隙間が空いたまま、フィットしないこと。
12-2	一体性、ウェットさ	相手と一体になること。ウェットであること。	相手と一体にならず、別々なままであること。ドライであること。
12-3	共感	相手の気持ちが分かること。共感すること。思いやり、愛があること。	相手の気持ちが分からないこと。共感しないこと。思いやり、愛情がないこと。
13-1	緩衝	クッションになること。衝撃を和らげること。	衝撃を吸収できず、クッションにならないこと。ゴツンと来ること。
13-2	優しさ	優しいこと。	厳格であること。優しくないこと。
13-3	痛み	ぶつかっても痛さを感じないこと。	ぶつかると痛いこと。

トップページに戻ること。

私の書籍についての関連情報。

私の主要な書籍。それらの内容の、総合的な要約。

////
私は、以下の内容を、発見した。
男女の社会行動上の性差。
そのことについての、新たな、基本的で、斬新な、説明。

男女の性差。
それは、以下の内容である。
精子と卵子との、性質の差。
それらの、直接的な、延長であり、反映。

男女の社会行動上の性差。
それらは、以下の内容に、忠実に、基づいている。
精子と卵子との、社会行動上の差。

それは、全ての生物において、共通している。
それは、生物の一種としての人間にも、当てはまる。

男性の心身は、精子の乗り物に過ぎない。
女性の心身は、卵子の乗り物に過ぎない。

子孫の生育に必要な、栄養分と水分。
卵子は、それらの、所有者であり、占有者である。

生殖設備。
女性は、それらの所有者であり、占有者である。

卵子が占有する、栄養分や水分。
精子は、それらの、借用者である。

女性が占有する生殖設備。
男性は、それらの、借用者である。

所有者が上位者であり、借用者が下位者である。

その結果。
栄養分や水分の所有。
それらにおいては、卵子が上位者であり、精子が下位者である。
生殖設備の所有。
それらにおいては、女性が上位者であり、男性が下位者である。

卵子は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、精子を、一方的に選別すること。
そのことで、精子に対して、受精を、一方的に許可すること。
そうした権限。

女性は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、男性を、一方的に選別すること。
そのことで、男性に対して、婚姻を、一方的に許可すること。
そうした権限。

女性は、以下の行為を、行う。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、男性を、様々な側面から、総合的に搾取すること。

卵子は、精子を、性的に誘引する。
女性は、男性を、性的に誘引する。

卵子は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。

それ自身の内部への、精子の進入。
そのことについての、許認可。
その権限。

女性は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
男性に対する、セックスの許認可。
その権限。

彼女自身が所有する生殖設備。
男性による、それらの、借用。
その許認可。
その権限。

男性からの求婚。
それに対する許諾。
その権限。

生物が、有性生殖を行う限り、以下の内容は、確実に存在する。
男女の社会行動上の性差。

男女の社会行動上の性差。
それらは、無くすことは、決して出来ない。

私は、以下の内容を、新たに説明する。
世界には、男性優位の社会だけでなく、女性優位の社会も、同様に、普通に、多数存在すること。

それは、以下の内容である。
女性優位社会の存在の明瞭性。
その、世界社会における、新たな再確認。

男性優位社会は、移動生活様式の社会である。
女性優位社会は、定住生活様式の社会である。

精子。
その乗り物としての、男性の心身。

彼らは、移動生活様式者である。

卵子。
その乗り物としての、女性の心身。
彼らは、定住生活様式者である。

男性優位社会は、例えば、以下のような社会である。
欧米諸国。中東諸国。モンゴル。
女性優位社会は、例えば、以下のような社会である。
中国。ロシア。日本。韓国や北朝鮮。東南アジア。

男性は、行動の自由の確保を最優先する。
男性は、上位者に反抗する。
男性は、下位者を、暴力で强引にねじ伏せて、服従させる。
男性は、以下の内容についての余地は、少しだけ残す。
下位者による反抗。
その可能性。
下位者による自由行動。
その可能性。
それらの余地。

男性優位社会は、暴力による支配を行う。

女性は、自己保身を最優先する。
女性は、上位者に対して、隷従する。

女性は、下位者を、隷従させる。

それは、以下の内容である。
//
最大限の高慢さと尊大さを、用いること。

下位者による反抗や自由行動。
それらの行動の余地を、完全に封殺して、一切不可能にすること。

それは、以下の内容である。
周囲の同調者と、予め、示し合わせて、行われること。

下位者による反抗を、一切、許さないこと。
下位者を、逃げ場の一切無い、密閉空間に監禁すること。
上位者の気が済むまで、粘着的に、行われれること。
下位者を、サンドバッグ代わりにして、一方的に、虐待し続けること。
//

女性優位社会は、専制による支配を行う。

欧米諸国と、ロシアや中国との、対立。
それらは、以下の内容として、十分に説明可能である。
男性優位社会と、女性優位社会との、対立。

移動生活様式は、男性優位社会を、生み出す。
そこでは、女性差別が起きる。
定住生活様式は、女性優位社会を、生み出す。
そこでは、男性差別が起きる。

女性優位社会では、以下の内容が、恒常的に発生する。
上位者としての女性による、以下のような行動。
自己弱者性についての、恣意的な連呼。
男性の强者性についての、恣意的な連呼。
それらは、以下の内容を、故意に隠蔽する。
女性の社会的優位性。
男性差別。
それらは、女性優位社会の存在そのものを、対外的に、隠蔽する。

女性優位社会における、その内部の機密性や閉鎖性や排他性。
その内部情報の非公開性。
それらは、女性優位社会の存在そのものを、対外的に、隠蔽する。

生物や人間の社会において、性差別を無くすこと。

その実現は、不可能である。
そうした試みは、しょせんは、綺麗事の理想の主張に過ぎない。
それらの行為は、全て無駄である。

男女の性差の存在を強引に否定すること。
性差別に反対すること。
欧米主導の、そうした社会運動。
それらは、基本的に、全て無意味である。

男女の性差の存在を前提とする、社会政策。
その展開が、新たに必要である。

////
私は、以下の内容を、発見した。
人間の本質。
それらについての、新たな、基本的で、斬新な、説明。

当方は、以下のような見方を、根本的に転換し、破壊する。

従来の、欧米やユダヤや中東による主導の、移動生活様式の思想。
それらは、人間と、人間以外の生物とを、峻別する。
それらは、以下の内容に基づく。
家畜の恒常的な屠殺。その必要性。
そうした見方。

私の主張は、以下の内容である。

人間の存在は、生物一般の存在へと、完全に包含される。
人間の本質は、以下の方法によって、より効果的に説明できる。
人間を、生物の一種として、眺めること。
人間の本質を、生物一般の本質として、捉えること。

生物の本質。
それは、以下の内容である。
自己の複製。

自己の存続。
自己の増殖。

それらの本質は、生物に対して、以下のような欲求を、生み出す。
私的な生きやすさ。
その、飽くなき追求。
それへの欲求。

その欲求は、生物に対して、以下のような欲求を、生み出す。
有能性の獲得。
既得権益の獲得。
それらへの欲求。

その欲求は、生物に対して、以下の内容を、絶えず生じさせる。
生存における、優位性。
その確認。
その必要性。

そのことは、結果的に、生物の間に、以下の内容を、生み出す。
社会的優劣関係。
社会的上下関係。

そのことは、以下の内容を、必然的に生み出す。
上位者の生物による、下位者の生物に対する、虐待や搾取。

そのことは、生物に対して、原罪を、回避不可能な形で、もたらす。
それは、生物を、生きにくくする。

そうした原罪や生きにくさから逃れること。
その実現。
どんな生物も、その内容は、生きている限り、決して、実現出来ない。
それは、生物の一種である人間においても、同様である。
人間の原罪は、生物であることそのものにより、生じている。

////
私は、以下の内容を、新たに発見した。
従来の生物学において主流である、進化論。
それについて、以下の内容を指摘すること。
その内容面における根本的な誤り。
そのための、新たな説明。

それは、以下のような見方を、根本的に否定する。
人間は、生物の進化の完成形であること。
生物の頂点に、人間が、君臨すること。
そうした見方。

生物は、自己複製を、ひたすら、機械的に、自動的に、繰り返すだけである。
生物は、そうした点において、純粋に物質的な存在である。
生物は、進化への意思を、全く持たない。

生物の自己複製における突然変異。
それらは、純粋に、機械的に、自動的に、起きる。
それは、生物に対して、新たな形態を、自動的にもたらす。

従来の進化論の説明。
そうした新たな形態が、従来の形態よりも、優れていること。
そうした説明は、何も根拠が無い。

現状の、生物の一環としての人間の、形態。
それが、生物による自己複製の繰り返しの過程において、そのまま保たれること。
そうした保証は、一切無い。

生物を取り巻く環境は、常に、予想外の方向へと変化する。
以前の環境において適応的だった形質。
それらは、次の変化した環境においては、往々にして、以下のような形質となる。
その新たな環境に対して、不適応であること。

その結果。

生物の形態は、自己複製と突然変異により、常に変化する。
それは、以下の内容の実現を、全く保証しない。
より望ましい状態への進化。
その持続。

////
私の、上記の主張。
それは、以下の内容である。

世界の上位を独占する、世界一の既得権益者。
そうした、男性優位社会。
欧米諸国。
ユダヤ。

国際秩序。
国際的な価値観。
それらは、彼らを中心として、生成されている。
それらの内容は、彼らが、彼ら自身が有利になるように、一方的に決定した。
それらの背景をなす、彼らの、伝統的な社会思想。
キリスト教。
進化論。
リベラリズム。
民主主義。
彼らにとって、一方的に有利な内容の、様々な社会思想。
それらの内容を、根本的に破壊し、封殺し、初期化すること。

国際秩序。
国際的な価値観。
それらの決定のプロセスにおける、女性優位社会の関与の度合い。
その拡大。
その実現を、更に促進すること。

女性優位社会の内部における、根本的に生きづらい、社会的内実。
それは、上位者への隷従と、下位者への専制支配によって、完全に

満たされている。
例。
日本社会の内実。

そうした不都合な社会的内実。
その発生メカニズムを徹底的に解明すること。
その結果の内容を、暴露し、内部告発すること。
そうした内容であること。

////
私の書籍。
それらの内容における、隠れた、重要な目的。
それは、以下の内容である。

女性優位社会の人々。
彼らは、今まで、以下の内容に頼るしか無かった。
男性優位社会の人々が、彼ら自身のために生成した、社会理論。

女性優位社会の人々。
彼らが、彼ら自身の社会を説明する、自前の社会理論。
彼らが、それを、自前で持つことが出来るようにすること。
その実現。

そのことによる、以下の内容の実現。
世界秩序の形成において、現在、優位に立っている、男性優位社会。
それらの弱体化。
女性優位社会の力の、新たな强化。
私が、それを、手伝うこと。

女性優位社会の人々。
彼らが、自前の社会理論を、いつまで経っても、なかなか持つことが出来ないこと。
その理由。
それらは、以下の内容である。

分析行動そのものを、心の底で、嫌っていること。
対象との一体化や、対象との共感を、対象の分析よりも、優先すること。

彼ら自身の社会が持つ、強い排他性や閉鎖性。
彼ら自身の社会の内実を解明されることに対して、強い抵抗感を持っていること。

彼ら自身の女性的な自己保身性に基づく、強い退嬰性。
未知の危険な領域を探査することを嫌うこと。
安全性が既に確立された、前例踏襲ばかりを優先すること。

前例の無い、女性優位社会の内実の探査。
そうした行動そのものを、嫌うこと。

前例としての、男性優位社会の社会理論。
その内容を、ひたすら暗記学習すること。
それしか、能力的に、出来ないこと。

（2022年3月初出。）

筆者の執筆の目的と、その実現に当たっての方法論。

私の執筆の目的。
生物にとっての生きやすさ。生物にとっての生存可能性。生物にとっての増殖可能性。それを増大させること。
それは、生物にとって、一番、価値があることである。それは、生物にとって、本質的に、善である。それは、生物にとって、本質的に、光明性をもたらす。
社会的上位者にとっての善。それは、以下の内容である。最上位の社会的地位の獲得。覇権の獲得。獲得した既得権益の維持。
社会的下位者にとっての善。それは、以下の内容である。有能性の

獲得による、社会的上昇。社会的革命の生成による、社会的上位者の既得権益の、破壊と初期化。
その実現に役立つ思想。真実。生物が、自分自身の真実を知ること。それは、生物にとって、冷酷で厳しく辛辣な内容である。その受容。その助けになる思想。それらを、効率良く生み出す方法。その確立。

私の方法論。
上記の目的。その実現に当たっての手順。その実現に当たっての勘所。その実現に当たっての注意点。それらは、以下の内容である。
ネット検索やネット閲覧によって、環境や生物社会の動向を常に俯瞰し観察し把握すること。それらの行為は、以下の内容の源泉になる。
環境や生物社会の真実や法則の解明において、説明力や説得力のあるアイデア。
あるアイデアによって、真実を８０％説明できそうな見通しが立った場合。そのアイデアの内容を、どんどん書き出して、体系化すること。真実に近そうな、説明力の高そうな思想を、独力で、どんどん生み出すこと。その行為を、最優先すること。
詳細な説明を後回しにすること。難解な説明を避けること。
過去の前例との照合は、後回しにすること。正しさの完全な検証は、後回しにすること。
簡潔で分かりやすく使いやすい法則の確立。その行為を、最優先すること。それは、例えば、以下の行為と同様である。簡潔で分かりやすく使いやすいコンピュータのソフトウェアの開発。

私の執筆における、理想とスタンス。

私の執筆における、理想。
それは、以下の内容である。
//
私が生成する内容の説明力の最大化。
そのためにかける手間や時間の最小化。
//

それらの実現のための方針やスタンス。それらは、下記の内容であ

る。

私の執筆における、スタンス。

私が、文章の作成において、考慮する、根本的な方針。
それらの対比。
それらの主要な項目一覧。
それは、以下の内容である。

上位概念性。/ 下位概念性。
要約性。/ 詳細性。
根幹性。/ 枝葉性。
一般性。/ 個別性。
基本性。/ 応用性。
抽象性。/ 具体性。
純粋性。/ 混合性。
集約性。/ 粗放性。
一貫性。/ 変動性。
普遍性。/ 局所性。
網羅性。/ 例外性。
定式性。/ 非定式性。
簡潔性。/ 複雑性。
論理性。/ 非論理性。
実証可能性。/ 実証不能性。
客観性。/ 非客観性。
新規性。/ 既知性。
破壊性。/ 現状維持性。
効率性。/ 非効率性。
結論性。/ 中途性。
短縮性。/ 冗長性。

全ての文章において、内容面で、以下のような性質を、最初から、最上級の形で、実現すること。

概念上位性。
要約性。
根幹性。

一般性。
基本性。
抽象性。
純粋性。
集約性。
一貫性。
普遍性。
網羅性。
定式性。
簡潔性。
論理性。
実証可能性。
客観性。
新規性。
破壊性。
効率性。
結論性。
短縮性。

その実現を最優先して、文章の内容を、執筆すること。
その内容を、なるべく早く完成させること。
その内容を、書き上げた部分毎に、直ぐに、本文に、マージしていくこと。
それらを、最優先すること。
例。
固有名詞を、使わないこと。
ローカルな、抽象度の低い意味の語句を、使わないこと。

先進的なコンピュータプログラミング技術を、文章作成の方法へと、積極的に、応用すること。

例。
オブジェクト思考に基づく、文章作成の技術。
クラスとインスタンスの概念の、文章作成への応用。
上位クラスの内容の優先的な記述。

例。
アジャイル開発の方法の、文章作成への応用。
頻繁に、以下の行動を、繰り返すこと。
電子書籍の内容の、バージョンアップ。
その電子書籍ファイルの、公開サーバーへのアップロード。

私は、従来の学術論文の作成方法とは異なる方法を、採用している。
従来の学術論文の作成方法は、説明力のある内容の導出において、非効率である。

書籍の執筆における、私の視点。
それは、以下の内容である。

統合失調症の患者からの視点。
社会における、最下位者からの視点。
社会における扱いが、一番、劣悪な者からの視点。
社会から、拒絶され、差別され、迫害され、追放され、隔離された者からの視点。
社会不適応者からの視点。
社会で生きることを諦めた者からの視点。
一番、社会的ランクが下位の病気に罹患した患者からの視点。
社会における、一番の有害者からの視点。
社会における、一番の嫌われ者からの視点。
社会に対して、生涯、心を閉ざした者からの視点。
生物や人間に対して、根本的にがっかりした者からの視点。
生物や人間に対して、絶望した者からの視点。
人生を諦めた者からの視点。
罹患した病気のせいで、彼自身の遺伝的子孫を残すことを、社会的に拒絶された者からの視点。
罹患した病気のせいで、極めて短命に終わること。そのことを、運命付けられた者からの視点。
罹患した病気のせいで、生きやすさや救いを、生涯、得られないこと。そのことが、予め確定している者からの視点。
罹患した病気のせいで、有能性を、生涯、得られないこと。そのこ

とが、予め確定している者からの視点。
罹患した病気のせいで、生涯にわたって、社会から、虐待や搾取を受け続けること。そのことが、予め確定している者からの視点。
そうした者による、生物社会や人間社会に対する内部告発の視点。

私の人生目標。
それは、以下の内容である。
男女の性差。
人間社会や生物社会。
生物そのもの。
それらの本質を、自力で、分析し、解明すること。

そうした、私の人生目標は、以下のような人々によって、大きく妨害された。

男性優位社会の人々。例。欧米諸国。
そうした、男性優位社会によって支配されている、女性優位社会の人々。例。日本と韓国。
彼らは、女性優位社会の存在を、決して認めない。
彼らは、男女の本質的な性差を、決して認めない。
彼らは、男女の性差についての研究そのものを、社会的に、妨害し、禁止している。
そうした、彼らの態度は、男女の性差の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

人間と、人間以外の生物との、本質的な共通性。
彼らは、それを、決して認めない。
彼らは、人間と、人間以外の生物とを、必死で、区別し、差別しようとする。
彼らは、人間の、人間以外の生物に対する優位性を、必死で、主張しようとする。

そうした、彼らの態度は、人間社会や生物社会の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

女性優位社会の女性たち。例。日本社会の女性たち。
彼らは、女性優位社会における女性の優位性を、表向きは、決して認めない。
女性専用社会や、女性優位社会における、それらの社会の内部の真実。
彼らは、その公開を、決して認めない。
そうした、彼らの態度は、男女の性差の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。
そうした、彼らの態度は、人間社会や生物社会の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

上記のような人々。
そうした、彼らの態度は、私の人生目標を、根本的に、妨害した。
そうした、彼らの態度は、私の人生を、その土台から、狂わせ、破壊し、台無しにした。
私は、それらの結果について、とても怒っている。
私は、彼らに対して、鉄槌を下したい。
私は、彼らに対して、以下の内容を、何としてでも、理解させたい。
私は、以下の内容を、何としてでも、自力で解明したい。
//
男女の性差における、真実。
人間社会や生物社会における、真実。
//

私は、人間社会を、冷静に、客観的に、分析したかった。
そこで、私は、人間社会から、一時的に、私自身を、隔離した。
私は、人間社会の俯瞰者となった。
私は、人間社会の動向を、ネット経由で、毎日、ひたすら、観察し続けた。

その結果。
私は、以下の内容を、手に入れた。
人間社会の全体を、最下位から俯瞰する、独自の視点。

その結果。

私は、以下の内容を、自力で、何とか、掴んだ。
//
男女の性差の本質。
人間社会や生物社会の本質。
//

その結果。
私は、新たな人生目標を、手に入れた。

私の、新たな人生目標。
彼らの社会的妨害に対して、対抗し、挑戦すること。
そして、以下の内容を、人々の間に広く知らせること。
//
私が自力で掴んだ、男女の性差の真実。
私が自力で掴んだ、人間社会や生物社会の真実。
//

私は、そうした目標の実現のために、これらの書籍を作成している。
私は、そうした目標の実現のために、これらの書籍の内容を、
日々、熱心に、改訂し続けている。

（2022年2月初出。）

参考文献。

== 男女の性差。
/ 総説。

Bakan, D. The duality of human existence . Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178参照)

Deaux,K.: The Behavior of Women and Men, Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
影山裕子 : 女性の能力開発, 日本経営出版会, 1968
間宮武 : 性差心理学, 金子書房, 1979
皆本二三江 : 絵が語る男女の性差, 東京書籍, 1986
村中 兼松 (著), 性度心理学—男らしさ・女らしさの心理 (1974年) , 帝国地方行政学会, 1974/1/1
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective, Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較, 紀伊国屋書店, 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究,岩波書店,1973)
Sarason, I.G., Harmatz, M.G., Sex differences and experimental conditions in serial learning. Journal of Personality and Social Psychology., 1965, 1: 521-4.
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳 : 言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups, Small Group Behavior, 1976, 7, p433-456

東清和、小倉千加子(編) , ジェンダーの心理学, 早稲田大学出版部, 2000
宗方比佐子、佐野幸子、金井篤子(編), 女性が学ぶ社会心理学, 福村出版, 1996
諸井克英、中村雅彦、和田実, 親しさが伝わるコミュニケーション, 金子書房, 1999

D.Kimura, Sex And Cognition, MIT Press,Cambridge,Massachusetts, 1999.(野島久雄、三宅真季子、鈴木眞理子訳 (2001）女の能力、男の能力ー性差について科学者が答えるー 新曜社)

E.Margolies,L.VGenevie, The Samson And Delilah Complex,Dodd,Mead &Company, Inc.,1986(近藤裕訳 サムソン＝デリラ・コンプレックスー夫婦関係の心理学ー,社会思想社,1987)

/ 各論。

// 男性単独。

E.モンテール (著), 岳野 慶作 (翻訳), 男性の心理—若い女性のために (心理学叢書) , 中央出版社, 1961/1/1

// 女性単独。

扇田 夏実 (著), 負け犬エンジニアのつぶやき~女性SE奮戦記, 技術評論社, 2004/7/6

// 男女間比較。

/// 1.能力における性差

//// 1.1 空間能力における性差

Collins,D.W. & Kimura,D.(1997) A large sex difference on a two-dimensional mental rotation task. Behavioral Neuroscience,111,845-849
Eals,M. & Silverman,I.(1994)The hunter-gatherer theory of spatial sex differences: proximate factors mediating the female advantage in recall of object arrays. Ethology & Sociobiology,15,95-105.
Galea,L.A.M. & Kimura,D.(1993) Sex differences in route learning. Personality & Individual Differences,14,53-65
Linn,M.C.,Petersen,A.C.(1985) Emergence and Characterization of Sex Differences in Spatial Ability : A Meta-Analysis. Child Development, 56, No.4, 1479-1498.
McBurney,D.H., Gaulin, S.J.C., Devineni,T. & Adams,C.(1997) Superior spatial memory of women: stronger evidence for the gathering hypothesis. Evolution & Human Behavior,18,165-174
Vandenberg,S.G. & Kuse,A.R.(1978) Mental rotations, a group test of

three-dimensional spatial visualization. Perceptual & Motor Skills, 47,599-601
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.2 数学的能力における性差

Bembow,C.P., Stanley,J.C.(1982) Consequences in high school and college of sex differences in mathematical reasoning ability : A Longtitudinal perspective. Am. Educ. Res. J. 19,598-622.
Engelhard,G.(1990) Gender differences in performance on mathematics items: evidence from USA and Thailand. Contemporary Educational Psychology,15,13-16
Hyde,J.S.,Fennema,E. & Lamon,S.J.(1990) Gender differences in mathematics performance: a meta-analysis. Psychological Bulletin,107,139-155.
Hyde,J.S.(1996) Half the human experience : The Psychology of woman. 5th ed., Lexington, Mass.: D.C.Heath.
Jensen,A.R.(1988)Sex differences in arithmetic computation and reasoning in prepubertal boys and girls. Behavioral & Brain Sciences,11,198-199
Low,R. & Over,R.(1993)Gender differences in solution of algebraic word problems containing irrelevant information. Journal of Educational Psychology,85,331-339.
Stanley,J.C., Keating,D.P., Fox,L.H. (eds.)(1974) Mathematical talent: Discovery, description, and development. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

//// 1.3 言語能力における性差

Bleecker,M.L.,Bolla-Wilson,K. & Meyers,D.A.,(1988)Age related sex differences in verbal memory. Journal of Clinical Psychology,44,403-411.
Bromley(1958) Some effects of age on short term learning and remembering. Journal of Gerontology,13,398-406.
Duggan,L.(1950)An experiment on immediate recall in secondary school children. British Journal of Psychology,40,149-154.
Harshman,R., Hampson,E. & Berenbaum,S.(1983) Individual differences in

cognitive abilities and brain organization,Part I: sex and handedness differences in ability. Canadian Journal of Psychology,37,144-192.
Hyde,J.S. & Linn,M.C.(1988) Gender differences in verbal ablility:A Meta-analysis. Psychological Bulletin, 104, No.1,53-69.
Kimura,D.(1994)Body asymmetry and intellectual pattern. Personality & Individual Differences,17,53-60.
Kramer,J.H.,Delis,D.C. & Daniel,M.(1988) Sex differences in verbal learning. Journal of Clinical Psychology,44,907-915.
McGuinness,D.,Olson,A. & Chapman,J.(1990)Sex differences in incidental recall for words and pictures. Learning & Individual Differences,2,263-285.

//// 1.4 運動能力における性差

Denckla,M.B.(1974)Development of motor co-ordination in normal children. Developmental Medicine & Child Neurology,16,729-741.
Ingram,D.(1975)Motor asymmetries in young children. Neuropsychologia,13,95-102
Nicholson,K.G. & Kimura.D.(1996) Sex differences for speech and manual skill.Perceptual & Motor Skills,82,3-13.
Kimura,D. & Vanderwolf,C.H. (1970) The relation between hand preference and the performance of individual finger movements by left and right hands. Brain,93,769-774
Lomas,J. & Kimura, D.(1976) Intrahemispheric interaction between speaking and sequential manual activity. Neuropsychologia,14,23-33.
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.5 知覚能力における性差

Burg,A.(1966)Visual acuity as measured by dynamic and static tests. Journal of Applied Psychology,50,460-466.
Burg,A.(1968)Lateral visual field as related to age and sex. Journal of Applied Psychology,52,10-15.
Denckla,M.B. & Rudel,R.(1974) Rapid "automatized"naming of pictured objects,colors,letters and numbers by normal children. Cortex,10,186-202.
Dewar,R.(1967)Sex differences in the magnitude and practice decrement of

th Muller-Lyer illusion. Psychonomic Science,9,345-346.
DuBois,P.H.(1939)The sex difference on the color naming test. American Journal of Psychology,52,380-382.
Ghent-Braine,L.(1961)Developmental changes in tactual thresholds on dominant and nondominant sides. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,670-673.
Ginsburg,N.,Jurenovskis,M. & Jamieson,J.(1982) Sex differences in critical flicker frequency. Perceptual & Motor Skills,54,1079-1082.
Hall,J.(1984)Nonverbal sex differences. Baltimore:Johns Hopkins.
McGuinness, D.(1972)Hearing: individual differences in perceiving. Perception,1,465-473.
Ligon,E.M.(1932)A genetic study of color naming and word reading. American Journal of Psychology,44,103-122.
Velle,W.(1987)Sex differences in sensory functions. Perspectives in Biology & Medicine,30,490-522.
Weinstein,S. & Sersen, E.A.(1961)Tactual sensitivity as a function of handedness and laterality. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,665-669.
Witkin,H.A.(1967)A cognitive style approach to cross-cultural research. International Journal of Psychology,2,233-250.

/// 2.パーソナリティの性差

Maccoby, E.E. & Jacklin, C.N.(1974) The Psychology of sex differences. Stanford,CA:Stanford University Press.

/// 3.社会的行動の性差

Brehm,J.W.(1966)A theory of psychological reactance. Academic Press.
Cacioppo,J.T. & Petty,R.E.(1980) Sex differences in influenceability:Toward specifying the underlying processes. Personality and Social Psychology Bulletin,6,651-656
Caldwell,M.A., & Peplau,L.A.(1982) Sex Differences in same-sex friendships. Sex Roles,8,721-732.
Chesler,M.A. & Barbarin,O.A.(1985) Difficulties iof providing help in crisis: Relationships between parents of children with cancer and their friends. Journal of Social Issues,40,113-134.

大坊郁夫(1988)異性間の関係崩壊についての認知的研究,日本社会心理学会第29回発表論文集,64.
Eagly,A.H.(1978) Sex differences in influenceability.Psychological Bulletin,85,86-116.
Eagly,A.H. & Carli,L.L.(1981) Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability:A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin,90,1-20.
Eagly,A.H. & Johnson,B.T.(1990) Gender and leadership style: A meta-analysis. Psychological Bulletin,108,233-256.
Hall,J.A.(1984) Nonverbal sex differences:Communication accuracy and expressive style. Baltimore:John Hopkins University Press.
Hays,R.B.(1984) The development and maintenance of friendship. Journal of Personal and Social Relationships,1,75-98.
Horner,M.S.(1968)Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph.D. thesis. University of Michigan.
Jourard,S.M.(1971) Self-disclosure:An experimental analysis of the transparent self. New York:Wiley & Sons, Inc.
Jourard,S.M & Lasakow,P.(1958) Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 56, 91-98.
Latane',B. & Bidwell,L.D.(1977) Sex and affiliation in college cafeteria.Personality and Social Psychology Bulletin,3,571-574
松井豊(1990)青年の恋愛行動の構造,心理学評論,33,355-370.
Nemeth,C.J. Endicott,J. & Wachtler,J.(1976) From the '50s to the '70s:Women in jury deliberations,Sociometry,39,293-304.
Rands,M. & Levinger, G. (1979)Implicit theory of relationship: An intergenerational study. Journal of Personality and Social Psychology,37,645-661.
坂田桐子、黒川正流(1993) 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究-「上司の性別と部下の性別の組合せ」からの分析,産業・組織心理学研究,7,15-23.
総務庁青少年対策本部(1991) 現代の青少年－第５回青少年の連帯感などに関する調査報告書,大蔵省印刷局.
上野徳美(1994) 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究,実験社会心理学研究,34,195-201
Winstead,B.A.(1986) Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead(Eds.) Friendship and social interaction. New

York:Springer-Verlag.Pp.81-99
Winstead,B.A., Derlega,V.J., Rose,S. (1997) Gender and Close Relationships. Thousand Oaks, California:Sage Publications.
山本真理子、松井豊、山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68

== 世界の社会の分類。男女間における、優位性の比較。
/ 一般。
富永 健一 (著), 社会学原理, 岩波書店, 1986/12/18
岩井 弘融 (著), 社会学原論, 弘文堂, 1988/3/1

笠信太郎, ものの見方について, 1950, 河出書房
伊東俊太郎 (著) , 比較文明 UP選書 , 東京大学出版会, 1985/9/1

/ 気候。
和辻 哲郎 (著), 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 1935
鈴木秀夫, 森林の思考・砂漠の思考, 1978, 日本放送出版協会
石田英一郎, 桃太郎の母 比較民族学的論集 , 法政大学出版局 , 1956
石田英一郎, 東西抄ー日本・西洋・人間, 1967, 筑摩書房
松本 滋 (著), 父性的宗教 母性的宗教 (UP選書) , 東京大学出版会, 1987/1/1
ハンチントン (著), 間崎 万里 (翻訳), 気候と文明 (1938年) (岩波文庫) , 岩波書店, 1938
安田 喜憲 (著), 大地母神の時代—ヨーロッパからの発想 (角川選書) , 角川書店, 1991/3/1
安田 喜憲 (著), 気候が文明を変える (岩波科学ライブラリー (7)) , 岩波書店, 1993/12/20

鈴木 秀夫 (著), 超越者と風土 , 原書房, 2004/1/1
鈴木 秀夫 (著), 森林の思考・砂漠の思考 (NHKブックス 312) , NHK出版1978/3/1
鈴木 秀夫 (著), 風土の構造, 原書房, 2004/12/1
梅棹 忠夫 (著), 文明の生態史観, 中央公論社, 1967

ラルフ・リントン (著), 清水 幾太郎 (翻訳), 犬養 康彦 (翻訳), 文化人

類学入門 (現代社会科学叢書), 東京創元社, 1952/6/1
祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂, 1976
F.L.K.シュー (著), 作田 啓一 (翻訳), 浜口 恵俊 (翻訳), 比較文明社会論—クラン・カスト・クラブ・家元 (1971年), 培風館, 1970.

J・J・バハオーフェン (著), 吉原 達也 (翻訳), 母権論序説 付・自叙伝, 創樹社, 1989/10/20

阿部 一, 家族システムの風土性, 東洋学園大学紀要 (19), 91-108, 2011-03

/ 移動性。

大築立志, 手の日本人、足の西欧人, 1989, 徳間書店
前村 奈央佳, 移動と定住に関する心理的特性の検討 : 異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6号 pp.109-124, 2011-10-31
浅川滋男, 東アジア漂海民と家船居住, 鳥取環境大学, 紀要, 創刊号, 2003.2 pp41-60

/ 食糧の確保の手段。

千葉徳爾, 農耕社会と牧畜社会, 山田英世 (編), 風土論序説 (比較思想・文化叢書) , 国書刊行会, 1978/3/1
大野 盛雄 (著), アフガニスタンの農村から—比較文化の視点と方法 (1971年) (岩波新書) , 岩波書店, 1971/9/20
梅棹 忠夫 (著), 狩猟と遊牧の世界—自然社会の進化, 講談社, 1976/6/1
志村博康 (著), 農業水利と国土, 東京大学出版会, 1987/11/1

/ 心理。

Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995, （H.C. トリアンディス (著), Harry C. Triandis (原著), 神山 貴弥 (翻訳), 藤原 武弘 (翻訳), 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化, 北大路書房, 2002/3/1）
Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures.

Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991

千々岩 英彰 (編集), 図解世界の色彩感情事典—世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社, 1999/1/1

== 男性優位社会。移動生活様式。遊牧と牧畜。気体。

/ 欧米諸国。全般。
星 翔一郎 (著), 国際文化教育センター (編集), 外資系企業 就職サクセスブック, ジャパンタイムズ, 1986/9/1

/ 西欧。
// 単独社会。
// 社会間比較。
西尾幹二, ヨーロッパの個人主義, 1969, 講談社
会田 雄次 (著), 『アーロン収容所: 西欧ヒューマニズムの限界』中公新書, 中央公論社 1962年
池田 潔 (著), 自由と規律: イギリスの学校生活 (岩波新書) , 岩波書店, 1949/11/5

鯖田 豊之 (著), 肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見 (中公新書 92) , 中央公論社, 1966/1/1
八幡 和郎 (著), フランス式エリート育成法—ENA留学記 (中公新書 (725)) , 中央公論社, 1984/4/1
木村 治美 (著), 新交際考—日本とイギリス, 文藝春秋, 1979/11/1
森嶋 通夫 (著), イギリスと日本—その教育と経済 (岩波新書 黄版 29) , 岩波書店, 2003/1/21
/ アメリカ。
// 単独社会。
松浦秀明, 米国さらりーまん事情, 1981, 東洋経済新報社
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives, 1972, Inter-cultural Press（久米昭元訳, アメリカ人の思考法, 1982, 創元社）
吉原 真里 (著), Mari Yoshihara (著), アメリカの大学院で成功する方法—留学準備から就職まで (中公新書), 中央公論新社, 2004/1/1

リチャード・H. ロービア (著), Richard H. Rovere (原著), 宮地 健次郎 (翻訳), マッカーシズム (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/1/17
G.キングスレイ ウォード (著), 城山 三郎 (翻訳), ビジネスマンの父より息子への30通の手紙, 新潮社, 1987/1/1
長沼英世, ニューヨークの憂鬱一豊かさと快適さの裏側, 中央公論社, 1985
八木 宏典 (著), カリフォルニアの米産業, 東京大学出版会, 1992/7/1
// 社会間比較。
/ ユダヤ。
// 単独社会。
旧約聖書。
新約聖書。
中川 洋一郎, キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源—イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別—, 経済学論纂（中央大学）第60巻第５・６合併号（2020年３月）,pp.431-461
トマス・ア・ケンピス (著), 大沢 章 (翻訳), 呉 茂一 (翻訳), キリストにならいて (岩波文庫) , 岩波書店, 1960/5/25
// 社会間比較。
/ 中東。
// 単独社会。
クルアーン。コーラン。
鷹木 恵子 U.A.E.地元アラブ人の日常生活にみる文化変化 : ドバイでの文化人類学的調査から http://id.nii.ac.jp/1509/00000892/
Syouwa63nenn
// 社会間比較。
後藤 明 (著), メッカ—イスラームの都市社会 (中公新書 1012) , 中央公論新社, 1991/3/1
片倉もとこ『「移動文化考」 イスラームの世界をたずねて 』日本経済新聞社、1995年
片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書，1991．
牧野 信也 (著), アラブ的思考様式, 講談社, 1979/6/1
井筒 俊彦 (著), イスラーム文化−その根柢にあるもの , 岩波書店, 1981/12/1
/ モンゴル。
// 単独社会。
鯉渕 信一 (著), 騎馬民族の心—モンゴルの草原から (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1992/3/1

// 社会間比較。

== 女性優位社会。定住生活様式。農耕。液体。
/ 東アジア。
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジア的視点から (放送大学教材) , 放送大学教育振興会, 1998/3/1
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジアからのアプローチ, 東京大学出版会, 2003/5/31
石井 知章 (著), K・A・ウィットフォーゲルの東洋的社会論, 社会評論社, 2008/4/1
/ 日本。
// 単独社会。

/// 文献調査。
南博, 日本人論ー明治から今日まで , 岩波書店, 1994
青木保, 「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-, 中央公論社, 1990

/// 社会全般。
//// 著者が、日本人の場合。
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
阿部 謹也 (著), 「世間」とは何か (講談社現代新書) , 講談社, 1995/7/20
川島武宣, 日本社会の家族的構成, 1948, 学生書房

中根千枝, タテ社会の人間関係, 講談社, 1967
木村敏, 人と人との間, 弘文堂, 1972
山本七平 (著), 「空気」の研究, 文藝春秋, 1981/1/1
会田 雄次 (著), 日本人の意識構造 (講談社現代新書) , 講談社, 1972/10/25
石田英一郎, 日本文化論 筑摩書房 1969
荒木博之, 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- , 講談社, 1973

吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版

//// 著者が、日本人以外の場合。
///// 欧米諸国からの視点。
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948（長谷川松治訳, 菊と刀ー日本文化の型, 社会思想社, 1948）
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳 日本人ーユニ一クさの源泉ー, サイマル出版会 1977)
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳 勝者・日本の不思議な笑い, 1992 ダイヤモンド社)
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc.,（ダグラス・M. ケンリック (著), 飯倉 健次 (翻訳), なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991/11/1）
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
W.A.グロータース (著), 柴田 武 (翻訳), 私は日本人になりたい—知りつくして愛した日本文化のオモテとウラ (グリーン・ブックス 56) , 大和出版, 1984/10/1

///// 東アジアからの視点。
李 御寧 (著), 「縮み」志向の日本人, 学生社, 1984/11/1

/// 心理。
安田三郎「閥について——日本社会論ノート（3）」（『現代社会学3』2巻1号所収・1975・講談社）
木村敏, 人と人との間ー精神病理学的日本論, 1972, 弘文堂
丸山真男, 日本の思想, 1961, 岩波書店
統計数理研究所国民性調査委員会 (編集), 日本人の国民性〈第5〉戦後昭和期総集, 出光書店, 1992/4/1

/// コミュニケーション。
芳賀綏, 日本人の表現心理, 中央公論社, 1979

/// 歴史。
R.N.ベラー (著), 池田 昭 (翻訳), 徳川時代の宗教 (岩波文庫), 岩波書店, 1996/8/20
勝俣 鎮夫 (著), 一揆 (岩波新書) , 岩波書店, 1982/6/21
永原 慶二 (著), 日本の歴史〈10〉下克上の時代, 中央公論社, 1965年
戸部 良一 (著), 寺本 義也 (著), 鎌田 伸一 (著), 杉之尾 孝生 (著), 村井 友秀 (著), 野中 郁次郎 (著), 失敗の本質—日本軍の組織論的研究, ダイヤモンド社, 1984/5/1

/// 民俗。
宮本 常一 (著), 忘れられた日本人 (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/5/16

/// 食糧の確保。
大内力 (著), 金沢夏樹 (著), 福武直 (著) , 日本の農業 UP選書, 東京大学出版会, 1970/3/1

/// 地域。
//// 村落。
中田 実 (編集), 坂井 達朗 (編集), 高橋 明善 (編集), 岩崎 信彦 (編集), 農村 (リーディングス日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/5/1
蓮見 音彦 (著), 苦悩する農村—国の政策と農村社会の変容, 有信堂高文社, 1990/7/1
福武直 (著) , 日本農村の社会問題 UP選書, 東京大学出版会, 1969/5/1
余田 博通 (編集), 松原 治郎 (編集), 農村社会学 (1968年) (社会学選書) , 川島書店, 1968/1/1
今井幸彦 編著, 日本の過疎地帯 (1968年) (岩波新書), 岩波書店, 1968-05

きだみのる (著), 気違い部落周游紀行 (冨山房百科文庫 31), 冨山房, 1981/1/30
きだ みのる (著), にっぽん部落 (1967年) (1967年) (岩波新書)

//// 都市。
鈴木広 高橋勇悦 篠原隆弘 編, リーディングス日本の社会学 7 都市, 東京大学出版会, 1985/11/1
倉沢 進 (著), 秋元 律郎 (著), 町内会と地域集団 (都市社会学研究叢書) , ミネルヴァ書房, 1990/9/1
佐藤 文明 (著), あなたの「町内会」総点検［三訂増補版］—地域のトラブル対処法 (プロブレムQ&A), 緑風出版, 2010/12/1

//// エリア毎の特色。
京都新聞社 (編さん), 京男・京おんな, 京都新聞社, 1984/1/1
丹波 元 (著), こんなに違う京都人と大阪人と神戸人 (PHP文庫) , PHP研究所, 2003/3/1
サンライズ出版編集部 (編集), 近江商人に学ぶ, サンライズ出版, 2003/8/20

/// 血縁関係。
有賀 喜左衛門 (著), 日本の家族 (1965年) (日本歴史新書) , 至文堂, 1965/1/1
光吉 利之 (編集), 正岡 寛司 (編集), 松本 通晴 (編集), 伝統家族 (リーディングス 日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/8/1

/// 政治。
石田雄, 日本の政治文化－同調と競争, 1970, 東京大学出版会
京極純一, 日本の政治, 1983, 東京大学出版会

/// ルール。法律。
青柳文雄, 日本人の罪と罰, 1980, 第一法規出版
川島武宣, 日本人の法意識 (岩波新書 青版A-43) , 岩波書店, 1967/5/20

/// 行政。
辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
藤原 弘達 (著), 官僚の構造 (1974年) (講談社現代新書) , 講談社, 1974/1/1
井出嘉憲 (著), 日本官僚制と行政文化—日本行政国家論序説, 東京大学出版会, 1982/4/1
竹内 直一 (著), 日本の官僚—エリート集団の生態 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1

教育社 (編集), 官僚―便覧 (1980年) (教育社新書―行政機構シリーズ〈122〉), 教育社, 1980/3/1
加藤栄一, 日本人の行政―ウチのルール (自治選書), 第一法規出版, 1980/11/1
新藤 宗幸 (著), 技術官僚―その権力と病理 (岩波新書), 岩波書店, 2002/3/20
新藤 宗幸 (著), 行政指導―官庁と業界のあいだ (岩波新書) , 岩波書店, 1992/3/19

武藤 博己 (著), 入札改革―談合社会を変える (岩波新書) , 岩波書店, 2003/12/19

宮本政於, お役所の掟, 1993, 講談社

/// 経営。

間宏,日本的経営－集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
岩田龍子, 日本の経営組織, 1985, 講談社
高城 幸司 (著), 「課長」から始める 社内政治の教科書, ダイヤモンド社, 2014/10/31

/// 教育。

大槻 義彦 (著), 大学院のすすめ―進学を希望する人のための研究生活マニュアル, 東洋経済新報社, 2004/2/13
山岡栄市 (著), 人脈社会学―戦後日本社会学史 (御茶の水選書) , 御茶の水書房, 1983/7/1

/// スポーツ。

Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks（松井みどり訳, 菊とバット 1991 文藝春秋）

/// 性差。

//// 母性。母親。

Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

河合隼雄, 母性社会日本の病理, 中央公論社 1976
佐々木 孝次 (著), 母親と日本人, 文藝春秋, 1985/1/1
小此木 啓吾 (著), 日本人の阿闍世コンプレックス, 中央公論社, 1982
斎藤学, 『「家族」という名の孤独』講談社 1995
山村賢明, 日本人と母―文化としての母の観念についての研究, 東洋館出版社, 1971/1/1
土居健郎, 「甘え」の構造, 1971, 弘文堂

山下 悦子 (著), 高群逸枝論―「母」のアルケオロジー, 河出書房新社, 1988/3/1
山下 悦子 (著), マザコン文学論―呪縛としての「母」 (ノマド叢書) , 新曜社, 1991/10/1

中国新聞文化部 (編集), ダメ母に苦しめられて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1999/1/1

加藤秀俊, 辛口教育論 第四回 衣食住をなくした家, 食農教育 200109, 農山漁村文化協会

//// 女性。
木下 律子 (著), 妻たちの企業戦争 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
木下律子 (著), 王国の妻たち―企業城下町にて, 径書房, 1983/8/1
中国新聞文化部 (編集), 妻の王国―家庭内“校則”に縛られる夫たち (女のココロとカラダシリーズ), ネスコ, 1997/11/1

//// 男性。
中国新聞文化部 (編集), 長男物語―イエ、ハハ、ヨメに縛られて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/7/1
中国新聞文化部 (編集), 男が語る離婚―破局のあとさき (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/3/1

// 社会間比較。
/// 欧米諸国との比較。

山岸俊男, 信頼の構造, 1998, 東京大学出版会
松山幸雄「勉縮」のすすめ, 朝日新聞社, 1978
木村尚三郎, ヨーロッパとの対話, 1974, 日本経済新聞社
栗本 一男 (著), 国際化時代と日本人—異なるシステムへの対応 (NHKブックス 476) , 日本放送出版協会, 1985/3/1
/// 社会の特殊性。その有無についての検討。
高野陽太郎、纓坂英子, " 日本人の集団主義" と" アメリカ人の個人主義" -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
杉本良夫、ロス・マオア, 日本人は「日本的」かー特殊論を超え多元的分析へー, 1982, 東洋経済新報社
/// 血縁関係。
増田光吉, アメリカの家族・日本の家族, 1969, 日本放送出版協会
中根千枝『家族を中心とする人間関係』講談社，1977
/// コミュニケーション。
山久瀬 洋二 (著), ジェイク・ロナルドソン (翻訳), 日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners【日英対訳】 (対訳ニッポン双書) , IBCパブリッシング, 2010/12/24
鈴木 孝夫 (著), ことばと文化 (岩波新書) , 岩波書店, 1973/5/21
/// 独創性。
西沢潤一, 独創は闘いにあり, 1986, プレジデント社
江崎玲於奈, アメリカと日本ーニューヨークで考える, 1980, 読売新聞社
乾侑, 日本人と創造性, ー科学技術立国実現のために, 1982, 共立出版
S.K.ネトル、桜井邦朋, 独創が生まれないー日本の知的風土と科学, 1989, 地人書館

/// 経営。
Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,Free Press 1958 （占部都美 監訳 「日本の経営」 ダイヤモンド社 1960）
林 周二, 経営と文化, 中央公論社, 1984
太田肇 (著) , 個人尊重の組織論, 企業と人の新しい関係 (中公新書) , 中央公論新社, 1996/2/25
/// 保育。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

/// 教育。
岡本 薫 (著), 新不思議の国の学校教育―日本人自身が気づいていないその特徴, 第一法規, 2004/11/1
宮智 宗七 (著), 帰国子女―逆カルチュア・ショックの波紋 (中公新書) 中央公論社, 1990/1/1
グレゴリー・クラーク (著), Gregory Clark (原著), なぜ日本の教育は変わらないのですか? , 東洋経済新報社, 2003/9/1
恒吉僚子, 人間形成の日米比較ーかくれたカリキュラム, 1992, 中央公論社
/// 性差。
//// 女性。
杉本 鉞子 (著), 大岩 美代 (翻訳), 武士の娘 (筑摩叢書 97) , 筑摩書房, 1967/10/1
//// 男性。
グスタフ・フォス (著), 日本の父へ, 新潮社, 1977/3/1
/ 韓国。
// 単独社会。
朴 泰赫 , 醜い韓国人, ―われわれは「日帝支配」を叫びすぎる (カッパ・ブックス) 新書 – , 光文社, 1993/3/1
朴 承薫 (著), 韓国 スラングの世界, 東方書店, 1986/2/1
// 社会間比較。
コリアンワークス, 知れば知るほど理解が深まる「日本人と韓国人」なるほど事典―衣食住、言葉のニュアンスから人づきあいの習慣まで (PHP文庫) 文庫 – , PHP研究所, 2002/1/1
造事務所 , こんなに違うよ！ 日本人・韓国人・中国人 (PHP文庫), PHP研究所 (2010/9/30)
/ 中国。
// 単独社会。
/// 社会全般。
林 松濤 (著), 王 怡韡 (著), 舩山 明音 (著) , 日本人が知りたい中国人の当たり前, 中国語リーディング, 三修社, 2016/9/20
/// 心理。
園田茂人, 中国人の心理と行動, 2001, 日本放送出版協会
デイヴィッド・ツェ (著), 吉田 茂美 (著), 関係(グワンシ) 中国人との関係のつくりかた , ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2011/3/16
/// 歴史。
加藤 徹 (著), 西太后―大清帝国最後の光芒 (中公新書) 新書 – , 中央公

論新社, 2005/9/1
宮崎 市定 (著), 科挙—中国の試験地獄 (中公新書 15) , 中央公論社, 1963/5/1
/// 血縁関係。
瀬川 昌久, 現代中国における宗族の再生と文化資源化 東北アジア研究 18 pp.81-97 2014-02-19
// 社会間比較。
邱 永漢 (著), 騙してもまだまだ騙せる日本人—君は中国人を知らなさすぎる, 実業之日本社, 1998/8/1
邱永漢 (著) , 中国人と日本人, 中央公論新社, 1993
/ ロシア。
// 単独社会。
/// 社会全般。
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈上〉, 日本放送出版協会, 1991/2/1
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈下〉, 日本放送出版協会, 1991/3/1
/// 歴史。
伊賀上 菜穂, 結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係 : 記述資料分析の試み スラヴ研究, 49, 179-212 2002
奥田 央, 1920年代ロシア農村の社会政治的構造（１）, 村ソヴェトと農民共同体, 東京大学, 経済学論集, 80 1-2, 2015-7
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp › econ0800102
大矢 温, スラヴ派の共同体論における「ナショナル」意識－民族意識から国民意識への展開－, 札幌法学 29 巻 1・2 合併号（2018）, pp.31-53
// 社会間比較。
/// 心理。
アレックス インケルス (著), Alex Inkeles (原著), 吉野 諒三 (翻訳), 国民性論—精神社会的展望, 出光書店, 2003/9/1
服部 祥子 (著), 精神科医の見たロシア人 (朝日選書 245), 朝日新聞社出版局, 1984/1/1
/// 民俗。
アレクサンドル・プラーソル, ロシアと日本：民俗文化のアーキタイプを比較して, 新潟国際情報大学情報文化学部紀要第10号、2007.
/// 血縁関係。
高木正道, ロシアの農民と中欧の農民, ——家族形態の比較——, 法経

研究, 42巻1号 pp.1-38, 1993
/// 経営。
宮坂 純一, ロシアではモチベーションがどのような内容で教えられているのか, 社会科学雑誌』第５巻（2012年11月）—— 503-539
宮坂 純一, 日ロ企業文化比較考, 『社会科学雑誌』第 18 巻（2017 年 9 月）——, pp.1-48
/// 性差。
Д.Х. Ибрагимова, Кто управляет деньгами в российских семьях?, Экономическая социология. Т. 13. № 3. Май 2012, pp22-56

/ 東南アジア。
// 単独社会。
丸杉孝之助, 東南アジアにおける農家畜産と農業経営, 熱帯農業, 19(1), 1975 pp.46-49
中川 剛 (著), 不思議のフィリピン—非近代社会の心理と行動 (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1986/11/1
// 社会間比較。

== 液体。
/ 液体の性質。液体の動き。
小野周 著, 温度とはなにか , 岩波書店、1971
小野 周 (著), 表面張力 (物理学one point 9), 共立出版, 1980/10/1
イーゲルスタッフ (著), 広池 和夫 (翻訳), 守田 徹 (翻訳), 液体論入門 (1971年) (物理学叢書) , 吉岡書店, 1971
上田 政文 (著), 湿度と蒸発—基礎から計測技術まで, コロナ社, 2000/1/1
稲松 照子 (著), 湿度のおはなし, 日本規格協会, 1997/8/1
伊勢村 寿三 (著), 水の話 (化学の話シリーズ (6)) , 培風館, 1984/12/1
力武常次 (著), 基礎からの物理 総合版 (チャート式シリーズ) , 数研出版, 数研出版, 1986/1/1
野村 祐次郎 (著), 小林 正光 (著), 基礎からの化学 総合版 (チャート式・シリーズ) , 数研出版, 1985/2/1
物理学辞典編集委員会 , 物理学辞典 改訂版 , 培風館, 1992
池内満, 分子のおもちゃ箱 , 2008年1 月19日 http://mike1336.web.fc2.com/ (2008年2月23日)
/ 液体の知覚。

大塚巌 (2008). ドライ、ウェットなパーソナリティの認知と気体、液体の運動パターンとの関係. パーソナリティ研究, 16, 250-252

== 生物。
/ 総論。
鈴木孝仁, 本川達雄, 鷲谷いづみ, チャート式シリーズ, 新生物 生物基礎・生物 新課程版, 数研出版, 2013/2/1
/ 遺伝子。
リチャード・ドーキンス【著】，日高敏隆，岸由二，羽田節子，垂水雄二【訳】, 利己的な遺伝子, 紀伊國屋書店, 1991/02/28
/ 精子。卵子。
緋田 研爾 (著), 精子と卵のソシオロジー―個体誕生へのドラマ (中公新書) 中央公論社, 1991/3/1
/ 神経系。
二木 宏明 (著), 脳と心理学―適応行動の生理心理学 (シリーズ脳の科学) , 朝倉書店, 1984/1/1
山鳥 重 (著), 神経心理学入門, 医学書院, 1985/1/1
伊藤 正男 (著), 脳の設計図 (自然選書) , 中央公論社, 1980/9/1
D.O.ヘッブ (著), 白井 常 (翻訳), 行動学入門―生物科学としての心理学 (1970年) , 紀伊国屋書店, 1970/1/1
// 知覚。
岩村 吉晃 (著), タッチ (神経心理学コレクション), 医学書院, 2001/4/1
松田 隆夫 (著), 知覚心理学の基礎, 培風館, 2000/7/1
// パーソナリティ。
Murray,H.A., 1938, Exploration in personality:A clinical and experimental study of fifty men of collegeage.
Schacter, S., 1959, The Psychology of affiliation.Stanford University press.
三隅三不二, 1978, リーダーシップの科学, 有斐閣
Fiedler,F.E., 1973, The trouble with leadership training is that it doesn't train leaders-by. Psychology Today Feb(山本憲久訳 1978 リーダーシップを解明する 岡堂哲雄編 現代のエスプリ131: グループ・ダイナミクス 至文堂).
Snyder,M., 1974, The self-monitoring of expssive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
Fenigstein, A., Scheier,M.F., & Buss,A.H., 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical

Psychology,43,522-527.
押見輝男, 自分を見つめる自分-自己フォーカスの社会心理学, サイエンス社, 1992
Wicklund, R.A., & Duval,S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology,7,319-342.
Jourard, S.M. 1971, The transparent self, rev.ed.Van Nostrand Reinhold(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房).
Brehm, J.W.,1966, A Theory of psychological reactance. Academicpss.
Toennies, F.,1887, Gemeinshaft und Gesellshaft, Leipzig,(杉之原寿一訳「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」 1957 岩波書店)
McCrae, R. R., Costa, P. T., Jr., 1987, Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers., Journal of Personality and Social Psychology, 52, 81-90
Eysenck, H. J., 1953, The structure of human personality. New York: Wiley.
Edwards, A.L., 1953, The relationship between judged desirebility of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93
// 情報。
吉田 民人 (著), 情報と自己組織性の理論, 東京大学出版会, 1990/7/1
/ 社会性。
吉田 民人 (著), 主体性と所有構造の理論, 東京大学出版会, 1991/12/1

/ 人間以外の生物。
// 行動。
デティアー(著), ステラー(著), 日高敏隆(訳),小原嘉明(訳), 動物の行動ー現代生物学入門7巻, 岩波書店, 1980/1/1
// 心理。
D.R.グリフィン (著), 桑原 万寿太郎 (翻訳), 動物に心があるか―心的体験の進化的連続性 (1979年) (岩波現代選書―NS〈507〉), 岩波書店, 1979年
// 文化。
J.T.ボナー (著), 八杉 貞雄 (翻訳), 動物は文化をもつか (1982年) (岩波現代選書―NS〈532〉) , 岩波書店, 1982/9/24
// 社会。
今西 錦司 (著), 私の霊長類学 (講談社学術文庫 80) , 講談社, 1976/11/1
今西錦司『私の自然観』講談社学術文庫，1990 (1966).

河合雅雄 (著), ニホンザルの生態, 河出書房新社, 1976/1/1
伊谷純一郎 (著) , 高崎山のサル (講談社文庫), 講談社, 1973/6/26
伊谷純一郎 (著) , 霊長類社会の進化 (平凡社 自然叢書) 単行本 –, 平凡社, 1987/6/1
/ 無神論。
リチャード・ドーキンス (著), 垂水 雄二 (翻訳), 神は妄想である—宗教との決別, 早川書房, 2007/5/25

== 辞書。
新村出（編著）,広辞苑ー第5版, 岩波書店, 1998
Stein, J., & Flexner, S. B. (Eds.), The Random House Thesaurus., Ballantine Books., 1992

== データ分析の方法。
田中敏 (2006). 実践心理データ解析 改訂版 新曜社
中野博幸, JavaScript-STAR , 2007年11月9日
http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/ (2008年2月25日)

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Sex Differences And Female Dominance
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 性别差异和女性主导地位
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Половые различия и женское превосходство
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 男女の性差と女性の優位性

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Female-Dominated Society Will Rule The World.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性主导的社会将统治世界
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Общество, в котором доминируют женщины, будет править миром.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性優位社会が、世界を支配する。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Mobile Life. Settled Life. The origins of social sex differences.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移动生活。定居生活。社会性别差异的起源。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Мобильная жизнь. Урегулированная жизнь. Истоки социальных различий по половому признаку.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移動生活様式。定住生活様式。社会的性差の起源。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) The essence of life. The essence of human beings. The darkness of them.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生物的本质。人类的本质。他们的黑暗。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Сущность жизни. Сущность человеческих существ. Их тьма.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生物の本質。人間の本質。それらの暗黒性。

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) On Atheism and the Salvation of the Soul. Live by neuroscience!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 论无神论与灵魂的救赎。靠神经科学生存！
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) Об атеизме и спасении души. Живи неврологией!

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 無神論と魂の救済について。脳神経科学で生きよう!

Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Dryness. Wetness. Sensation of humidity. Perception of humidity. Personality Humidity. Social Humidity.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) 干性。湿气。湿度的感觉。对湿度的感知。性格湿度。社会湿度。
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Сухость. Мокрота. Сенсация влажности. Восприятие влажности. Личностная влажность. Социальная влажность.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) ドライさ。ウェットさ。湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度。社会の湿度。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Gases and liquids. Classification of behavior and society. Applications to life and humans.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 气体和液体。行为与社会的分类。在生活和人类中的应用。
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Газы и жидкости. Классификация поведения и общества. Применение к жизни и человеку.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 気体と液体。行動や社会の分類。生物や人間への応用。

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Elements of livability. Functionalism of life. Society as life.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 宜居的要素。生活的功能主义。社会即生活。
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Элементы благоустроенности. Функциональность жизни. Общество как жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 生きやすさの素。生物の機能主義。生物としての社会。

Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) The laws of history. History as a system. History for life.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 历史的规律。历史是一个系统。历史的生物。
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) Законы истории. История как система. История на всю жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 歴史の法則。システムとしての歴史。生物にとっての歴史。

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Social Theory of Maternal Authority. A Society of Strong Mothers. Japanese Society as a Case Study.
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) 母亲权威的社会理论。强势母亲的社会。以日本社会为个案研究。
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) Социальная теория материнства: Общество сильных матерей. Японское общество как пример.
Iwao Otsuka (Sep 15, 2020) 母権社会論ー強い母の社会。事例としての日本社会。ー

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) 日本社会的机制。后天定居群体的社会。
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Механизмы японского общества. Общество приобретенных оседлых групп.
Iwao Otsuka (Aug 28, 2020) 日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) Inertial Society
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 惯性社会（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) инерционное общество

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 慣性社会（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Neurosociology
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神经社会学（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Нейросоциология
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神経社会学（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) From transportation-centric society to communication-centric society. The Progress of Transition.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 从以交通为中心的社会向以通信为中心的社会。转型的进展。
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) От общества, ориентированного на транспорт, к обществу, ориентированному на коммуникации. Прогресс переходного периода.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 交通中心社会から通信中心社会へ。移行の進展。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) The Sociology of the Individual -The Elemental Reduction Approach.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 个人社会学 -元素还原法。
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Социология личности -Элементный подход к сокращению.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 個人の見える社会学　ー要素還元アプローチー

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Introduction Of A White Tax To Counter Discrimination Against Blacks.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 引入白人税以打击对黑人的歧视
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Введение белого налога для

противодействия дискриминации черных
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 黒人差別対策としての白人税導入

Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Personality and sensation, perception. Light and dark. Warm and cold. Hard and soft. Loose and tight. Tense and relaxed.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 人格与感觉、知觉。明与暗。温暖与寒冷。硬和软。松与紧。紧张与放松。
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Личность и ощущения, восприятие. Светлое и темное. Тепло и холодно. Твердый и мягкий. Свободный и тугой. Напряженный и расслабленный.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 性格と感覚、知覚。明暗。温冷。硬軟。緩さときつさ。緊張とリラックス。

Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Motherhood and Fatherhood. Maternal and paternal authority. Parents and Power.
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) 母性与父性。母权和父权。父母与权力。
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Материнство и отцовство. Материнская и отцовская власть. Родители и власть.
Iwao Otsuka (Nov 22, 2020) 母性と父性。母権と父権。親と権力。

Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Sex differences and sex discrimination. They cannot be eliminated. Social mitigation and compensation for them.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 性别差异和性别歧视。它们无法消除。对它们进行社会缓解和补偿。
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Половые различия и дискриминация по половому признаку. Они не могут быть устранены. Социальное смягчение и компенсация за них.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 男女の性差と性差別。それらは無くせない。それらへの社会的な緩和や補償。

Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Mechanisms of acquired settled group societies. Female dominance.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 后天定居群体社会的机制。女性主导地位。
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Механизмы обществ приобретенных оседлых групп. Доминирование женщин.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Ownership and non-ownership of resources. Their advantages and disadvantages.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 资源的所有权和非所有权。其利弊。
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Владение и не владение ресурсами. Их преимущества и недостатки.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 資源の所有と非所有。その利点と欠点。

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Wealth and poverty. The emergence of economic disparity. Causes and solutions.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 财富与贫穷。经济差距的出现。原因和解决办法。
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Благополучие и бедность. Появление экономического неравенства. Причины и решения.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 富裕と貧困。経済的格差の発生。その原因と解消法。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Social delinquents. A true delinquent. The difference between the two.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会不良分子。真正的不良分子。两者之间的区别。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Социальные преступники. Настоящий преступник. Разница между ними.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会的な不良者。真の不良者。両者の違い。

Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) How to enjoy game music videos.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) 如何欣赏游戏音乐视频。
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) Как наслаждаться игровыми музыкальными клипами.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) ゲーム音楽動画の楽しみ方。

Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Life worth living. Fulfilling life. The source of them.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 值得生活的生活。充实的生活。他们的源头。
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Жизнь, достойная жизни. Полноценная жизнь. Источник их.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 生きがい。充実した人生。それらの源。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

ご訪問ありがとうございます!

私は本の内容を頻繁に改訂しています。

そのため、読者の皆様には、随時サイトを訪れていただき、新刊や改訂版の書籍をダウンロードしていただくことをお勧めしています。

自動翻訳には以下のサービスを利用しています。

DeepL プロ
https://www.deepl.com/translator

本サービスは以下の会社が提供しています。

DeepL GmbH

私の本の原語は日本語です。
私の本の自動翻訳の順序は以下の通りです。
日本語→英語→中国語、ロシア語

どうぞお楽しみ下さい！

私の略歴。

私は、1964年に、日本の神奈川県で、生まれた。
私は、1989年に、東京大学文学部社会学科を卒業した。
私は、1989年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、社会学の職種に、最終合格した。
私は、1992年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、心理学の職種に、最終合格した。
私は、大学卒業後は、日系大手IT企業の研究所に勤務して、コンピュータのソフトウェアの試作業務に従事した。
私は、現在は、企業を退職して、執筆活動に専念中である。

Table of Contents